

京都府遺跡調査報告集

第154冊

1. 美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次
2. 美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次

2013

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)美濃山廃寺全景(南から)



(2)美濃山廃寺全景(東から)



(1) 鍛冶炉 S L 501 完掘状況 (東から)



(2) 美濃山 1 号窯 (瓦窯 S Y 17) 全景 (南東から)



(1)ひさご形土製品



(2)覆鉢形土製品



美濃山廃寺全景(上が北)

序

当調査研究センターは、昭和56年4月に設立され、今年33年目を迎えようとしています。この間、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。業務の遂行にあたり、皆様方のご理解とご協力に、厚く感謝申し上げます。

本書は「京都府遺跡調査報告集」として、平成23年度に西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した、美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次の発掘調査報告と八幡市の依頼を受けて実施した美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次の発掘調査報告を収録したものです。

本書が、地域の埋蔵文化財への理解と関心を深めるうえで、多くの方々にご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された西日本高速道路株式会社と八幡市をはじめ、京都府教育委員会・八幡市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりである。

- (1)美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次
- (2)美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次	八幡市美濃山古寺22番地ほか	平成23年4月21日 ～平成24年2月3日	西日本高速道路株式会社	石井清司 伊野近富 筒井崇史 村田和弘 関広高世 大高義寛
2. 美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次	八幡市美濃山4-1・26番地ほか	平成23年10月3日 ～平成24年3月9日	八幡市	岡崎研一 筒井崇史 関広高世 山崎美輪

3. 美濃山廃寺の発掘調査は、本報告集に取めた2調査のほかに、美濃山廃寺第8次・美濃山廃寺下層遺跡第11次調査(八幡市教育委員会実施)と美濃山廃寺第9次・美濃山廃寺下層遺跡第12次調査(当調査研究センター)の2件の調査も平成23年度中に実施した。本報告集では、調査地の区別では、美濃山廃寺下層遺跡の調査次数を省略し、「美濃山廃寺第〇次調査」また単に「第〇次調査」と表記する。

4. 今回の報告に当たり、上記の2報告は、遺構・遺物の上で不可分の関係にあるので、同一報告集としてまとめることとした。このため、記述の重複する部分については、美濃山廃寺第7次調査報告において一部省略することとした。

5. 美濃山廃寺第6・7次調査の現地調査にあたっては、京都府教育委員会・八幡市教育委員会・京都府立山城郷土資料館をはじめとする関係機関、地元自治会、近隣住民の方々のご指導とご協力をいただいた。また、当調査研究センター中尾芳治・井上満郎・上原真人・中谷雅治各理事のほか、下記の方々から、遺構・遺物についてさまざまなご指導・ご教示を得た。記して感謝します。

森郁夫・甲斐弓子・清水昭博(帝塚山大学)・大脇潔(近畿大学)・山岸常人(京都大学)・坂井秀弥(奈良大学)・菱田哲郎(京都府立大学)・高正龍(立命館大学)・大橋泰夫(鳥根大学)・亀田修一(岡山理科大学)・小沢毅・箱崎和久・今井晃樹・鈴木智大・井上麻香(奈良文化財研究所)・網仲也・南孝雄(京都市埋蔵文化財研究所)・西田敏秀(枚方市文化財調査会)・山路直充(市川市立考古博物館)・坂靖・中東洋行(奈良県立橿原考古学研究所)・大道和人(滋賀県立安土城考古博物館)・中川正人(財団法人滋賀県文化財保護協議会)・大竹弘之(枚方市教育

委員会)・真鍋成史(交野市教育委員会)・永井智教(埼玉県鳩山町教育委員会)・大川操(三重県文化振興課)・谷崎仁美(大阪市博物館協会大阪文化財研究所)・鈴木瑞穂(九州テクノロジー・TACセンター)・井澤英二(九州大学)

6. 本書で使用している座標は、世界測地系国土地院第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。
7. 土師器・須恵器の器種名については奈良文化財研究所が使用しているものに準拠した。該当しないものについては単に「杯」「皿」「甕」などのように記した。器種名については以下の文献を参照した。
安田龍太郎・興淳一郎・沢田正昭「土器」(奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告Ⅺ - 第1次大極殿地域の調査 -』(『奈良国立文化財研究所学報』第40冊)1981
神野恵「土器類」(奈良文化財研究所編『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ - 兵部省地区の調査 -』(『奈良文化財研究所学報』第70冊)2005)
8. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。
9. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。
10. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影と現場写真の一部は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次発掘調査報告	1
2. 美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次発掘調査報告	197

挿図目次

1. 美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層第9次

第1図	調査地および周辺主要遺跡分布図	3
第2図	調査次数別調査区配置図(1/2,500)	7
第3図	美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡全体地区割図	9
第4図	トレンチ調査配置図(1/1,500)	11
第5図	A4トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)	12
第6図	A5トレンチ平面図(1/200)および土層断面図(1/100)	13
第7図	A10・A11トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/100・1/200)	14
第8図	B1・B2トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)	15
第9図	B3トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)	16
第10図	B5トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)	16
第11図	B6トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)	17
第12図	B7トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)	18
第13図	B11トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)	19
第14図	B12トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)	19
第15図	B13トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)	20
第16図	調査地壁面土層断面図(1/100)	21
第17図	東側斜面土層断面図(1/200)	22
第18図	美濃山廃寺第6次調査地区割および主要遺構配置図(1/1,500)	23
第19図	A地区北部遺構配置図(1/500)	24
第20図	溝S D039・土坑S K470実測図(1/100)	24
第21図	掘立柱建物S B010実測図(1/100)	25
第22図	掘立柱建物S B475実測図(1/100)	26
第23図	掘立柱建物S B055実測図(1/100)	27
第24図	掘立柱塀S A050実測図(1/100)	28
第25図	A地区中央部遺構配置図(1/500)	29

第26図	掘立柱建物 S B 065 実測図 (1/100)	30
第27図	掘立柱建物 S B 345 実測図 (1/100)	30
第28図	掘立柱建物 S B 479 実測図 (1/100)	31
第29図	土坑 S K 091 実測図 (1/50)	31
第30図	柱穴 S P 418・446 実測図 (1/50)	32
第31図	鍛冶炉 S L 485 実測図 (1/20)	32
第32図	A 地区南部遺構配置図 (1/500)	33
第33図	掘立柱塼 S A 250・251 実測図 (1/100)	34
第34図	土坑 S K 267・300 実測図 (1/50)	35
第35図	柱穴 S P 441 実測図 (1/50)	35
第36図	鉄器生産関連遺構群配置図：A 期 (1/100)	36
第37図	溝 S D 701・土坑 S K 508 実測図 (1/50)	37
第38図	鍛冶炉 S L 501 実測図 (1/4)	37
第39図	炭窯 S Y 503 実測図 (1/50)	38
第40図	土坑 S K 502 実測図 (1/30)	38
第41図	土坑 S K 504・505 実測図 (1/20)	39
第42図	土坑 S K 506・509 実測図 (1/10)	40
第43図	土坑 S K 519・526 実測図 (1/30)	40
第44図	土坑 S X 602・603 実測図 (1/30)	40
第45図	鉄器生産関連遺構群配置図：B 期 (1/100)	41
第46図	溝 S D 702 実測図 (1/100・1/25)	42
第47図	溶解炉 S L 511 実測図 (1/30)	42
第48図	土坑 S K 510 実測図 (1/20)	43
第49図	土坑 S K 516・523・528 実測図 (1/30)	43
第50図	A 地区南部鉄器生産関連遺構群・堆積層 S X 310 断面図 (1/40)	44
第51図	堆積層 S X 486 土層断面図 (1/80)	45
第52図	B 地区遺構配置図 (1/500)	46
第53図	美濃山 1 号窯 (瓦窯 S Y 17) 実測図 (1/40)	47
第54図	瓦溜り S X 21、溝 S D 6・8 実測図 (1/80・1/100)	48
第55図	落ち込み S X 20 実測図 1 (1/30)	50
第56図	落ち込み S X 20 実測図 2 (1/30)	51
第57図	溶解炉 S L 1 実測図 (1/20)	51
第58図	美濃山廃寺出土軒丸瓦分類図	53
第59図	美濃山廃寺出土軒平瓦分類図	55
第60図	遺構出土軒瓦実測図 1 (1/4)	57

第61図	遺構出土軒瓦実測図2(1/4)	58
第62図	遺構出土軒瓦実測図3(1/4)	59
第63図	遺構出土軒瓦実測図4(1/4)	60
第64図	遺構出土軒瓦実測図5(1/4)	61
第65図	遺物包含層出土軒瓦実測図1(1/4)	62
第66図	遺物包含層出土軒瓦実測図2(1/4)	63
第67図	遺物包含層出土軒瓦実測図3(1/4)	64
第68図	遺物包含層出土軒瓦実測図4(1/4)	65
第69図	美濃山1号窯出土軒平瓦実測図(1/6)	66
第70図	丸瓦・平瓦分類図	68
第71図	美濃山1号窯出土丸瓦実測図(1/6)	70
第72図	美濃山1号窯出土平瓦実測図1(1/6)	71
第73図	美濃山1号窯出土平瓦実測図2(1/6)	72
第74図	瓦溜りS X21出土丸瓦実測図1(1/6)	74
第75図	瓦溜りS X21出土丸瓦実測図2(1/6)	75
第76図	瓦溜りS X21出土丸瓦実測図3(1/6)	76
第77図	瓦溜りS X21出土平瓦実測図1(1/6)	77
第78図	瓦溜りS X21出土平瓦実測図2(1/6)	78
第79図	瓦溜りS X21出土平瓦実測図3(1/6)	79
第80図	瓦溜りS X21出土平瓦実測図4(1/6)	80
第81図	瓦溜りS X21出土平瓦実測図5(1/6)	81
第82図	瓦溜りS X21出土平瓦実測図6(1/6)	82
第83図	瓦溜りS X21出土平瓦実測図7(1/6)	83
第84図	土坑S K18出土丸瓦・平瓦実測図(1/6)	84
第85図	遺物包含層出土瓦実測図(1/6)	87
第86図	鬼瓦実測図(1/4)	87
第87図	鷗尾実測図(1/3)	88
第88図	溝S D039出土土器実測図1(1/4)	90
第89図	溝S D039出土土器実測図2(1/4)	91
第90図	溝S D039出土土器実測図3(1/4)	92
第91図	溝S D039出土土器実測図4(1/3、1/4)	93
第92図	溝S D039出土土器実測図5(1/4、1/5)	94
第93図	土坑S K470・471出土土器実測図(1/4)	96
第94図	掘立柱建物・柱穴出土土器実測図(1/4)	98
第95図	遺構出土土器実測図(1/4)	99

第96図	鉄器生産関連遺構群出土土器実測図1(1/4)	101
第97図	鉄器生産関連遺構群出土土器実測図2(1/4)	102
第98図	堆積層S X310出土土器実測図(1/4)	104
第99図	瓦溜りS X21出土土器実測図1(1/4)	106
第100図	瓦溜りS X21出土土器実測図2(1/4)	107
第101図	溶解炉S L 1 関連(落ち込みS X20)出土土器実測図(1/4)	108
第102図	瓦集中箇所出土土器実測図(1/4)	109
第103図	V区遺物包含層出土土器実測図1(1/4)	110
第104図	V区遺物包含層出土土器実測図2(1/4)	112
第105図	VI区遺物包含層出土土器実測図(1/4)	114
第106図	VII・IX区遺物包含層出土土器実測図(1/4)	115
第107図	IX区遺物包含層出土土器実測図(1/4)	116
第108図	覆鉢形土製品実測図1(1/4)	118
第109図	覆鉢形土製品実測図2(1/4)	119
第110図	ひさご形土製品部分名称	121
第111図	ひさご形土製品実測図(1/3)	122
第112図	埴仏実測図(1/2)	123
第113図	不明土製品実測図(1/3)	123
第114図	鉄製品実測図(1/2、1/1)	125
第115図	鉄器生産関連遺物実測図(1/3)	126
第116図	用途不明鉄製品実測図(1/4)	127
第117図	青銅製品実測図(1/1)	128
第118図	溶解炉関連遺物実測図(1/3)	128
第119図	美濃山廃寺下層遺跡遺構配置模式図(1/1,500)	129
第120図	竪穴建物S H290実測図(1/100)	130
第121図	竪穴建物S H229実測図(1/100)	130
第122図	竪穴建物・柱穴・遺物包含層出土弥生土器実測図(1/4)	131
第123図	軒丸瓦I～III型式出土分布図	133
第124図	軒丸瓦IV～IX型式出土分布図	134
第125図	軒平瓦I・II・V型式出土分布図	134
第126図	覆鉢形土製品・ひさご形土製品出土分布図	140
第127図	埴仏各部位名称	143
第128図	破断面にあらわれる粘土詰め込み単位	143
第129図	二尊連坐埴仏の破断面	144
第130図	三尊連坐埴仏の破断面	144

第131図	六尊連立埴仏の被断面	144
第132図	美濃山廃寺出土埴仏の胎土拡大写真	144
第133図	唐招提寺出土独尊坐像埴仏	146
第134図	二光寺廃寺出土六尊連立埴仏	146

2. 美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次

第1図	調査次数別調査区配置図(1/2,500)	199
第2図	調査地基本層序(1/80)	202
第3図	美濃山廃寺遺構配置模式図(1/1,500)	203
第4図	美濃山廃寺下層遺跡遺構配置模式図(1/1,500)	204
第5図	第7次調査地区分け概念図	205
第6図	美濃山廃寺第7次調査検出遺構配置図(1/1,000)	206
第7図	区画溝 S D001・010・090・100全体図(1/1,000)	207
第8図	区画溝 S D001-1・010-1実測図(1/100)	208
第9図	区画溝 S D001-2~4・010-2実測図(1/100)	209
第10図	区画溝 S D090-1実測図および遺物出土状況図(1/50)	210
第11図	区画溝 S D090-2・3、S D100-1・2実測図(1/100)および S D090-2遺物出土状況図(1/50)	211
第12図	区画溝 S D090-2西辺遺物出土状況図(1/50)	212
第13図	区画溝 S D090-5・6、S D100-3・4実測図(1/100)	214
第14図	北東部全体図(1/300)	215
第15図	掘立柱建物 S B2012実測図(1/100)	216
第16図	掘立柱建物 S B2011、掘立柱塼 S A2110・2111実測図(1/100)	218
第17図	土坑 S K352実測図(1/50)	219
第18図	北部全体図(1/300)	220
第19図	総柱建物 S B2013実測図(1/100)	221
第20図	掘立柱建物 S B2014、掘立柱塼 S A2103実測図(1/100)	222
第21図	総柱建物 S B2015実測図(1/100)	223
第22図	総柱建物 S B2010実測図(1/100)	224
第23図	総柱建物 S B2006実測図(1/100)	226
第24図	掘立柱建物 S B2005、掘立柱塼 S A2108実測図(1/100)	227
第25図	掘立柱建物 S B2007、掘立柱塼 S A2102実測図(1/100)	228
第26図	総柱建物 S B2008実測図(1/100)	229
第27図	土坑 S K103・126実測図(1/100)	229
第28図	中央部全体図(1/300)	230

第29図	掘立柱建物 S B2001実測図(1/100)	232
第30図	掘立柱建物 S B2002実測図(1/100)	233
第31図	掘立柱建物 S B2003実測図(1/100)	234
第32図	掘立柱建物 S B2004実測図(1/100)	235
第33図	掘立柱建物 S B2016実測図(1/100)	236
第34図	掘立柱建物 S B2018実測図(1/100)	237
第35図	掘立柱塼 S A2101実測図(1/100)	238
第36図	土坑 S K092実測図(1/50)	238
第37図	西部全体図(1/300)	239
第38図	総柱建物 S B2009実測図(1/120)	240
第39図	土坑 S K415・433実測図(1/50)	242
第40図	焼土坑 S K225・227・416実測図(1/50)	243
第41図	南部全体図(1/300)	244
第42図	礎石・掘立柱併用建物 S B2020実測図(1/200)	245
第43図	礎石・掘立柱併用建物 S B2020柱穴実測図 1 (1/50)	247
第44図	礎石・掘立柱併用建物 S B2020柱穴実測図 2 (1/50)	248
第45図	掘礎石・掘立柱併用建物 S B2020柱穴実測図 3 (1/50)	250
第46図	礎石・掘立柱併用建物 S B2020柱穴実測図 4 (1/50)	251
第47図	礎石・掘立柱併用建物 S B2020関連柱穴実測図(1/50)	252
第48図	雨落ち溝 S D293・区画 S X097・掘立柱塼 S A2104実測図(1/120)	254
第49図	雨落ち溝 S D293遺物出土状況実測図(1/50)	255
第50図	区画 S X099実測図(1/200)	256
第51図	掘立柱建物 S B2021実測図(1/100)	257
第52図	土坑 S K096実測図(1/50)	258
第53図	土坑 S K143土層断面図(1/50)	258
第54図	瓦溜り S X208実測図(1/50)	259
第55図	軒瓦実測図 1 遺構出土(1/4)	261
第56図	軒瓦実測図 2 遺構出土(1/4)	262
第57図	軒瓦実測図 3 遺構出土(1/4)	264
第58図	区画溝 S D090出土平瓦実測図 1 (1/6)	266
第59図	区画溝 S D090出土平瓦実測図 2 (1/6)	267
第60図	区画溝 S D090出土平瓦実測図 3 (1/6)	268
第61図	区画溝 S D090出土平瓦実測図 4 (1/6)	269
第62図	掘立柱建物 S B2012・2014出土瓦類実測図(1/6)	271
第63図	総柱建物 S B2015出土瓦類実測図(1/6)	272

第64図	掘立柱建物 S B2001出土瓦類実測図(1/6)	274
第65図	掘立柱建物 S B2001・2016出土瓦類実測図(1/6)	275
第66図	掘立柱建物 S B2003・2004出土瓦類実測図(1/6)	276
第67図	礎石・掘立柱併用建物 S B2020出土瓦類実測図 1 (1/6)	278
第68図	礎石・掘立柱併用建物 S B2020出土瓦類実測図 2 (1/6)	279
第69図	雨落ち溝 S D293出土瓦類実測図 1 (1/6)	282
第70図	雨落ち溝 S D293出土瓦類実測図 2 (1/6)	283
第71図	雨落ち溝 S D293出土瓦類実測図 3 (1/6)	284
第72図	土坑 S K143出土瓦類実測図(1/6)	285
第73図	土坑 S K096・瓦溜り S X208出土瓦類実測図(1/6)	286
第74図	土坑 S K096出土埴実測図(1/6)	287
第75図	区画溝出土土器実測図(1/4)	289
第76図	掘立柱建物 S B2012出土土器実測図 1 (1/4)	291
第77図	掘立柱建物 S B2012出土土器実測図 2 (1/4)	292
第78図	土坑 S K352出土土器実測図 1 (1/4)	294
第79図	土坑 S K352出土土器実測図 2 (1/4)	295
第80図	北東部・北部検出遺構出土土器実測図(1/4)	297
第81図	中央部検出遺構出土土器実測図(1/4)	298
第82図	西部検出遺構出土土器実測図(1/4)	299
第83図	礎石・掘立柱併用建物 S B2020・ 雨落ち溝 S D293・攪乱 S X287出土土器実測図(1/4)	301
第84図	区画 S X097出土土器実測図(1/4)	302
第85図	区画 S X099出土土器実測図(1/4)	303
第86図	南部検出遺構出土土器実測図(1/4)	304
第87図	遺物包含層出土土器実測図(1/4)	306
第88図	覆鉢形土製品・宝輪形土製品実測図(1/4)	307
第89図	ひさご形土製品・埴仏実測図(1/3・1/2)	308
第90図	鉄製品実測図(1/2)	310
第91図	輪羽口・鉄滓実測図(1/3)	311
第92図	竪穴建物 S H3002・3003実測図(1/100)	313
第93図	竪穴建物 S H3010実測図(1/100)	314
第94図	竪穴建物 S H3008・3011実測図	315
第95図	竪穴建物 S H3009実測図(1/100)	316
第96図	竪穴建物 S H3006実測図(1/100)	317
第97図	竪穴建物 S H3015実測図(1/100)	318

第98図	竪穴建物 S H3014・3016・3017実測図(1/100)	319
第99図	弥生土器実測図1(1/4)	320
第100図	弥生土器実測図2(1/4)	321
第101図	美濃山廃寺第Ⅰ期主要遺構配置図	323
第102図	美濃山廃寺第Ⅱ期主要遺構配置図	325
第103図	美濃山廃寺第Ⅲ期主要遺構配置図	327
第104図	美濃山廃寺寺院地内建物群想定復元図	330

付 表 目 次

1. 美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次		
付表1	美濃山廃寺・同下層遺跡 調査回数一覧	6
付表2	軒瓦出土点数一覧	132
付表3	瓦類重量計測表	136

図 版 目 次

1. 美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次		
巻頭図版1	(1)美濃山廃寺全景(南から)	
	(2)美濃山廃寺全景(東から)	
巻頭図版2	(1)鍛冶炉 S L501完掘状況(東から)	
	(2)美濃山1号窯(瓦窯 S Y17)全景(南東から)	
巻頭図版3	(1)ひさご形土製品	
	(2)覆鉢形土製品	
2. 美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次		
巻頭図版4	美濃山廃寺全景(上が北)	
1. 美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次		
図版第1	(1)調査前状況(南から)	
	(2)A地区伐採後遠景(南から)	
	(3)B地区伐採後遠景(東から)	
図版第2	(1)A1トレンチ全景(東から)	
	(2)北部北壁土層断面(南から)	

- (3) 中央部西壁土層断面(東から)
- 図版第3 (1) 北部遺構検出状況(西から)
 (2) 掘立柱建物 S B 055・掘立柱塼 S A 050 検出状況(北東から)
- 図版第4 (1) 区画溝 S D 106 土層断面(南東から)
 (2) 区画溝 S D 167 遺物出土状況(西から)
 (3) 掘立柱建物 S B 475 全景(北東から)
- 図版第5 (1) 溝 S D 039 全景(南西から)
 (2) 溝 S D 039 遺物出土状況(南東から)
 (3) 溝 S D 039・土坑 S K 470 遺物出土状況(北東から)
- 図版第6 (1) 掘立柱建物 S B 010 全景(西から)
 (2) 掘立柱建物 S B 475・溝 S D 039 全景(南から) 図版第7 (1) 掘立柱建物 S B 010
 - 1 土層断面(南から)
 (2) 掘立柱建物 S B 010 - 2 土層断面(南から)
 (3) 掘立柱建物 S B 010 - 3 土層断面(南から)
 (4) 掘立柱建物 S B 010 - 4 土層断面(南から)
 (5) 掘立柱建物 S B 010 - 7 土層断面(南から)
 (6) 掘立柱建物 S B 010 - 8 土層断面(南から)
 (7) 掘立柱建物 S B 010 - 9 土層断面(南から)
 (8) 掘立柱建物 S B 010 - 10 土層断面(南から)
- 図版第8 (1) 掘立柱建物 S B 055 - 1 土層断面(北から)
 (2) 掘立柱建物 S B 055 - 4 土層断面(南から)
 (3) 掘立柱建物 S B 055 - 5 土層断面(北から)
 (4) 掘立柱建物 S B 055 - 6 土層断面(北から)
 (5) 掘立柱建物 S B 055 - 8 土層断面(北から)
 (6) 掘立柱建物 S B 055 - 9 土層断面(南西から)
 (7) 掘立柱建物 S B 055 - 10 土層断面(南から)
 (8) 掘立柱建物 S B 055 - 9 遺物出土状況(南西から)
- 図版第9 (1) 中央部北西側遺構検出状況(東から)
 (2) 中央部南西側遺構検出状況(南東から)
- 図版第10 (1) 掘立柱建物 S B 065 - 1 土層断面(西から)
 (2) 掘立柱建物 S B 065 - 2 土層断面(西から)
 (3) 掘立柱建物 S B 065 - 3 土層断面(西から)
 (4) 掘立柱建物 S B 065 - 6 土層断面(南から)
 (5) 掘立柱建物 S B 345 - 1 土層断面(東から)
 (6) 掘立柱建物 S B 345 - 2 土層断面(東から)

- (7) 掘立柱建物 S B 345 - 4 土層断面(東から)
 (8) 掘立柱建物 S B 345 - 5 土層断面(西から)
- 図版第11 (1) 掘立柱建物 S B 065完掘状況(南から)
 (2) 掘立柱建物 S B 345完掘状況(南から)
- 図版第12 (1) 掘立柱建物 S B 479 S P 262遺物出土状況(南から)
 (2) 掘立柱建物 S B 479 S P 283遺物出土状況(南から)
 (3) 掘立柱建物 S B 479 S P 264遺物出土状況(南から)
- 図版第13 (1) 土坑 S K 091被熱土塊分布状況(南から)
 (2) 柱穴 S P 418遺物出土状況(南から)
 (3) 柱穴 S P 446遺物出土状況(西から)
- 図版第14 (1) 鍛冶炉 S L 485検出状況(西から)
 (2) 堆積層 S X 310遺物出土状況(北東から)
 (3) 堆積層 S X 310遺物出土状況(南東から)
- 図版第15 (1) 掘立柱塀 S A 250 - 1 土層断面(北東から)
 (2) 掘立柱塀 S A 250 - 2 土層断面(北東から)
 (3) 掘立柱塀 S A 250 - 3 土層断面(北東から)
 (4) 掘立柱塀 S A 250 - 4 土層断面(北東から)
 (5) 掘立柱塀 S A 251 - 1 土層断面(北東から)
 (6) 掘立柱塀 S A 251 - 2 土層断面(北東から)
 (7) 掘立柱塀 S A 251 - 3 土層断面(北東から)
 (8) 掘立柱塀 S A 251 - 4 土層断面(北東から)
- 図版第16 (1) 土坑 S K 267遺物出土状況(南西から)
 (2) 土坑 S K 300遺物出土状況(東から)
 (3) 堆積層 S X 486南北土層断面(西から)
- 図版第17 (1) 鉄器生産関連遺構群全景(東から)
 (2) 鍛冶炉 S L 501完掘状況(東から)
- 図版第18 (1) 鉄器生産関連遺構群検出状況(東から)
 (2) 鍛冶炉 S L 501検出状況(南西から)
 (3) 鍛冶炉 S L 501半截状況(西から)
- 図版第19 (1) 鍛冶炉 S L 501炉底滓出土状況(西から)
 (2) 鍛冶炉 S L 501完掘状況(西から)
 (3) 炭窯 S Y 503炭層検出状況(北から)
- 図版第20 (1) 土坑 S K 502検出状況(西から)
 (2) 土坑 S K 502土層断面(東から)
 (3) 土坑 S K 502・溶解炉 S L 511切り合い状況(東から)

- 図版第21 (1)土坑 S K504遺物出土状況(南から)
 (2)土坑 S K505炭層検出状況(南東から)
 (3)土坑 S X602遺物出土状況(北西から)
- 図版第22 (1)土坑 S X603遺物出土状況(西から)
 (2)溝 S D702完掘状況(南西から)
 (3)溶解炉 S L511鉄滓出土状況(東から)
- 図版第23 (1)美濃山1号窯(瓦窯 S Y17)検出状況(南から)
 (2)美濃山1号窯(瓦窯 S Y17)焚口崩落状況(南から)
- 図版第24 (1)瓦溜り S X21検出状況(西から)
 (2)溝 S D6・8完掘状況(西から)
- 図版第25 (1)落ち込み S X20遺物出土状況(東から)
 (2)溶解炉 S L1と鷗尾・ひさご形土製品出土状況(北から)
- 図版第26 (1)溶解炉 S L1 検出状況(南西から)
 (2)溶解炉 S L1 第1層遺物出土状況(北から)
 (3)溶解炉 S L1 完掘状況(南東から)
- 図版第27 (1)土坑 S K18全景(南から)
 (2)竪穴建物 S H290遺物出土状況(南西から)
 (3)竪穴建物 S H290完掘全景(南から)
- 図版第28 (1)竪穴建物 S H229焼土検出状況(東から)
 (2)竪穴建物 S H229完掘状況(南から)
 (3)現地説明会実施状況(南から)
- 図版第29 出土遺物 軒瓦 1
- 図版第30 出土遺物 軒瓦 2
- 図版第31 出土遺物 軒瓦 3
- 図版第32 出土遺物 軒瓦 4
- 図版第33 出土遺物 瓦類 1
- 図版第34 出土遺物 瓦類 2
- 図版第35 出土遺物 瓦類 3
- 図版第36 出土遺物 瓦類 4
- 図版第37 出土遺物 土器 1
- 図版第38 出土遺物 土器 2
- 図版第39 出土遺物 土器 3
- 図版第40 出土遺物 土器 4
- 図版第41 (1)出土遺物 土製品 1 覆鉢形土製品
 (2)出土遺物 土製品 1 覆鉢形土製品

- 図版第42 出土遺物 土製品 2
- 図版第43 出土遺物 土製品 3
- 図版第44 出土遺物 土製品 4
- 図版第45 出土遺物 土製品 5
- 図版第46 出土遺物 土製品 6・弥生土器
- 図版第47 出土遺物 冶金関連遺物・金属器 1
- 図版第48 出土遺物 冶金関連遺物・金属器 2
- 図版第49 出土遺物 冶金関連遺物・金属器 3
- 図版第50 出土遺物 冶金関連遺物・金属器 4

2. 美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次

- 図版第1 調査地全景(上が北)
- 図版第2 (1)調査地全景(南西から)
(2)調査地全景(北西から)
- 図版第3 (1)調査地全景(東から)
(2)調査地全景(南から)
- 図版第4 (1)調査前全景(北半部、北東から)
(2)調査前全景(西半部、北東から)
(3)調査前全景(南半部、北西から)
- 図版第5 (1)区画溝 S D001-1・010-1全景(南から)
(2)区画溝 S D001-1・010-1全景(西から)
- 図版第6 (1)区画溝 S D001-1土層断面(南東から)
(2)区画溝 S D001-1土層断面(東から)
(3)区画溝 S D010-1土層断面(東から)
- 図版第7 (1)区画溝 S D090・S D100全景(南から)
(2)区画溝 S D090-2遺物出土状況(南から)
- 図版第8 (1)区画溝 S D090-2出土遺物実測作業(北東から)
(2)区画溝 S D090-1遺物出土状況(西から)
(3)区画溝 S D100-3軒丸瓦出土状況(北から)
- 図版第9 (1)掘立柱建物 S B2012全景(南から)
(2)掘立柱建物 S B2012完掘後全景(南から)
- 図版第10 (1)掘立柱建物 S B2012柱穴 S P072ひさご形土製品出土状況(東から)
(2)土坑 S K352全景(南東から)
(3)第6・7・9次調査地隣接地付近遺構掘削作業(南西から)
- 図版第11 (1)掘立柱建物 S B2012柱穴 S P074土層断面(東から)

- (2) 掘立柱建物 S B 2012 柱穴 S P 002 土層断面(東から)
 - (3) 掘立柱建物 S B 2012 柱穴 S P 003 土層断面(東から)
 - (4) 掘立柱建物 S B 2012 柱穴 S P 070 土層断面(北西から)
 - (5) 掘立柱建物 S B 2012 柱穴 S P 071 土層断面(東から)
 - (6) 掘立柱建物 S B 2012 柱穴 S P 351 土層断面(北西から)
 - (7) 掘立柱建物 S B 2014 柱穴 S P 121 土層断面(南から)
 - (8) 掘立柱建物 S B 2014 柱穴 S P 122 遺物出土状況(南から)
- 図版第12 (1) 総柱建物 S B 2013 全景(南東から)
 (2) 総柱建物 S B 2013 完掘後全景(南から)
- 図版第13 (1) 掘立柱建物 S B 2014・掘立柱廨 S A 2103 全景(北東から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2014・掘立柱廨 S A 2103 完掘後全景(南から)
- 図版第14 (1) 総柱建物 S B 2010 A・B 全景(南から)
 (2) 総柱建物 S B 2010 A・B 完掘後全景(東から)
- 図版第15 (1) 総柱建物 S B 2015 完掘後全景(南から)
 (2) 総柱建物 S B 2008 全景(南から)
- 図版第16 (1) 掘立柱建物 S B 2010 柱穴 S P 186 土層断面(北から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2010 柱穴 S P 188 土層断面(北から)
 (3) 掘立柱建物 S B 2010 柱穴 S P 190 土層断面(北から)
 (4) 掘立柱建物 S B 2010 柱穴 S P 193 土層断面(東から)
 (5) 掘立柱建物 S B 2015 柱穴 S P 367 土層断面(北東から)
 (6) 掘立柱建物 S B 2015 柱穴 S P 234 土層断面(西から)
 (7) 掘立柱建物 S B 2015 柱穴 S P 350 土層断面(北東から)
 (8) 掘立柱建物 S B 2015 柱穴 S P 365 土層断面(南東から)
- 図版第17 (1) 掘立柱建物 S B 2005、総柱建物 S B 2006、掘立柱廨 S A 2108 全景(南から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2005、総柱建物 S B 2006、掘立柱廨 S A 2108 完掘後全景(北から)
- 図版第18 (1) 掘立柱建物 S B 2007、掘立柱廨 S A 2102 全景(南から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2011 完掘後全景(南東から)
 (3) 掘立柱建物 S B 2013・2014 柱穴掘削作業(南から)
- 図版第19 (1) 掘立柱建物 S B 2001 全景(南から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2001 全景(東から)
- 図版第20 (1) 掘立柱建物 S B 2001 完掘後全景(南から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2004・2001・2002 完掘後全景(東から)
- 図版第21 (1) 掘立柱建物 S B 2001 柱穴 S P 091 土層断面(東から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2001 柱穴 S P 047 土層断面(南から)
 (3) 掘立柱建物 S B 2001 柱穴 S P 046 瓦出土状況(北から)

- (4) 掘立柱建物 S B 2001 柱穴 S P 045 土層断面(北東から)
 (5) 掘立柱建物 S B 2001 柱穴 S P 043 瓦出土状況(西から)
 (6) 掘立柱建物 S B 2001 柱穴 S P 042 土層断面(東から)
 (7) 掘立柱建物 S B 2001 柱穴 S P 040 土層断面(北から)
 (8) 掘立柱建物 S B 2001 柱穴 S P 038 土層断面(北から)
- 図版第22 (1) 掘立柱建物 S B 2002 全景(北から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2002 全景(西から)
- 図版第23 (1) 掘立柱建物 S B 2002 完掘後全景(南から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2003 完掘後全景(南から)
- 図版第24 (1) 掘立柱建物 S B 2004 全景(西から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2004 完掘後全景(東から)
- 図版第25 (1) 掘立柱建物 S B 2016 全景(東から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2018 全景(東から)
- 図版第26 (1) 掘立柱建物 S B 2002 柱穴 S P 064 土層断面(北東から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2002 柱穴 S P 059 土層断面(南東から)
 (3) 掘立柱建物 S B 2002 柱穴 S P 055 土層断面(北から)
 (4) 掘立柱建物 S B 2002 柱穴 S P 61 土層断面(南から)
 (5) 掘立柱建物 S B 2004 柱穴 S P 272 土層断面(北東から)
 (6) 掘立柱建物 S B 2004 柱穴 S P 151 土層断面(南から)
 (7) 掘立柱建物 S B 2016 柱穴 S P 230 土層断面(西から)
 (8) 掘立柱建物 S B 2016 柱穴 S P 345 土層断面(西から)
- 図版第27 (1) 溝SD405 検出状況(南から)
 (2) 土坑SK092 掘削作業(西から)
 (3) 掘立柱建物 S B 2001・2002 ほか遺構掘削作業(北東から)
- 図版第28 (1) 総柱建物 S B 2009 完掘後全景(北から)
 (2) 土坑 S K 415 全景(東から)
- 図版第29 (1) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 411 土層断面(南東から)
 (2) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 179 土層断面(西から)
 (3) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 359 土層断面(北西から)
 (4) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 180 土層断面(北から)
 (5) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 496 土層断面(北から)
 (6) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 182 土層断面(東から)
 (7) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 183 土層断面(北から)
 (8) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 185 土層断面(北から)
- 図版第30 (1) 土坑 S K 225・227・416 全景(南から)

- (2) 土坑 S K 225 全景(西から)
- (3) 総柱建物 S B 2009 柱穴掘削作業(東から)
- 図版第31 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020 検出状況(南東から)
- 図版第32 (1) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020、区画 S X 097・099 検出状況(西から)
(2) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020、区画 S X 097 検出状況(南東から)
- 図版第33 (1) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020 完掘後全景(南から)
(2) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020 完掘後全景(西から)
- 図版第34 (1) S B 2020 柱穴 S P 290 半截状況(南から)
(2) S B 2020 柱穴 S P 291 半截状況(北東から)
(3) S B 2020 柱穴 S P 294 根石検出状況(南から)
(4) S B 2020 柱穴 S P 142 半截状況(南西から)
(5) S B 2020 柱穴 S P 093 土層断面(西から)
(6) S B 2020 柱穴 S P 144 根石検出状況(南から)
(7) S B 2020 柱穴 S P 105 検出状況(南から)
(8) S B 2020 柱穴 S P 141 半截状況(南から)
- 図版第35 (1) S B 2020 柱穴 S P 106 半截状況(南東から)
(2) S B 2020 柱穴 S P 139 検出状況(南から)
(3) S B 2020 柱穴 S P 139 半截状況(南から)
(4) S B 2020 柱穴 S P 213 検出状況(南から)
(5) S B 2020 柱穴 S P 250 検出状況(東から)
(6) S B 2020 柱穴 S P 138・140・107 検出状況(南西から)
(7) 柱穴 S P 290・289・304 検出状況(南東から)
(8) 柱穴 S P 251 検出状況(南から)
- 図版第36 (1) 掘立柱建物 S B 2021 完掘後全景(西から)
(2) 雨落ち溝 S D 293 完掘後全景(南西から)
- 図版第37 (1) 雨落ち溝 S D 293 検出状況(西から)
(2) 雨落ち溝 S D 293 全景(西から)
(3) 雨落ち溝 S D 293 検出作業(西から)
- 図版第38 (1) 区画 S X 097・099 完掘後全景(南東から)
(2) 区画 S X 097 検出状況(西から)
(3) 区画 S X 097 土層断面(西から)
- 図版第39 (1) 区画 S X 099 検出状況(東から)
(2) 区画 S X 099 全景(北から)
(3) 区画 S X 099 土層断面(北から)
- 図版第40 (1) 土坑 S K 096 全景(南西から)

- (2) 土坑 S K096遺物出土状況(東から)
 (3) 南部全景(南から)
- 図版第41 (1) 土坑 S K143、瓦溜まり S X208・219全景(北東から)
 (2) 土坑 S K143土層断面(東から)
 (3) 瓦溜り S X208全景(南西から)
- 図版第42 (1) 竪穴建物 S H3002全景(西から)
 (2) 竪穴建物SH3010全景(南から)
 (3) 竪穴建物 S H3002・3003作業風景(南西から)
- 図版第43 (1) 竪穴建物 S H3009全景(南から)
 (2) 土坑 S K209全景(北東から)
 (3) 土坑 S K432全景(北から)
- 図版第44 (1) 竪穴建物 S H3015全景(北から)
 (2) 竪穴建物 S H3015遺物出土状況(東から)
 (3) 竪穴建物 S H3015遺物出土状況(北西から)
- 図版第45 (1) 竪穴建物 S H3006全景(北東から)
 (2) 竪穴建物 S H3014全景(西から)
 (3) 竪穴建物 S H3016・3017全景(西から)
- 図版第46 出土遺物 軒瓦 1
- 図版第47 出土遺物 軒瓦 2
- 図版第48 出土遺物 瓦類 1
- 図版第49 出土遺物 瓦類 2
- 図版第50 出土遺物 瓦類 3
- 図版第51 出土遺物 瓦類 4・埴
- 図版第52 出土遺物 土器 1
- 図版第53 出土遺物 土器 2
- 図版第54 (1) 出土遺物 土器 3(外面)
 (2) 出土遺物 土器 3(内面)
- 図版第55 (1) 出土遺物 土器 4
 (2) 出土遺物 三彩陶器
- 図版第56 (1) 出土遺物 須恵器硯
 (2) 出土遺物 製塩土器
- 図版第57 出土遺物 覆鉢形土製品
- 図版第58 (1) 出土遺物 覆鉢形土製品・ひさご形土製品
 (2) 出土遺物 ひさご形土製品
- 図版第59 (1) 出土遺物 埴仏・宝輪形土製品

(2)出土遺物 鉄製品・冶金関連遺物

図版第60 (1)土壁

(2)凝灰岩

1. 美濃山廃寺第6次・ 美濃山廃寺下層遺跡第9次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は新名神高速道路整備事業に伴って、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施したものである。

本事業に伴い発掘調査の対象となったのは、美濃山廃寺と美濃山廃寺下層遺跡の2遺跡である。美濃山廃寺はこれまでの発掘調査や出土遺物などから奈良時代を中心とする古代寺院であると考えられている。今回、「美濃山閉鎖地区農地一時転用（盛土造成）」事業と合わせて、推定寺域のほぼ全域を調査することになり、美濃山廃寺の全容の解明が期待された。美濃山廃寺下層遺跡は、これまでの調査で弥生時代後期を中心とする竪穴建物などが確認されており、当該期の高地性集落の実態が明らかになるものと期待された。

現地調査および整理作業にあたっては、京都府教育委員会、八幡市教育委員会をはじめ、各関係機関、地元自治会、近隣住民の方々のご指導とご協力をいただいた。記して感謝します。

なお、調査にかかる経費は、全額、西日本高速道路株式会社が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者	調査第2課長	水谷壽克	
現地調査担当者	調査第2課主幹第3係長事務取扱		石井清司
	調査第2課調査第3係次席総括調査員		伊野近富・田代 弘
	同	専門調査員	石尾政信
	同	調査員	筒井崇史・村田和弘
			関広尚世・大高義寛
			山崎美輪
	調査第2課調査第1係主査調査員		柴 暁彦
	同	調査員	牧田梨津子
	調査第2課調査第2係主任調査員		戸原和人
	同	調査員	奈良康正・古川 匠

調査場所	京都府八幡市美濃山古寺22番地ほか
現地調査期間	平成23年4月21日～平成24年2月3日
調査面積	8,680㎡

(石井清司)

2. 遺跡の位置と環境

1) 遺跡の位置と地理的環境

八幡市は、京都府の山城盆地の西南部に位置し、市域の東辺から北辺を木津川が流れ、川を介して東は城陽市、北東は久御山町、北は京都市および大山崎町と接している。また、西方の男山丘陵を介して大阪府枚方市と、南は京田辺市と接している。

八幡市の地形は西部から南部が男山から連なる丘陵地、東部から北部は木津川によって形成された沖積平野によって構成されている。美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡は、八幡市西部から南西部にわたって横たわる標高46～48mの丘陵部の北東に延びる尾根上に立地している。

両遺跡の北東約6kmには、かつて淀川流域の遊水池として機能した巨椋池が存在した。山城盆地を流れる桂川、宇治川、木津川の3河川は長い歴史の中で、これに流入したり分離したりと、流路を時代とともに大きく変化させてきた。なかでも木津川は、山城盆地南部を南から北へ貫流しており、その流域に多量の土砂を堆積させるとともに、流路を幾度も変化させ今日に至っている。なお、現在の木津川は明治時代以降に流路の付け替えなどにより人工的に構築された姿である。八幡市北部の男山丘陵と対岸の天王山の間に、桂川、宇治川、木津川の3河川が合流し、淀川となって大阪湾へ流れる。八幡市は山城盆地からの唯一の流出口に位置しており、古くから交通の要所であった。

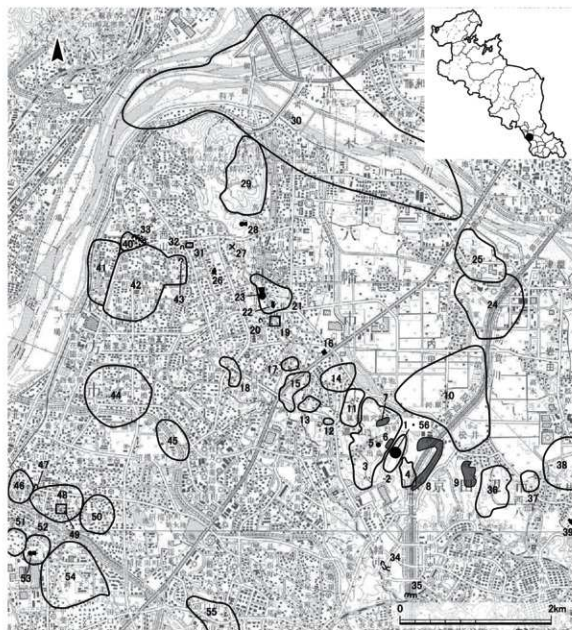
2) 歴史的環境

美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡の周辺に分布する主要な遺跡を第1図に示した。

八幡市域西部の男山丘陵上およびその裾には、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡、古墳、さらに美濃山廃寺(1)を含め、志水廃寺(19)、西山廃寺(31)などの古代寺院跡が分布している。そして市域東部の平野部には、木津川の旧河道によってつくられた自然堤防である微高地上に弥生時代から中世にいたる集落跡が広範囲に分布している。以下、第1図に示す範囲を中心に男山丘陵とその周辺部に展開する諸遺跡の動向を概観する。

八幡市内では、旧石器・縄文時代の遺跡は少なく、美濃山廃寺下層遺跡(2)、荒坂遺跡(4)、宮ノ背遺跡(12)でナイフ形石器が、金右衛門垣内遺跡(11)から縄文時代後期と考えられる石錘が出土しているにすぎない。男山丘陵を挟んで南西に位置する枚方市交北城の山遺跡(54)では、縄文時代後・晩期の土器のほか、石鏃や石棒・石刀などの石器が出土しており、遺構としては埋甕が3基検出されている。八幡市域の遺跡では、出土遺物はあるものの、いずれも採取資料で遺構に伴っておらず、旧石器・縄文時代の様相は不明である。

弥生時代の遺跡では、平野部の内里八丁遺跡(24)で前期～中期の水田跡や竪穴建物などが確認されている。中期には美濃山廃寺に近接する丘陵の金右衛門垣内遺跡で大規模な集落が形成されていたと考えられ、石鏃を中心とする大量の石器が出土している。また、中期後半を中心とした方形周溝墓群が、丘陵と平野部の境に位置する幸水遺跡(14)で確認されている。低地に位置する木津川河床遺跡(30)では後期の溝・土坑を検出し、多数の遺物が出土している。丘陵部でも後期になると美濃山を中心に、標高40～50mの低丘陵に小規模な集落が営まれる。幣原遺跡(18)、南



第1図 調査地および周辺主要道路分布図
(国土地理院1/50,000 京都東南部・京都西南部・大阪東北部・奈良)

- | | | | |
|--------------|------------|---------------|--------------|
| 1. 美濃山廃寺 | 15. 備前遺跡 | 29. 石清水八幡宮遺跡 | 43. 楠葉東瓦窯跡 |
| 2. 美濃山廃寺下層遺跡 | 16. ヒル塚古墳 | 30. 木津川河床遺跡 | 44. 船橋遺跡 |
| 3. 美濃山遺跡 | 17. 南山遺跡 | 31. 西山廃寺(足立寺) | 45. 招提中町北代遺跡 |
| 4. 荒坂遺跡 | 18. 幣原遺跡 | 32. 足立寺瓦窯跡 | 46. 牧野飯遺跡 |
| 5. 美濃山王塚古墳 | 19. 志水廃寺 | 33. 楠葉平野山瓦窯跡 | 47. 牧野飯瓦窯跡 |
| 6. 美濃山横穴群 | 20. 志水1号窯 | 34. 交野ヶ原遺跡 | 48. 九頭神遺跡 |
| 7. 狐谷横穴群 | 21. 女郎花遺跡 | 35. 松井窯跡 | 49. 九頭神廃寺 |
| 8. 女谷・荒坂横穴群 | 22. 東車塚古墳 | 36. 向谷遺跡 | 50. 招提中町遺跡 |
| 9. 松井横穴群 | 23. 西車塚古墳 | 37. 西村遺跡 | 51. 小倉遺跡 |
| 10. 新田遺跡 | 24. 内里八丁遺跡 | 38. 門田遺跡 | 52. 小倉東遺跡 |
| 11. 金右衛門垣内遺跡 | 25. 上奈良遺跡 | 39. 大住南塚古墳 | 53. 牧野車塚古墳 |
| 12. 宮ノ背遺跡 | 26. 茶白山古墳 | 40. 楠葉東遺跡 | 54. 交北城の山遺跡 |
| 13. 西ノ口遺跡 | 27. 式部谷遺跡 | 41. 楠葉野田西遺跡 | 55. 田口山遺跡 |
| 14. 幸水遺跡 | 28. 石不動古墳 | 42. 楠葉野田遺跡 | 56. 美濃山瓦窯跡 |

山遺跡(17)、備前遺跡(15)、西ノ口遺跡(13)、宮ノ背遺跡、美濃山廃寺下層遺跡で竪穴建物が検出されている。また、式部谷遺跡(27)では弥生時代後期と考えられる交線紐六区画製糞土銅鐸が出土している。穂谷川流域に立地する枚方市招提中町遺跡(50)では、石包丁や大型蛤刃石斧の未成品が出土するなど、石器生産に関わりのあった集落である可能性が指摘されている。

古墳時代になると、市域西部から南部に前期・中期古墳が集中的に造営される。八幡市域では最大規模となる前方後円墳の石不動古墳(28)、前方後方墳の茶臼山古墳(26)、前方後円墳の西車塚古墳(23)・東車塚古墳(22)、方墳のヒル塚古墳(16)、前方後円墳の美濃山王塚古墳(5)などが男山丘陵およびその裾部に造営される。後期になると美濃山廃寺周辺の丘陵裾部を利用した横穴墓が形成される。北から順に、狐谷横穴群(7)、美濃山横穴群(6)、女谷・荒坂横穴群(8)、京田辺市松井横穴群(9)が一大横穴墓群となっている。女谷・荒坂横穴群は第二京阪道路建設時に大規模な調査を行っており、7世紀を中心とする70基にのぼる横穴墓を確認している。

古墳時代の集落跡は、東部の沖積平野を中心に確認されている。女郎花遺跡(21)、上奈良遺跡(25)、木津川河床遺跡で古墳時代前期の竪穴建物を検出している。新田遺跡(10)、内里八丁遺跡では、古墳時代中期から後期の竪穴建物を検出しており、八幡市域では古墳時代を通して集落が営まれていたようである。

奈良時代、律令制下では、八幡市域の大半は山背国綴喜郡に属していた。まず古代寺院としては、美濃山廃寺のほか、志水廃寺、西山廃寺(別名足立寺)の3寺が確認されている。志水廃寺では金堂または講堂跡と考えられる瓦積基壇が検出されているほか、鬼面文軒丸瓦が出土している。また、志水廃寺の瓦を供給したとされる志水1号窯(20)がすぐ西隣にある。和気清麻呂が建立したという言い伝えが残る西山廃寺は、塔跡や掘立柱建物跡が検出されたほか、表面に金箔が残る埴伝や奈良三彩などが出土している。西山廃寺の西隣にも瓦を供給したとされる足立寺瓦窯跡(32)がある。枚方市域には7世紀に創建されたとされる九頭神廃寺(49)があり、塔・金堂・回廊跡などが検出されている。志水廃寺、西山廃寺、九頭神廃寺のいずれも美濃山廃寺と同文の瓦を使用しており、関連性が注目される。また、八幡市域の3寺が位置する丘陵の東麓には足利健亮氏によって「古山陰道」が想定されており、⁽³³⁾古代寺院と古代交通路の関係はおおいに注目すべきである。

集落跡としては、上奈良遺跡、内里八丁遺跡、新田遺跡、女郎花遺跡で掘立柱建物などが検出されている。上奈良遺跡・内里八丁遺跡では、奈良時代を中心とした大型の掘立柱建物や、墨書土器・石帯・和同開珎などが出土しており、郡衙関連の遺跡とみられている。その他の古代の遺跡としては、大阪市四天王寺の創建瓦を供給していたことで著名な楠葉平野山瓦窯跡群(33)が八幡市と枚方市の境に位置している。八幡市最南端に位置する交野ヶ原窯跡(34)、松井窯跡(35)は操業期間が長岡京期～平安時代初頭頃とされる須恵器を焼成していた窯である。

平安時代になると、貞観元(859)年に九州の宇佐八幡宮から八幡神が平安京の裏鬼門にあたることとされる男山に勧請され、石清水八幡宮が創建された。八幡市域に位置する3つの古代寺院のうち、美濃山廃寺と志水廃寺が石清水八幡宮成立前後の平安時代中頃～後半に廃絶しており、八幡

宮だけがその廃絶の要因ではないだろうが、大きな変化をもたらしたのであろう⁽⁸⁴⁾。八幡宮の成立以後、八幡市域のほとんどが八幡宮領となり、その影響により平野部において中世の集落遺跡が増加する。上奈良遺跡、内里八丁遺跡、新田遺跡では平安時代後期の掘立柱建物が検出されている。

石清水八幡宮が創建されて以降、八幡市の中心となるのは門前町として発展してきた現在の市街地部分である。八幡宮領である市域北東部の平野部は急激に耕作地化が進み、現在に至っている。美濃山廃寺の立地する丘陵は享保年間(1716～1735)に江戸幕府領となり、宝暦年間(1751～1763)には開墾されており、これ以降現在に至るまで、畑や茶畑、竹林に利用されてきた。

(山崎美輪)

3. これまでの調査と調査の経過

1) 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、新名神高速道路整備事業に伴い、その事前調査として平成22年度より開始した。平成22年度は、新名神高速道路整備事業の西端に当たる美濃山廃寺下層遺跡の発掘調査を実施した。その調査成果についてはすでに報告済みである⁽⁸⁵⁾。

平成23年度は、前年度調査地の北西側に位置する美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡の調査を実施するとともに、さらに東側に位置する京田辺市門田遺跡・西村遺跡・向谷遺跡の各遺跡で、橋脚部分を対象とした発掘調査を実施した。また、京田辺市松井横穴群では、横穴群の有無を確認するための調査を実施し、横穴を複数基確認した。これら京田辺市に所在する遺跡については、平成24年度も引き続き調査を実施しているため、来年度以降、改めて報告する予定である。

なお、平成23年度に実施した美濃山廃寺および美濃山廃寺下層遺跡の発掘調査としては、新名神高速道路の路線区域内における発掘調査のほか、新名神高速道路建設に伴う美濃山閉鎖地区農地一時転用(盛土造成)事業に伴う発掘調査(美濃山廃寺第7・8次調査)と、新名神高速道路につながる府道八幡インター線道路整備促進事業(府道内里高野線)に伴う発掘調査(美濃山廃寺第9次調査)が実施されている。美濃山廃寺第7・9次は当調査研究センターが実施し、美濃山廃寺第8次は八幡市教育委員会が実施した。

2) これまでの調査成果

これまでに実施された美濃山廃寺および美濃山廃寺下層遺跡の調査の概要について簡単にまとめておく(付表1)。

美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡は、八幡市南部に位置する丘陵を中心に立地している。昭和初期には、この丘陵上で古瓦の散布が知られていたことから寺院の存在が想定されており、昭和2年度建立の「古寺古跡」の石碑が現在も建っている。今回の調査前まで、茶畑あるいは竹林として土地利用されていた。

こうした点を受けて八幡市教育委員会では、昭和52年に、市史編纂の資料収集を目的とした小規模な調査を実施した⁽⁸⁶⁾。この調査では、奈良時代の掘立柱建物1棟や柱穴・溝状遺構などが検出

され、土器や瓦が出土したほか、弥生時代後期の堅穴建物2棟を検出した。この結果、当該地に奈良時代を中心とした寺院跡とともに弥生時代後期の集落跡が重複して存在することが明らかとなり、美濃山廃寺とともに美濃山廃寺下層遺跡の存在が明らかとなった。

昭和63年には、八幡市教育委員会により美濃山廃寺が立地する丘陵部北側的美濃山廃寺下層遺跡の北端にあたる地点で範囲確認調査が行われ、中世以前の谷や水田遺構^(注7)が検出された。

美濃山廃寺の実態がより明らかとなるのは、平成11年度から平成15年度にかけて、八幡市教育委員会により実施された美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡の範囲確認調査(第1～5次調査)である。この調査は平成11～15年度の5か年計画で、毎年8～13か所前後の調査区を設定して発掘調査を実施したものである。第1次調査では美濃山廃寺の北側を区画する溝の一部を検出した。第2次調査では、丘陵北部の状況を把握することと寺院関係の遺構を確認することを目的として調査を行い、掘立柱建物に関連した柱穴を2か所確認した。第3次調査では、寺院跡に関連した区画溝の北西角部分を確認した。続く第4次調査では、区画溝の北東角部分を確認して推定寺域の東西の範囲が約93mであることが想定された。また、区画溝の東側にも掘立柱建物が存在すること、区画溝の南側に大型の総柱建物S B302が存在することが明らかとなった。第5次調査では、区画溝の北東角から南に延びる溝を確認するとともに、総柱建物S B302の南東で奈良三彩や須恵器瓶を含む土坑S K520を検出し、S K520周辺に寺域の中心建物があることが想定された。

平成11年度から始まった美濃山廃寺の範囲確認調査によって、美濃山廃寺の北辺には長さ約93mを測る区画溝が存在すること、総柱建物が存在すること、出土遺物から8世紀前半～8世紀中葉に成立し、9世紀半ば頃には廃絶した寺院跡であることが推測した。

平成15年度以降、美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡での発掘調査は実施されなかったが、平成22年度に新名神高速道路整備事業が計画され、美濃山廃寺の中心部から約200m南の丘陵上で8か所のトレンチを設定して、美濃山廃寺あるいは美濃山廃寺下層遺跡の様相を明らかとするため

付表1 美濃山廃寺・同下層遺跡 調査次数一覧

美濃山廃寺	美濃山廃寺下層遺跡	調査年度	面積	調査主体
調査次数	調査次数			
—	第1次	昭和52年度	約80㎡	八幡市教育委員会
—	第2次	昭和62年度	—	八幡市教育委員会
第1次	第3次	平成11年度	148㎡	八幡市教育委員会
第2次	第4次	平成12年度	171㎡	八幡市教育委員会
第3次	第5次	平成13年度	255㎡	八幡市教育委員会
第4次	第6次	平成14年度	250㎡	八幡市教育委員会
第5次	第7次	平成15年度	240㎡	八幡市教育委員会
—	第8次	平成22年度	1,500㎡	当調査研究センター
第6次	第9次	平成23年度	8,680㎡	当調査研究センター
第7次	第10次	平成23年度	3,800㎡	当調査研究センター
第8次	第11次	平成23年度	1,850㎡	八幡市教育委員会
第9次	第12次	平成23年度	2,500㎡	当調査研究センター

※調査次数は、八幡市教育委員会と協議の上決定した。



第2図 調査回数別調査区配置図(1/2,500)

に発掘調査を実施した。調査の結果、美濃山廃寺に関連する顕著な遺構は検出されなかったものの、縄文時代から近世の遺物が出土し、古代寺院の時期以外の土地利用の様子が明らかになった。遺構は確認できなかったが、下層遺跡に関連してサヌカイト製打製尖頭器が出土した。

3) 第6次調査の経過

今回の調査は、新名神高速道路の建設に伴い、美濃山廃寺の推定寺域の南東部とそれに重複する美濃山廃寺下層遺跡を対象としたものである。

現地調査は、平成23年4月21日に着手した。調査対象地は、調査前は丘陵全体が竹林であった。竹林の造成や手入れに伴う入れ土の存在、一区画ごとに大きく溝を穿って区画されていることなどから、本来の地形が大きく改変されていることが予想された。このため、遺構面までの土砂の堆積状況や包含層の有無、遺構の残存状況などを確認するために、小規模なトレンチを設定して調査を実施した。なお、トレンチ調査にあたっては、対象地が広範囲になることから、後述する丘陵全体を覆う地区割とは別に、第6次調査に伴う地区分けとして、調査対象地の北半部をA地区、南半部をB地区として調査を進めることにした。この区分けは面的な調査においても引き続き使用した。トレンチ調査では、土砂の堆積状況の確認、その図化作業および写真撮影終了後、6月24日より重機によって除去可能な堆積土までを掘削し、それより下層については人力により掘削作業を実施した。

トレンチ調査の結果を受けて、遺構・遺物を確認したトレンチについては、拡張して面的な調査を実施した。A地区では北部の遺構が確認できなかった南東側の平坦地や東側斜面(A4トレンチ)、中央部東側の平坦地および斜面(A5・A10トレンチ)、南部の東側斜面(A11トレンチ)については調査対象範囲から除外した。B地区では東西方向の現在の里道より南側(B1～B3・B5～B8・B12・B13トレンチ)については顕著な遺構が確認できなかったため、調査対象範囲から除外した。

人力による掘削作業および精査の結果、A地区の北部や中央部の平坦地では多数の柱穴や溝・土坑などの遺構を検出した。A地区南部やB地区では瓦集中箇所、瓦窯、銅の溶解炉、鉄器生産関連遺構などを検出した。

各遺構については、主に1/20縮尺による平面図を作成した。また、遺物の出土状況は1/10縮尺や1/5縮尺による図化作業を行った。調査地全体の撮影にはヘリコプターによる空中写真撮影を11月22日に実施し、併せて1/200縮尺の調査地全体図を作成した。

美濃山廃寺第6次調査の調査成果がおおむね明らかになった平成24年1月15日に、美濃山廃寺第7～9次調査の調査成果を含めた合同の現地説明会を開催し、430人あまりの参加があった。

現地説明会終了後、遺構の完掘、遺物の取り上げ、図面の補足作業等を行った。また、鉄器生産関連遺構群の下層に谷状地形が埋没していることを確認したため、その調査が終了したのち、下層の調査を行い、平成24年2月3日に現地調査を終了した。

(村田和弘)

4. 調査の方法

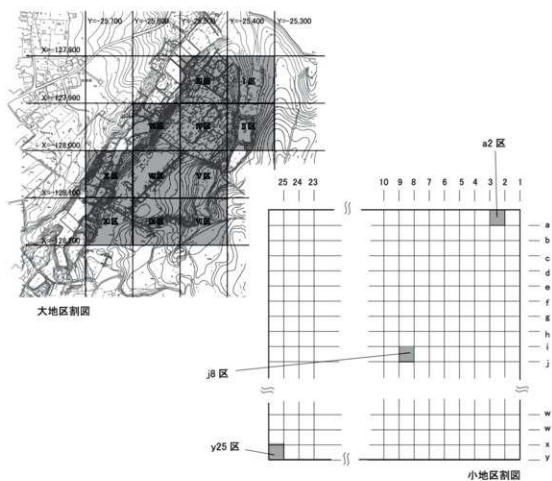
1) 地区割の設定について

新名神高速道路整備事業を含む3事業を同時に実施するにあたり、第6次調査地から第9次調査地までの全体を覆う地区割を国土座標系(世界測地系)にもとづいて設定した。

まず、丘陵全体を対象として100m四方の大区画を設定した。これにローマ数字による地区名としてI区からXI区を付した(第3図左上)。この大区画の一边を25等分して4m四方のグリッドを設定し、小区画とした。小区画の基準線はそれぞれの国土座標系と一致させ、東西方向は東から1、2、3、……、25とし、南北方向は北からa、b、c、……、yとした。両者の交点はa1、b1、c3、y25などとする。小区画の地区名は4mグリッドの南東隅の交点の名称で表すものとする。Y軸の下2桁で表すと、1ラインは00m、25ラインは96mに当たる。また、X軸の下2桁で表すと、aラインは04m、yラインは100mに当たる(第3図右下)。なお、地区名は「Ⅷ-r12区」のように表記する。

2) 遺構番号について

検出した遺構は原則として通し番号をつけ、遺構の性格を示す略号を付した。ただし、A地区とB地区では遺構番号の付し方が異なる。A地区では、遺物が出土した遺構や建物などを構成す



第3図 美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡全体地区割図

る遺構について番号を付けた。数字は3桁を基準に「001・002・……・486…」と番号を付けた。ただし、一部の建物や塀を構成する柱穴については、遺構番号-枝番号で柱穴の遺構番号を表示したものがあつた。B地区では、1からの通し番号を付け區別した。なお、両地区とも遺構番号を付与した遺構でも近・現代のものが含まれている場合がある。また、事前のトレンチ調査や第7～9次調査との間で、遺構番号の統一は図っていないため、各調査次数毎に同一遺構であっても番号は異なる。

略号は調査の進展に伴って変更することもあつたが、遺構番号は変更しないようにした。使用した略号は、堅穴建物：SH、掘立柱建物：SB、掘立柱塀：SA、溝：SD、土坑：SK、柱穴：SP、竈：SY、炉：SL、不明遺構・その他：SXである。

なお、本報告で使用した遺構番号は調査時のものである。ただし、調査時に番号のなかつた遺構については、本報告作成時に新たに付した。

3) 出土遺物の整理作業ならびに報告書作成作業について

平成24年度は、平成23年度に実施した美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次調査出土遺物約745箱の整理作業ならびに報告書作成作業を実施した。

出土遺物の整理作業では、遺物の洗浄・接合・注記を順次実施した。なお、洗浄作業の一部については平成23年度にも実施した。注記等終了後、報告に必要な遺物の選別を行い、これらについては実測・拓本を行った。また、第7次調査についても併行して整理作業を進めることになつたため、瓦・土器・土製品などの出土資料については、同一の基準に基づく分類を行うこととし、各報告間の調整を図つた。

最終的に本報告に掲載した遺物は736点である。実測した遺物のうち、復元可能なものについては石膏による復元を実施した。復元できた遺物や小破片でも重要な遺物については、遺物写真の撮影を行い図版に掲載した。重機掘削中や精査中に出土した遺構に伴わない遺物については、包含層出土遺物として地区名により掲載した。

なお、第8次調査については、八幡市教育委員会が主体となつて整理作業を進め、別に報告書を刊行される。

(村田和弘・筒井崇史)

5. 美濃山廃寺第6次調査

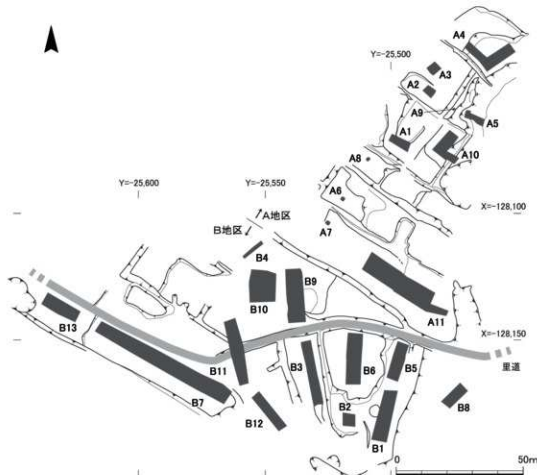
1) トレンチ調査の概要

調査対象地が10,000㎡以上の広範囲に及ぶことから、丘陵平坦地にある美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡に関連する遺構・遺物の広がりを明らかにするため、事前に小規模なトレンチを設定して調査を実施した(第4図)。

(1) A地区におけるトレンチ調査

A地区では、丘陵平坦地と東斜面に11か所のトレンチを設定した。A1～4・A6～8トレンチはA地区北・中央部の丘陵の平坦地に、A5・A9・A10トレンチは丘陵東斜面に、A11トレンチはA地区南部の平坦地から東斜面にかけて設定した。なお、A4・A5・A10以外のトレンチについては、トレンチ調査後に拡張して調査を実施することとなったため、検出遺構等については次項において報告することとし、ここでは土層の堆積状況と遺構の有無について簡単に述べるにとどめる。また、竹林の表土や入れ土からは古代のみならず近世から現代の遺物が出土しているが、これらについては細かに記述しなかった。

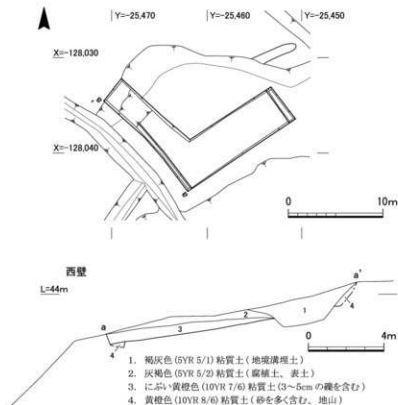
A1トレンチ A地区の中央部の丘陵平坦部に設定した長辺8.5m、短辺3mのトレンチである。現地表面の標高は約45.6mを測る。表土以下標高約44.6mまでが竹林による入れ土と近世以



第4図 トレンチ調査配置図(1/1,500)

降の茶畑に伴う盛り土であり、その下層で旧表土を確認した。旧表土直下で遺構と考えられる土色変化と遺物を確認した。出土遺物には土師器、須恵器などがある。

A2トレンチ A1トレンチの北側の平坦部に設定した一辺4m四方のトレンチである。現地表面の標高は約44.9mを測る。地表下約0.9mまでは竹林の入れ土で、その下層で地山を確認した。遺構は確認できなかった。平瓦や須恵器の小片が出土した。



第5図 A4トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)

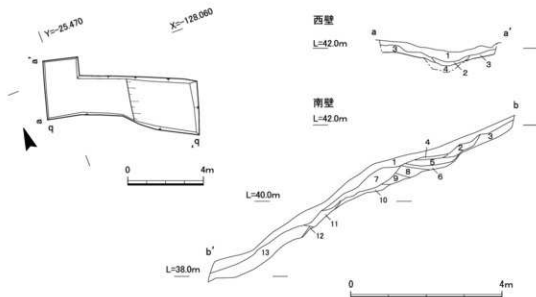
A3トレンチ A2トレンチの北側の一段高い平坦地に設定した一辺4mの方形トレンチである。地表下約1.2mまでは竹林の入れ土で、その下で地山を確認した。地山上面で溝の一部と思われる土色変化を確認した。表土直下から平瓦や須恵器の小片が出土した。

A4トレンチ(第5図) A地区北端の平坦地の南側にある一段低い平坦地に設定したL字形のトレンチである。表土下約0.4mまで掘削したところで地山を確認したが遺構はなく、平坦地は後世の造成により形成されたものと判断した。境界溝から現代の投棄物に混じって瓦が出土した。表土掘削中に平瓦や須恵器が出土した。

A5トレンチ(第6図) 東斜面に設定した長辺8m、短辺2~3mのトレンチである。斜面には西側から流入したと考えられる土砂(第7層)が約0.4m堆積する。この土砂から軒平瓦、平瓦、須恵器など多くの遺物が出土したが、遺構は確認できなかった。

A6トレンチ 丘陵頂部の境界溝で区画された平坦地に設定した一辺約1.5mの方形のトレンチである。現地表面の標高は約45mで、表土下約0.8mまで掘削したが、全て竹林の入れ土で、その下層で地山を確認したが遺構は確認できなかった。表土掘削中および地山直上で平瓦が出土した。

A7トレンチ A6トレンチの南側の境界溝で区画され、南東方向に緩やかに傾斜する平坦地に設定した一辺1.5~2.0mのトレンチである。平坦地の現地表面の標高は約44.8mを測る。地表下約0.5mまでは竹林の入れ土で、その直下で地山を確認したが、遺構は確認できなかった。表土掘削中および地山直上で瓦が出土した。



- | | |
|--|--|
| 1. 暗オリーブ色 (5Y 4/3) 砂質土 (腐植土) | 8. 褐色 (7.5YR 4/6) 砂質土 (鉄分を含む) |
| 2. オリーブ褐色 (2.5Y 4/6) 粘質土 (粗粒砂を含む) | 9. 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質土 (0.5mm の礫ごく少量混じる) |
| 3. 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質土 | 10. 橙色 (7.5YR 6/8) 粘質土 (砂質を含む、2～3cm の小石が混じる) |
| 4. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土 (粗粒砂を含む) | 11. オリーブ褐色 (2.5YR 4/3) 砂質土 (1～4cm の小石が多く混じる) |
| 5. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土 (細粒砂を含む) | 12. 明褐色 (7.5YR 5/8) 砂質土 (1～2cm の小石が少し混じる) |
| 6. 黄褐色 (10YR 7/8) 粘土 | 13. オリーブ褐色 (2.5YR 4/6) 粘質土 (2～5cm の小石が多く混じる) |
| 7. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土 (1～3cm の小石が混じる) | |

第6図 A5トレンチ平面図(1/200)および土層断面図(1/100)

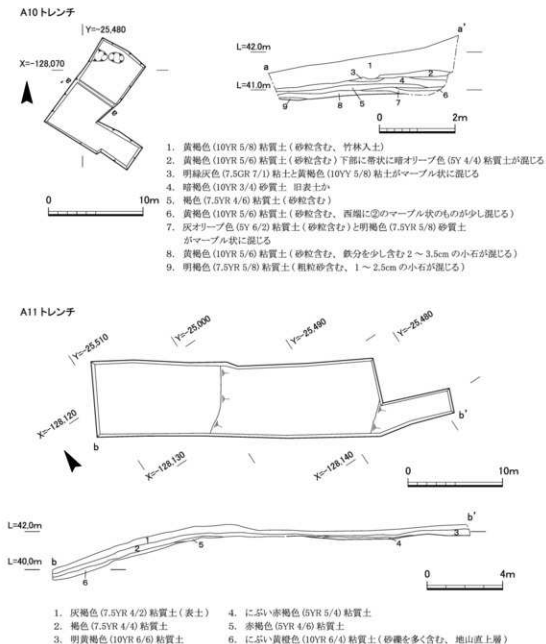
A8トレンチ A6トレンチの北東側の平坦地に設定した一辺約1.2mの方形トレンチである。現地表面の標高は約45mを測る。地表下約1mまでが、竹林の入れ土(黄褐色粘質土層と同礫混じり層)で、その下層で遺構検出面を確認した。遺構は確認できなかった。表土掘削中および黄褐色粘質土層から瓦が出土した。

A9トレンチ A2トレンチとA5トレンチの間で表土中に多くの瓦が散乱していたため、一辺約1.5mの方形トレンチを設定して遺構検出に努めたが、後世に大きく削平されたため遺構は確認できなかった。竹林の入れ土から土師器皿や甕の破片が出土した。

A10トレンチ(第7図) A1トレンチの東側の一段低い平坦地から丘陵斜面にかけて設定したトレンチである。平坦地では地表下約0.6mまで竹林の入れ土である黄褐色粘質土(第1層)が堆積している。その下層にも竹林に伴う入れ土と判断される5～10cmほどの水平堆積(第2～8層)がみられるが、遺構は確認できなかった。この平坦地についても、後世の造成により改変された地形であると考えられる。水平堆積層からは丘陵上部から流れ落ちたと思われる瓦や土師器、須恵器などが出土した。

A11トレンチ(第7図) 南東部の平坦地から東斜面にかけて設定したトレンチである。平坦地では地表下約0.4mで地山を確認した。また、東斜面でも緩やかに傾斜する地山を確認した。いずれにおいても遺構は確認できなかった。表土直下で丘陵上部から流れ落ちたと思われる平瓦や須恵器が出土した。

(村田和弘)

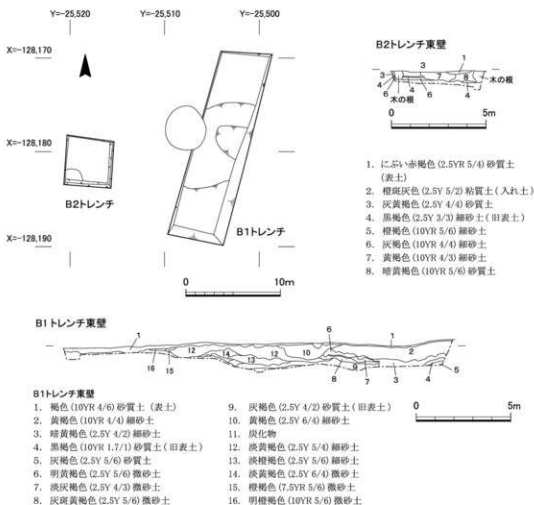


第7図 A10・A11トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/100・1/200)

(2) B地区におけるトレンチ調査

B地区では13か所のトレンチを設定した。中央部を里道が東西に通っており、この里道を挟んで北側にB4・B9・B10トレンチを、南側にB1～B3、B5・B6・B8・B11・B12トレンチを、南西側にB7・B13トレンチを設定した。地形的には南西側がもっとも標高が高く、北側、南側と一段ずつ低くなる。遺物は里道より北側で出土した。瓦濠りが認められたB9トレンチや拡張したB4・B10トレンチについては検出遺構の項で詳述する。

B1トレンチ(第8図) B地区の南東隅に設定した長辺20~21m、短辺6mのトレンチである。調査前は平坦であったが、調査の結果、トレンチの南側に向かって地形が傾斜しており、南部はビニールなどが出土したことから現代に埋められたことが明らかになった。トレンチ北部では地

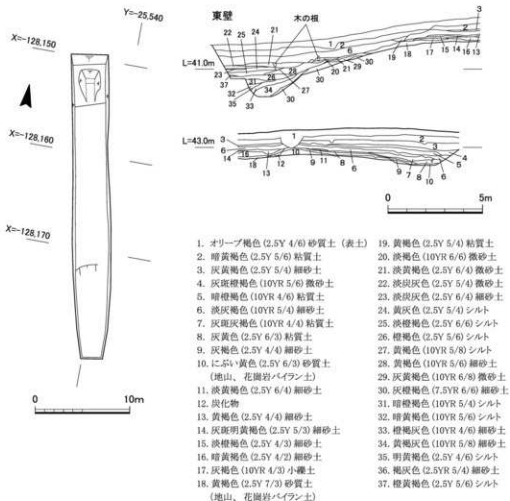


第8図 B1・B2トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)

表下1.2mで地山を確認した。それより上層は竹林の入れ土である。顕著な遺構はなかったが、遺物包含層から瓦、土師器などが少量出土した。

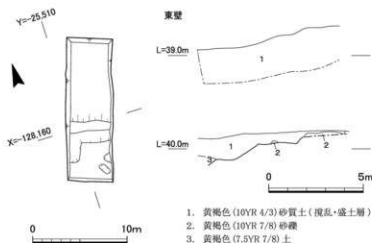
B2トレンチ(第8図) B1トレンチの西側に設定した一辺5mの方形のトレンチである。調査前は平坦であったが、調査の結果、北側から張り出した台地を造成して平坦にしていることが明らかになった。地表下0.6mまで竹林の入れ土であった。少量の遺物が出土したが、遺構は確認できなかった。

B3トレンチ(第9図) B2トレンチの北西に設定した長辺32m、短辺4mのトレンチである。調査前は、B2トレンチより一段高い平坦地であった。北端は東西方向に延びる里道の近くにあたる。調査の結果、トレンチ北半部では里道に向かって地山が急激に落ち込んでいることを確認した。トレンチの北端では地表下2.8mまで掘削したが、地山は確認できなかった。下層は黄褐色細砂土である。第25層から奈良時代の布目瓦片が出土した。このことから、里道の下に古代の小さな谷地形が埋没していることが明らかになった。トレンチ南半部では、地表下1.5mまで竹林の入れ土で、その下層で地山を確認した。遺構は確認できなかったが、瓦や土師器が出土した。



第9図 B3トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)

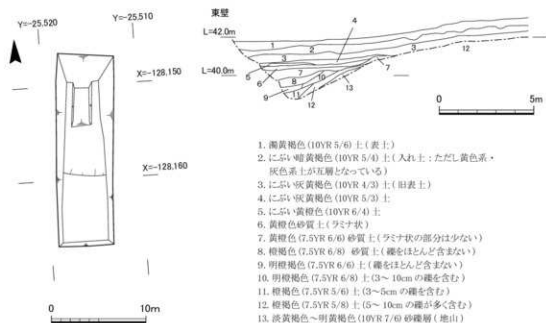
B4トレンチ B地区の北西部に設定した、長辺10m、短辺15mのトレンチである。地表下0.9mまでは竹林の入れ土、その下0.2mまで橙色粘質土で、その下が地山である。瓦・土師器・鉾滓の小片が出土したが、遺構は確認できなかった。



B5トレンチ(第10図) B1トレンチの北側に設定した

第10図 B5トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)

長辺15m、短辺5mのトレンチである。掘削土はほとんどが竹林の入れ土であった。トレンチ南部は地表下0.1mで地山となる。トレンチ北部では北側の里道に向かって地山が急激に落ち込んでいることを確認したものの、トレンチ範囲が限られており、地山までは確認できなかった。瓦



第11図 B6トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)

が少量出土したが、遺構は確認できなかった。

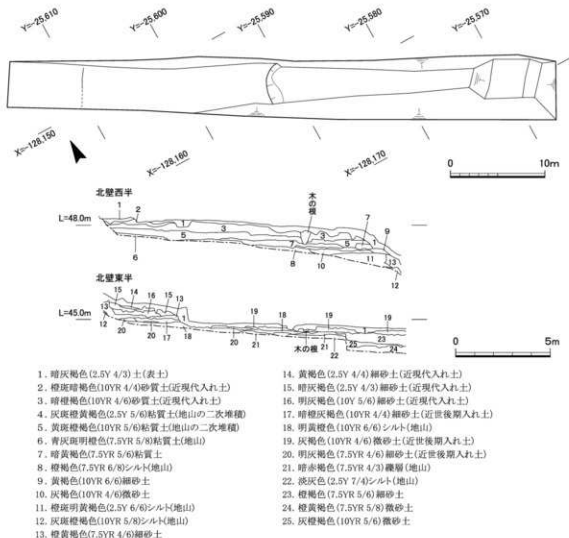
B6トレンチ(第11図) B2トレンチの北側に設定した長辺20m、短辺6mのトレンチである。トレンチ北半ではB3・B5トレンチと同じく、北側にある里道に向かって地山が急激に落ち込んでいることを確認した。傾斜変換点はトレンチ北端から約7m南である。トレンチ北端では地表下3.1mまで掘削したが、湧水があり、それ以上の掘削はできなかった。トレンチ南部は地表下1.2mまで竹林の入れ土であった。遺構は確認できなかった。出土遺物には須恵器などがある。

B7トレンチ(第12図) B地区西部で現代の里道に沿って設定した短辺5~6.4m、長辺58mのトレンチである。地形は東端から14mで一段(約1.4m)、さらに、20.5mでも一段(約0.4m)低くなっていた。南部では東に向かって地形が急激に落ち込む。地表下0.7m(標高43.5m)で黄褐色シルト層になり、この層から奈良時代と考えられる摩滅した軒平瓦片が出土した。B3・B5トレンチ北部の近辺にある現代の里道の下層に、小さな谷地形が埋没していると判断した。出土遺物には瓦、土師器、須恵器などがある。

B8トレンチ B地区の南東部に設定した長辺10m、短辺5mのトレンチである。深さ2mまで重機で掘削したが、現代の土砂で埋められていた。遺構・遺物は確認できなかった。

B9トレンチ B地区の北部に設定した長辺22m、短辺6.2mのトレンチで、B3トレンチとは里道を挟んで北側に位置している。南端は里道に近く、地形は大きく南に向かって傾斜している。南部で瓦溜りを検出したため拡張したところ、瓦溜りは東西方向に広がっていることを確認した。瓦類とともに鷗尾の小破片(第87図139)が1点出土した。

B10トレンチ B9トレンチの西側に設定した長辺11m、短辺9mのトレンチである。B9トレンチで検出した瓦溜りの規模を確認するためトレンチを拡張して遺構検出に努めた。地表下0.8mまで竹林の入れ土で、その下層で瓦溜りの延長部分を検出した。竹林の入れ土からは近世



第12図 B7トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)

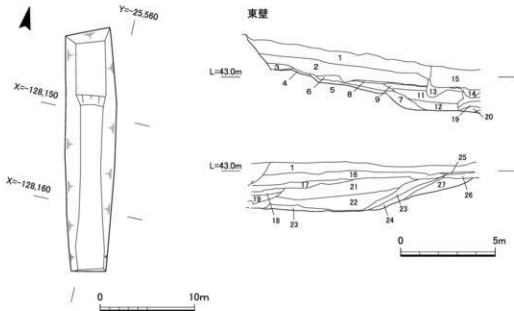
遺物が出土しており、B地区の竹林による地形の改変は、江戸時代後期以降に行われたものと考えられる。

B11トレンチ(第13図) 里道をまたいで設定した東西5m、南北26mの長方形のトレンチである。調査の結果、トレンチの中央部に向かって北側と南側から地山が急激に落ち込んでおり、里道部分には小さな谷地形が埋没していることが明らかになった。遺物は出土しなかった。

B12トレンチ(第14図) B地区の南部に設定した西辺4m、北辺約18mのトレンチである。深さ0.4mまで掘削した。表土直下が黄褐色粘土層や灰白色砂礫層の地山であった。旧表土層は竹林の造成により、削平されていた。遺構はなく、遺物も出土しなかった。

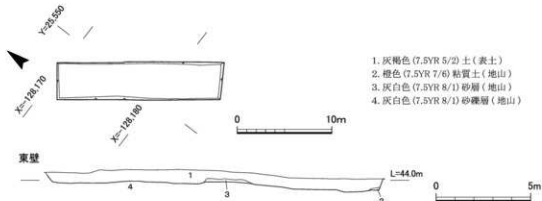
B13トレンチ(第15図) B7トレンチの西部で標高49.7mとB地区では最も高い地点に設定した長辺15m、短辺5mのトレンチである。地表下0.5mまで竹林の入れ土であった。遺構は確認できなかった。竹林の入れ土から江戸時代以降の遺物が出土した。

(伊野近富)



1. 明褐色(7.5YR 5/8)土(表土)
2. 橙色(7.5YR 6/8)土(入れ土)
3. 橙色(7.5YR 5/8)砂質土
4. 黄褐色(7.5YR 7/8)砂礫混(入れ土)
5. 黄褐色(7.5YR 7/8)砂礫層(地山)
6. 橙色(7.5YR 6/8)砂礫混(入れ土)
7. 黄褐色(7.5YR 7/8)砂礫混(地山の二次堆積)
8. 黒褐色(7.5YR 3/1)土
9. 橙色(7.5YR 7/8)土
10. 橙色(7.5YR 7/6)土(西側では5cm以下の礫あり)
11. 橙色(7.5YR 6/6)砂質土
12. 橙色(7.5YR 5/8)砂質土
13. にぶい橙色(7.5YR 6/4)土
14. にぶい橙色(7.5YR 6/3)土
15. にぶい橙色(7.5YR 7/4)土
16. にぶい橙色(7.5YR 6/4)土(入れ土)
17. にぶい橙色(7.5YR 7/4)砂質土(3cmの小礫含む)
18. にぶい橙色(7.5YR 7/3)砂礫混(入れ土)
19. にぶい黄褐色(7.5YR 7/4)砂礫混(入れ土)
20. にぶい橙色(7.5YR 7/4)砂礫土
21. 黄褐色(7.5YR 8/8)砂質土
22. 黄褐色(7.5YR 7/8)砂質土
23. 橙色(7.5YR 6/8)砂質土
24. 灰褐色(7.5YR 6/2)土(やや砂質)
25. 明灰褐色(7.5YR 7/2)土
26. 浅黄褐色(7.5YR 8/4)土
27. 橙色(7.5YR 7/6)砂礫混(地山の二次堆積)

第13図 B11トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)



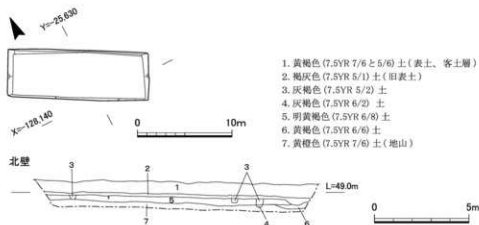
1. 灰褐色(7.5YR 5/2)土(表土)
2. 橙色(7.5YR 7/6)粘質土(地山)
3. 灰白色(7.5YR 8/1)砂層(地山)
4. 灰白色(7.5YR 8/1)砂礫層(地山)

第14図 B12トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)

(3) トレンチ調査の成果

A地区で11か所、B地区で13か所の小トレンチを設定して、美濃山廃寺および美濃山廃寺下層遺跡に関連する遺構・遺物の有無及びその範囲確認調査を進めた結果、竹林の手入れによる入れ土の厚さ、土層の堆積状況、遺構・遺物の状況が明らかとなった。

A地区では、A 1～3・A 6～8 トレンチでは地表下0.5～1.2mまでが竹林による入れ土によ



第15図 B13トレンチ平面図(1/400)および土層断面図(1/200)

り大きく地形が改変されているものの、A1・A2トレンチでは遺構を、他のトレンチでは遺物を確認した。A4・A5・A10・A11トレンチでは、竹林の入れ土による削平が著しく、A5・A10トレンチで遺物が出土するものの遺構は確認できなかった。

B地区では東西方向の里道を挟んだB3・B5～B7・B11の各トレンチで、里道に向かって地形が急激に落ち込み、谷地形を呈していることが確認できた。その南側に位置するB1・B2・B8・B12トレンチでは少量の遺物の出土はみられたものの、遺構は確認できなかった。

以上のように、丘陵斜面を中心としたトレンチ調査の結果、東西方向にはしる里道より南側では美濃山廃寺に関連した遺構・遺物が確認できなかったこと、美濃山廃寺と重複して存在する美濃山廃寺下層遺跡も同様の傾向にあることが明らかになった。このため関係機関と協議を行い、丘陵上部を中心に拡張する範囲を決定し調査を実施することとなった。

(石井清司)

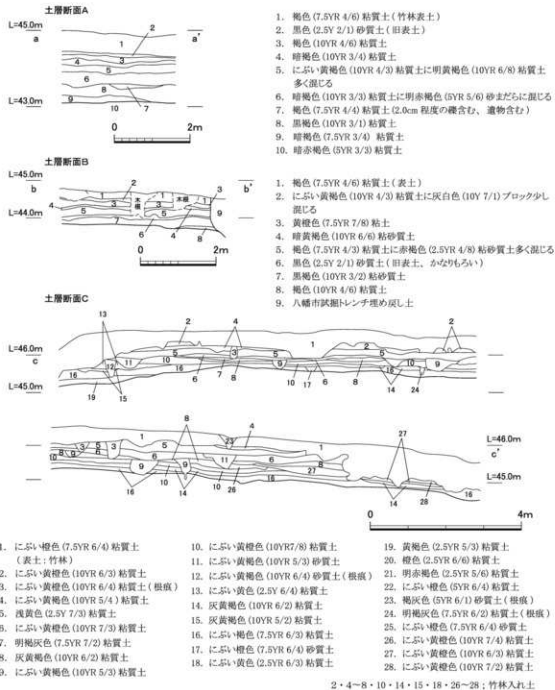
2) 土層の堆積状況

第6次調査では、第7次および第9次調査地との境界部分にあたる地点で土層の堆積状況を観察するとともにその土層断面図を作成した(第16図)。

土層断面Aは第9次調査地との境界であり(第19図)、現地表面は標高約45.0mを測る。第1層は現代に盛り土された人為的な堆積層である。第2層は旧表土、第3～6層は竹林のための入れ土、第7～9層は竹林以前の茶畑に伴う盛り土と思われる。第7層は礫に混じり微量の遺物片を含むが、茶畑開墾時に下層の遺物が混入したものと考えられる。第10層の上面で遺構を検出した。現地表面から遺構検出面までの深さは約2mで、標高は約43.1mを測る。

土層断面Bは第7次調査地との境界にあたり(第19図)、現地表面は標高約44.8mを測る。第2～5層は竹林に伴う入れ土である。第6層は腐植土が混じり、旧表土と考えられる。第7層は茶畑に伴う盛り土である。第8層の上面が遺構検出面で、標高約43.8mを測る。なお、第9層は第4次調査の埋め戻し土である。

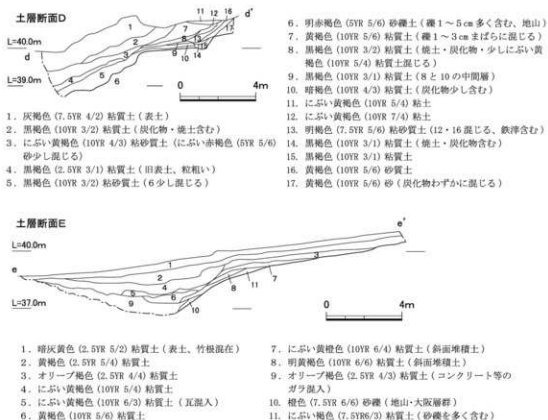
土層断面Cは、第7次調査地との境界にあたる(第32図)。現地表面は標高約46.5mを測り、第6次調査地内でもっとも標高が高い地点である。第1層は竹林に伴う入れ土である。その下層も



第16図 調査地壁面土層断面図(1/100)

10cmほどの厚みの堆積層がみられ、各層からは竹根の痕跡が確認できる。第16・19層は瓦片などの遺物を含む。第16層直下が遺構検出面で、最も高い地点の標高は約45.5mを測る。

また、調査地の東側の丘陵斜面の堆積状況を確認するために、北部と南部でそれぞれ1か所土層の観察・記録を行った。北部では断ち割りを設定して土層の観察を行った(第17・19国土層断面D)。第1層は表土層であり、現代の遺物とともに瓦が出土した。第4層は旧表土層、第5層は斜面の堆積土で瓦や土器の破片を含む。第5層の下で明赤褐色砂礫土の地山(第6層)を確認した。第2・3・7~17層は現代の竹林の造成に伴う流土と思われる。そのうち、第13層からは近



第17図 東側斜面土層断面図(1/200)

世～現代の遺物とともに鉄滓や鑄の羽口、瓦が出土しており、鍛冶炉などの遺構が存在していた可能性がある。

南部では東斜面を重機掘削する際に畔を設定して土層の観察を行った(第17・25図土層断面E)。第1層は表土、第2層は竹林に伴う入れ土、第3～9・11層は、丘陵上部からの流入による堆積土と思われる。第9層にはコンクリート片が多く混入していた。第10層は橙色砂礫土の地山であり、第9層をさらに深く掘削する必要もあったが、現地表から約4m以上となるため、安全面を考慮して下層の確認作業は行わなかった。

(村田和弘)

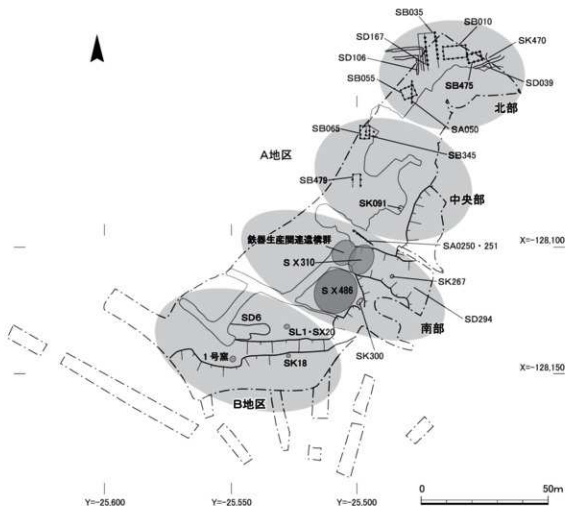
3) 検出遺構

第6次調査では既述のようにA・B地区の大きく2地区に分けて調査を進めた。以下、A地区、B地区の順に検出遺構の概要を述べるが、A地区については便宜上、大きく北部・中央部・南部に3区分して報告する(第18図)。

検出した遺構には掘立柱建物や掘立柱塼、柱穴、土坑、溝などのほか、鉄や銅の生産関連遺構、瓦窯などがある。なお、検出遺構の報告にあたっては、第7次調査報告の「美濃山廃寺の遺構の変遷について」(323～329頁)で示した時期区分にしたがって各遺構の時期を述べることにする。

(1) A地区北部(第19図)

標高約43.4～44.3mの平坦地では、区画溝S D106・167、溝S D039、土坑S K470、掘立柱建



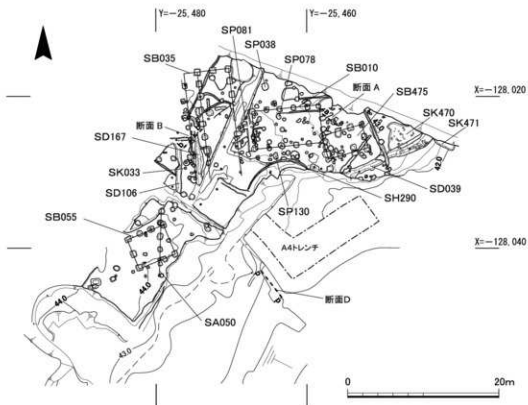
第18図 美濃山廃寺第6次調査地区別および主要遺構配置図(1/1,500)

物 S B010・475・055、掘立柱塼 S A050などを検出した。そのほか、建物に復元できなかった柱穴や溝、土坑などがある。

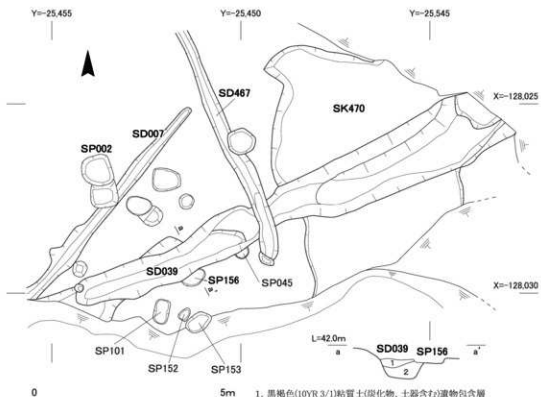
区画溝 S D106・167 標高約44.0mの平坦地で検出した南北方向に平行する2条の溝である。区画溝の一部は第5次調査の際に確認されており、S D167はその延長部に当たる。一方、S D106は今回新たに確認した溝であり、S D167と平行することを確認した。この2条の溝は西側の第7次調査地に延びており、区画溝の詳細については第7次調査で報告する。また、区画溝の東側で検出した掘立柱建物 S B035についても、建物の北半部が第7次調査地にかかることから第7次調査においてまとめて報告する。

溝 S D039(第20図) 調査地の北東端(V-g12・13区、h13・14区)で検出した。検出長約12m、幅1~1.8m、深さは0.5mを測る。溝の方位は、北に対して67°東に振る。S D039は第2次調査で溝 S D211として部分的に調査されている。また、東側の一部は第9次調査地にかかる。この溝からは、多くの土器や瓦が出土した(第88図140~第92図214)。出土遺物などから第Ⅱ-1期に位置づけられる。

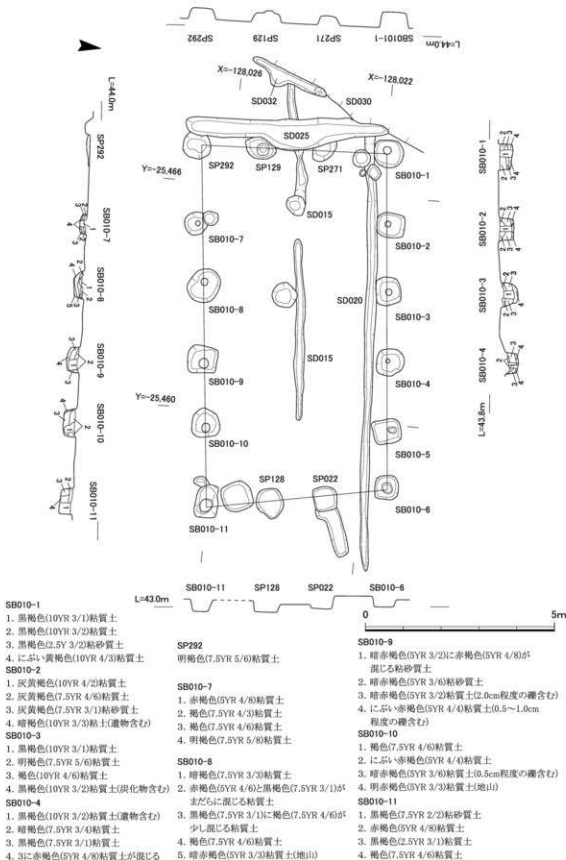
土坑 S K470(第20図) 溝 S D039と重複して検出した(V-g12・13区)。東西4m以上、南北



第19図 A地区北部遺構配置図(1/500)



第20図 溝S D039・土坑S K470実測図(1/100)

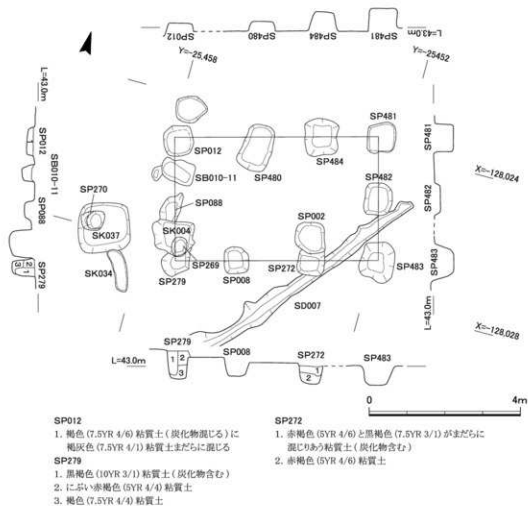


第21図 掘立柱建物S B010実測図(1/100)

6 m以上、深さ0.4mを測る。S D039同様、遺構の一部は第9次調査地にかかる。土坑内から多くの土器や瓦が出土した(第93図215~240)。出土遺物などからSK470はSD039より新しく、第Ⅲ期に位置づけられる。

掘立柱建物S B010(第21図) 調査地北端(V-f15~17・g15~17区)で検出した。桁行5間(9 m)、梁行3間(4.8m)の東西棟の建物である。建物の方位は、北に対して5°西に振る。検出した柱穴は16基で、柱穴掘形は一辺約0.7mの隅丸方形、または直径0.6~0.9mの円形を呈する。柱穴の深さは0.3~0.8mを測る。柱痕を確認できたものでは直径0.2~0.5mを測る。柱間寸法は桁行1.6~2 m、梁行1.6~1.8mを測る。建物の西辺の柱穴は、溝SD025によって西半分が切られている。各柱穴から須恵器杯Aや杯B蓋などが出土した(第94図243~246)。出土した土器や建物の構造から第Ⅱ-2期に位置づけられるが、第Ⅲ-1期に降る可能性もある。

掘立柱建物S B475(第22図) 掘立柱建物S B010の東側に隣接して検出した(V-f14, g14・15、h15区)。桁行3間(5.5m)、梁行2間(3.5m)の東西棟の建物である。建物の方位は、北に対して16°西に振る。検出した柱穴は10基で、柱穴掘形は一辺0.6~0.9mの隅丸方形または長方形を呈する。柱穴の深さは0.5~1.2mを測る。柱痕は確認できたものでは直径0.2mを測る。柱間寸法

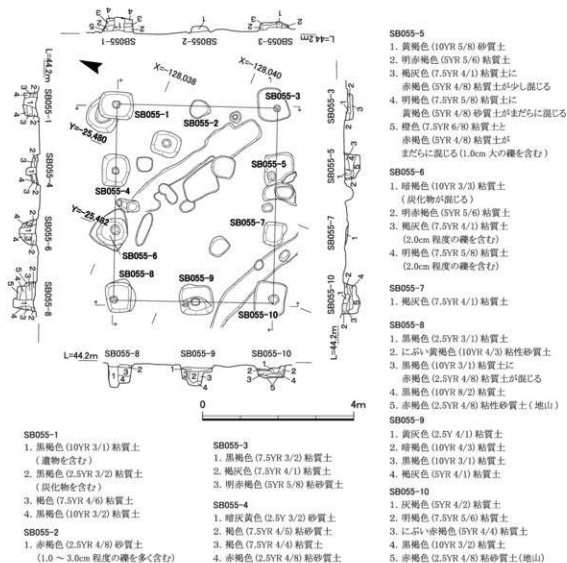


第22図 掘立柱建物S B475実測図(1/100)

は桁行2.2m、梁行1.7mを測る。柱穴から土師器甕や須恵器杯などが出土している(第94図247・248)。S B475は、建物の方位が溝 S D039とおおむね一致することから、第Ⅱ-1期に位置づけられる。

掘立柱建物 S B055 (第23図) 掘立柱建物 S B010の南西約15mで検出した(V-j20・21、k20・21区)。桁行3間(5.2m)、梁行2間(4.2m)の東西棟の建物である。建物の方位は、北に対して20°東に振る。検出した柱穴は16基で、柱穴掘形は一辺約0.8mの隅丸方形を呈する。柱穴掘形の深さは0.15~0.55mを測る。柱痕は直径約0.24mを測る。柱間寸法は桁行1.5~1.9m、梁行2.1~2.2mを測る。各柱穴から土師器甕や須恵器杯・杯B蓋などが出土した(第94図250~252)。出土した土器などから第Ⅱ-1期に位置づけられる。S B055の柱穴は、重複して検出した南北方向の掘立柱塼 S A050の柱穴を切っていることから、S A050より新しい時期に建てられたと考えられる。

掘立柱塼 S A050 (第24図) 掘立柱建物 S B055と重複して検出した掘立柱塼(5間以上)である(V-j20・j20・k20区)。検出長は8.6mを測る。方位は北に対して1°東に振る。柱穴掘形は、一



第23図 掘立柱建物 S B055実測図(1/100)

辺0.36～0.82m、深さ0.14～0.38mを測る隅丸方形を呈するものが多い。柱穴 S A 050-3と柱穴 S A 050-4の柱痕は直径約0.27mを測り、柱間寸法は1.7mを測る。S A 050の南側には1.5mの段差があるため、南側に延びる柱穴列は検出できなかった。北側も竹林の境界溝があり、北延長部の柱穴列は確認できなかった。また、周辺で塙の角度を変えるような柱穴の検出に努めたが、対応するような柱穴は存在しなかった。柱穴からの出土遺物はなかった。掘立柱建物 S B 055との切り合い関係から第 I 期に位置づけられる可能性が高い。

土坑 S K 033 直径0.2m、深さ0.2mを測る、円形を呈する柱穴である。

土坑 S K 034 (第22図) 長さ1.1m、幅0.35m、深さ0.2mを測る、隅丸九長方形を呈する土坑である。須恵器杯 B (第95図285～288) や鉄滓(第115図692)などが出土した。

土坑 S K 037 (第22図) 一辺が1.35m、深さ0.4mを測る、隅丸方形を呈する土坑である。須恵器杯 B (第95図282・287)などが出土した。

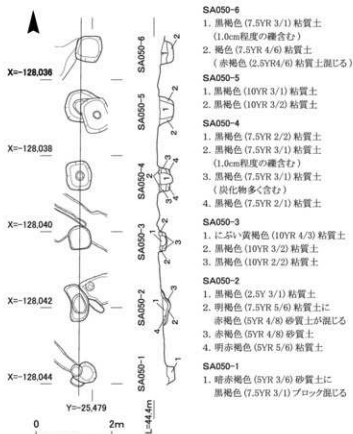
土坑 S K 471 東西残存幅3m、残存長0.9m、深さ0.35mを測る土坑である。北側は現代の里道によって失われており、規模は不明である。土坑内から軒丸瓦や平瓦、土師器甕・須恵器杯 B 蓋(第93図241・242)などが出土した。

柱穴 S P 038 直径0.62m、深さ0.3mを測る、円形を呈する柱穴である。奈良時代の遺物や弥生土器が出土した。

柱穴 S P 078 直径0.6m、深さ0.2mを測る、円形を呈する柱穴である。奈良時代の遺物や弥生土器が出土した。

柱穴 S P 081 直径0.4m、深さ0.25mを測る、円形を呈する柱穴である。奈良時代の遺物や弥生土器が出土した。

柱穴 S P 130 南北0.8m、東西0.6m、深さ0.4mを測る、楕円形を呈する柱穴である。奈良時代の遺物や弥生土器が出土した。



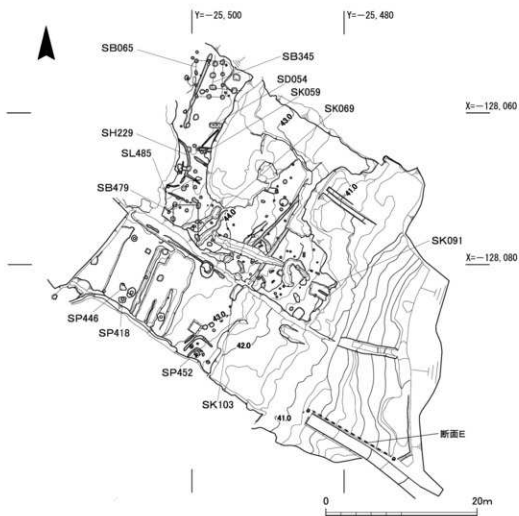
第24図 掘立柱塙 S A 050実測図(1/100)

(2) A地区中央部(第25図)

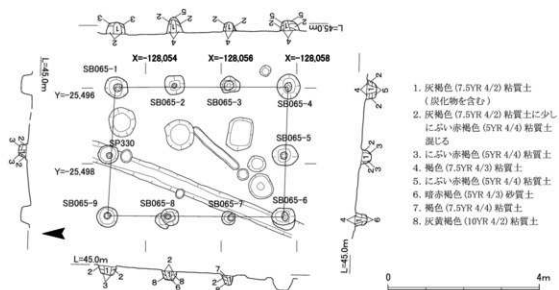
後世の竹林による土取り穴や削平が著しく、平坦地の北東側では広い範囲で遺構を確認できなかった。後世に削平されることのなかった西側の平坦地では、掘立柱建物SB065・345・479などを検出した。東側斜面では土坑SK091を検出した。そのほか、建物に復元できなかった柱穴や溝、土坑などを検出した。また、近世の遺構であるが土坑SK103・柱穴SP452からは丸瓦・平瓦などが出土している。

掘立柱建物SB065(第26図) 中央部の北端で検出した(V-n25、o24・25区)。桁行3間(4.65m)、梁行2間(3.45m)の南北棟の建物である。建物の方位は、北に対して1°東に振る。柱穴の柱痕は直径0.14~0.23mを測る。柱間寸法は、桁行1.4~1.64m、梁行1.6~1.8mを測る。柱穴掘形は直径0.36~0.65mの円形、もしくは長辺0.34~0.62m、短辺0.27~0.44mの隅丸方形を呈する。柱穴の深さは0.24~0.34mを測る。遺物は各柱穴から土師器甕や須恵器蓋などが出土した(第94図253~255)。出土した遺物などからⅢ-2期に位置づけられ、美濃山廃寺で最も新しい遺構の1つである。

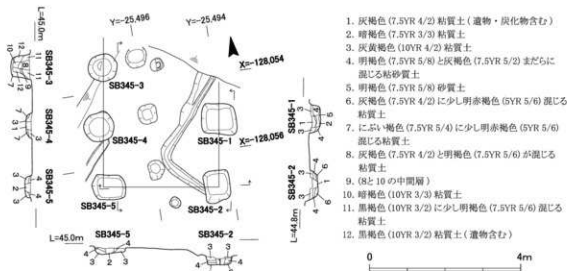
掘立柱建物SB345(第27図) 掘立柱建物SB065と重複して検出した(V-n25、o24・25区)。



第25図 A地区中央部遺構配置図(1/500)



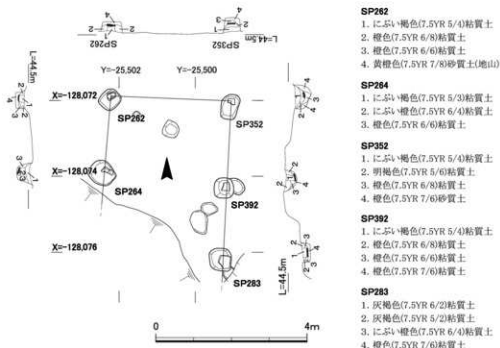
第26図 掘立柱建物SB065実測図(1/100)



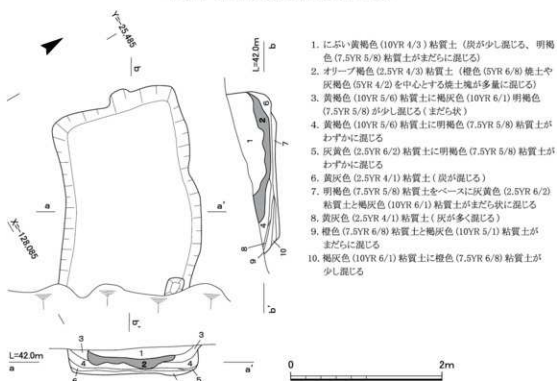
第27図 掘立柱建物SB345実測図(1/100)

桁行2間以上(3.8m以上)、梁行1間(3.6m)の建物と思われる。建物の方位は北に対して10°東に振る。検出した柱穴は5基である。柱穴掘形は、柱穴SB345-1・2・5は、一辺約0.8mを測る隅丸方形で、柱穴SB345-3・4は直径約0.8mを測る円形を呈し、不揃いである。柱痕跡は直径約0.2mを測る。柱間寸法は、桁行1.6m、梁行3mを測る。建物の北側と東側は、境界溝や土取りによって削平されているため、建物の規模は不明である。SB345とSB065は、互いの柱穴に切り合い関係は認められなかった。遺物は出土しなかった。

掘立柱建物SB479(第28図) V区とⅧ区の境(V-r25・s25・t25、Ⅷ-r1・s1区)、中央の南西側の標高約44.5mの平坦地で検出した。桁行2間以上(4.2m以上)、梁行1間(3.2m)の南北棟の



第28図 掘立柱建物 S B 479実測図(1/100)



第29図 土坑 S K 091実測図(1/50)

建物である。建物の方位は、北に対して 3° 東に振る。検出した柱穴は5基である。柱間寸法は、桁行 $1.9\sim 2.25\text{m}$ を測り、柱穴掘形は一辺 $0.5\sim 0.7\text{m}$ の隅丸方形ないし隅丸長方形を呈する。柱穴の深さは $0.25\sim 0.4\text{m}$ である。柱穴の底では、平瓦が1枚ないし2枚重なった状態で出土した。平瓦が2枚重なって出土したのは S P 262のみで、その他の柱穴はいずれも1枚である。これら柱

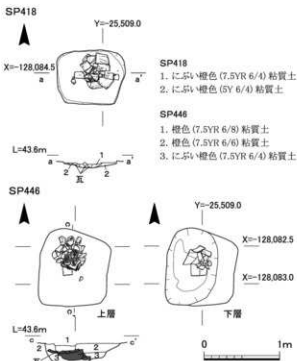
穴の底で出土した平瓦は、本来、柱材の沈下等を防ぐために据え置く石や木などの礎盤の代用品として使用されたものと考えられる。出土した平瓦のみで詳しい時期は判別できないが、第二期ないし第三期に位置づけられる可能性がある。

溝 S D054 残存長1.5m、幅0.65m、深さ0.55mを測る溝状の遺構である。ほかの遺構より深く掘りこまれているが、東側が後世の土取りによって失われているため、規模・性格等は不明である。溝の底から軒九瓦、土師器甕、須恵器甕(第94図256・257)などが出土した。

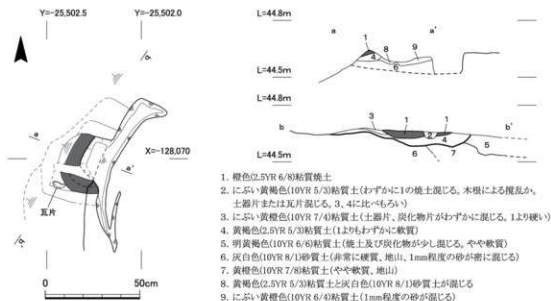
土坑 S K091 (第29図) 中央部の南東側の斜面地で検出した(V-u21・22、v21区)。長辺2.8m、短辺1.8mを測る長方形を呈する土坑である。第2層は焼土の塊や炭層が混じるオレンジ褐色粘質土であるが、遺構内では焼けた面や壁面は確認できなかった。性格は不明である。出土遺物には須恵器蓋の小片などがある(第95図267・268)。遺構の詳細な時期は不明であるが、出土遺物から第二期に位置づけられる可能性がある。

土坑 S K059 溝 S D054の南側に検出した不定形な土坑で、深さは最深で5cmほどである。軒九瓦(第66図60)などが出土した。

土坑 S K069 掘立柱建物 S B479の東側で検出した土坑で、長さ1.6m、幅0.9m、深さ0.35mを測る。軒平瓦(第62図17)、須恵器鉢や杯(第95図278～282)が出土した。



第30図 柱穴 S P418・446実測図(1/50)



第31図 鍛冶炉 S L485実測図(1/20)

柱穴 S P 418 (第30図) VII-v3区の標高は約42.8mを測る平坦地で検出した。柱穴掘形は東西0.9m、南北0.7mの隅丸方形を呈する。深さは検出面から0.16mと浅く、遺構の残存状況は良くなかったが、柱穴の底部から多くの瓦が出土した。柱痕は確認できなかった。

柱穴 S P 446 (第30図) VII-u3区の標高約42.8mを測る平坦地で検出した。柱穴掘形は東西0.9m、南北1.2mの隅丸方形を呈する。深さは検出面から約0.3mを測る。直径0.25mの柱痕と思われる第1層の下層から多くの瓦が重ねられた状態で出土した。

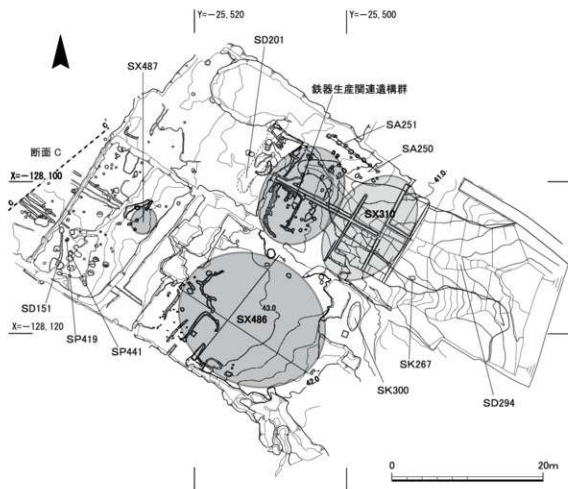
(村田和弘)

鍛冶炉 S L 485 (第31図) 中央部西側の平坦面(VII-r1区)で検出した。著しい削平と木根による攪乱を受けているため、炉の規模や上部構造については不明である。南北0.3m、東西0.2m、深さ0.1mの範囲が半円状に被熱しており、橙色または暗赤褐色に変色している。

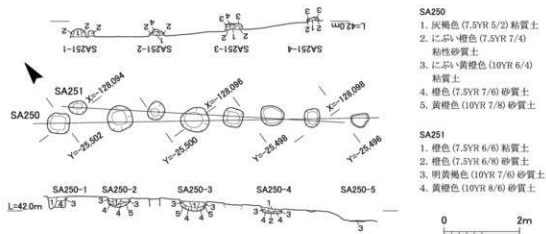
(大高義寛)

(3) A地区南部(第32図)

北部で掘立柱塼 S A 250・251や鍛冶炉・焼土坑・炭窯などの鉄器生産関連遺構群を検出した。また、鉄器生産関連遺構群の下層の遺構の有無を確認するため、東側斜面の堆積層 S X 310を含めて断ち割りを行い、土層の掘削・観察をするとともに、谷状地形 S D 294を確認した。



第32図 A地区南部遺構配置図(1/500)



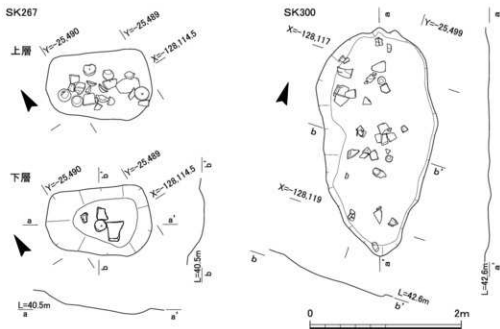
第33図 掘立柱塼 S A250・251実測図(1/100)

鉄器生産関連遺構群の南東側では覆鉢形土製品12点が出土した土坑 S K267を、その西側の平坦地の縁辺で覆鉢形土製品3点が出土した土坑 S K300を検出した。また、鉄器生産関連遺構群の南側の広い範囲に、後世の削平あるいは造成によって古代の瓦類と近世の遺物を大量に包含する堆積層 S X486を確認した。また、竹林の境界溝と考えられる溝 S D201からはひさご形土製品(第111図652・653)が出土した。

掘立柱塼 S A250(第33図) A地区南部の北端で検出した掘立柱塼(4間以上)で、検出長は8mを測る。柱穴掘形は一辺0.6mの隅丸方形ないし直径0.5~0.7mの不整形を呈し、深さは0.15~0.3mを測る。柱痕は直径0.18m、柱間寸法は1.75~2.1mを測る。塼の方位は北に対して35°西に振る。鉄器生産関連遺構群の北側に地形に沿って建てられていることから、区画のための塼であった可能性がある。遺物は出土していない。鉄器生産関連遺構群の北側の遮蔽施設と考えるのであれば、第1期に位置づけられる。

掘立柱塼 S A251(第33図) 掘立柱塼 S A250とほぼ同じ位置で検出した(V-x25・y25、Ⅷ-x1区)掘立柱塼(3間以上)で、検出長は6.2mを測る。柱穴は S A250の各柱穴の間で検出した。柱穴掘形は、S A250の柱穴より一回り小さく、一辺0.5mの隅丸方形ないし直径0.5mの円形を呈する。深さは0.14~0.2mを測る。柱痕は直径0.16m、柱間寸法は0.2~2.1mを測る。S A250と S A251の柱穴には切り合いがなく、遺物も出土していないため先後関係は不明である。塼の方位は北に対して39°西に振る。遺構の時期は不明であるが、S A250と同一の性格を想定できるならば、第1期の遺構である可能性が高い。

土坑 S K267(第34図) 鉄器生産関連遺構群の東側斜面(VI-d23区、標高約40.8~40.5m)で検出した落ち込み状の隅丸方形の土坑である。長辺1.4m、短辺0.9m、深さ0.15mを測る。土坑内から覆鉢形土製品12点(第108図623~634)のほか、平瓦片が数点出土した。覆鉢形土製品の出土状況は、並べられたような状態ではないことから、投棄されたものと考えられる。また、S K267より東側の斜面から覆鉢形土製品は出土していないことから平坦地から流れ落ちたものではないと考えられる。



第34図 土坑SK267・300実測図(1/50)

土坑SK300 (第34図) A地区南部の平坦地東端(VI-e25区)で検出した落ち込み状の楕円形土坑である。長辺3m、短辺1.5m、深さ0.05mを測る。土坑内から覆鉢形土製品3点(第109図635~637)のほか、土器片、瓦片が出土した。出土した平瓦は第II-1期の特徴を有する。

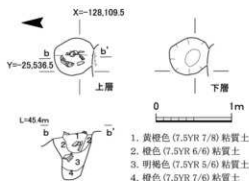
溝SD151 IX-c10区で検出した。長さ4.2m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。埋土から須恵器の杯(第95図270)などが出土した。

柱穴SP441 (第35図) IX-c10区の標高約45mを測る平坦地で検出した。柱穴掘形は直径0.5mの円形を呈し、検出面より深さ0.6mを測る。平瓦片が多量に出土した。

柱穴SP419 直径0.3m、深さ0.15mを測る。軒丸瓦皿型式(第62図16)が出土した。

(村田和弘)

鉄器生産関連遺構群 A地区南部の北半で検出した(IV-a25・b25、V-25、VII-y1~3、IX-a1~3・b1~3・c1・c2区)。周辺は、近現代に大規模な削平や造成を受けており、原地形の大幅な改変が予測されたが、重機による表土及び包含層除去後、炭を多量に含む焼土が一定範囲確認できたことから、南北14m、東西7mの範囲に50cmメッシュの区割りを設定し、遺構の検出と掘削作業を行った。これにより、溝2条、鍛冶炉1基、溶解炉1基、土坑14基、炭窯1基等が確認できた。土坑には鍛冶炉の可能性のある遺構も含まれる。遺構群の辺りは少なくとも2回の整地を行っていることがSX310の東西土層断面から確認できており、これを上層、下層とする。上層遺構は第50図第4層(灰橙色微砂土)上面で検出し、下層遺構は第50図第5層(橙琥珀褐色微砂土)上面で



第35図 柱穴SP441実測図(1/50)

1. 黄橙色(7.5YR 7/8) 粘質土
2. 橙色(7.5YR 6/6) 粘質土
3. 明褐色(7.5YR 5/6) 粘質土
4. 橙色(7.5YR 7/6) 粘質土

検出した。また、整地層は鉄器生産関連遺構群の全面を覆うものではなかったが、整地層が確認できない箇所などでは、遺構の切り合い関係からも少なくとも2時期に大別できることを確認した。上層の遺構群(以下、A期)と下層の遺構群(以下、B期)に分けて詳述する。

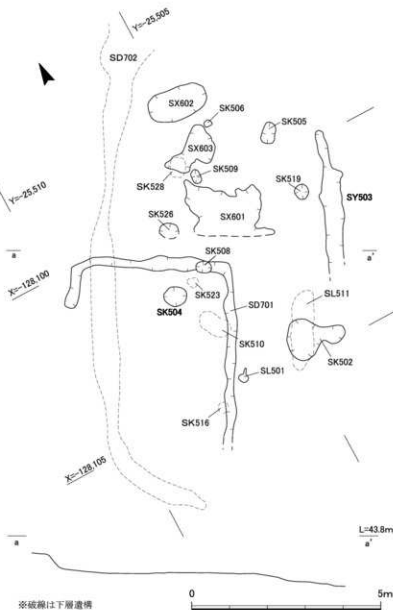
①A期(上層遺構群：第36図)

A期は溝1条、鍛冶炉1基、土坑8基、炭窯1基、落ち込み3基からなる。

溝SD701(第37図) 鉄器生産関連遺構群の南側でコの字形を呈する溝である。北西角で溝SD702を切ることから、SD701が上層にあたるA期の溝であることが判明した。南北4.6m、東西4.5m、幅約0.3m、深さ0.2mを測る。溝の埋土は、ほぼ全面にわたって炭が多量に混じる。北東部には溝の埋没後に土坑SK508が形成された。

鍛冶炉SL501(第38図) 溝SD701の東に隣接する。円形を呈し、北東方向に羽口がとりついていた痕跡が残る。炉本体は焼土で覆われていたが(第1層)、周辺は還元され黒変した層が確認できた(第3層)。炉本体は長径11.0cm、短径9.0cm、深さ2.5cmで、還元部分を含めると長径21.5cm、短径16.0cmを測る。また、炉底には不定形の鉛滓が確認され、付編1(164～180頁)の化学分析報告の通り、鍛錬鍛冶による鉄滓であることが判明した。

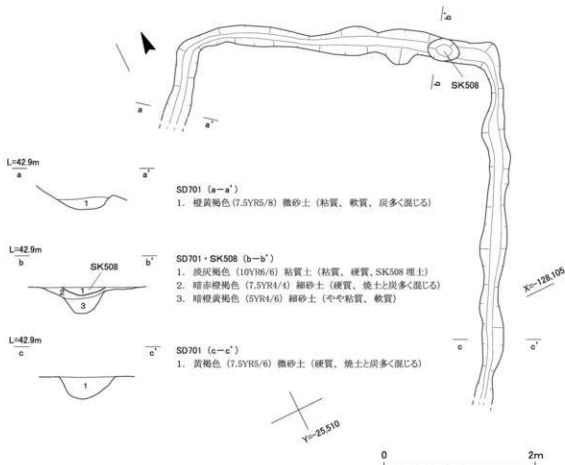
炭窯SY503(第39図) 鉄器生産関連遺構群の北東端に位置する。検出時はしまりのよい淡黄褐色土で覆われており、それを除去すると等高線に平行して炭化した木材と炭層を検出した。さらに炭層を外すと焼土の広がりも確認できた。残存最大長2.5m、残存幅0.6mを確認した。鉄器生



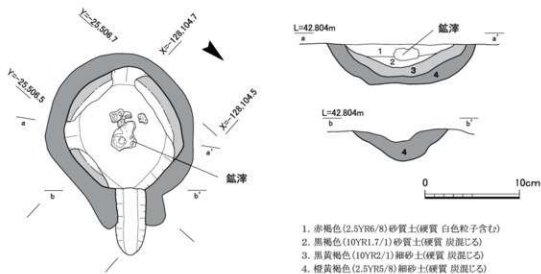
第36図 鉄器生産関連遺構群配置図：A期(1/100)

産間連遺構群の北東端は最も強い削平を受けているが、横口式炭窯の残骸ではないかと推定される。遺構の検出状況からA期でも最終段階の遺構と考えられる。時期を示す遺物は認められない。

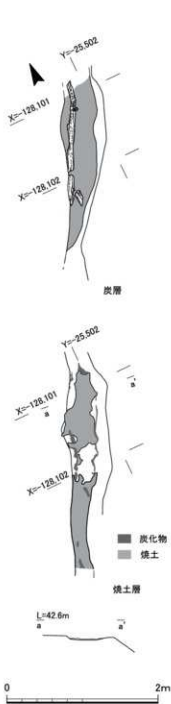
土坑S K 502(第40図) 溝S D 701の東に隣接する。緩斜面で等高線に直交して掘削されており、ひょうたん形の平面形をもつ。全長1.5m、最大径約1 m、最小径0.5m、深さ0.25mを測り、



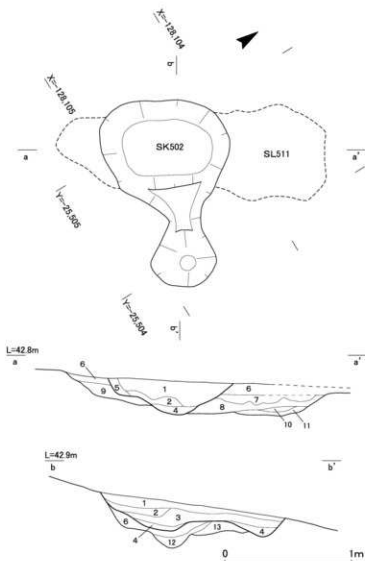
第37図 溝S D 701・土坑S K 508実測図(1/50)



第38図 鍛冶炉S L 501実測図(1/4)



第39図 炭層 S Y 503実測図(1/50)

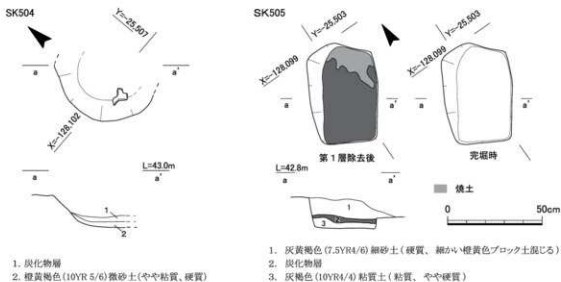


1. 淡黄灰色(10YR 7/6)細砂土(硬質、焼土と炭が多く混じる、SK502埋土)
2. 黄灰色(10YR 5/6)細砂土(硬質、炭多く混じる、SK502埋土)
3. 黄褐色(10YR 5/4)細砂土(やや粘質、硬質、炭わずかに含む、SK502埋土)
4. 炭化物層(SK502埋土)
5. 淡黄褐色(7.5YR 6/8)細砂土(やや粘質、硬質、淡褐色粘質土ブロック含む)
6. 橙褐色(7.5YR 7/6)細砂土(硬質、炭少し混じる)
7. 淡橙褐色(7.5YR 7/4)細砂土(硬質、焼土と炭多く混じる)
8. 淡褐色(10YR 7/4)砂土(硬質)
9. 黄褐色(10YR 5/8)微砂土(やや粘質、やや硬質、小炭混じる)
10. 橙赤褐色(5YR 4/6)細砂土(やや粘質、硬質、炭混じり)
11. 淡橙褐色(7.5YR 5/6)粘質土(やや粘質、硬質、SL511炉壁)
12. 暗橙褐色(10YR 4/6)細砂土(やや粘質、やや硬質、小炭多く混じる)
13. 黄褐色(10YR 6/6)粘質土(粘質、石灰あり)

第40図 土坑 S K 502実測図(1/30)

B期の溶解炉 S L 511と重複する。第1層には小炭が多く混じり、黄褐色細砂土をはさんで、最下層には炭層が確認できた。東側の底部から側壁にかけて地山が強い熱により赤変しており、硬化していた。土師器杯身(第96図294)が出土した。

土坑 S K 504(第41図) 溝 S D 701区画内の北側に位置する。遺構の東半分は擾乱により失われていたが、西半分に当たる直径約0.53m、深さ約0.16mを確認した。また、土師器高杯(第96図



第41図 土坑SK504・505実測図(1/20)

299)が検出時に、内面に暗茶褐色の付着物のある須恵器杯蓋(第96図307)が炭化物層から出土した。鍛冶炉の可能性のある土坑である。

土坑SK505(第41図) 炭層SY503に西接する。隅丸方形の平面形を呈し、長辺0.53m、短辺0.37m、深さ0.15mを測る。最上層は後世の再堆積と考えられる(第1層)。また、SK505には土坑SK504と同じく炭層が確認されたが(第2層)、遺物は認められなかった。鍛冶炉の可能性のある土坑である。

土坑SK506(第42図) 落ち込みSX603の北側に位置する。平面形は長円形を呈し、長径0.2m、短径0.16m、深さ0.02mを測る。土坑内から土師器甕(第96図302)と土師器片、須恵器壺(第96図320)が出土した。検出状況から土坑SK509と対になる可能性を持つ。

土坑SK508(第37図) 溝SD701埋没後に掘削された土坑である。周囲には炭混じりの焼土も確認した。平面形は長円形を呈し、長径0.21m、短径0.15m、深さ0.06mを測る。出土遺物はない。鍛冶炉の可能性のある土坑である。

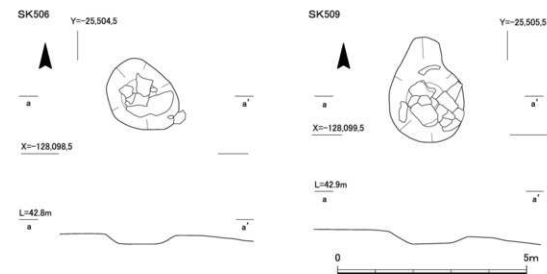
土坑SK509(第42図) 落ち込みSX603の北側に位置する。平面形は変形長円形を呈し、長径0.28m、短径0.2m、深さ0.03mを測る。土坑内から土師器甕(第96図302)と土師器片が出土した。検出状況から土坑SK506と対になる可能性がある。

土坑SK519(第43図) 炭層SY503に西接する。平面形は円形を呈し、直径0.38m、深さ0.29mを測る。出土遺物はない。

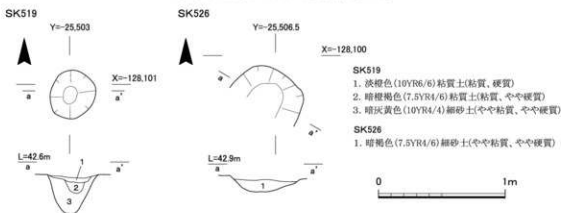
土坑SK526(第43図) 溝SD701の北側で確認した。平面形は、一辺0.6mの隅丸方形に復元でき、深さ0.1mを測る。出土遺物はない。

落ち込みSX601(第36図) 落ち込みSX603に南接する。平面形は不定形で非常に浅く、長辺2m、短辺1.5mを測る。焼土の広がりて、炭を含む。出土遺物はない。

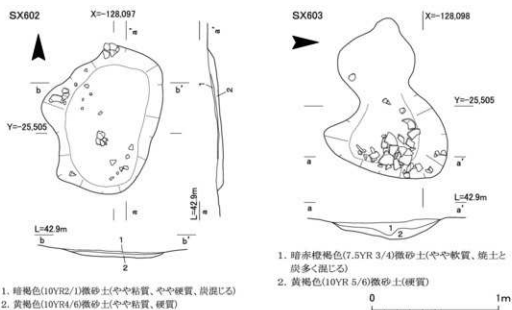
落ち込みSX602(第44図) 鉄器生産関連遺構群の北側に位置し、落ち込みSX603に北接す



第42図 土坑 S K506・509実測図(1/10)



第43図 土坑 S K519・526実測図(1/30)



第44図 土坑 S X602・603実測図(1/30)

る。平面形は長円形で、長径1.18m、短径0.9m、深さ0.02mを測る。埋土には小炭が混じる。土師器高杯(第96図293)・鉢(第96図303)、須恵器杯身(第96図309・312)、桃種1点が出土した。

落ち込みSX603(第44図) 鉄器生産関連遺構群の北側、土坑SK506と土坑SK509の間に位置する。平面形はひょうたん形に復元できるが、西半分は削平によりほとんど残存していない。全長1.24m、短径約0.98m、深さ0.1mを測る。埋土には焼土と炭が大量に混じる。落ち込みの東半分では土師器杯(第96図292)・甕(第96図301)、須恵器杯身(第96図311)・長頸壺(第97図319)が出土しており、とくに壺は少なくとも3個体分(第97図320～322)が出土した。

②B期(下層遺構群：第45図)

B期は溝1条、溶解炉1基、土坑5基からなる。

溝SD702(第46図)

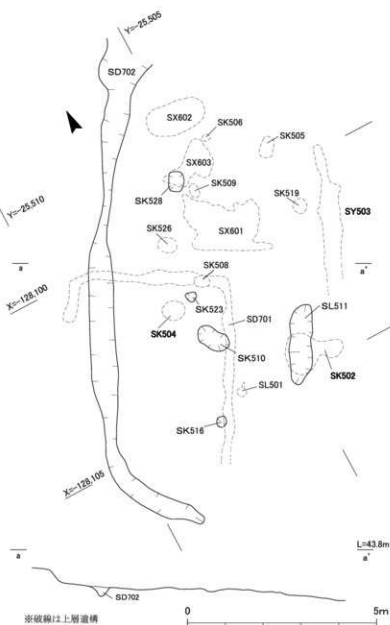
鉄器生産関連遺構群の西端でコの字形を呈する溝である。南北11.6m、東西2.2m、幅0.15～0.6m、深さ0.3mを測る。溝SD701とは異なり、断面V字状溝で、埋土に炭が混入しない。出土遺物はない。

溶解炉SL511(第47図)

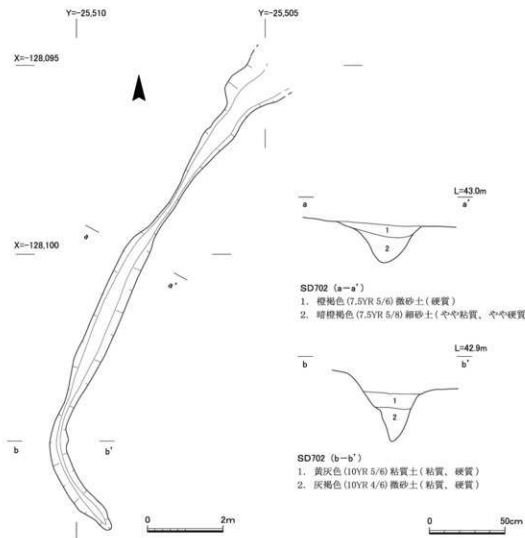
鉄器生産関連遺構群の東端で等高線に平行して造られており、土坑SK502の下層で検出した。平面形は隅丸方形で、長辺2.1m、短辺0.7mを測る。炉の北側では大量の鉾滓が認められ、その下では円形の被熱痕が認められた。分析は行っていないが鉾滓は銅の溶解に伴うものと考えられ、溶解炉と考えられる。土師器高杯(第96図296)・鉢(第96図305)が出土した。

土坑SK510(第48図)

鉄器生産関連遺構群の南



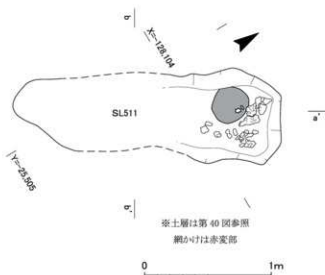
第45図 鉄器生産関連遺構群配置図：B期(1/100)



第46図 溝 S D702実測図(1/100・1/25)

側に位置し、東端をA期の溝 S D701に切られる。土坑周辺にも焼土が広がり、土坑南端は擾乱により粘土質層の堆積が見られ(第6・7層)、平面形は復元し難い状況にあった。平面形は隅丸方形であったと推測され、長辺0.6m、短辺0.5mを測り、深さは0.05mである。鍛冶炉の可能性のある土坑である。小型の須恵器壺(第96図316)が出土した。

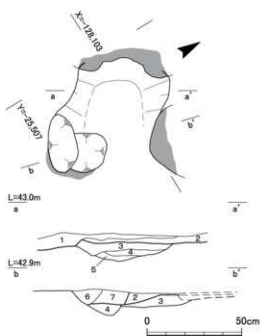
土坑 S K 516(第49図) 鉄器



第47図 溶解炉 S L511実測図(1/30)

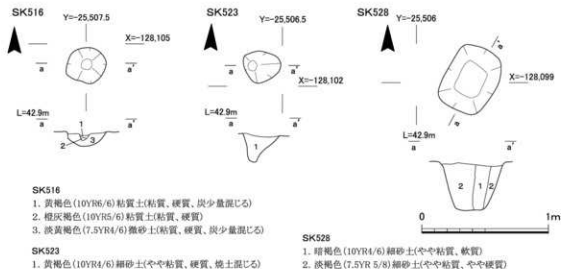
生産関連遺構群の南側に位置する。平面形は円形で、直径0.31m、深さ0.1mを測る。埋土には炭が混じる。出土遺物はない。

土坑SK523(第49図) 鉄器生産関連遺構群の南側に位置し、土坑SK510に北接する。平面形は長円形を呈し、長径0.29m、短径0.25m、深さ0.21mを測る。埋土には焼土が混じる。出土遺物はない。



1. 淡橙褐色(7.5YR 5/6)微砂土(硬質、焼土と灰わずかに含む、整地層)
2. 赤褐色(5YR 4/8)微砂土(硬質、焼土、整地土)
3. 黒褐色(10YR 2/2)微砂土(やや粘質、軟質、伊埋土)
4. 橙褐色(7.5YR 4/6)微砂土(やや粘質、軟質、伊埋土)
5. 暗橙褐色(7.5YR 3/4)微砂土(硬質、伊埋土)
6. 淡黄褐色(10YR 6/6)粘質土(粘質、硬質、炭混じる)
7. 淡灰褐色(10YR 6/4)粘質土(粘質、硬質、炭混じる)

第48図 土坑SK510実測図(1/20)



- SK516
1. 黄褐色(10YR6/6)粘質土(粘質、硬質、炭少量混じる)
 2. 橙灰褐色(10YR5/6)粘質土(粘質、硬質)
 3. 淡黄褐色(7.5YR4/6)微砂土(粘質、硬質、炭少量混じる)

- SK523
1. 黄褐色(10YR4/6)細砂土(やや粘質、硬質、焼土混じる)

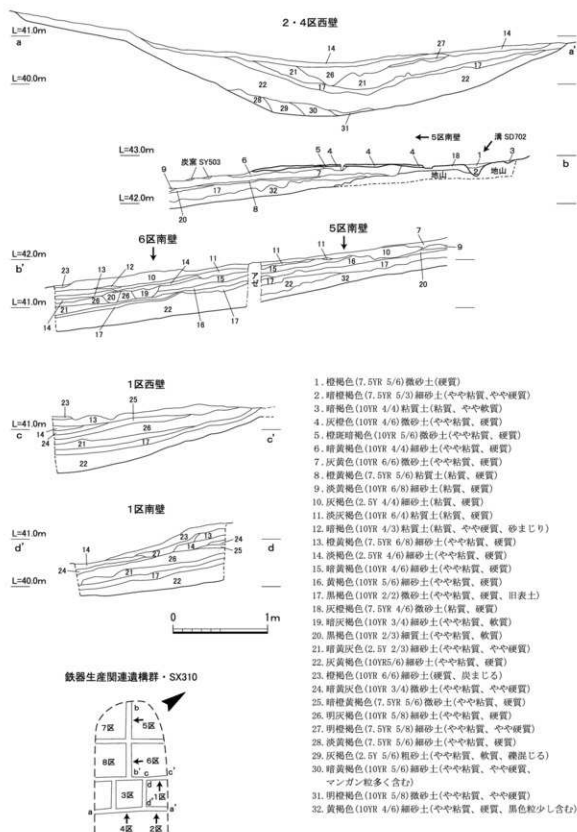
土坑SK528(第49図) 鉄器生産関連遺構群の北側に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長径0.52m、短径0.4m、深さ0.36mを測る。出土遺物はない。

(関広高世)

堆積層SX310(第32・50図) 鉄器生産関連遺構群の東側斜面の堆積層中から多くの土器が出土したことから、SX310として遺構番号を与え遺物の取り上げを行った。また、断面観察の結果、鉄器生産関連遺構群及び堆積層SX310の下層には、古い谷状地形SD294があることがわかった。

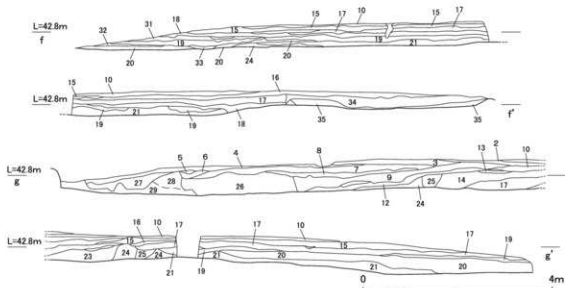
鉄器生産関連遺構群及び堆積層SX310の断面観察に当たっては、模式図のとおり8つに区画を分け、5・6区の南面と6区の東面、1区の南面、2・4区の西面を図化した。なお、2区の南面および3区と8区を分ける畔は調査中に崩落したため図化

第49図 土坑SK516・523・528実測図(1/30)



1. 橙褐色(7.5YR 5/6)微砂土(硬質)
2. 暗褐色(7.5YR 6/3)細砂土(やや粘質、やや硬質)
3. 暗褐色(10YR 4/4)粘質土(粘質、やや軟質)
4. 灰褐色(10YR 4/6)微砂土(やや粘質、硬質)
5. 橙灰暗褐色(10YR 5/6)微砂土(やや粘質、硬質)
6. 暗黄褐色(10YR 4/4)細砂土(やや粘質、硬質)
7. 灰黄色(10YR 6/6)微砂土(やや粘質、硬質)
8. 橙黄褐色(7.5YR 5/6)粘質土(粘質、硬質)
9. 淡黄褐色(10YR 6/8)細砂土(粘質、硬質)
10. 灰褐色(2.5Y 4/4)細砂土(粘質、硬質)
11. 淡灰褐色(10YR 6/4)粘質土(粘質、硬質)
12. 暗褐色(10YR 4/3)粘質土(粘質、やや硬質、砂まじり)
13. 橙黄褐色(7.5YR 6/8)細砂土(やや粘質、硬質)
14. 淡褐色(2.5YR 4/6)微砂土(やや粘質、硬質)
15. 暗黄褐色(10YR 4/6)細砂土(やや粘質、硬質)
16. 黄褐色(10YR 5/6)細砂土(やや粘質、硬質)
17. 黑褐色(10YR 2/2)微砂土(やや粘質、硬質、肌表土)
18. 灰褐色(7.5YR 4/6)微砂土(粘質、硬質)
19. 暗灰褐色(10YR 3/4)細砂土(やや粘質、軟質)
20. 黑褐色(10YR 2/3)粗質土(やや粘質、軟質)
21. 暗黄灰色(2.5Y 2/3)細砂土(やや粘質、やや硬質)
22. 灰黄褐色(10YR5/6)細砂土(やや粘質、硬質)
23. 橙褐色(10YR 6/6)細砂土(硬質、炭まじり)
24. 暗黄灰色(10YR 3/4)微砂土(やや粘質、やや硬質)
25. 暗黄褐色(7.5YR 5/6)微砂土(やや粘質、硬質)
26. 明灰褐色(10YR 5/8)細砂土(やや粘質、硬質)
27. 明橙褐色(7.5YR 5/8)細砂土(やや粘質、やや硬質)
28. 淡黄褐色(7.5YR 5/6)細砂土(やや粘質、硬質)
29. 灰褐色(2.5Y 5/6)粗砂土(やや粘質、軟質、礫混じり)
30. 暗黄褐色(10YR 5/6)細砂土(やや粘質、やや硬質、マンガン粒多く含む)
31. 明橙褐色(10YR 5/8)微砂土(やや粘質、やや硬質)
32. 黄褐色(10YR 4/6)細砂土(やや粘質、硬質、黒色粒少し含む)

第50図 A地区南部鉄器生産関連遺構群・堆積層S X310断面図(1/40)



- | | | |
|---|-------------------------------------|---|
| 1. 黄色 (2.5Y 8/6) 粘性砂質土 (瓦混入) | 11. 灰白色 (5YR 8/1) 砂質土 | 24. 浅黄褐色 (10YR 8/3) 砂 |
| 2. 黄褐色 (10YR 8/6) 粘性砂質土
(褐色ブロック含む) | 12. 灰白色 (10YR 8/2) 砂 | 25. 黄褐色 (7.5YR 7/8) 粘質土 |
| 3. にぶい褐色 (5YR 7/4) 粘質土 | 13. にぶい褐色 (7.5YR 7/3) 砂 | 26. にぶい褐色 (7.5YR 7/4) 粘質土
(にぶい褐色 (5YR 6/4) 粘質土のブロック含む) |
| 4. 褐色 (5YR 7/6) 粘質土
(白色ブロックを含む) | 14. にぶい褐色 (7.5YR 6/4) 粘質土 | 27. にぶい褐色 (5YR 7/4) 粘質土
(白色ブロックを多く含む) |
| 5. にぶい褐色 (5YR 7/3) 粘質土
(白色ブロックを含む) | 15. 明赤褐色 (2.5YR 7/2) 粘質土 | 28. 灰白色 (5YR 8/2) 砂 |
| 6. 明褐色 (5YR 7/2) 砂 | 16. にぶい褐色 (7.5YR 7/3) 砂質土 | 29. 灰白色 (5YR 8/1) 砂 |
| 7. にぶい褐色 (5YR 6/4) 粘質土
(赤色土を含む) | 17. 灰赤色 (10R 6/2) 粘質土
(白色砂を少量含む) | 30. にぶい褐色 (7.5YR 7/4) 粘質土 |
| 8. にぶい褐色 (7.5YR 7/4) 粘質土
(白色ブロックを含む) | 18. 淡赤褐色 (2.5YR 7/4) 粘質土 | 31. にぶい褐色 (7.5YR 6/4) 粘質土 |
| 9. 褐色 (5YR 7/6) 粘質土 | 19. 明褐色 (7.5YR 7/1) 砂質土 | 32. にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 砂質土 |
| 10. 黄褐色 (10YR 8/6) 粘質土 | 20. 明褐色 (5YR 7/2) 砂
(褐色ブロック含む) | 33. にぶい褐色 (7.5YR 6/3) 砂質土 |
| | 21. 黄褐色 (7.5YR 7/8) 砂質土 | 34. 浅黄褐色 (7.5YR 8/4) 粘土 |
| | 22. にぶい褐色 (5YR 7/3) 粘質土 | 35. 灰白色 (7.5YR 8/1) 砂 |
| | 23. 褐色 (5YR 7/6) 粘質土 | |

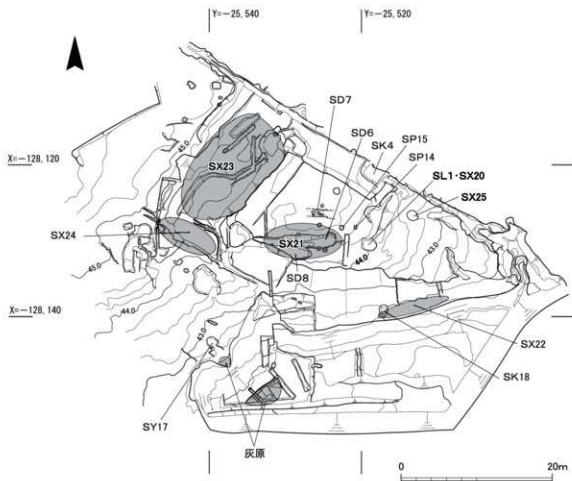
第51図 堆積層 S X 486土層断面図(1/80)

できなかった。

第4・6層は、鍛冶炉などを設置した際の整地層と考えられる。第7層の灰黄色微砂土上面で炭窯 S Y 503を検出した。第10層の上面で須恵器杯 G 蓋(第98図344~346)が出土した。S X 310は第7~10・18・20層に相当する。

谷状地形 S D 294(第32・50図) 鉄器生産関連遺構群および堆積層 S X 310の下層で検出した。検出長35m、最大幅10m、深さ0.1~5.8mを測る。谷の堆積の旧表土層は黒褐色微砂土(第17層)で、腐植土に混じり弥生土器片が出土した。さらに、第22・32層からも弥生土器片が出土している。弥生土器のほかに遺物が出土していないことから、弥生時代以降徐々に埋没したと思われる。

堆積層 S X 486(第51図) A地区南部の標高約43mの平坦地で東西20.2m、南北18mの範囲に厚さ約0.6mの堆積層を確認した。白灰色系の砂と橙色系の土が交互に堆積しており、下層で地山を検出したが、遺構は確認できなかった。この堆積層中には古代の瓦類や土製品、近世遺物が混在している状況であり、瓦を多量に含んだ遺構あるいは包含層を近世以降に大きく改変したと考えられる。土製品には用途不明のT字形を呈した土製品2点(第113図667・668)、鳥のくちばしのような形をした用途不明土製品1点(第113図666)、覆鉢形土製品1点(第109図644)、ひさご



第52図 B地区遺構配置図(1/500)

形土製品1点(第111図661)などがある。

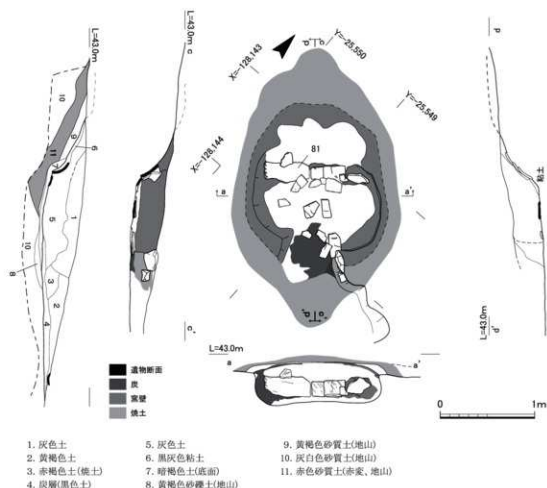
瓦集中箇所 S X 487 K-b7区において表土直下の斜面の堆積土から軒丸瓦を含む多量の瓦が集中して出土した。(村田和弘)

(4) B地区(第52図)

調査地北半中央でトレンチ調査で確認した瓦溜り S X 21のほか溝3条、溶解炉1基、ピット2基、土坑1基、落ち込み1基を検出した。周辺は江戸時代以降の開発により、大きく削平・攪乱されており、その際に出土した瓦が集められたと考えられる瓦集中箇所 S X 22~24を確認した。これら瓦集中箇所やA地区との境で検出した土坑 S K 4は江戸時代の遺構であるが、奈良時代の瓦が多数含まれていた。

また、調査地南西部の谷状地形から平坦地へ移る傾斜変換点付近で美濃山1号窯(瓦窯 S Y 17)を、谷地形の斜面東部で土坑 S K 18を検出した。S K 18の直上には江戸時代以降の里道があった。以下、主な遺構について報告する。

美濃山1号窯(瓦窯 S Y 17)(第53図) 美濃山廃寺の立地する丘陵平坦面から南側の谷地形に向かう斜面で検出した(IV-j13区)。窯窓で、焼成部は後世に削平され、燃焼部のみが遺存していた。



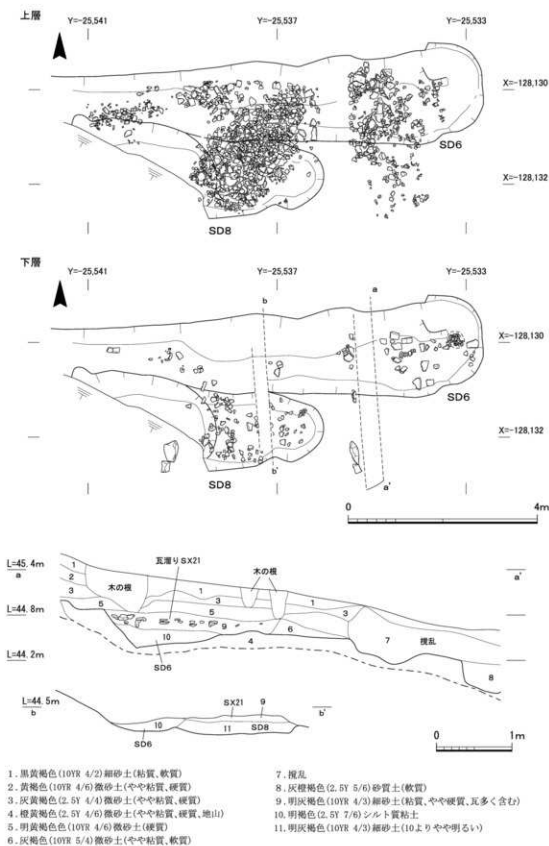
第53図 美濃山1号窯(瓦窯SY17)実測図(1/40)

方位は北に対して43°西に振る。残存する規模は、方位方向の残存長0.92m、燃焼部の幅1.28mで、残存高は0.36mである。窯の周囲の灰白色砂質土(地山)は、被熱により幅0.1~0.6mほどの範囲が赤色に変色していた(第53図第11層)。窯の内部から丸瓦や平瓦の破片が多数出土した。

焚き口部は幅10.5mである。焚き口右側には20cm大の石が壁に埋め込まれていた。左側に石材は確認できなかったが抜き取られたものと考えられる。焚き口部の前方には炭を含む黒褐色土があり、1m先に土師器皿(第95図266)1点が正位置で出土した。

燃焼部から焼成部へ向かう階部分は45°程度(高低差20cm)の角度で立ち上がる。焼成部の階上部及び焼成部は削平されていて確認できなかった。燃焼部と焼成部の境となる階部分には厚さ2cm程度の粘土(第53図第6層)が方位に直交して貼り付けられており、その上に平瓦が横方向に据えられていた。焚き口から階に向かって左端の平瓦は、軒平瓦I b型式(第69図81)である。ほか2点は平瓦である。出土した瓦類等からSY17は第I期に位置づけられる。

焚き口部から南東3mほどで谷状地形の斜面となるが、その手前に灰原の一部が残存していた。また、谷状地形の中には黒色土が半円状に堆積しており、谷の斜面が後世に崩落したものであることから灰原の二次堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。



第54図 瓦溜り S X 21、溝 S D 6・8実測図(1/80・1/100)

瓦溜り S X 21 (第54図) 調査地中央の平坦地から谷地形の緩斜面に移る傾斜変換点付近 (IX-g・h9~12区) で検出した。東西16m、南北2.3mの範囲に大量の瓦類が集中して出土しており、その中には鴟尾 (第87図139) が1点含まれていた。瓦の他に土師器皿も出土した。油煙痕が付着したものがあり、灯火器と考えられる。下層で溝 S D 6 を検出した。

溝 S D 6 (第54図) 瓦溜り S X 21 の下層で検出した。長さ8.6m、幅1.8m、深さ0.2mを測り、断面形は弧状である。底の標高は44.2mである。埋土は明灰褐色細砂土である。南西部は江戸時代の掘削によって削平されていた。東側は緩やかに浅くなっており、この地点で終息する。溝の東部では、北側から埋没したと考えられる土師器皿が数10点出土した。油煙痕が付着したものもあり、灯火器と考えられる。第I期ないし第II期に掘削された可能性が高いが、埋没時期は定かでない。

溝 S D 7 (第52図) 瓦溜り S X 21 の北方4.2mの位置で検出した (IX-j5~7、j5~7区)。東西方向の溝で、両端とも削平されていた。長さ2m、幅0.8m、深さ0.3mを測り、断面形は弧状である。埋土は明褐色シルト質粘土で、溝 S D 8 と同じである。瓦片が少量出土した。溝 S D 6 と平行しており、一対の溝であった可能性がある。但し、S D 7 の底の標高は44.7mで、S D 6 の方が一段低い。第I期に位置づけられるのは間違いないが、埋没時期は定かではない。

溝 S D 8 (第54図) 瓦溜り S X 21 掘削後にその下層において溝 S D 6 と重複して検出した (IX-g10区)。重複関係から S D 8 のほうが古い。長さ5.4m、深さ0.2mである。断面形は弧状である。埋土は淡褐色土である。南西部は江戸時代の掘削によって削平されていた。瓦片が少量出土した。第I期に位置づけられる。

土坑 S K 4 (第52図) A 地区との境 (IX-e・8区) で検出した方形の土坑である。北部は里道によって削平されている。検出長さ5m、幅7.5mを測る。奈良時代の瓦が多量に出土したが、江戸時代の遺物も含まれており、江戸時代の土坑と考えられる。

土坑 S K 18 (第52図) 谷地形の斜面に堆積した瓦集中箇所 S X 22 の下層 (IX-k7区) で検出した円筒形の土坑である。直径1.3m、深さ2mである。内側の壁は一部焼けたようで、赤く変色していた。埋土から多量に瓦類が出土した。瓦類以外の遺物は出土しなかった。美濃山廃寺廃絶時、あるいは修復時にともなう瓦類の廃棄土坑と考えられる。第II期以降に位置づけられる。

柱穴 S P 14 (第52図) 溝 S D 6 と溶解炉 S L 1 の間で検出した、一辺0.5m、深さ0.5mの方形の柱穴である。柱痕跡は直径0.2mを測る。出土遺物がなく、時期は不明である。

柱穴 S P 15 (第52図) 溝 S D 6 と溶解炉 S L 1 の間で検出した、一辺0.4m、深さ0.4mの方形の柱穴である。柱痕跡は直径0.2mを測る。出土遺物がなく、時期は不明である。柱穴 S P 14 とは柱筋が揃うが、この2基のほかに柱穴は確認できず、建物等は復元できなかった。

落ち込み S X 25 (第52図) 溶解炉 S L 1 の東側 (IX-g6区) で検出した。長さ1.8m、幅1.3m、深さ0.15mの楕円形の土坑状落ち込みである。多数の瓦が含まれていたが、遺構かどうか判断しがたい。

瓦集中箇所 S X 22 (第52図) 調査地南東部 (IX-j5・6区) を通る江戸時代以降の里道の下で検出

した。長さ7.5m、幅1.9m、厚さ0.2mの範囲に大量の奈良時代の瓦が包含されていた。西端は土坑SK18と重複しており、SK18の方が古い。瓦の一部は里道の砂利として再利用されていた。里道掘削時もしくはそれ以前に出土した瓦が集められたものと考えられる。

瓦集中箇所S X 23 (第52図) 瓦集中箇所S X 21の北東で検出した(IX-e11~13, f11~13, g11~13区)。長さ15m、幅8.5m、厚さ1.4mの範囲に奈良時代の瓦が大量に包含されていた。付近は江戸時代に大きく掘削されており、その際に出土した瓦が集められたものと考えられる。

瓦集中箇所S X 24 (第52図) 瓦集中箇所S X 23の南西に隣接して検出した(IX-i11~14, h11~14区)。長さ9m、幅3m、厚さ0.2mの範囲に大量の奈良時代の瓦が包含されていた。江戸時代の遺物が少量含まれること、江戸時代以降の里道が隣接することから里道掘削時に出土した瓦を集めたものと考えられる。

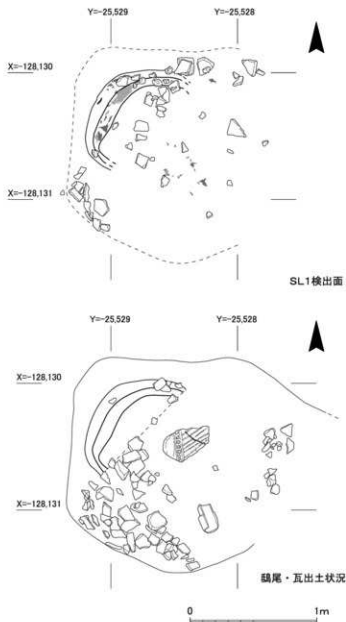
(伊野近富)

青銅器生産関連遺構 溝S D 6の東側(IX-h8区)で検出した。緩斜面で検出した落ち込みS X 20内に溶解炉S L 1を確認した。

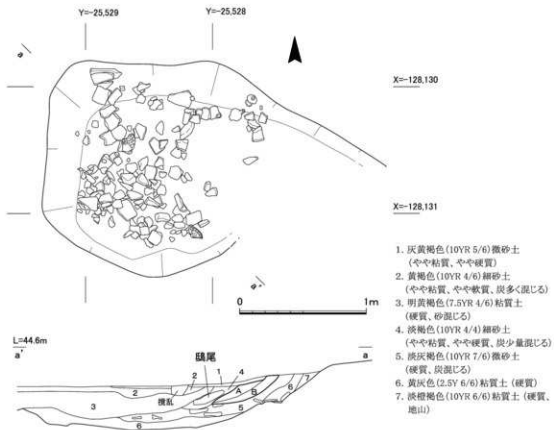
落ち込みS X 20 (第55・56図)

平面形は不整形で、東西約2.5m、南北約1.6m、深さ約0.35mを測る。この落ち込みの北西隅で溶解炉S L 1を確認した。

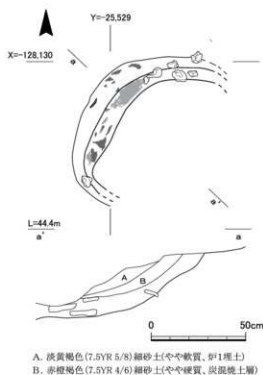
中央にサブトレンチを設定し、S L 1本体の埋土と操業、破壊後に堆積した埋土(第2・3層)及び遺物を確認しながら掘削を進めたところ、炉本体の東端で鵝尾と大量の瓦が出土した(第4層)。分布状況などから、これらは炉操業後投棄されたものと考えられる。次に炉本体(A・B層)を除去すると軒丸瓦、丸・平瓦などとともひさご形土製品が出土した(第111図)。これらは炉操業以前にこの落ち込みに流れ込み、または投棄



第55図 落ち込みS X 20実測図1 (1/30)



第56図 落ち込み S X20実測図2 (1/30)



第57図 溶解炉 S L 1 実測図(1/20)

されていたものと考えられ、結果として炉の下部構造として利用された可能性が高い。

溶解炉 S L 1 (第57図) 平面は長径約0.7mの長円形に復元できる。操業後に炉を破壊しているため短径は復元できないが、残存していた部分は約0.1mを測る。残存していた炉本体の深さは約0.15mである。また、炉周辺には焼土と炭も確認でき、銅塊、炉壁、丸・平瓦やわずかながらガラス滓(図版第49付編 M N Y-3)も出土した。

(関広尚世)

4) 出土遺物

(1) 瓦類

① 軒瓦の型式分類

今回の発掘調査で出土した軒瓦は軒丸瓦222点、軒平瓦65点である。これらを型式分類すると、軒丸瓦9型式、軒平瓦3型式である。さらに、細部の違いにより1～3小型式に分類できる。今回の分類は、八幡市教育委員会の美濃山廃寺第1～5次調査報告⁽⁸⁹⁾と、同志社大学歴史資料館による美濃山廃寺報告⁽⁹⁰⁾を基本的には踏襲し、今回の調査成果を加えて設定したものである。なお、今回の調査では軒丸瓦I c・V型式及び軒平瓦Ⅲ型式は出土していないため、説明は省略する。

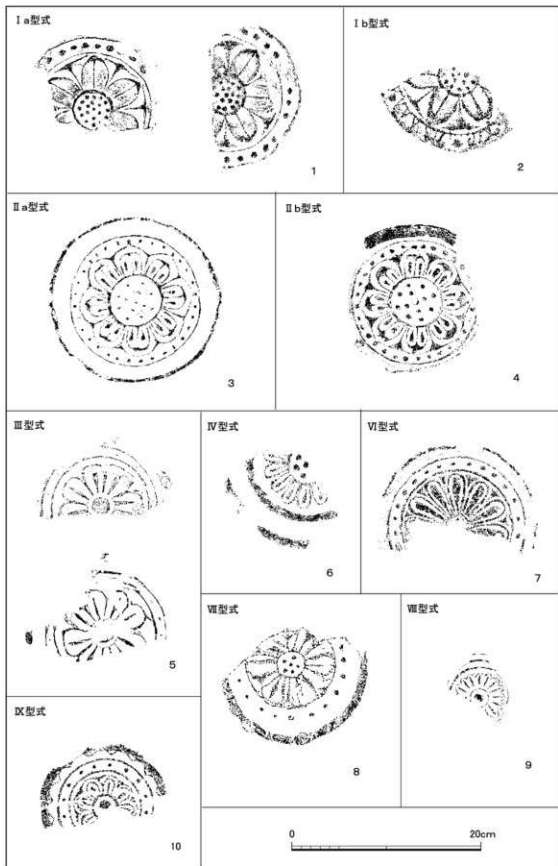
a. 軒丸瓦の分類

I a 型式(第58図1) 単弁六葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当径は16cm前後に復元できる。蓮弁は中央に稜線を入れ、根元が窪み、弁端にいくに従って徐々に反り上がる、受け花状で、6弁である。中房の蓮子は1+6+16である。外区には大粒の珠文が密に巡る。瓦当と筒部は、瓦当裏面上端で接合する。接合部である瓦当裏面にはヘラにより刻みを入れる。瓦当部側面はケズリあるいはナア、裏面の調整はナアである。色調は黒灰色を呈し、胎土は密で、焼成は不良気味なものが多い。胎土にはほとんど砂粒を含まず、軟らかい印象を受ける。大阪府枚方市九頭神廃寺と同文様である⁽¹⁰⁾。ただし、九頭神廃寺の瓦当径は17.1cm前後と美濃山廃寺のものよりも一回り大きいのが特徴である。

I b 型式(第58図2) 単弁六葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当径は16cm前後に復元できる。I a 型式の外区に線鋸歯文を施す。瓦当と筒部は、瓦当裏面上端で接合する。瓦当裏面の調整はナア、瓦当側面は縦方向のケズリである。瓦当部上面はナア、丸瓦筒部凸面はケズリ、凹面は布目である。八幡市出土例は線鋸歯文が圏線上にはみだしており、I a 型式の范に手を加えた可能性が指摘されている⁽¹¹⁾。胎土、焼成、色調はほぼI a 型式に準じる。

II a 型式(第58図3) 複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。美濃山廃寺で最も多い軒丸瓦である。瓦当径は16.5cm前後に復元できる。中房の蓮子は1+4+8である。外縁は斜縁である。外区には鋸歯文は認められないが、数点に鋸歯文をナア消し残した痕跡があるので、もっとも古い范には鋸歯文が施されていたと考えられる。外区には圏線と珠文を巡らせるが、珠文帯の内側には圏線がない。弁端はよく反っており、間弁も突出している。焼成は須恵器のように硬質なもの、軟質なもの両方がある。瓦当面のみ遺存しており、玉縁部は欠損しているが、有段式の縄目タタキ痕が残る丸瓦筒部が接合している。瓦当との接合部は補填粘土を上側に貼り付けているが、その接合面には接合しやすいうように、ヘラにより縦筋を入れている。色調は灰色で、胎土は灰色砂や白色砂を多く含む。中房の蓮子数は異なるが、類例として奈良県久米寺瓦窯出土の複弁六葉蓮華文軒丸瓦がある⁽¹²⁾。瓦当裏面には布目があり、外区には鋸歯文がある。

II b 型式(第58図4) 複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。外縁は直縁である。II a 型式の斜縁を削った范で直縁としたと考えられる。ほかはII a 型式と同じである。これと同文様の瓦は八幡市の志水廃寺、西山廃寺(足立寺跡)で出土している⁽¹³⁾。



第58図 美濃山廃寺出土軒丸瓦分類図

Ⅲ型式(第58図5) 単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房は小さな半球状を呈し、弁外郭と弁央を凸線で表現する。外区には間隔広く小さな珠文を巡らし、外縁は直立する。瓦当径15.3cmを測り、瓦当厚は3.4～3.7cmとぶ厚い。八幡市報告例⁽⁸¹¹⁾では、瓦当裏面には丸瓦部まで布目が連続しており、横置きの本作り丸瓦である。色調は黄色から黄灰色である。胎土は褐色砂などを多く含む。

Ⅳ型式(第58図6) 単弁十四葉軒丸瓦である。瓦当径17cmを測る。外縁は突出しており、その内側にも、もう一重突出しており、外区は二重で幅広い角の丸い凸線で構成されている。復元すると14葉で中房の蓮子は1+5であったと考えられる。瓦当と筒部は瓦当裏面上端で接合する。瓦当裏面、側面の調整はナデである。胎土は粗く、焼成は不良で、茶褐色を呈する特徴的な瓦である。この瓦と同文様は八幡市西山廃寺と枚方市百済寺跡に類例が認められる。⁽⁸¹³⁾

Ⅴ型式(第58図7) 単弁十二葉蓮華文軒丸瓦である。6葉現存しているが、復元すると12葉である。外縁は低い斜縁で、線鋸歯文を施す。外区には二重の圏線が巡り、その間に珠文が密に巡る。中房は小さく、八幡市表探例⁽⁸¹⁰⁾では中房の蓮子は1+6である。瓦当厚は2.8cmとぶ厚い。接合と裏面調整については、瓦当と筒部は、瓦当裏面上半分で接合される。調整は、接合部に充填した部分はナデ、他の瓦当裏面はケズリである。色調は黒灰色で、断面は灰色である。砂粒を多く含む。平城宮6135Aと同范もしくは同文様である可能性がある。奈良市法華寺でも出土し、南山城地域では木津川市鹿山寺で出土している。⁽⁸¹⁷⁾平城瓦編年のⅡ-2期(729～745年)である。

Ⅵ型式(第58図8) 単弁十一葉蓮華文軒丸瓦である。色調は灰白色で、焼成は軟質である。特徴的な瓦であるが、表面はかなり摩滅しており、調整については不明である。中房は小さく、1+5の蓮子がある。山背国分寺KM11と同文様である。⁽⁸¹⁸⁾八幡市志水廃寺、京田辺市興戸廃寺・普賢寺跡でも出土している。⁽⁸¹⁹⁾

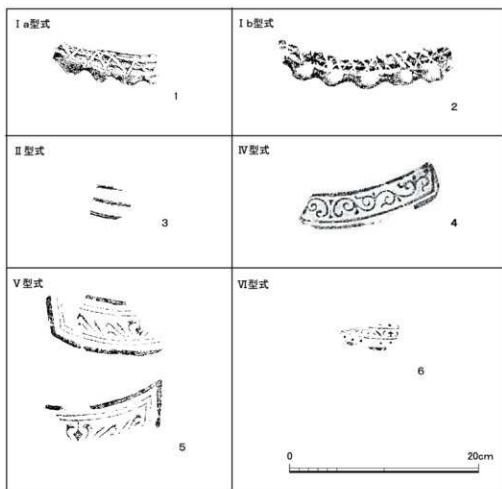
Ⅶ型式(第58図9) 単弁十六葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当は復元径15cmを測る。外縁は突出しており、直立縁ではあるが、内側の角は丸い。外区には二重の圏線がある。内区は4葉以上の蓮華文がある。弁は独立しておらず、弁の根元から中央までは稜線を入れ、弁端は別々に表現している。中房は遺存していない。瓦当と筒部は、瓦当裏面上端で接合される。瓦当裏面の調整はナデである。色調は黒灰色である。胎土は砂粒を多少含む。

Ⅷ型式(第58図10) 単弁蓮華文軒丸瓦である。外縁はやや丸く突出している。斜面に線鋸歯文を施す。外区には二重の圏線があり、その間に珠文を配置する。蓮弁は復元すると8葉ある。中房は小さな半球状を呈し、弁外郭と弁央を凸線で表現する。この型式は、第7次調査で出土しているが、第6次調査では出土していない。

b. 軒平瓦の分類

I a型式(第59図1) 波状重弧文軒平瓦である。瓦当面に3～4条の凹線を施した後、ヘラで鋸歯文を施す。頸部は3.2～3.4cm間隔に指頭で強く押さえて波状にする。焼成はやや不良で、還元焼成である。奈良県久米寺瓦窯出土のものに類例がある。⁽⁸²⁰⁾

I b型式(第59図2) 波状重弧文軒平瓦である。瓦当面に3～4条の凹線を施した後、ヘラで×



第59図 美濃山廃寺出土軒平瓦分類図

印を密に施す。これらの文様は范に彫られていたものではなく、直に施文している。頸部は3.6cm間隔に指頭で強く押さえ波状の文様を施す。焼成はやや甘く軟質である。色調は茶褐色である。この波状重弧文軒平瓦は奈良県久米寺瓦窟出土のものに類例がある⁽²¹⁾。

I c 型式 波状重弧文軒平瓦である。瓦当面に3～4条の凹線を施した後、ヘラで×印を大きく粗く施す。これらの文様は范に彫られていたものではなく、直に施文している。頸部は3.2～3.4cm間隔に指頭で強く押さえ波状の文様を施す。焼成は硬質である。色調は灰色である。A地区で1点のみ出土した。

II 型式(第59図3) 重弧文軒平瓦である。三重重弧文と見られ、弧の先端は尖り気味の形状である。八幡市分類では桶巻き作りで凸面平行タタキ、硬質のものをII a、凸面縄目タタキ、軟質で1枚作りの可能性があるものをII b 型式とする。今回の調査ではII b 型式が出土しなかったため、ここではII 型式とした。

IV 型式(第59図4) 唐草文軒平瓦である。同范は八幡市志水廃寺にあり、同文は山背国分寺跡で出土している⁽²²⁾。第9次調査美濃山2号窯の灰原から出土している。美濃山2号窯例は外区上辺を省略し、右側辺上部が狭くなっている。第6・7次調査では出土していない。

V 型式(第59図5) 唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向したC字の中央に花頭形を配置する。

外区の圏線は2重で、唐草文は両側に2転する。

VI型式(第59図6) 均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向したC字で、その中にクルス文を置く。外区に珠文を配する。第9次調査美濃山2号窯の灰原から出土している。美濃山廃寺も含めて、美濃山2号窯以外の出土例はいまだ知られていない。

②軒瓦

B地区瓦溜りS X21出土軒瓦(第60図1～3) 1は軒丸瓦I b型式である。瓦溜りS X21から出土した。瓦当面は、珠文間に鮮明な線鋸歯文を施す。瓦当面の一部から、平瓦部は124cm残存する。胎土は粗く、色調は灰色である。平瓦部の凸面はケズリで、凹面は布目痕がある。2は軒丸瓦II a型式である。瓦溜りS X21から出土した。瓦当面にある中房の蓮子は1+4+8である。瓦当面は凹凸があり、立体的である。瓦当裏面はナデである。色調は淡褐色で、白色砂を含む。瓦当と平瓦部との接合は外周の半分に及ぶ。3は軒平瓦II型式である。瓦溜りS X21から出土した。三重弧文である。平瓦部凹面は布目痕が一部残存している。外面は黒灰色で、断面は青灰色で、焼成は良好である。

B地区溶解炉S L 1出土軒瓦(第60図4～6) 4は軒丸瓦I a型式である。外面は黒灰色から灰色で、断面は黄白色である。5・6は溶解炉S L 1の最下層から出土した。5は軒丸瓦I a型式である。焼成は不良である。瓦当裏面には平瓦部との接合のためにヘラで刻みを入れている。他はナデである。6は軒丸瓦I b型式である。拓本ではわからないが、珠文間に線鋸歯文を施した痕跡がすかすかに認められる。色調は少し黄色味があった灰色である。瓦当裏面にはナデを施す。

A地区土坑S K 300出土軒瓦(第60図7) 7は軒平瓦I a型式である。瓦当面には三重弧文を施し、平瓦部の上面は布目で、下面はナデである。

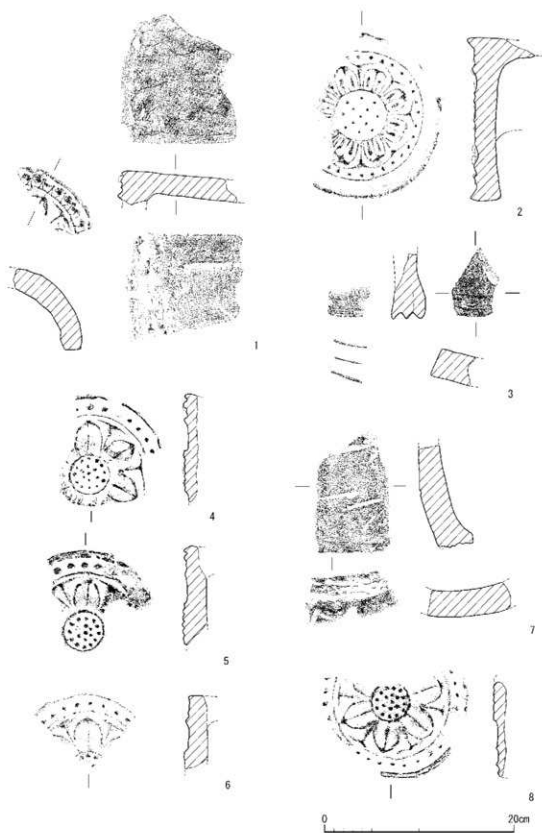
A地区溝S D 054出土軒瓦(第60図8) 8は軒丸瓦I a型式である。全体的に摩滅が著しい。

B地区土坑S K 18出土軒瓦(第61図9～第62図15) 9は軒丸瓦I b型式の小破片である。10は軒丸瓦II b型式である。色調は灰色で、微細な白色砂を少量含む。瓦当裏面には平瓦部との接合のためにヘラで刻みを入れている。11は軒丸瓦II a型式である。瓦当面は全面残存している。瓦当裏面にはナデを施す。12は軒丸瓦VI型式である。瓦当面は、外縁は低い斜縁で、范による鋸歯文を施す。表面は灰黒色で、断面は黄褐色である。灰色砂の中には1cm大のものも含む。瓦当裏面には粗い指ナデを施す。13は軒平瓦I b型式である。平瓦部凹面は布目、平瓦部凸面は縄タタキである。14は軒平瓦I b型式である。15は無文の軒平瓦である。平瓦部凹面は布目、平瓦部凸面は、瓦当面に近いところはナデで、それより離れたところは縄タタキである。

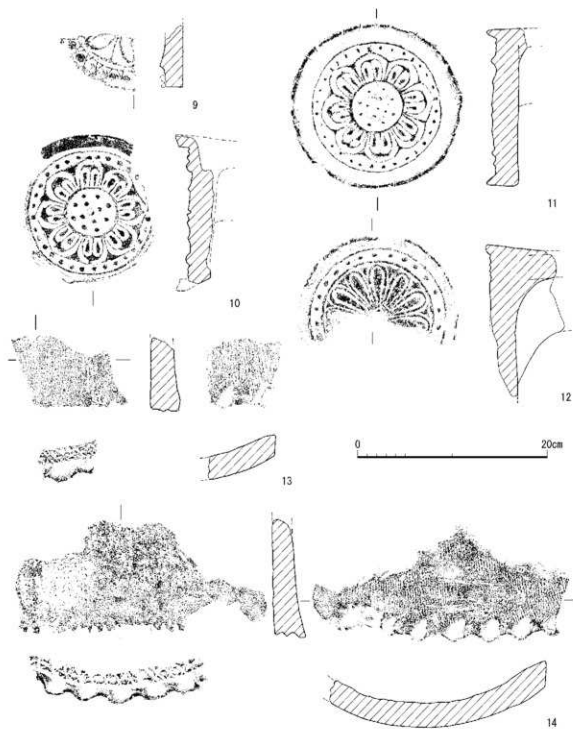
A地区柱穴S P 419出土軒瓦(第62図16) 16は軒丸瓦VII型式である。全体的に摩滅している。

A地区溝S D 069出土軒瓦(第62図17) 17は軒平瓦I a型式である。摩滅が著しいが平瓦部凸面は縄タタキである。

B地区瓦集中箇所S X23出土軒瓦(第62図18～第63図22) 18は軒丸瓦VかVI型式である。IX-h13区で出土した。小破片で摩滅が著しい。瓦当面は、外縁は高く、手びねり様で歪んでいる。外区に圏線と珠文を巡らせる。色調は青灰色で、やや硬質である。胎土は練りこんでおり、縞状



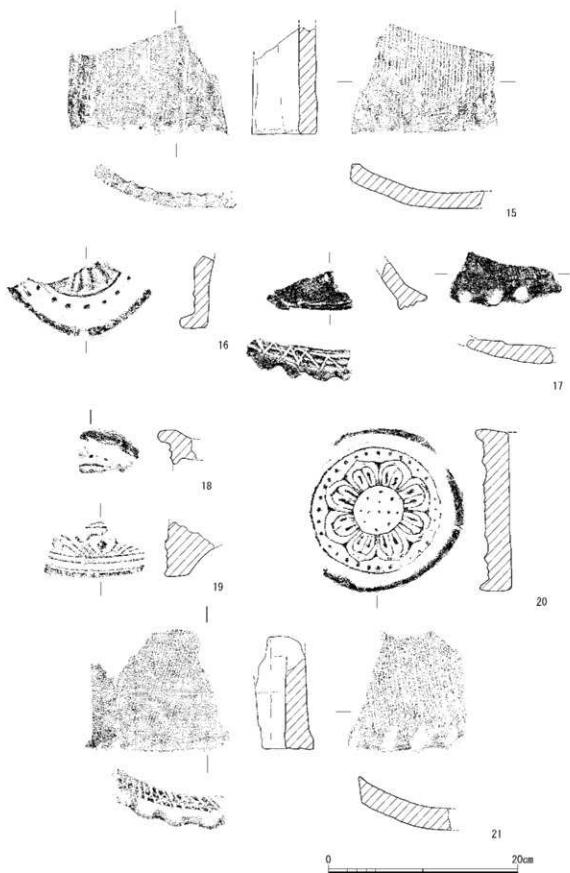
第60圖 遺構出土軒瓦実測圖1(1/4)



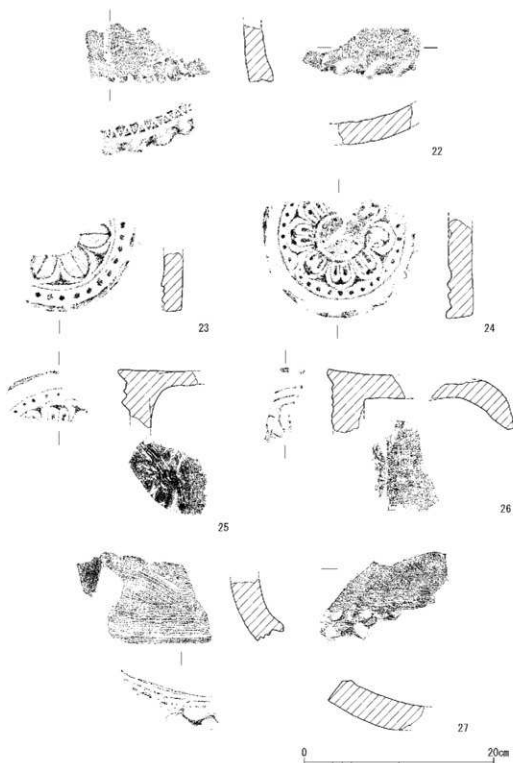
第61図 遺構出土軒瓦実測図2 (1/4)

である。19は軒平瓦V型式である。IX-h14区で出土した。A・B両地区でこれ1点のみである。表面は黒灰色で、断面は灰色である。20は軒丸瓦II a型式である。IX-j6区で出土した。瓦当裏面には平瓦部との接合のためにヘラで刻みを入れている。21・22はIX-j7区で出土した。21は軒平瓦I b型式である。平瓦部凹面は布目、平瓦部凸面は縄タタキである。22は軒平瓦I a型式である。

A地区瓦集中箇所S X 487出土軒瓦(第63図23~27) 23は軒丸瓦I a型式である。24・25は軒丸瓦II a型式である。25は瓦当裏面にはナデを施すが、棒状工具を使用している可能性がある。



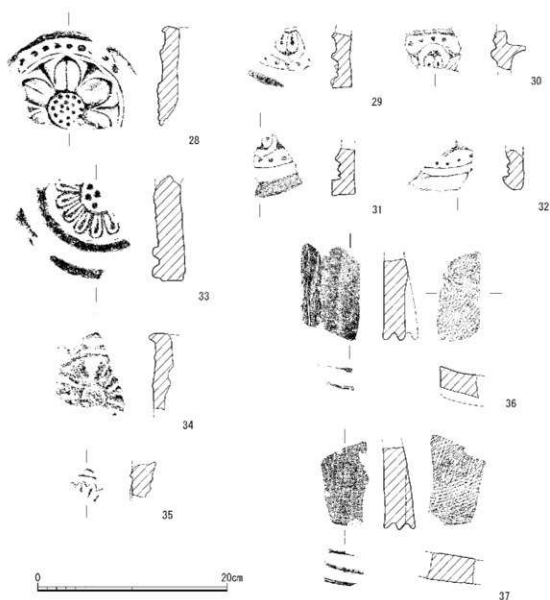
第62図 遺構出土軒瓦実測図3(1/4)



第63図 遺構出土軒瓦実測図4 (1/4)

26は軒丸瓦Ⅲ型式である。瓦当面には珠文が認められる。27は軒平瓦Ⅰa型式である。頸部上面は粗いケズリ、平瓦部凹面は布目を施す。平瓦部凸面には指オサエとナテが認められる。

B地区土坑SK4東側上層出土軒瓦(第64図28~37) 28は軒丸瓦Ⅰa型式である。29は軒丸瓦Ⅱa型式、30は軒丸瓦Ⅱ型式、31は軒丸瓦Ⅱb型式である。32は軒丸瓦で型式不明である。外縁

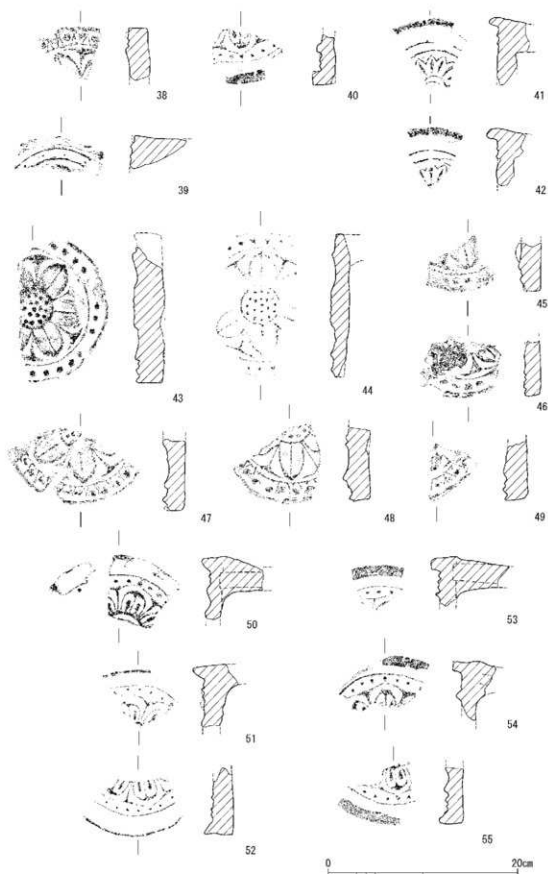


第64図 遺構出土軒瓦実測図5 (1/4)

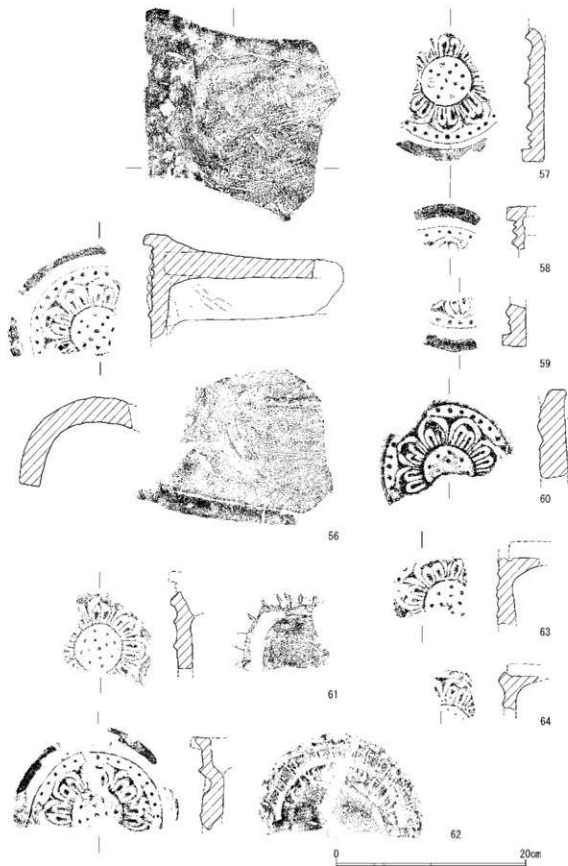
は欠損している。外区には珠文を施す。33は軒丸瓦Ⅳ型式である。外面は橙褐色や灰褐色である。胎土は粗く、1～2mmの白色砂を含む。外区は2重の幅広の角の丸い凸線で構成されているが、もともと外側は平坦である。34は軒丸瓦Ⅶ型式である。拓本では不鮮明だが、外区に珠文が3か所認められる。焼成は軟質で、練りこんだ粘土が縞状となっている。色調は黄色がかった灰白色である。中房は窪んでいる。35は軒丸瓦Ⅷ型式である。外面は黒色で、断面は灰色である。36・37は軒平瓦Ⅱ型式である。いずれも三重弧文で、平瓦部凹面は布目、凸面は縄タキである。

B地区S X 25周辺出土軒瓦 (第65図38～42) 38は軒丸瓦Ⅰb型式である。39は軒丸瓦Ⅲ型式で、外区には珠文が4か所認められる。色調は黄白色である。40は軒丸瓦Ⅱb型式である。41・42は軒丸瓦Ⅷ型式である。

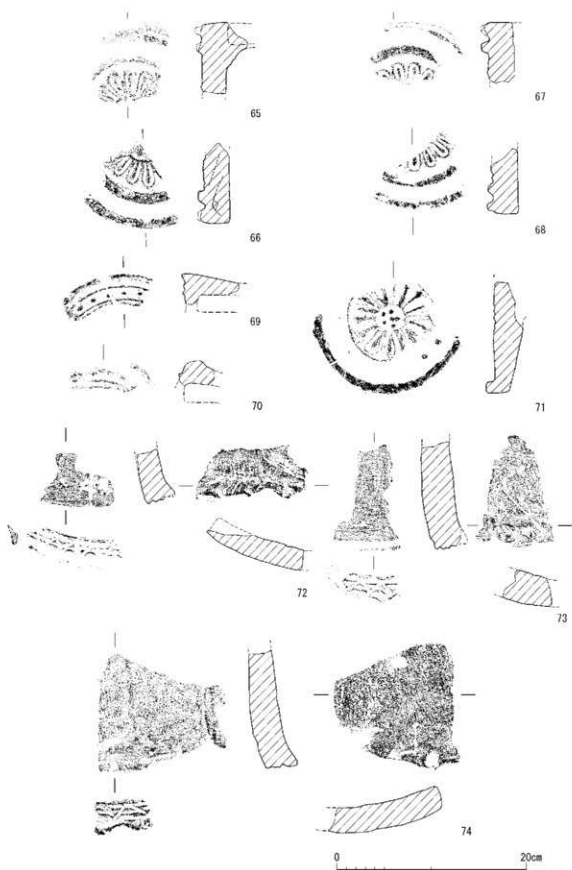
遺物包含層出土軒瓦 (第65図43～第68図80) 43～46は軒丸瓦Ⅰa型式である。43はA地区V-r20区周辺で、44はA地区IX-c3区で出土した。瓦当裏面にはナアを施す。45はA地区IX-e3区付



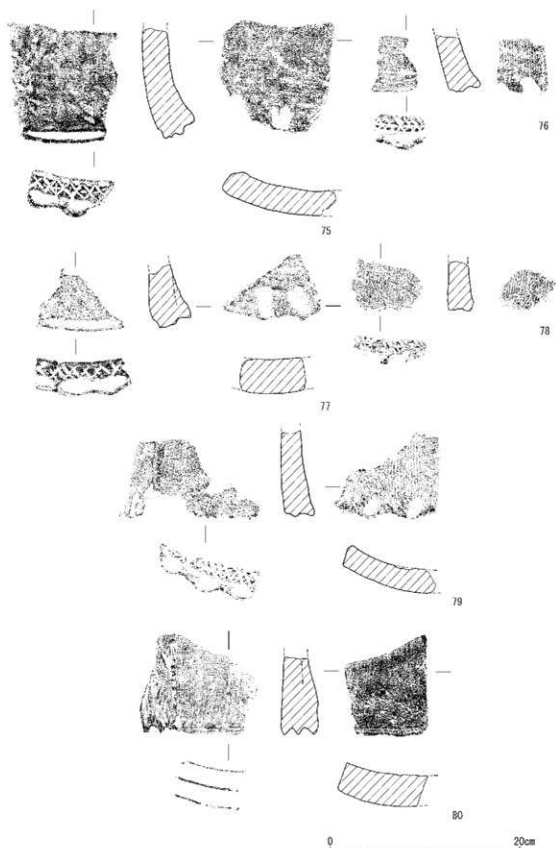
第65図 遺物包含層出土軒瓦実測図1(1/4)



第66図 遺物包含層出土軒瓦実測図2 (1/4)

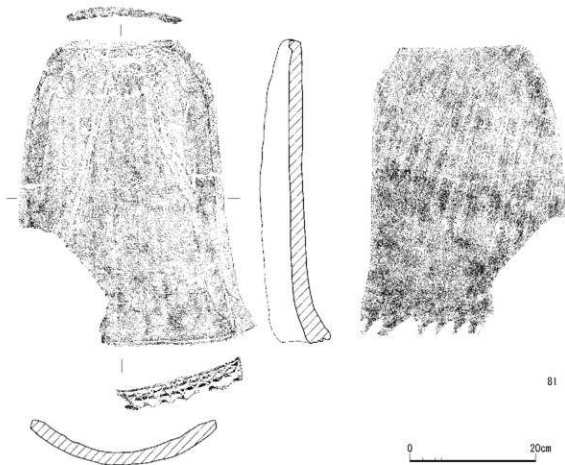


第67図 遺物包含層出土軒瓦実測図3(1/4)



第68図 遺物包含層出土軒瓦実測図4(1/4)

近南東平坦地で、46はB地区10トレンチ東端排水溝から出土した。47～49は軒丸瓦Ⅰb型式である。47はA地区Ⅸ-e3区付近南東平坦地、48はB地区10トレンチ近世里道で出土した。49はA地区7トレンチ西側崖精査中に出土した。50～52は軒丸瓦Ⅱa型式である。50はB地区10トレンチ北方精査中に、51はA地区Ⅸ-f6区、52はA地区V-m21区辺りで出土した。53～64は軒丸瓦Ⅱb型式である。ただし、60・61・63・64は瓦当と丸瓦部の接合方法からⅡb型式と判断した。53はA地区Ⅸ-b～e、2～7区周辺で出土した。54はB地区Ⅸ-i5の近世包含層から、55はB地区Ⅸ-i9区で出土した。瓦当裏面には粗いナデを施す。56はB地区Ⅸ-e11区包含層から出土した。丸瓦部凹面は布目を施す。丸瓦部凸面は平行タタキのちナデが認められる。57はA地区Ⅸ-8区、58はB地区包含層、59はB地区Ⅸ-e11区包含層から出土した。60はA地区中央部土坑S X059、61はA地区Ⅸ-a13、b13周辺の精査で出土した。62は軒丸瓦Ⅱb型式である。B地区9・10トレンチ南北畔北半上層で出土した。63は軒丸瓦Ⅱ型式である。B地区東区北側攪乱から出土した。64はB地区Ⅸ-h10区近世包含層から出土した。外区は平瓦との貼り付け部分で欠損している。この部分には刻みを入れている。65～68は軒丸瓦Ⅳ型式である。65はB地区Ⅸ-d10区包含層から出土した。外面は黒灰色、断面は黄白色である。砂粒多く含む。66はB地区Ⅸ-e11区包含層から出土した。67はB地区10トレンチ、68はB地区Ⅸ-e11区包含層から出土した。69は軒丸瓦Ⅵ型式と思



第69図 美濃山1号窟出土軒平瓦実測図(1/6)

われる。B地区9トレンチから出土した。70は軒丸瓦で型式不明である。A地区IX-f6区で出土した。71は軒丸瓦Ⅴ型式である。B地区の西北端、第7次調査地との境で出土した。表面には竊状の黒い線が入る。中房部が窪む。

72～74は軒平瓦Ⅰa型式である。72はA地区IX-b5区周辺で出土した。平瓦部凹面は布目、平瓦部凸面は縄タキのちナデである。73はA地区IX-f6区で出土した。波状部は欠損している。平瓦部凹面は布目、平瓦部凸面はナデである。74はA地区Ⅷ-b5区周辺で出土した。平瓦部凹面は布目、平瓦部凸面は摩滅している。75～79は軒平瓦Ⅰb型式である。75はA地区IX-i3区で出土した。76は軒平瓦Ⅰb型式である。A地区1トレンチから出土した。77はB地区IX-f13区から出土した。78はB地区IX-i13区で出土した。79はA地区IX-c6区で出土した。80は軒平瓦Ⅱ型式である。B地区9・10トレンチ北方で出土した。

B地区美濃山1号窯(瓦窯SY17)出土軒瓦(第69図81) 81は軒平瓦Ⅰb型式である。燃焼部と焼成部の境となる階部分に貼り付けていた窯体構築物である。今回出土した瓦の中で最も残存率が高い。平瓦部凹面は布目、平瓦部凸面はナデである。凹面側両端は幅1.5～2.2cmの範囲にケズリを施している。色調は黒灰色で2次焼成を受けている。

(伊野近富)

③丸瓦・平瓦の型式分類

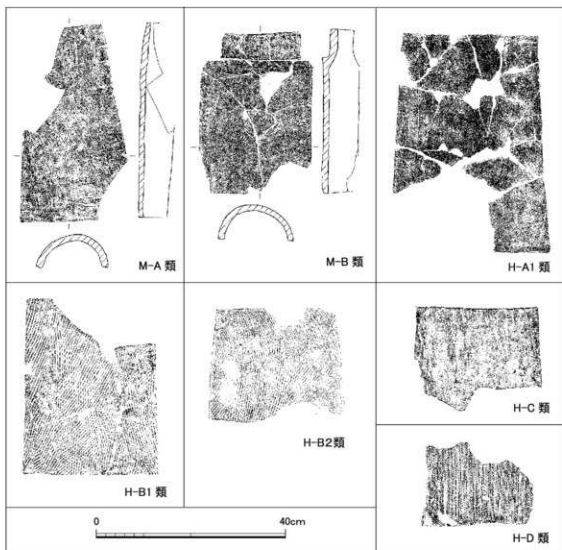
丸瓦・平瓦の分類に当たっては、まず、一辺5cm程度以下の小破片をすべて検討の対象外とした。これらの破片資料は、製作技法や凸面の調整痕などが判明する場合でも、分類は行わなかった。これらは、すべて5cm以下として、一括して重量の計測を行った。次に5cm以上の破片について、丸瓦、平瓦、判別不明のいずれかに分類し、丸瓦、平瓦それぞれについて細分を行った。なお、出土した瓦については、以下に述べる分類を行ったのちに、遺構ごとに出土量の重量計測を行った。ただ、分類作業においては、確実に分類可能なもののみを対象したため、分類不明のものが相当量生じている。

a. 丸瓦の分類(第70図) まず形態上の分類として、狄端側の玉縁の有無によって、無段式(=M-A類、いわゆる行基式)、有段式(=M-B類、いわゆる玉縁式)の2つに大別するとともに、破片の残存状況によってはどちらも判断できないものの3種に分類した。

上記の分類ごとに、製作技法として、粘土板成形(=1類)か粘土組成形(=2類)かを確認し、やはり判別できないものと合わせて3種類に分類した。さらに凸面の調整として、平行タキもしくは縄タキを施した後、全面にナデを施すもの(=a類)と、ナデを施さないもの(=b類)に分類した。

以上の記号の組合せにより、丸瓦を2種8型式に分類した。ただし、実際には細分できない破片も多く、特に2類とb類の確認例はあまりない。また、破片資料が多く、そもそもM-A類なのかM-B類なのかさえ判別できなかったものが多い。

b. 平瓦の分類(第70図) 平瓦については製作技法上の相違により、桶巻作りか一枚作りかということについて判定する必要があるが、残存状況等により、判別しにくいいため、分類基準とし



第70図 丸瓦・平瓦分類図

では凸面の調整により、まず分類することとした。

凸面の最終調整から、ナデのもの(=H-A類)、平行タタキのもの(=H-B類)、縄タタキのもの(=H-C類またはH-D類)、その他の調整を施すもの、不明のもの大きく6種に分類した。以下ではこれらの各分類ごとに特徴がみられることから個別に説明する。

H-A類 基本的に凸面全面にナデを施すものである。確認できたものはすべて桶巻作りであった。ナデに先行してタタキが施されているものの、確認できる個体は少ない。タタキには平行タタキや縄タタキが確認できる。ナデの方向によって次の2類に細分した。

H-A1類 凸面全面に縦方向のナデを施すもので、焼成はやや軟質で、色調は赤褐色を呈するものが多い。焼成の軟質なものは淡橙褐色を呈する。

H-A2類 凸面に施されるナデの方向が縦方向以外のもの。明らかに縦方向と判別できなかったものも含むものとする。

H-B類 基本的に凸面全面に平行タタキまたは格子タタキを施すものである。前者には一方

にタタキを施すものや、タタキを交差させて、菱形状の文様を作り出すもの、平行タタキの後に縄タタキを施すものなどがある。確認できたものはすべて桶巻作りであった。

H-B1類 凸面全面に平行タタキを施すもの。タタキの原体の長さは5～7cmのものが多く、タタキを施す方向は同一方向のものや交差させるものなど多様である。

H-B2類 凸面に平行タタキを施した後、縄タタキを施すもの。縄タタキは平行タタキの上に部分的にしか施されないことが多い。

H-B3類 凸面に格子タタキを施すもの。美濃山廃寺全体における出土量はわずかである。

H-C類 凸面に縄タタキを施し、桶巻作りと判断されるものである。縄タタキは、桶巻作りに伴い弧状を呈し、1つ1つの縄タタキの原体の長さが4～6cmと、H-D類の縄タタキ原体に比較すると短いものが多い。成形技法として粘土板を巻き付けるもの(1類)と、粘土紐を巻き付けるもの(2類)に細分が可能である。

H-C1類 粘土板による桶巻作りのもの。

H-C2類 粘土紐による桶巻作りのもの。

H-D類 凸面に縄タタキを施し、一枚作りと判断されるものである。縄タタキの原体の長さは20cm前後と、H-C類の縄タタキ原体に比べると長いものが多い。また、杵板痕が認められるものと、杵板痕が認められないものがある。ただ、製作技法の点から詳細な細分基準を抽出することができなかったため、細分は行っていない。

以上の4種が主要な平瓦の分類であるが、稀なものとして凸面にケズリを施すものがある。美濃山廃寺における類例が乏しいため、詳細を明らかにできないが、これをH-E類とする。

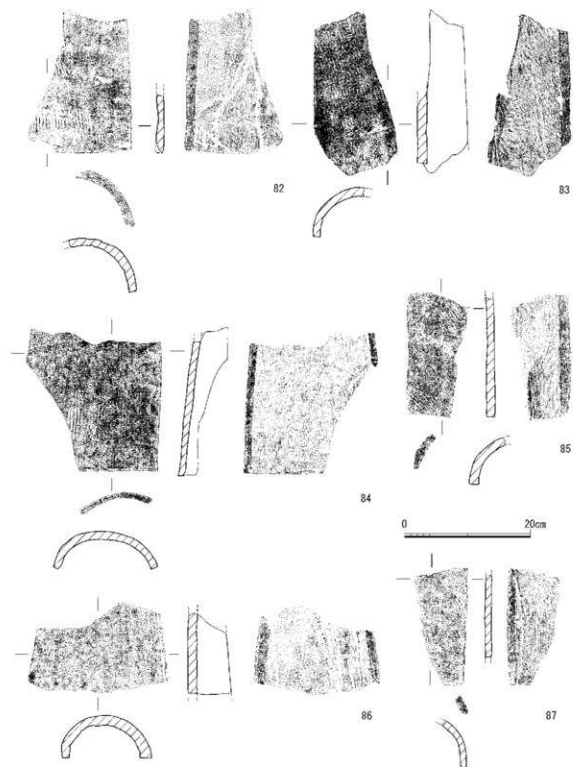
以上のような分類により、平瓦を5種8型式に分類した。

④丸瓦・平瓦

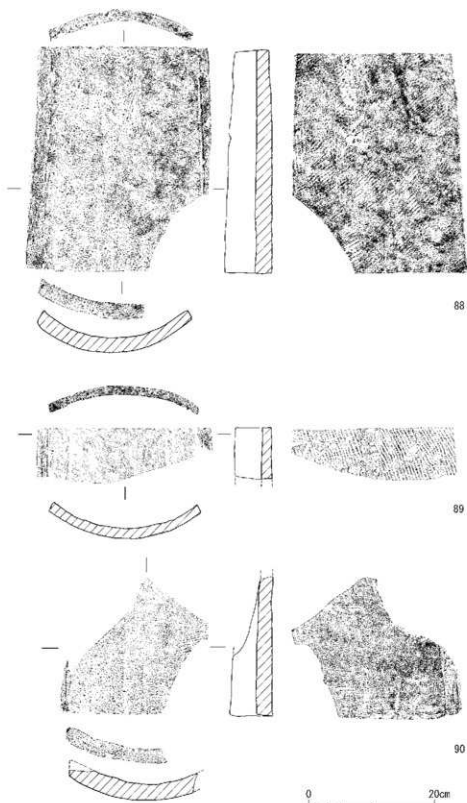
第6次調査で出土した丸瓦・平瓦について、前項で示した分類基準にしたがって、型式の分類を行った。報告は、遺構ごとの出土傾向を重量で示し、代表的なものについては図示した。

B地区美濃山1号窯(SY17)出土瓦類(第71図82～第73図96) 出土総量は15.3kgである(内訳は丸瓦4.1kg、平瓦11.2kg)。窯内の出土遺物であることから焼け歪んだものも多くみられるが、瓦の形態や調整等は後述する瓦溜りSX21で出土したものに類似する。丸瓦はM-A類かM-B類か、判別のできる資料がみられなかったが、瓦溜り出土資料(第74図97・99、第76図103など)との比較から、いずれもM-A類と推定される。82～84・87は焼け歪みが著しく、本来の大きさなどが不明である。86は本来の形状が残っていると思われるが、狭端面・広端面とも残っていない。径は14.2cmである。丸瓦はいずれも凸面に平行タタキないし縄タタキを施した後、原則として全面にナデを施す。ただし、ナデ残っているものが多い。凹面には布目が明瞭に残り、86や87には布の綴じ合わせ目などがみられる。82は凹面に粘土板の糸切り痕が認められる。側縁はケズりで仕上げるが側端面のみで、凹面側にケズリを施すものはない。

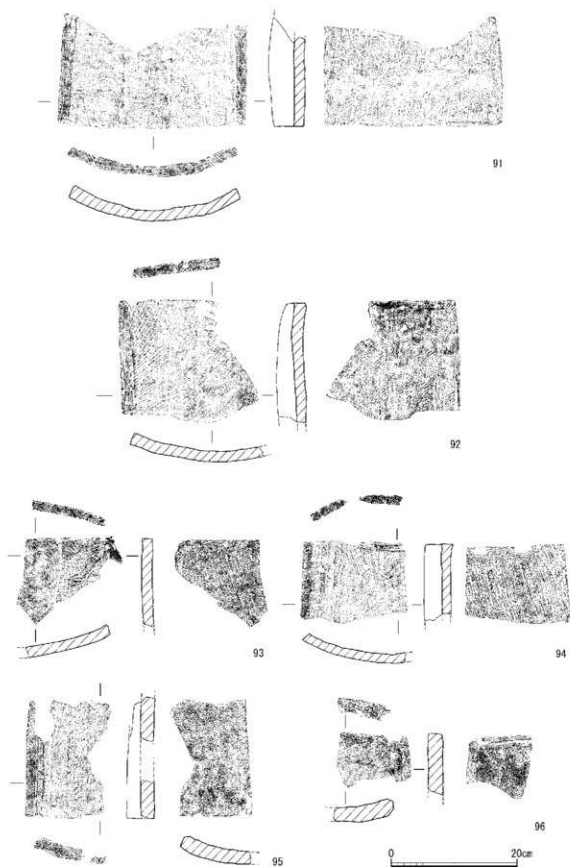
平瓦はH-B類とH-C1類が多く、H-A類などは不明確である。H-B類もしくはH-C1類を主体的に焼成した可能性が高い。88はH-B1類の平瓦で、広端面の直角を欠損するものの、平瓦の大きさ



第71図 美濃山1号窯出土土瓦実測図(1/6)



第72図 美濃山1号窯出土平瓦実測図1(1/6)



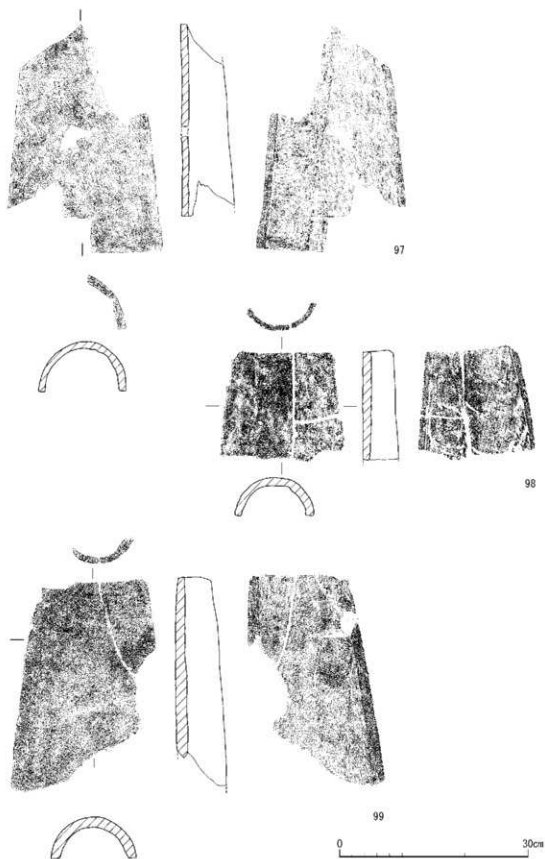
第73図 美濃山1号窯出土平瓦実測図2(1/6)

がほぼわかる資料である。全長35.5cm、狹端幅21.2cm、推定広端幅25.8cmである。側縁と両端面はケズリを施す。欠損部を除く重量は4.5kgである。91～94はH-C1類である。91は凸面の縄タタキの一部をナデ消すようである。広端面幅25.8cm、残存長18.0cmである。93は焼け歪んでいるようで、やや扁平な形状を呈している。凹面に布の綴じ合わせ目を確認できる。96は凸面がケズリの際に生じるような砂粒の移動がみられることからH-E類の可能性はある。

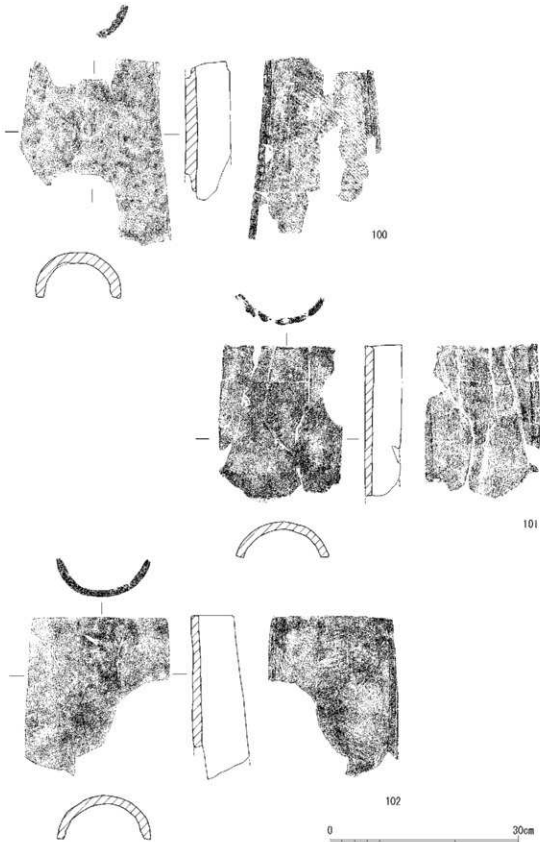
B地区瓦溜りSX21出土瓦類 (第74図97～第83図125) 出土総量は410.8kgである(内訳は丸瓦90.1kg、平瓦221.8kg、不明98.9kg)。ここで出土した瓦類は、後に検討するように、調査地南部に存在したと推定される伽藍中心建物に葺かれていたものと考えられる。層位的には上層と下層に分けることができるが、大きな違いは認められない。丸瓦は明らかにM-A類、もしくはM-B類と断定できるものはごく少量(5.2kg、4.5kg)で、M-A類かM-B類か、判別のできない破片がほとんどであった(80.4kg)。ただ、出土した破片資料の製作技法や調整法、あるいは胎土、色調、焼成をみると、M-A類が大半を占めていたと判断される。図示した丸瓦のうち、97～103はM-A類、104はM-B類である。97～103の凸面調整は平行タタキもしくは縄タタキを施した後、全面にナデを施すものが大半を占め、一部にナデ残しが認められる。凹面には布目の圧痕が残るが、97は布の綴じ合わせ目が明瞭に残る。100は粘土板の糸切り痕が明瞭に残る。103は焼け歪みが認められるが、広端面・狹端面がともに残存し、全長が41.3cmとわかる資料である。狹端面幅は各資料から9～13cmと考えられる。広端面幅がわかる資料は少ないが14cm前後と推定される。104はM-B類であるが、玉縁をほとんど欠損し、わずかに段が確認できるにすぎない。広端面が残存し、残存長は31.5cm、広端面の推定幅は16cm程度である。

平瓦は、出土量でみると、H-B1類が55%を占め(122.1kg)、H-B2類も加えると59%(131.7kg)である。次いで最終調整として凸面にナデを施すH-A1・H-A2類が14%である(30.1kg)。図示した平瓦のうち、105～107が最下層、108～118は下層、119～125は上層出土である。ちなみに、115は下層と上層から出土した資料が接合したものである。型式別にみると、105～109・119～122はH-B1類、110～115はH-B2類、118・123・124はH-C1類に分類でき、116・117・125はH-A2類と推定される。ただしA2類としたものは、小破片のため断定しにくい。全体としてはH-B1類もしくはH-B2類としたものには全体の形状をうかがうことができる資料が多く、法量等の計測が可能である。H-B1類の法量は、108・109・119・120などから全長35～38cm、広端幅26cm前後、狹端幅23cm前後である。一方、H-B2類の法量は、110～112から全長38cm前後、広端幅28cm前後、狹端幅23cm前後で、両者の間にそれほど大きな違いは認められない。H-C1類の法量は124から狹端面幅23.8cmが判明するのみで、全長や広端面幅は不明である。また、出土量は少ないが、1枚作りと推定されるH-D類も少量あることから(12.2kg)、伽藍中心建物には断続的に補修が行われていた可能性が高い。この点は、軒瓦の出土傾向からもうかがうことができる。

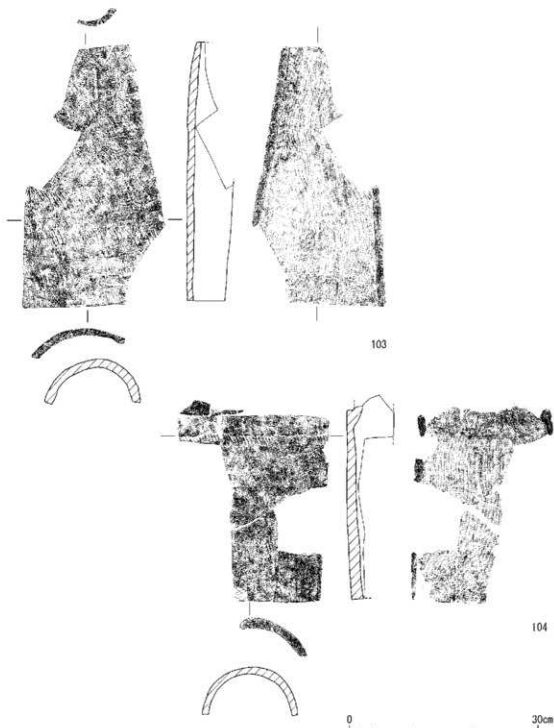
B地区土坑SK18出土瓦類 (第84図126～129) 出土総量は187.8kgである(内訳は丸瓦27.9kg、平瓦143.7kg、不明16.2kg)。丸瓦はM-A類かM-B類か、判別のできない破片が半数以上を占める(16.3kg)ものの、M-B類とM-A類の判断できるものはほぼ同量である(M-A類5.3kg、M-B類



第74図 瓦溜り S X 21出土丸瓦実測図 1 (1/6)

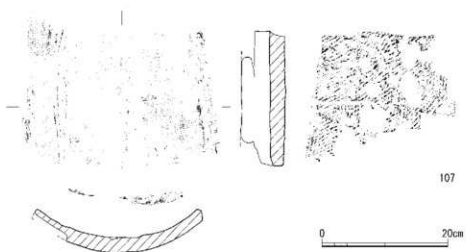
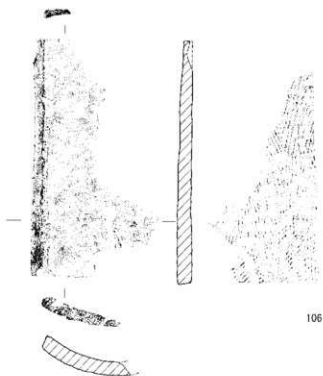
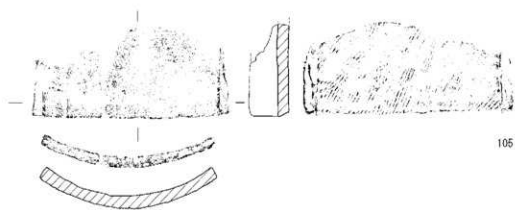


第75図 瓦溜り S X 21出土瓦実測図 2 (1/6)

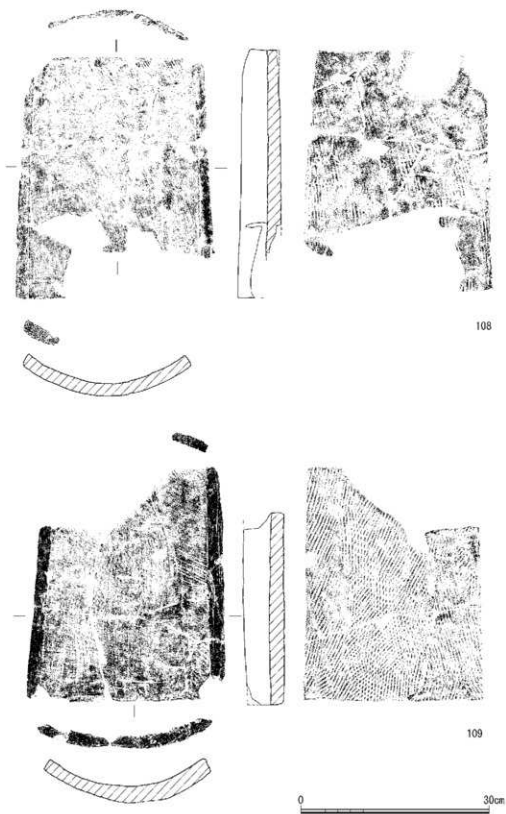


第76図 瓦溜り S X 21出土丸瓦実測図3 (1/6)

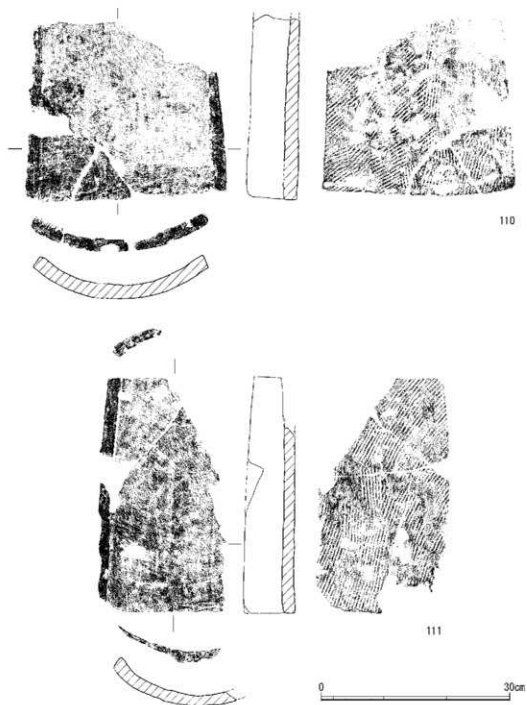
6.3kg)。126はM-B類で、残存長16.0cm、玉縁長4.8cm、玉縁幅11.5cmである。平瓦は、出土量で見ると、H-B1類が41.5%で最も多く(59.7kg)、H-B2類も加えると47.6%である(68.4kg)。次いで凸面にナデを施すH-A1・A2類は合計で25%(36.0kg)に達する。一方、H-D類と断定できるものはほとんどない(1.1kg、0.8%)。全体的な出土傾向は瓦溜り S X 21に近く、本遺構から出土した瓦類も、調査地南部の伽藍中心建物に葺かれていた可能性が高いものと考えられる。ただし、出土し



第77図 瓦溜り S X 21出土平瓦実測図1 (1/6)



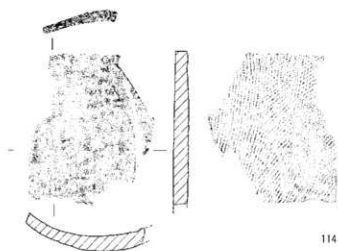
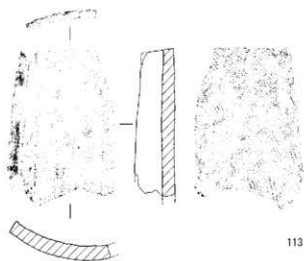
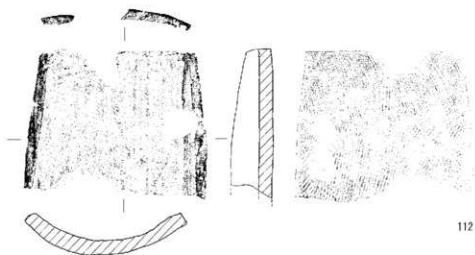
第78図 瓦溜り S X 21出土平瓦実測図2 (1/6)



第79図 瓦溜り S X21出土平瓦実測図3 (1/6)

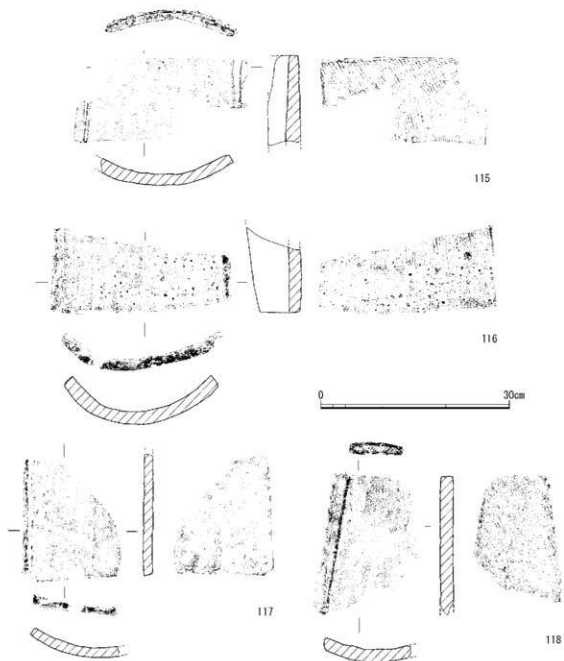
た平瓦の大半は破片資料で、法量等を明らかにできた資料はほとんどない。図示した資料のうち127はH-B1類、128はH-B2類、129はH-C1類である。

A地区土坑 S K 103出土瓦類 出土総量は12.2kgである(内訳は丸瓦24kg、平瓦7.2kg、不明2.6kg)。丸瓦はM-A類と認められる破片のほか、M-A類かM-B類か判別できない破片がある。丸瓦には焼成が硬質なもの軟質なものがある。平瓦はH-A2類(3.7kg)とH-B1類(2.6kg)がそれぞれ一定量ずつ存在する。また、少数であるが、H-A1類(0.6kg)や縄タキを施すH-C類(0.15kg)、



0 30cm

第80図 瓦溜り S X 21出土平瓦実測図4 (1/6)

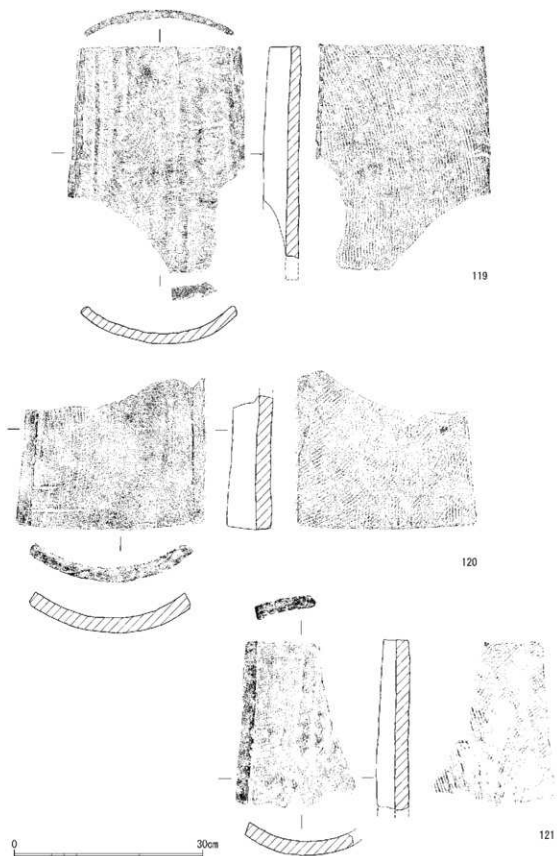


第81図 瓦溜り S X 21出土平瓦実測図5 (1/6)

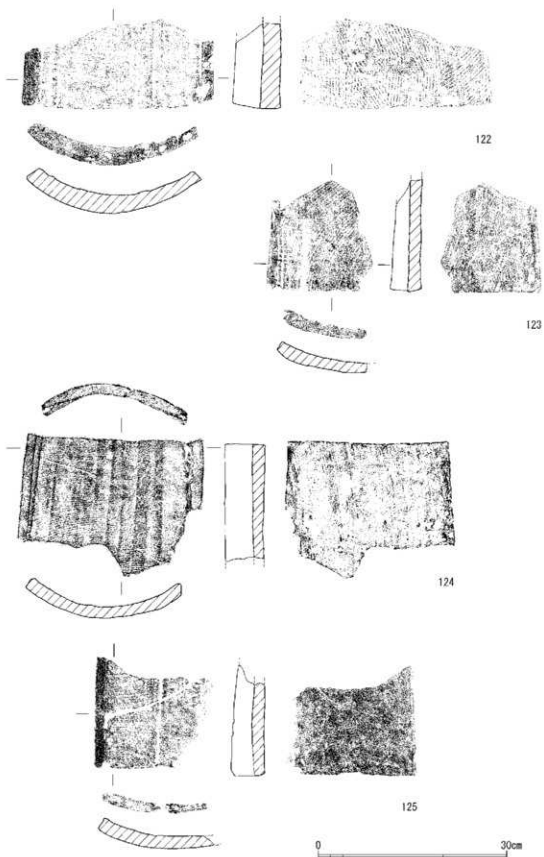
H-D類の可能性もあるもの(0.2kg)などがある。平瓦にしても、須恵質に近い硬質なもの全体に軟質なものがある。前者はH-C類のみにみられ、後者は各型式にみられる。

A地区掘立柱建物 S B 479出土瓦類 出土総量は10.3kgである(内訳は平瓦10.1kg、不明0.2kg)。明らかに丸瓦と思われるものはみられない。出土した平瓦の多くは摩滅が著しく、凸面の調整が十分観察できない。凹面も布目が良好な状態では遺存しない。型式は断定しにくい。剥離痕跡の状況や粘土紐の接合痕が確認できること、凸面の調整に弧状の縄タケの痕跡を確認できることから、H-C2類が多いように思われる。

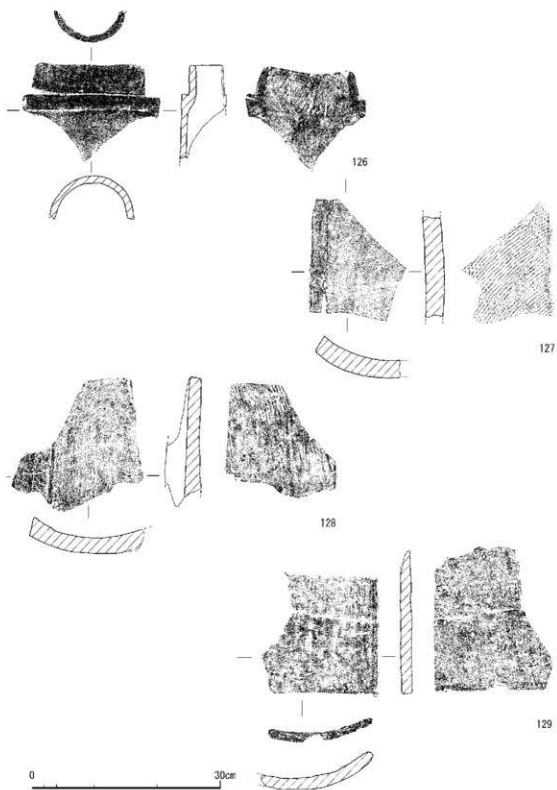
A地区柱穴 S P 441出土瓦類 出土総量は2.3kgである。やや摩滅気味のものもあるが、すべ



第82図 瓦溜り S X 21出土平瓦実測図6 (1/6)



第83図 瓦溜り S X 21出土平瓦実測図7 (1/6)



第84圖 土坑S K 18出土丸瓦・平瓦実測図(1/6)

てH-B1類と思われる。

A地区土坑S K300出土瓦類 出土総量は98.8kgである(内訳は丸瓦0.8kg、平瓦8.8kg、不明0.2kg)。丸瓦にはM-B類の玉縁付近の破片と、M-A類かM-B類か判別のできない破片がある。平瓦はH-A～H-C類の各型式を確認できるが、いずれの型式もほぼ同量ずつ確認できる。しかし、一枚作りであるH-D類はみられない。覆鉢形土製品が3点出土しているが、H-D類が含まれないことは覆鉢形土製品の時期を考える上で参考になる。同様の傾向をもつ遺構に第7次調査の土坑S K415がある。

A地区瓦集中箇所S X487出土瓦類 出土総量は114.4kgである(内訳は丸瓦27.4kg、平瓦75.7kg、不明11.3kg)。ここでの特色としては5cm以下や種別の分類不可のものが少ないという点である。丸瓦はM-A類かM-B類か判別のつかないものが多いものの、M-B類を一定量確認できる(5.1kg、18.6%)。平瓦はH-A2類が23.9kg(31.6%)と全体の1/3近くを占め、H-C類が12.7kg(16.8%)、H-D類が6.9kg(9.1%)、H-B1類が2.6kg(3.4%)と続く。なお、H-C類のうち、C2類が7.3kgも確認できたが、出土量としてみるならばかなり異例である。平瓦の出土傾向からは桶巻作りが主体であるが、後述する瓦集中箇所S X22にくらべて、H-B1類の割合が極端に低い点がS X487の特徴である。

B地区土坑S K4出土瓦類 出土総量は243.1kgである(内訳は丸瓦55.4kg、平瓦116.6kg、不明71.1kg)。丸瓦は破片資料が多く、M-A類かM-B類か判別のつかないものが多いものの、M-B類を少量ながら確認できる(4.5kg、8.1%)。平瓦は1/4ほどが分類不可で(29.7kg、25.8%)、H-B1類が33.3kg(28.6%)、H-A2類が17.2kg(14.8%)と、平瓦全体の4割余りを占める。一方、H-D類も19.0kg(16.3%)と2割近くを占める。平瓦の出土傾向からは桶巻作りの一群とともに、一枚作りのものも一定量存在することがわかる。これらは近世になって古代の瓦類を大量に廃棄したものと考えられるが、瓦類の出土傾向をみるために重量の計測を行った。

B地区瓦集中箇所S X22出土瓦類 出土総量は132.8kgである(内訳は丸瓦18.6kg、平瓦74.3kg、不明39.9kg)。丸瓦は出土量も少ない上、型式分類のできない破片が8割以上を占める(15.9kg)。M-A類(0.4kg)、M-B類(2.3kg)ともに少量ずつ確認できる。平瓦はH-B1類が23.8kg(32.1%)、H-A2類が20.0kg(26.9%)と、両者合わせてほぼ6割を占める。H-C類は8.6kg(11.2%)、H-D類は4.7kg(6.0%)である。全体の傾向としては桶巻作りのものが圧倒的に多い。これらは近世になって古代の瓦類を大量に廃棄したものと考えられる。

B地区瓦集中箇所S X23出土瓦類 出土総量は109.5kgである(内訳は丸瓦18.5kg、平瓦36.9kg、不明54.1kg)。出土総量の半数が5cm以下の小破片である。丸瓦は大半がM-A類かM-B類か判別のできないものであり(16.9kg、91.4%)、少量であるがM-B類が確実に存在する(1.2kg、6.5%)。平瓦は半数近くが分類不可の資料である(17.0kg、46.1%)。H-B1類が8.1kg(22.0%)、H-A2類が4.5kg(12.2%)あり、平瓦全体の1/3ほどを占める。H-D類も5.3kg(14.4%)あって一定量を占める。全体の傾向としては分類不可のものが半数を占めるものの、一枚作りのものに対して桶巻作りのものが量的に多い。これらは近世になって古代の瓦類を大量に廃棄したものと考えられるが、重

量の計測を行った。

B地区瓦集中箇所 S X24出土瓦類 出土総量は90.4kgである(内訳は丸瓦14.2kg、平瓦40.6kg、不明35.6kg)。上記2か所の瓦集中箇所にくらべ、出土量はやや少ない。丸瓦は型式分類のできないものがほとんどであり、わずかにM-B類が0.4kg(2.8%)が確認できたに留まる。平瓦はH-B1類が12.5kg(30.8%)、H-A2類が7.8kg(19.1%)あり、平瓦全体のほぼ半数を占める。これに対してH-D類はわずか1.9kg(4.7%)で、非常に少ない。出土傾向としては、瓦集中箇所 S X22の内容に近い。これらも近世になって古代の瓦類を大量に廃棄したものと考えられるが、重量の計測を行った。

A地区堆積層 S X486出土瓦類 出土総量は232.6kgである(内訳は丸瓦52.4kg、平瓦122.3kg、不明57.9kg)。丸瓦は総量の2/3ほどが破片資料(分類不可)で、M-A類かM-B類か判別のつかないものが多い。ただM-B類が一定量確認できる(8.1kg、15.4%)。平瓦は1/3ほどが分類不可である(43.1kg、35.3%)。H-A2類が28.7kg、H-B1類が12.4kgと、平瓦全体の1/3ほどを占める。一方、H-D類も18.4kgと15%を占める。平瓦の出土傾向からは桶巻作りの一群とともに、一枚作りのものも一定量存在することがわかる。この堆積層も近世以降に形成されたものであるが、土坑SK4や瓦集中箇所 S X22などと同じく、重量の計測を行った。

B地区落ち込み S X25周辺出土瓦類 出土総量は274.7kgであるが、出土状況に違いがあるため、調査過程に応じて概要を述べる。S X25の南側に設けられたサブトレンチでは、出土層位を確認しながら瓦類の取り上げを行った。このサブトレンチでの出土総量は167.0kg(内訳は丸瓦31.4kg、平瓦61.4kg、不明74.2kg)で、S X25周辺出土総量の6割ほどを占める。丸瓦はM-A類かM-B類か判別のできないものが大半で、わずかにM-B類が3.4kg確認できた。層位別の傾向は認められず、各層からM-B類が出土している。平瓦はH-C類がやや少ない点を除けば、H-A類からH-D類まで各型式が出土している。層位別の傾向も大きな違いは見られず、おおむね各層から各型式が出土している。次いで多く出土しているのが、S X25周辺下層として取り上げている一群で、出土総量は93.1kgである(内訳は丸瓦20.4kg、平瓦47.6kg、不明25.1kg)。丸瓦は南側サブトレンチと同様に、M-A類かM-B類か判別のできないものが大半で、わずかにM-B類が1.3kg確認できた。平瓦もH-C類がやや少ない点を除けば、H-A類からH-D類まで各型式が出土しており、南側サブトレンチと同様の傾向がうかがえる。以上の2地点のほか、S X25周辺上層(出土総量11.0kg)とS X25南北サブトレンチ(出土総量3.7kg)があるが、出土総量が先の二者にくらべると少なく、大きな傾向は変化しないと思われる。さて、S X25周辺の瓦類の傾向であるが、平瓦ではH-A類とH-B類とが高い割合で認められ、次いでH-D類が認められた。H-C類は出土量としては相対的に少ない傾向にあった。また、丸瓦は破片化すると、M-A類かM-B類か判別しにくくなるため、玉縁の段の部分を確認しないと、M-B類と断定できないが、S X25周辺では一定量確認することができた。これらは上記の近世になって再堆積した、もしくは再投棄された瓦類とは異なり、B地区に存在した瓦葺き建物の補修時や廃絶時に廃棄されたものと推定される。

遺物包含層出土瓦類(第85図130) B地区(IX-e12区)の精査中に出土したH-D類と推定される

平瓦である。凸面に端面に平行して幅1cm前後の朱線が1条認められた。建物の柱などを朱塗りする際に付着したものと考えられる。残存長7.5cmである。胎土は密で、焼成は良好である。色調は浅黄色である。

(筒井崇史)

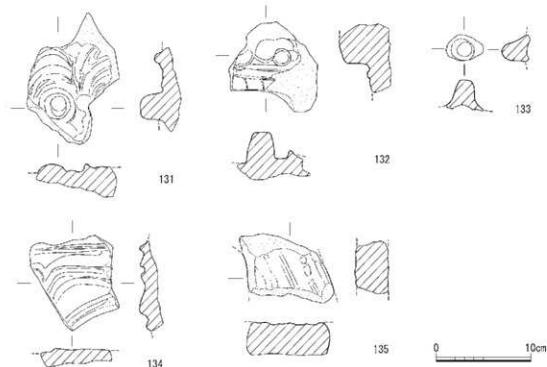
⑤鬼瓦(第86図) 鬼瓦は5点出土した。これらは同一個体の可能性もあるが、接合面は



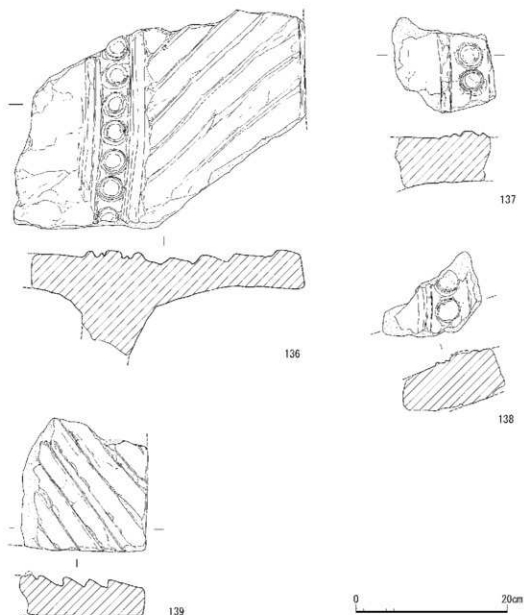
第85図 遺物包含層出土瓦実測図(1/6)

認められなかった。131・132は落ち込みS X 20周辺で出土した。131は鬼面の目に相当する破片である。残存長13.9cm、残存幅9.8cmを測る。焼成は良好で胎土は密、色調はにぶい黄橙色である。132は鬼面の中心、鼻に相当する破片である。残存長9.45cm、残存幅9.4cmを測る。焼成は良好で胎土は密、色調は表面が浅黄橙色、裏面が褐灰色である。133はS X 20第6層で出土した。鬼面の目に相当する破片である。基底部最大径2.9cm、残存高3.0cmを測る。焼成は良好で胎土はやや粗、色調は黄灰色である。134は土坑SK 4上層で出土した。鬼面の口に相当する破片と考えられる。残存長10cm、残存幅9.5cm、焼成は良好で胎土は粗、色調はにぶい黄橙色である。135はⅧ-b5周辺で出土した。鬼面文の一部となる破片である。残存長7.3cm、残存幅10cmを測る。焼成はやや軟質で胎土はやや粗、色調は灰白色である。

⑥鴟尾(第87図) 鴟尾は4点出土した。このうち136~138は同一個体の可能性があるが、接合面は認められなかった。136はS X 20第4層から出土した。胴部から鰭部にかけての破片で、



第86図 鬼瓦実測図(1/4)



第87図 島尾実測図(1/3)

存長25.2cm、幅35cm、鱗部の厚さ3.1～4.7cm、側面の厚さ6.3cm、腹部の厚さ6.0cm前後を測る。一部腹部が残存する。幅1.4～1.6cmの縦帯を4.7cm間隔で削り出し、その間に直径2.8cmの連珠文を削り出す。鱗は2.1～3.25cm幅の逆段である。側面には粘土紐積み上げの痕跡が認められ、右側面内面には強いナデの痕跡が認められる。137は落ち込みS X 20周辺から出土した。残存長10.6cm、残存幅12.7cm、厚さは最大で6.7cmを測る。焼成は良好で胎土は密、色調は浅黄橙色である。138は堆積層S X 486 (Ⅸ-b3区周辺)から出土した。残存長9.9cm、残存幅11.8cm、厚さは最大で7.0cmを測る。焼成は良好で胎土は密、色調は灰白色である。139は瓦溜りS X 21上層から出土した正段の鱗部の破片である。残存長17.4cm、残存幅16.6cm、厚さは最大で5.35cmを測る。焼成は良好で胎土は密、色調は黄灰色である。136～138にみられるような縦帯の中に連珠文とい

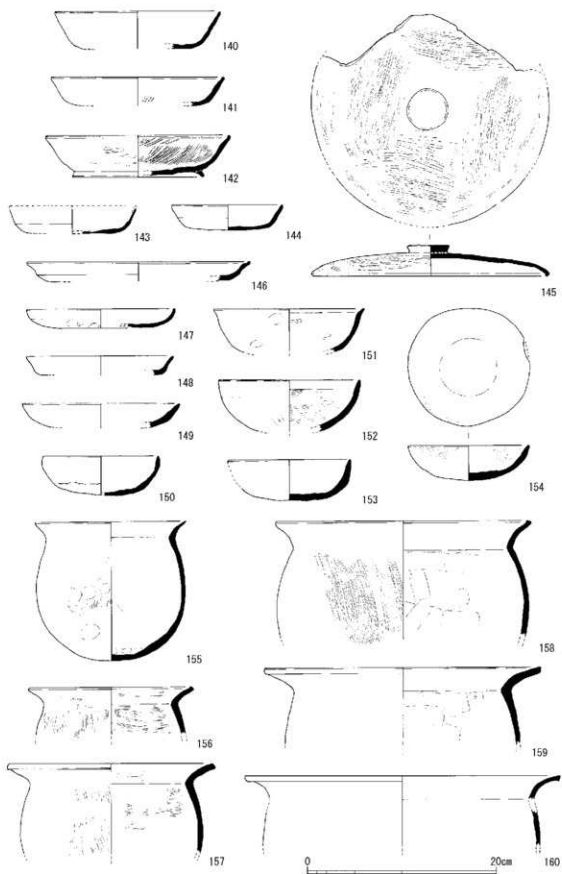
う構成は、兵庫県明石市高丘3号窯跡が最古例で7世紀中葉に比定されている⁽⁸²⁾。続いて、大阪府羽曳野市善正寺(埴生廃寺)出土例がある。善正寺出土例は、連珠文をはさんで縦帯(幅1.6cm)2条を5cm間隔で配し、連珠文は径3cmで削り出している。美濃山廃寺例の構成や技法に最も近いといえるが、正段である。136にあるような逆段は、奈良県橿原市古宮遺跡・奈良県高市郡飛鳥寺A型・京都市右京区広隆寺・和歌山県伊都郡佐野廃寺があり、6世紀末から7世紀代に多い傾向にあるが、京都市中京区平安宮豊楽院・京都市北区上庄田瓦窯C型・京都市北区西賀茂瓦窯跡群などに9世紀代の例が認められ、逆段という要素で美濃山廃寺出土鶴尾の時期を決定することは難しい。このため、現段階では縦帯や連珠文の構成や施工方法などから7世紀後半に属する可能性があるとした。

(関広尚世)

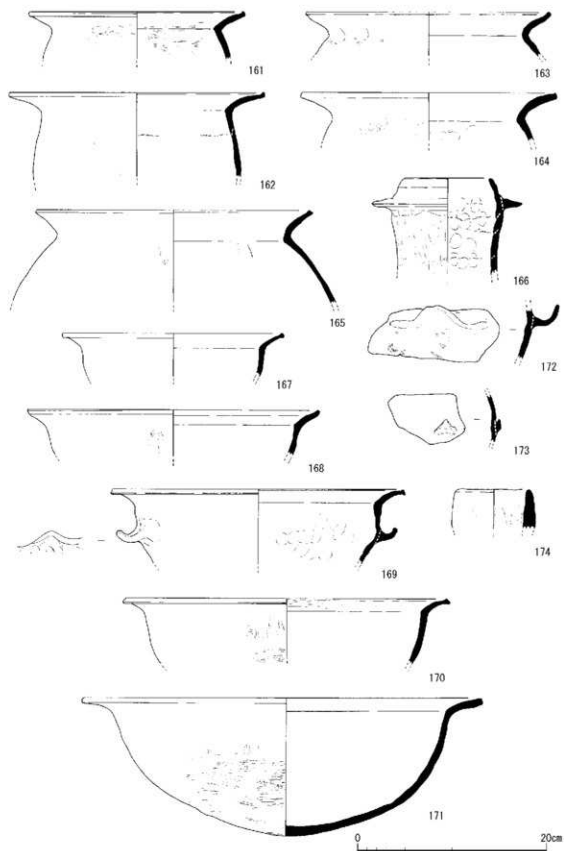
(2) 土器類

① 遺構出土土器

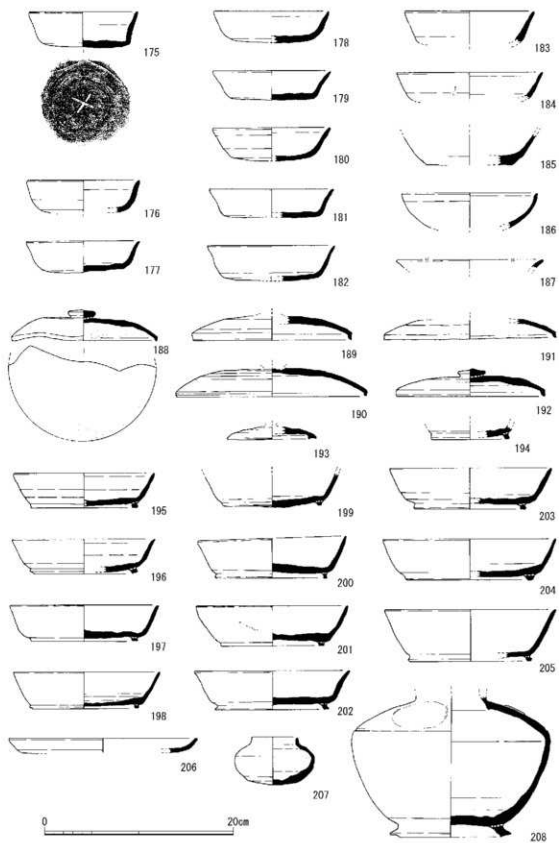
A地区溝S D039出土土器(第88図140～第92図214) 140～173は土師器である。140は杯である。全体に剥離するため調整は不明である。141は杯Aである。底部内面に放射状暗文が部分的にみられる。142は杯Bである。内面には斜放射状暗文を2段に施す。外面はヨコナデの後、横方向のミガキを施す。口径19.3cm、器高4.4cm、底径13.8cmである。胎土は密で、色調は明赤褐色を呈する。焼成は良好である。143・144はほぼ同形同大の杯である。口径11.5～13.2cm、器高2.7cm前後である。145は杯B蓋である。口径25.2cm、器高3.3cmを測る。外面はミガキを4分割して施す。内面は不定方向のナデを施す。胎土は密であり、2mm以下の長石を含む。色調は赤色を呈し、焼成は良好である。146は皿Aの破片である。147～149は器形が異なるもの皿と認識できるものである。150～154は杯もしくは碗である。いずれも口縁部が内湾気味に立ち上がる。150は摩擦が著しく調整不明である。151は口縁端部が内傾する。152は口縁端部内外面にヨコナデ、外面にケズリ、内面にハケを施す。153は全体に摩擦気味である。154はほぼ完形で出土した。内面には煤が付着しており、灯火器として使用されていたと考えられる。155～165は甕である。法量からみると、口径17cm前後の小型品(155・156)、口径22～27cmの中型品(157・158・161～164)、口径30cm前後の大型品(159・160・165)の3種がある。また、口縁端部の形状は、丸くおさめるもの(155)、端をもつもの(156・157・159・160・164)、つまみ上げもしくは肥厚気味のもの(158・161～163・165)がある。155はほぼ完形で、口径16.1cm、器高14.7cmを測る。158は口径26.9cm、残存高12.3cmである。165は口径28.8cm、残存高9.8cmである。166は羽釜と考えられる破片である。口径が9.0cmと小さく、必ずしも羽釜ではないかもしれない。167～171は鍋である。169は把手が付く。口径30.8cm、残存高7.8cmである。171は外面に横方向のハケを施す。172・173は甕もしくは甔の把手である。173の把手は小さく、把手としての機能を有するとも思われぬ。ミニチュアの把手の可能性もある。174は製塩土器と考えられ、内外面ともに指オサエで調整する。175～214は須恵器である。175～182はほぼ同形同大の杯Aで、口径11.6～13.6cm、器高3.0～3.8cmである。ただし、底部から口縁部の立ち上がり、強く屈曲するもの(175・



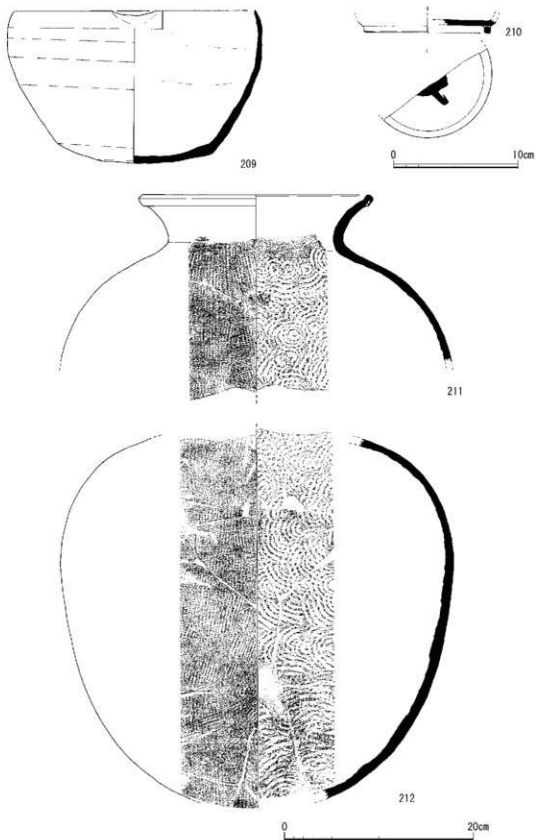
第88図 溝 S D039出土土器実測図1 (1/4)



第89図 溝 S D039出土土器実測図 2 (1/4)

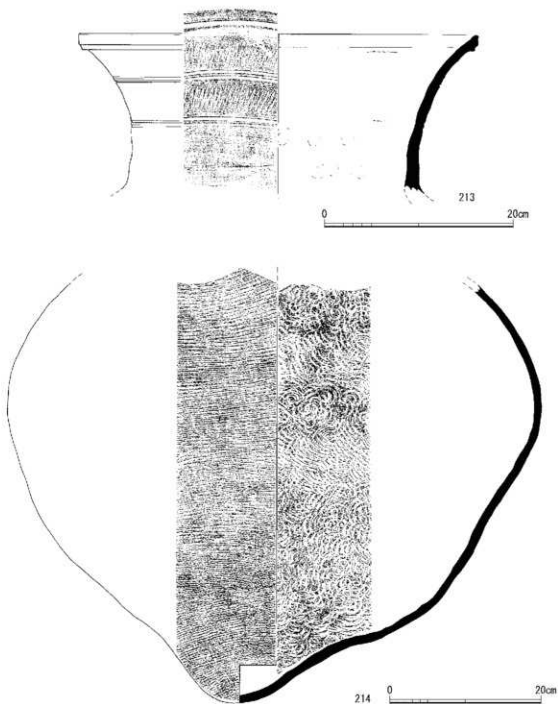


第90図 溝 S D 039出土土器実測図 3 (1/4)



第91圖 清S D039出土土器実測圖4 (1/3、1/4)

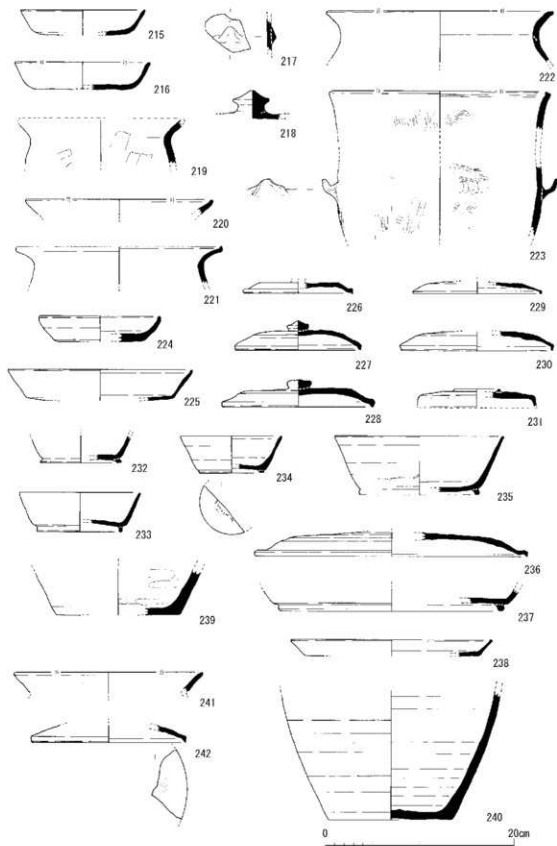
179・181・182)と緩やかなもの(176~178・180)とがある。175は口径11.6cm、器高3.7cmを測る。底部外面には「×」のヘラ記号がある。183・184は杯口縁部である。185は杯の底部である。186は口縁部が内湾気味に立ち上がる椀もしくは杯である。色調は灰白色、焼成はやや軟、胎土はやや粗で、1mm大の長石を含む。187は杯の口縁端部で、やや強く外反する。口縁内面には漆が付着している。188~192は杯B蓋である。器形はいずれも笠形を呈する。頂部には回転ヘラケズリを施すものが多い。188は口縁部が焼け歪んでいる。口径15.3cm、器高3.2cmである。内面に



第92図 溝S D039出土土器実測図5 (1/4、1/5)

は漆が付着している。189～191はつまみを欠損している。192は口径15.9cm、器高3.0cmである。193は小型の蓋で、かえりを有する。杯G蓋、もしくは壺蓋であろうか。194～205は杯Bである。194は底径8.2cmの小型の杯Bである。口縁端部を欠損する199を除く、195～198・200～205は法量からみると、口径15cm前後、器高4cm前後のもの(195・196)、口径16cm前後、器高4cm前後のもの(197・198・200～202)、口径17～18cm前後、器高5cm前後のもの(203～205)の3種に分けられる。202は口径16.6cm、器高4.1cm、底径12.2cmを測る。内外面に回転ナデを施す。胎土は密で3mm以下の長石を含む。焼成は堅緻である。205は口径18.2cm、器高5.5cmである。206は皿Cである。口径20.0cm、器高1.6cmである。207は壺Cである。口径5.1cm、器高5.2cm、体部最大径8.4cmを測る。口縁部および体部の内外面に回転ナデを施す。底部外面に回転ヘラケズリを施す。208は壺Kである。口頸部を欠損しているが、残存高14.9cm、体部最大径21.1cm、底径10.8cmである。209は鉢Aで、片口にしている。底部はやや平底気味である。口径25.8cm、器高16.1cmを測る。内外面とも摩滅している。色調は淡黄色、胎土はやや粗で3mm以下の砂粒を多く含む。焼成は良好であるが、土師質に焼き上がっている。210は墨書土器である。杯Bの底部外面に文字が書かれているのを確認したが、欠損しており判読できなかった。底径10cmである。211～214は甕である。211・212は体部外面に平行タキを施し、内面に同心円の当て具痕がみられる。211は口径23.6cm、残存高18.4cmである。212は口頸部と底部を欠損するが、残存高は38.3cmである。213は甕の口縁部で、外面に波状文を2段施す。口径42.0cm、残存高17.0cmである。214は甕の体部で、口縁部から肩部にかけてを欠損している。残存高は54.5cmを測る。外面に平行タキを施し、内面に同心円の当て具痕がみられる。

A地区土坑SK470出土土器(第93図215～240) 215～223は土師器である。215・216は杯である。内外面ともにヨコナデを施す。2点とも口径13～14cm、器高2.8cm前後である。217は甕もしくは瓶の把手の破片である。やや小型のもので、ミニチュアの可能性もある。218は蓋のつまみである。宝珠形を呈する。219～222は甕の口縁部の破片である。219は口縁端部を欠損している。220は口縁端部内面は肥厚する。221は口縁端部をつまみ上げる。222は口縁部が緩やかに外反する。223は瓶である。直接接合しない口縁部片と把手の付く体部片がある。口縁部にはヨコナデを施す。外面に縦方向のハケ、内面には横方向のハケを施す。224～240は須恵器である。224は杯である。一般的な杯Aよりも器壁がやや厚めである。口縁部が内湾気味で、端部を丸くおさめる。底部はヘラキリ後ナデ、それ以外は内外面とも回転ナデを施す。225は杯Aであるが、口縁端部内面が肥厚するようなので、杯Cの可能性もある。口径19.6cm、器高3.3cmである。胎土はやや粗で、1mm以下の砂粒、2mm以下の長石を含む。226～230は杯B蓋である。器形は、笠形を呈するもの(227・229・230)と扁平な頂部に口縁部が屈曲するもの(226・228)とがある。227は口縁部の一部が欠損するが、ほぼ完形である。口径13.3cm、器高3.15cmを測る。胎土は密で、1mm以下の長石を含む。228も口縁部の一部が欠損するが、ほぼ完形である。口径15.9cm、器高2.9cmを測る。胎土は密で、1mm以下の長石を含む。231は蓋であるが、環状のつまみが付く。器形的には壺の蓋であろうか。232～235・737は杯Bである。法量からみると、口径11～12cm、器高



第93図 土坑S K 470・471出土土器実測図(1/4)

4.5cm前後のもの(232~234)と、口径17.8cm、器高6.2cmもの(235)がある。234の底部外面には爪状圧痕が残る。236は大型の皿B蓋である。口径28.9cm、器高2.5cmを測る。胎土は密で、1mm以下の長石を多く含む。頂部外面に回転ヘラケズリ、口縁部および内面に回転ナデがみられる。237は皿Bの底部である。底径23.1cm、残存高2.1cmである。238は皿Cの破片である。口縁端部は外傾する面をなす。239は壺もしくは鉢の底部と思われる。240は壺Nの体部から底部にかけての破片と推測される。底径13.2cmを測る。内外面とも回転ナデ、底部外面にヘラ切り後不定方向のナデを施す。

A 地区土坑 S K 471 出土土器 (第93図241・242) 241は土師器甕の口縁部である。内面から口縁端部にヨコナデ、外面にハケを施す。242は須恵器杯B蓋の口縁部片である。器形は笠形を呈すると思われる。内面には漆が付着している。

A 地区掘立柱建物 S B 010 出土土器 (第94図243~246) 243は須恵器杯B蓋である。つまみを欠損するが、扁平な頂部に口縁部が屈曲する。柱穴 S B 010-4 から出土した。244は須恵器杯Aの底部である。柱穴 S B 010-4 から出土した。245は土師器高杯の脚部である。円形の透かしを確認できる。柱穴 S B 010-3 から出土した。246は弥生土器甕もしくは壺の底部である。下層遺構の遺物の混入であろう。柱穴 S B 010-1 から出土した。

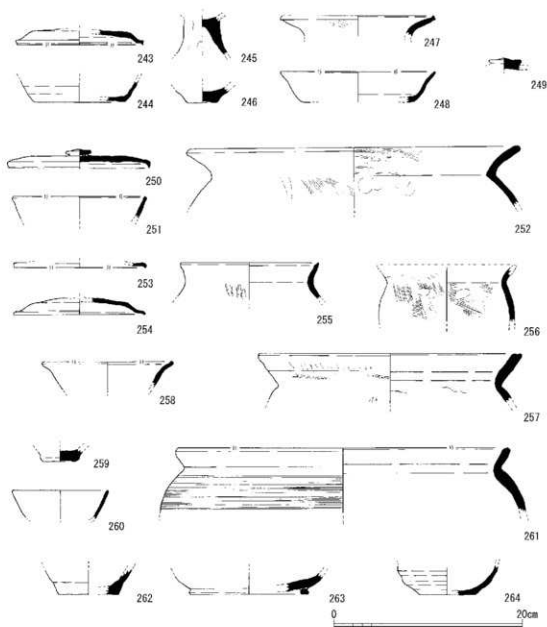
A 地区掘立柱建物 S B 475 出土土器 (第94図247・248) 247は土師器甕の口縁部である。口縁端部は面をなす。柱穴 S P 012 から出土した。248は須恵器杯Aである。小片であるが、口縁部の中位でやや屈曲気味を呈する。柱穴 S B 475-4 から出土した。

A 地区掘立柱建物 S B 055 出土土器 (第94図250~252) 250は須恵器の杯B蓋である。頂部外面に回転ヘラケズリ、口縁部から内面にかけて回転ナデを施す。口径14.8cm、器高2.0cmである。柱穴 S B 055-1 の柱痕跡から出土した。251は須恵器杯の口縁部である。柱穴 S B 055-8 から出土した。252は土師器甕である。口縁部内面に横方向のハケ、体部外面に縦方向のハケ調整を施す。口径34.6cm、残存高6.2cmである。柱穴 S B 055-9 から出土した。

A 地区掘立柱建物 S B 065 出土土器 (第94図253~255) 253・254は須恵器杯B蓋である。253は口縁部の小片である。柱穴 S B 065-4 から出土した。254は扁平な頂部に口縁部が屈曲する。つまみのつかない器形の可能性もある。口径14.0cm、残存高1.7cmである。柱穴 S B 065-9 から出土した。255は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は内傾する。体部外面にタタキを施す。柱穴 S B 065-4 から出土した。

溝 S D 054 出土土器 (第94図256・257) 256は土師器甕である。口縁端部を欠損するが、小型品である。体部内外面にハケを施す。残存高は5.8cmである。257は須恵器甕である。頸部付近にタタキ調整の圧痕が確認できる。口径27.6cm、残存高4.8cmである。

柱穴出土土器 (第94図249・258~264) 249は須恵器杯B蓋のつまみである。258は土師器杯もしくは高杯の口縁部である。柱穴 S P 045 から出土した。259は弥生土器甕もしくは壺の底部で、下層遺構の遺物が混入したものと思われる。260は須恵器杯の口縁部である。259・260は柱穴 S P 052 から出土した。261は須恵器甕である。小破片のため法量は不明であるが、体部外面にカキ

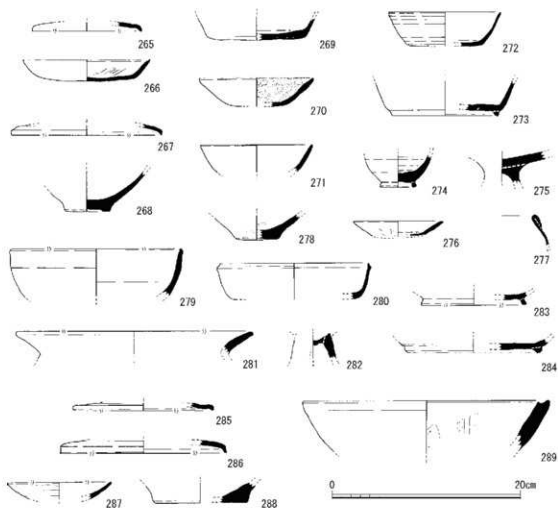


第94図 掘立柱建物・柱穴出土土器実測図(1/4)

メを施す。261は柱穴S P 101から出土した。262は弥生土器壺の底部である。263は須恵器杯Bの底部である。残存高1.9cm、底径12.8cmである。262・263は柱穴S P 269から出土した。264は須恵器杯または碗の体部下半から底部にかけての破片である。柱穴S P 441から出土した。

B地区美濃山1号窯(瓦窯S Y 17)出土土器(第95図265・266) 265は須恵器杯B蓋もしくは壺蓋の口縁部の破片である。1号窯南方の断ち割りから出土した。266は土師器皿Aである。口径13.4cm、器高2.4cmを測る。胎土はやや粗で、雲母を含む。内外面ともにナデを施し、底部内部には斜放射状暗文がみられる。焚口から出土した。

A地区土坑S K 091出土土器(第95図267・268) 267は須恵器杯B蓋の口縁部の破片である。268は弥生土器壺の底部片である。摩滅が著しく調整は不明である。



第95図 遺構出土土器実測図(1/4)

B地区溝SD7出土土器(第95図269) 269は須恵器杯Aの底部である。

A地区土坑SK300出土土器(第95図270) 270は土師器杯の破片で、内面に漆が付着している。

A地区溝SD151出土土器(第95図271) 271は須恵器杯の口縁部の破片である。

B地区土坑SK4出土土器(第95図272～277) 272は須恵器杯Aである。273は須恵器杯Bの底部である。274は須恵器壺Mの底部で、高台が付く。275は土師器高杯の杯部と脚部の接合部の破片である。276は中世の土師器皿である。277は土師器羽釜の口縁破片である。

A地区溝SD069出土土器(第95図278～282) 278は弥生土器甕もしくは壺の底部片である。279は須恵器鉢の口縁部片である。280は須恵器杯である。口縁端部は、内上方にややつまみ上げ気味を呈する、やや類例のない器形を呈する。281は土師器甕の口縁端部の破片である。282は土師器高杯の脚部の破片である。

A地区土坑SK037出土土器(第95図283・284) 283・284は須恵器杯Bの底部片である。

A地区土坑SK034出土土器(第95図285～288) 285・286は須恵器杯B蓋の口縁部の小破片である。287は陶器の皿の口縁部片である。内外面ともにヨコナデがみられ、内面の口縁端部から底部にかけて灰白色の軸葉が掛けられている。外面には煤が付着している。288は弥生土器壺

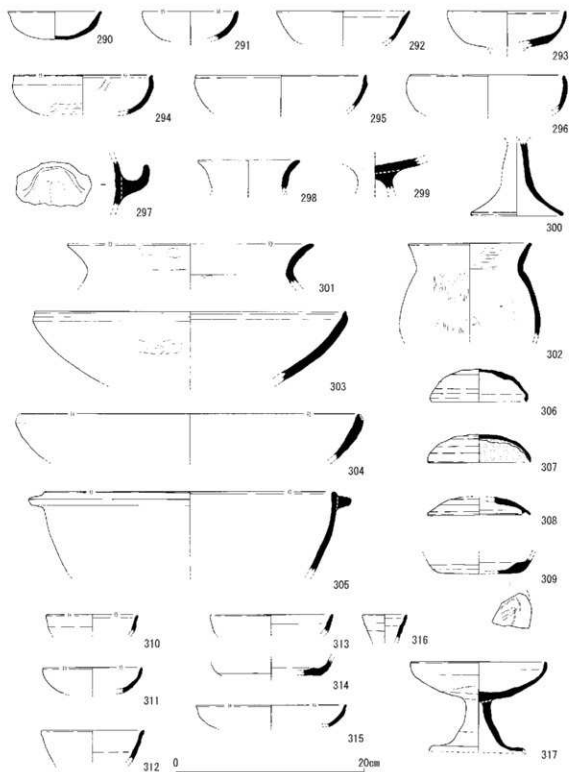
もしくは甕の底部である。

B地区土坑S K 18出土土器 (第95図289) 289は瓦質土器すり鉢の口縁部片である。最上層から出土した。(村田和弘)

鉄器生産関連遺構群出土土器 (第96図290～第97図322) 290～305は土師器である。290は整地面から出土した杯である。口径9.8cm、残存高3.05cm、焼成はやや不良で胎土はやや粗、色調は赤色～橙色を呈する。ほぼ内外面ともに摩滅のため調整は不明である。底部には一部ケズリの痕跡が認められる。291は整地面から出土した土師器杯である。復元口径10.0cm、残存高3.0cm、焼成はやや不良で胎土は粗、色調は橙色ないし明黄褐色を呈する。内外面ともに摩滅のため調整は不明である。292は落ち込みS X 603から出土した杯である。口径14.0cm、残存高3.2cm、焼成は良好で胎土は密、色調は橙色を呈する。内外面は摩滅のため調整不明である。293は落ち込みS X 602から出土した高杯である。復元口径12.5cm、残存高3.8cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。口縁部外面及び内面にはヨコナデが施され、外面底部は摩滅のため調整不明である。294は土坑S K 502から出土した杯である。復元口径14.6cm、残存高4.15cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は橙色を呈する。口縁部外面及び内面はヨコナデ、体部下半から底部外面にはケズリが施される。内面には放射状暗文の痕跡がわずかに認められる。295はS X 603周辺から出土した杯である。口径18.0cm、残存高3.6cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は橙色を呈する。内外面ともに摩滅のため調整不明である。296は溶解炉S L 511から出土した高杯である。口径16.0cm、残存高4.0cm、焼成は良好で胎土は密、色調は外面が橙色、内面が橙色を呈する。内外面ともに摩滅のため調整不明である。297は整地面から出土した把手である。残存高4.5cmで、焼成は良好で胎土はやや粗、色調はにぶい黄橙色を呈する。全体にナデが施される。298は整地面から出土した甕である。内外面ともに摩滅のため調整不明である。口径10.6cm、残存高3.2cm、焼成は良好で胎土は粗、色調は橙色である。299は土坑S K 504から出土した高杯である。残存高3.3cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は外面が橙色、内面が橙色を呈する。脚部外面はケズリの後ナデ、内面は摩滅のため調整不明である。300は整地面から出土した高杯である。底径9.8cm、残存高6.7cm、焼成はやや不良で胎土はやや粗、色調は橙色を呈する。内外面ともに摩滅のため調整不明である。301はS X 603から出土した甕である。復元口径26.0cm、残存高4.2cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は橙色を呈する。口縁部内外面にはヨコナデが施され、外面には一部オサエ、内面にはススの付着が認められる。302は土坑S K 506・509から出土した甕である。口径13.0cm、残存高9.7cm、焼成は良好で胎土は密、色調はにぶい褐色を呈する。口縁部外面はヨコナデ、胴部外面と口縁部内面にはハケメ、胴部内面上半にはナデ、胴部内面にはケズリが施される。303はS X 602から出土した鉢である。口径33.0cm、残存高7.35cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は橙色を呈する。内外面ともにナデが施される。304はS X 603周辺から出土した鉢である。復元口径36.0cm、残存高4.8cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は橙色を呈する。内外面ともに摩滅のため調整不明である。305はS L 511から出土した鉢もしくは鍋である。復元口径30.4cm、残存高8.5cm、焼成はやや不良で胎

土はやや粗、色調は浅黄橙色を呈する。口縁部に突帯を持つのが特徴で、内外面ともに摩滅のため調整不明である。

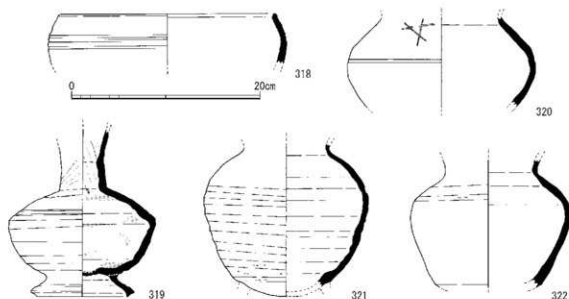
306～317は須恵器である。306は整地面から出土した杯蓋である。口径10.0cm、残存高3.5cm、



第96図 鉄器生産関連遺構群出土土器実測図1 (1/4)

焼成は良好で胎土は密、色調は灰白色を呈する。外面頂部はヘラ切りの後ナデ、体部及び口縁部外面と内面にはロクロナデが施される。307は土坑SK504から出土した杯蓋である。口径10.8cm、残存高3.0cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は灰白色を呈する。外面頂部はヘラ切りの後未調整、体部及び口縁部外面と内面にはロクロナデが施される。内面には暗赤褐色の付着物が認められ、漆の可能性が高い。308は整地面から出土した杯蓋である。口径10.8cm、残存高1.9cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰白色～灰色を呈する。頂部外面にはヘラ切り、口縁部内外面にはロクロナデが施される。309はSX602から出土した杯身である。復元底径8.7cm、残存高1.6cm、焼成は良好で胎土は粗、色調は灰色を呈する。体部下半内外面にはロクロナデ、底部にはヘラケズリの後ロクロナデが施される。底部には線刻がある。310は整地面から出土した出土した杯である。復元口径10.8cm、残存高3.3cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰色を呈する。内外面ともにロクロナデが施される。311はSX603から出土した杯である。復元口径10.4cm、残存高3.0cm、焼成は良好で胎土は密、色調は外面が褐灰色、内面が褐灰色を呈する。内外面ともにヨコナデが施される。312はSX602から出土した杯身である。口径10.8cm、残存高3.3cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰色を呈する。内外面にはロクロナデが施される。313は整地面から出土した杯身である。口径13.0cm、残存高2.0cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰色を呈する。内外面ともにロクロナデが施される。314は整地面から出土した杯である。復元底径10.6cm、残存高1.4cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰色を呈する。体部下半内外面にはロクロナデ、底部にはヘラ切りの後ナデが施される。315は整地面から出土した須恵器皿である。復元口径15.9cm、残存高2.3cm、焼成は不良で胎土は密、色調は灰白色を呈する。内外面ともにロクロナデが施される。

316は土坑SK510から出土した小型壺である。口径4.8cm、残存高2.6cm、焼成は良好で胎土は密、色調は外面が灰色、内面が灰色を呈する。口縁部内外面にロクロナデが施される。317は



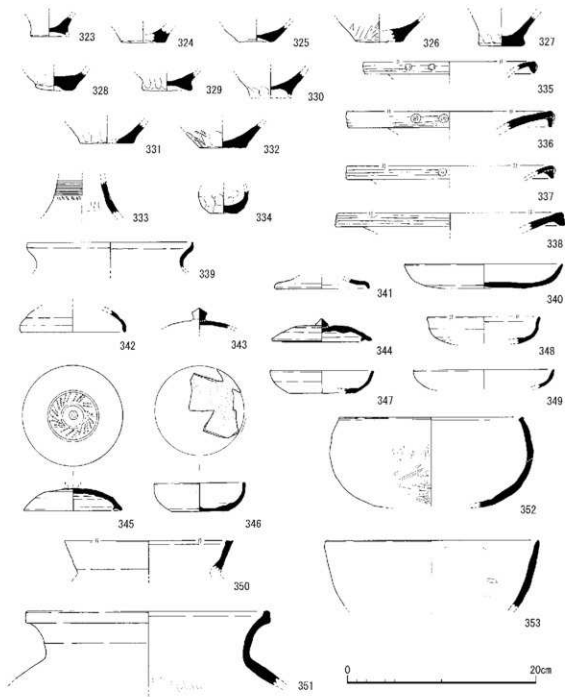
第97図 鉄器生産関連遺構群出土土器実測図2 (1/4)

整地面から出土した高杯である。口径14.2cm、残存高9.4cm、焼成はやや不良で胎土はやや粗、色調は灰白色を呈する。内外面ともにロクロナデが施される。318は鉄器生産関連遺構群西側斜面(溝S D702西側)から出土した鉢Aである。口径22.6cm、残存高5.4cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰白色を呈する。内外面ともにロクロナデが施される。319はS X603から出土した壺Kである。最大径15.7cm、残存高17.8cm、焼成は良好で胎土は密、色調は青灰色を呈する。内外面ともにロクロナデが施され、内面には漆の付着が認められる。320はS X603とS K506から出土した壺である。最大径20.1cm、残存高9.6cm、焼成は良好で胎土は密、色調は外面が灰黄色、内面が黄灰色を呈する。内外面ともにロクロナデが施される。321はS X603から出土した壺である。復元最大径17.0cm、残存高15.9cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰色を呈する。頸部から胴部内外面ともにロクロナデ、胴部下半外面にはロクロケズリ、胴部下半内面にはナデが施される。322はS X603から出土した須臾器壺である。復元最大径17.0cm、残存高13.5cm、焼成は良好で胎土は密、色調は外面が灰色、内面が灰色である。内外面ともにロクロナデが施され、胴部下半内面には自然釉が付着する。

A 地区堆積層 S X310 (第98図323~353、写真図版38-737) 323~338は弥生土器である。323~328は底部破片である。323は底径3.9cm、残存高2.2cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は橙色を呈する。外面にはナデが施され、内面は摩滅しており調整は不明である。324は底径4.6cm、残存高1.1cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は外面がにぶい黄褐色、内面が褐灰色を呈する。内外面は摩滅しており調整は不明である。325は底径3.4cm、残存高1.5cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は外面が橙色、内面が黒褐色を呈する。胴部下半外面と内面は摩滅しており調整は不明であるが底部にはオサエが認められる。326は底径5.2cm、残存高2.35cm、焼成は良好で胎土は粗、色調はにぶい橙色である。外面にはタタキ、内面と底部外面にはナデが施される。327は底径4.6cm、残存高3.0cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は外面が明赤褐色、内面が褐灰色である。胴部下半内外面ともにナデの痕跡が認められ、底部内外面にはオサエが認められる。328は底径4.0cm、残存高2.0cm、焼成は良好で胎土は粗、色調はにぶい黄褐色を呈する。内外面ともにナデが施される。329は復元底径5.0cm、残存高1.9cm、焼成は良好で胎土は粗、色調はにぶい橙色を呈する。内外面ともにナデが施される。330は底径4.6cm、残存高2.5cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は明黄褐色を呈する。胴部下半外面と内面ともにナデが施され、底部外面にはオサエの痕跡が認められる。331は底径5.6cm、残存高2.15cm、焼成は良好で胎土は粗、色調は明黄褐色を呈する。内外面ともにナデが施される。332は底径4.9cm、残存高2.5cm、焼成は良好で胎土は粗、色調はにぶい黄褐色を呈する。内外面ともにナデが施される。333は高杯脚部の破片である。残存高3.4cm、焼成は良好で胎土は密、色調は明赤褐色である。脚部上半に櫛描き、下半にナデが施される。334はミニチュアの壺形土器である。底径3.0cm、残存高2.4cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は外面が灰褐色、内面はにぶい赤褐色を呈する。内外面ともに指オサエの後、ナデが施される。335~338は器台である。335は復元口径20.2cm、残存高1.3cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は明黄褐色を呈する。内外面ともにナデが施され、口縁部には

円形浮文を貼り付ける。336は復元口径21.8cm、残存高2.0cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は外面が明黄褐色、内面が褐色を呈する。内外面ともにナデが施され、口縁部には円形浮文を貼り付ける。337は復元口径21.8cm、残存高1.4cm、焼成は良好で胎土は密、色調は明赤褐色を呈する。内外面ともにナデが施され、口縁部には円形浮文を貼り付ける。338は復元口径23.6cm、残存高1.8cm、焼成は良好で胎土は密、色調は橙色を呈する。内外面ともにナデが施される。

339・340・352・353は土師器である。339は甕である。復元口径17.2cm、残存高2.75cm、焼成



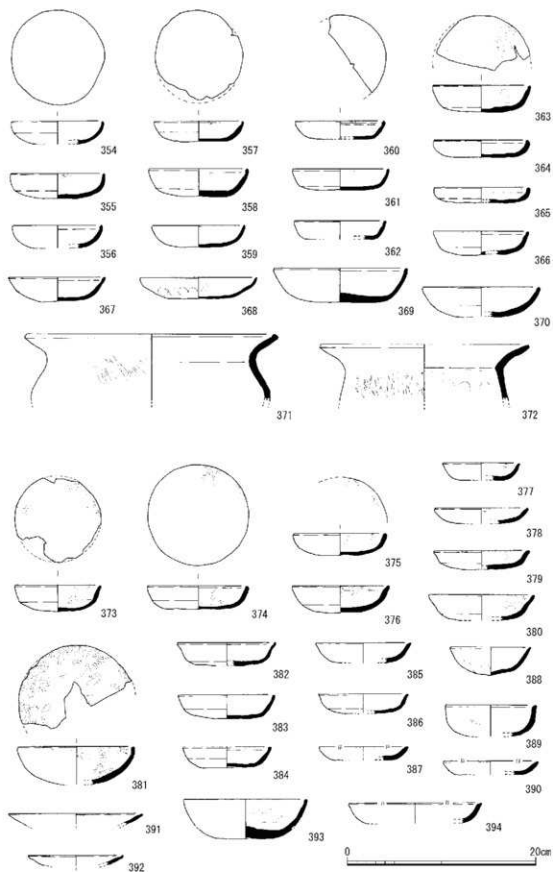
第98図 堆積層 S X310出土土器実測図(1/4)

は良好で胎土は粗、色調はにぶい黄橙色を呈する。内外面ともに摩滅のため調整不明である。340は皿である。復元口径16.8cm、残存高2.65cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は橙色を呈する。内外面ともに摩滅のため調整不明である。352・353は鉢である。352は口径19.6cm、残存高9.5cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調はにぶい黄橙色を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面にはハケメ、内面にはナデが施される。353は復元口径22.8cm、残存高7.0cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は外面が橙色、内面が橙色を呈する。外面は摩滅のため調整不明である。

341～351は須恵器である。341は高杯脚端部である。底径9.9cm、残存高1.05cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰白色を呈する。内外面ともにロクロナデが施される。342は杯H蓋である。口径13.0cm、残存高2.45cm、焼成は良好で胎土はやや密、色調は灰白色を呈する。内外面ともにロクロナデが施される。343～345は杯G蓋である。343は残存高2.1cm、焼成は不良で胎土は密、色調は灰黄色を呈する。つまみは貼り付けで、内外面ともにロクロナデが施される。344は口径9.2cm、残存高2.5cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は灰色を呈する。つまみは宝珠形を呈し、内外面ともにロクロナデが施される。外面には自然釉が付着する。345は復元口径9.4cm、残存高2.5cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰白色を呈する。つまみは貼り付け部分から剥離しており、その周囲に列点文が放射状にめぐる。外面と口縁部内面にはロクロナデ、内面頂部にはヨコナデが施される。九頭神廃寺168次調査5号竪穴住居で出土した7世紀第Ⅲ四半期に属する杯G蓋に類似する⁽²⁰⁾。346・347は杯身である。346は口径9.7cm、器高3.1cm、焼成はやや不良で胎土は密、色調は灰白色を呈する。口縁部外面と内面にはロクロナデ、底部外面にはケズリの後ナデが施される。また、内面には漆が付着する。347は口径11.0cm、残存高2.4cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰黄色を呈する。体部外面及び内面ともにロクロナデが施され、底部外面にはヘラ切りの痕跡が認められる。348は杯身である。復元口径11.8cm、残存高2.8cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰色を呈する。体部外面と内面にはロクロナデ、底部外面にはヘラ切りの痕跡が認められる。349は皿である。口径15.0cm、残存高2.0cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰白色を呈する。内外面ともにロクロナデが施される。350は壺である。口径17.8cm、残存高3.4cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰色を呈する。内外面ともにロクロナデが施される。351は甕である。復元口径25.8cm、残存高7.2cm、焼成はやや不良で胎土はやや粗、色調は明オリブ灰色を呈する。口縁部内外面にはロクロナデが施され、内面肩部には当て具痕が残る。

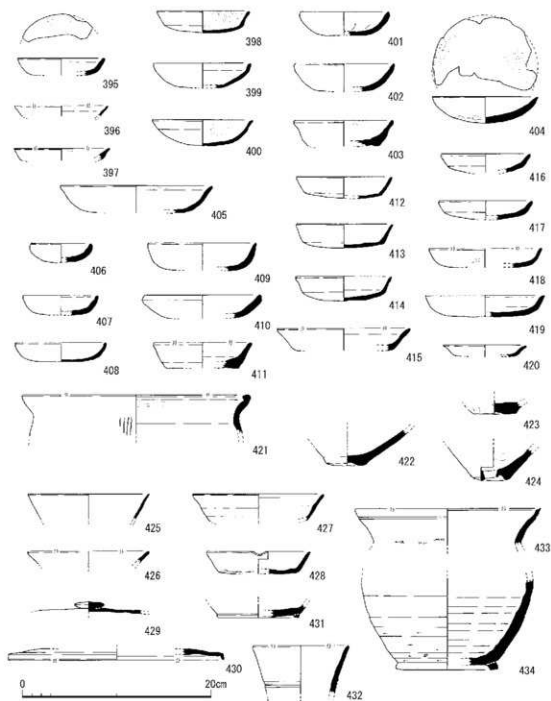
(関広尚世)

B地区瓦溜りSX21出土土器(第99図354～第100図434) 354～372は瓦溜りSX21の最下層から出土した土師器である。354～368は皿で、口径9.4～12.4cm、器高1.65～3.0cmを測る。口縁部にヨコナデを、内外面ともにナデを施す。底部外面に指オサエ痕がみられるものもある。また、355・357～359・368～362・364は内面に煤が付着しており、灯火器として使用されていたものと考えられる。369・370は杯である。371・372は甕である。内外面ともに摩滅しているが、体部外面には縦方向のハケメが部分的に残り、口縁部はヨコナデがみられる。



第99図 瓦溜り S X 21出土土器実測図1 (1/4)

373～394は瓦溜りの下層から出土した土師器である。373～387・390～392・394は皿である。373～381・391は内面には煤が付着しており、灯火器として使用されていたものと考えられる。376は口径9.0cm、器高2.8cmを測る。内外面ともナデを施し、胎土は密で1mm以下の長石を含む。口縁部には複数の煤が付着していることから数回使用されたことがうかがえる。381は口径12.4cm、器高4.0cmを測る。内外面ともナデを施し、底部内面および口縁部には多くの煤が付着する。388・389・393は杯である。



第100図 瓦溜り S X21出土土器実測図2 (1/4)

395～421は出土層位の明らかでない土師器である。395～420は皿である。395～405は、内面および口縁部に煤が付着しており、灯火器として使用されていたものと思われる。421は甕である。口縁端部を断面三角形状に肥厚させ、内面に横方向のハケを施す。

422～424は弥生土師の底部片である。422は壺の底部、423は甕の底部と思われる。424は有孔鉢の底部である。422～424は瓦溜りの最下層から出土した。

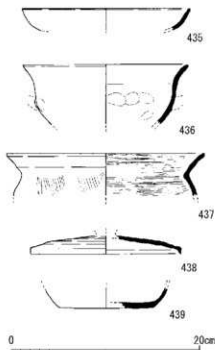
425～434は須恵器である。425～427は杯である。428は瓦溜りの下層より出土した片口の杯で、口径10.8cm、器高2.4cmを測る。底部外面にはヘラケズリがみられ、内面および口縁部には回転ナデを施す。429・430は杯B蓋の破片である。431は杯Bである。432は壺KまたはLの口縁部の破片である。復元口径は10cmで、外面には沈線をも2条施す。433は甕の口縁部である。434は瓦溜りの下層より出土した壺Lの体部下半と底部である。体部外面下半に回転ヘラケズリを、体部外面上半と内面に回転ナデを施す。

(村田和弘)

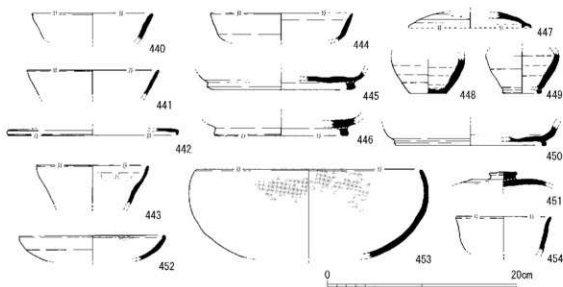
B地区溶解炉S L 1 関連(落ち込みS X 20)出土土器(第101図435～439) 土師器(435～437)と須恵器(438・439)が出土した。435は杯である。溶解炉廃絶後の投棄遺物層であるS X 20第2・3層から出土した。口径17.8cm、残存高2.3cm、焼成は良好で胎土は粗、色調は明褐色を呈する。口縁部および体部外面は摩滅のため調整は不明であるが、内面にはヨコナデの痕跡が認められる。436は鉢である。S X 20第5・6層から出土した。口径17.5cm、残存高6.35cm、焼成は良好で胎土はやや粗、色調は橙色を呈する。把手が胴部に張り付けられている。外面は摩滅のため調整不明であるが、内面にはオサエの痕跡が認められる。また、口縁部には外面に黒斑が認められる。437は甕である。S X 20第4層から出土した。口径21.0cm、残存高4.3cm、焼成は良好で胎土は密、色調は外面にぶい橙色、内面にぶい橙色を呈する。内外面ともにハケメが残る。438は杯B蓋である。S X 20第4層から出土した。口径16.0cm、残存高2.0cm、焼成は良好で胎土は密、色調は灰色を呈する。外面はロクロケズリ、口縁部外面と内面にはロクロナデの痕跡が認められる。つまみの痕跡が認められる。439は杯Aである。S X 20第2・3層から出土した。復元底径9.1cm、残存高2.25cm、焼成は良好で胎土は密、色調は外面が灰白色、内面は灰色を呈する。内外面ともにロクロナデが施され、底部外面はヘラケズリの後、ナデが施される。

(関広尚世)

B地区瓦集中箇所出土土器(第102図440～454) 443が製塩土器、452が土師器で、その他はいずれも須恵器である。440～452は瓦集中箇所S X 24から出土した。440・



第101図 溶解炉S L 1 関連(落ち込みS X 20)出土土器実測図(1/4)



第102図 瓦集中箇所出土土器実測図(1/4)

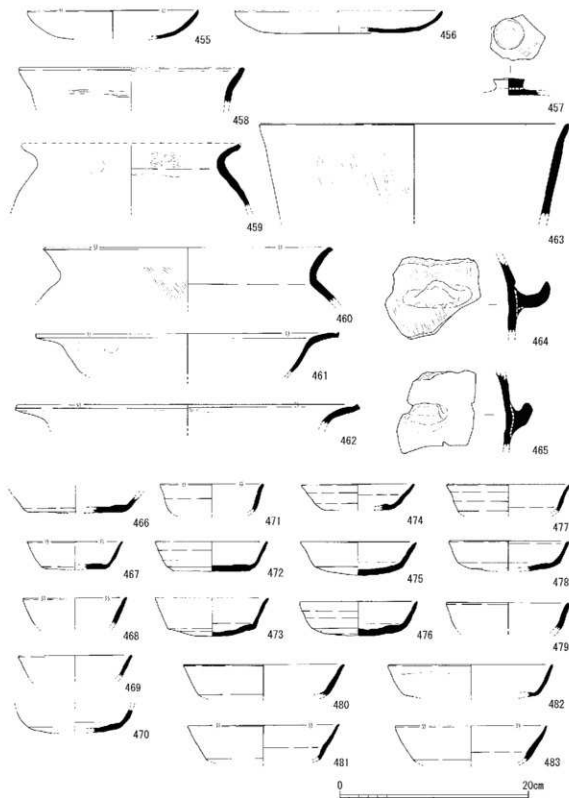
441は杯AもしくはBの、442は杯B蓋の口縁部である。443は製塩土器である。器壁は薄く、胎土は密で1～3mm大の長石を含む。焼成は堅緻であるが、2次的に火を受けている可能性がある。444は杯の口縁部、445・446は杯Bの底部である。447は杯B蓋の口縁部である。内面にかえりを有する。448・449は壺Mの体部下半である。体部外面はヘラケズリ後回転ナデを施す。448の底部はヘラ切り後未調整、449の底部には高台が付く。450は杯Bの底部である。451は杯B蓋のつまみとその周囲の頂部の破片である。452は土師器皿で、口縁部に煤が付着していることから灯火器として使用されたものと思われる。453・454はIX-j11区の瓦集中箇所S X 24周辺から出土した。453は鉢Aである。内湾する口縁部に、欠損するもの9丸底気味の底部を伴うものと考えられる。内外面に漆が付着している。454は杯の口縁部である。

②遺物包含層出土土器

V区出土土器(第103図455～第104図524) A地区北部にあたるV区の丘陵東側斜面やトレンチ調査の各トレンチから出土したものである。個々の出土地点は特に必要な場合を除いて記さない。

455～465は土師器である。455・456は皿である。455は内外面ともに摩滅が著しい。胎土には3mm以下の長石・チャートを含む。456は内外面ともに摩滅が著しい。胎土には4mm大の長石や2mm以下の長石を含む。457は蓋のつまみである。表面にミガキを施す。458～460は甕である。458は口縁部である。内外面にナデを施す。459は口縁部から肩部にかけての破片で、口縁部内面にはハケ、外面にナデを施し、肩部にハケを施す。460は口縁部で、外面にはハケ、内面は摩滅しているがナデを施すようである。461・462は鍋である。461は口縁部の破片である。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明であるが、口縁部外面に指オサエの痕跡が残る。462は口縁部の破片である。内外面ともに摩滅しているが、口縁部内面にはハケが残る。463は瓶の口縁部である。外面に縦方向のハケ、内面に縦方向のナデを施す。胎土はやや粗く、3mm以下の石英・長石・チャートを含む。464・465は甕の把手である。464は体部外面に縦方向のハケを施す。内面には把手を貼り付けた際の指オサエ痕がみられる。465は外面にはナデを施す。

466～524は須恵器である。466～483は杯Aもしくは杯である。466は杯Aの底部片である。467は内外面ともに回転ナデを施し、底部はヘラ切り後ナデを施す。胎土は密で堅緻であるが、3mm程の長石を含む。468は口縁部の破片である。回転ナデを施す。469は須恵器杯の口縁部である。

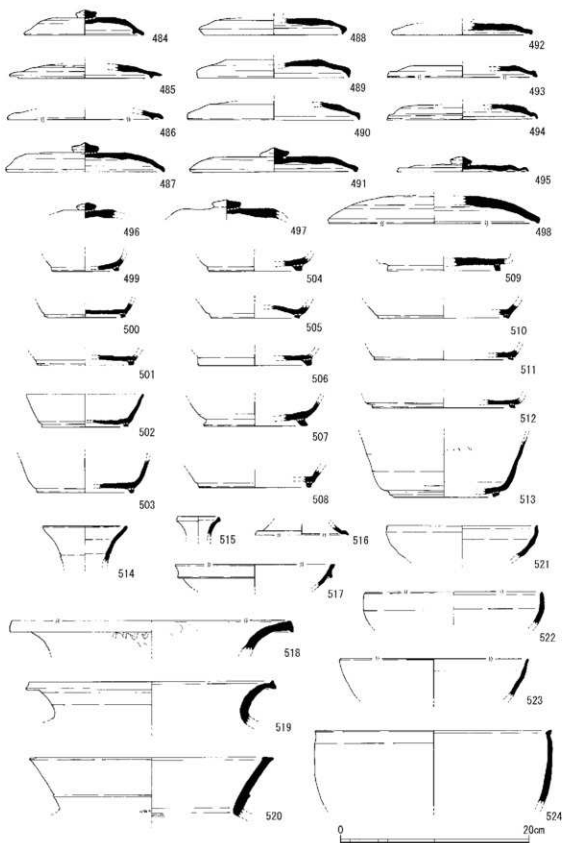


第103図 V区遺物包含層出土土器実測図1 (1/4)

470は底部の破片である。内外面に回転ナデがみられ、底部外面にヘラ切り後ナデを施す。471は口縁部の破片である。内外面に回転ナデを施す。472は内外面ともに回転ナデ、底部外面にヘラ切り・ヘラケズリを施す。473は内外面とも回転ナデ、外面底部にはヘラ切り後ナデを施す。474は内外面に回転ナデ、底部外面にヘラ切り痕がみられる。475は内外面には回転ナデ、底部外面にヘラ切り後ナデを施す。胎土は密で堅緻、3mm以下の長石を含む。476は内外面には回転ナデ、底部外面に回転ヘラケズリを施す。477は小片であるが、内外面とも回転ナデを施す。478は内外面に回転ナデ、底部外面はヘラ切り後未調整である。胎土は密で、1～3mmの長石、1mm程度の石英を含む。外面の一部に自然釉がみられる。479は内外面に回転ナデを施す。480～483はいずれも口縁部の破片で、内外面に回転ナデがみられる。484～497は杯B蓋である。484～486は内面にかえりを有する。484は内面と外面口縁部に回転ナデ、頂部に回転ヘラケズリを施す。胎土は密で、2～6mmの長石が含まれる。485は内面と外面口縁部に回転ナデ、頂部に回転ヘラケズリを施す。486は口縁端部の破片である。487～495は内面にかえりを有さない。487は口径16.3cm、器高3.15cmを測る。内面と外面口縁部に回転ナデ、頂部に回転ヘラケズリを施す。また、頂部には焼成による歪みがある。488～490は口縁部の破片である。491は口径17.8cm、器高3.1cmを測る。内面と外面口縁部に回転ナデ、頂部に回転ヘラケズリを施す。492・493は口縁部の破片で、口縁端部が屈曲する。内面と口縁端部に回転ナデ、頂部に回転ヘラケズリを施す。494・495は溝S D039周辺の遺構精査時に出土した。ともに口縁端部が屈曲し、内面と口縁端部に回転ナデ、頂部に回転ヘラケズリがみられる。496・497は蓋のつまみとその周辺部の破片である。498は皿B蓋である。内面から口縁部外面にかけて回転ナデ、頂部に回転ヘラケズリ後ナデを施す。499～513は杯Bである。500は底部内面には回転ナデ後に一方方向のナデ、底部外面はヘラ切り後未調整である。501も底部内面にはヨコナデ、外面底部はヘラ切り後未調整である。502は口径12.4cm、高台径9.2cm、器高3.5cmを測る。内外面とも回転ナデを施す。503は底部の破片で、内面に回転ナデを施す。504～512は底部の破片である。509は底部内面には不定方向のナデ、底部外面にはヘラ切り後高台を貼り付ける。510～512は内外面とも回転ナデ調整で、底部に低い高台が付く。513は内外面とも回転ナデ、底部には低い高台が付く。残存高6.3cm、底径10.45cmである。514は壺Kもしくは壺Lの口縁部である。口径8.8cmを測る。内外面ともに強いヨコナデを施し、頸部に沈線を1条施す。515は壺Mの口縁部である。口径4.5cmを測る。内外面とも回転ナデを施す。516は高杯の脚部と思われる。内外面に回転ナデを施す。517は小片のため器種は不明である。内外面とも回転ナデを施す。518～520は甕である。518は口縁部に回転ナデを施し、外面には波状文を施す。519は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部に回転ナデを施し、一部に自然釉が付着している。520は口縁部で、回転ナデを施す。口径23.7cm、残存高5.9cmを測る。521～524は鉢である。いずれも口縁部から体部にかけての破片で内外面に回転ナデを施す。

Ⅵ区出土土器(第105図525～542) A地区南部の東半部にあたるⅥ区丘陵斜面で検出した堆積層S X310や谷状地形S D294の周辺の重機掘削や精査中に出土したものである。

525～530は土師器である。525は杯である。口径11.8cm、器高3.1cmを測る。内外面ともに摩



第104図 V区遺物包含層出土土器実測図2(1/4)

減しているが、内面には放射状の暗文、底部外面にヘラケズリ後ナデを施す。526は大皿の破片である。内外面ともに摩滅しているが、底部外面にヘラケズリ後ナデを施し、指オサエが認められる。また、底部外面には部分的に煤が付着する。527は杯の破片である。内外面ともヨコナデを施す。528～530は甕の口縁部である。内外面ともヨコナデを施し、口縁端部の内面には黒斑がみられる。529は内外面ともに摩滅しているが、体部外面に縦方向のハケを施す。530は内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

531～542は須恵器である。531は杯Hである。口径9.6cm、器高3.4cmを測る。胎土は密で堅微、3mm以下の砂粒を含む。532は高杯の杯部である。杯底部外面には同一方向に3条のヘラ記号がみられる。533は杯Aである。内外面に回転ナデを施し、底部外面はヘラ切りの痕跡が認められる。534・535は杯Bの底部である。536は杯の口縁部である。内外面とも回転ナデを施す。537は杯B蓋である。538は蓋の破片である。内外面とも回転ナデで、頂部に1条の沈線を施す。539は鉢Aである。口縁端部は内湾し、内外面ともにヨコナデ、内面底部は指オサエ、外面底部は不定方向のヘラケズリが施されている。540～542は大型の甕である。540は外面には4条で構成される波状文が2段に施されている。541は外面には8条の波状文が施されている。内面には同心円の当て具痕が残り、回転ナデを施す。542は内外面に回転ナデ、口縁部外面には2段の沈線がみられ、頸部には指オサエの痕跡がみられる。

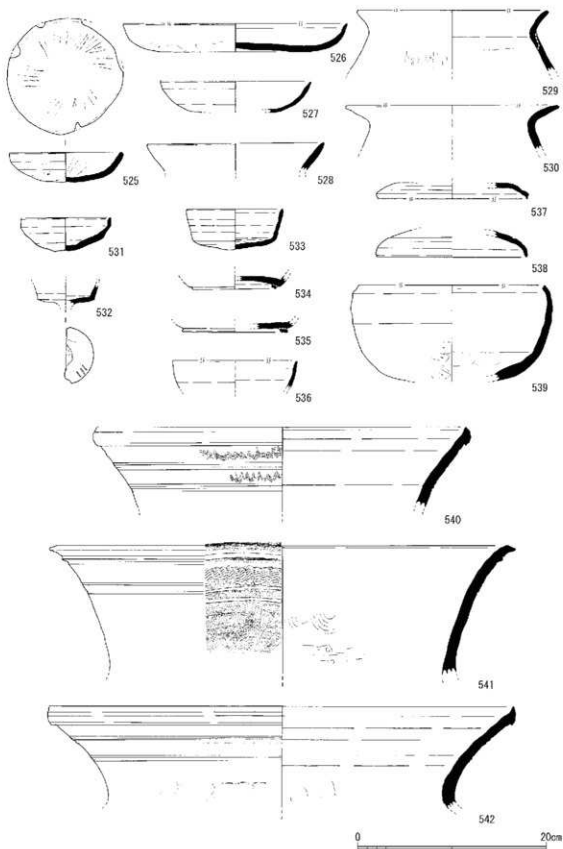
Ⅶ区出土土器(第106図543～551) A地区中央部の西半部にあたるⅦ区南東隅地区の重機掘削や精査中に出土したものである。個々の出土地点は特に必要な場合を除いて記さない。

543～549は須恵器である。543は杯である。内外面とも回転ナデを施し、底部にはヘラ切り後ナデを施す。544は杯の底部である。内外面とも回転ナデを施し、底部外面にはヘラ切り後ナデを施す。545は壺の底部と思われる。杯の底部よりも器壁が厚く、内外面には強い回転ナデを施し、底部はほぼ水平にヘラ切りした後ナデを施す。546・547は杯Gまたは杯Bの蓋の口縁部である。内面にかえりを有する。548は杯の口縁部で、端面は内傾する面をなす。549は杯の口縁部で、内外面に回転ナデを施す。

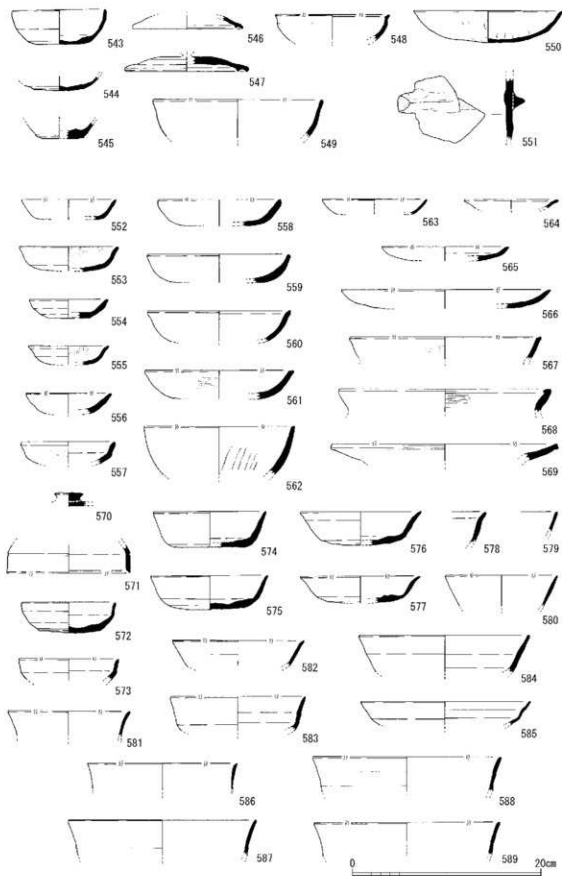
550・551は土師器である。550は皿である。内外面にナデを施し、底部内外面には指オサエ痕がみられる。551は鉢または羽釜の破片と思われる。外面に突帯を貼り付ける。内外面とも摩滅が著しく、調整は不明である。

Ⅷ区出土土器(第106図552～第107図622) Ⅷ区(B地区)の重機掘削および精査中や近世の遺物包含層などから出土したものである。個々の出土地点は特に必要な場合を除いて記さない。

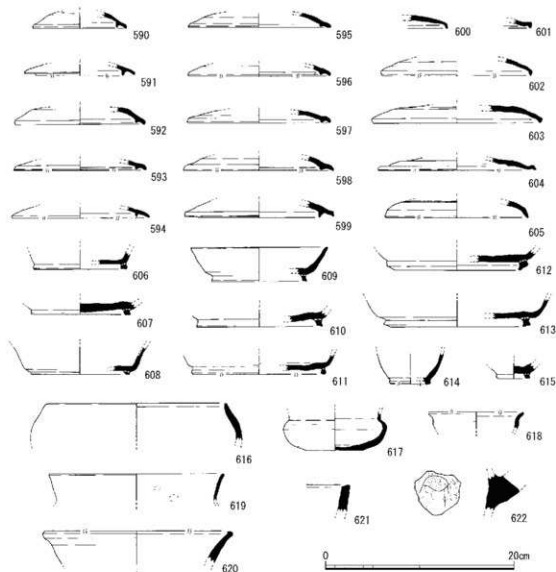
552～570は土師器である。552～557は小型の杯である。553・555・557は口縁部内面に煤が付着していることから、灯火器として使用していたと考えられる。554・556は内外面とも摩滅が著しく、調整は不明である。557は内外面にナデを施す。558～561は皿である。559は内面にヨコナデを施す。口縁部外面は摩滅し、底部外面には指オサエ痕が残る。561は外面に横方向のハケを施す。562は碗の破片で、内面に放射状の暗文がみられる。563～566は皿の口縁部である。563・564は口縁端部に煤が付着しており、灯火器と思われる。565は内外面ともにヨコナデを施し、底



第105図 VI区遺物包含層出土土器実測図(1/4)



第106图 VII・IX区遺物包含層出土土器実測図(1/4)



第107図 IX区遺物包含層出土土器実測図(1/4)

部外面には指オサエ痕が残る。566は内外面ともに摩滅が著しく、調整は不明である。567～569は甕の口縁部である。567は内外面にヨコナデを施す。568は外面はヨコナデ、内面は横方向のハケを施す。569は内面の調整は摩滅のため不明であるが、外面にはヨコナデを施す。570は蓋のつまみである。

571～622は須恵器である。571は杯蓋の口縁端部である。小片であるが、形状から古墳時代後期初頭前後のものである可能性がある。572は杯である。口縁部外面と内面に回転ナデ、底部外面にヘラ切り後粗いナデを施す。573は杯の口縁部である。574～577は杯Aである。574は内外面とも回転ナデ、底部外面にヘラ切り後粗いナデを施す。575・576は内外面とも回転ナデ、底部外面にヘラ切り後粗いナデを施す。577は内外面とも回転ナデを施す。578～584は杯の口縁部である。内外面とも回転ナデを施す。585は口縁部の立ち上りの中位でやや強く屈曲する浅い杯または皿であろう。586は杯の口縁部と思われる。587～589は杯の口縁部で、内外面とも回転ナデを施す。

590は杯G蓋で、口径9.7cm、残存高1.7cmである。口縁端部に回転ナデを施す。胎土は密で、1mm以下のチャート・長石を含む。焼成は堅緻である。591～599はかえりを有する杯B蓋である。592は口縁部に焼成による歪みが見られる。600～604はかえりのない杯B蓋である。602は口縁部外面には自然軸が付着している。603・604は頂部外面に回転ヘラケズリ、口縁部と内面に回転ナデを施す。605は蓋の口縁部である。頂部外面に沈線を3条施す。類似した資料が、VI区の遺物包含層より出土している(第105図538)。590～605は口縁部の残存率が1/12～3/12と小片である。606～613は杯Bである。609は内外面に回転ナデを施す。胎土はやや粗く、3～5mmの長石を含む。614・615は壺Mである。614の胎土は密で、焼成は堅緻である。5mm大の長石、2mm以下の砂粒を含む。615は底部に強いナデを施す。高台は貼り付けである。616は鉢の口縁部である。口縁部は内湾し、端部外面に自然軸が付着している。617は壺Cである。1/3ほど残存し、外面の体部下半から底部にかけてヘラケズリとナデを、内面にはナデと指オサエを施す。618は小型の鉢の口縁端部と思われる。619～621は壺の口縁部である。621は壺Cの口縁端部片と思われる。622は土師質の把手であるが、器種は不明である。把手の接合部は粗く成形されている。

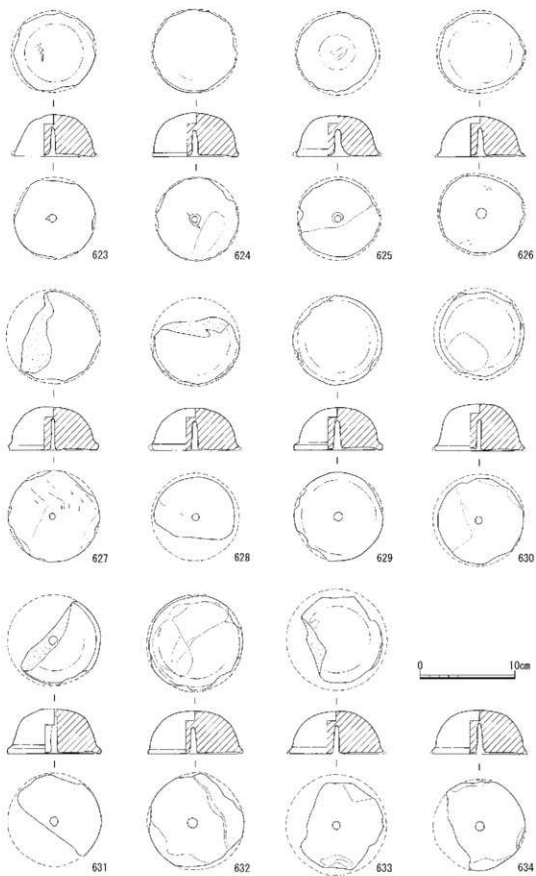
(3) 土製品

① 覆鉢形土製品(第108・109図)

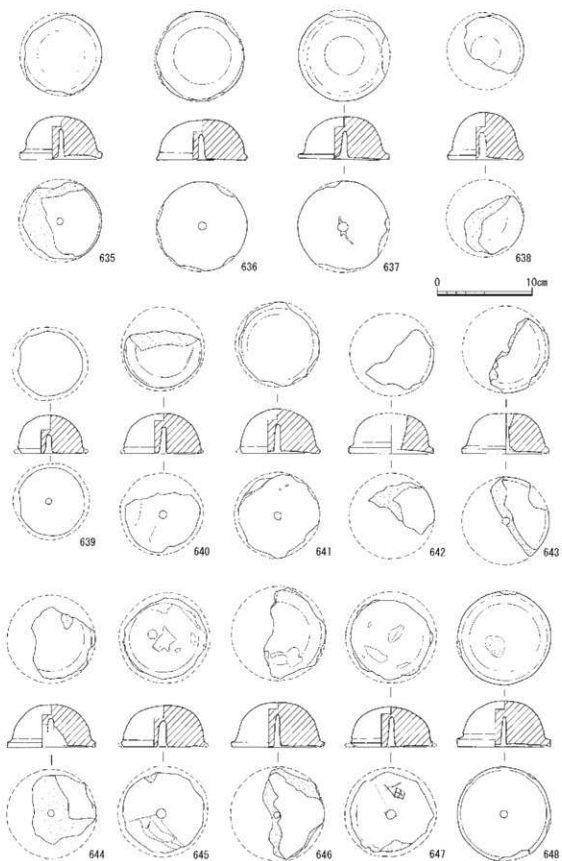
美濃山廃寺で出土した覆鉢形土製品は、半球状を呈し、底部の周囲に幅3～5mm程度の凸帯がめぐる素焼きの製品である。底部中央には穴が穿たれている。完形品に近いものから破片を含めると第6次調査では28点出土した。図化できたのはそのうち26点である。

623～634は土坑S K267から出土した。627・629はほぼ完形である。623は残存底部径8.7cm、高さ4.45cm、底部穿孔径0.8cm、深さ2.8cmを測る。胎土は粗で長石を多く含む。焼成は軟質で、色調は灰白色である。624は残存底部径8.8cm、高さ4.6cm、穿孔径0.7cm、深さ2.6cmを測る。胎土は粗で3～5mmの長石を含む。焼成は堅緻で須恵器に近い。625は残存底部径8.7cm、高さ4.3cm、穿孔径1.1cm、深さ2.7cmを測る。胎土は粗で1.5mmの長石を含む。焼成は軟質である。626は残存する底部径は8.9cm、高さ4.3cm、穿孔径1cm、深さ2.8cmを測る。胎土は粗で1～3mmの長石を含む。焼成は軟質である。627は底部径8.3cm、高さ4.6cm、穿孔径0.7cm、深さ3.3cmを測る。胎土はやや密で、焼成は堅緻である。628は残存底部径8.8cm、高さ4.5cm、穿孔径0.7cm、深さ3cmを測る。胎土は粗で、焼成は軟質である。629は底部径9.6cm、高さ4.5cmを測る。胎土は粗で、焼成はやや軟質である。630は残存底部径10cm、高さ4.7cm、穿孔径0.8cm、深さ3.3cmを測る。胎土は粗で3mmの長石を含む。焼成は軟質である。631は底部径9.6cm、高さ5cm、穿孔径0.9cm、深さ2.4cmを測る。胎土は粗で2.5mmの長石を含む。焼成は軟質である。632は残存底部径10cm、高さ4.5cm、穿孔径1.1cm、深さ2.7cmを測る。胎土は粗で5mmの長石を含む。焼成は軟質である。633は残存底部径10cm、高さ5cm、穿孔径0.8cm、深さ3.3cmを測る。胎土は粗で3mmの長石を含む。焼成は軟質である。634は残存底部径10.2cm、高さ4.6cm、穿孔径0.95cm、深さ3.2cmを測る。胎土は粗で、焼成はやや軟質である。

635～637は土坑S K300から出土した。635は底部径8.8cm、高さ4.5cm、穿孔径0.7mm、深さ



第108図 覆鉢形土製品実測図1 (1/4)



第109図 覆鉢形土製品実測図2 (1/4)

2.9cmを測る。胎土はやや粗で2mm以下の長石を含む。焼成は堅緻である。636は底部径9.4cm、高さ4.2cm、穿孔径0.9cm、深さ2.5cmを測る。胎土は粗で、焼成はやや軟質である。637は底部径9.9cm、高さ4.7cm、穿孔径0.8cm、深さ3.4cmを測る。胎土はやや密で、焼成は堅緻である。

638～648はA・B地区掘削時や遺物包含層から出土した。638はB地区落ち込みSX25から出土した。底部径7.8cm、高さ5.1cmを測る。穿孔径・深さは欠損しており不明である。胎土は粗で、焼成はやや軟質である。639はB地区の境界溝から出土した。底部径7cm、高さ4cm、穿孔径0.7cm、深さ1.8cmを測る。胎土は粗で2.5mmの長石を含む。焼成は軟質である。640はA地区鉄器生産関連遺構群の東側斜面で出土した。底部径8.2cm、高さ4.25cm、穿孔径0.8cm、深さ2.8cmを測る。胎土は粗で1mmの長石を含む。焼成は堅緻である。641はB地区瓦集中箇所SX23から出土した。底部径8.3cm、高さ4.7cm、穿孔径0.8cm、深さ2.9cmを測る。胎土は粗で、焼成は軟質である。642はA地区鉄器生産関連遺構群の東側斜面で出土した。復元底部径9cm、高さ4.05cmを測る。穿孔径・深さは欠損しており不明である。胎土は粗で、焼成は軟質である。643はA地区中央部南東斜面で出土した。復元底部径9.2cm、高さ4.25cmを測る。穿孔幅・深さは欠損しており不明である。胎土は粗で2mmの長石を含む。焼成は軟質である。644は堆積層SX486から出土した。復元径9.35cm、高さ4.5cm、穿孔径0.6cmで、深さは欠損しており不明である。胎土は粗で1mmの長石を含む。焼成は堅緻である。645はB地区瓦集中箇所SX24から出土した。残存底部径9cm、高さ4.25cm、穿孔径1cm、残存する深さ2.7cmを測る。胎土は粗で、焼成は軟質である。646は土坑SK267周辺で出土した。底部径9.8cm、高さ4.7cm、穿孔径0.8cm、残存する深さ3.4cmを測る。胎土はやや密で、焼成は堅緻である。647はSX486掘削時に出土した。底部径は8.3cm、高さ4.3cmを測る。穿孔幅は1.1cm、深さ3.2cmを測る。胎土はやや密で、焼成は堅緻である。底部にはヘラで「大田」と判読できる線刻が確認できる。648は土坑SK300の東側斜面で出土した。底部径9.8cm、高さ4.9cm、穿孔径0.7cm、深さ2.9cmを測る。胎土は粗で1～3mm大の長石を含む。焼成は良好で堅緻である。

覆鉢形土製品は、美濃山廃寺ではこれまで第1～4次調査で3点、採集品1点が出土している。今回出土したのも含めていずれも形状が類似しており、焼成は硬質のものと軟質のものとの2種類がある。法量は、若干径が小さいものがみられるものの、径10cm前後、高さ4～5cmである。断面観察から、半球状に成形した後、凸帯を貼り付け、ナデにより端部を仕上げたと考えられる。表面は丁寧なナデを施しており、裏面はヘラ削り後ナデを施す。さらに焼成前に、裏面中央部に径約1cm、深さ約3cmの小穴を穿つ。この小穴はすべての覆鉢形土製品に認められる。

(村田和弘)

②ひさご形土製品(第110・111図、図版第44～739)

成形について 第110図に部分名称を示す。ひさごの二段目と最下段のくびれ部分で上段と下段に分け、それを焼成前に接合したのではないかと推測される。まず上段は、棒状に近い中子のようなものに粘土を押し当てて外部を成形して、ロクロナデによる調整を行う。その後、中子を外し、内面を外形に合わせて成形したと考えられる。最下段はくびれまでの一段分を成形し、底

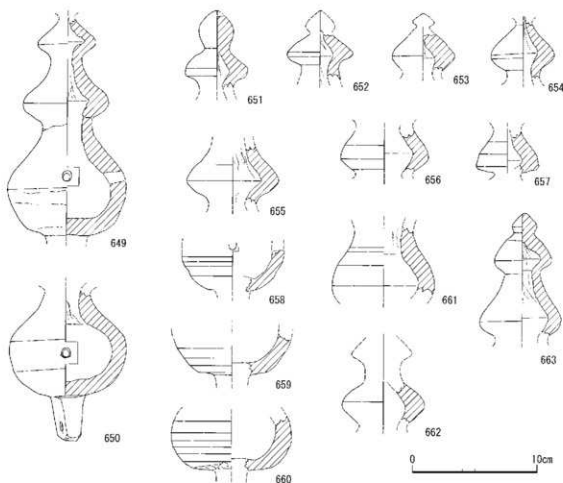
部はケズリで粗く仕上げたのち、内外面ともにロクロナデによる調整を行い、その後、結合部を底部中央に貼り付けたと考えられる。ひさご最下段の穿孔は焼成をよりよく行うためのものであった可能性もあるが、140頁で詳述したい。また、結合部の穿孔は設置時に何かに固定するための役割を担っていたと考えられる。

出土遺物について 第6次調査では16点が出土し、うち15点を図示した。

649・650は落ち込みS X20から出土した。649は先端部の宝珠形を欠くが、ひさご形が3連つながった形状をとる。底部には結合部を貼り付けた痕跡がある。中空で最下段の最も張り出した部分に穿孔が認められる。最大径9.6cm、残存高17.3cm、厚さ1.3cmを測る。焼成は良好で胎土は密、色調は灰白色である。後述する650や651などから、復元長は21cm程度である。650はひさご形最下段と結合部が残存する。体部は中空で、最も張り出した部分に穿孔が認められ、次段とのあいだに絞りの痕跡が認められる。結合部は中実で穿孔が認められる。最大径9.2cm、残存高11.8cm、厚さ1.0cmを測る。焼成は良好で胎土は密、色調は灰白色である。651は落ち込みS X25周辺から出土した。宝珠部がわずかに欠損するが、先端部の宝珠形からひさご形一段目の破片である。直径4.9cm、残存高6.1cm、厚さ1.5cmを測る。焼成は不良で、胎土は粗、色調は灰白色である。652・653は溝S D201から出土した。652はひさご形一段目の破片である。宝珠部分にかけて絞りの痕跡が認められる。直径5.2cm、残存高3.5cm、厚さ1.6cmを測る。焼成は不良で胎土は粗、色調は灰白色である。653はひさご形一段目の破片である。最大径4.9cm、残存高3.0cm、厚さ1.6cm、焼成は良好で胎土はやや密、色調は灰色である。654は掘立柱扉S A250・251の検出面から出土した。ひさご形一段目の破片である。最大径5.1cm、残存高4.4cm、厚さ1.4cmを測る。焼成は不良で、胎土は粗、色調は灰白色である。655はA地区・B地区の境界溝掘削中に出土した。上部部の体部の傾斜が比較的急であることから、ひさご形二段目の破片である。一段目との間に絞りの痕跡が認められる。最大径7.4cm、残存高4.55cm、厚さ1.4cmを測る。焼成は良好で、胎土は密、色調は灰白色である。656は鉄器生産関連遺構群東側包含層から出土した。上部部の体部の傾斜が比較的急であることから、ひさご形二段目の破片である。一段目との間に絞りの痕跡が認められる。最大径7.1cm、残存高3.4cm、厚さ1.3cmを測る。焼成はやや良好で、胎土は密、色調は灰色である。657は瓦溜りS X21下層から出土した。ひさご形一段目の破片である。最大径5.0cm、残存高3.3cm、厚さ1.5cmを測る。焼成は良好で、胎土は密、色調は灰白色である。658はV-e17区包含層から出土した。ひさご形最下段とその穿孔部、結合部の痕跡が認められる。中空で最下段の最も張り出した部分に穿孔が認められる。残存高3.2cm、厚さ0.9cmを測る。焼成は良好で、胎土は密、色調は灰色である。659はIX-h11区包含層から出土した。ひさご形最下段と結合部の



第110図 ひさご形土製品部分名称



第111図 ひさご形土製品実測図(1/3)

痕跡が認められる。最大径9.4cm、残存高3.55cm、厚さ1.1cmを測る。焼成は良好で、胎土は密、色調は灰白色である。660はIX-i12区包含層から出土した。ひさご形最下段と結合部の痕跡が認められる。最大径9.6cm、残存高4.3cm、厚さ1.3cmを測る。焼成は良好で、胎土は密、色調は灰色である。661は堆積層S X 486から出土した。ひさご形最下段の破片である。最大径8.2cm、残存高5.15cm、厚さ1.3cmを測る。焼成は良好で、胎土は密、色調は灰白色である。662はIX-j3区南斜面掘削時に出土した。ひさご形二段目の破片である。最大径6.6cm、残存高3.4cm、厚さ1.6cmを測る。焼成は良好で、胎土はやや密、色調は灰白色である。663はIX-c2区包含層から出土した。宝珠形から二段目までの破片である。内面には絞りの痕跡が認められる。最大径6.5cm、残存高9.8cm、厚さ1.1cmを測る。焼成はやや良好で、胎土は密、色調は灰白色である。738は結合部である。(関広尚世)

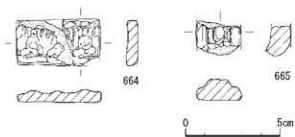
③埴仏(第112図664・665)

埴仏はB地区溶解炉S L 1から2点出土した。664は炉廃業後に堆積した層(第3層)から出土した。この埴仏は天蓋の下、蓮台の上に尊像が座禅を組む図像が横に3列並ぶ三尊連坐埴仏である。長さは2.45cm、幅4.45cm、最大厚0.7cmを測る。中央の尊像の頭部から左半身部分と右下の隅が欠損している。665は落ち込みS X 20に設定したサブトレンチ掘削中に出土した。この埴仏

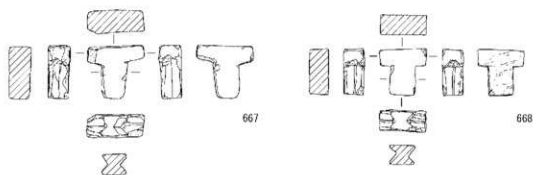
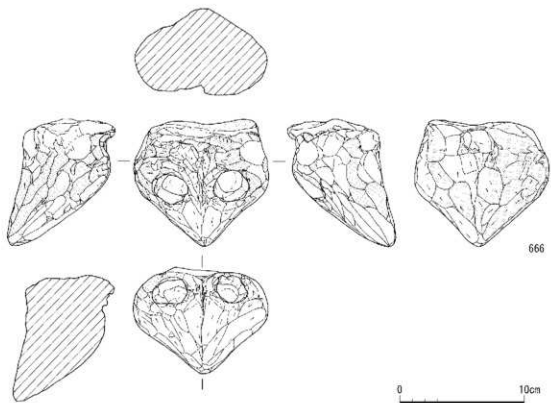
は六尊連立埴仏の尊像の肩から膝にかけての部分片である。残存する長さは1.85cm、幅2.4cm、厚さ1.15cmを測る。

④不明土製品(第113図666~668)

A地区南部の堆積層S X 486から3点出土した。666はくちばしのような形をした土製品である。先端部から破断面まで9.7cm、最大幅10.6cm、厚みは6.6cmを測る。上面と思われる面には2つの目か鼻のような円形の孔がある。全面をヘラ



第112図 埴仏実測図(1/2)



第113図 不明土製品実測図(1/3)

で削って整形、調整している。胎土は密で、2～3mmの長石を含む。焼成は堅緻で、色調は灰白色である。全面に赤色顔料が付着する(網掛け部分)。用途については不明であるが、美濃山廃寺表探遺物の中に類似品があり、用途不明の瓦質土製品として報告されている^(註25)。形状は今回出土した資料と少し異なり、亀の首部に似ている。最大幅は11cmを測り、ほぼ同じ大きさである。

667・668はT字形をした用途不明の土製品である。667は縦横3.7cm、厚さ1.6cmを測る。側面にはV字に彫られた深さ約4mmの溝がある。668は縦4.2cm、横4.45cm、厚さ1.75cmを測る。667と同様に側面にV字に彫られた深さ約5mmの溝がある。2点とも各面は切り取られたような平面を成しており、色調は黒色である。胎土は密で、1mm程度の長石や砂粒を含む。

(村田和弘)

(4) 冶金関連遺物・金属器遺物

① 鍛冶関連遺物(第114・115図)

鉄製品、羽口、鉄滓が出土した。鉄器生産関連遺構群からは遺構埋土を持ち帰り水洗を行ったが粒状滓および鍛造剥片は採集できなかった。出土した冶金関連遺物の総重量は2,508.8g、最も多く出土した鉄滓1,057.0g、炉壁297.0g、羽口638.8g、木炭66.0gである。他の調査区からの鉄製品も含めると515.9gとなった。鉄塊系遺物は認められなかった。

669～677は釘である。建築資材として用いられた出土鉄釘の多くは錆化がすすんでおり、原形を保つものは少ない。他方、法隆寺金堂と五重塔の昭和解体修理で発見された白鳳期の鉄釘があり、残存状況がよい。これらの鉄釘は鍛造で頭部形状から4型式に大別されている^(註26)。すなわち方頭形、鉤頭形、傘頭形、折曲頭形である。この分類を用いて以下、詳述する。

669はS X 360から出土した。頭部は折曲頭形、長さ9.45cm、最大幅1.1cm、重さ9.2gである。670はIX-c4区から出土した。頭部は一度折りしたものをさらに折り返す。法隆寺分類には属する形式がない。残存長10.3cm、最大幅2.9cm、重さ40.3gである。671はS X 23から出土した。頭部は折曲頭形、残存長9.9cm、最大幅1.9cm、重さ28.5gである。672はS K 4から出土した。方頭形で、ほぼ完形である。長12.4cm、最大幅1.3cm、重さ22.5gである。673はS X 25から出土した。頭部は折曲頭形、残存長5.9cm、最大幅1.4cm、重さ9.5gである。674は瓦溜りS X 21下層から出土した。頭部は折曲頭形、残存長5.8cm、最大幅0.8cm、重さ9.1gである。675はS X 20第2層から出土した。頭部折曲頭形、残存長5.4cm、最大幅0.8cm、重さ3.6gである。676はIX区包含層から出土した。頭部は折曲頭形、残存長約5.0cm、最大幅0.7cm、重さ7.4gである。677はS P 452から出土した。頭部は折曲頭形、残存長2.4cm、最大幅1.0cm、重さ1.9gである。

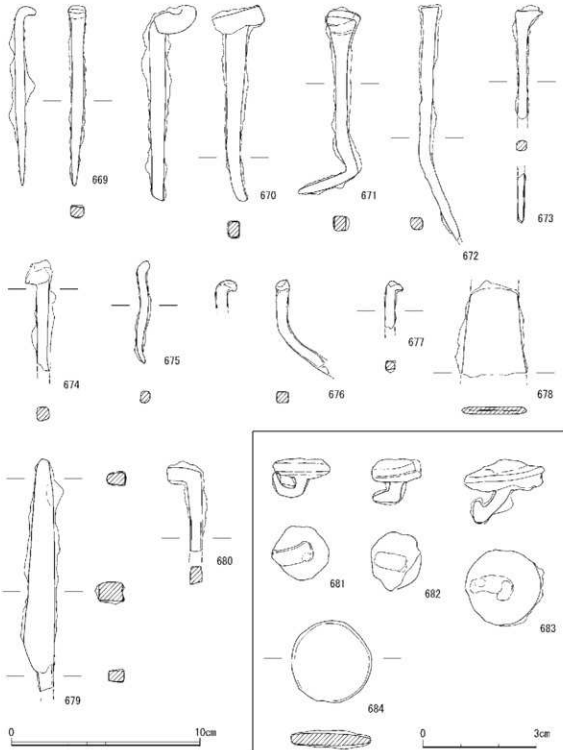
678は瓦溜りS X 21から出土した。薄板状の鉄片を二枚重ねたような形状をとるが、用途不明である。残存長4.7cm、残存幅3.45cm、厚さ4mm、重さ22.6gである。679はS X 23から出土した刀子である。残存長12.3cm、幅1.6cm、厚さ1.0cm、重さ66.3gである。680はS X 24から出土した鏝である。残存長4.7cm、幅1.9cm、重さ14.2gである。

681～683はIX-c5・c6・d4・d5・e4区包含層出土の鉄鋸である。いずれも錆化が激しいが、ボタン状の頭部と強く屈曲する脚部からなる。681は直径1.5cm、高さ1.0cm、重さ2.2gである。682は

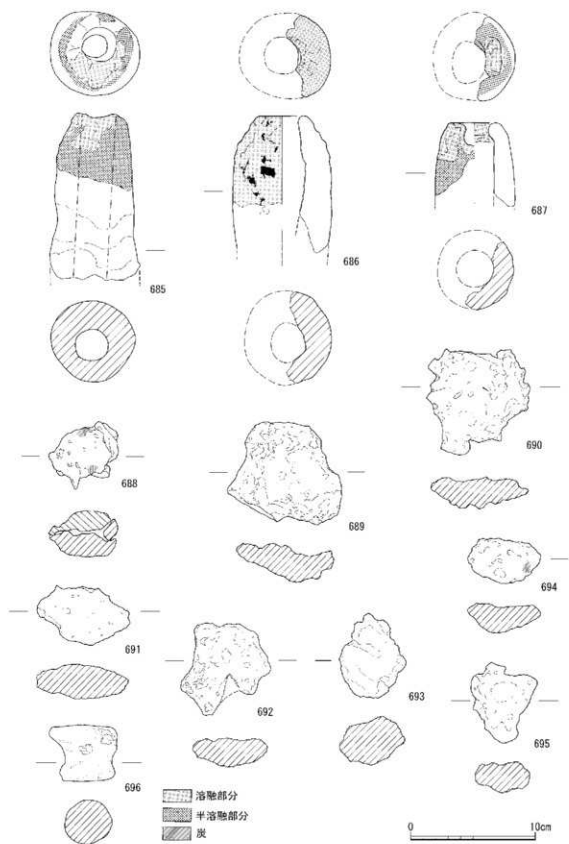
長径1.5cm、短径1.3cm、高さ1.2cm、重さ1.5gである。683は一回り大きく直径2.0cm、高さ1.7cm、重さ4.9gである。

684はS X310から出土した。円盤状を呈するが、用途は不明である。直径2.1cm、厚さ3mm、重さ4.9gである。

685～687は羽口である。羽口の製作方法は、軸木に粘土紐を巻き付けてナデによる整形を行い、



第114図 鉄製品実測図(1/2、1/1)



第115図 鉄器生産関連遺物実測図(1/3)

端部をヘラないし指によるナデで整形を行った後、軸木を抜いて乾燥焼成したと考えられる。第115図では、胎土が溶融している溶融部、熱により胎土がやや溶けなかった半溶融部、炉と接合していることにより還元環境にあった還元部をスクリーントーンで示した。

685はV-w17区包含層から出土した。残存長13.45cm、吸気部外径6.9cm、内径2.6cm、先端部外形3.3cm、内径2.7cmである。重さ410gである。686はV-117区包含層から出土した。残存長11.0cm、先端部外形3.8cm、内径3.0cm、162.7gである。胎土は粗く、焼成は良好である。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が浅黄橙色である。687は遺構には伴っていないが鉄器生産関連遺構群内から出土した。残存長11.0cm、先端部外形3.6cm、内径2.2cmの小片である。重さは66.1gである。先端部は内傾し、胎土が一部溶融する。焼成は良好で胎土は粗、色調は浅黄橙色である。

688-695は鉄滓である。688はS L 501から出土した炉底滓である。約5.0×5.6cm、68.8gである。689はA 5 トレンチ周辺から出土した。約7.9×9.2cm、130.6gである。690はS D 082から出土した。約8.5×8.3cm、158.8gである。691はS K 091から出土した。約4.7×7.4cm、59.2gである。692はS K 034から出土した。約7.4×7.2cm、97.0gである。693はS D 030から出土した。約6.75×5.35cm、105.4gである。694はS D 037から出土した。約3.6×5.8cm、55.3gである。695はS D 030から出土した。約6.4×5.35cm、78.2gである。

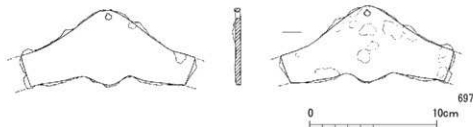
696は鉄器生産関連遺構群東斜面から出土した鋳型の破片である。約4.5×5.45cmである。

②用途不明鉄製品(第116図697)

瓦溜りS X 21から1点出土した。山形を呈し、上縁は肩先にかけてやや外反し、下縁も上縁と同じく曲線的な外形をとる。全長13.9cm、高さ6.0cm、厚さ4mm、重さ68.4gである。全体的に腐食が進んでいるが、X線写真撮影の結果、欠損しているのは下縁の一部であることが判明した(図版第49)。形状から風鐸の風招または火切金の可能性が考えられる。

③青銅製品(第117図698~700)

698はIX-e8区包含層から出土した青銅鋳である。直径1.25cm、高さ0.9cm、重さ0.7gである。699はV-m16区包含層から出土した金環である。長径2.9cm、短径2.65cm、断面径6.3mm、重さ11.3gである。700はIX-e8区包含層から出土した飾り金具で銀杏形の透かしを持つ。上下に小型方形の穿孔があり、その上に細い帯状の突起を貼り付けるが、突起部の摩耗は著しい。長さ3.1cm、幅2.3cm、厚さ1.9mm、重さ4.2gである。



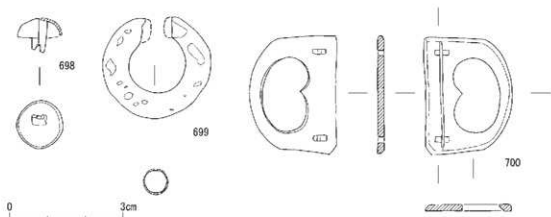
第116図 用途不明鉄製品実測図(1/3)

④溶解炉関連遺物(第118図701～705)

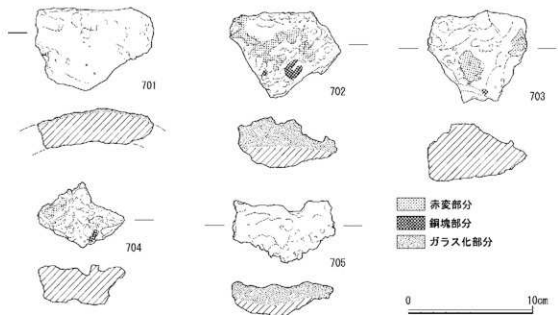
銅関連遺物の総重量は6,207gである。このうち炉壁5,264g、ガラス滓438g、銅塊439g、炭65.7gである。

701は溶解炉S L 1のA層から出土した炉壁である。緩やかに湾曲する凸面にガラス滓が付着し赤変する。約6.6×9.5cmで、重さ130.5gである。702は炉内B層で出土した炉壁である。表面緑青に覆われた粒状の溶着金属を含むガラス滓が炉壁にしっかりと溶着する。約6.8×8.9cmで、重さ160.6gである。703は炉周辺で出土した炉壁である。約7.3×8cmで、重さ169.3gである。704はS X 20周辺で出土した。表面緑青に覆われた粒状の溶着金属を含むガラス滓である。約5.2×7.0cmで、重さ69.5gである。705はS X 20周辺で出土した炉壁である。約5.0×8.3cm、重さ65.9gで、ガラス滓が炉壁にしっかりと溶着している。

(関広高世)



第117図 青銅製品実測図(1/1)



第118図 溶解炉関連遺物実測図(1/3)

6. 美濃山廃寺下層遺跡第9次調査

美濃山廃寺第6次調査において奈良時代の遺構と同一遺構面で弥生時代の遺構・遺物が確認されたため、美濃山廃寺下層遺跡第9次調査として調査を実施した。上層の美濃山廃寺第6次調査終了後に遺構の掘削及び図化作業を行い、平成24年2月3日に調査を終了した。

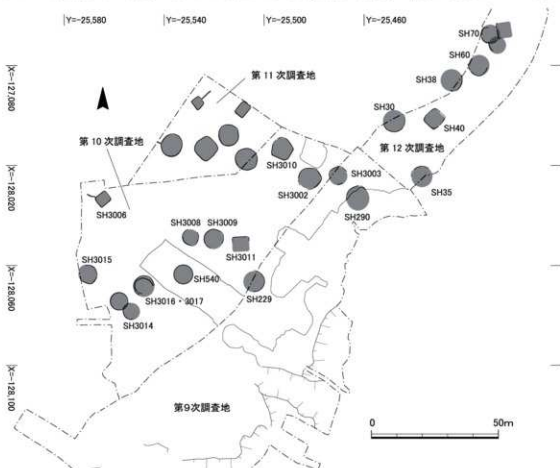
遺構はA地区北部及び中央部西側平坦地で堅穴建物を検出したのみで、A地区南部やB地区には分布していない。後世に削平されたためと考えられる(第119図)。

1) 検出遺構

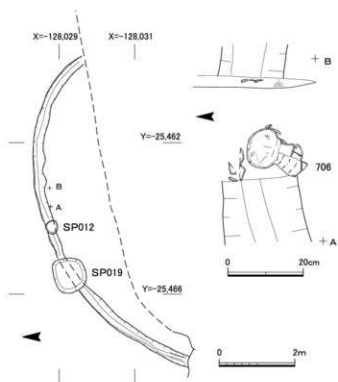
堅穴建物2棟を検出した。いずれも平面形は円形で、時期は弥生時代後期であるが、後世の擾乱等により残存状態は良くなかった。このほか、第7次調査地との境界上にも堅穴建物を1棟検出した。これについては、第7次調査で報告する。

堅穴建物SH290(第120図) A地区北部の掘立柱建物SB010の南側で周壁溝のみ検出した。南半分は後世の削平によって失われている。周壁溝は幅0.2m、深さ約0.4mを測り、検出状況から直径約5.5mの円形の堅穴建物に復元できる。周壁溝から弥生土器の長頸壺(第122図706)などが出土した。

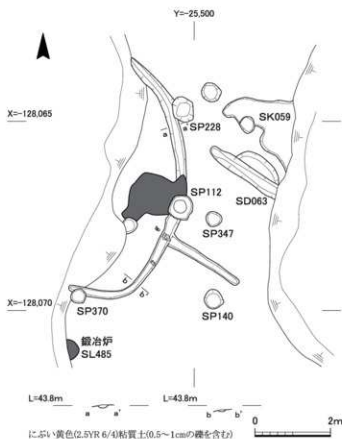
堅穴建物SH229(第121図) 中央部西側平坦地の掘立柱建物SB479の北側で検出した。検出したのは周壁溝と炉の痕跡と思われる焼土である。周壁溝の西半分は後世の擾乱によって失われ



第119図 美濃山廃寺下層遺跡遺構配置模式図(1/1500)



第120図 竪穴建物 S H290実測図(1/100)



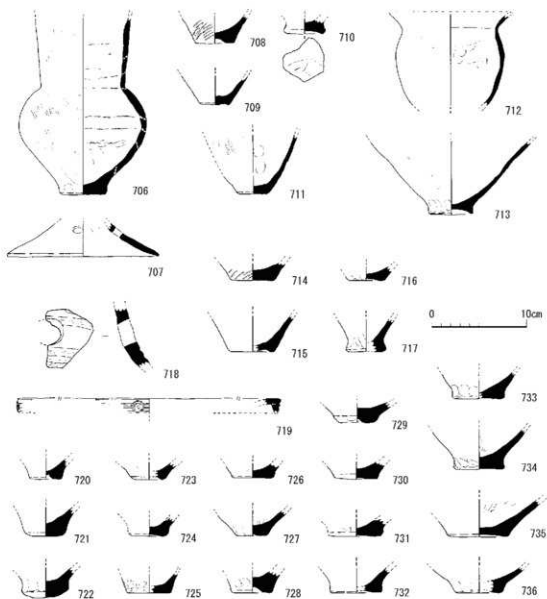
第121図 竪穴建物 S H229実測図(1/100)

ている。周壁溝は幅0.25m、深さ約0.1mを測り、直径約4.5mの円形の竪穴建物に復元できる。周壁溝から弥生土器甕(第122図712・713)などが出土した。

2) 出土遺物

竪穴建物 S H290出土遺物(第122図706~711) 706は周壁溝内から出土した長頸壺である。口縁部は欠損しているが、残存高18.5cm、体部最大径13.4cm、底部径4.4cmを測る。内面はナア、外面の頸部には縦方向のハケメ、体部には斜め方向のハケメ、底部には指オサエ痕がみられる。708~711は甕の底部片である。710は柱穴 S P 012から出土したが、S P 012が S H290の周壁溝を切って掘り込まれていることから、S H290に伴うものと判断した。707は高杯の脚部で、円形の透かし穴がある。脚部径は16cm、残存高は3.4cmを測る。この脚部片は柱穴 S P 019の底部から出土したが、柱穴は竪穴建物 S H290の周壁溝を切って掘り込まれていることから、S H290に伴うものと判断した。

竪穴建物 S H229出土遺物(第122図712・713) いずれも周壁溝から出土した。712は甕の体部片である。713は壺の高台部分である。底部径は4.6cm、残存高は7.6cmを測る。摩擦しているが内外面の一部にハケメがみられる。



第122図 竪穴建物・柱穴・遺物包含層出土弥生土器実測図(1/4)

その他の柱穴出土遺物(第122図714～717) 714は柱穴S P 038、715は柱穴S P 078、716は柱穴S P 081、717は柱穴S P 130の埋土から出土した。奈良時代の遺物とともに出土しており、混入と考えられる。

遺物包含層出土遺物(第122図718～736) 718はA地区中央南部掘削中に出土した。無頸壺の器台部分と思われる。直径約3cmの円形の透かし穴があり、外面には黒斑がみられる。719はB 9トレンチで出土した器台で、口縁部外面に円形浮文を貼り付ける。720～736は壺の底部片である。720・724はB 9トレンチ、721・725・731・735はⅨ区包含層、722・723・726～730・733・734・736はⅤ区包含層、732はⅣ区包含層から出土した。

(村田和弘)

7. 遺跡・遺構・遺物の検討

本章では第6次調査だけでなく、第7～9次調査の成果も含めて美濃山廃寺の歴史的意義について検討する。遺物については瓦類、土製品、埴仏、冶金関連遺物を中心に検討し、美濃山廃寺成立の歴史的背景をふまえて詳述する。

1) 軒瓦の特徴と年代

美濃山廃寺出土の軒瓦は、第6・7次調査とこれまでの調査をあわせて、軒丸瓦を9型式、軒平瓦を4型式確認した(ほかに美濃山2号窟で軒平瓦を2型式確認)。出土点数等については付表2にまとめた。付表2より軒平瓦が軒丸瓦に比べて著しく少ないことがわかる。このことから平瓦を軒平瓦の代用としていた可能性が高いと考えられる。ここでは、各型式ごとにその特徴や出土傾向、年代について簡単にまとめた。

①軒丸瓦Ⅰ型式 軒丸瓦Ⅰa型式は、隣接する大阪府枚方市に所在する九頭神廃寺で同文様のものが出土している。この軒丸瓦については新羅系の特徴を有するものであることがすでに指摘されており、7世紀後半のものと考えられている⁽²²⁷⁾。しかし、美濃山廃寺出土例は九頭神廃寺出土例にくらべ、直径が1cmほど小さくなっており、別の范によるものと考えられる。また、九頭神廃寺では本型式の出土例が少ないのに対して、美濃山廃寺では、軒丸瓦Ⅰa型式が主体ではないものの、破片資料で25点以上が出土しており、九頭神廃寺の出土点数を大きく上回る。また、第9次調査では複数の瓦窟が確認されたものの、いずれの窟でも軒丸瓦Ⅰa型式を生産していたことは確認できなかった。さらに、美濃山廃寺では型式学的に後出する軒丸瓦Ⅰb型式なども含まれている。また、胎土や焼成が相当異なることから、同一の窟から瓦が供給されたとは考えにくく、范の移動を想定すべきかもしれない。なお、九頭神廃寺で想定されている年代よりも新しく位置づけられ、7世紀末ごろ、あるいは8世紀初頭ごろと考えられる。

軒丸瓦Ⅰ型式の出土分布は、Ⅰa型式とⅠb型式とほぼ重なっており、第6次調査地B地区から第6次調査地A地区南部、第7次調査地南部にかけての範囲に集中する(第123図)。

②軒丸瓦Ⅱ型式・軒平瓦Ⅰ型式

軒丸瓦Ⅱa型式は同范と同文様のものは未確認であるが、藤原宮などで出土する軒瓦に特徴が

付表2 軒瓦出土点数一覧

軒丸瓦															
型式	I	I a	I b	II	II a	II b	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	不明	合計
6次調査	5	23	13	56	18	44	10	7	0	7	6	4	0	29	222
7次調査	0	2	4	8	0	5	61	0	0	0	2	8	2	21	113
合計	5	25	17	64	18	49	71	7	0	7	8	12	2	50	335

軒平瓦										
型式	I	I a	I b	I c	II	II a	II b	V	不明	合計
6次調査	0	16	26	2	9	1	4	1	6	65
7次調査	0	3	2	0	3	0	0	0	1	9
合計	0	19	28	2	12	1	4	1	7	74

類似しており^(R20)、藤原宮造営以降の年代を与えることができる。また、軒平瓦Ⅰb型式は奈良県橿原市に所在する久米瓦窯出土の軒平瓦に特徴が類似するものの、型式学的に後出することは間違いない。久米寺出土のものは同范のものが藤原宮でも出土しており、軒丸瓦Ⅱa型式と同じく、年代の一端を推定することができる。以上の点から軒丸瓦Ⅱa型式や軒平瓦Ⅰb型式は8世紀初頭から前半にかけての年代を与えることができる。

一方、軒丸瓦Ⅱb型式は、外区を斜縁から直立縁に范を彫り直しているものと推定される。したがって、軒丸瓦Ⅱb型式は軒丸瓦Ⅱa型式よりも後出する型式であり、確たる根拠はないものの、8世紀前半ごろと推定される。

軒丸瓦Ⅱ型式の出土分布も、Ⅱa型式とⅡb型式はほぼ重なっており、第6次調査地B地区から第6次調査地A地区南部、第7次調査地南部にかけての範囲に集中する(第123図)。

軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式はほぼ同じ範囲から出土しており、量的な点と時期的な点からみると、これら2型式4種が美濃山廃寺の創建時の軒瓦であると考えられる。したがって、これらの分布の中心である第6次調査B地区付近に美濃山廃寺の寺院としての中心建物が存在したと考えられる。

③軒平瓦Ⅱ型式 軒平瓦Ⅱ型式の額を貼り付ける前に平行タタキが確認できる。平行タタキを凸面に施す平瓦H-B1類と同様の技法であることから、軒平瓦Ⅱ型式と平瓦H-B類は同時期の所産と考えられる。

④軒丸瓦Ⅲ型式 軒丸瓦Ⅲ型式の瓦当文様は平城宮式6313型式の影響を受けている^(R20)可能性が高く、製作技法としては一本作りであることから、8世紀第3四半期ごろに位置づけられる。軒丸瓦Ⅲ型式は礎石・掘立柱併用建物S B2020の建立に伴い、導入されたと思われる、S B2020周辺で非常に多数が出土している。

⑤軒丸瓦Ⅳ～Ⅴ型式 これらの瓦の出土点数は軒丸瓦Ⅰ～Ⅲ型式にくらべると著しく少ない。軒丸瓦Ⅳ型式は大阪府枚方市百濟寺跡出土軒丸瓦と同文様のもの^(R31)で、8世紀後半ないし9世紀代の瓦と想定されている。

軒丸瓦Ⅴ型式は瓦当の破片資料しかなく、詳細は不明である。

軒丸瓦Ⅵ型式は平城宮式6135型式の影響を受けている^(R32)と推定されるが、出土点数が少なく、や



第123図 軒丸瓦Ⅰ～Ⅲ型式出土分布図



第124図 軒丸瓦Ⅳ～Ⅸ型式出土分布図



第125図 軒平瓦Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ型式出土分布図

軒丸瓦Ⅲ型式はこの瓦の影響を受けて成立した可能性もある。

⑥軒平瓦Ⅴ型式 同范や同文様の例は知られていないが、美濃山廃寺2号室内から出土しており、同窟で焼成されたものと考えられる。上述のように胎土や色調、焼成の点で、軒丸瓦Ⅶ型式に類似しており、軒丸瓦Ⅷ型式と軒平瓦Ⅴ型式が組み合わせる可能性がある。

はり詳細不明である。

軒丸瓦Ⅶ型式は山背国分寺の塔跡などで出土しているものと同范もしくは同文様のものである。この軒丸瓦について、中島正氏は山背国分寺塔跡の周辺から大量に出土すること、それは創建期ではなく8世紀末ないし9世紀初頭の瓦と推定されること、延暦10(791)年に山背国内の塔の修造を指示した勅が存在することなどから、延暦10年の勅にもとづいて製作され、塔の修理に使用された瓦の可能性を指摘されている。ここでは中島氏の想定を肯定的にとらえておきたい。なお、軒丸瓦Ⅶ型式は美濃山廃寺2号窟から出土しており、同窟で焼成されたものと考えられる。

軒丸瓦Ⅷ型式は、軒丸瓦Ⅲ型式と同様、礎石・掘立柱併用建物S B2020周辺で出土しているが、点数は少なく、S B2020の補修瓦と考えている。軒丸瓦Ⅷ型式も美濃山2号窟で出土しており、同窟で焼成されたものであろう。胎土や色調は後述する軒平瓦Ⅴ型式に類似している。

軒丸瓦Ⅸ型式は平城宮式6313D型式と同范もしくは同文様と思われる資料であるが、出土点数が少なく、詳細は不明である。ただし、

軒瓦のまとめ 美濃山廃寺では、軒丸瓦Ⅸ型式、軒平瓦Ⅵ型式を確認したが、個々の型式ごとの出土量には大きな違いがある。軒丸瓦Ⅰ～Ⅲ型式と軒平瓦Ⅰ・Ⅱ型式は、第6次調査地B地区や第7次調査地南部を中心に多数出土しており、これらは美濃山廃寺における創建時および拡充時に伴うものであろう。これに対して軒丸瓦Ⅳ～Ⅷ型式、軒平瓦Ⅴ型式は出土量が先述の各型式にくらべて著しく少なく、美濃山廃寺の諸堂宇に対する補修瓦と判断した。このほか、軒平瓦Ⅳ・Ⅵ型式は美濃山廃寺では未確認であり、瓦窯でのみ出土が確認された。

以上の諸型式のうち、軒丸瓦Ⅰ型式は枚方市九頭神廃寺で、同Ⅱ型式は八幡市西山廃寺・志水廃寺⁽¹²²⁾で、同Ⅳ型式は枚方市百済寺跡で、それぞれ同文様のものが確認されている。また、軒平瓦Ⅳ型式は八幡市志水廃寺出土のものと同范であることが確認された。

以上のように、軒瓦を媒介とした美濃山廃寺周辺の諸寺院間における交流をうかがうことができる。

(筒井崇史)

2) 丸瓦・平瓦の出土傾向と若干の検討

出土した丸瓦・平瓦については、67～69頁で示したような分類を行ったのちに、遺構ごとに出土量の重量計測を行った。以下の検討では、第6次調査と第7次調査の出土資料をまとめて取り扱う。

(1) 瓦類の出土状況について

瓦類の分類作業と重量計測の結果にもとづいて、ある程度の遺構群のまとまりを対象に出土傾向について概観する(付表3)。なお、瓦類の出土傾向の分析において、丸瓦は検討するほどの出土量がないため、必要に応じて取り上げることとする。

第6次調査地B地区周辺(付表3上) 後世の大規模な削平により、瓦類の多くが近世以降に形成された堆積層から出土している(B地区瓦集中箇所S X 22～24、A地区堆積層S X 486など)。また、当時の遺構や廃絶直後に形成された堆積層も部分的に残存しており、そこから出土したものもある(B地区瓦溜りS X 21、落ち込みS X 25など)。さらに、創建時の瓦類を焼成したと想定される美濃山Ⅰ号窯の資料などがある。

①平瓦は、いずれの遺構・堆積層においても、H-B類(凸面に平行タタキを施すもの)が圧倒的に多く、ついでH-A類(凸面にナデを施すもの)が多い。瓦類が大量に出土する遺跡では、最も多く出土した型式が、創建期や造営当初のものと解釈されている。したがって、B地区周辺ではH-B類を主体とし、H-A類を補助的に使用した建物(群)が存在したと予想できる。

②平瓦と同様の出土傾向を示すのが、軒丸瓦Ⅰ・Ⅱの各型式である(第123図)。その分布域は付表3に取り上げた遺構や堆積層とはほぼ重なり、軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式と平瓦H-B類が創建当初に使用された組み合わせであることを予想させる。

③平瓦のH-D類(凸面に縄タタキを施し、1枚作りのもの)と軒丸瓦Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ型式が全体に対する割合は低いながらも、確実に存在する。両者ともH-B・H-A類と軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式よりも量的に少ないことから、既存の建物に対して補修等で使用されたものであると考える。ただし、こ

付表3 瓦類重量計測表

6次B地区周辺 (単位: kg)

遺構名	丸瓦				平瓦						不明		合計
	M-A類	M-B類	細分不可	小計	H-A類	H-B類	H-C類	H-D類	分類不可	小計	丸・平判別不可	5cm以下	
美濃山1号窟	00	19	22	41	31	51	30	0	0	112	00	0	153
S X 21	52	145	804	901	901	1317	184	122	294	2218	37	952	4108
S K 18	53	63	163	279	360	684	317	46	30	1437	26	136	1878
S X 25*1	00	34	280	314	122	88	53	88	268	619	86	656	1675
S X 25*2	00	13	191	204	82	87	43	63	302	477	09	242	932
S X 22	04	23	159	186	222	280	86	47	109	744	45	354	1329
S X 24	00	05	137	142	80	108	24	19	175	406	12	341	904
S X 23	04	12	169	185	45	85	17	53	170	370	01	540	1096
S K 4	04	47	503	554	210	362	119	190	297	1168	81	630	2431
S X 486	08	81	436	525	398	143	72	184	431	1228	88	491	2332

*1: 南サフトレ *2: 下層

7次S B2020周辺

遺構名	丸瓦				平瓦						不明		合計
	M-A類	M-B類	細分不可	小計	H-A類	H-B類	H-C類	H-D類	分類不可	小計	丸・平判別不可	5cm以下	
S D 293	21	142	570	733	18	82	49	1978	473	1710	61	1252	3754
S X 097	46	255	1938	2239	82	378	187	1911	1669	4227	234	5912	13612
S X 099	02	28	386	416	18	41	58	599	386	1102	1188	40	2746
S P 291	0	04	50	54	01	18	15	113	87	234	05	31	324
S P 093	0	0	64	64	03	23	32	267	73	398	0	58	520
S P 105	0	03	05	08	05	13	09	58	32	117	02	26	153
S P 106	0	01	14	15	05	01	18	29	13	66	0	28	109
S P 138	0	0	25	25	0	08	07	68	17	10	03	1	138

SP291以下はSH030の柱穴

7次調査地北半部

遺構名	丸瓦				平瓦						不明		合計
	M-A類	M-B類	細分不可	小計	H-A類	H-B類	H-C類	H-D類	分類不可	小計	丸・平判別不可	5cm以下	
S B 2012	00	01	14	15	10	22	06	01	10	49	00	00	64
S B 2014	00	00	05	05	03	05	15	08	00	31	00	00	36
S B 2015	00	00	05	05	47	24	22	55	10	157	00	06	168
S B 2010	00	00	05	05	13	13	19	17	03	65	00	02	71
S B 2001	04	33	18	55	13	40	11	124	34	222	00	52	329
S B 2003	00	00	04	04	03	06	00	12	39	60	00	00	64
S B 2004	00	00	01	00	00	00	00	11	04	15	00	00	16
S B 2016	00	00	00	00	00	24	03	20	09	00	00	00	58

■ 第1位 ■ 第2位

これらの瓦類が同時期のものかどうかは不明である。

④丸瓦は、型式の判別できるものが少ないが、美濃山1号窟と瓦溜りS X 21では、M-A類が一定量確認できることから、これが創建当初に使用された丸瓦と考える。

礎石・掘立柱併用建物S B 2020周辺(付表3中) 第7次調査地南部で検出したS B 2020は、第6～9次調査で検出した遺構の中では、最も大きな規模を有し、構造的にもほかの建物群にくらべ、格式が高い。このS B 2020の周辺では、雨落ち溝S D 293や区画S X 097・099などから大量の瓦類が出土した。また、S B 2020の柱穴では、地上に露出した柱の根元に瓦を巻いていたと考えられ、これに伴う瓦類が柱痕内やその周辺から集中して出土した。ここでは、瓦類の出土量

が多い柱穴のみを取り上げた。

①平瓦は、いずれの遺構においてもH-D類が最も多く出土している。S D 293やS X 097・099から出土したH-D類は、その出土量からみて、S B 2020建立当初の屋根瓦であったと考える。

②平瓦と同様の出土傾向を示すのが、軒丸瓦Ⅲ型式である(第123図)。その分布域はここで取り上げた遺構や堆積層とはほぼ重なり、軒丸瓦Ⅲ型式と平瓦H-D類がS B 2020建立当初に使用された組み合わせと考える。

③H-A～H-C類も少量ながら確実に存在する。これらは補助的に使用されたものとする。

④軒丸瓦Ⅳ型式は少ないながら存在する。これは軒丸瓦Ⅲ型式よりも出土点数が少ないことから、S B 2020の補修瓦である可能性が考えられる。

⑤以上のように、S B 2020の周辺等から出土した瓦類の様相は、先の第6次調査B地区周辺の様相とは、明らかに異なる。また、後述する瓦類の時期からS B 2020周辺の瓦類の様相が新しく、したがって、S B 2020の造営時期も第6次調査B地区に想定される建物(群)よりも新しく造営されたものであると考える。

第7次調査地西部周辺 第7次調査地西部では総柱建物S B 2009の周辺やその西側に位置する区画溝S D 090で、ほぼ平瓦H-A1類もしくはH-A2類に限定して、大量の平瓦が出土した。出土重量はおよそ390kgに達するが、軒瓦や丸瓦はほとんど確認されなかった。この平瓦は、その出土位置からS B 2009以外の建物に葺かれていた可能性は想定しにくい。一方で、瓦類の種類が限られており、補修等の可能性を見いだせない点は注意を要する。

第6次調査地・第7次調査地北北部(付表3下) 第6次調査地北北部から第7次調査地北東部・北部を経て中央部にかけての範囲では、掘立柱建物や総柱建物などを多数検出し、それぞれの柱穴から多数の瓦類が出土した。

①丸瓦・平瓦ともに出土の確認できない建物がある(第7次調査総柱建物S B 2013、第7次調査掘立柱建物S B 2002)。

②平瓦で、H-D類の出土が確認できる建物と確認できない建物に分かれる。両者の違いは時期差と考える。

③以上のような、瓦類の出土傾向と次に述べる瓦類のおおよその時期から、(1)瓦類の出土しない建物→(2)平瓦H-D類の出土しない建物→(3)平瓦H-D類の出土する建物、という変遷が考えられる。

(2)瓦類の時期について

丸瓦・平瓦の各型式の時期についての検討は十分に行えていないが、製作技法的な点と、同時に出土した土器類の時期から、若干の見通しを述べておきたい。

平瓦は、凸面の調整や製作技法から、H-A類・H-B類→H-C類→H-D類という変遷が考えられる。H-A類に伴う土器類のうち、時期を推定しうるものはほとんどない。H-B類については、多数が出土したB地区の遺物包含層から、内面にかえりを有する須恵器杯B蓋が多数出土した。同時性を示す根拠は薄い年代の一端を示している可能性がある。H-C類は、成形技法として粘土紐

成形のものがある(H-C2類)が、同様の技法は藤原宮期に認められる^(B96)。美濃山廃寺における本型式の由来が藤原宮に求められるかどうかは不明であるが、時期的にやや後出すとすれば出土土器などと齟齬がないと考える。H-D類は一枚作りの技法によって製作されているが、この製作技法の出現は平城京遷都を契機と考えられており、美濃山廃寺のような地方寺院では、それ以降の時期に位置づけられると考える。

次に丸瓦は、型式の分類が可能な資料が少ないが、M-A類は出土状況等からH-B類と組み合わせと考えられる。M-B類は各所で出土しており、いずれの型式と組み合わせか断定はできない。ただし、H-A類の大半を占める赤褐色を呈する一群と同じ丸瓦が認められないことから、H-A類に組み合わせる丸瓦は存在しない可能性が高い。したがって、M-B類は、H-C類もしくはH-D類と組み合わせると考える。これは都城等における出土傾向とも特に齟齬はない。

(3) 瓦類の出土傾向の検討

以上のように、型式学的、製作技法的に古い特徴を有するものとして、H-B・H-A類があげられる。これらは、第6次調査B地区において主体的に出土していることから、ここに美濃山廃寺の創建当初の建物が存在していた可能性は非常に高いと考える。その範囲は第123図に示すように、近世の再堆積層を含むが、瓦の分布が特に集中する範囲と考えることができる。これらの遺構等のうち、瓦溜りS X 21の下層で検出した溝SD 6や溝SD 8は建物(あるいは建物群)の南限を区画する施設の一部の可能性がある。これらの溝以外に創建当初の建物を囲うような施設の痕跡はうかがえなかった。また、建物そのものや基壇等の痕跡も確認できなかった。したがって、金堂あるいは塔に相当する施設が1棟だけだったのか、両方を構えていたのかも不明である。

(4) 今後の課題

今回の報告では、丸瓦や平瓦の製作技法、生産地等について十分な検討を行うことができなかった。生産地の第1候補は、第6次調査で検出した美濃山1号窯や第9次調査で検出した美濃山2～5号窯であるが、胎土や焼成等の点で、すべてこれらから供給されたとは言い切れない。美濃山2～5号窯の調査に伴う出土遺物の整理作業の結果を受けて再度検討する必要がある。その場合、美濃山廃寺周辺以外からも瓦が供給された可能性を考慮する必要があるだろう。

(筒井崇史)

3) 美濃山廃寺出土土製品について

覆鉢形土製品・ひさご形土製品は、今のところ美濃山廃寺においてのみ、出土が確認されている非常に特殊な土製品である。また、一定の出土量が認められることから、本項では両土製品について検討することにした。

(1) 覆鉢形土製品・ひさご形土製品の出土分布について

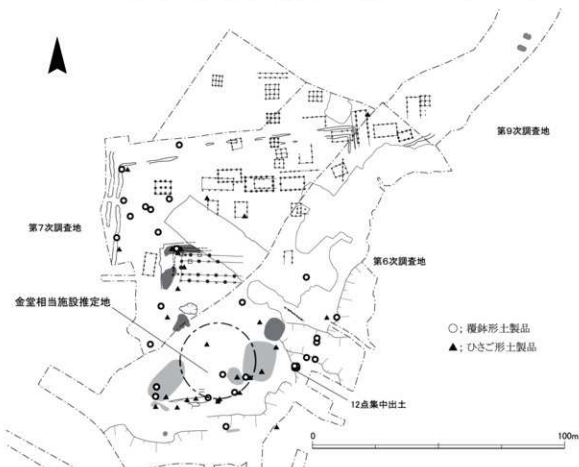
覆鉢形土製品はこれまでの調査で合わせて42点(第1～5次調査5点・第6次調査28点・第7次調査9点)、ひさご形土製品は同じく29点(第1～5次調査2点・第6次調査16点・第7次調査11点)出土している。これらが出土した地点を第126図に示した。

覆鉢形土製品は、金堂当施設推定地の南辺から丘陵東斜面にかけて多数出土している。特に

東斜面の第6次調査地土坑S K267で12点、土坑S K300で3点の出土があり、総出土点数の約1/3がこの付近で出土している。覆鉢形土製品の出土状況で注目されるのは、第7次調査地西部の広い範囲に点々と出土していることである。これに対して、第6次調査地北部や第7次調査地北東部・北部・中央部ではまったく出土しておらず、ひさご形土製品の出土状況とは対照的である。覆鉢形土製品は時期を示すような土器と出土していないが、S K300などにおいて瓦類と一緒に出土しており、瓦類の検討から美濃山廃寺の第Ⅱ-1期(8世紀後半)に位置づけられる。

ひさご形土製品は、第6次調査地A地区南部からB地区にかけての範囲、金堂相当施設推定地で多く出土している。特に多いのは金堂相当施設推定地の南辺に沿った場所で、13点が出土している。特に溶解炉S L1が築かれたS X20では、遺存状態の良好な資料が出土した。次いで多いのが第7次調査地南部で検出した礎石・掘立柱併用建物S B2020の周辺で、4～5点の出土がある。ここでは小破片や結合部の破片が多い。第7次調査地中央部や第6次調査地中央部よりも北側では、わずかな破片の出土しかない。第7次調査報告第89図408は掘立柱建物S B2012の柱穴S P072から多数の土器類と共伴して出土しており(第76図123～137)、ひさご形土製品の年代を推定する上で、重要な資料である。第7次調査報告324～326頁で検討したように、共伴した遺物の時期から美濃山廃寺の第Ⅱ-1期に位置づけられる。

以上のように、ひさご形土製品は金堂相当施設推定地の南辺とS B2020の周辺にやや集中して



第126図 覆鉢形土製品・ひさご形土製品出土分布図

出土することが確認でき、これらの建物とひさご形土製品は何らかの関係を持つ可能性があると考えられる。また、覆鉢形土製品は金堂相当施設推定地の南辺と東斜面、寺域の北西部の3か所に集中することが確認できた。

これらのことから両土製品は金堂相当施設推定地周辺で使用された可能性が高いといえるだろう。また、覆鉢形土製品が出土した東斜面と寺域北西部は、覆鉢形土製品の廃棄場所もしくは使用空間であったと考えられる。

(筒井崇史)

(2) 美濃山廃寺出土土製品の歴史的意義について

先に述べたように、美濃山廃寺では覆鉢形土製品とひさご形土製品が金堂相当施設推定地周辺で使用された可能性が明らかになった。

美濃山廃寺で覆鉢形土製品が採集されたのは昭和初年で、竹林の中から数点が一度に見つかったようである。⁽²⁷⁾発掘調査で発見されたのは八幡市教育委員会による2001～2002年度の発掘調査で、都合4点が出土している。⁽²⁸⁾この製品に類似したものは京都市法勝寺にあり、西田直二郎氏によって『本朝続文粋』にみえる「円塔」として位置づけられた。⁽²⁹⁾その後、石田茂作氏は法勝寺例とともに美濃山廃寺例を円塔型の泥塔と分類し、⁽³⁰⁾肥後和男氏も同様に泥塔発見地の一覧表に加えている。⁽³¹⁾しかし、藤沢一夫氏をはじめ「覆鉢形の小土製品」と命名し、板扉飾り鉢として報告された。⁽³²⁾現在では、大洞真白氏が「覆鉢形土製品」とし、使用方法は泥(土)塔の一種と考えられている。⁽³³⁾

ひさご形土製品もこれまでの八幡市教育委員会の調査で出土していたが、120～122頁でも述べたように大型の破片は溶解炉SL1が築炉されたSX20で出土した。

そもそも「ひさご形」とは、『東大寺要録』巻第8にある「東大寺権別当実忠二十九か条事」、天平宝字8(764)年の記述に由来する。実忠は奈良時代の僧侶であり、東大寺要録の中に自らの業績を書き記している。問題の記述は天平宝字8年、僧正良弁の命で東大寺東塔の露盤を上げるという部分にある。命をうけた工人たちは露盤が重く、塔が高すぎるとして、躊躇した。このため、実忠が露盤を上げることになったのである。実忠は速やかにこの作業を行うとともに相輪先端部分である「匏形」(ひさごがた)に最勝王経と仏舍利を納めたというのである。相輪は宝珠・竜車・水煙・宝輪・請花・伏鉢・露盤の7つの部分からなり、実忠が「匏形」(ひさごがた)と呼んだのはこのうち宝珠と竜車であり、舍利を納めたことから塔の最も重要な部分である。

美濃山廃寺で出土したひさご形土製品はこの「ひさごがた」に相当し、塔の本体とは別づくりの先端部分であった可能性が高い。また、塔本体は、土製または金属製の遺物が認められないことから木製であった可能性がある。

上述の通り、覆鉢形土製品とひさご形土製品は塔ないし塔の一部を表していると推測され、出土量も多いことから、美濃山廃寺で造塔供養が行われていたのではないかと考えられる。そして、これらの2つの特徴から想起されるのは天平宝字8年藤原仲麻呂の乱が平定されたのち、徳明天皇の発願で造られた百万塔である。百万塔は木製口口挽きで、塔身部と相輪部からなる。塔身

部には檜、相輪部には桂が用いられるのが一般的で、塔身部の相輪下中央に2～3cm、深さ8～9cmの穴を穿ち、その中に無垢浄光大陀羅尼經(以下、無垢浄光經)を納めている。

無垢浄光經の由来は、私が迦毘羅城にいたときに、あるバラモンが古い師に余命7日であることを告げられたので仏のもとを訪れて救いを求めると、私は舍利を納めたストゥーパの修理を行い、陀羅尼を誦えるという供養を行えば、寿命を延ばし、病を治癒し、極楽に往生し、地獄から逃れることができると説いたことにある。さらにその陀羅尼には6種類あり、各供養法と功德も同經に記されている。

6つの陀羅尼とはすなわち、「根本」「相輪」「自心印」「六度」「修造仏塔」「大功徳聚」である。これらのうち「根本」「相輪」「自心印」「修造仏塔」の陀羅尼を書写し、「六度」「大功徳聚」を誦して供養礼拝することで功德を得られるというのである。

いわゆる百万塔には、「根本」「相輪」「自心印」「六度」のみが納められたというのが諸説ある。⁽⁸⁴⁾とくに根本陀羅尼は国土擁護、六度では玉体安康を説くことから、⁽⁸⁵⁾藤原仲麻呂の乱のち国家鎮護や戦没者の供養という称徳天皇の願いに即した經典であったと言えよう。

このように、確かに無垢浄光經には鎮護国家的な目的もある。しかし、それを主たる目的とした經典には「金光明最勝王經」「仁王經」「法華經」などもあり、⁽⁸⁶⁾造塔供養は「宝篋印陀羅尼經」「菩提場陀羅尼經」「法華經」など他の数多くの經典でも説かれている。⁽⁸⁷⁾つまり、百万塔と無垢浄光經の間に絶対的な関係があるわけではない。湯浅吉美氏は、無垢浄光經が百万塔に納められた理由のひとつに各經が短文であった点をあげている。⁽⁸⁸⁾

6つの經をひとといていくと、実は無垢浄光經は鎮護国家だけを目的としていないことがわかる。そもそも同經が「罪を取り払い、延命招福を目的とした經典」でもあり、それゆえに急速に普及した經典であることも忘れてはならない。

無垢浄光經はもともと、サンスクリット語で書かれた經典である。インドから中国に伝えられ、中国で漢訳が終わったのは704年である。『開元釈教録』第9巻には、トカラ出身の三藏弥陀山とソグディアナ出身の法藏が翻譯を行ったとある。

そして翌々年には新羅の皇福寺に伝わっていたことが石塔舍利容器の銘文から判明している。残念ながら皇福寺例は銘文のみで經典の実物は残存していない。同じく昌林寺では銅板に彫られた願記の写し、鷲棲寺では塔出土の石盒に無垢浄光經の銘文が認められる。

經典そのものが確認されたのは751年創建の慶州仏国寺釈迦塔である。先の鷲棲寺例が867年であるので、新羅では皇福寺例から長期間にわたって無垢浄光經による造塔が行われていたことになる。⁽⁸⁹⁾また、契丹時代創建の仏塔であるチャガン・スブルガン(白塔)からも、無垢浄光經の一部を記した金板や銀板が出土しており、少なくとも11世紀に至るまで同經による造塔供養が行われ続けたといえる。⁽⁹⁰⁾

日本へは留学僧玄奘が735年に唐から持ち帰ったとされ、『開元釈教録』に掲載されている5.048巻の仏典のうちの一つが無垢浄光經の漢訳であったとされている。⁽⁹¹⁾このことが、百万塔に無垢浄光經を納め諸寺におく、という供養のありかたに影響したことは想像に難くない。

さて、上述のような無垢浄光経の漢訳や普及の経緯を踏まえて美濃山廃寺の覆鉢形土製品とひさご形土製品を検討してみたい。先に述べたように覆鉢形土製品の底面中央には直径1cm、深さ3cm程度の穿孔が認められる。また、ひさご形土製品は最下段にしか所だけ穿孔が認められる。仮に無垢浄光経に説かれる造塔供養の功德、百万塔との類似性を考えるのであれば、これらの穿孔が焼成時の焼き斑を防ぐためのものではなく、あるいは少なくともその目的のためだけに穿孔されたのではなく、経文ないしその一部を納めるためのものであった可能性を指摘したい。出土状況や遺物からは覆鉢形土製品とひさご形土製品の用途の違いを説明することは困難であるが、一定量の出土量があるため「量」を求めた製品であったことや、この穿孔という共通点から百万塔のような供養による功德を求めたものでなかったかと推測される。

先に述べたように百万塔は8世紀後半に作られた製品である。一方、美濃山廃寺出土の覆鉢形土製品とひさご形土製品は、SK20などで共存する遺物の年代から、8世紀前半の資料である。この年代の隔たりについてはさらなる検討が必要であるが、まず、無垢浄光経が日本に伝わった年代がさかのぼる可能性を指摘したい。中国より新羅に同経の漢訳本が伝わったと考えられるのは704～706年の間であり、この普及の早さは日本に対しても例外でなかったといえるだろう。当時は、遣唐使以外にも海外との交流が行われており、遣唐使に比べて文献の記述が少ない遣新羅使は、無垢浄光経が漢訳され玄奘が日本へ帰国する735年までの間に7回以上日本との間を往復している。すなわち、この期間に新羅から無垢浄光経、少なくとも同経の功德を理解した人間が来日していることは想像に難くない。

美濃山廃寺では、132頁で述べたように新羅系寺院と考えられている九頭神廃寺と同文の軒丸瓦が出土しているほか、147頁で述べるように渡来系の工人が関わったと考えられる冶金関連遺構を検出している。また、覆鉢形土製品とひさご形土製品も美濃山廃寺以外では出土が認められず、汎用性のある土製品とは考えにくい。このことは無垢浄光経と覆鉢形土製品やひさご形土製品との関連性を否定するものではなく、むしろ美濃山廃寺に新羅系渡来人の関与があった可能性を示しているのとらえておきたい。

(伊野近富・関広尚世)

4) 美濃山廃寺出土埴仏の検討

(1) はじめに

美濃山廃寺からは合わせて3点の埴仏が出土した。いずれも破片であるものの、これらは図像で大きく二種類に分類できる。1つは、天蓋の下、蓮台の上で尊像が座禪を組む図像を1単位とし、同一埴面に複数単位表される多尊連坐埴仏である。これは、一列二段以上のものと三列一段のもの^(附1)とが確認できる。両者には図像の鮮明さや大きさに差異が認められるが、同原型資料とみてよいだろう。便宜上、小稿ではそれぞれの埴仏を二尊連坐埴仏、三尊連坐埴仏と呼称する。

もう一つは、六尊連坐埴仏の一部を切りとり、独尊立埴仏もしくは一列数段の多尊連坐埴仏としたものである。小稿では本来の図像を重視し六尊連坐埴仏と呼称する。なお、本来の六尊連

立埴仏は、天蓋の下、蓮台の上で直立する尊像が胸の前で器物を持つ図像を1単位とし、これが一つの埴面に三列二段の六単位表されるものである。

小稿ではこれら美濃山廃寺出土埴仏の製作方法や類例の分布を検討し、美濃山廃寺出土埴仏の諸相を探りたい。なお、埴仏の各部位については、第127図に示す名称を用いることとする。また、埴仏製作に用いられた凹型を除刻型と呼称する。

(2) 破断面観察からみる埴仏製作時の諸相

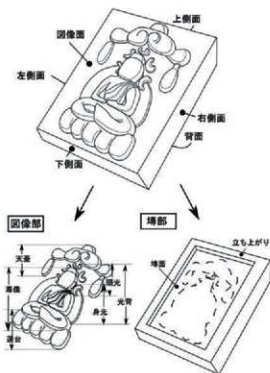
① 粘土詰め込み方法の検討 従来、埴仏は破断面にみられる亀裂や段差によって分層でき、その分層単位は埴仏製作時の粘土詰め込み単位を示すという指摘がなされてきた⁽¹⁰⁾。実際に箱状の型に粘土を充填し、半裁して破断面を観察すると、粘土詰め込み単位ごとに亀裂や段差を確認できる。埴仏破断面の亀裂や段差は、確かに粘土詰め込み単位を示しているとみてよい。なお、同様の痕跡がみられるのは箱状の型に粘土を詰めた場合に限られる。このことは、破断面の観察によって、製作時の除刻型の形状も検討でき

ることを意味する。これらの情報をもとに、美濃山廃寺出土埴仏を観察する。

第129図は二尊連坐埴仏の破断面である。図像面と背面の間に1条の亀裂が確認でき、少なくとも二回にかけて除刻型に粘土が充填されたとみられる。また左側面を観察すると、粘土詰め込み単位の段差から背面にかけての一部胎土が剥離している箇所を確認できる。背面を断面台形状に調整した際、胎土がケズリ方向に引っ張られ、詰め込み時の接合が弱い部分が剥離したとみられる。

第130図は三尊連坐埴仏の破断面である。破断面が小さいため観察がやや困難だが、側面付近を注視すると、背面から図像面にむけて凸状に段差が巡る様子が確認できる。このことから、本埴仏も少なくとも二回にかけて粘土が充填されたとみられる。なお、三尊連坐埴仏図像面の縁部にはバリ状のわずかな立ち上がりを確認できる。このことから、本埴仏は板状の除刻型に惣型を組み合わせたものが使用された可能性が想定できる。

第131図は六尊連坐埴仏の破断面である。図



第127図 埴仏各部位名称



第128図 破断面にあらわれる粘土詰め込み単位

像面と背面の間には1条の亀裂が確認でき、少なくとも二回に分けて粘土が充填されたとみられる。亀裂は背面から図像面にむけて凸状を呈し、図像面縁部にわずかなバリ状の立ち上がりが確認できることから、本埴仏も板状の陰刻型と塑型を組み合わせた型が使用された可能性がある。

②胎土による製作状況の検討 ここまでは破断面観察にもとづいて検討してきた。本節では破断面で観察できる胎土に注目し、美濃山廃寺出土埴仏の様相を検討したい。

まずはそれぞれの埴仏の胎土を概観する。二尊連坐埴仏は褐色を呈し、大小の長石やクサリ礫をわずかに含み、微細な黑色砂粒を含む。三尊連坐埴仏は灰色から黒灰色を呈し、大小の長石を多く含み、石英などをわずかに含む。六尊連坐埴仏は三尊連坐埴仏と同様の胎土であろう。肉眼観察による限り、美濃山廃寺の埴仏には二種類の胎土が使用されていると判断できる。

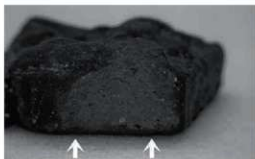
以前、筆者は夏見廃寺出土埴仏が胎土と調整方法の違いから二種類に分類でき、その埴仏製作に二単位の製作集団が関与した可能性を指摘したことがある^(註5)。美濃山廃寺出土埴仏でも胎土に限れば同様の様子が看取できるが、出土数から判断すると複数の製作集団が関与したとは想定しがたい。胎土の違いが何を意味するのか、今後慎重に検討する必要がある。

(3) 類例による検討

①図像でみる類例の分布 美濃山廃寺出土の多尊連坐埴仏と同じ陰刻型からつくられた埴仏は、管見の限りこれまでに確認されていない。しかし、同原型資料とみられる埴仏は、二遺跡から出土が報告されている。大阪府枚方市所在河内百済寺跡出土埴仏と兵庫県朝来市所在法興寺跡出土埴仏である。河内百済寺跡例は二尊が一列に並ぶ二尊連坐埴仏と二列



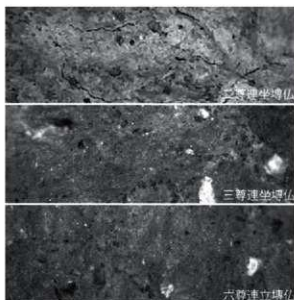
第129図 二尊連坐埴仏の破断面



第130図 三尊連坐埴仏の破断面



第131図 六尊連坐埴仏の破断面



第132図 美濃山廃寺出土埴仏の胎土拡大写真

二段に並ぶ四尊連坐埵仏であり、いずれの図像も美濃山廃寺例と同大かやや大きい。法興寺跡例は三列二段に並ぶ六尊連坐埵仏であり、その図像は美濃山廃寺例よりもやや大きい。ただし、これらの大きさの差は数mm程度にすぎず、どの程度の誤差を認めて焼き縮みと判断すべきか、若干の検討の余地がある。

また、上記二遺跡出土埵仏以外にも多尊連坐埵仏の類例をあげることができる。奈良県奈良市所在唐招提寺、長野県長野市所在篠ノ井遺跡群、奈良県明日香村所在川原寺跡、京都府向日市所在五塚原古墳の各遺跡から出土した独尊坐像埵仏である。これらの埵仏はいずれも美濃山廃寺例とは大きさが全く異なる。しかし、光背や天蓋の形状、全体のバランスなどはほぼ一致しており、これらの図像を忠実に模倣した原型もしくは焼き縮み後の埵仏を原型として、美濃山廃寺出土例などの陰刻型が作成されたと考えられる。奈良県葛城市所在当麻寺では、この独尊坐像埵仏を連坐型式で表したとみられる押出仏が確認されており⁽⁹⁰⁾、独尊坐像埵仏が多尊連坐埵仏に改められた可能性は十分に想定できよう。

六尊連立埵仏は、奈良県御所市所在二光寺廃寺、同朝妻廃寺、大阪府富田林市所在新堂廃寺、和歌山県かつらぎ町所在佐野廃寺、和歌山県紀の川市所在最上廃寺、鳥取県倉吉市所在大原廃寺、同大御堂廃寺から出土している。また、唐招提寺所蔵押出仏にも同じ図像が確認できる。これらの分布をみると、六尊連立埵仏は従来、比較的一部の地域に集中して出土が報告されてきた。美濃山廃寺はこの傾向とは異なる場所にあたり、六尊連立埵仏の分布を検討する上で非常に示唆的である。

これらの図像と美濃山廃寺出土六尊連立埵仏の大きさを比較すると、美濃山廃寺例は二光寺廃寺例などよりも一回り小さく、大原廃寺例などとほぼ同大である。大原廃寺例には焼き縮みが指摘されており⁽⁹⁰⁾、踏み返された陰刻型が用いられたとみられている。大きさから判断すれば、美濃山廃寺出土例も大原廃寺出土例と同様、踏み返された陰刻型が使用されたと判断できる。

②形状について 美濃山廃寺出土多尊連坐埵仏のうち、二尊連坐埵仏は断面台形を呈する。同様の形状をとる埵仏は、和歌山県かつらぎ町佐野廃寺出土例に見ることができる。また、奈良県葛城市石光寺跡出土例では、断面三角形の埵仏が確認されている。石光寺出土例については基壇隅の装飾に用いられた可能性が指摘されている⁽⁹⁰⁾。しかし、形状の差異や埵仏出土数から判断すれば、美濃山廃寺出土埵仏が石光寺出土埵仏と同様の使用方法であったかは疑問が残る。埵仏の使用方法和あわせて検討する必要がある。



第133図 唐招提寺出土独尊坐像埵仏(注55文献より転載)



第134図 二光寺廃寺出土六尊連立埵仏(注57文献より転載)

(4) おわりに

以上、美濃山廃寺出土埴土について、破断面の観察から製作方法の復元と埴土製作時の状況を復元し、また類例の分布から美濃山廃寺出土埴土の様相を検討した。その結果、美濃山廃寺出土埴土はその実態が明らかでない陰刻型の形状を考える上で重要な痕跡を見出すことができ、埴土の分布を考える上では従来の傾向と異なる様相を示すなど、非常に示唆的であることを指摘した。小稿が美濃山廃寺の実態を検討する上で、一助となれば幸いである。

(中東洋行)

5) 冶金関連遺構・遺物からみた美濃山廃寺

第6・7次調査では、鍛冶および銅の溶解に関連する遺構が検出され、遺物も出土した。本項ではこれらの遺構遺物からみた美濃山廃寺の歴史的意義をまとめたい。

鍛冶関連遺構はA地区南部に集中するが、A地区中央部の平坦地でも鍛冶炉の痕跡が1基認められた(炉S L 485)。このほか、鉄器生産関連遺構群以外からも鍛冶滓や羽口などが出土しており、調査以前にかなりの削平及び造成を受けていたことも考え合わせると、丘陵東斜面に他にも鍛冶操業を行った場所がある可能性が高い。

鉄器生産関連遺構群はS D 701と702の切り合い関係や整地面の層序などからA期(上層)とB期(下層)に大別した。両期で確認できた遺構の年代は、両期と対応関係にある堆積層S X 310埋土から出土した須恵器杯G蓋(第98図345)及び、落ち込みS X 603から出土した須恵器壺などから判断して、7世紀後半から8世紀初頭としておきたい。検出した多くの遺構は上層のA期で確認されており、本格的な操業はこの時期と考えられるが、A期とB期で細かい年代設定を行う材料がない。B期では唯一土坑S L 511から銅の溶解炉に伴う鉾滓も出土しており、鉄器生産関連遺構群が鍛冶以外の目的でも利用された可能性のある区画であったことが判明した。いずれにしても鉄器生産関連遺構群はその操業時期や期間から美濃山廃寺を造営するための冶金工房で、鉄釘等の建築部材などを生産したものと考えられる。この点は、寺院以外へも瓦を供給したと考えられる瓦窯とは異なる性質を示している。しかし、瓦窯は主として寺院の中心施設が衰退期にあった時期の操業であり、工人集団の違いというよりも時間的推移による違いと考えておきたい。

また、A期で検出した横口式炭窯と推定されるS Y 503は、炭窯の底部の一部が残存しているという状況から、鉄器生産関連遺構群の操業を終えたのちに造成され、操業を行ったということが想定できる。今回の調査で確認できた遺構では、溶解炉S L 1に供給されていた可能性が考えられるが、第6次調査や第9次調査では瓦窯も検出されており、これらの窯に対して炭を供給した可能性もある。

鍛冶関連遺物で最も多く出土したのは釘である。近隣の志水廃寺でも鉄釘が多量に出土したとされているが、詳細な報告はなされていない。このため、比較材料として法隆寺例をあげてみたい。法隆寺金堂と五重塔には、昭和解体修理で発見された残存状況のよい白鳳期の鉄釘がある。砂鉄を始発原料とする鍛造で、大きさは3.5~6.2cm、すべて断面方形で、釘の頭部形状から方頭形、鉾頭形、傘頭形、折曲頭形の4型式に大別されている。そしてこのうち、15cm(五寸)、21cm(七

寸)で折曲頭形のものが多用される傾向にあるとされている^(B61)。美濃山廃寺で出土した鉄釘は後述する化学分析からも鍛造によるものであることが判明し、完形品が少ないが、主として10cm前後の釘と想定され、折曲頭形が最も多く用いられている。これらの多くは金堂相当施設があったとされる第6次調査地B地区の空間地周辺や瓦溜りからも出土しており、遺構には伴わないながら美濃山廃寺関連の建物に使用された可能性は高い。

次に寺院関連の冶金遺物として、鉄銚と銅銚が出土した。鉄釘の一部と同じく銚も金堂相当施設が想定される地区の包含層から出土している。当初は時期が不明であったが、木津川市馬場南遺跡S B301から出土した銅銚と形状が類似する。S B301は本堂と考えられている建物であり、堂内には須弥壇も確認されている。馬場南遺跡出土の銅銚は最大径60mm、長さ6～8mm程度と美濃山廃寺出土銅銚及び鉄銚よりも一回り小さいが形状が良く似ている。また、遺構には伴っていないがその出土地点から、美濃山廃寺の礎石・掘立柱併用建物S B2020ないし金堂相当施設内に用いられた金具であった可能性がある。円形鉄製品も用途不明ながら高麗寺跡や馬場南遺跡等からの出土が認められており、美濃山廃寺では銚と共に出土していることから、やはりS B2020ないし金堂相当施設内に関連した金具であった可能性が高い。

特徴的な鉄製品としては、火切金ないし風鐸の風招と推定される鉄製品が瓦溜り最下層から出土した。X線写真撮影による調査の結果、両端部には破損が認められず、下縁の一部が欠損しているのみではほぼ完形品である^(B62)。いわゆる火切金は、古代の類例が決して多くはないが三重県齋宮遺跡、滋賀県東光寺遺跡などで出土例がある。ただし両端部が反り上がる形状で全長が10cm未満であるものが多く、美濃山廃寺出土資料と比べると小型であるのが一般的である。他方、瓦溜りの下層から出土していることから、軒先につるされた風鐸の風招である可能性も考えられるが、青銅製ではなく鉄製品であることから一考を要する^(B63)。

付編1のとおり、第6・7次調査で出土した鍛冶関連遺物について化学分析を行った。S B2020P106から出土した鉄釘のEPMA分析からは非金属介在物にチタンが多く含まれ、始発原料が砂鉄であることが判明した。また、178頁のマクロ写真No.9C・Lからは炭素量が不均質な素材を利用して鉄釘を鍛造していたことが判明した。化学成分の分析結果からは、鉄鉱石系の不純物であるCaO、MgO、MnOや砂鉄系の不純物であるTiO、Vの割合が低く、いずれの始発原料を用いても精錬作業が必要のない原料が持ち込まれていたことが判明した。これらを総合すると、始発原料は砂鉄で、美濃山廃寺では鍛錬鍛冶のみが行われていたということが出来る。また、出土遺物に砥石が見られないことから刃物鍛冶が行われていた可能性は低い。

銅の溶解炉および関連遺物は128頁のとおり、溶解炉S L1および落ち込みS X20周辺で確認された。銅塊もほぼこの周辺で出土したが、覆屋など長期にわたる操業に必要な施設は周辺で認められない。関連遺物の出土量も考慮すると、鍛冶炉よりもさらに小規模短期間の操業で、小型製品の製作を目的としていたと考えられる。出土した炉壁は細片であるため、炉の規模を復元するのは困難だが、焼土の範囲などから小型のこしき炉で鑄型に直接傾けて湯を注いでいたと想定したい。ただし、炉周辺で埴塼や鑄型が出土していないため検討の余地は残る。

また、炉は丸・平瓦があらかじめ混入していた落ち込みにあえて築いており、通常ならば炭や粘土を貼り防湿処理を行う作業を簡略化したものと考えられる。そして廃炉後は再度、瓦、埴仏、ひさご形土製品などの寺院関連の遺物が流入したとみられる。

銅製品は銅鉾・耳環・飾金具が出土した。銅鉾は飾金具や鉄鉾と同様に金堂相当施設周辺から出土しており、同施設に関連したものであった可能性が高い。また、馬場南遺跡S B 301から出土した銅鉾とも形状が類似する。他方、耳環は近隣する女谷・荒坂横穴群からも副葬品として出土しているが、美濃山廃寺出土例は遺跡の性格から副葬品とは考えにくく、S B 2020ないし金堂相当施設の鎮壇具、または銅素材として持ち込まれたと考える方が妥当であろう。

付論2の通り、S L 1およびS X 20で出土した溶解炉関連遺物の化学分析も行った。その結果、錫と鉛の割合は低く砒素を2～3%含む銅であることが判明した。また炉壁や炉壁溶融物からも砒素銅が検出された。これまでにこのような砒素銅は紫香楽宮大仏の鑄造を行ったとされる滋賀県鍛冶屋敷遺跡からも出土している⁽⁸⁰⁷⁾。しかし、同遺跡出土の銅塊は錫・鉛・砒素のほか鉄を不純物として含んでおり、精錬作業が必要であったとされている。

両遺跡の銅塊の成分から、銅素材の質にいくつかランクがあることが想定されるが、『造東大寺司牒』の記載がそれを裏付ける⁽⁸⁰⁸⁾。まず、不純物が多く含まれる荒銅である「生銅」と精製された銅である「熟銅」の2種類がある。東大寺に搬入される銅素材の割合は「生銅」六割(上品・中品一割、下品約八割)、「未熟銅」一割、「熟銅」三割というのである。精錬が終わっていて、溶解するだけという点に着目すると美濃山廃寺に持ち込まれた銅塊は「熟銅」ということになる。そして、美濃山廃寺の工人は東大寺でも3割程度の搬入しかできなかった「熟銅」を必要だけ入手し、にわか作りの溶解炉で操業したことになる。決して長期間大規模な操業ではなく持ち込まれた銅塊も少量ではあるが、古代における銅素材流通を考える好材料ということができ、従事した工人も短時間で溶解炉を築炉し、美濃山廃寺で必要な青銅製品を短期間のうちに製作できる高度な技術を持った集団と想定できる。

さらにこれらの集団の由来は、軒丸瓦や土製品からも求めることができる。52頁でも述べたように美濃山廃寺で出土した単弁六葉蓮華文軒丸瓦(I a 型式)は、外区に珠文だけをめぐらす新羅系の特徴を備えたものであり、新羅系寺院として評価されている九頭神廃寺と同文である⁽⁸⁰⁹⁾。また、140～142頁で覆鉢形土製品やひさご形土製品について述べたが、これらが造塔供養を目的としたもので、無垢浄光経の影響を受けたものとするれば、同経の功德を求めて8世紀初頭より造塔が盛んとなった新羅との関連を想起せずにはおれないだろう。

古代において、渡来系集団が製作技術や仏教信仰においても先進的な存在であったことにはかわりなく、美濃山廃寺の冶金関連遺構や遺物はこうした渡来系集団、とくに新羅系集団の影響を色濃く受けていたと考えられる。

(関広尚世)

6) 仏教施策からみた南山城地域の古代寺院

南山城地域には高麗寺をはじめとして、古代寺院が30か寺存在する。これらの寺院の多くは現世利益の追求だけでなく、仏教の受容と鎮護国家思想の形成とも関わりがあると考えられる。日本に公式に仏教が伝えられたのは欽明期であり、以後、朝廷の仏教観及び仏教施策はいくつかの画期を迎えながら変化していった。本項では仏教伝来から奈良時代のまでの仏教施策について振り返り、美濃山廃寺の歴史的意義を考える一助としたい。

さて日本最古の寺院は飛鳥寺である。用明天皇2(587)年、蘇我馬子の建立発願により造営がはじまった。推古4(596)年に堂塔の造営がほぼ完成したといわれ、実に9年の歳月を要して造営が行われたことになる。飛鳥寺の建立に関わったのは4種八人の工人集団であり、これらの高い技術を掌握したのは蘇我氏であった。高麗寺では飛鳥寺と同範の瓦が出土しており、蘇我氏の影響下のもとに同寺が造営されたと考えられている。この時点ではまだ、仏教がまだ公認されているとは言いがたく、推古天皇2(594)年に発せられた、いわゆる「仏教興隆の詔」も皇太子と大臣に限定した詔の形式であり、万民に対して示されたものではない。まず、仏教という宗教の存在を認めた段階といえよう。他方、推古32(624)年には全国の僧尼と寺の数を数えさせており、寺院統制の必要性を感じ始めていることがうかがえる。

次の画期は舒明天皇11(639)年、百済大寺造営の時である。ここで初めて朝廷が仏教寺院建立を宣言し、仏教を正式に受容したことになる。また、大化元(645)年の乙巳の変後にも孝徳天皇が寺院造営奨励の詔を出しており、ここにも仏教施策への変化が認められる。斉明天皇6(660)年には仁王会が開かれたことが日本書紀にある。ここに鎮護国家思想の萌芽が認められ、白村江の戦いで大敗し遷都した大津京で営まれた崇福寺、南滋賀廃寺、穴太廃寺、三井寺は、立地や伽藍配置などから京鎮護の寺であることがわかっている。天智天皇も仏教の力を借りて国の安定をはかろうとした。鎮護国家思想の高まりがみえはじめる。

第3の画期は天武・持統天皇期である。壬申の乱後、673年に即位した天武天皇は政権の安定化を急ぐことになる。同年、朝廷が初めて建立した百済大寺を自らの宮殿がある場所に移し、守りを固めようとした。さらにそれまでは無量寿経や一切経を上げていたのに対し、鎮護国家の経典でもある金光明経・仁王経・金剛般若経を重視し始める。天武天皇5(676)年以降のことである。また、同天皇9(680)年4月には官寺の制を整えることで寺院制度を確立し、中央だけでなく地方寺院の建立を促進し、国家の平安を願った。同年5月には宮中で金光明経が説かれ、11月には新羅の感恩寺の影響を受け新たな伽藍配置を持つ薬師寺の造営がはじまった。新羅感恩寺が朝鮮半島を統一した文武王発願の寺であることから、薬師寺の伽藍配置は鎮護国家を目的としたものだったと考えられている。一方、同天皇12(683)年には僧正・僧都・律師を任命し、仏教界の統制もはかっている。持統天皇6(692)年には再び全国の寺院を数えさせたところ、545か寺であった。推古朝から約12倍に増加していることになり、少なからず朝廷の仏教興隆施策が功を奏したことになる。そして、710年平城京に遷都した際には、大津京と同じく京を鎮護する寺院として大官大寺・本薬師寺・法興寺が移建され、興福寺が新たに造営された。これは藤原京期に形成さ

れた鎮護国家思想を踏襲したものであったと言える。このころには、山田寺式・川原寺式・法隆寺式・小山廃寺式という官の掌握下であることを示す「四系統の瓦」が確立しており、全国の寺院がいずれかの影響を受けながら寺院の造営をおこなったことが見てとれるようになる。山背国では、久世郡・綴喜郡・相楽郡で川原寺式系、宇治郡・愛宕郡・紀伊郡で小山寺式系の瓦が出土している。すなわち南山城地域では主として、官から川原式系寺院造営技術による援助を得ていたことになる。

第4の画期は、鎮護国家思想がより一段と高まった聖武・孝謙天皇期である。聖武天皇が即位したのは神亀元(724)年である。天平5年には飢饉、天平6(734)年には地震、天平7(735)年には農作物の不作、天平9(737)年に天然痘の蔓延と相次ぎ、天平12(740)年には藤原広嗣の乱が勃発し、それを契機として恭仁宮へと遷都することになる。このような事態が鎮護国家思想へと傾倒するきっかけとなり、神亀元年から天平13(741)年の間に大般若経・金剛般若経が計8回、金光明経が計7回と異例の多さを示す。また、天平13年に国分寺造営の詔、天平15(743)年には盧舎那大仏造像の詔を出し、仏教の力により安定した世を作り出そうという、鎮護国家の具現ともいべきこの2大事業を推し進めていくことになる。天平18(746)年恭仁宮大極殿が施入され、山背国分寺が造営されると周辺寺院にも改修が加えられた。高麗寺・燈籠寺廃寺・里廃寺などで恭仁宮または山背国分寺と関連する軒瓦が確認されている。称徳天皇期には天平神護3(767)年(のちに神護景雲に改元)、神護景雲2(768)年を中心にいわゆる百万塔が作られたことが、法隆寺所蔵例から判明している。無垢浄光大陀羅尼經に基づき、造塔により国家の安寧を祈願しようというものである。同経は密教の經典でもあり、奈良時代には密教との関係もより深まったことを示している。

延暦10(791)年には「浮図修理の詔」が出され、山背国内の仏塔を修復させているが、これも修塔による功德を目的としたものであり、高麗寺・山背国分寺・平川廃寺等でその痕跡が認められる。延暦12(793)年、朝廷は新しい都への遷都に備えて密教の素養を備えた僧、賢璟を派遣する。通常、地相を占うのは陰陽寮の職掌であり、あえて賢璟を派遣したことは、鎮護国家思想への強い傾倒と密教との結びつきを象徴していると言える。

以上、仏教施策という観点から南山背地域の古代寺院を外観した。美濃山廃寺周辺の寺院は蘇我氏や官の掌握下にあり、鎮護国家思想の影響を強く受けていた。また、奈良時代も後半になると密教の影響を受けていたということが出来る。次項では各寺院の発掘成果から美濃山廃寺の歴史の意義について考えてみたい。

(大高義寛)

7) 美濃山廃寺と南山城古代寺院の様相

南山城地域は現在の行政区分では、京都市南部と宇治市・城陽市・木津川市・八幡市・京田辺市・綴喜郡域にまたがり、これまでの発掘調査や確認調査、瓦の採集状況などから30箇所程度の寺院の存在が明らかとなっている。今回、発掘調査を実施した八幡市は綴喜郡に属し、美濃山廃寺を含めて3か寺の存在が知られている。

ところで、南山城地域にこれら多くの寺院が営まれた背景には、古くから大和と各地を結ぶ主要な交通路が通っていたことによる。たとえば、木津川市山城町の高麗寺が営まれた地は古くから交通の要所であり、高句麗からの使者が一時的に滞留したという伝えもある。飛鳥寺と同范の瓦が出土することから蘇我氏との関わりも見え、大和と山背を結ぶ要所を蘇我氏が押さえていたということが言えよう。そういった地域に高麗寺をはじめとして、飛鳥時代以降、多数の寺院が営まれたことは単なる仏教信仰ではなく、政治的意味合いの強い寺院造営および運営であったことを示唆している。南山城地域の古代寺院は主に木津川の右岸と左岸の交通網が発達した地域に建立されており、後述する古墳時代から続く氏族や彼らが営んだ集落とも関連がある。本項では、両岸の古代寺院の様相を概観し、美濃山廃寺との関係性を考えてみたい。

(1) 木津川右岸の古代寺院

木津川右岸のおもだった寺院としては、相楽郡高麗寺・蟹満寺・井手寺、久世郡久世廃寺・平川廃寺・広野廃寺がある。また、宇治川の右岸に位置するが大鳳寺がある。いずれも川原式系の軒瓦が出土している。奈良時代に創建された山背国分寺をのぞき、大半が豪族層・渡来系氏族によって造営された氏寺である。とくに相楽郡の古代寺院は、後述するように高句麗系の渡来氏族によるものが多いが、前項で述べた仏教施策により官からの援助を得たものと考えられる。またこれらの寺院の多くが、足利健亮氏が古北陸道と呼ぶ大和から近江に向かう道に沿って、木津川右岸の古代寺院が位置している。以下、発掘調査により概要がわかるものについて述べてみたい。

①高麗寺跡 木津川市山城町に位置し、南山城地域で最初に創建された7世紀初頭の寺院である。伽藍整備が本格的に行われるのは7世紀後半で、それ以前に「金堂かそれに相当する小規模な堂舎が存在する程度」の前期高麗寺の存在が想定されている。発掘調査成果によると寺域は東西約190m・南北約180m、東に金堂、西に塔を配する法起寺式伽藍配置である。金堂は瓦積基壇で、基壇規模は南北13.4m、東西推定16.0m、高さ約0.8mを測る。基壇上に礎石据え付け穴または礎石の抜き取り穴が6か所確認され、建物規模は、東西11.7m、南北9.0mの建物であったと想定されている。塔は一辺約12.7mの瓦積基壇である。基壇の現状の高さは0.8mで、当初の基壇高は1.5m前後あったと想定されている。塔は塔心礎のみ確認でき、基壇上面では建物規模を復元できる礎石据え付け穴は遺存していなかった。講堂跡は東西23.7m、南北1.95m(推定)で、残存する礎石から基壇高0.6m前後の瓦積基壇と想定されている。基壇上には礎石が2か所と礎石抜き取り穴が3か所遺存しており、その状況から桁行5間、梁行4間の建物を復元している。造営氏族としての最有力候補は、高句麗系の貊氏である。

②久世廃寺 城陽市久世に位置する7世紀前半の寺院である。発掘調査成果によると寺域は東西約120m・南北約135m、伽藍配置は東に塔、西に金堂を配する法起寺式伽藍配置である。講堂は塔・金堂の方位と一致せず、わずかに東に振れている。また、塔・金堂の前面には南門と南門から東西にのびる回廊が存在する。後述の平川廃寺の僧寺に対し、久世廃寺を尼寺と考える例もある。

③平川廃寺 城陽市平川に位置する7世紀前半の寺院で、久世廃寺の南方500mに位置する。

発掘調査成果によると寺域は東西約175m・南北約115mで、法隆寺式伽藍配置をとる。金堂の側壁外表は、30～50cmの平らな自然石の平坦面を外側にむけた地覆石の上に瓦片を積み上げた瓦積基壇である。基壇の規模は東西22m、南北19.5mを測る。塔跡は、一辺17.2mを測る正方形で、基底に玉石を立て並べて地覆とし、その上に一部丸瓦・軒平瓦を混じえつつ半裁平瓦を横積みにしたもので、基壇の高さは西で1.4m、東で0.9mを測る。基壇上面中央には、東西約3.0m、南北約5.5m、深さ0.5mを測る心礎抜き取り穴と思われる掘り込みと四天柱2か所と側柱10か所の礎石据付痕が検出されている。初層建物規模は一辺10.5m、各柱間は3.5m等間隔で、東大寺・相模国分寺などに次ぎ、地方寺院としては大規模な七重塔が想定されている。地覆石の上に半裁した平瓦を横積みにし、上半部は漆喰化粧が施されている。金堂東側の建物基壇はガラスを芯にした入念な造成を行ったもので、東西15m(南北不明)のもの、東西6.5m(南北不明)の2棟の建物痕跡を確認している。2棟とも礎石据付痕は削平されており建物規模は不明である。造営氏族としての最有力候補は、黄文氏である。

④大鳳寺跡 宇治市兎道に位置し、7世紀後半の寺院である。寺域を示す2条の溝が検出されている。東西溝S D 402は寺域の北限を示す溝で、検出長約26m、幅約2.3m、深さ約0.5mを測り、東に対して3°南に傾くもので、金堂の東西辺に対しては3°30'北に振れる。寺域の南限は南部地区で検出した築地跡S A 701で、S D 402との直線距離は約112mを測り、ほぼ一町にあたる。S D 402とS A 701の方位は平行ではなく、やや台形状の敷地を有していたものと思われる(美濃山廃寺と比較的近い規模の区画溝である)。また、S D 402の溝内からは凸面に格子タタキを残す平瓦が多く出土している。これらは「粘土板桶巻き作り」の平瓦A型式で、凸面に縄タタキを残すもので凸型台による「一枚作り」の平瓦B型式を含まないことが指摘されている。さらに大鳳寺跡の補修瓦に使用された軒瓦は、平城宮遷都後に用いられたものを使用している。S D 402の瓦出土状況は平城遷都以前に人為的に埋められたており、これも美濃山廃寺の区画溝S D 001・090などとよく似た状況である。大鳳寺跡の寺域の東西区画については、寺域の北西部で南北方向の溝S D 301(検出長約15m、幅約0.9m、深さ約7m)を検出しているがその性格は不明である。

大鳳寺跡の金堂跡は、南・北辺に下成基壇を付設した瓦積基壇で、主に平瓦の破片を用いている。下成基壇を含めた金堂跡の規模は南北長17.8m、下成基壇を除くと南北長16.1mとなる。東西の検出長は2mで、東辺の瓦積を復元すると東西長約1.95mとなる。金堂の瓦積基壇が創建当初に造営されたものか、後の改修時に伴うものかは不明である。金堂跡周辺からは創建瓦(NM01)・重弧文軒平瓦(NH01)が圧倒的多く出土しており、創建期から金堂が存在したと想定されている。なお、この金堂は平安時代前期の軒平瓦(NH03)が出土しており、平安時代前期まで存続していたと推定されている。推定塔跡は、金堂の東辺から12.8～13.5m離れた箇所、金堂跡の東・西辺に並行して検出され、創建期の整地層からの高さ約60cmの高まり(段差)を確認している。

さらに寺域の西区画溝の西側で、南北棟の大型掘立柱建物S B 200(梁行1間(6.1m)、桁行3間(14.27m))を含む南北長40m以上、50m未満の区画溝がある。これを西区と位置づけ「僧房

を念頭に置いた寺院運営に係わる生活空間」が想定されている。

(2) 木津川左岸の古代寺院

木津川左岸では相楽郡に里廃寺・下粕廃寺、綴喜郡に三山木廃寺・普賢寺・志水廃寺・西山廃寺、そして美濃山廃寺がある。右岸に造営された寺院同様、大半が豪族層・渡来系氏族によって造営された氏寺であるが、川原式系の軒瓦が出土し、官からの援助により造営されたと考えられるのは、里廃寺・下粕廃寺である。また、これらの寺院の多くは足利健亮氏が古山陰道や古山陽道と呼ぶ交通路に沿って位置している。

①里廃寺 相楽郡精華町に位置する7世紀後半の寺院である。「想念寺の西側にはかつて土壇があったとの伝えもあり、里廃寺の中心部分にあたるものと推定され」ている。周辺部の調査では寺域の北側を限る溝 S D01(検出全長15m、幅約1.3m、深さ約0.25m)を検出している。伽藍配置や規模については不明であるが、北限溝 S D01からは三重弧文軒平瓦・鬼瓦が出土している。また、周辺では鴟尾も出土している。所在地が古代の下粕郷であることから、高麗寺跡と同様、渡来系氏族「粕氏」の一族が関わった寺院である可能性が高い。

②下粕廃寺 相楽郡精華町に位置する7世紀後半の寺院である。伽藍配置や規模については不明であるが、調査の結果、平安時代後期が中心の寺院であることが明らかとなった。

③志水廃寺 八幡市八幡に位置する7世紀前半の寺院である。発掘調査で瓦積基壇部分の西北角部分と想定される箇所が確認された。瓦積基壇の西側は10m程度で、その高さ50～60cmを測る。基壇に使用された瓦は、平瓦が大部分を占めるが、一部丸瓦を使用しているものである。

(3) まとめ

以上、美濃山廃寺周辺寺院の概要について述べてきた。大鳳寺例では美濃山廃寺例とほぼ同規模の区画溝が確認されている。また、多くの寺院の創建時期は7世紀後半で、木津川の両側の交通路に沿って位置している。この点は美濃山廃寺も例外ではない。しかし、美濃山廃寺が位置する綴喜郡では川原寺式以外の四系統瓦も見られない。このことは、寺院造営が官からの援助ではなく独自に行われた可能性を示しているが、遺物の組成や出土状況からみられる美濃山廃寺の特殊性と齟齬がない。8世紀中頃以降に補修・改修が行われ、平安時代に多くの寺が廃絶する傾向にある。美濃山廃寺も瓦の出土状況などから、この存続時期についてはほぼ異論がないと言えよう。

8) 南山城古代寺院の造営基盤と美濃山廃寺について

前項で示したように高麗寺では7世紀初頭に前身寺院の存在が考えられている。それと同様に平川廃寺・久世廃寺・正道廃寺・広野廃寺・大鳳寺跡でも前身寺院の存在する可能性がある。このため、寺造営以前の古墳時代の古墳群の様相を概観し、これらの寺院や美濃山廃寺の造営経緯について理解を深めてみたい。

(1) 木津川右岸の古墳と集落

高麗寺・蟹満寺・井手寺のある相楽郡では、大型前方後円墳として木津川市山城町椿井大塚山

古墳(前方後円墳、2期、175m)、同平尾城山古墳(前方後円墳、3期、110m)があり、古墳時代前期には100mを超える古墳が築造されている。続く古墳時代中期には100mを超える大型前方後円墳がなく、木津川右岸城の木津川市(旧木津町)に瓦谷1号墳(前方後円墳、3期、54m)、上人ヶ平5号墳(造出付円墳、4期、25m)、相楽郡精華町鞍岡山古墳(円墳、40m、3期)など、中規模の古墳及びその前方後円墳を取り巻くように小型の円墳あるいは方墳が築造されるようで、古墳規模としては小規模なものである。古墳時代後期には木津川市山城町域で横穴式石室を埋葬施設として畿内における初期の横穴式石室を採用した古墳として6世紀初頭の山城町天竺堂1号墳(前方後円墳、7～8期、24m)があり、渡来系氏族の墓と位置づけられている。この地域での後期古墳の存在は希薄である。一方、須恵器出現以降の古墳時代中期後半の集落遺跡として木津川市山城町上粕北遺跡がある。上粕北遺跡は、高麗寺の北東約1kmの位置にあり、道路路線帯の限られた調査であったが、11棟の堅穴建物を確認している。そのうちの1棟は「L字形の竈」をもつ渡来系と思われる堅穴建物である。

久世廃寺・平川廃寺・広野廃寺のある久世郡では、古墳時代初頭の芝ヶ原古墳(前方後方墳、1期)の造墓以降、古墳時代前期には梅ノ子塚古墳(前方後円墳、4期、87m)、西山1号墳(前方後方墳、4期、76m)、古墳時代中期には箱塚古墳(前方後円墳、5期、100m)、丸塚古墳(帆立貝式古墳、5期、80m)があり、6期には全長180mを測る久津川車塚古墳が造墓され、7期の芭蕉塚古墳(前方後円墳、114m)へ繋がる。7期の芭蕉塚古墳の造墓以後、首長墓が縮小し、大型前方後円墳が消滅する。久津川車塚古墳・芭蕉塚古墳は南山城地域において圧倒的な規模を有し、周辺地域を包括した大首長の存在が指摘されている。一方、芭蕉塚古墳以後、久津川古墳群では大型古墳が消滅することについては、ヤマト政権の再編により地方豪族を通じた支配から継体朝以後の旧地方豪族を経由しない直接的な支配へと移ったとも云われている。6世紀にはこれまでの地域支配体制が崩壊し、小地域に首長層が古墳築造を始める時期である。なお、久津川古墳群では6世紀末頃に上大谷17号墳、7世紀には上大谷11・14号墳、8世紀前半には尼塚5号墳で横穴式石室を埋葬施設とする古墳が築かれている。

寺院造営時期の集落遺跡としては正道遺跡で堅穴建物25棟、掘立柱建物11棟を検出している。堅穴建物は6世紀末頃に出現し、7世紀初頭に堅穴建物和掘立柱建物が共存し、8世紀まで堅穴建物が造られている。

久世廃寺の背後に広がる芝ヶ原遺跡では157棟の堅穴建物和掘立柱建物42棟を検出している。6世紀中頃に堅穴建物が出現し、6世紀末から7世紀初頭に堅穴建物和掘立柱建物が共存し、7世紀初頭以降はすべて掘立柱建物となり、7世紀末まで存続する集落遺跡である。

『日本書紀』仁徳12年10月条に「大溝を山背の栗隈県に掘り、以て田を潤す」とある。『和名抄』によると久世郡栗隈郷は現城陽市域の上津屋・平川、宇治市域の南西端の大久保・広野などの地域と推定されており、当該地の豪族首長が「栗隈県主」として朝廷から与えられ、県の管理をしていたと想像される。また、久世郡には5世紀後半から6世紀初めに高句麗から渡来した渡来系氏族を祖先とし、画工司に所属した黄文氏(黄文氏)の存在が知られており、これら氏族が平川廃寺・久世

廃寺・広野廃寺の造営に関与した可能性が考えられている。

大鳳寺跡のある宇治郡では、奈良県豊浦寺に瓦を供給した牟上り瓦窯があるが、周辺に集落遺跡として菟道遺跡・西牟上り遺跡が知られている。菟道遺跡では5世紀前葉に集落を形成し、7世紀前葉での集落構造は明らかでないが、7世紀後葉には集落を再形成すると云われている。菟道遺跡谷下り地区の調査では、7世紀第2四半期から8世紀中頃に機能したと思われる堅穴建物1棟、掘立柱建物9棟が確認されている。西牟上り遺跡は菟道遺跡の北側の低丘陵に広がる遺跡であり、飛鳥・奈良時代の集落遺跡として知られており、大鳳寺跡周辺では7世紀後半期に掘立柱建物と堅穴建物を4棟検出している。

これまで述べてきたように相楽郡では渡来系の堅穴建物が検出された古墳時代後期の集落が存在し、久世郡では粟隈氏を中心とした古墳群の存在と古墳時代後期の大型集落群(正道遺跡・横道遺跡など)があり、これらが各寺院の造営基盤となったと考えられる。

(2)木津川左岸の古墳と集落

里廃寺のある木津川左岸の相楽郡には、古墳時代中期以降の集落例として森垣外遺跡がある。森垣外遺跡では道路路線帯という限られた範囲の調査ではあったが、古墳時代中期以降の陶器編年TK216型式から飛鳥Ⅱ期までの集落が存在しており、掘立柱建物119棟のほか、大壁住居3基があり、調査地全体から朝鮮半島から搬入された陶質土器や韓式系土器などが出土している。古墳時代中期の集落変遷では、TK216型式期に集落を形成し、TK23・TK47型式期に集落の盛行期があり、MT15・TK10型式期に集落の廃絶期に入ると位置づけられている。大壁住居・土器の特徴から渡来人の特徴を有する資料が数多く出土している。なお、森垣外遺跡周辺は『和名抄』郡郷部に山城国大狛郷・下狛郷とあり、里廃寺や高麗寺と同様、狛氏との関連が考えられる地域である。

美濃山廃寺に近接する男山丘陵上では、古墳時代前期には八幡茶白山古墳(前方後円墳、3期後半、112m)、石不動古墳(前方後円墳、4期、75m)、八幡西車塚古墳(前方後円墳、4期、115m)、八幡東車塚古墳(前方後円墳、4期、94m)がある。中期には美濃山王塚古墳(前方後円墳、5期、66m)の大型古墳がある。しかし、その後は御毛通古墳などがあるものの顕著な古墳はなく、横穴式石室墳としては美濃山廃寺の丘陵北東側に横穴式石室を埋葬施設とする柿谷古墳が知られている程度である。一方、この地域の特徴として美濃山丘陵から京田辺市松井丘陵にかけて200基ともいわれる横穴墓群が存在する。

美濃山廃寺を中心とした丘陵部には女谷・荒坂横穴群が存在する。1～4基を一つの単位とし、総延長400m以上にわたって50基以上の横穴が造営される。未調査部分を含めて200基以上の横穴が分布していると考えられる。これら横穴群は、一集落の墓地ではなく、複数の集落がこの一帯を墓地として利用したと考えられる。横穴は、荒坂B支群の南半から4期(TK43、Ⅱ型式4段階)の段階で始まり、6期(TK209でも新しい様相、Ⅱ型式5段階)の段階で終焉する。変わって荒坂A・C支群で横穴の造墓が新たに開始され、7期(TK217でも古い様相、Ⅱ型式5～6段階への過渡的な型式)・8期(TK217、Ⅱ型式6段階)にその最盛期を迎え、9期(Ⅲ型式1・2段階)

まで続くといわれている。女谷B支群横穴の墓地内路面から1期(TK47、I型式5段階)の土器片、各支群の横穴から埴輪片など2期(MT15～TK10、II型式1・2段階)の遺物が散発的に出土しており、女谷・荒坂横穴群が造られる以前に埴輪を樹立した古墳がこの近辺に存在し、それを破壊して横穴を造るための墓域が造成された可能性が考えられる。

平成21・22年度に発掘調査を実施した女谷D支群は女谷・荒坂横穴群のなかでも美濃山廃寺に近接した位置に築かれた横穴群である。この横穴群は8基からなり、7・8期に横穴が築かれているが、平安時代初頭に横穴を再利用しており、女谷D4号横穴では瑞雲双鷲八花鏡が出土している。また、横穴の谷部では、墓域の通路を再利用したと考えられる通路状の面で布目瓦(平瓦)が出土しており、美濃山廃寺との関連が指摘できる。

八幡市狐谷横穴群は美濃山廃寺の北東約750mにあり、8基の横穴が発掘調査され、6世紀後葉から7世紀中葉前半にかけて横穴が造られたことが明らかになった。これらの横穴の最終埋葬あるいは再利用に伴って出土した土器に飛鳥I～飛鳥V期の土器がある。5号横穴(飛鳥II)・6号横穴(飛鳥I)・7号横穴(飛鳥II)・8号横穴(飛鳥V)である。

美濃山廃寺周辺の集落遺跡としては、古墳時代後期から平安時代にかけて存続した内里八丁遺跡がある。同遺跡は、美濃山廃寺の東南東約2.3kmの位置にあり、内里八丁遺跡のA・B区で飛鳥時代から平安時代の建物群(竪穴建物1棟、掘立柱建物18棟)を検出している。C～E区ではC・E地区第3遺構面及びD区第2遺構面と呼ばれている飛鳥時代の遺構面で掘立柱建物9棟を検出している。内里八丁遺跡A～F区の調査成果によると7世紀後半での遺構密度が希薄であるのに対して、7世紀末～8世紀初頭にはとくに掘立柱建物が分布し、B区のS B16(南北棟 南北6間(約10.8m)・東西2間(約5.1m)、S B19(南北棟 南北5間(約11.4m)・東西2間(約4.65m))の大型建物を中心に総柱の倉庫棟と思われる建物が3棟見つかっている。C・D区の北西延長部分を調査した第20次調査では、8世紀末～9世紀前半の3間(東西4.5m(柱間隔約1.5m)、南北3間6.0m(柱間隔約2.0m))の掘立柱建物S B60と一辺5.8mの井籠組の井戸跡を検出した。井戸枠(内法約1m)内から銅製黒漆銚尾や「承和昌寶」(835年初鑄)が出土した。また、直径約1.9m、深さ約0.3mを測る円形土坑内から8世紀前半までの土師器・須恵器とともに中国唐代の紋胎陶枕が出土している。内里八丁遺跡周辺には上津屋遺跡・上奈良遺跡・新田遺跡など、平安時代から中世にかけての遺物を含む遺跡が点在している。これらの遺跡では現地地表0.5mまでが江戸時代に形成された堆積で、その下層に平安時代から中世の遺物包含層が1m程度堆積している状況である。これらの遺跡周辺には、木津川や防賀川による後背湿地堆積が厚く堆積しており、美濃山廃寺に関連した可耕地であった可能性が考えられる。しかし、現状では内里八丁遺跡などの自然堤防上に造られた遺跡が点在していたものと思われる。京田辺市魚田遺跡の調査成果と地層観察により、同遺跡周辺では木津川の堤防決壊で堆積物が何層も重なっており、洪水流が低地面の上を流れて浸食地形となっているとの指摘がある。このため、美濃山廃寺周辺の景観は当時と現在と大きく異なっている可能性がある。

以上のように美濃山廃寺周辺では、古墳時代の美濃山王塚古墳の造墓以降、大型古墳の造営は

なかった。しかし、美濃山廃寺が立地する高位段丘面の斜面には狐谷、美濃山、女谷・荒坂横穴群など総計200基とも推定される横穴群が存在しており、美濃山廃寺造営を考える上での有力な材料になるものと思われる。横穴群では横穴の造墓や追葬を繰り返しながら、7世紀末まで横穴墓として機能している。横穴への埋葬が停止した後も八花鏡や土器などが出土していることから、美濃山廃寺存続段階でも横穴の存在は知られており、再利用されていたものと思われる。

美濃山廃寺については、第7次調査報告323～329頁で述べるように創建期(奈良時代初頭)、整備期(奈良時代前半～中頃)、拡充期(奈良時代中頃～後半)、衰退期・廃絶期(平安時代前半)の展開が考えられる。美濃山廃寺の拡充期にあたる内里八丁遺跡第20次調査で検出された井籠組の井戸や、土坑から出土した紋胎陶枕などは異彩を放つ遺物である。この内里八丁遺跡は、足利健亮氏想定 of 古山陰道付近に位置する。同遺跡からは道路側溝と思われる2条の溝を検出しており、実際に古道が存在したことが検証されている。美濃山廃寺の東側の丘陵部から平野部への地形変換点付近には、足利健亮氏が古山陽道の存在を想定されており、造営に際し、交通の要所であることが立地の条件であったことを推測させる。

9)旧地形の復元

美濃山廃寺及び美濃山廃寺下層の現地調査着手前の状況は竹林であった。この地は筍の丁寧な栽培を手がけており、良好な竹林であったが、反面、良好な筍を栽培していくため、土の移動が行われ、旧地形が著しく改変されていた。またこの地は、明治時代を中心に茶畑が営まれていたことや昭和初期には棧瓦を焼成する窯があったようである(美濃山廃寺第9次調査で確認)、粘土採掘などが行われていたことが想像できる。

これら明治時代以降の地形の改変により、奈良時代を中心とした遺構、特に掘立柱建物の柱穴、土坑などは地点ごとに検出できる遺構の深さがそれぞれ異なっている。

ここでは検出遺構及び地山面の検出状況を元に弥生時代および奈良時代を中心とした地形復元を試みてみたい。

弥生時代の遺構は、これまでの調査と合わせて弥生時代後期の堅穴建物を31基検出した。これらの堅穴建物は、丘陵上に広く散漫な状態で分布している。堅穴建物検出面の標高は44.2～46.5mで、北東方向が高く、南西方向に傾斜しており、丘陵上部の北半部では100mで約30mの比高がある。また、堅穴建物の床面の標高は44.0～46.3m、堅穴建物の壁面の立ち上がり高は0.2～0.4mである。堅穴建物床面が当時の地表面から1m前後であったと仮定すると、弥生時代後期における集落の標高は47.5m前後が最高位であったと思われる。

奈良時代を中心して建てられた掘立柱建物は、V・Ⅷ区に点在するが、その柱穴の深さをみていくと、中心建物である美濃山廃寺第7次調査の礎石・掘立柱併用建物S B 2020の造営に関わる平坦面の掘り込み面の上端は標高46.0m、建物の検出面は標高45.8mとなる。S B 2020の柱穴の底部の標高は44.5m程度で平均しており、柱穴の深さは1.3mを測る。また、S B 2020では掘立柱と併用して礎石を据えた部分があり、その中には礎石を安定させる根石群を検出した。これらのこ

とからS B2020は奈良時代の地表面から大きくは削平されていないことがわかる。

一方、S B2020の南側の瓦の細片を多く含む瓦溜りS X208とその周辺の遺構検出面の標高は45.0m前後を測る。仮にS B2020と同じ標高に金堂相当施設等が存在したとすると、当時の地表面から80cm前後が削平されたことになる。また、南側の第6次調査地B地区で検出した瓦溜りS X21の検出面の標高は44.8m前後で、S B2020の検出面から約1m低く、建物等の諸施設の痕跡は確認できなかった。

丘陵南端部で検出した美濃山廃寺1号窯(S Y17)では、焼成部の大半が後世に削平されており、燃焼部の一部、床面から36cmまで遺存している状況であった。これまでの窯の調査例から燃焼部床面から天井部までの高さ1.5m、焼成部の長さ6m程度、床面傾斜角25°程度と想定すると、焼成部床面から窯尻までの比高は2.5m程度となる。このことから美濃山1号窯周辺の当時の標高は45.8m程度であったと想定できる。ただし、燃焼部焚き口から排出された灰原が丘陵上位から谷部にかけて薄く堆積していることから、丘陵部の斜面傾斜は奈良時代を中心とした地形をそのまま残していることも判明した。

丘陵東側斜面における土層断面D(第17図)のように旧表土とその下層で奈良時代の遺物を含む包含層があり、現地形に沿うような地形であったと思われる。

このことから、茶畑・竹林によって旧地形が改変されている状況であったが、遺構・包含層の検出状況から丘陵北部は大きく改変されておらず、南半部での改変が著しかったことが想像できる。現状での丘陵平坦面は、今回の調査区の南西側に広がっているにもかかわらず、検出した建物群が丘陵平坦面の東側に偏して造られているのは、東側にある平野部を意識するとともに、方位を意識して選地されたためと思われる。(石井清司)

9. まとめ

1) 美濃山廃寺第6次調査

調査は、美濃山廃寺推定寺域の北東部から南部にかけての範囲を対象として実施した。調査前は丘陵全体が竹林であり、竹林の造成などにより本来の地形が大きく改変されていることが予想された。

調査の結果、掘立柱建物7棟、掘立柱塀3条、溝、土坑、柱穴、鉄器生産関連遺構群、青銅器生産関連遺構である溶解炉1基、瓦窯1基などを検出した。しかし、後世の竹林の造成等によって地形が大きく削平および改変されているため、遺構の遺存状況等は必ずしも良好とはいえない。

A地区北部では掘立柱建物4棟のほか、溝、土坑、柱穴などを多数検出した。中でも溝S D 039や土坑S K 470から多数の土器が出土した。これらの出土土器群は美濃山廃寺の年代を考える上で重要な資料で、奈良時代前半から後半にかけての年代を与えることができる。

A地区中央部では掘立柱建物3棟のほか、鍛冶炉1基や土坑などを検出した。また、A地区南部では鍛冶炉や鉄滓が出土した土坑、炭窯など鉄器生産に関連する遺構群を検出した。遺構群は大きく2時期に分けられる。鉄器生産関連遺構はA地区南部に集中するが、A地区中央部でも鍛

冶炉が1基認められたほか、柱穴内や東側斜面の堆積層などから鍛冶滓や羽口などが出土しており、他の地点でも鉄器生産を行っていた可能性が高い。

B地区では、青銅器生産関連遺構と考えられる溶解炉をはじめ、瓦窯、瓦溜り、瓦集中箇所、土坑などを検出した。溶解炉は美濃山廃寺で使用する青銅製品を生産したものと考えられるが、具体的な製品については明らかにすることはできない。瓦窯は残存状況は良くなかったものの、出土遺物の内容等から創建時の瓦類を生産していた可能性が高い。このほか、美濃山廃寺第9次調査でも瓦窯4基を確認しており、美濃山廃寺や周辺の寺院へ瓦を供給していたことが明らかになっている。また、B地区では建物遺構を確認することはできなかったが、瓦溜りや瓦集中箇所から多数の軒瓦が出土した。この軒瓦には軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式、軒平瓦Ⅰ・Ⅱ型式が含まれており、132～135頁で検討したように、出土量から美濃山廃寺の創建時の軒瓦であると考えられる。したがって、具体的な遺構として確認することはできなかったが、瓦の出土状況などからB地区に美濃山廃寺創建時の建物が存在したと判断される。

さらに、A地区南部からB地区にかけて、美濃山廃寺を特色づける覆鉢形土製品・ひきご形土製品が多数出土した。139～143頁で検討したように、小塔供養がこの付近で行われた可能性が高い。

以上のように、第6次調査の成果は、調査地北半部で掘立柱建物群が検出され、土器が多く出土すること、調査地南半部で美濃山廃寺創建期の軒瓦が出土し、仏教信仰を示す遺物が多数出土しているにもかかわらず、金堂や塔などの中心施設が検出されなかったことである。旧地形の復元からは、調査地南半部が大きな削平を受けているために寺院の中心施設が削平された可能性が指摘できる。第7次調査報告第123～126図にあるように、この地区に中心施設があると仮定すると、調査地北半部における建物の検出状況とは対照的であることがわかる。また、溝S D 039や土坑S K 470では多数の土器が出土しており、その周辺が生活空間であったことを示していると言えよう。

寺院の伽藍配置やその景観についてはこれまで数多くの研究が行われており、中には政所院や修理院といった寺院内の管理運営施設について具体的に論じるものもある^(註27)。美濃山廃寺においても当然、寺院を運営管理する上でこれらの諸施設があった可能性は高いが、出土遺構・遺物からはそれらを特定することは難しい。また、先に述べたように国家鎮護の概念が形成されつつある中で、寺院造営の様相が固定していない段階にあってはこのような明瞭な区分があったとは考えにくい。上原真人氏は寺域を仏地と僧地に大別している^(註28)。美濃山廃寺のような官の直接的支配を受けず、渡来人の影響を色濃く受けて造営された寺院に至っては、丘陵南部の削平を強く受けているものの仏教関連遺物が出土する第6次調査A地区南部とB地区および第7次調査区S B 2020を「仏地」ととらえ、丘陵北側の土器が多く出土し、掘立柱建物群が多く検出された地区を「僧地」ととらえておきたい。なお、美濃山廃寺における遺構変遷、時期区分、年代等については、第7次調査報告にまとめたので、そちらを参照していただきたい。

2) 美濃山廃寺下層遺跡第9次調査

弥生時代後期の堅穴建物を2棟検出した。いずれも平面形は円形であるが、後世の攪乱及び削平により残存状況は良くなかった。これらはA地区北部及び中央部西側平坦地で検出したのみで、A地区南部やB地区では確認していない。しかし、調査地の広い範囲から弥生土器が出土していることや第10～12次調査地では多数の堅穴建物が検出されていることから、当遺跡が、弥生時代後期の大規模な高地性集落であったことが明らかになった。

(筒井崇史・関広高世)

- 注1 美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次調査として、当調査研究センターが実施した。その調査成果については本報告集2を参照されたい。
- 注2 各遺跡についてはそれぞれの報告書を参照したが、ここでは割愛する。
- 注3 足利健亮「都城の計画について－恭仁京、平安京を中心に－」（『古代日本文化の研究 都城』上田正昭編 社会思想社）1976
- 注4 八幡市教育委員会『石清水八幡宮境内調査報告書』（八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書 第56集 2011
- 注5 古川匠「美濃山廃寺下層遺跡第8次」（『京都府遺跡調査報告集』第148冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2012
- 注6 江谷寛「美濃山廃寺発掘調査報告」八幡市教育委員会 1977
- 注7 梶井豊成「美濃山廃寺下層遺跡発掘調査概報」八幡市教育委員会 1987
- 注8 大洞真白「美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡範囲確認調査（1～5次）報告書」（『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第39集 八幡市教育委員会）2006
本報告の記述に当たり、美濃山廃寺第1～5次調査の成果については上記文献を参照した。
- 注9 同志社大学歴史資料館編「南山城の古代寺院」（同志社大学歴史資料館調査研究報告 第9集）2010
- 注10 西田敏秀ほか「九頭神遺跡Ⅲ」（『枚方市文化財調査報告』第61集 財団法人枚方市文化財研究調査会）2010 80頁図75
- 注11 注8文献36頁図22～2参照。
- 注12 藤原宮6271A。奈良国立文化財研究所「基準資料V」1977、「飛鳥・藤原宮調査報告Ⅱ」1978
- 注13 江谷寛「志水廃寺発掘調査報告」八幡市教育委員会 1977、江谷寛「西山廃寺（足立寺）」『南山城の古代寺院』（同志社大学歴史資料館調査研究報告 第9集）2010 356頁6-4参照
- 注14 注8文献37頁図22～1参照。
- 注15 西山廃寺：注9文献356頁6-6参照。百濟寺：財団法人枚方市文化財研究調査会「百濟寺跡」（『枚方市文化財調査報告』第17集）1984
- 注16 注8文献37頁図23-1参照
- 注17 注9文献286頁1-1参照
- 注18 京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告一瓦編一」1984
- 注19 注9文献。志水廃寺：103頁6-9参照。興戸廃寺：125頁7-8参照。普賢寺：139頁4-12参照。
- 注20 藤原宮6561。但し、久米寺瓦窯例は翔×○の文様
- 注21 注20に同じ
- 注22 志水廃寺：注9文献104頁7-9、山背国分寺：注18文献20頁第13図KH05
- 注23 大脇謙「鶴尾」日本の美術 No.392 至文堂 1999、以下の出土例については同文献を参照した。
- 注24 財団法人枚方市文化財研究調査会「九頭神遺跡Ⅱ－府営枚方牧野住宅建て替えに伴う九頭神遺跡第168次発掘調査概要報告書－」2004では、5号堅穴住居からも類似した施文のある須恵器杯G蓋が報告されており、7世紀第Ⅲ四半期と位置付けられている。
- 注25 星野敏二『鹽澤家蔵瓦圖録』伏見城研究会刊 2000
- 注26 法隆寺国宝保存工事報告書「五重塔」1955、「金堂」1962

- 注27 竹原伸仁「九頭神遺跡－九頭神廃寺－」（『枚方市文化財調査報告』第32集 枚方市教育委員会）1997
- 注28 藤原宮出土の6233型式などに類似すると考える。奈良国立文化財研究所編「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅱ（1978）など
- 注29 奈良県教育委員会「大和における古代竪跡」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第11輯）1959
- 注30 6313型式は細分形式が9型式以上あり、平城宮などで出土している。奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告」XⅢ 1991、奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編「平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧」1996
- 注31 大阪府史蹟名勝天然記念物調査保存調査会「百済寺趾の調査」（『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第4輯 大阪府）1934
- 注32 6135型式は、細分形式が4型式あり、おもに平城宮で出土している。注30文献に同じ。
- 注33 中島正「南山城における平安初期古瓦の様相」（『平安京歴史研究』 杉山信三先生米寿記念論集刊行会）1993
- 注34 6313D型式は平城宮で出土している。奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告」XⅢ 1991 ほか
- 注35 注13文献に同じ
- 注36 藤原宮出土の軒平瓦や平瓦などに認められる。奈良国立文化財研究所編「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅱ 1978 38～41・45～50・86～92頁
- 注37 注25文献
- 注38 八幡市教育委員会「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」第31集 2001、同第32集 2002
- 注39 西田直二郎「法勝寺遺址」（『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊）1925
京都市法勝寺における最近の調査でも多数の類似品が出土しており、考古学的にもこれが文献に見える円塔としていようである。『白河法皇八幡一切経供養願文』には、法勝寺に八角九重塔を建てた後、保安3（1122）年には小塔院を建て、小塔263,000基を安置していたが、大治3（1128）年さらに円塔183,637基を加えたとあり、まさにこの記述どおり出土している。
- 注40 石田茂作「土塔に就いて」（『考古学』第17巻第6号）1927
- 注41 肥後和男「日本発見の泥塔について」（『考古学』第19巻第4号）1938
- 注42 藤澤一夫「覆鉢形の土製品に就いて－古建築関係装飾具資料－」（『考古学雑誌』第34巻第14号）1944
- 注43 大洞真白「美濃山廃寺出土の覆鉢形土製品について」（『古代摂河泉寺院論集』第2集）2005
- 注44 中根勝「百万塔陀羅尼の研究」八木書店 1987、湯浅吉美「百万塔の思想的背景-南都仏教史における位置づけを考える-」（『埼玉学園大学紀要（人間学部編）』第5号）2005
- 注45 湯浅吉美「百万塔の思想的背景-南都仏教史における位置づけを考える-」（『埼玉学園大学紀要（人間学部編）』第5号）2005
- 注46 注45文献
- 注47 榎本杜人『朝鮮の考古学』 同朋舎 1980
- 注48 注45文献
- 注49 注47文献
- 注50 古松崇志「慶州白塔建立の謎をさぐる－11世紀契丹皇太后が奉納した仏教文物－」（『道文化・遼寧省調査報告書 2006』 京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル時代の多元的人文学の拠点形成」）2006
- 注51 禿氏祐祥「百万塔陀羅尼考証」 泉山堂 1933
- 注52 大脇謙「埴仏と押出仏の同原型資料－夏見廃寺の埴仏を中心として－」（『MUSEUM』418 東京国立博物館）1986
- 注53 滋賀県教育委員会事務局文化財保存課、滋賀県文化財保護協議会編「一較国道161号（西大津バイパス）建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ」2001 273頁や米田文孝ほか「X線スキャン装置による埴仏の調査」（『日本文化財科学会第27回大会要旨集』日本文化財科学会）2010など
- 注54 中東洋行「埴仏にみる調整痕の違いについて－夏見廃寺出土埴仏を例に－」（『関西大学博物館紀要』

- 第18号 関西大学博物館) 2012
- 注55 倉吉博物館『埴仏-土と火から生まれた仏たち』1992より転載
- 注56 護国院所蔵奈良国立博物館『押出仏と仏像型』1983
- 注57 葛城市博物館『輝く美の埴仏』2008より転載
- 注58 倉吉市教育委員会『史跡大原庵寺発掘調査報告書』1997
- 注59 奈良県立橿原考古学研究所編『当麻石光寺と弥勒仏概報』1992
- 注60 小稿作成にあたり、掲載を快諾いただいた京都府埋蔵文化財調査センターのみなさまをはじめ、下記の方々のご教示・ご協力を賜りました。記して御礼申し上げます。(敬称略・50音順)
朝来市教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、枚方市教育委員会、和歌山県立紀伊風土記の丘、大脇潔、近藤康司、清水昭博、竹原伸二、仲原知之、富加見泰彦、廣岡孝信、前岡恵美子
小稿は、笹川研究助成研究「セン仏の製作主体に関する考古学的研究～特に胎土から探るその実態～」(研究番号24-116)の一部成果を含みます。
- 注61 法隆寺国宝保存工事報告書『五重塔』1955、『金堂』1962
稲垣晋也「その他の建築資材」(『新版考古学講座』第7巻有史文化・下) 1979
- 注62 本津川市教育委員会『馬場南遺跡第3・4次発掘調査概報』(『本津川市内遺跡発掘調査概報Ⅱ』) 2010年、同教育委員会大坪州一郎氏のご教示による。
- 注63 同志社大学歴史資料館編『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館調査報告 第9集 2010
- 注64 鉄器等仏具への転用品の可能性もあり、今後検討を要する。
- 注65 三重県教育委員会大川操氏のご教示による。滋賀県教育委員会、財団法人滋賀県文化財保護協会「緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書」2002
- 注66 財団法人京都府埋蔵文化財調査センター『女倉荒坂横穴墓群』京都府遺跡発掘調査報告書 第34冊 2004
- 注67 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『鍛冶屋敷遺跡』2006
- 注68 兼賀七三男「古代長門の銅生産について」(『山口県地方史研究』50号) 1983、久野雄一郎「東大寺大仏の銅原料についての考察」(『橿原考古学研究所紀要考古学論叢』第14冊) 1990
- 注69 亀田修一「渡来人と金属器生産」(『鉄器文化の多角的探求』) 2004
- 注70 亀田修一「地方寺院の伽藍配置と造営課程」(『飛鳥文化財論考』) 2005
財団法人枚方市文化財研究調査会『九頭神遺跡Ⅱ-府宮枚方牧野住宅建て替えに伴う九頭神遺跡第168次発掘調査概要報告書-』2004
- 注71 岡広尚世「寺院景観への一試論」(『考古論集』-川越哲志先生退官記念論文集-) 2005
- 注72 山路直充「因分寺における寺院地と伽藍地(上)」(『古代』第110号) 2001
- 注73 上原真人「仏教」(『岩波講座日本考古学』4集落と祭祀 岩波書店) 1986
- <参考文献>
8-3)~9)
- 森都夫『東大寺の瓦工』臨川書店 1994
- 古松崇志「慶州白塔建立の謎をさぐる-11世紀契丹皇太后が奉納した仏教文物」(『遺文化・遼寧省調査報告書』京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル時代の多元的人文学の拠点形成」) 2006
- 伊野近富、岡廣尚世「美濃山庵寺第6次発掘調査の成果と銅溶解遺構の概要について」(『京都府埋蔵文化財情報』第117号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2012
- 梅原末治「戦後の韓国における仏塔舍利具の諸出土品について」『史迹と美術』第399号) 1971
- 筒井英俊編『東大寺要録』全国書房 1944
- 同志社大学歴史資料館編『南山城の古代寺院』(同志社大学歴史資料館調査報告書第9集) 2010
- 加藤友康 瀬野精一郎 島海靖 丸山隆成 編『日本史総合年表』吉川弘文館 2005
- 木下正史「飛鳥から藤原京-律令国家の胎動と成立の時代-」(『古代の都Ⅰ 飛鳥から藤原京へ』吉川弘文館) 2010
- 平良泰久・近藤義行・奥村清一郎・辻本和美「4平川庵寺発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』

- 第1集 城陽市教育委員会) 1973
 平良泰久・近藤義行・奥村清一郎・海老瀬敏正・辻本和美「2平川廃寺発掘調査概報」(「城陽市埋蔵文化財調査報告書」第2集 城陽市教育委員会) 1974
 小泉裕司・脇田涼子「城陽市埋蔵文化財調査報告書」第47集 城陽市教育委員会 2004
 「平川廃寺の調査」(「城陽市埋蔵文化財調査報告書」第55集 城陽市教育委員会) 2008
 高橋美久二・近藤義行「5正遺跡発掘調査概報」(「城陽市埋蔵文化財調査報告書」第1集 城陽市教育委員会) 1973
 城陽市史本文第四章 近藤義行「律令国家の展開と城陽 六 城陽の古代寺院」
 中島正「山城町内遺跡発掘調査概報 蟹満寺-第1次調査-」(「京都府山城町埋蔵文化財調査報告書」第6冊 山城町教育委員会) 1991
 中島正「山城町内遺跡発掘調査概報Ⅲ 蟹満寺-第2次調査-」(「京都府山城町埋蔵文化財調査報告書」第10冊 山城町教育委員会) 1992
 中島正「山城町内遺跡発掘調査概報Ⅴ 蟹満寺-第32次調査-」(「京都府山城町埋蔵文化財調査報告書」第13冊 山城町教育委員会) 1992
 杉本宏・猿向敏一ほか「大鳳寺跡発掘調査報告」(宇治市文化財調査報告第1冊 宇治市教育委員会) 1987
 杉本宏「菟道遺跡(菟道藪里14)発掘調査報告書-大鳳寺跡西外区の見見-」(宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第59集 宇治市教育委員会) 2006
 筒井崇史「上粕北遺跡第2次発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第150冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2012
 平良泰久「考古編 里廃寺」(「精華町史」史料篇I 精華町史編さん委員会 精華町) 1989
 小池寛「森垣外遺跡第4・5次調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第94冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
 小泉裕司「第二章 古墳時代の城陽」、直木孝次郎「第三章 古代国家も成立と城陽 第一節 ヤマト政権と南山背」、近藤義行「第四章 律令国家の展開と城陽 第一節 律令国家の地方支配 六 城陽の古代寺院」(「城陽市史」第一巻 城陽市史編さん委員会) 2002
 杉本宏・吹田直子ほか「菟道門ノ前古墳・菟道遺跡発掘調査報告書」(宇治市文化財調査報告第5冊 宇治市教育委員会) 1998
 森下衛・竹原一彦「内里八丁遺跡Ⅰ」(「京都府遺跡調査報告書」第26冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
 森下衛・榮曉彦「内里八丁遺跡Ⅱ」(「京都府遺跡調査報告書」第30冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
 引原茂治・高野陽子・石崎善久「内里八丁遺跡第20次発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第116冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
 増田富士雄・伊藤有加・坂本隆彦・佐藤智之「附載 京都府京田辺市魚田遺跡付近の地形と洪水破壊堆積物」(「魚田遺跡第7次調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第133冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
 引原茂治・松尾史子「女谷・荒坂横穴群第11・12次発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第142冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
 森郁夫「日本古代寺院造営の諸問題」雄山閣 2009
 森郁夫・甲斐弓子「僧寺と尼寺」帝塚山大学出版会 2012

付編 自然科学的方法による分析結果

1. 新名神高速道路整備事業関係遺跡(京都府八幡市美濃山廃寺)検出の 鉄器生産関連遺構群内金属遺物の成分分析報告書

JFEテクノリサーチ株式会社ソリューション本部(千葉)埋蔵文化財調査研究室

1. はじめに

京都府埋蔵文化財調査研究センター殿から、新名神高速道路整備事業関係遺跡(京都府八幡市美濃山廃寺)検出の鉄器生産関連遺構群内金属遺物の成分分析業務として、京都府八幡市美濃山廃寺から検出した遺物について、化学組成分析を含む自然科学的観点での調査を依頼された。調査の観点として、出土遺物の肉眼観察、マクロ組織観察、顕微鏡組織観察、硬度測定、化学組成分析、及びE PMA分析等を行い、遺跡で出土した遺物について、始発原料および試料の製造工程上の位置づけ等を調査した。その結果について報告する。

2. 調査項目および試験・観察方法

1) 肉眼観察および金属探知調査

試料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点2位で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、試料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。試料の出土位置や試料の種別等は提供された試料に準拠した。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、6mmを一単位として35cmの高さから吊した磁石が動き始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機(MC: metal checker)を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱(1.5mmφ x 1.5mmH、2.0mmφ x 2.0mmH、5mmφ x 5mmH、10mmφ x 10mmH、16mmφ x 16mmH、20mmφ x 20mmH、30mmφ x 30mmH)を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

2) マクロ組織および顕微鏡組織観察

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上げ)する。顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物(不純物、非金属鉱物)の存在状態等から製品製造方法の推察、素材を判断する。金属鉄は観察面をナイタルエッチング後に撮影する。原則として100倍、及び400倍で撮影を行い、必要に応じて実体顕微鏡(5倍~20倍)によるマクロ観察を行う。

3) ピッカース断面硬度測定

ピッカース硬度計を用いて硬度を測定する(JIS Z 2244)。鏡面仕上げした試料面に対面角136°

の四角錐ダイヤモンド圧子を一定荷重、荷重時間10秒で押し込み、生じた圧痕の対角線の平均長さdから、次式によって硬度を算出する。

$$\text{ビッカース硬度(Hv)} = (\text{荷重}) / (\text{圧痕の表面積}) = 2 \text{Psin}(a/2) / d^2 (\text{kg/mm}^2)$$

ここで、Hvはビッカース硬度、 a は対面角で 136° 、 d は圧痕の対角線の平均長さ μm 、 P は荷重 gf である。本測定に当たっては組織の硬さを考慮して荷重は 100gf としている。

4) EPMA(電子線マイクロプローブX線アナライザー)による調査

真空中で試料面の直径 $1\mu\text{m}$ 程度の範囲に焦点をあて、高速度(5~30kV)の電子線を照射すると試料面から二次電子、反射電子、特性X線などが発生する。その特性X線の波長および強度を測定することにより、存在する元素の定性あるいは定量分析を行う。試料表面の微小部分(200 μm 程度以下の範囲)に存在する元素の濃度分布を測定できる。光学顕微鏡による視野(140~560倍、500 μm)を同時観察できる。

5) 化学組成分析

化学組成分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

- ・全鉄分(T.Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO)：容量法
- ・酸化第二鉄(Fe₂O₃)：計算。
- ・炭素(C)、硫黄(S)：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化珪素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K₂O)、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化クロム(Cr₂O₃)、五酸化燐(P₂O₅)、バナジウム(V)：ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法。誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果および考察

1) 試料番号No. 1

確認調査A5トレンチから出土した碗形滓である。着磁度は1、メタル反応は2mmである。

(1) 肉眼観察 長さ95.3mm、幅77.8mm、厚さ22.6mm、試料の重量は218.5gである。外観写真を172頁に示す。ずっしりと重量感がある100 ϕ 程度の碗形鍛冶滓の破片である。上面側は酸化土砂に覆われて赤褐色を帯びているが滓そのものは黒色で、ゆるやかに窪み、下面側はなめらかに湾曲している。下面側には粘土が付着し小石を巻き込んでいる。破面は2で破面から見ると2~7mm大の気泡が観察される。上面の茶褐色部で2mm大のメタル反応がある。

(2) 顕微鏡組織 滓の顕微鏡組織を174頁に示す。灰白色の樹枝状のウスタイト(Wustite:FeO)組織と青灰白の短冊状のファイヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)組織が主たる組織でマグネタイト(Fe₃O₄)組織もわずかに観察される。

(3) 化学組成 分析結果を170頁の表1、2に示した。全鉄54.6%に対して金属鉄は0.11%とわずかである。FeOは60.0%、Fe₂O₃は11.2%、SiO₂は21.9%、Al₂O₃は4.01%、CaOは0.88%、MgOは0.58%、MnOは0.08%、TiO₂は0.27%である。FeO-Fe₂O₃-SiO₂の3成分系に換算するとFeOは

64.4%、 Fe_2O_3 は12.1%、 SiO_2 は23.5%となり170頁に示す図1の $\text{FeO}\text{-}\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-}\text{SiO}_2$ 系の平衡状態図ではウスタイト (Wustite:FeO) 組織、ファイヤライト ($\text{Fayalite:2FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織、及びマグネタイト (Fe_3O_4) 組織の境界領域にあり顕微鏡観察結果と一致する。171頁に示す図2～4は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。これら図における位置関係では本試料は砂鉄系鍛錬鍛冶滓Gr.の位置にあり、 CaO 、 MgO 、 MnO 等が低いことなどからも始発原料は砂鉄の可能性が高いと判断された。

以上を総合すると、本試料は砂鉄を始発原料とする鉄素材の鍛錬鍛冶工程で生じた梘形鍛冶滓と判断される。

2) 試料番号No.2

S B2012S P002から出土した梘形滓である。着磁度は1、メタル反応は2mmである。

(1) 肉眼観察 長さ81.1mm、幅79.6mm、厚さ28.3mm、試料の重量は182.6gである。外観写真を172頁に示す。No.1と同様にずっしりと重量感がある100φ程度の梘形鍛冶滓の破片で、大きく窪んでいる上面側には内部から発泡して生じた5mm大の気泡がある。上面側は酸化土砂で覆われて茶褐色を呈しているが滓そのものは黒色である、下面側はほぼ全面が粘土で覆われているが、破面は1で破面から見ると2～5mm大の気泡が観察される。上面の茶褐色部で2mm大のメタル反応がある。

(2) 顕微鏡組織 顕微鏡組織写真を174頁に示す。青灰白の短冊状のファイヤライト ($\text{Fayalite:2FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織と白青色の多角盤状のマグネタイト (Fe_3O_4) 組織などが主たる組織として観察される。

(3) 化学組成 分析結果を170頁の表1、2に示した。全鉄44.5%に対して金属鉄は0.06%とわずかである。 FeO は48.1%、 Fe_2O_3 は10.1%、 SiO_2 は30.1%、 Al_2O_3 は7.08%、 CaO は1.02%、 MgO は0.64%、 MnO は0.15%、 TiO_2 は0.51%である。 $\text{FeO}\text{-}\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-}\text{SiO}_2$ の3成分系に換算すると FeO は54.5%、 Fe_2O_3 は11.4%、 SiO_2 は34.1%となり170頁に示す図1の $\text{FeO}\text{-}\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-}\text{SiO}_2$ 系の平衡状態図ではファイヤライト ($\text{Fayalite:2FeO}\cdot\text{SiO}_2$) 組織とマグネタイト (Fe_3O_4) 組織の境界領域にあり顕微鏡観察結果と一致する。171頁に示す図2～4は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。これら図における位置関係では本試料は砂鉄系鍛錬鍛冶滓Gr.の位置にあり CaO 、 MgO 、 MnO 等が低いことなどからも始発原料は砂鉄と判断された。

以上を総合すると本試料は砂鉄を始発原料とする鉄素材の鍛錬鍛冶工程で生じた梘形鍛冶滓と判断される。

3) 試料番号No.3

S L501から出土した炉底滓である。着磁度は4、メタル反応は3mmである。

(1) 肉眼観察 外観写真を172頁に示す。4個ある小塊の中から端が角のように尖っていた試料を選択した。長さ45.7mm、幅37.9mm、厚さ16.3mm、試料の重量は28.7gである。酸化土砂に覆われた凹凸が激しい形状を呈した扁平で多孔質な鉄滓で、表面には5～10mm大の木炭痕が多数観察される。

(2) 顕微鏡組織 滓の顕微鏡組織を175頁に示す。凝集が進んだ灰白色の蘭玉状のウスタイト(Wustite:FeO)組織が主たる組織で、背後には青灰色の短冊状のファイヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)組織が観察される。

(3) 化学組成 分析結果を170頁の表1、2に示した。全鉄69.1%に対して金属鉄は0.22%とわずかである。FeOは67.9%、Fe₂O₃は23.0%、SiO₂は5.01%、Al₂O₃は2.11%、CaOは0.84%、MgOは0.52%、MnOは0.09%、TiO₂は0.10%である。FeO_n-Fe₂O₃-SiO₂の3成分系に換算するとFeOは70.8%、Fe₂O₃は24.0%、SiO₂は5.2%となり170頁に示す図1のFeO_n-Fe₂O₃-SiO₂系の平衡状態図ではウスタイト(Wustite:FeO)組織の領域にあり顕微鏡観察結果と一致する。171頁に示す図2～4は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。これら図における位置関係では本試料は砂鉄系鍛錬鍛冶滓Gr.の位置にあり、CaO、MgO、MnO等が低いことなどからも始発原料は砂鉄と判断された。

以上を総合すると、本試料は砂鉄を始発原料とする鉄素材の鍛錬鍛冶工程で生じた炉底滓と判断される。

4) 試料番号No.4

S K037から出土した鉄滓である。着磁度は4、メタル反応は4mmである。

(1) 肉眼観察 172頁に外観写真を示す。長さ56.5mm、幅33.6mm、厚さ20.3mm、試料の重量は55.4gである。小判状をした重量感のある扁平な鉄滓で鍛冶滓の小片と思われる。やや窪んだ上面は酸化土砂で覆われて茶褐色を呈しているが滓そのものは黒色で5～10mm大の木炭灰が多数観察される。

(2) 顕微鏡組織 顕微鏡組織写真を175頁に示す。ほぼ全面が凝集の進んだ灰白色の蘭玉状ウスタイト(Wustite:FeO)組織で、背面には青灰色の短冊状のファイヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)組織が観察され、メタル粒も散見される。

以上を総合すると、本試料は鍛錬鍛冶工程で生じた碗形滓の小片と判断される。

5) 試料番号No.5

S K034から出土した鉄滓である。着磁度は1、メタル反応はない。

(1) 肉眼観察 173頁に外観写真を示す。長さ74.2mm、幅61.8mm、厚さ26.6mm、試料の重量は97.0gである。逆V字形をした2つに割れた鉄滓で、内部には発泡で生じた5～10mm大の気泡があり多孔質である。表面には石英粒や小石の巻き込み等も観察される。粘土色を呈しているが滓そのものは黒色である。

(2) 顕微鏡組織 顕微鏡組織写真を176頁に示す。ほぼ全面に短冊状のファイヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)組織が観察される。

以上を総合すると、本試料は鉱物組織からの分類では精錬滓と判断されたものの、本遺跡から出土した他の鉄滓が全て鍛錬滓と判断されたことから、No.5試料は鍛錬鍛冶の際に鉄素材の酸化を抑制する手段として鉄素材に塗布された粘土汁の成分が鉄滓中に溶け出して生成した鉄滓の可能性が高いと判断される。

6) 試料番号No.6

S K034から出土した鉄滓である。着磁度は1、メタル反応は3mmである。

(1)肉眼観察 外観写真を173頁に示す。2個ある小塊の中から不整三角形の試料を選択した。長さ50.5mm、幅45.5mm、厚さ20.5mm、試料の重量は78.2gである。不整三角形の重量感のある鉄滓で、4～6mm大の鍛造剥片や5～10mm大の石英粒、及び小石等が附着している

(2)顕微鏡組織 顕微鏡組織写真を176頁に示す。No.4と同様にはほぼ全面で凝集が進んだ灰白色の繡玉状ウスタイト(Wustite:FeO)組織で、背面には青灰色の短冊状のファイヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)組織が観察され、メタル粒も散見される。

以上を総合すると、本試料は鍛錬鍛冶工程で生じた鉄滓と判断される。

7) 試料番号No.7

S K096炭層から出土した鉄滓である。着磁度2、メタル反応2mmである。

(1)肉眼観察 外観写真を173頁に示す。3個ある小塊の中から不整三角形の試料を選択した。長さ57.9mm、幅33.3mm、厚さ15.5mm、試料の重量は23.2gである。不整三角形で丸味を帯びた良く溶融したと見られる扁平な鉄滓。表面は粘土で覆われ灰白色を呈しているが破面で見ると滓そのものは黒色で5mm大の木炭痕が多数観察される。

(2)顕微鏡組織 顕微鏡組織写真を177頁に示す。灰白色の樹枝状のウスタイト(Wustite:FeO)組織と青灰白の短冊状のファイヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)組織が主たる組織で気泡も多く観察される。

以上を総合すると、本試料は鍛錬鍛冶工程で生じた鉄滓と判断される。

8) 試料番号No.9

S B2020 S P106柱痕跡から出土した鉄製品(鉄釘)である。着磁度は5、メタル反応は2～5mmである。

(1)肉眼観察 外観写真を173頁に示す。長さ150.5mm、幅14.6mm、厚さ13.7mm、試料の重量は76.1gである。錆化して茶褐色に覆われた断面が矩形の鉄釘である。メタル反応は頭部で2mm大、中央部で5mm大、足部で3mm大をそれぞれ示している。分析試料は鉄の遺存が良好と思われる足部から30～45mm部分よりC方向断面、及びL方向断面の2試料を採取した。

(2)マクロ組織 10、20倍の断面写真を177頁に示した。主要な部分は白色のフェライト組織であるが、黒ずんで見えるパーライト組織と見られる部分も観察される

(3)顕微鏡組織 顕微鏡組織写真を178頁に示す。主要な部分は白色の亜共析鋼(C: <0.8%)のフェライト組織で、結晶粒が大きい部分(No.9C-1)、結晶粒がやや小さい部分(No.9C-2、No.9L-1)、及び、過共析鋼(C: 0.8～2.1%)のパーライト組織(No.9L-2)も観察されることから炭素濃度が不均質な素材を加工して作られたものと思われた。

(4)ピッカース断面硬度 C方向断面試料のピッカース硬度を測定した結果を170頁の表3、及び写真を177頁に示す。フェライト組織の硬度は結晶粒が大きい部分(硬度写真1-1)でHv127、結晶粒が小さい部分(硬度写真1-2)でHv139、パーライト組織の硬度は結晶粒が大きい部分(硬

度写真2-1)でHv273、結晶粒がやや小さい部分(硬度写真2-2)がHv279で組織見合いの値を示している。

(5) EPMA分析 メタル中に存在していた介在物(鉄滓)をEPMAで定量分析した結果を179・180頁に示す。ポイント分析チャート1・2にはウスタイトと見られる組織W1・W2、ポイント分析チャート3にはウルボスピネルと見られる組織U1、ポイント分析チャート4・5にはファイヤライト組織とガラス質が混在していると見られる組織F1、G1の分析結果をそれぞれ示す。ウスタイトと見られる組織W1・W2では、FeOが98.8%、及び98.6%でわずかに Al_2O_3 が0.8%、及び0.6%含まれるのみでW1・W2はウスタイト組織単相と確認される。ウルボスピネルと判断される組織U1では、FeOが57.2%、 TiO_2 が23.6%であり、 Al_2O_3 が13.7%、MgOが5.5%含まれるがほぼウルボスピネル組織と確認される。ファイヤライトと判断される組織F1ではFeOが54.2%、 SiO_2 が33.7%で、MgOが10.5%、CaOが1.2%、 TiO_2 が0.4%含まれるが、ほぼファイヤライト組織と確認される。ガラス質にファイヤライト組織が混在していると見られる組織G1では、FeOが27.4%、 SiO_2 が37.5%で、 Al_2O_3 が14.6%、CaOが11.3%、 K_2O が5.4%、 Na_2O が2.8%、 TiO_2 が1.0%含まれるが、ガラス質が主要な組織であることが確認される。面的に化学成分を分析した結果を2次電子線像(SE像)とともに52～53頁に示す。マッピング分析結果1にはウスタイトと見られる組織W1を、マッピング分析結果2にはウルボスピネルと見られる組織U1の分析結果をそれぞれ示す。鉄(Fe)は化学式に示されるようにウスタイト(FeO)、ウルボスピネル($2FeO \cdot TiO_2$)いずれにも存在している。わずかに存在するガラス質の部分には、珪酸質スラグの珪素(Si)が現れ、チタン(Ti)はウルボスピネル部に集中している。本試料中に混入していた滓は成分的にもウスタイト、及びウルボスピネルを主要鉱物としていることが明らかである。

以上を総合すると、本試料は砂鉄を始発原料とした亜共析鋼フェライト組織の鉄釘と判断される。

4. まとめ

1) 遺跡の性格

本遺跡で出土した鉄滓7試料を工程別に分類した結果、全て鍛錬鍛冶で生成した鉄滓と判断された。本遺跡では他所で製造された鉄素材を搬入して鍛冶炉による最終製品の加工が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) 始発原料

本遺跡で出土した鉄滓3試料の TiO_2 濃度が0.1～0.5%であったこと、及び遺跡から出土した金属製品中の介在物(鉄滓)から TiO_2 鉱物のウルボスピネルが検出されたことなどから本遺跡で使用されていた鉄素材の始発原料は砂鉄であった可能性が高いと判断される。

3) 鉄製品(鉄釘)

本遺跡で出土した鉄製品の金属組織は亜共析鋼フェライト組織で、炭素濃度が不均質な鉄素材を加工して製造されたものと判断される。

表1 鉄滓の化学組成分析結果 (%)

試料 No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	比率	
											FeO	Fe ₂ O ₃
No.1	546	0.11	60.0	11.2	21.9	4.01	0.88	0.58	0.62	0.14	84.2	15.8
No.2	445	0.06	48.1	10.1	30.1	7.08	1.02	0.64	1.79	0.24	82.7	17.3
No.3	69.1	0.22	67.9	23.0	5.01	2.11	0.84	0.52	0.01	0.02	74.7	25.3

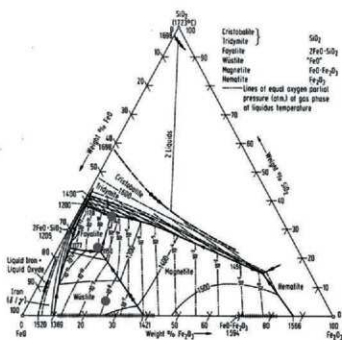
表2 鉄滓の化学組成分析結果(つづき) (%)

試料 No.	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	C	S	V	TiO ₂ /T.Fe	MnO/TiO ₂	造滓成分
No.1	0.27	0.08	0.135	< 0.01	0.29	0.052	0.005	0.005	0.296	28.1
No.2	0.51	0.15	0.158	0.03	0.066	0.021	0.004	0.011	0.294	40.9
No.3	0.10	0.09	0.170	< 0.01	0.26	0.11	< 0.001	0.001	0.900	8.5

造滓成分= SiO₂+ Al₂O₃+ CaO+ MgO+ Na₂O+ K₂O

表3 硬度測定結果

No.9 C			
フェライト1-1	フェライト1-2	パーライト2-1	パーライト2-2
127	139	273	279



FeO-Fe₂O₃-SiO₂系状態図 (by Osborn and Muan) :Slag Atlas [ドイツ鉄鋼協会](1981)[Verlag Stahleisen] Düsseldorf, Fig. 106, p.76

図1 FeO-Fe₂O₃-SiO₂系鉄滓の平衡状態図

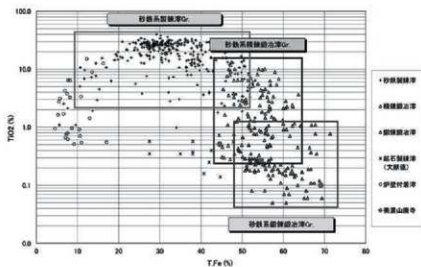


図2 製錬滓、精錬滓、及び鍛錬滓の分類

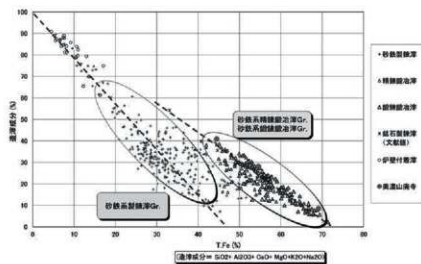


図3 製錬滓と鍛錬滓の分類

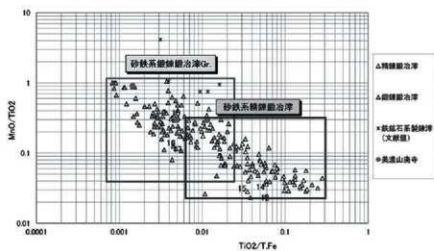


図4 精錬鍛治滓と鍛錬鍛治滓の分類



外観写真 No.1 (椀形滓)



外観写真 No.3 (炉底滓)



外観写真 No.2 (椀形滓)



外観写真 No.4 (鉄滓1)



外観写真(1)



外観写真 No.5 (鉄滓2)



外観写真 No.7 (鉄滓4)



外観写真 No.6 (鉄滓3)



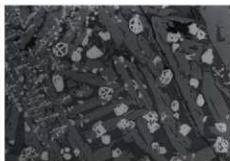
外観写真 No.9 (鉄製品)



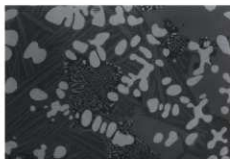
外観写真(2)



×100

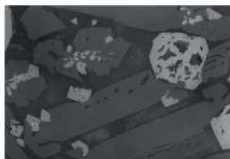


×100



×400

顕微鏡組織写真 No.1-1 (椀形滓)

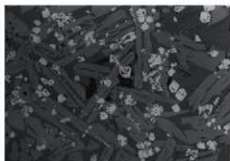


×400

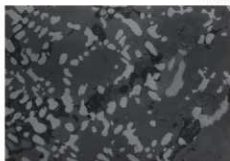
顕微鏡組織写真 No.2-1 (椀形滓)



×100



×100



×400

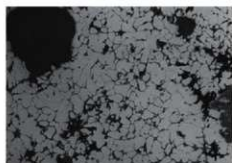
顕微鏡組織写真 No.1-2 (椀形滓)



×400

顕微鏡組織写真 No.2-2 (椀形滓)

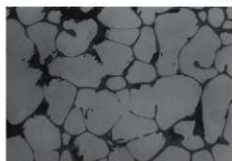
鉄滓顕微鏡組織写真(1)



×100



×100



×400

顕微鏡組織写真 No.3-1 (炉底滓)

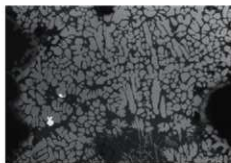


×400

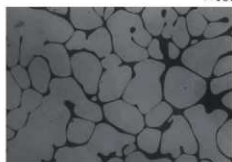
顕微鏡組織写真 No.4-1 (鉄滓1)



×100



×100



×400

顕微鏡組織写真 No.3-2 (炉底滓)



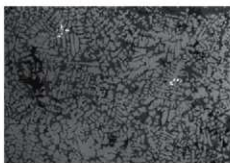
×400

顕微鏡組織写真 No.4-2 (鉄滓1)

鉄滓顕微鏡組織写真(2)



×100



×100



×400



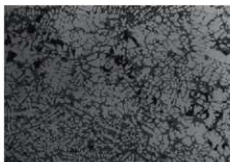
×400

顕微鏡組織写真 No.5-1 (鉄滓2)

顕微鏡組織写真 No.6-1 (鉄滓3)



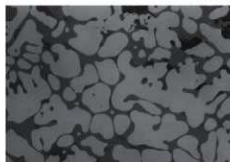
×100



×100



×400



×400

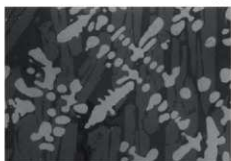
顕微鏡組織写真 No.5-2 (鉄滓2)

顕微鏡組織写真 No.6-2 (鉄滓3)

鉄滓顕微鏡組織写真(3)



×100

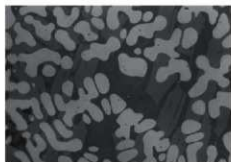


×400

顕微鏡組織写真 No.7-1 (椀形鉄滓)



×100



×400

顕微鏡組織写真 No.7-2 (椀形鉄滓)

鉄滓顕微鏡組織写真(4)



L断面



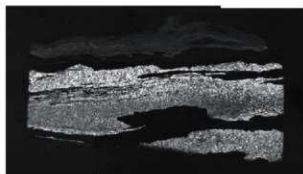
C断面

切断面写真 No.9 (鉄製品)



マクロ写真 No.9C (鉄製品)

×20



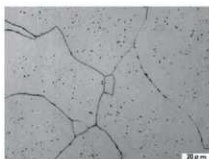
マクロ写真 No.9L (鉄製品)

×10

No.9切断面マクロ写真



×100

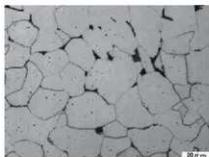


×500

メタル顕微鏡組織写真 No.9C-1 (鉄製品)

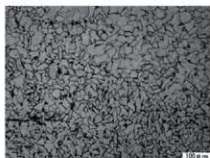


×100

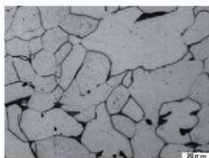


×500

メタル顕微鏡組織写真 No.9C-2 (鉄製品)



×100



×500

メタル顕微鏡組織写真 No.9L-1 (鉄製品)



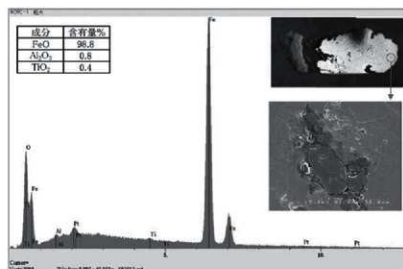
×100



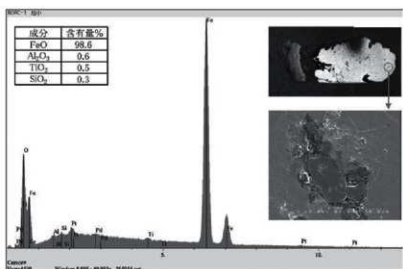
×500

メタル顕微鏡組織写真 No.9L-2 (鉄製品)

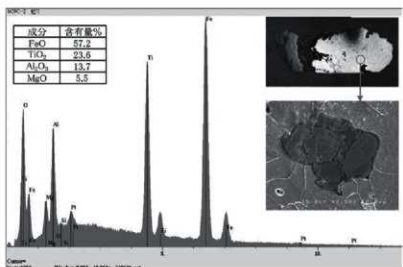
メタル顕微鏡組織写真No.9C・L



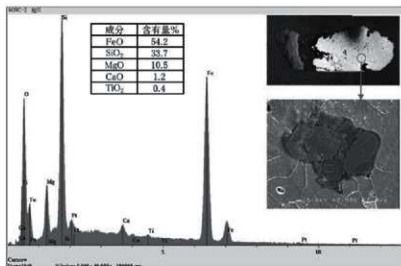
ポイント分析チャート1 (No.9C : W1 Wustite:FeO)



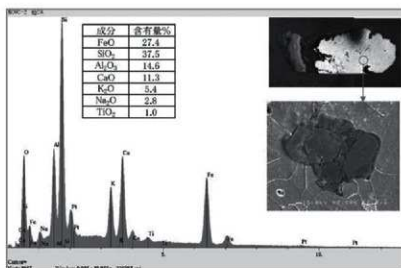
ポイント分析チャート2 (No.9C : W2 Wustite:FeO)



ポイント分析チャート3 (No.9C : U1 Ulvospinel: 2FeO·TiO2)



ポイント分析チャート4 (No.9C : F1 Fayalite₂FeO·SiO₂ /Glass)



ポイント分析チャート5 (No.9C : G1 Glass /Fayalite₂FeO·SiO₂)

2. 美濃山廃寺出土鑄造関連遺物の分析調査

九州テクノロジー・TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂

1. はじめに

美濃山廃寺は京都府八幡市美濃山古寺に所在する。第6次調査地区では奈良時代中頃の鑄造用溶解炉跡1基が検出されている。それに伴い緑青に覆われた不定形の金属塊や炉壁片などの鑄銅関連遺物が出土した。当遺跡での鑄物生産の実態を検討する目的から、分析調査を実施する運びとなった。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table 1 に示す。鑄銅関連遺物計4点の調査を行った。

2-2. 調査項目

(1)肉眼観察

遺物の外観上の特徴を簡単に記載した。

(2)マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査によるよりも、広い範囲にわたって組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3)顕微鏡組織

金属部の組織観察などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150・#240・#320・#600・#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で鏡面研磨した。

観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して、写真撮影を行った。なお銅(または銅合金)の腐食(Etching)には、酢酸・硝酸・アセトン混合液を用いた。

(4)ピッカース断面硬度

ピッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもつて、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5)EPMA(Electron Probe Micro Analyzer)調査

銅(または銅合金)組織の組成調査を目的とする。

試料面(顕微鏡試料併用)に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定

性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像(COMP)は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される物質ほど明るく、軽い元素で構成される物質ほど暗い色調で示される。これを利用して組成の違いを確認後、定量分析を実施した。

(6)化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)、鉄(Fe)、砒素(As)、アンチモン(Sb)、ビスマス(Bi)。ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)：誘導結合プラズマ発光分光分析法。

3. 調査結果

MNY-1：銅塊(図版49)

(1)肉眼観察：やや小形(55.0g)で偏平な碗状の銅(または青銅)塊である。表面は淡褐色の土砂と緑青に覆われる。茶褐色の錆はなく砒化鉄はほとんど含まれないと考えられる。上面は比較的平坦で下面側に細かい凹凸がみられる。表面に気孔はなく緻密である。また特殊金属探知機のL(●)で反応があり、内部には金属銅(または銅合金)が良好に残存すると推定される。

(2)マクロ組織：Photo.1①に示す。側面端部の断面観察を実施した。表層(写真上側～右側部分)は錆化が進んでいるが、内部は金属が良好に残存する。

(3)顕微鏡組織：Photo.②～⑦に示す。酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食している。素地は淡橙色多角形結晶で銅主体(Cu α 相)、結晶粒界に点在する不定形暗灰色部は鉛(Pb)およびビスマス(Bi)またはその脱着した痕跡と推定される。さらに結晶粒界に点在する淡青灰色粒は白鉛(Cu₂S)、微細な明白色粒は銀(As)主体の相と推定される。

(4)EPMA調査：Photo.2①の反射電子像(COMP)を示す。中央の明白色(反射顕微鏡下では暗灰色)部は特性X線像をみるとビスマス(Bi)に強い反応があり、定量分析値は96.1%Bi-5.1%Cu(分析点1)であった。ビスマス(Bi)と銅(Cu)は固溶しないため、分析値の銅(Cu)は周囲の影響を受けた結果と判断される。また粒状灰色(反射顕微鏡下では淡青灰色)部は、特性X線像では硫黄(S)に強い反応がある。定量分析値は74.2%Cu-2.8%Fe-19.0%S(分析点2)、77.8%Cu-19.7%S(分析点3)、77.7%Cu-19.6%S(分析点4)であった。白鉛(Cu₂S)に同定される。素地部分は特性X線像では銅に強い反応がある。定量分析値は98.0%Cu-3.8%As(分析点5：多角形結晶、反射顕微鏡下淡橙色部)、91.1%Cu-17.4%As-1.9%Sn(分析点6：多角形結晶粒界付近、反射顕微鏡下茶褐色部)であった。砒素銅で特に粒界付近ではより砒素(As)の割合が高い。

さらにもう1視野調査を実施した。Photo.2②反射電子像(COMP)を示す。①と同様粒状灰色部は特性X線像をみると硫黄(S)に強い反応がある。定量分析値は78.8%Cu-19.6%S(分析点7)、78.2%Cu-19.7%S(分析点8)であった。やはり白鉛(Cu₂S)に同定される。素地(淡橙色部)は特性X線像では銅(Cu)に強い反応がある。定量分析値は91.1%Cu-1.7%As(分析点10)であった。砒

素銅である。また明灰色(反射顕微鏡下では暗灰色)部は、特性X線像をみると鉛(Pb)に強く、錫(Sn)に弱い反応がある。定量分析値は56.3%Pb-13.5%As-8.6%Cu-4.0%Sn-11.8%Oであった。鉛(Pb)、砒素(As)を主成分とする酸化物と推測される。

(5) 化学組成分析: Table 2 に示す。分析用供試材を約0.1gごとに三分してそれぞれ測定を実施した。いずれの試料も酸分解により完全に溶解し、未溶解物は生じなかった。また分析値は3点とも近似している。上述の金属組織観察結果からも予想されたように、大きな成分の偏析は見られなかった。銅(Cu)が96.3%、96.2%、94.9%と高い割合であった。一方、錫(Sn)は0.62%、0.72%、0.56%、鉛(Pb)も0.84%、0.91%、0.82%と低い割合で、鉄(Fe)も0.07%、0.09%、<0.07%と低値であった。これに対して、砒素(As)が1.90%、2.04%、1.87%と高めである。他の随伴微量元素としてはビスマス(Bi)0.22%、0.25%、0.21%が特徴的である。銀も0.06%、0.06%、0.06%と高めであった。

MNY-2: 銅塊(図版49)

(1) 肉眼観察: やや小形(56.9g)で偏平な不定形の銅(または青銅)塊である。側面の一部がきれいな弧状を呈する。表面は全体がやや淡い緑青で覆われており、淡褐色の土砂も付着する。MNY-1と同様茶褐色の錆はなく砒化鉄はほとんど含まれないと考えられる。上下面ともやや凹凸があり、細かい気孔も若干点在するが緻密である。特殊金属探知機のL(●)で反応もあり、内部には金属銅(または銅合金)が良好に残存すると推定がつく。

(2) マクロ組織: Photo. 3 ①に示す。側面端部の断面観察を実施した。表層付近は結晶粒界に沿って若干錆化が進むが、その度合いは銅塊(MNY-1)より小さい。

(3) 顕微鏡組織: Photo. 3 ②~⑦に示す。酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食した組織を示す。素地は比較的均質な淡橙色多角形結晶で銅主体(Cu α 相)、結晶粒界に点在する不定形暗灰色部は鉛(Pb)またはその脱落した痕跡と推定される。さらに結晶粒界に点在する淡青灰色粒は白鉛(Cu $_2$ S)、微細な明白色粒は銀(As)主体の相と推定される。

(4) EPMA調査: Photo. 4 ①に反射電子像(COMP)を示す。粒状灰色(反射顕微鏡下では淡青灰色)部は、特性X線像では硫黄(S)に強い反応がある。定量分析値は77.9%Cu-19.6%S(分析点12)であった。白鉛(Cu $_2$ S)に同定される。その周囲の明白色部(反射顕微鏡下では暗灰色)は鉛(Pb)に強い反応があり、定量分析値は55.2%Pb-10.0%Cu-5.0%S-3.7%As-2.1%Sn-13.5%O(分析点13)であった。鉛(Pb)主体の腐食(錆化)相と推定される。素地の淡橙色部は特性X線像をみると銅(Cu)に強い反応がある。定量分析値は97.0%Cu-2.3%As(分析点10)であった。砒素銅である。

さらにもう1視野調査を実施した。Photo. 4 ②反射電子像(COMP)を示す。粒状灰色部は特性X線像では硫黄に強い反応があり、定量分析値は77.5%Cu-18.2%S(分析点15)、74.7%Cu-1.3%Fe-19.8%S(分析点16)であった。白鉛(Cu $_2$ S)に同定される。また写真上側の明白色部は銀(Ag)に強い反応がある。定量分析値は76.7%Ag-21.4%Pb-5.5%Cu-1.1%Pb(分析点18)であった。銀(Ag)と鉛(Pb)はほとんど固溶しないため、周囲の影響を受けた値と判断される。さらに素地の淡橙色部は特性X線像では銅(Cu)に強い反応がある。定量分析値は95.7%Cu-2.3%As(分

析点19)であった。砒素銅である。

(5)化学組成分析：Table 2に示す。銅塊(MNY-1)と同じく、分析用供試材を約0.1gごとに三分してそれぞれ測定を実施した。いずれの試料も酸分解により完全に溶解し、未溶解物は生じなかった。分析値は3点とも近似しており、成分の偏析は見られなかった。

銅(Cu)は93.4%、94.6%、93.6%である。高い割合を占めるが、銅塊(MNY-1)より若干低値であった。また錫(Sn)は0.95%、0.93%、0.94%と低い割合であるが、鉛(Pb)は2.64%、2.44%、2.45%と若干高めであった。鉄(Fe)は<0.07%、<0.07%、<0.07%と低値である。一方砒素(As)は3.06%、3.04%、3.01%と銅塊(MNY-1)よりも高めである。さらに他の随伴微量元素ではビスマス(Bi)0.27%、0.28%、0.26%、銀(Ag)が0.12%、0.13%、0.13%と高値傾向が顕著であった。

MNY-3：ガラス質滓(図版49)

(1)肉眼観察：炉材粘土の溶融物(黒色ガラス質滓)で7.0g弱の小破片である。ガラス質滓中には熱影響を受けた砂粒(無色鉱物の割合が高い)が多数混在する。炉材粘土に混和されたものと推測される。また表面には不定形の緑青部分が確認される。特殊金属探知機のM(◎)で反応があり、内部に金属部分が残存すると判断される。

(2)マクロ組織：Photo.5①に示す。暗黒色部はガラス質滓である。炉材粘土の溶融物と推定される。ガラス質滓中には熱影響を受けた石英や斜長石などの砂粒が多数点在しているが、これは耐火性向上などの目的から炉材粘土に混和された真砂(花崗岩の風化砂)と考えられる。また内部にはごく微細な淡橙色～赤褐色の金属粒が多数散在しており、その周囲には灰色結晶が凝集して晶出する。

(3)顕微鏡組織：Photo.5②～⑦に示す。金属粒は酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食している。樹枝状青灰色部は亜酸化銅(Cu_2O)の初晶、また内部に点在する微細な暗灰色部は砒素(As)、鉛(Pb)を主成分とする酸化物。素地は淡橙色の多角形結晶で銅主体(Cu 相)と推定される。さらに金属粒の周囲のガラス質滓中にも青灰色粒状、不定形の亜酸化銅が凝集して晶出する。これは銅素材を酸化雰囲気中で溶解したことを示すものといえる。

(4)EPMA調査：Photo.6①にガラス質滓中の微小金属粒の反射電子像(COMP)を示す。樹枝状青灰色部は特性X線像をみると銅(Cu)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は87.8%Cu-6.3%O(分析点20)であった。亜酸化銅(Cu_2O)に同定される。また素地の橙色部は特性X線像では銅(Cu)に強い反応がある。定量分析値は98.2%Cu-0.8%As(分析点22)であった。さらに明白色(反射顕微鏡下では暗灰色)部は特性X線像では鉛(Pb)、砒素(As)に強い反応がある。定量分析値は43.1%As-24.8%Pb-8.1%Cu-8.0%Sb-12.9%O(分析点23)であった。砒素(As)、鉛(Pb)を主成分とする酸化物と推測される。

もう1視野別の金属粒の調査を実施した。Photo.6②反射電子像(COMP)を示す。樹枝状青灰色部は特性X線像をみると銅(Cu)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は87.7%Cu-5.6%O(分析点24)、87.3%Cu-5.6%O(分析点25)であった。やはり亜酸化銅(Cu_2O)の初晶と推定される。また素地の橙色部は特性X線像では銅(Cu)に強い反応をもつ。定量分析値は98.7%Cu-0.8%As(分

析点27)であった。さらに非常に微細なため定量分析は実施できなかったが、特性X線像をみると銀(Ag)強い反応が数ヶ所確認される。

MNY-4：炉壁

(1)肉眼観察：強い熱影響を受けて内面がガラス質化した64gの炉壁破片である。ガラス質滓の色調は赤色～黒色で、表面には微細な粒状の緑青が3箇所溶着している。炉壁粘土は淡褐色で無色鉱物主体の砂粒や有機質の混和物が確認される。断面は緩やかな弧状を呈しており、溶解炉の底部破片の可能性が高い。

(2)マクロ組織：Photo.7①に示す。写真上側の灰色部はガラス質滓で、内面表層付近にごく微細な金属粒(橙色部)が確認される。一方下側の暗灰色部は炉壁胎土部分で、熱影響を受けた石英・斜長石などの砂粒が多数散在している。

(3)顕微鏡組織：Photo.7②～⑦に示す。②～⑤は最大の溶着金属粒の拡大である。酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食した組織を示す。素地は比較的均質な淡橙色多角形結晶で銅主体(Cu相)と推定される。さらに粒界には非常に微細な青灰～暗灰色粒、またはその脱落した痕跡が多数散在する。これらは白鉛(Cu₂S)、または鉛(Pb)、砒素(As)、アンチモン(Sb)、ビスマス(Bi)等を含む酸化物である。組成に関してはEPMA調査の項で詳述する。

(4)EPMA調査：Photo.8①に反射電子像(COMP)を示す。中央のごく微細な灰色(反射顕微鏡下では青灰色)部の定量分析値は77.8%Cu-5.9%Ce-1.4%As-10.3%S(分析点28)であった。白鉛(Cu₂S)と推定される。またセレン(Ce)がかなりの割合で含まれている。中央の明白色粒は特性X線像では鉛(Pb)、砒素(As)、アンチモン(Sb)、ビスマス(Bi)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は31.6%As-26.3%Bi-9.1%B-8.7%Cu-12.9%Oであった(分析点29)。砒素(As)、アンチモン(Sb)、鉛(Pb)等を主成分とする酸化物である。

また素地の橙色部は特性X線像をみると銅(Cu)に強い反応がある。定量分析値は96.9%Cu-2.2%As(分析点29)であった。砒素銅である。さらに微細な淡灰色部は特性X線像では錫(Sn)に強い反応がある。定量分析値は81.0%Cu-7.6%Sn(分析点31)であった。青銅(Cu-Sn相)と推定される。

さらにもう1視野調査を実施した。Photo.8②反射電子像(COMP)を示す。定量分析値は61.5%Cu-5.7%Ce-6.1%As-7.0%Bi-8.8%S(分析点32)であった。白鉛(Cu₂S)と推定される。ここでもセレン(Ce)がかなりの割合で含まれている。また砒素(As)、アンチモン(SB)、ビスマス(Bi)などは特性X線像をみると、後述の明白色部の影響を受けた可能性も高い。その明白色部の定量分析値は65.2%Bi-16.8%SB-8.5%As-8.6%Cu-10.4%O(分析点33)であった。ビスマス(Bi)、アンチモン(Sb)を主成分とする酸化物と推測される。さらに素地の橙色部は、特性X線像を以て銅(Cu)に強い反応がある。定量分析値は96.8%Cu-2.4%As(分析点34)であった。砒素銅である。

4. まとめ

美濃山廃寺から出土した奈良時代中頃の鑄銅関連遺物を調査した結果、以下の点が明らかとなった。

(1) 表面が緑青に覆われた金属塊(MNY-1・2)は、ともに銅(Cu)主体で、砒素を2~3%程度含む砒素銅であった。また錫(Sn)、鉛(Pb)は全体に低めである。これらの特徴から美濃山廃寺には国産の砒素銅が鑄造原料として搬入されたと推定される。

比較のため古代~中世の鑄造遺跡の出土銅(青銅)塊の分析調査結果をTable 3に示す。西日本を中心に1%以上砒素を含む銅(青銅)塊が出土した事例が複数確認されており、古代の銅生産技術を反映した特徴と考えられる。

またほぼ同時期に紫香楽宮での大仏鑄造に関連した遺跡と推定される、滋賀県鍛冶屋敷遺跡^(注2)では、砒素(As)とともに鉄(Fe)分を非常に多く含む銅(青銅)塊が多数出土している。これに対し美濃山廃寺では鉄(Fe)の影響はごく僅かであった。また鍛冶屋敷遺跡では銅の品位を上げる精錬作業も行われており、それに伴い銍滓も多数出土しているが、美濃山廃寺からはそうした痕跡がみられない。このことから、より品質の良い鑄造原料(銅素材)が搬入されていたと判断される。

葉賀七三男氏は、東大寺大仏造営期の銅調達の実態を示す造東大寺司牒の記載から、当時銅生産工程がすでに生銅(荒銅)と熟銅(精製された銅)に分かれていたことや、搬入された銅地金の品質が多様であること〔熟銅三割、未熟銅一割、生銅六割(上中品各一割前後、約八割は下品)〕、造東大寺所属の鑄所において生銅を精製し熟銅を得ていたことを指摘している^(注3)。鍛冶屋敷遺跡と美濃山廃寺の出土銅(青銅)塊の組成の違いは、こうした銅素材の精製の度合いを反映したものの可能性がある。

今後寺院造営等に伴う銅鑄物関連遺跡での精錬作業の有無とともに、出土銅(青銅)塊の組成調査事例を蓄積することで、当時の銅生産技術および鑄造原料の流通の実態を検証していく必要があろう。

(2) 鑄造用溶解炉の炉壁片(MNY-4)、および炉壁溶融物と推定されるガラス質滓(MNY-3)からも、それぞれ溶融金属が確認できた。金属粒の素地部分はやはり砒素銅であった。やはり砒素銅を利用して、鑄物の製作が行われていたことが明らかとなった。

他に金属塊(MNY-1・2)と共通する随伴微量元素として、ビスマス(Bi)、銀(Ag)が確認された。

注1 メタル度とは、金属関係の遺物内部の金属残存状態を、非破壊で推定するために調整された特殊金属探知機を使用した判定法のことを指す。感度は三段階〔H:high(○)、M:middle(◎)、L:low(●)〕に設定されている。低感度で反応があるほど、内部に大型の金属鉄が残存すると推測される。

特殊金属探知機の詳細な仕様は、以下の文献に記載されている。

穴澤義功「鉄生産遺跡調査の現状と課題-鉄関連遺物の整理と分析資料の準備について-」鉄関連

遺物の分析評価に関する研究会報告(社)日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学会「鉄の歴史-その技術と文化-」フォーラム 鉄関連遺物分析評価研究グループ 2005

注2 「鍛冶屋敷遺跡」滋賀県教育委員会 2006

注3 業賀七三男「古代長門の銅生産について」『山口県地方史研究』50号 山口県地方史学会 1983

(引用文献)

「尾崎遺跡」北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1992

「菩提遺跡1」福岡県教育委員会 2003

「宝満山遺跡群・浦ノ田遺跡3」福岡県教育委員会 2002

「宝満山遺跡群5」大宰府市教育委員会 2006

「国秀遺跡」山口県教育委員会 1992

「中野清水遺跡(2)」鳥根県教育委員会 2005

「県道浜乃木湯町線(湯町工区)建設に伴う発掘調査報告書」鳥根県教育委員会 2006

「鍛冶屋敷遺跡」滋賀県教育委員会 2006

久野雄一郎「東大寺大仏の銅原材料についての考察」(『櫻原考古学研究所紀要 考古学論叢』第14冊) 1990

「史跡高麗寺跡」山城町教育委員会 1989

「吉田住吉山遺跡群」兵庫県立考古博物館 2011

「市川市出土遺物の分析」市川市教育委員会 1996

「千葉市観音塚遺跡・地藏山遺跡(3)」(財)千葉県文化財センター 2005

「金井遺跡B区2」埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000

「金平遺跡2」嵐山町遺跡調査会 2000

Table.1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺構名	遺物No.	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目			
					大きさ(mm)	重量(g)	メタル度	組織	EPMA	化学分析
MNY-1	S L 1 第1層	290	銅塊	8 c	41 × 35 × 12	55.0	L (●)	○	○	○
MNY-2	S L 1 第2層	234	銅塊		43 × 35 × 15	56.9	L (●)	○	○	○
MNY-3	S L 1	199	ガラス質滓 (緑青付)		28 × 20 × 8	6.9	M (○)	○	○	
MNY-4	S L 1	170	銅塊 (底部緑青付)		60 × 54 × 24	64.2	なし	○	○	

Table.2 供試材の化学組成

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	銅 (Cu)	錫 (Sn)	鉛 (Pb)	鉄 (Fe)	砒素 (As)	アホシ (Sb)	ヒスマ (Bi)	銀 (Ag)
MNY-1	S L 1 第1層	銅塊	8 c	96.3	0.62	0.84	0.07	1.90	0.12	0.22	0.06
				96.2	0.72	0.91	0.09	2.04	0.16	0.25	0.06
				94.9	0.56	0.82	<0.07	1.87	0.09	0.21	0.06
MNY-2	S L 1 第2層	銅塊	8 c	93.4	0.95	2.64	<0.07	3.06	0.26	0.27	0.12
				94.6	0.93	2.44	<0.07	3.04	0.25	0.28	0.13
				93.6	0.94	2.45	<0.07	3.01	0.21	0.26	0.13

Table.3 分析調査結果

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	銅	錫	鉛	鉄	砒素	マンガン	亜鉛	銀	純貴
					(Cu)	(Sn)	(Pb)	(Fe)	(As)	(Mn)	(Zn)	(Ag)	(S)
H-918	尾崎		銅塊	9c代	97.2	-	0.120	0.005	229	0.008	0.000	-	-
BOD-7	菩提	段1	青銅塊	8~9c	50.1	0.06	25.3	10.44	131	0.16	0.14	-	-
HOU-10	宝満山	AJ16 S-46	粗銅	鎌倉~室町時代	198	-	-	27.27	15.9	-	-	-	0.08
HOM-32		Ⅲ区溝1下層	銅塊	11c末~12c	93.6	0.76	0.31	3.12	186	0.23	0.10	-	-

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	銅	錫	鉛	鉄	砒素	マンガン	亜鉛	銀	純貴
					(Cu)	(Sn)	(Pb)	(Fe)	(As)	(Mn)	(Zn)	(Ag)	(S)
A	国秀	SB-52	銅塊	7c後半	88.84	0.24	0.96	4.99	289	0.13	0.45	0.056	-
NAK-7	中野清水	8区、J-47	青銅塊	奈良時代前半	81.9	15.6	1.21	0.08	0.202	-	-	-	0.43
NAK-12		7区、O-48	銅塊	奈良時代後半~平安時代	97.8	<0.01	0.08	0.05	200	-	-	-	0.11
OMO-11	面白谷	D-1	銅塊	不明	86.94	0.42	1.12	0.01	3.27	0.21	<0.01	-	-

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	銅	錫	鉛	鉄	砒素	マンガン	亜鉛	銀	純貴	ビスス	セシ	
					(Cu)	(Sn)	(Pb)	(Fe)	(As)	(Mn)	(Zn)	(Ag)	(S)	(Bi)	(Zn)	(Ag)
KAZ-17	鎮治屋敷	炭溜り6	銅塊	8c中頃	82.1	0.28	<0.01	5.54	7.68	<0.01	0.37	-	-	-	-	
KAZ-18		東3-1-1前庭部	銅塊		92.6	0.76	0.28	0.04	4.84	0.33	<0.01	-	-	-	-	-
KAZ-19		東3-1-1-2周辺	銅塊		84.6	0.07	0.06	0.2	6.54	0.19	0.01	-	-	-	-	-
KAZ-30		東3-1-3-4周辺	銅塊		66.5	2.78	2.26	3.22	15.84	0.67	0.02	-	-	-	-	-
KAZ-21		炭溜り周辺	銅塊		74.9	0.88	1.66	5.00	10.67	0.4	0.55	-	-	-	-	-
KAZ-22		西3-1-1-7-8周辺 包含層	銅塊		84.8	0.78	0.68	3.90	6.33	0.39	0.13	-	-	-	-	-
KAZ-23		西3-1-1-7-8周辺 包含層	銅塊		88.5	0.29	0.05	3.16	4.13	0.24	0.05	-	-	-	-	-
KAZ-24		台座跡込み遺構 第3層	銅塊		77.3	0.84	0.21	5.81	1.25	0.04	0.03	-	-	-	-	-
KAZ-45		調査区 北西隅 黒色土	銅塊		60.06	0.67	2.26	13.81	12.74	0.15	0.06	-	0.72	-	-	-
		東大寺大仏殿西回廊隣接地 出土資料	赤紅色部		銅塊	奈良時代	96.39	<0.05	0.06	0.074	1.77	0.006	0.009	0.19	-	-
	銀白色部		銅塊	76.62	17.70		0.51	0.074	2.92	0.26	0.16	0.11	-	-	-	
	黄白色部		銅塊	90.30	4.32		0.54	0.025	3.18	0.20	0.20	0.18	-	-	-	
-	高麗寺	506Tr 灰層	銅塊	84.5800	9.7880	0.7455	1.2650	2.6090	0.0000	0.0000	0.3324	-	0.5999	-	-	
WDA-1-1	吉田住古山		銅塊	中世 後期	93.8	0.01	<0.01	0.03	<0.01	<0.01	0.07	-	-	<0.10	0.05	
WDA-1-2	(和田村付城)		銅塊	中世 後期	92.4	0.01	<0.01	0.02	<0.01	<0.01	0.01	-	-	<0.10	0.05	

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	銅	錫	鉛	鉄	砒素	マンガン	亜鉛	銀	純貴
					(Cu)	(Sn)	(Pb)	(Fe)	(As)	(Mn)	(Zn)	(Ag)	(S)
SMK-1	因分	-	銅素材	8c初頭~中頃	90.7	0.004	0.002	1.63	1.07	0.13	0.001	-	-
WSY-10	蟹谷津	S1-86	銅塊	7c末	-	-	1.51	-	3.30	0.22	-	-	-
KB-1	金井B	-	銅塊	中世	92.1	0.56	4.67	0.065	0.342	0.13	0.000	-	-
KAN-24	金平	J-19.37号土坑	青銅洋 とり<付着物	13c後半	41.3	10.9	15.0	3.52	0.13	0.07	0.010	-	0.09
KAN-25		I-20.553	銅塊		44.2	6.07	9.13	3.44	0.17	0.07	0.008	-	0.03

MNY-1 銅塊

①マクロ組織、

酢酸-硝酸-7%etch

②~③素地多角形結晶:

銅 (Cu α 相)、粒状青灰色

部:白鍍 (Cu₂S)、暗灰色

部:鉛 (Pb) - 砒素 (As)

酸化物、ビスス(Bi)

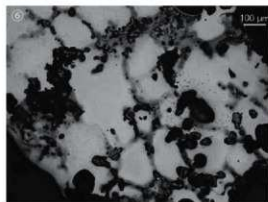
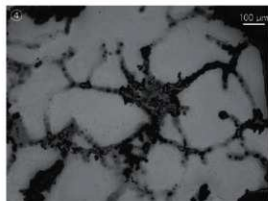
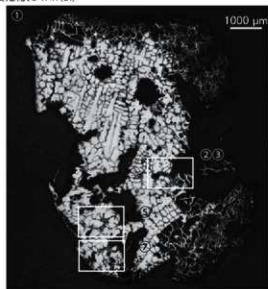


photo.1 銅塊 (MMY-1)の顕微鏡組織

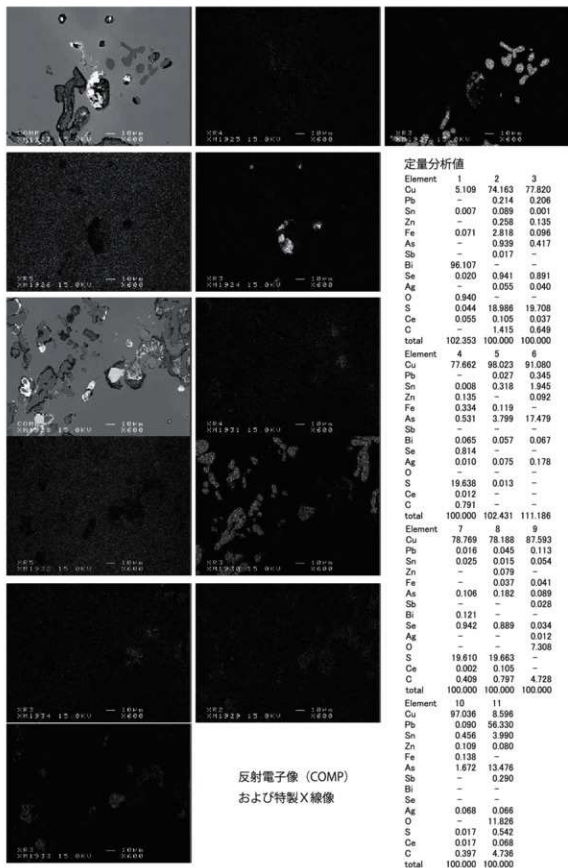


photo. 2 銅塊 (MMY-1) のEPMA調査結果

MNY-2 銅塊

①マクロ組織

酢酸・硝酸・7針/etch

②~③素地多角形結晶:

銅 (Cu α 相)、粒状青灰色

部: 白鍍 (Cu δ S)、暗灰色

部: 鉛 (Pb) 酸化物

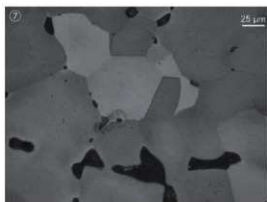
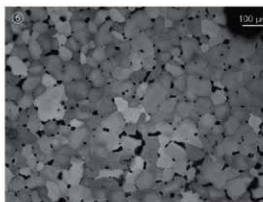
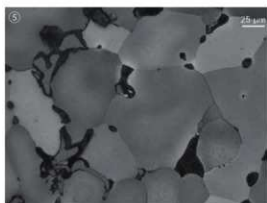
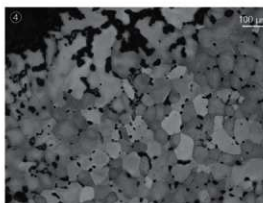
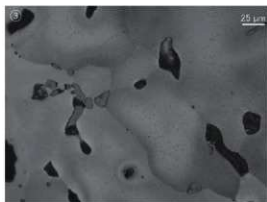
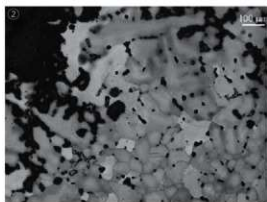
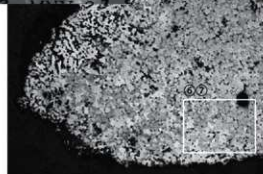
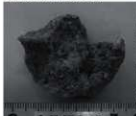


photo.3 銅塊(MNY-2)の顕微鏡組織

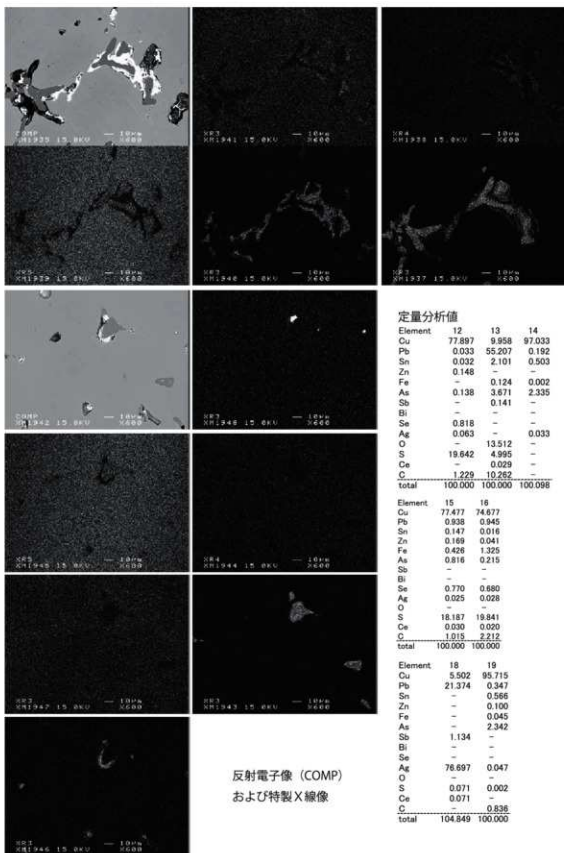


photo.4 銅塊(MMY-2)のEPMA調査結果

MNY-3

がら質滓（緑青付着）

①加組織、

酢酸・硝酸・7ftetch

②～⑦暗色部がら質滓、

亞酸化銅 (Cu₂O) 晶出

金屬粒：樹枝状初晶

(Cu₂O)、暗灰色部：

鉛 (Pb) - 砒素 (As)

酸化物

素地多角形結晶：銅 (Cu α 相)、

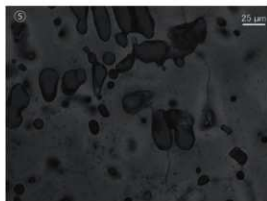


photo.5 銅塊(MNY-3)の顕微鏡組織

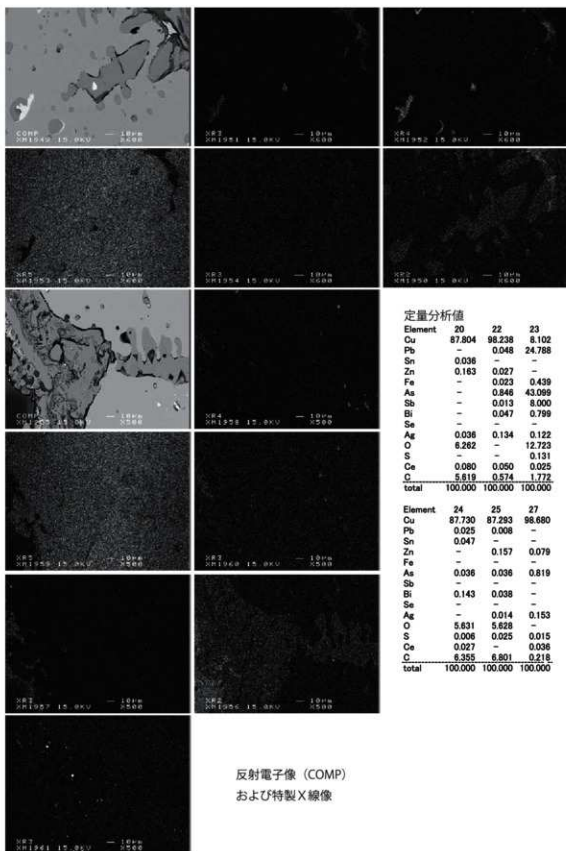


photo.6 銅塊(MMY-3)のEPMA調査結果

MNY-4 炉壁

①加工組織、

酢酸・硝酸・7t/etch

②～⑦暗色部上側が矽質滓、
被熱砂粒混在、下側：被熱粘
土鉱物、金属粒：素地多角形
結晶：銅（Cu α 相）、微細鉛
（Pb）-砒素（As）-アナン
（Sb）-ヒス（Bi）酸化物

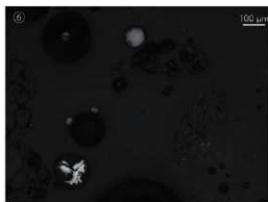
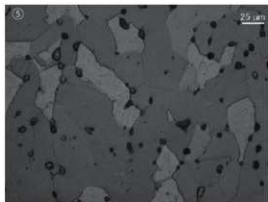
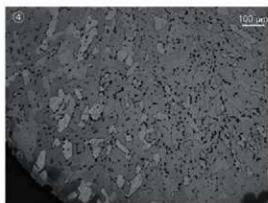
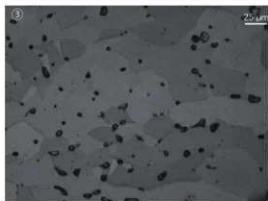
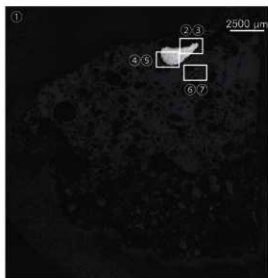


photo.7 銅塊(MNY-4)の顕微鏡組織

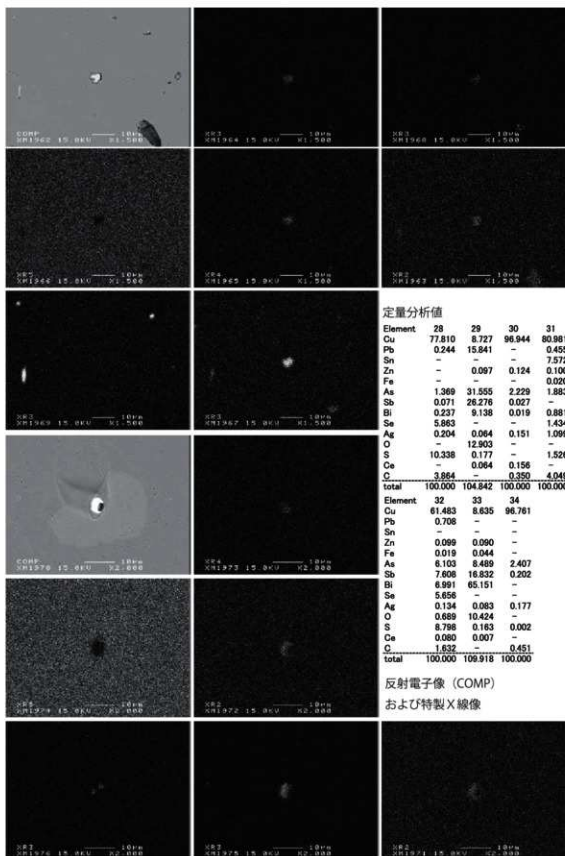


photo.8 銅塊(MMY-4)のEPMA調査結果

2. 美濃山廃寺第7次・ 美濃山廃寺下層遺跡第10次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、「美濃山閉鎖地区農地一時転用(盛土造成)」事業に伴って実施したものである。同事業は、農地を一時転用して新名神高速道路整備事業に伴う盛土造成工事を行うもので、盛土造成予定地内における埋蔵文化財を対象として発掘調査を実施した。

本事業に伴い発掘調査の対象となったのは、美濃山廃寺と美濃山廃寺下層遺跡の2遺跡である。前者はこれまでの発掘調査や出土遺物などから奈良時代を中心とする古代寺院であると考えられている。今回、新名神高速道路整備事業^(国1)と合わせて、推定寺域のほぼ全域を調査することになり、美濃山廃寺の全容の解明が期待された。後者もこれまでの調査で、弥生時代後期を中心とする堅穴建物などが確認されており、当該期の高地性集落の実態が明らかになるものと期待された。

また、本事業に伴う発掘調査は、調査対象地が広範囲に及ぶため、当調査研究センターのほか、八幡市教育委員会が調査を実施することになった。そこで、当調査研究センター調査担当分を美濃山廃寺第7次調査・美濃山廃寺下層遺跡第10次調査、八幡市教育委員会調査担当分を美濃山廃寺第8次調査・美濃山廃寺下層遺跡第11次調査として調査を実施した。

なお、調査にかかる経費は、全額八幡市が負担した。

[現地調査体制]

現地調査責任者	調査第2課長	水谷壽克
現地調査担当者	調査第2課主幹調査第3係長事務取扱	石井清司
	調査第2課調査第2係 専門調査員	岡崎研一
	調査第2課調査第3係 調査員	筒井崇史
	同 調査員	山崎美輪
調査場所	八幡市美濃山古寺4-1・26ほか	
現地調査期間	平成23年10月3日～平成24年3月2日	
調査面積	3,800㎡	

(筒井崇史)

2. 調査の経過

1) 調査に至った経緯

美濃山廃寺の所在する美濃山地区周辺において、新名神高速道路等の建設が計画された。

そこで遺跡の範囲を確認し、その内容を正確に把握して資料を作成することを目的に、平成11

年度より八幡市教育委員会が主体となって範囲確認調査が実施された(美濃山廃寺第1～5次調査)。調査の結果、寺域の位置をほぼ確定するとともに寺域の内外に多数の掘立柱建物が検出された。寺域は、区画溝の検出状況から一辺93m程度の方形状の区画と推定されたが、一方で、区画溝の外側でも建物が検出されていることから寺域が拡大する可能性も指摘された。一方、検出された建物はいずれも掘立柱建物であり、古代寺院において一般的にみられる礎石建物や基壇等は確認されておらず、塔や仏堂の検出には至らなかった。遺物としては、瓦類や土師器・須恵器の土器類のほか、覆鉢形土製品や宝珠形土製品(今回の調査でひさご形土製品としたもの)、須恵器水瓶、奈良三彩の瓶などの仏具と思われるものが出土した。これらの遺物から美濃山廃寺は奈良時代前半ごろに創建され、平安時代前期には廃絶したものと考えられた。

さて、新名神高速道路等の整備事業が本格化するとともに、これらの道路によって囲まれる美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡の立地する丘陵頂部(この範囲を「美濃山閉鎖地区」と呼称)については、新名神高速道路の整備事業に伴う土置き工事(盛土造成)に伴って事前に発掘調査が必要であると判断された。

以上のような状況を受けて、発掘調査を実施することとなり、関係機関の協議の結果、対象となる範囲のうち3,800㎡を、八幡市が当調査研究センターに発掘調査の依頼をすることとなった。

なお、美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡については、昭和52年に市誌編纂の資料収集を目的とした発掘調査以降、合わせて8回(重複分を除く)に及ぶ調査を実施しており、多大な成果を得ている。今回の調査においても、これまでの調査成果に留意しながら発掘調査を実施した。今回の調査も含めて、これまでの調査区を第1図に示した。

2) 第7次調査の経過

今回の発掘調査は、調査対象地の竹林と入れ土が除去された後、平成23年10月3日に着手した。調査は遺構面直上に残った竹林の入れ土等を重機で除去する作業を調査地の北東部から開始し、順次南へ進めていった。重機による掘削後、人力による精査を開始した。その結果、多数の柱穴や溝を検出した。10月中旬以降は、調査補助員により、地区割に伴う基準杭の設置、1/100平面図の作成などを順次行った。また、作業員によって遺構の検出作業を継続するとともに、検出した遺構の一段下げを行った。特に柱穴については1/100平面図や現地での検討を行い、建物として復元できるものの抽出に努めた。さらに検出した遺構の1/20平面図を作成するとともに、柱穴を半載し、断面図の作成作業などを実施した。

この間、調査地南部で一辺1.3～1.5mの大型柱穴の列が複数確認された。この柱穴列の柱間寸法が7mに達するうえ、対となる柱穴列の柱穴がおおよそ3.5mずれて検出された。そのため検出した柱穴群が千鳥に配列されることとなり、建物としては復元できないという状況に至った。このため中間に位置すると思われる柱穴の検出に努めたが、確認することはできなかった。検出した柱穴の規模や柱穴群の周辺から大量の瓦類が出土することから、この大型柱穴群が美濃山廃寺を考えると重要な遺構の1つであると考え、寺院関連遺構や建築関係の有識者の方々からさまざまなご教示を得ながら調査を進めた。その結果、これらの柱穴が確認された地点でも遺構面の



第1図 調査次数別調査区配置図(1/2,500)

残りが良い北西部で、礎石を据え付けるための柱穴を3基検出することができた。この結果、掘立柱と礎石を併用し、それを交互に配列する建物であると判断するに至った。そして、規模の点からこの建物が美濃山廃寺の中心的建物の1つであることが明らかとなった。

美濃山廃寺第7次調査の成果がおおむね明らかになった平成24年1月15日に現地説明会を新名神整備事業、府道八幡インター線整備事業ならびに八幡市教育委員会と合同で実施し、430人あまりの参加があった。現地説明会終了後、美濃山廃寺に関連する遺構の完掘、遺物の取り上げを行うとともに、1月30日からは調査地の北半部を中心に分布する弥生時代後期の竪穴建物(美濃山廃寺下層遺跡)の調査を開始した。美濃山廃寺下層遺跡についても一連の調査の結果、多数の竪穴建物を確認し、弥生時代後期の高地性集落の一端を明らかにすることができた。

美濃山廃寺第7次調査の成果がおおむね明らかになった平成24年2月21日にヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。その後、遺構の完掘や土層観察用セクションの除去作業、平面図・断面図の追加・補足作業を行うとともに、遺物の取り上げを随時行った。3月2日には調査に伴うすべての作業を終了し、3月9日までにすべての機材等を撤去した。

3) 調査の方法

今回の調査に際しては、調査対象地が広範囲であること、3事業が同時に発掘調査を実施することなどから、第6次調査と同じ地区割を使用した。地区割の概要については、第6次調査報告9頁を参照されたい。

検出した遺構には原則として通し番号をつけ、遺構の性格を示す略号を付した。今回の調査では、個々の柱穴と掘立柱建物もしくは掘立柱塀を明確に区別するため、建物については2000番台の、塀については2100番台の遺構番号を付した。また、明らかに弥生時代の遺構については3000番台、近・現代の攪乱については5000番台の遺構番号を付した。ただし001番からの通し番号を付した遺構でも弥生時代のものや近・現代のものが含まれている。また、3000番台の遺構でも調査の結果、古代の遺構と判断したものがある。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。使用した略号は、竪穴建物：S H、掘立柱建物：S B、溝：S D、土坑：S K、柱穴：S P、不明遺構・その他：S Xである。なお、本報告で使用した遺構番号は調査時のものである。ただし、調査時に番号のなかった遺構については、本報告作成時に新たに付した。

遺構の一段下げや半載を終えると、必要に応じて縮尺1/10ないし1/20の平面図や断面図の作成と写真撮影を行った。掘立柱建物や竪穴建物については、検出状況や完掘状況の全景写真を撮影するように努めた。

4) 報告書作成作業について

平成24年度は、平成23年度に実施した美濃山廃寺第7次調査で出土した遺物の整理作業ならびに報告書作成作業を実施した。出土遺物の整理作業では、遺物の洗浄・接合・注記を順次行った。なお、洗浄作業の一部は平成23年度にも実施している。注記等終了後、報告に必要な遺物の選別を行い、これらについては実測・拓本を行った。最終的に本報告に掲載した遺物は482点である。

実測した遺物のうち、復元可能なものについては石膏による復元を実施した。復元できた遺物や小破片でも重要な遺物については、遺物写真の撮影を行い、図版として掲載した。

本報告の刊行に当たっては調査担当者による遺構・遺物の検討とともに、外部有識者を交えて「美濃山廃寺検討会」を2回にわたって実施し、その成果を報告書にまとめた。^(註5)

(筒井崇史)

3. 調査の概要

まず基本層序を述べた後に、古代の遺構を美濃山廃寺として、また弥生時代の遺構を美濃山廃寺下層遺跡としてそれぞれ概要を述べる。

1) 基本層序

調査対象地は、調査前は丘陵全体がほぼ竹林であった。竹林の土入れに伴う入れ土の存在や地番ごとに大きく溝を穿って区画されていることから、本来の地形が大きく改変されていることが予想された。調査範囲については、八幡市教育委員会と協議の上、盛土造成対象地のうち、美濃山廃寺の推定寺域全体を取り込むように設定した。

調査を進めると、遺構の時期は大きく奈良時代と弥生時代後期の2時期であることが確認できた。しかし、これらの遺構は上記の竹林の造成等によって大きく削平されていたためか、検出面はすべて同一面であり、遺物包含層はほとんど存在しなかった。なお、攪乱土や入れ土には古代や弥生時代の遺物を多く含んでいた。

さて、第7次調査地は第1～5次調査地と重なるため、同調査の成果をもとに基本層序を確認したい。第2図は第1～5次調査の報告書より引用・再構成したもので、柱状図の作成箇所は第5図に示した。^(註6)

調査地の基本的な層序は、1:竹林表土、2:竹林入れ土、3:竹林以前の茶畑に伴う土層、4:それ以前の耕作土、5:遺構、6:地山となる。3層や4層は調査地の一部では認められない地点もある。調査地全体で明確な遺物包含層は認められず、遺構に伴わない遺物の多くが2～4層に混入した状態で出土した。遺構の大半は地山直上で検出したが、調査地北東部では弥生時代の堅穴建物の埋土の上から古代の遺構が掘削されていた。

調査地は、柱状図6付近が最も高く(標高48.2m前後)、周辺に向かって下がって行く。調査地北辺では柱状図1付近が最も高く(標高47.3m前後)、東に向かって徐々に下がっており、比高はおおよそ2mである。一方、柱状図6付近から南へ向かっておおよそ2m下がるが、柱状図8・9付近は竹林に伴う土取りや粘土の採掘等に伴う地形の改変、攪乱が著しく、調査地北半ほど遺構の残りは良くない(標高46.2～46.6m)。

2) 美濃山廃寺第7次調査

今回の調査で見つかった遺構は、柱穴600基以上、土坑10基以上、溝7条以上、瓦溜り2か所である。溝には区画溝4条が含まれる。検出した柱穴は、掘立柱建物や掘立柱塼として復元できるかどうか検討した結果、掘立柱建物19棟、掘立柱塼7条に復元できた。また、「第7次調査の

経過」の項で述べたように礎石・掘立柱併用建物1棟を検出した。

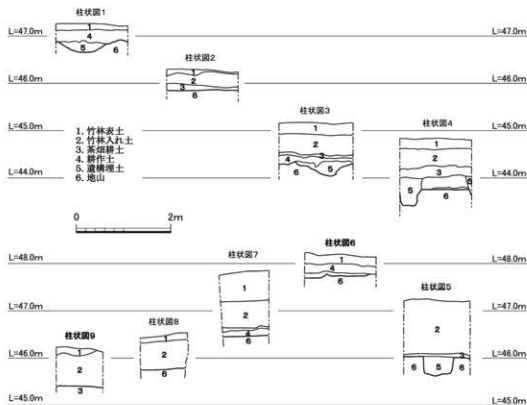
遺構の分布状況としては、調査地の北半部で掘立柱建物や区画溝など多くの遺構を検出した。一方、南半部では礎石・掘立柱併用建物1棟とその区画のほか、掘立柱塼1棟、掘立柱塼1条、瓦溜り2か所、若干の柱穴を検出したに留まる。むしろ耕作溝や土取りなどの攪乱を多数検出し、そこから瓦類を主体とする多数の遺物が出土した。

また、遺物の出土傾向としては、北半部では北東部で土器がややまとまって出土するほか、各建物の柱穴から多数の瓦類が出土した。しかし、美濃山廃寺全体から見ると全般的に少なめである。一方、南半部では礎石・掘立柱併用建物の周囲をはじめ、瓦溜りなどから瓦類を中心とする多数の遺物が出土している。出土した瓦の大半が南半部からの出土である。調査地全般に地形の改変等が及んでいるとはいえ、南半部で多数の瓦類が出土することは、瓦類を使用した建物が南半部に存在したことを示唆するものと考えられる。

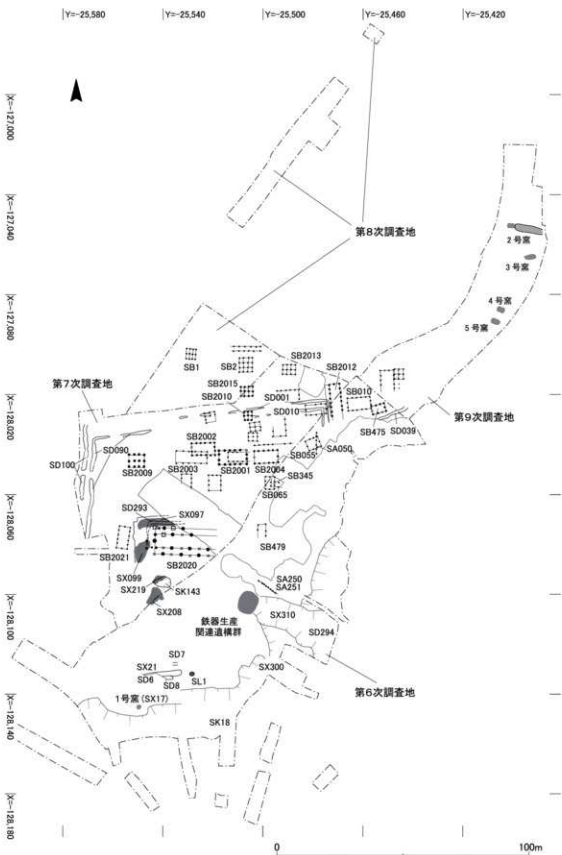
第7次調査をはじめとする今回の一連の調査では、金堂跡や塔跡を示すような遺構あるいは基壇跡は検出されておらず、美濃山廃寺全体の伽藍配置等は明らかにできなかった。しかし、区画溝や多数の掘立柱建物、上記の礎石・掘立柱併用建物の確認など、美濃山廃寺の全容を解明するための成果を得ることができた(第3図)。

3) 美濃山廃寺下層遺跡第10次調査

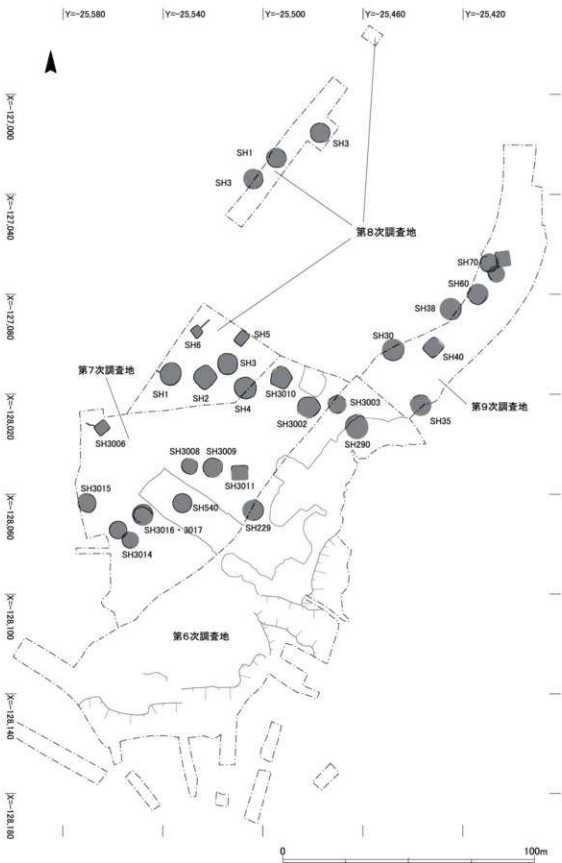
調査地の北半部を中心に竪穴建物12棟、溝1条、土坑3基などを検出した。調査地の南半部では礎石・掘立柱併用建物付近で竪穴建物数棟を検出したが、それよりも南側では攪乱等が著しく、



第2図 調査地基本層序(1/80)



第3図 美濃山廃寺遺構配置模式図(1/1,500)



第4図 美濃山廃寺下層遺跡遺構配置模式図(1/1,500)

土坑1基を検出したのみである。

検出した遺構の時期はいずれも弥生時代後期であるが、全般に出土遺物が少なく、詳細な時期は断定しにくい。竪穴建物には、平面形が円形を呈するもの、多角形を呈するもの、方形を呈するものが見られる。遺構は北半部を中心に検出したが、南半部でも少量ながらも弥生土器が出土しており、本来、調査地全体に集落遺跡が広がっていたものと推測される。

なお、弥生時代後期の竪穴建物は、八幡市教育委員会が実施した第11次調査や当調査研究センターが実施した第9・12次調査においても多数検出しており、弥生時代の集落が丘陵上全体の広範囲に及んでいたことが確認された(第4図)。

(筒井崇史)

4. 美濃山廃寺第7次調査

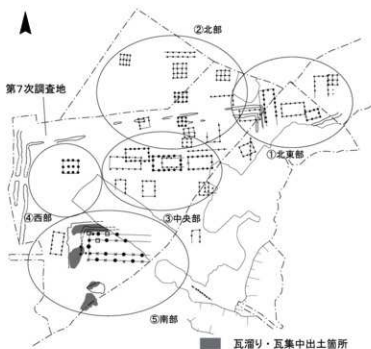
1) 検出遺構

第7次調査では、先述のように、区画溝4条、礎石・掘立柱併用建物1棟、掘立柱建物19棟、掘立柱堀7条、土坑10基、柱穴600基以上、溝3条などを検出した。これらの遺構は検出位置から①北東部、②北部、③中央部、④西部、⑤南部の大きく5つに分けることができる(第5図)。ただ、この区分けは、厳密な区画施設を確認したのもでも、時期別の遺構変遷をふまえたものでもなく、便宜的なものである。また、検出遺構の報告にあたっては、後述する「美濃山廃寺の遺構の変遷について」(323～329頁)で示した時期区分にしたがって各遺構の時期を示す。

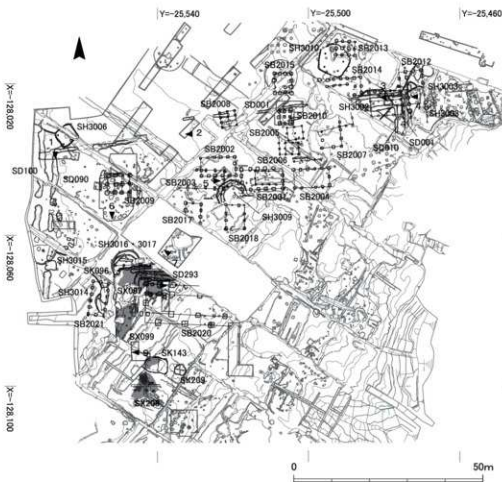
以下では、美濃山廃寺全体に関わると考えられる区画溝を最初に取り上げ、次に各区分けごとに個々の遺構について述べることにする。なお、遺構の報告に伴う挿図のうち、柱穴内の円形の網点は、原則として検出時の柱痕の範囲を示すものとする。網点のないものは柱痕を確認できなかったものである。また、各遺構から出土した遺物には、美濃山廃寺下層遺跡に伴う弥生土器も多数混入していたが、個別に記述しなかった。

(1) 区画溝

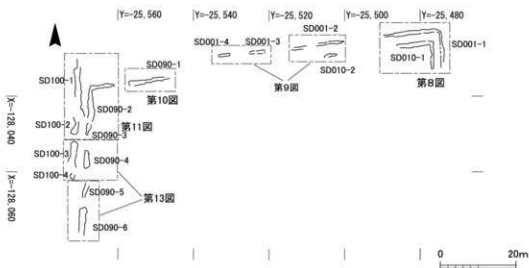
区画溝 S D001・010(第8・9図) V-i19・i20区からⅦ-h9区にかけて検出した。第I期の寺域の北東部から北辺を区画する。S D001・010ともに、後世の擾乱や竹林の造成によつて



第5図 第7次調査地区区分概念図



第6図 美濃山廃寺第7次調査検出遺構配置図(1/1,000)



第7図 区画溝 S D001・010・090・100全体図(1/1,000)

でに失われているところもある。両溝は平行しており、S D001が区画の外側、S D010が区画の内側に当たる。S D001とS D010の間隔は溝の心々間で2.8～3.2mである。検出状況や出土遺物などからS D001とS D010の2条が平行して同時に存在していたと推定される。また、両溝の間

には築地や掘立柱塼の痕跡があるかどうかを注意して精査を進めたが、確認することはできなかった。

S D001は、第4・5次調査の溝S D105・456、第6次調査の溝S D167に当たる。溝内の埋土堆積状況から水流の痕跡は認められなかった。S D001は、攪乱等により部分的に途切れており、その状況に合わせて、東から-1、-2、-3、-4と細分して記述する(第7図)。

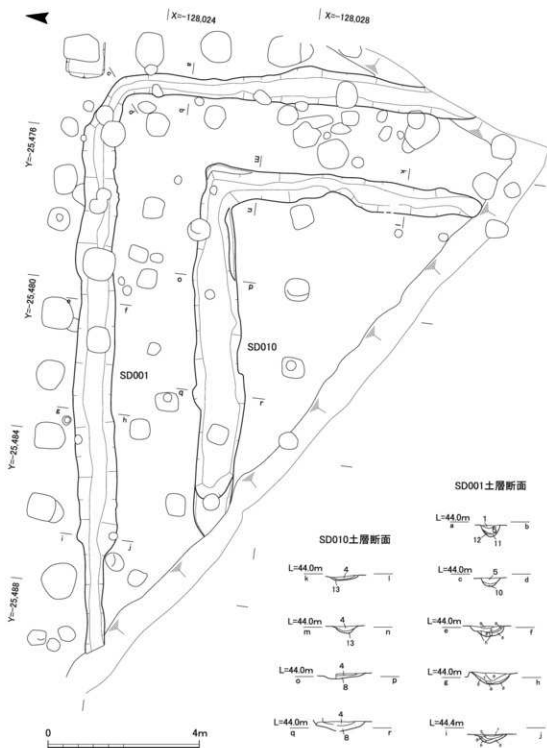
S D001-1は、寺域を区画する溝の北東角付近に当たり、遺構の遺存状況が良好である。遺構の一部は第4・5次調査で確認されている(02-6区・03-1区)。ここでは、第6次調査の成果と合わせて報告する。検出長は24.8mである。東辺では幅0.5～0.9m、深さ0.25～0.4mである。溝底の標高は43.5～43.6mで、北から南へ向かって低くなる。また、北辺では幅0.4～1.0m、深さ0.1～0.15mである。溝底の標高は43.6～44.2mで、西から東へ向かって低くなる。埋土はおもに褐色粘質土である。東辺での溝幅に対して、北東角よりも西側の北辺では幅がやや広がる。しかし、北東角から西へ約12.5mのところから、再び溝の幅が0.4mと狭くなる。遺物として、第7次調査では、平瓦、土師器、須恵器などの破片が出土したものの、出土量は少なかった。一方、第6次調査ではS D167(S D001-1)の東辺で須恵器杯B・鉢Aなどが出土した(第75図100～105)。

S D001-2は、S D001-1の西側約11mで検出した。両者の間は竹林の土取りによって大きく削平されていたが、検出状況から本来はつながっていたものと推定される。遺構の一部は第1・4次調査で確認されている(99-1区・02-1区)。検出長14.2m、幅0.3～0.8m、深さ0.1m前後である。溝底の標高は44.6～44.9mで、東へ向かって低くなる。埋土は褐色粘質土の単層である。S D001-2の東端は、西側にくらべ幅が狭くなっており、S D001の西端に対応するようである。つまり、この両者の間の溝幅が他の部分よりも狭く掘られていることになり、溝を渡るためや区画溝の内側に入出入りするための施設があった可能性を考えている。溝幅が狭い箇所長さは13.9mである。S D001は掘立柱建物S B2010A・Bと重複するが、八幡市教育委員会の調査成果(第4次調査)を踏まえると、S B2010AはS D001-2と同時期、S B2010BがS D001-2埋没後の遺構と判断されており、今回の調査でもこの関係を追認した。遺物として土師器の小破片などが少量出土したにすぎなかった。

S D001-3は、S D001-2の西側約7mで検出した。両者の間は里道によって大きく削平されていたが、本来はつながっていたものと推測される。検出長4.2m、幅0.8m前後、深さ0.1m前後で、溝底の標高は45.3～45.4mである。掘立柱建物S B2008と重複するが、両遺構の切り合い関係よりS B2008よりもS D001-3の方が新しい。埋土は褐色粘質土の単層である。遺物として土師器ないし弥生土器の破片が少量出土したにすぎない。

S D001-4は、S D001-3の西側約5mで検出した。両者の間に大きな攪乱は認められなかったが、両者をつなぐような痕跡を確認することはできなかった。検出長3.1m、深さ0.1m、溝底の標高は45.6m前後である。埋土は褐色粘質土の単層である。遺物として土師器ないし弥生土器の破片が少量出土したにすぎない。

S D001は、出土遺物や後述する掘立柱建物や掘立柱塼との重複関係から、第I期に掘削され、



1. 暗褐色(10YR 3/4)粘質土(粗砂・炭まじり)
2. 褐色(10YR 4/6)粘質土
3. 黄褐色(10YR 5/8)粘質土
4. 褐色(10YR 4/4)粘質土
5. 褐色(10YR 5/6)粘質土
6. にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘質土(粗砂・小レキを含む)
7. 暗褐色(10YR 3/3)粘質土

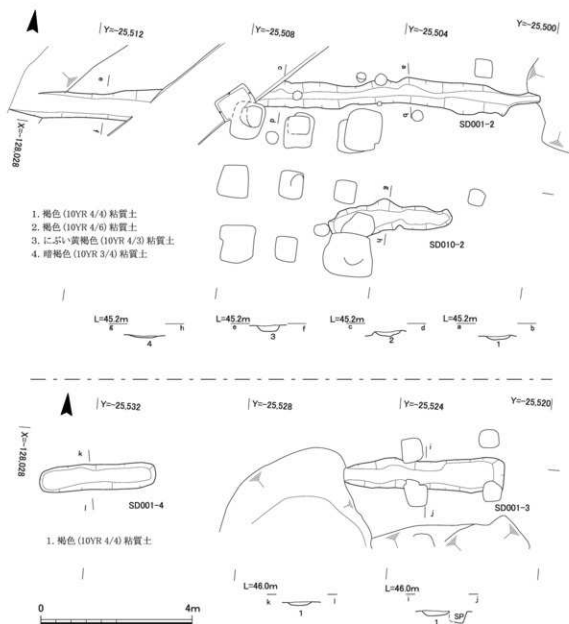
8. にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘質土
9. 明褐色(7.5YR 5/6)粘質土(粗砂まじり)
10. 褐色(10Y 4/6)粘質土
11. 黄褐色(10YR 5/8)粘質土(少し粗砂・小レキ混じる)
12. 黒褐色(10YR 3/2)粘質土
13. 黄褐色(10YR 5/6)粘質土

第8図 区画溝S D001-1・010-1実測図(1/100)

第Ⅱ-1期には埋没したものと考える。

S D010は、第5次調査で遺構の一部が確認されていた。また、第6次調査でも一部を検出しており、溝S D106に当たる。S D001同様、水流の痕跡は認められなかった。S D010はS D001と同様、攪乱等により途切れているところがあり、2か所で確認したのみでありS D001にくらべると遺存状況が良いとはいえない。以下、-1、-2と細分して記述する(第7図)。

S D010-1は、S D001-1の南西側、すなわち寺域を区画するための溝の内側をめぐるものである。検出長は17.0mである。東辺は幅0.6~0.75m、深さ0.2m前後である。溝底の標高は43.7~43.9mで、南へ向かって低くなる。また、北辺は幅0.9~1.2m、深さ0.15~0.25mである。溝底の標高は43.9~44.0mで、西から東へ向かって低くなる。埋土は上層が褐色粘質土、下層が黄褐色粘質



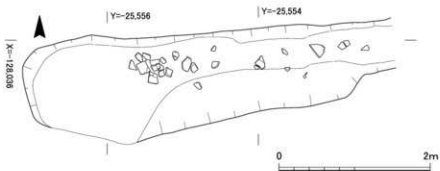
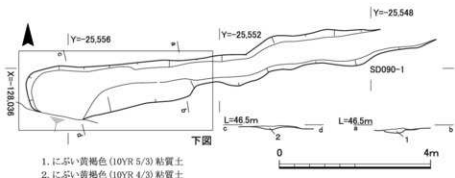
第9図 区画溝S D001-2~4・010-2実測図(1/100)

土またはにぶい黄褐色土である。東辺での溝幅に対して、北東角よりも西側の北辺では幅がやや広くなっている。また、S D001-1と同様に、北東角から西へ約9.6mのところまで溝の幅が狭くなるようである。遺物として、第6・7次調査合わせて、平瓦、土師器、須恵器などの破片のほか、製塩土器の破片も出土した(第75図106~112)。

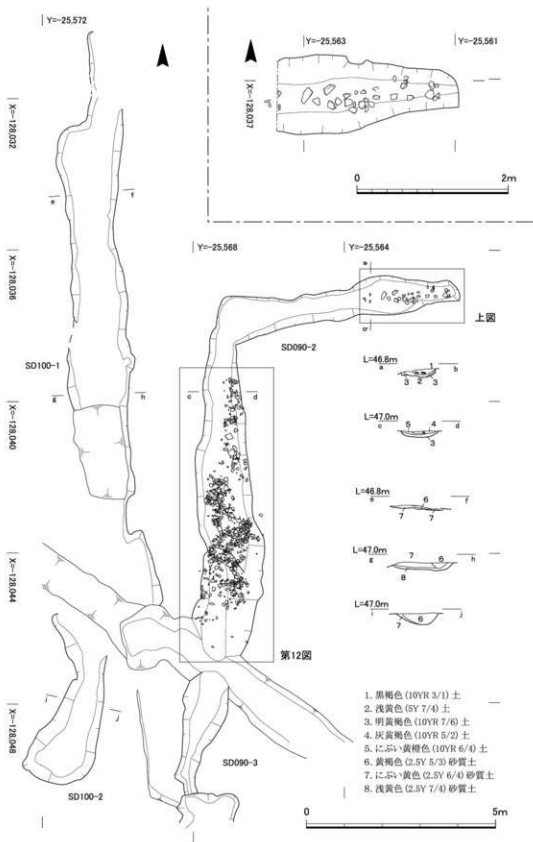
S D010-2は、S D010-1の西側約16mで検出した。両者の間は竹林の土取り等によって大きく削平されていた。遺構の一部は第5次調査で確認されていた(03-9区)。今回の調査により、S D010-1と方位が一致することやS D001-2と平行することから、区画溝の一部であると判断した。検出長3.3m、幅0.6~0.8m、深さ0.05~0.1mで、溝底の標高は44.7m前後である。埋土は暗褐色粘質土の単層である。出土遺物はなかった。なお、ここよりも西側ではS D010の延長に当たる遺構は検出できなかった。

S D010は、出土遺物や後述する掘立柱建物・掘立柱塼との重複関係から、第I期に掘削され、第II-1期には埋没したものと考える。

区画溝S D090・100(第10~13図) VII-i12区からVII-i18区にかけて検出した。第I期の寺域の北辺から西辺を区画する溝である。区画溝S D001・010と同様に、後世の擾乱や竹林の造成によって、溝の遺存状況は必ずしもよくない。S D090はS D010と同一の区画溝の可能性もあるが、両者の間に区画溝の痕跡は認められなかった。このため同一の区画溝と断定するのは難しく、別の遺構として扱うこととした。S D090は第3次調査の溝S D301に当たる。S D090は、S D001・010と同様に、擾乱等によって、途切れており、その状況から北東端から反時計回りに-1、-2、-3、-4、-5、-6と細分して記述する(第7図)。



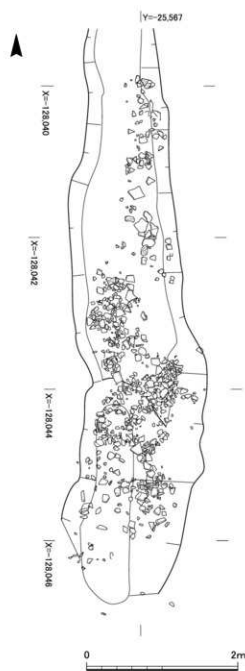
第10図 区画溝S D090-1実測図(1/100)および遺物出土状況図(1/50)



第11図 区画溝 S D090-2・3、S D100-1・2実測図(1/100)およびS D090-2遺物出土状況図(1/50)

S D090-1は、S D010-2の西端から西へ約41mのところで検出した。遺構の一部は第3次調査で確認されている(01-5・6区)。検出長11.0m、幅0.8~1.3m、深さ0.1mである。溝底の標高は46.1~46.4mで、西から東へ向かって低くなる。埋土はにぶい黄褐色粘質土の単層である。遺物は瓦類を主体に出土した。遺構の東半部は、第3次調査の際に瓦類や覆鉢形土製品1点が出土している。

S D090-2は、S D090-1の西側約4mで検出した。両者の間は境界溝によって大きく削平されているが、本来はつながっていたものと考えられる。S D090-2は東端から6.2mのところで南へ屈



第12図 区画溝S D090-2西辺
遺物出土状況図(1/50)

曲しており、寺域を区画する溝の北西角と考えられる。この北西角は第3次調査で確認されている(01-7区)。検出長15.5m、幅0.7~1.6m、深さ0.1~0.2mである。溝底の標高は46.4~46.6mで、北西角付近が最も高く、東と南に向かってそれぞれ低くなる。埋土はおおむね3層に分かれ、下層は明黄褐色土、中層は浅黄色ないしにぶい黄褐色土、上層は黒褐色ないし灰黄褐色土である。おもに上層から遺物が出土した。遺物の出土状況は北辺から北西角にかけて、瓦類を中心とする遺物が出土した。これに対して北西角よりも南側では、長さ6.6mにわたって溝内から大量の瓦類が出土した(第12図)。瓦類の出土総量は388.4kgで、その大半は後述する平瓦H-A1類である(第58図32~第61図40)。区画溝で大量に遺物が出土したのはこの地点のみであることから、周辺で使用された建物あるいは施設に使われた平瓦を廃棄したものと考えられる。

S D090-3はS D090-2のすぐ南側で検出した。両者の間は境界溝によって削平されていたが、本来はつながっていたものと考えられる。また、やや蛇行気味で溝幅が一定しない。南端を土坑S K415によって切られている。検出長3.2m、幅0.5~1.0m、深さ0.1~0.15mである。溝底の標高は46.6m前後である。遺物はほとんど出土しなかった。

S D090-4はS D090-3の南側約4mで検出した。検出長4.6m、幅1.0~1.5m、深さ0.15mである。溝底の標高は46.6~46.7mで、遺物として土師器片が少量出土したにすぎない。

S D090-5はS D090-4の南側約4mで検出した。両

者の間は境界溝によって削平されていた。また、南端は土坑SK433に切られている。検出長3.9m、幅0.65～1.1m、深さ0.15m前後である。溝底の標高は46.6m前後である。遺物として瓦類、土師器などの小破片が出土した。

SD090-6はSD001-5の南側約2.5mで検出した。検出長7.5m、幅1.4m前後、深さ0.3m前後である。溝底の標高は46.7～46.8mで、北から南へ向かって緩やかに低くなる。遺物としては土師器などの破片が出土した。なお、SD090-6の南端を調査地内では確認していないが、ここから南約4mに設けた東西方向の確認トレンチではSD090の延長部を確認することはできなかった。現地形も南に向かって大きく下がることから、SD090・100はともにこれ以上南へは延びないと判断した。

SD090は、出土遺物や土坑SK415・433との重複関係から、第I期に掘削され、第III期までに埋没したものと考える。

SD100はSD090の西側にはほぼ平行するもので、SD090と同様、攪乱等によって途切れている。SD100はSD001に対応する外側の区画溝と考えられるが、SD090の北辺に平行して西に折れるのではなく、そのまま北へ延びる。このことから、SD100とSD001は直接につながらない可能性もある。SD090とSD100の幅は溝の心々間で3.2～3.9mを測る。SD100は第3次調査の溝SD365に当たる。SD100は、その状況から北端から南に向かって-1、-2、-3、-4と細分して記述する(第7図)。

SD100-1はSD090-2の西側で検出した。攪乱等が著しく、断続的に検出しているにすぎない。この溝の一部は第3次調査の際に確認されている(01-7区)。検出長15.1m、幅1.2～1.6m、深さ0.1～0.2mである。溝底の標高は46.4～46.6mで、北へ向かって緩やかに低くなる。埋土は2ないし3層に分かれ、上層は黄褐色砂質土、下層はにぶい黄褐色砂質土で、最下層は認められないところもあるが、浅黄色砂質土である。遺物として丸瓦・平瓦、土師器・須恵器などが出土したものの、量的に少なく、小破片が多い。

SD100-2はSD100-1のすぐ南側で検出した。両者の間は境界溝によって削平されていたが、本来はつながっていたものと考えられる。検出長4.5m、幅0.8～1.6m、深さ0.3m前後である。溝底の標高は46.6m前後である。遺物として平瓦や土師器の破片が少量出土したにすぎない。

SD100-3はSD100-2の南側約2mで検出した。検出長6.6m、幅1.7m前後、深さ0.1～0.15m、溝底の標高は46.7m前後である。遺物として軒丸瓦Ⅱa型式1点(第55図1)のほか、平瓦H-A類、土師器、須恵器などが出土した(第75図113)。

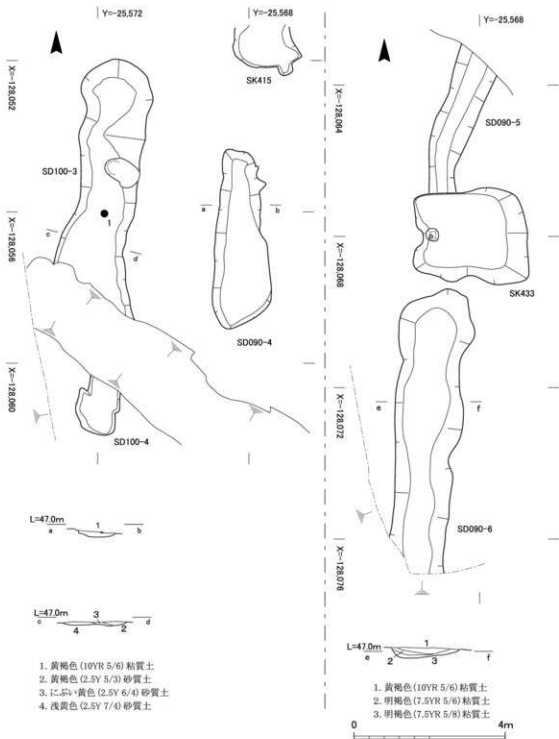
SD100-4は、SD100-3の南側約2mで検出した。両者の間は境界溝によって削平されていたが、本来はつながっていたものと考えられる。検出長1.5m、幅1.1m、深さ0.05m、溝底の標高は46.6mである。出土遺物はなかった。SD090-3とSD090-4の間は約4m、SD100-2とSD100-3の間は約1.8m、それぞれ溝の掘削されていない範囲がある。SD090-3の南端には土坑SK415があるものの、SD090よりも新しいと考えられることから、この溝の途切れる部分は、寺城内への出入り口である可能性もある。

S D100は、出土遺物などから、第1期に掘削され、第Ⅲ期までに埋没したものとする。

(筒井崇史)

(2)北東部

V地区22列よりも東側の範囲で、おもに区画溝S D001の北東角周辺とその北東側に当たる。ここでは、掘立柱建物2棟、掘立柱塼2条、土坑2基、柱穴50基以上などを検出した(第14図)。

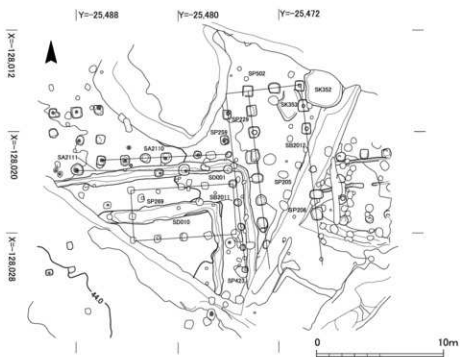


第13図 区画溝S D090.5・6、S D100.3・4実測図(1/100)

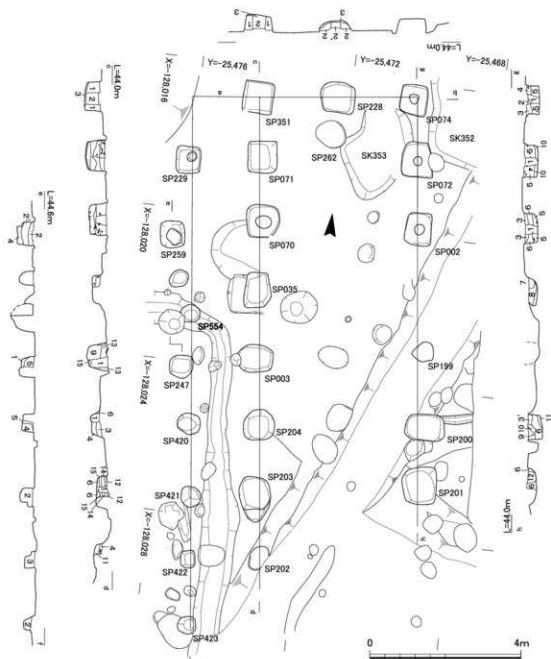
北東部で検出した遺構群は、第6次調査地の北部で検出された掘立柱建物や溝と一連のものと考えられる。

掘立柱建物S B2012(第15図) 調査地北東部から第6次調査地にかけて検出した(V・e18・19、f18・19、g18・19、h18・19区)。第4・5次調査の掘立柱建物S B460、第6次調査の掘立柱建物S B035に当たる。調査の結果、西側に廂が付く建物と推定するに至った。身舎は、桁行6間以上(10.7m以上)、梁行2間(3.8m)の南北棟の建物である。柱間寸法は桁行が1.6~1.8m、梁行が約2.1mである。南側梁行の妻柱を確認しておらず、桁行7間目以南は削平されたものとする。柱穴掘形は一辺約0.6mの隅丸方形を呈する。掘形埋土は、少量の遺物を含む黄褐色粘質土、焼土や炭を含むにぶい赤褐色粘質土、焼土片を含む褐色粘質土、炭や土器片を多く含む暗褐色粘質土などである。柱穴S P003・074・203・204の柱痕埋土は、炭や土器片を含む暗褐色粘質土である。柱穴S P002・072の柱痕埋土は、炭や土器片を含むにぶい黄褐色粘質土である。建物の方位は北に対して7°西に振る。建物に伴う遺物として各柱穴から丸瓦や平瓦の破片、土師器杯A・杯C・皿A・甕・高杯、須恵器杯A・杯B蓋、灯火器、製塩土器、鉄釘、鉄滓などが多数出土した(第62図41~44、第76図121~第77図180、第91図430・431・435)。

柱穴S P229から柱穴S P423までのほぼ南北一直線に並ぶ柱穴列は、S B2012の西側柱列とはほぼ平行することからS B2012に伴う廂と判断した。ただ、北側の柱穴S P247・259・554は、S B2012の西側柱列と対応せず、また廂の北端の柱穴も未確認であるなど、検討の余地がある。廂の柱間寸法は約1.8mである。柱穴S P420・421は径0.6mの円形、S P422は長辺0.3m、短辺0.2mの長方形を呈する。掘形埋土は、にぶい黄褐色粘質土ないし暗褐色土が混じる橙色粘質土である。柱痕は柱穴S P259のみ確認した。廂に伴う遺物として各柱穴から土師器や須恵器の小片な



第14図 北東部全体図(1/300)



＜SB2012 東西側柱列＞

1. 暗褐色(10YR 3/4)粘質土(炭・土器片を含む)
2. 褐色(7.5YR 4/6)粘質土
3. にぶい黄褐色(10YR 4/4)粘質土(炭・土器片を含む)
4. にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘質土(炭・土器片を含む)
5. 黒褐色(10YR3/2)粘質土
(炭・土器片を多く含む、小礫を少し含む)
6. 暗褐色(10YR 3/3)粘質土(炭・土器片を多く含む、小礫混じり)
7. 明黄褐色(7.5YR 5/6)粘質土 黒灰色土をすじ状に含む
8. 明黄褐色(7.5YR 5/8)粘質土 地山の再堆積土と推定
9. 褐色(10YR 4/6)粘質土(遺物を含む)小礫を少し含む
10. 明黄褐色(7.5YR 5/8)粗砂(小礫混じり粘質土)
11. 4に10が混じる
12. 黄褐色(10YR 5/8)粘質土(遺物を少し含む)
13. 褐色(10YR 4/4)粘質土(土器を多く含む)
14. にぶい赤褐色(5YR 4/4)粘質土(焼土片、炭を含む)

＜SB2012 北側柱列＞

1. 黒褐色(10YR 3/2)粘質土
(土器片と焼土片を多く含む、小礫を少し含む)
2. 暗褐色(10YR 3/4)粘質土(炭、土器片を含む、小礫を少し含む)
2'、土器片は含まない
3. 明褐色(7.5YR 5/8)粘質土(炭を含む)

＜SB2012 南＞

1. 明黄褐色(10YR 6/8)粘質土
2. 褐色(7.5YR 6/8)粘質土に暗褐色(10YR 3/4)土が混じる
2'、土器片が混じる
3. にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘質土
4. 明黄褐色(10YR 6/8)粘質土に黄褐色(10YR 5/8)土が混じる
5. 褐色(10YR 4/4)粘質土

第15図 掘立柱建物S B 2012実測図(1/100)

どが出土した。

S B 2012は、出土遺物などから第Ⅱ-1期に位置づけられる。

掘立柱建物 S B 2011 (第16図) 区画溝 S D010に重複して検出した(V-g19~21、h20~21区)。桁行4間(8.1m)、梁行2間(4m)の東西棟の建物である。柱間寸法は桁行が2.0~2.2m、梁行が2.0mである。柱穴掘形は一辺約0.4mの歪な正方形で、掘形埋土は灰黄褐色粘質土や褐色粘質土などである。柱穴 S P 095・196・197では径約0.2mの柱痕を確認した。柱痕埋土は暗褐色粘質土である。また、検出状況から S B 2011は S D 010の廃絶後に建てられたものである。建物の方位は北に対して4°西に振る。遺物は各柱穴から須恵器片や土師器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、建物の構造などから第Ⅲ-1期に位置づけられる可能性が高い。

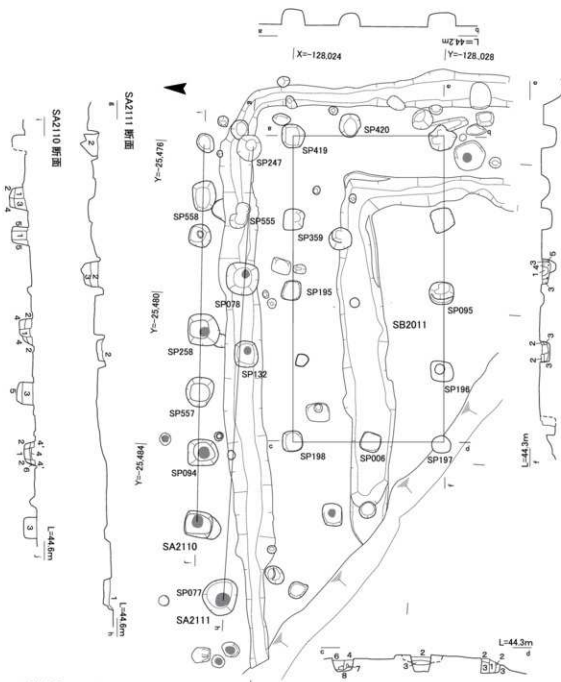
掘立柱塼 S A 2110 (第16図) 区画溝 S D001の北側に接して検出した(V-f19~22区)。7基の柱穴からなる東西方向の掘立柱塼である。上記の掘立柱建物 S B 2011とおおむね平行する。検出長は10mで、柱間寸法は柱穴 S P 077から柱穴 S P 258までの4基は1.8m、柱穴 S P 258と柱穴 S P 558の柱間寸法は3.6mである。柱穴掘形は S P 077が一辺約0.6mの隅丸方形で、それ以外の柱穴は長軸0.7m前後の楕円形である。S P 077・094・258では直径約0.3~0.5mの柱痕を確認した。掘形埋土は、褐色土が混じる黄褐色粘質土や土器片を含む暗褐色土が混じる橙色粘質土、暗褐色粘質土などである。柱痕埋土は、褐色土が混じる明褐色粘質土である。塼の方位は北に対し25°西に振る。遺物として各柱穴から土師器や須恵器の小片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、S B 2011とほぼ平行することから第Ⅲ-1期に位置づけられる可能性がある。

掘立柱塼 S A 2111 (第16図) 区画溝 S D001と重複して検出した(V-f19~23区)。5基以上の柱穴からなる東西方向の掘立柱塼である。検出長は12mで、柱間寸法は2.0~6.8mとばらつきがあることから、柱間の広いところには未確認の柱穴が存在した可能性が高い。柱穴掘形は長辺約0.7~1.0mの円形である。掘形埋土は、炭と土器片を含む暗褐色土が混じる黄褐色粘質土、にぶい黄褐色土が混じる褐色粘質土、土器片を含む黒褐色土が混じる橙色粘土などである。塼の方位は東西方向である。切り合い関係から S D001の廃絶後に造られたものであるが、掘立柱建物 S B 2011や掘立柱塼 S A 2110との前後関係については不明である。遺物として各柱穴から平瓦や土師器、須恵器の破片などが出土した。S D001よりも新しいことから第Ⅱ-1期以降に位置づけられる。

(山崎美輪・筒井崇史)

土坑 S K 352 (第17図) 掘立柱建物 S B 2012の北東側には接して検出した(V-d17・18、e17・18区)。平面形は、やや不整形な隅丸形状を呈し、北辺から北東部にかけては現在の里道により削平されている。長軸2.9m以上、短軸2.8m、深さ0.2mである。埋土は炭を含む褐色粘質土の単一層で、遺物として土師器杯A・杯B・皿A・椀・甕・鍋・灯火器、須恵器杯A・杯B・同蓋・甕などが多数出土した(第78図181~第79図217)。掘立柱建物 S B 2012と重複関係にあるが、出土した土器から大きな時期差を認めることはできず、第Ⅱ-1期に位置づけられる。

土坑 S K 353 (第15図) 土坑 S K 352の南西側に検出した(V-e18区)。掘立柱建物 S B 2012(柱



＜掘立柱塼SA2110＞

1. 明褐色(7.5YR 5/8)に褐色(10YR 4/6)が混じる粘質土
2. 黄褐色(10YR 5/8)に褐色(10YR 4/6)が混じる粘質土
3. 橙色(7.5YR 6/8)に暗褐色(10YR 3/4)が混じる粘質土(土器片を含む)
4. 暗褐色(ちよっと明るい)粘質土
- 4'. 暗褐色(10YR 3/4)粘質土
5. 黄褐色(10YR 5/8)粘質土
6. 橙色(7.5YR 6/8)粘質土

＜掘立柱塼SA2111＞

1. 黄褐色(10YR 5/8)をベースに暗褐色(10YR 3/3)が混じる粘質土(炭の粒と土器片を含む)
2. 褐色(10YR 4/6)をベースににぶい黄褐色(10YR 4/3)が混じる粘質土
3. 橙色(7.5YR 6/8)をベースに黒褐色(10YR 2/2)が混じる粘土(土器片を含む)

＜掘立柱建物SB2011＞

1. 暗褐色(10YR 3/3)粘質土(細砂混じり)
2. 灰黄褐色(10YR 5/2)
3. 褐色(10YR 4/4)粘質土(細砂混じり)
4. にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘質土
5. 褐色(7.5YR 4/6)粘質土(粒砂、小礫混じり)
6. 褐色(10YR 4/4)粘質土に黄褐色(10YR 5/8)土の小ブロック混じる
7. 4に8が混じる
8. 明褐色(7.5YR 5/6)粘質土(4が混じる)

第16図 掘立柱建物SB2011、掘立柱塼SA2110・2111実測図(1/100)

穴S P072など)や柱穴S P262と重複し、S K353の方が古い。不整形な形状を呈し、北辺は不明瞭である。長軸2.5m、短軸1.9m、深さ0.1mである。埋土は褐色粘質土の単一層で、遺物として土師器甕(第80図218)や須恵器片のほか、鉄製品の破片などが少量出土した。詳細な時期は不明であるが、第1期ないし第Ⅱ-1期に位置づけられると考える。

(筒井崇史)

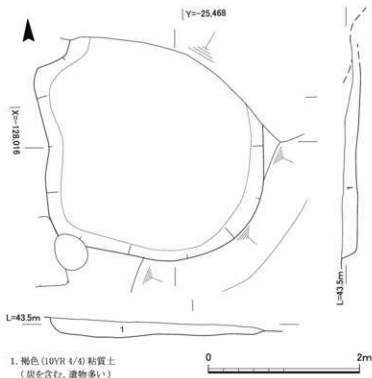
(3)北部

V・Ⅷ両地区のj列よりも北側で、V地区22列よりも西側、Ⅷ地区10列よりも東側の範囲で

ある。区画溝S D001・010の北側と南側に遺構群が広がる。ここでは、掘立柱建物8棟、掘立柱塀3条、土坑2基、柱穴約70基などを検出した(第18図)。北部で検出した遺構群は、総柱建物や2間四方の小規模な建物が多くみられる。

総柱建物S B2013(第19図) 調査地の最北端部で検出した(V・c22~24、d22~24区)。東西3間(5.0m)、南北2間(3.6m)の総柱建物である。柱間寸法は東西方向1.5~2.0m、南北方向1.7~1.9mである。柱穴掘形は一辺0.5~0.7mの正方形で、柱穴S P110~115・252では直径0.3~0.4mの柱痕を確認した。掘形埋土は、明黄褐色砂質土やにぶい黄褐色砂質土などである。柱痕埋土は、柱穴S P110・111・115が明黄褐色砂質土、柱穴S P113は褐色砂質土、柱穴S P114・115は黒褐色粘質土である。建物の方位は北に対して2°東へ振る。遺物として、各柱穴から瓦片や土師器片、須恵器片などが出土した。出土遺物に瓦類をほとんど含まない点から第1期に位置づけられると考える。

掘立柱建物S B2014(第20図) 総柱建物S B2013の南側5.2mで検出した(V・e22~24・f22区)。桁行5間以上(8.8m以上)、梁行2間以上(4m以上)の東西棟の建物である。南側の桁行の柱列、東側の梁行2個目以南の柱穴と西側の梁行の柱穴列は攪乱のため検出できなかった。桁行の柱間寸法は1.6~1.7mである。梁行の柱間寸法は2.0~2.4mである。柱穴掘形は一辺約0.6~0.7mの正方形である。掘形埋土は、炭が混じる褐色粘質土、明褐色粘質土、明黄褐色粘質土などである。柱穴S P118~120・253では径約0.2~0.4mの柱痕を確認した。柱痕の埋土は褐色粘質土である。建物の方位は北に対して4.5°西に振る。遺物として、各柱穴から土師器片や須恵器杯A・杯B蓋などの破片、平瓦片などが出土した(第62図45~48、第80図219~223)。出土遺物や建物の構造な

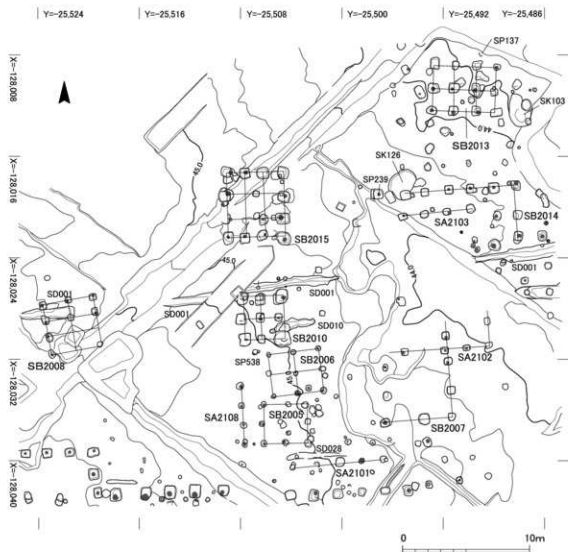


第17図 土坑S K352実測図(1/50)

どから第Ⅱ-2期ないし第Ⅲ-1期に位置づけられると考える。

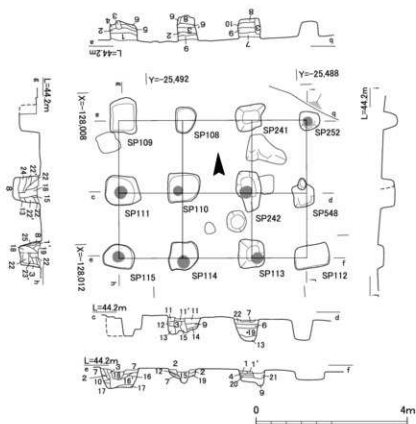
掘立柱塼 S A 2103 (第20図) 掘立柱建物 S B 2014 と重複して検出した (V - e23・24区)。4基の柱穴が東西方向に並ぶ。検出長は5.2mで、柱間寸法は1.2mである。柱穴掘形は、おおむね長辺0.5m、短辺0.4mの長方形を呈するが、柱穴 S P 123のみは歪な形状を呈する。掘形埋土は、褐色砂質土、褐色土が混じる橙色砂質土、明褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土などである。柱穴 S P 124・503では直径0.2mの柱痕を確認した。柱痕埋土は、橙色砂質土である。塼の方位は北に対して6°西に振る。遺物としては柱穴 S P 125から土師器小片が出土したのみである。S A 2103と S B 2014の柱穴は切り合っていないため、その前後関係は不明である。したがって詳細な時期は断定できなかった。

総柱建物 S B 2015 (第21図) 調査地北部から第8次調査地にかけて検出した (Ⅷ - e2・3、22・3区)。また、S B 2015の下層には弥生時代の竪穴建物 S H 3001を検出した。これらの遺構は、第8次調査地にまたがるため、八幡市教育委員会と調整の上、S B 2015については当調査研究セ



第18図 北部全体図 (1/300)

ンターが、S H3001については八幡市教育委員会が報告することとした(第8次調査としての遺構番号は竪穴住居跡SH4である)。S B2015は、一部の柱穴が境界溝による削平のため検出できなかったが、東西3間(4.2m)、南北3間(5.1m)の総柱建物と推定される。柱間寸法は、東西方向が1.3~1.8m、南北方向が1.2~1.7mと、ややまばらである。柱穴掘形は一辺0.7~1.2mの正方形ないし歪な方形を呈する。掘形埋土は黒褐色土が混じる明褐色粘質土、黒褐色粘質土、赤褐色粘質土、赤褐色ないし灰色の粘土ブロックがまだらに混じる明褐色粘土などである。柱穴S P 350・366・371・372で直径0.4~0.5m、柱穴S P 361・363・364では直径0.2mの柱痕を確認した。柱痕埋土は灰黄褐色粘土、灰褐色が混じる褐灰色粘土などである。建物の方位は北に対して15°



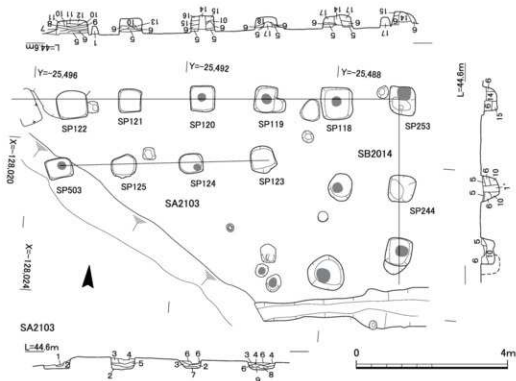
1. 明黄褐色(10YR 6/8) 砂質土
- 1'. 1より少し暗い
2. 褐色(10YR 4/6) 砂質土
3. 暗褐色(10YR 3/4) 粘質土(砂を多く含む)
4. 明褐色(7.5YR 5/6) 粘質土(砂を多く含む)
5. 明褐色(7.5YR 5/8) 砂質土
6. 褐色(10YR 4/6) 粘質土(砂を含む)
- 6'. 6より少し暗め(細砂を含む、オリーブ灰色(7.5YR 5/3) 粘質土のブロックを含む)
7. 褐色(10YR 4/6) 砂質土
8. 暗褐色(10YR 3/3) 粘質土(粗砂を含む)
9. 黄褐色(10YR 5/6) 粘質土(粗砂を含む)
10. 暗褐色(10YR 4/6) 粘質土(砂を多く含む)
11. オリーブ褐色(2.5YR 4/3) 砂質土
- 11'. 11より少し明るい
12. にぶい黄褐色(10YR 4/3) 砂質土
13. 暗褐色(7.5YR 3/4) 粘質土
14. 黄褐色(10YR 5/8) 砂質土(0.2cm程度の小石を含む)
15. 黒褐色(10YR 2/3) 粘質土(細砂を含む、6と同じブロックを含む)
16. 暗褐色(10YR 3/4) 砂質土
- 16'. 16より少し暗め(粗、0.3cm程度の小石を含む)
17. 褐色(7.5YR 4/6) 粘土
18. 黒褐色(10YR 3/1) 砂質土
19. 褐色(10YR 4/6) 砂質土(0.5cm程度の小石を含む)
20. にぶい黄褐色(10YR 4/3) 砂質土(6'と同じブロックを含む)
21. にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘土
- (やや暗く、粒は細かい、6'と同じブロックを含む)
22. 明褐色(7.5YR 5/6) 粘質土に黒褐色(10YR 2/3) 土が混じる
- (細砂を多く含む、6'と同じブロックを含む)
- 22'. 6'のブロックを含まない
23. オリーブ褐色(2.5YR 4/3) 砂質土
24. 明褐色(7.5YR 5/6) 土と黒褐色(10YR 2/3) 土が混じる
- (粗砂、6'と同じブロックも含む)
25. 明褐色(7.5YR 5/6) 砂質土

第19図 総柱建物S B2013実測図(1/100)

西に振る。SB2015の柱穴は、他の建物の柱穴と異なり、埋土に青灰白色の粘土ブロックが混入するのが特徴である。また、すべての柱穴においてではないが、大きい柱穴が小さい柱穴に切られているものがあり、建て替えの可能性もある。柱穴SP350・365・367・371では柱痕に瓦類が落ち込んでいた。遺物として、各柱穴から平瓦片や土師器片、須恵器片などが出土した(第63図49～54、第80図224・225)。柱穴SP365の柱痕から須恵器硯の破片が出土した点は注意される(224)。出土遺物などから第Ⅱ-2期に位置づけられる。

なお、SB2015と後述する総柱建物SB2010A・B、あるいは第8次調査で検出した掘立柱建物SB2は、建物の東辺がほぼ一直線となるように建てられている。

総柱建物SB2010(第22図) 総柱建物SB2015の南側で検出した(Ⅶ-g2・3、h2・3区)。第4次調査で2種の重複が確認された建物に当たる。今回の調査では、古い方をSB2010A(第4次



<掘立柱建物SB2014>

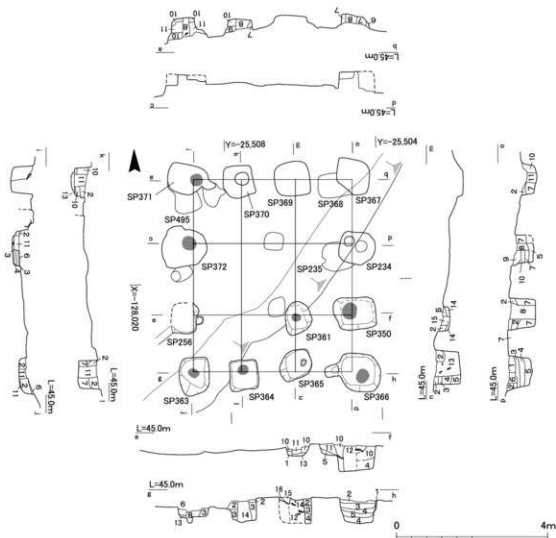
1. 褐色(10YR 4/6) 砂質土
1'. 1より締まる
5. 褐色(10YR 4/6) 粘質土(炭混じる)
6. 明褐色(7.5YR 5/6) 粘質土(5がブロックで混じる)
7. オリーブ褐色(2.5YR 4/4) 粘質土(炭混じる)
8. にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘質土
9. 褐色(10YR 4/4) 粘質土
(明黄褐色(10YR 6/6) 粘質土ブロック混じる)
10. 褐色(10YR 4/6) 粘質土
(黄褐色(10YR 5/8) 土ブロック多く混じる)
11. 褐色(10YR 4/6) 粘質土
(黄褐色(10YR 5/8) 土ブロック少し混じる)
13. 褐色(10YR 4/6) 粘質土(6のブロックが混じる)
14. 褐色(7.5YR 4/3) 粘質土
15. 明黄褐色(7.5YR 5/6) 粘質土

16. オリーブ褐色(2.5YR 4/6) 粘質土
17. にぶい黄褐色(10YR 5/3) 粘質土
18. にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘質土(炭混じる)

<掘立柱建物SA2103>

1. 橙色(7.5YR 6/8) 砂質土
(粗砂・炭まじり、0.5～1cm程度の小石を含む。)
2. 褐色(10YR 4/6) 砂質土
3. 橙色(7.5YR 6/8) をベースに褐色(10YR 4/4) が混じる粘質土
(細砂、1cm程度の小石も含む)
4. 褐色(10YR 4/4) 砂質土
5. 明褐色(7.5YR 4/6) 粘質土(粗砂を多く含む)
6. にぶい橙色(7.5YR 6/4) 砂質土(中粒砂)
7. 褐色(10YR 4/6) 粘質土(細砂を含む)
8. にぶい黄褐色(10YR 5/4) 砂質土(粗砂、小礫混じり)
9. 褐色(10YR 4/6) 砂質土

第20図 掘立柱建物SB2014、掘立柱塼SA2103実測図(1/100)



＜東西方向＞

1. 褐色(10YR 4/4)粘土(粗砂を少量含む)
2. 黄褐色(10YR 5/8)粘質土に黒褐色(10YR 3/2)土が混じる(細砂を含む)
3. 黒褐色(7.5YR 5/8)粘土に黒褐色(10YR 3/2)土が混じる粘土
4. 黒褐色(10YR 3/2)粘土
5. 赤褐色(5YR 4/8)粘土
6. 暗褐色(7.5YR 3/4)粘質土(粗砂を含む)
7. 明赤褐色(5YR 5/8)粘質土に黒褐色(10YR 3/2)土が混じる(細砂を含む)
8. 灰黄褐色(10YR 4/2)粘土
9. 灰色(10Y 5/1)粘質土と暗褐色(7.5YR 3/4)粘質土の互層(細砂を含む)
10. 赤褐色(5YR 4/8)粘質土に9がまだらに混じる(細砂を含む)
11. 暗褐色(7.5YR 3/4)粘質土に灰色(10Y 5/1)土がブロック状に混じる(粗砂を含む)
12. 灰色(10Y 5/1)粘土
13. 明褐色(7.5YR 5/8)粘質土(粗砂を含む)
14. 明黄褐色(10YR 6/8)粘質土に暗褐色(7.5YR 3/4)が混じる(細砂を含む)
15. 明赤褐色(5YR 5/8)粘質土に褐色(7.5YR 4/4)が混じる(粗砂を含む)

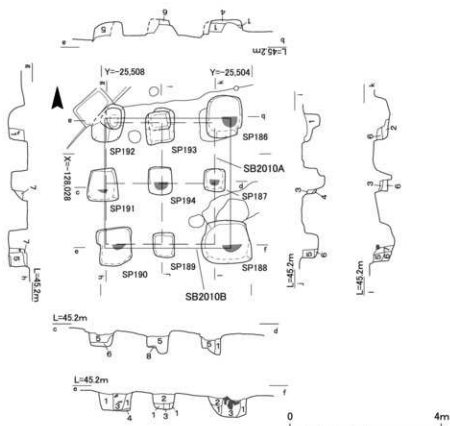
＜南北方向＞

1. ぶい黄褐色(10YR 5/4)粘質土(粗砂を含む)
2. 明褐色(7.5YR 5/8)粘土に黒褐色(10YR 5/1)土が混じる
3. 黒褐色(10YR 3/2)粘土
4. 赤褐色(5YR 4/8)粘土
5. 暗褐色(10YR 3/4)粘質土(細砂を含む)
6. 明褐色(7.5YR 5/8)粘土
7. 赤褐色(5YR 4/8)粘質土に灰色(10Y 5/1)土と暗褐色(7.5YR 3/4)土がまだらに混じる(極細砂を含む)
8. 暗灰色(10YR 5/1)粘土と暗褐色(7.5YR 3/4)粘土が混じる
9. 7がそれぞれ交互に主状になる粘質土(砂を多く含む)
10. 暗褐色(10YR 3/4)粘質土に赤褐色(5YR 4/8)土と灰色(10Y 5/1)がまだらに混じる(砂を含む)
11. 灰黄褐色(10YR 4/2)粘土
12. 明褐色(7.5YR 5/8)粘土
13. 明黄褐色(10YR 6/8)粘質土に褐色(7.5YR 4/4)土が混じる(灰色(10Y 5/1)土の大きいブロックが混じる)
14. 明褐色(7.5YR 5/8)粘質土(粗砂を含む)
15. 明褐色(10YR 6/8)土に暗褐色(7.5YR 3/4)が混じる
16. 橙色(5YR 6/8)粘土(地山)

第21図 総柱建物 S B 2015実測図(1/100)

調査の掘立柱建物S B411)、新しい方をS B2010B(第4次調査の掘立柱建物S B401)とした。S B2010Aは東西2間(2.9m)、南北2間(3.2m)の総柱建物である。柱間寸法は東西方向約1.4m、南北方向約1.6mである。柱穴掘形は、一辺0.55~0.85mの正方形ないし長方形を呈する。掘形埋土は、褐色土が混じる橙色粘質土や明赤褐色粘質土などである。直径約0.2~0.4mの柱痕を確認した。柱痕埋土は褐色粘土である。建物の方は南北である。遺物は柱穴S P187から土師器小片や平瓦片が出土した。

S B2010Bは東西1間(3.3m)、南北1間(3.4m)の建物である。柱穴掘形は一辺1.4~1.0mと、やや大型である。建物の方位は北に対して2°西に振る。柱穴S P188・190の柱痕では多くの平瓦が落ち込んだような状態で出土した。今回の調査で出土した遺物としては、須恵器片や土師器小片、丸瓦・平瓦の破片などがある。第4次調査では門の可能性が指摘されたが、今回の調査で



南北方向断面

1. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 3/4) 土がしま状に混じる (粗砂を多く含み、0.5~1cmの小石を含む)
2. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘土 (粘り気強い)
3. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 3/4) 土がしま状に混じる (粗砂を多く含み、0.5~1cmの小石を含む)
4. 橙色 (5YR 6/8) 粘土
5. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土に灰黄褐色 (10YR 4/2) 土が混ざる (灰色 (10YR 7/2) 粘土ブロックを含む)
6. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土に褐色 (10YR 4/4) 土が混じる
7. 褐色 (10YR 4/4) 粘土

東西方向断面

1. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土に褐色 (10YR 4/4) 土が混じる
2. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土に灰黄褐色 (10YR 4/2) 土が混じる
灰白色 (10YR 7/2) 粘土ブロックを含む
3. 褐色 (10YR 4/4) 粘土
4. 橙色 (5YR 6/8) 粘土
5. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 3/4) 土がしま状に混じる (粗砂を多く含み、0.5~1.5cmの小石を含む)
6. 明赤褐色 (2.5YR 5/8) 粘土

第22図 総柱建物S B2010実測図(1/100)

はS B2010を倉庫群を構成する総柱建物の1つと判断するに至った。

第4次調査によれば、S B2010A(S B411)は区画溝S D001(溝S D105)と同時期とされており、S D001とS B2010Aの廃絶後にS B2010B(S B401)が建てられたことになる。出土遺物や区画溝S D001との切り合い関係から、S B2010Aは第I期ないし第II-1期に、S B2010Bは第II-1ないし第II-2期に位置づけられる。

総柱建物S B2006(第23図) 総柱建物S B2010の南側で検出した(Ⅷ-h1・2、il・2区)。東西2間(4.0m)、南北2間(3.3m)の総柱建物である。柱間寸法は東西方向1.6m、南北方向2.0mである。柱穴掘形は直径0.4~0.5mの円形で、柱穴S P298・299・301・303で直径約0.2mの柱痕を確認した。掘形埋土は、灰オリーブ色土が混じる橙色砂質土、黄褐色粘質土、暗褐色粘質土などである。柱痕の埋土は、柱穴S P298・299が灰オリーブ色土が混じる橙色粘質土、柱穴S P301・303が黄褐色砂質土である。建物の方位は北に対して7°西に振る。柱穴から出土遺物はなく、時期は不明である。

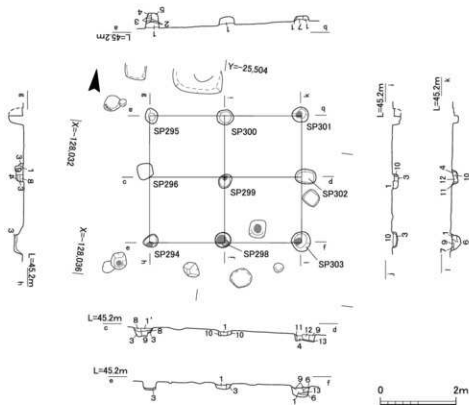
掘立柱建物S B2005(第24図) 総柱建物S B2006の南側に接して検出した(Ⅷ-il・2、jl・2区)。東西2間(3.3m)、南北2間(3.0m)の掘立柱建物である。柱間寸法は東西方向1.8m、南北方向1.6mである。柱穴掘形は直径約0.4~0.5mの円形である。掘形埋土は、暗オリーブ褐色砂質土、明黄褐色粘質土、褐色粘質土などである。また、柱穴S P011・017・019で直径約0.2mの柱痕を確認した。柱痕埋土は、柱穴S P017・019が明緑灰色粘土のブロックが混じる明橙色砂質土、柱穴S P011が暗褐色砂質土である。建物の方位は北に対して15°西に振る。遺物としては、各柱穴から平瓦片や土師器小片などが少量出土したのみである。出土遺物などから第II-1期ないし第II-2期に位置づけられると考える。

掘立柱塼S A2108(第24図) 掘立柱建物S B2005の西側で検出した(Ⅷ-i2・3、j2区)。4基の柱穴が南北方向に並ぶ掘立柱塼である。検出長は4.5m、柱間寸法は1.5~1.6mである。柱掘形は直径約0.5mの歪な円形もしくは隅丸方形を呈する。掘形埋土は、暗オリーブ褐色砂質土、暗褐色土が混じる橙色粘質土、明黄褐色砂質土などである。柱穴S P012・016・020では直径約0.2mの柱痕を確認した。柱痕埋土は暗褐色粘質土などである。塼の方位は北に対して3°西に振る。遺物としては、柱穴S P154から瓦類や土師器、須恵器などの小破片が出土したのみである。詳しい時期は断定できないが、第II期に位置づけられる可能性がある。

掘立柱建物S B2007(第25図) 調査地中央部やや北東寄り検出した(V-h23・i23~25・j23~25区)。この付近は近・現代の攪乱を受けて大きく削平されているため、遺構の遺存状況は必ずしも良くなく、全容は不明である。検出規模は、桁行3間以上(7.0m以上)、梁行2間(5.3m)の南北棟の建物と推定される。北側は削平をうけて、桁行3間以北は検出できなかった。柱間寸法は、桁行が2.0~2.2m、梁行が2.2mと3.1mである。柱穴掘形は一辺約0.5~0.6mのやや歪な正方形である。掘形埋土は、赤褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、明褐色粘土などである。柱穴S P164・165・168で直径0.2~0.4mの柱痕を確認した。柱痕埋土は褐色砂質土である。建物の方位は北に対して西に4.5°振る。いずれの柱穴からも遺物が出土しなかったため時期は不明である。

掘立柱塼 S A 2102 (第25図) 掘立柱建物 S B 2007に一部重複するように検出した (V・h23・24)。5基の柱穴がL字状に並ぶ。掘立柱建物 S B 2007と同様に、大きく削平されているため、遺構の遺存状況は必ずしも良くなかった。東西方向の検出長は6.8m、柱間寸法は柱穴 S P 497と S P 498の間が2間分と考えれば、1.7m前後である。南北方向の検出長は2.0mである。掘形埋土は橙色砂質土または明赤褐色砂質土である。柱穴 S P 497～499では径約0.2～0.3mの柱痕を確認した。柱痕埋土は、S P 497が橙色砂質土、S P 498・499がにぶい黄褐色土である。塼の方位は北に対して4°西に振る。いずれの柱穴からも遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

総柱建物 S B 2008 (第26図) 調査地の北辺中央で検出した (VII・g5・6、h5・6区)。南北3間(4.0m)、東西2間(4.0m)の総柱建物である。南北方向の柱間寸法は1.2～1.4m、東西方向の柱間間隔は2.0m等間である。建物の一部は攪乱を受けており、柱穴3基が削平されていた。柱穴掘形は一辺約0.3～0.4mのやや歪な正方形である。掘形埋土は、黒褐色土が混じる黄褐色粘質土、橙色粘質土、褐色粘土などである。柱穴 S P 171～177では直径0.2～0.3mの柱痕を確認した。柱



1. 橙色 (5YR 6/8) 砂質土に灰オリーブ色 (5Y 5/3) 土が混じる砂質土 (2cm 程度の砂礫を含む)
(1' は1に土器片を含む)
2. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土 (粗砂を含む)
3. 黄褐色 (10YR 5/8) に暗褐色 (10YR 3/3) が混じる粘質土 (粗砂・細砂を含む)
4. 明褐色 (7.5YR 5/6) 粘質土 (細砂を少量含む)
5. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土 (粗砂を多く含む)
6. 明赤褐色 (5YR 5/8) 砂質土 (2～5cmの小石を含む)
7. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 砂質土
8. 黄褐色 (10YR 7/8) 砂質土 (土器片を含む)
9. 黄褐色 (10YR 5/8) 砂質土ににぶい黄褐色 (10YR 4/3) 土が混じる
10. 赤褐色 (5YR 4/8) 砂質土 (炭が混じる)
11. 褐色 (10YR 4/4) 砂質土
12. 黄褐色 (10YR 5/8) 砂質土
13. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土 (細砂を含む)

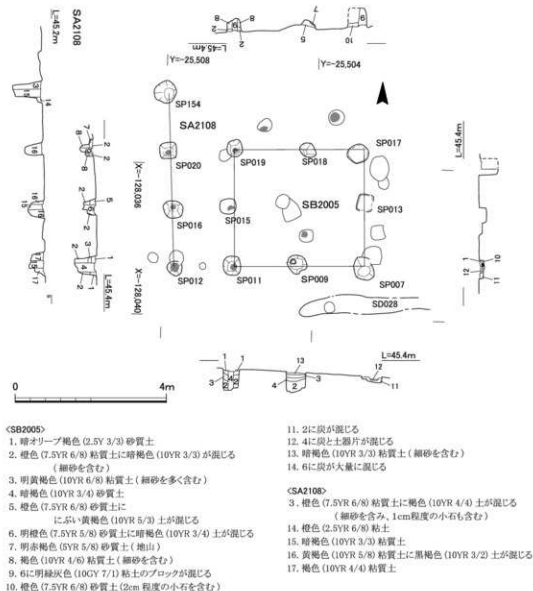
第23図 総柱建物 S B 2006実測図 (1/100)

痕埋土は、柱穴 S P 171・172、175～177が暗褐色粘質土、柱穴 S P 174がにぶい黄褐色粘質土である。S B 2008は区画溝 S D 001と切り合い関係にあり、S D 001に先行して建てられていた。建物の方位は北に対して10°西に振る。出土遺物は少なく、土師器の小片が出土した程度である。少なくとも第Ⅰ期以前に位置づけられ、美濃山廃寺に伴わない遺構の可能性もある。

(山崎美輪・筒井崇史)

土坑 S K 103(第27図左) 総柱建物 S B 2013の東側で検出した(V-d22・e22区)。南北方向に主軸をもつ楕円形を呈し、長軸2.7m、短軸1.7m、深さ0.2mである。埋土はにぶい黄褐色粘質土の単一層である。遺物として瓦類、土師器、須恵器の破片のほか、鉄滓や輪筒口などが出土した(第80図227～234、第91図427)。遺物の量は少ないが、第Ⅱ期に位置づけられる可能性が高い。

土坑 S K 126(第27図右) 掘立柱建物 S B 2014の北西隅で検出した(V-e24・e25区)。S B 2014の柱穴 S P 122と重複し、S K 126の方が古い。北東から南西方向に主軸をもつ、やや歪な楕

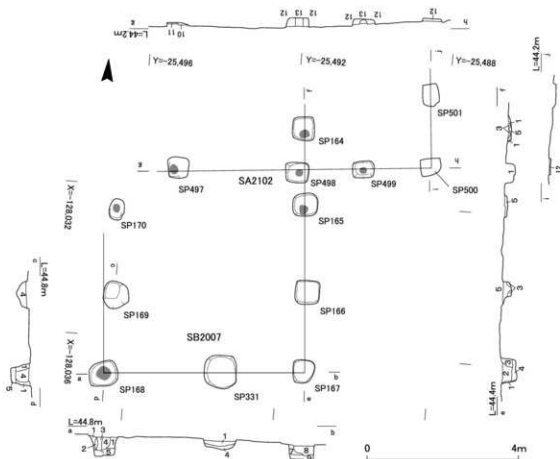


第24図 掘立柱建物 S B 2005、掘立柱塀 S A 2108実測図(1/100)

円形を呈し、長軸2.5m、短軸1.8m、深さ0.15mである。埋土は褐色粘質土の単一層である。遺物として平瓦、土師器杯・皿、須恵器杯B蓋などが出土した(第80図235~238)。遺物の量は少ないが、土坑S K103と同様に第Ⅱ期に位置づけられる可能性が高い。

溝S D028(第24図) 掘立柱建物S B2005の南側に検出した(VIII-j区)。検出長4.7m、幅0.3~0.5m、深さ0.1mである。検出状況から、掘立柱塼S A2101とともに北部の総柱建物群と中央部の大型側柱建物群を区画するための溝と考えている。遺物として瓦類や土師器、須恵器の小破片が少量出土したにすぎない。詳細な時期は不明であるが、検出状況から第Ⅱ期に位置づけられる可能性が高い。

(筒井崇史)



＜掘立柱建物SB2007 a-b, c-d 断面＞

1. 赤褐色(5YR 4/6)砂質土(2-5cmの小石を含む)
2. にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂質土
3. 褐色(7.5YR 6/8)砂質土
4. 褐色(10YR 4/6)砂質土
5. 明褐色(7.5YR 5/6)粘質土(粗砂を少量含む)
6. 明褐色(7.5YR 5/6)粘質土ににぶい黄褐色(10YR 3/4)土が混じる(砂礫混じり)
7. 褐色(5YR 6/8)砂質(砂礫混じり)
8. 明褐色(7.5YR 5/6)粘質土
9. 明褐色(7.5YR 5/6)粘土

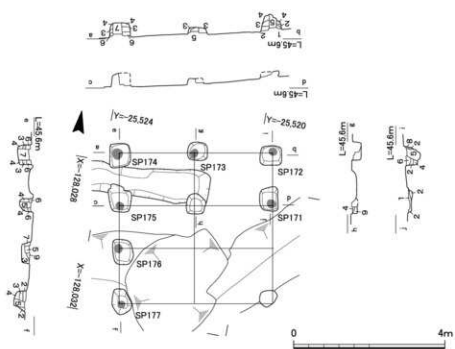
＜掘立柱建物SB2007 e-f 断面＞

1. 黄褐色(10YR 5/6)粘土(粗砂を含む)
2. 明褐色(7.5YR 5/6)粘質土(細砂を含む)
3. 褐色(5YR 6/8)砂質土(砂礫混じり)
4. 明褐色(7.5YR 5/8)粘土(細砂を含む)
5. 明褐色(7.5YR 5/6)砂質土ににぶい黄褐色(10YR 3/4)土が混じる(砂礫混じり)

＜掘立柱塼SA2102＞

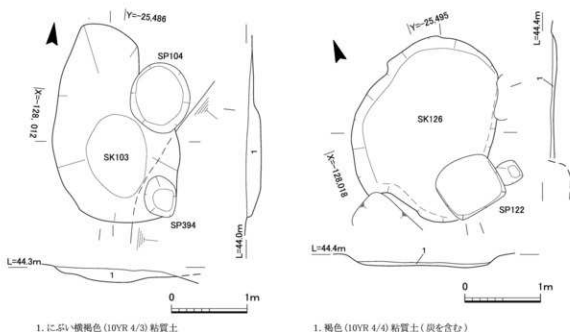
10. 褐色(7.5YR 6/8)砂質土
11. 褐色(5YR 6/8)粘質土(粗砂を含む)
12. 明赤褐色(2.5YR 5/8)砂質土
13. にぶい黄褐色(10YR 6/4)粘質土(細砂を含む)

第25図 掘立柱建物S B2007、掘立柱塼S A2102実測図(1/100)



- | | |
|------------------------------------|--|
| 1. 黒褐色(10YR 2/2) 粘質土(細砂を少量含む) | 6. 明黄褐色(10YR 6/8) 砂質土
(暗褐色(10YR 3/4) 砂質土が混じる) |
| 2. 黄褐色(10YR 5/8) 粘質土(1が混じる, 細砂を含む) | 7. にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘質土(細砂を含む) |
| 3. 橙色(7.5YR 6/6) 粘質土(細砂を含む) | 8. 黄褐色(10YR 5/8) 粘質土(細砂を含む) |
| 4. 褐色(10YR 4/6) 粘土(細砂を少量含む) | 9. 明褐色(7.5YR 5/6) 粘質土(細砂を含む) |
| 5. 暗褐色(10YR 3/3) 粘質土(粗砂を含む) | |

第26図 総柱建物 S B 2008実測図(1/100)



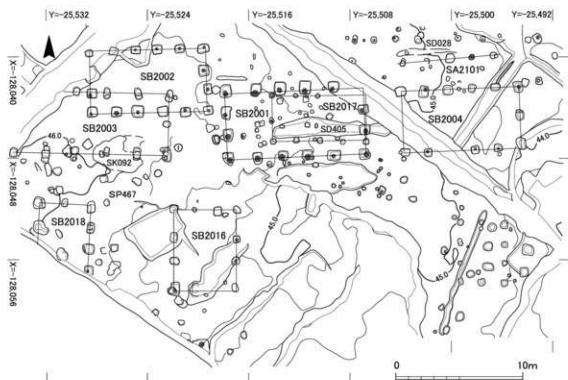
- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| 1. にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘質土 | 1. 褐色(10YR 4/4) 粘質土(炭を含む) |
|-------------------------|---------------------------|

第27図 土坑 S K103・126実測図(1/50)

(4)中央部

V・Ⅷ両地区のJ列よりも南側、Ⅷ地区10列よりも東側、調査対象地外の竹林よりも北側の範囲である。ここでは、掘立柱建物7棟、掘立柱塀1条、土坑1基、柱穴80基以上などを検出した(第28図)。北部にくらべると、桁行5間、梁行3間ないし2間の、やや大型の掘立柱建物が複数みられる。これらは後述する南部の礎石・掘立柱併用建物SB2020にくらべると一回り小さいが、美濃山廃寺において大型の建物が整然と造営される地区である。

掘立柱建物S B2001(第29図) 調査地中央部やや北寄りで検出した(Ⅷ・k2-5、12-5、m4・5区)。桁行5間(10.9m)、梁行3間(5.5m)の東西棟の建物である。北東隅の柱穴は境界溝による削平で検出できなかった。桁行の柱間寸法は、柱穴S P049と柱穴S P050の間が2.6mとやや広いものの、桁行の柱間寸法は2.0-2.2m、梁行の柱間寸法は1.7-1.9mである。柱穴掘形は長辺が0.7-1.0m、短辺が0.7mの長方形である。掘形埋土は褐色粘質土、暗褐色粘質土、明褐色砂質土、黄褐色砂質土、明赤褐色粘土などである。柱穴S P038・043・049・092で直径約0.4m、それ以外の柱穴で直径約0.6mの柱痕を確認した。柱痕埋土は、S P038-045-050は暗褐色砂質土、S P051は褐色砂質土、S P091は褐色土が混じる明褐色砂質土である。また、S P042・044-046で抜き取り痕を確認した。特にS P046は、柱を抜き取った方向に平瓦が落ち込んでいた。建物の隅に当たる柱穴掘形は深さが0.6-0.7mに対して、他の柱穴の深さが0.3-0.5mであり、隅に当たる柱穴掘形が深く掘られている。建物の方位は北に対して2°西に振る。遺物として各柱穴から土師器杯A、須恵器杯B・皿E、灯火器、丸瓦、平瓦などが出土した(第64図55-第65図62、第81図239-245)。瓦類の出土総量は32.9kgに達し、掘立柱建物からの出土量としては特に多い。



第28図 中央部全体図(1/300)

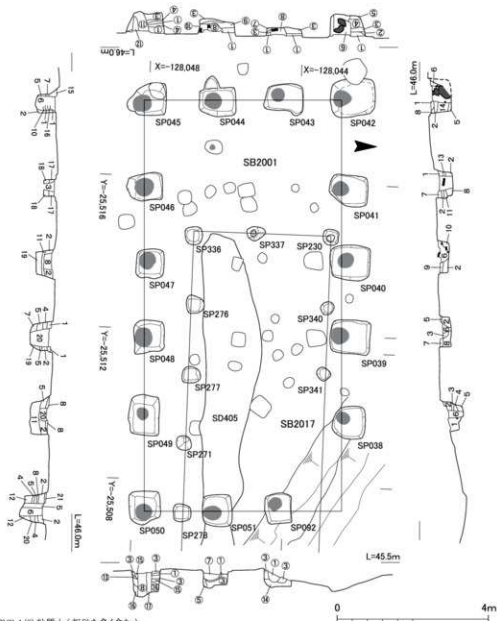
出土遺物や掘立柱建物S B2002との位置関係などから第Ⅱ-2期に位置づけられる。

掘立柱建物S B2017(第31図) 掘立柱建物S B2001とはほぼ重複して検出した(Ⅷ-k2-4、l2-4区)。桁行4間以上(7.3m)、梁行2間(3.7m)の東西棟の建物である。S B2001の建設に伴う足場穴の可能性も考えられたが、西側の妻を確認したことから、独立した建物と考える。柱穴掘形は一辺0.45m前後の隅丸方形、もしくは直径0.35m前後の円形である。掘形埋土は暗褐色粘質土、にぶい黄褐色砂質土、褐色粘質土、暗褐色粘土などである。柱穴S P336で直径0.15mの柱痕を確認した。柱痕埋土は暗褐色粘質土である。建物の方位は北に対して1°西に振る。遺物として須恵器の円面硯の破片や土師器の小片などが出土した(第81図249)。詳細な時期は不明であるが、S B2001との重複関係や建物の構造などから第Ⅲ-1期に位置づけられると考える。

掘立柱建物S B2002(第30図) 掘立柱建物S B2001の西側に接して検出した(Ⅷ-j5-8、k5-8、l5-8区)。桁行5間(9.1m)、梁行3間(4.6m)の東西棟の建物である。桁行の柱間寸法は1.8~2.0m、梁行の柱間寸法は1.6~1.8mである。柱穴掘形は一辺0.7~0.8m前後の正方形で、掘形埋土は極暗褐色砂質土である。また、柱穴S P052~055、060・061・063~066では直径0.3~0.4mの柱痕を確認した。柱痕埋土は、S P052が黒褐色粘質土、S P053・055・064~066が暗褐色粘質土、柱穴S P059~061が土師器を含む黒褐色砂質土である。西側妻の北から2間目の柱穴は境界溝による削平で検出できなかった。なお、柱穴S P062は第2次調査で柱穴S P234として調査されており、完掘の状態であった。建物の方位は北に対して2°西に振る。遺物の出土量は、ほかの建物に比べてかなり少なく、土師器や須恵器などの破片が出土したにすぎない。また、瓦類は1点も出土しなかった。遺物の出土状況などから、第Ⅰ期に位置づけられる。

掘立柱建物S B2003(第31図) 掘立柱建物S B2002と重複して検出した(Ⅷ-k6-8、l5-9区)。桁行5間以上(9.6m以上)、梁行2間(4.8m)の東西棟の建物で、S B2002と北辺柱筋が重複する。西側妻は境界溝により削平されて検出できなかった。桁行の柱間寸法は2.4~2.5m、梁行の柱間寸法は2.5m等間である。柱穴掘形は長軸0.8~1m前後の楕円形で、掘形埋土は暗褐色土が混じる橙色砂質土、褐色砂質土などである。柱痕を確認できた柱穴はない。また、柱穴S P084・085は、第2次調査でそれぞれ柱穴S P290・237として調査されたものである。建物の方位は北に対して1.5°東に振る。S B2002とS B2003の柱穴に切り合い関係はみられず、新旧関係は確定できない。遺物としては丸瓦片、平瓦片、土師器片、須恵器片などが出土した(第66図65・66、第81図246~248)。建物の方位がS B2020とおおむね一致することや、梁行が2間であることから、第Ⅲ-1期に位置づけられる。

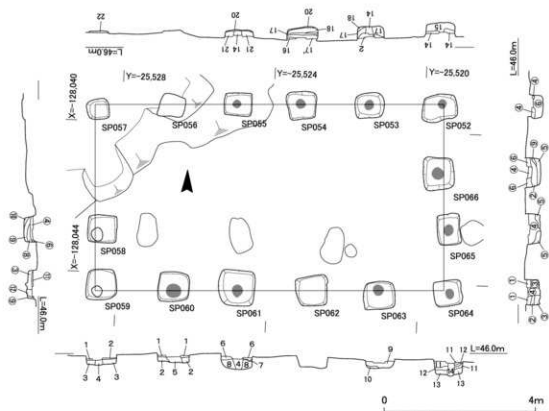
掘立柱建物S B2004(第32図) 掘立柱建物S B2001の東側に接して検出した(V-k24・25、l24・25、Ⅷ-k1・2、ll区)。桁行5間(9.2m)、梁行2間(4.5m)の東西棟の建物である。桁行の柱間寸法は1.8m、梁行の柱間寸法は2.2m等間である。柱穴掘形は柱穴S P146・147・151・362は一辺0.4~0.5mのはほぼ正方形、柱穴S P150・153・273は長辺0.6~0.8m、短辺0.5mの歪な長方形、柱穴S P274は長軸1.0mの楕円形である。掘形埋土は橙色砂質土、黄褐色粘質土、明褐色粘質土などである。四隅の柱穴S P148・149・272・274の柱穴掘形は長辺0.7m、短辺0.4mの長方形で、



1. 褐色(10YR 4/6)粘質土(粗砂を多く含む)
2. 明褐色(7.5YR 5/8)砂質土に褐色(10YR 4/4)土が混じる
3. 暗褐色(10YR 3/3)粘質土(細砂を多く含む)
4. 明褐色(7.5YR 5/8)砂質土
5. 褐色(10YR 4/6)粘土
6. 暗褐色(10YR 2/2)砂質
7. 黄褐色(10YR 5/8)砂質
8. 黄褐色(10YR 5/8)粘質土に暗褐色(10YR 2/2)土が混じる
9. 明黄褐色(10YR 6/8)砂質土
10. 暗褐色(10YR 3/4)粘質土(粗砂を少量含む)
11. 明褐色(7.5YR 5/8)砂質土
12. 暗褐色(7.5YR 3/4)粘質土
13. 黄褐色(10YR 5/8)粘質土(粗砂を含む)
14. 黄褐色(10YR 5/8)粘質土(粗砂を少量含む)
15. オリーブ褐色(2.5YR 4/6)粘質土(粗砂を含む)
16. 褐色(10YR 4/6)砂質土
17. 黄褐色(10YR 5/6)粘質土(粗砂を含む)
18. 褐色(10YR 4/6)粘質土(粗砂を含む)
19. 明褐色(7.5YR 5/8)粘質土(細砂を含む)
20. 黄褐色(10YR 5/8)粘質土(粗砂を含む)
21. 赤褐色(10YR 4/8)砂質土

- ①. 明褐色(7.5YR5/8)砂質土に褐色(10YR 4/4)土が混じる
- ②. 褐色(5YR 6/8)砂質土
- ③. 黄褐色(10YR 5/8)粘質土にふい黄褐色(10YR 4/3)土が混じる
- ④. 明褐色(7.5YR 5/8)砂質土(細砂を含む)
- ⑤. 褐色(10YR 4/6)粘質土(粗砂を多く含む)
- ⑥. 暗褐色(10YR 4/6)砂質土
- ⑦. 褐色(10YR 4/6)砂質土
- ⑧. 暗褐色(10YR 3/3)粘質土
- ⑨. 明黄褐色(10YR 6/8)砂質土
- ⑩. 黒褐色(10YR 2/3)砂質土
- ⑪. 褐色(10YR 4/6)砂質土
- ⑫. 暗褐色(7.5YR 3/4)砂質土
- ⑬. 黄褐色(10YR 5/6)砂質土
- ⑭. 褐色(7.5YR 6/8)粘質土(粗砂を多く含む)
- ⑮. 褐色(10YR 4/4)砂質土
- ⑯. 暗褐色(10YR 3/3)粘土(粗砂を少量含む)
- ⑰. 黄褐色(10YR 5/8)砂質土

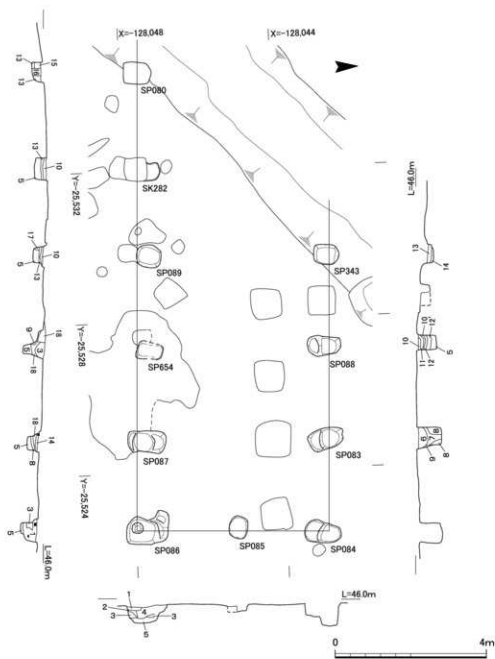
第29図 掘立柱建物S B 2001実測図(1/100)



1. 極暗褐色(7.5YR 2/3) 砂質土
 2. 明黄褐色(10YR 6/8) 粘質土に暗褐色(10YR 3/3) 土が混じる(細砂を含む)
 3. 褐色(10YR 4/6) 粘土
 4. オリーブ褐色(2.5Y 4/6) 粘質土(細砂を含む)
 5. 黒褐色(10YR 2/3) 砂質土(土器片を含む)
 6. にぶい黄褐色(10YR 4/3) 砂質土
 7. 明褐色(7.5YR 5/8) 粘質土ににぶい黄褐色(10YR 4/3) 土が混じる(粗砂を多く含む)
 8. 暗褐色(10YR 3/3) 砂質土(0.5~1cmの小石、土器片を含む)
 9. 黄褐色(2.5Y 5/6) 砂質土
 10. 明褐色(7.5YR 5/8) 粘質土(細砂を含む)
 11. 黄褐色(10YR 5/8) 粘質土に暗褐色(10YR 4/4) 土が混じる(細砂を含む)
 12. 黄褐色(10YR 5/8) 粘質土(0.2cm程度の小石を含む)
 13. 褐色(10YR 4/6) 粘土
 14. 暗褐色(10YR 3/4) 粘質土(細砂を含む)
 15. 黒褐色(10YR 2/3) 粘質土(細砂を含む)
 16. 明黄褐色(10YR 6/8) 粘質土に黒褐色(7.5YR 2/2) 土が多く混じる
 17. 明黄褐色(10YR 6/8) 粘質土に暗褐色(10YR 3/4) 土が混じる(細砂を含む)
 18. 明赤褐色(2.5YR 5/8) 粘土に暗褐色(10YR 3/4) 土が混じる(細砂を少量含む)
 19. にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘質土に暗褐色(10YR 3/4) 土が混じる(細砂を少量含む)
 20. 明赤褐色(2.5YR 5/8) 粘土(地山)
 21. 黒褐色(10YR 2/2) 砂質土
 22. 明赤褐色(2.5YR 5/8) 砂質土ににぶい黄褐色(10YR 4/3) 土が混じる
- ①. 黄褐色(10YR 5/8) 粘質土に暗褐色(10YR 4/4) 土が混じる(細砂を含む)
 - ②. 黄褐色(10YR 5/8) 粘質土(0.2cm程度の小石を含む)
 - ③. 褐色(10YR 4/6) 粘土
 - ④. 暗褐色(10YR 3/4) 粘質土(細砂を含む)
 - ⑤. 褐色(10YR 4/6) 砂質土
 - ⑥. 黒褐色(10YR 2/3) 粘質土(細砂を含む)
 - ⑦. 明褐色(7.5YR 5/6) 砂質土
 - ⑧. 明褐色(7.5YR 5/8) 粘質土(細砂を含む)
 - ⑨. 明赤褐色(5YR 6/8) 粘土(細砂を少量含む)
 - ⑩. 棕色(5YR 6/8) 粘土(地山)
 - ⑪. 明黄褐色(10YR 6/8) 粘質土に暗褐色(10YR 3/3) 土が混じる(細砂を含む)
 - ⑫. オリーブ褐(2.5YR 4/6) 粘質土(細砂を含む)

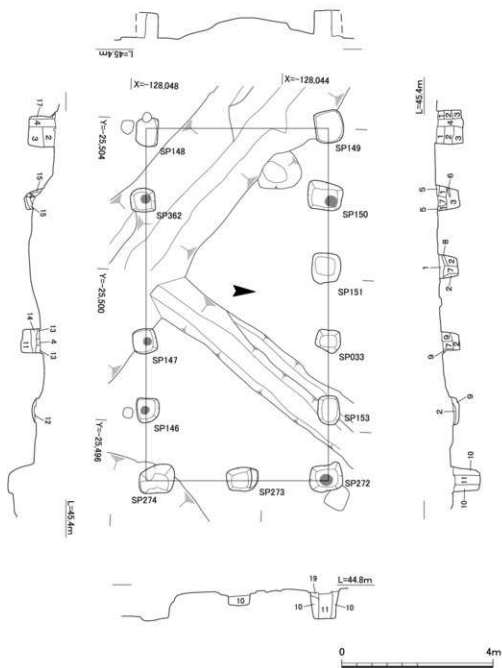
第30図 掘立柱建物 S B 2002実測図(1/100)

遺構検出面からの深さ0.6~0.7mとかなり深く掘られている。また、柱穴 S P 148~150・272・362では直径0.2~0.4mの柱痕を確認した。柱痕埋土は灰褐色粘質土、にぶい黄褐色砂質土、黄褐色粘質土などである。西側妻の中央の柱穴と、南側柱列の西から3個目の柱穴は境界溝によって削平されており、検出できなかった。建物の方位は北に対して25°西に振る。遺物として土師器小片や平瓦などが出土したが、出土量は少なめである。ただ、S P 148の柱痕から平瓦がやや多く出土した(第66図67~69)。出土遺物は少ないが、建物が梁行2間であることから第三Ⅲ-1期に



1. 褐色(5YR 6/8)砂質土(暗褐色(10YR 3/3)砂質土が混じる)
2. 暗褐色(10YR 3/4)粘質土(細砂・土器片を含む)
3. 褐色(5YR 6/8)砂質土
(暗褐色(10YR 3/4)砂質土が混じる、細砂を含む)
4. 灰黄褐色(10YR 4/2)粘質土(微砂・土器を含む)
5. 褐色(10YR 4/4)粘質土(細砂を含む)
6. 褐色(10YR 4/6)砂質土(土器片を含む)
7. 明褐色(7.5YR 5/8)砂質土
(褐色(10YR 4/6)砂質土が混じる、2cm程度の小石を含む)
8. 明褐色(7.5YR 5/8)粘質土
(にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘質土が混じる、粗砂を含む)
9. 明赤褐色(2.5YR 5/8)粘土(地山)
10. 明黄褐色(10YR 7/6)土に黄色(2.5Y 5/3)土が混じる
11. にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘質土(粗砂を含む)
12. 褐色(10YR 4/6)砂質土
12'粒が少し粗い
13. 褐色(7.5YR 6/8)砂質土ににぶい黄褐色土(10YR 5/4)が混じる
14. 褐色(7.5YR 6/8)粘土
15. にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂質土
16. にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂質土
17. 黄褐色(10YR 5/6)砂質土に褐色(10YR 4/4)土が混じる
18. 褐色(10YR 4/4)砂質土(粒はかゝり細かゝり)

第31図 掘立柱建物 S B 2003実測図(1/100)

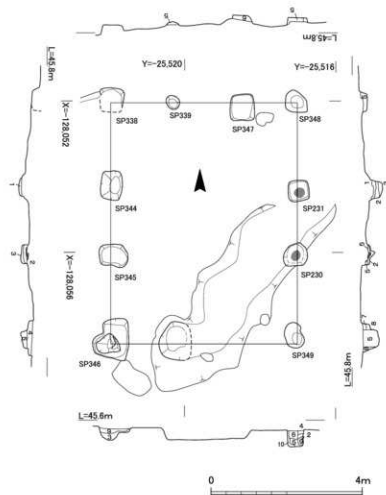


- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 橙色 (7.5YR 7/6) 砂質土 (1cmの小石や砂礫を含む) 2. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土 (細砂を含む) 3. にぶい橙色 (7.5YR 7/4) 粘質土 (極細砂を少量含む) 4. 灰褐色 (7.5YR 5/2) 粘質土 (粗砂、2~3cmの小石が混じる) 5. 橙色 (5YR 6/8) 砂質土 (1~2cmの小石、砂礫を含む) 6. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 (細砂を含む) 7. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土 8. 明黄褐色 (10YR 6/6) 砂質土 (0.5~1cmの小石を含む) 9. 橙色 (7.5YR 6/8) 砂質土 (2cm程度の小石を多く含む) | <ol style="list-style-type: none"> 10. 黄褐色 (10YR 7/6) 粘質土 (細砂を含む) 11. 黄褐色 (10YR 5/6) 粘質土 (極細砂を含む) 12. 褐色 (10YR 4/4) 砂質土と明赤褐色 (5Y 5/6) 砂質土の互層 13. 褐色 (7.5YR 6/8) 粘質土に黄褐色 (10YR 5/6) 土が混じる 14. 褐色 (10YR 4/6) 粘質土 (極細砂を含む) 15. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土 16. 黄褐色 (7.5YR 7/8) 粘土 (極細砂を含む) 17. 2と3が混じる 18. 褐色 (10YR 4/4) 砂質土 19. にぶい橙色 (7.5YR 7/4) 粘質土 (極細砂を含む) |
|---|--|

第32図 掘立柱建物 S B 2004実測図 (1/100)

位置づけられると考える。

掘立柱建物 S B 2016 (第33図) 調査地中央部、掘立柱建物 S B 2001・2002の南側で検出した (Ⅷ・m5・6、n5・6、o5・6区)。桁行3間(6.3m)、梁行3間(4.9m)の南北棟の建物である。桁行の柱間寸法は2.2m等間、梁行の柱間寸法は1.5~1.6mである。柱穴掘形は長辺0.6~0.7m、短辺0.5mの長方形である。掘形埋土は橙色粘土、明黄褐色粘土、褐色粘土、黄褐色砂質土などである。柱穴 S P 230・231で直径0.3mの柱痕を確認した。柱痕埋土は褐色粘土ないし黄褐色土である。建物の方位は南北である。遺物として平瓦や土師器の小片などが出土した。特に柱穴 S P 230と柱穴 S P 345から平瓦が多く出土した(第65図63・64)。出土遺物や梁行が3間であることから第Ⅱ-2期に位置づけられる。



1. 黄褐色(7.5YR 7/8)砂質土
2. 橙色(2.5YR 6/8)粘土(細砂を少量含む)
3. 明黄褐色(10YR 6/8)粘土(細砂を含む)
4. 橙色(5YR 6/8)粘質土に褐色(10YR 4/6)土が混じる(細砂を含む)
5. 褐色(10YR 4/6)粘土
6. 黄褐色(10YR 5/6)粘質土(粗砂を含む)
7. にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂質土
8. 橙色(5YR 6/8)土に7が混じる
9. 暗褐色(10YR 3/3)粘質土(細砂が混じる)
10. 淡黄色(2.5Y 7/4)粘質土(細砂が混じる)

第33図 掘立柱建物 S B 2016実測図(1/100)

掘立柱建物 S B 2018 (第34図) 掘立柱建物 S B 2016の西側で検出した(Ⅷ-m8・9、n8・9、o8区)。桁行3間以上(5.2m以上)、梁行2間(4.1m)の南北棟の建物である。柱穴掘形は柱穴 S P 332・333は長径1.0mほどの垂な円形で、柱穴 S P 307~309・334・335は長辺約0.8m、短辺約0.4mの長方形を呈する。掘形埋土は、黄褐色土が混じる明褐色粘質土、黒褐色土が混じる明褐色粘質土、暗褐色粘質土、オリーブ黄色粘土などである。建物の南側は調査対象地外に延びるため不明である。建物の方位は北に対して2°東に振る。遺物として土師器の小片などが出土したものの、瓦類は出土していない。梁行が2間であることや建物方位から第Ⅲ-1期と推定される。

掘立柱塼 S A 2101 (第35図) 北部と中央部を区切るようにして S B 2004の北側で

検出した(Ⅷ-i25・k25、Ⅷ-k1・2)。5基の柱穴が並ぶ検出長7.2mの東西方向の掘立柱塼である。柱間寸法は2.0m等間である。柱穴掘形は直径約0.5mの円形で、深さは0.1～0.2mである。塼の方位は北に対して5.5°西に振る。遺物は出土しなかった。検出状況から第Ⅱ期に位置づけられる可能性が高い。

(山崎美輪・筒井崇史)

溝SD405(第29図) 掘立柱建物SB2001と重複して検出した(Ⅷ-12～4区)。切り合い関係からSD405の方が先行する。検出長9.3m、幅1.0～1.4m、深さ0.15m前後で、東西方向に延びる。埋土は褐色ないし黄褐色粘質土である。遺物として細片化した平瓦、土師器、須恵器などが出土した(第81図252)。平瓦にはH-A類が含まれる。SD405の溝としての機能は不明である。出土遺物や切り合い関係から第Ⅱ-1期に位置づけられると考える。

土坑SK092(第36図) 掘立柱建物SB2003と重複して検出した(Ⅷ-17・m7区)。遺構の切り合い関係からSK092の方が新しい。平面形は不整形な楕円形で、浅い落ち込み状を呈する。長軸3.8m、短軸2.8m、深さ0.1m前後である。埋土は褐色ないし明褐色粘質土を主体とする。遺物として細片化した瓦類、土師器、須恵器、裂塩土器などが出土した(第81図250・251)。遺構の切り合い関係から第Ⅲ-2期以降に位置づけられる。

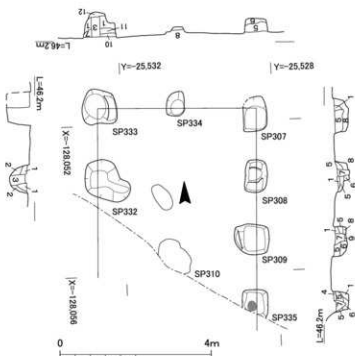
(筒井崇史)

(5)西部

Ⅷ地区10列よりも西側、Ⅷ地区p列よりも北側の範囲である。ここでは、総柱建物1棟、土坑8基、柱穴約60基などを検出した(第37図)。北部や中央部とは異なり、建物は総柱建物1棟のみ(SB2009)である。ここでは建物としてまとまらない柱穴群や土坑などを多数検出した。

総柱建物SB2009(第38図)

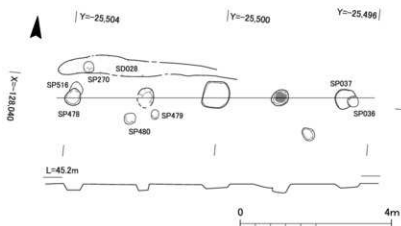
調査区西部で検出した(Ⅷ-k12



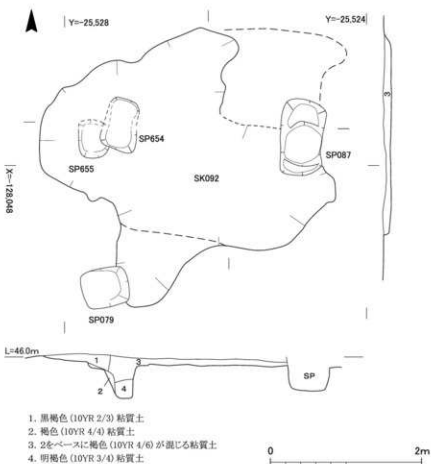
1. 明褐色(7.5YR 5/8)粘質土に黄褐色(10YR 5/8)土が混じる(細砂を含む)
2. 褐色(10YR 4/6)粘土(粗砂を含む)
3. 暗褐色(10YR 3/3)粘質土(細砂を含む)
4. 明赤褐色(5YR 5/8)粘土
5. 明褐色(7.5YR 5/8粘質土に黒褐色(10YR 2/3)土が混じる(細砂を含む)
6. 明赤褐色(5YR 5/8)粘土に黄褐色(10YR 5/6)土が混じる
7. 黒褐色(10YR 3/1)粘質土(粗砂を含む)
8. 暗褐色(10YR 3/4)粘質土(粗砂を含む)
9. オリーブ黄色(7.5Y 6/3)粘土
10. 褐色(7.5YR 6/8)土に11が混じる
11. 明黄褐色(10YR 6/8)砂質土
12. 9に明赤褐色(5YR 5/8)が混じる(粗砂が混じる)

第34図 掘立柱建物SB2018実測図(1/100)

～14、112～14、m12～14区)。東西3間(5.9m)、南北2間(5.0m)の総柱建物である。S B2009は第3次調査の際に総柱建物S B302として調査が行われている。当時の調査で確認されていた柱穴はすべて半截の上、埋め戻されていた。今回の調査で新たに確認した柱穴や全容を明らかにできた柱穴はS P 358・359・411である。柱間寸法は東西方向2.0m、南北方向2.2mである。柱穴掘



第35図 掘立柱罫S A 2101実測図(1/100)

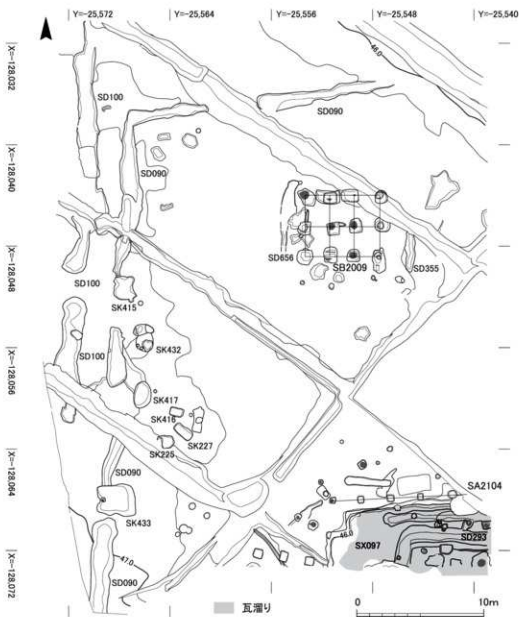


1. 黒褐色(10YR 2/3)粘質土
2. 褐色(10YR 4/4)粘質土
3. 2をベースに褐色(10YR 4/6)が混じる粘質土
4. 明褐色(10YR 3/4)粘質土

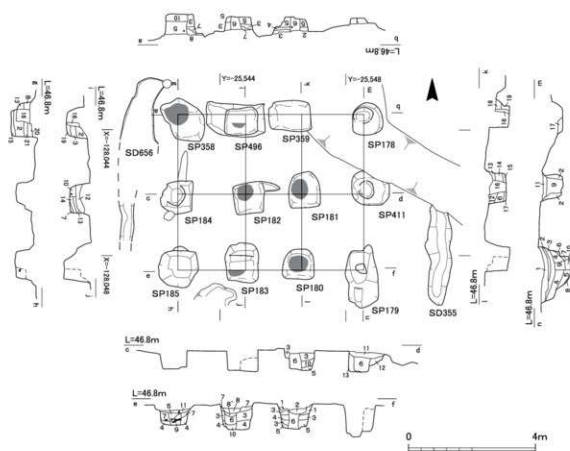
第36図 土坑S K 092実測図(1/50)

形は一辺約0.9mの正方形のものと、長辺1.2m、短辺0.9mの長方形あるいは楕円形のものがある。掘形埋土は、明赤褐色土が混じる黄褐色砂質土、暗褐色粘質土、明赤褐色砂質土などである。直径約0.3mの柱痕を確認した。柱痕埋土は、暗褐色粘質土、明赤褐色土が粒状に混じる黄褐色粘土で、柱痕には多くの平瓦が落ち込んでいた。建物の方位は南北である。柱穴の断面を観察すると、柱痕の上に0.2~0.4mの土が堆積していることから、建物の柱材を途中で切っていると推測される。柱穴SP185の最上層からは平瓦H-D類が出土している。SB2009は、西部に単独で1棟のみ建てられていることや、他の建物にくらべてやや大型の柱穴で構成されていることから、ほかの総柱建物とは異なった役割を担っていたと考える。出土遺物としては、土師器や須恵器の破片のほか、大量の瓦類が出土した。なお、出土遺物や遺構の立地などから第Ⅱ-1期から第Ⅱ-2期に位置づけられる。

(山崎美輪・筒井崇史)



第37図 西部全体図(1/300)



＜南北方向断面＞

1. 黄褐色(10YR 5/6) 砂質土に赤褐色(2.5YR 4/8) 土が混じる
2. 黄褐色(10YR 5/6) 砂質土に明赤褐色(5YR 5/8) 土が混じる
3. 褐色(10YR 4/4) 粘質土に明赤褐色(5YR 5/8) が粒状に混じる
4. 明黄褐色(10YR 6/6) 粘土に暗褐色(10YR 3/4) 土が混じり、明赤褐色(2.5YR 5/8) 土を粒状に含む
5. 明黄褐色(10YR 6/8) 粘土に暗褐色(10YR 3/4) 土と明赤褐色(2.5YR 5/8) 土が混じる
6. 明赤褐色(2.5YR 5/8) 粘質土に、にぶい黄褐色(10YR 4/3) が混じる
8. 明赤褐色(2.5YR 5/8) 粘質土に褐色(10YR 4/6) が混じる
8. 黄褐色(10YR 5/6) 砂質土に褐色(10YR 4/4) 土が混じる
9. 黄褐色(2.5YR 5/6) 粘土に明赤褐色(5YR) が粒状に混じる粘土
10. 黄褐色(10YR 5/6) 粘土
11. 黄褐色(2.5YR 5/3) 砂質土
12. 黒褐色(10YR 2/2) 粘質土と明赤褐色粘質土(5YR 5/8) が交互に縞状になる
13. 褐色(5YR 6/8) 粘質土
14. 明黄褐色(10YR 6/6) 粘質土
15. 暗褐色(10YR 3/4) 粘土
16. 暗褐色(10YR 3/3) 粘質土
17. 明褐色(7.5YR 5/8) 粘質土に灰黄褐色(10YR 4/2) 土が混じる(粗砂を多く含む)
18. 褐色(7.5YR 6/8) 粘質土
19. 褐色(10YR 4/6) 粘質土に明赤褐色(5YR 5/8) 土が粒状に混じる
20. 黄褐色(10YR 6/6) 粘質土に明赤褐色(2.5YR 5/8) が少し混じる
21. 明赤褐色(2.5YR 5/8) 砂質土

＜東西方向柱列① a-b, c-d 断面＞

1. 明褐色(7.5YR 5/8) 粘質土に灰黄褐色(10YR 4/2) が混じる(粗砂を多く含む)
2. 褐色(7.5YR 6/8) 粘質土(粗砂を含む)
3. 黄褐色(10YR 5/6) 粘質土に明赤褐色(5YR 5/8) 土を粒状に含む
4. 明赤褐色(5YR 5/8) 粘質土
5. 褐色(10YR 4/6) 粘質土に明赤褐色(5YR 5/8) 土が粒状に混じる
6. 暗褐色(10YR 3/3) 粘土
7. 褐色(10YR 4/4) 粘質土
8. にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘土
9. 明赤褐色(2.5YR 5/8) 粘質土(粗砂を多く含む)
10. 褐色(10YR 4/4) 粘土に明赤褐色(5YR 5/8) が粒状に混じる
11. 黄褐色(7.5YR 7/8) 砂質土(0.5cm 程度の小礫を含む)
12. 褐色(5YR 6/8) 粘質土(0.5 ~ 1cm の小礫を含む)
13. 明赤褐色(5YR 5/8) 粘質土に褐色(10YR 4/4) が混じる

＜東西方向柱列② e-f 土層断面＞

1. 黄褐色(10YR 5/8) 粘質土
2. 明黄褐色(10YR 6/8) 粘質土に褐色(10YR 5/8) 土が混じる
3. 明赤褐色(5YR 5/8) 粘土
4. 明赤褐色(5YR 5/8) 粘土に黄褐色(10YR 5/8) が混じる
5. 褐色(7.5YR 4/6) 粘質土(粘り気が強い)
6. 褐色(10YR 4/4) 粘土に明赤褐色(5YR 5/8) が粒状に混じる
7. 黄褐色(10YR 5/8) 粘質土に黒褐色(10YR 3/2) 土が混じり、明赤褐色(5YR 5/8) を粒状に含む
8. にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘質土 8'. 粘土
9. 褐色(10YR 4/6) に明赤褐色(5YR 6/8) が粒状に混じる粘土
10. にぶい黄褐色(10YR 5/4) 粘質土
11. 黄褐色(10YR 5/6) 粘質土

第38図 総柱建物 S B 2009実測図(1/120)

溝 S D 355 (第38図) 総柱建物 S B 2009の東側1.6mで検出した(Ⅷ-112・m12区)。S B 2009の東側雨落ち溝と推定される。S D 355は第4次調査の溝状遺構 S X 467として報告されているもので、今回の調査では北への延長部をわずかに検出した。検出長3.2m、幅0.7m前後、深さ0.15m前後である。埋土は上層がオリブ褐色土、下層が浅黄色砂質土である。出土遺物としては平瓦、土師器などがあり、平瓦の主体はH-A類である。S B 2009と同時期の第Ⅱ-1期から第Ⅱ-2期に位置づけられる。

溝 S D 656 (第38図) 総柱建物 S B 2009の西側0.7mで検出した(Ⅷ-k14・114区)。S B 2009の西側雨落ち溝と推定される。S D 656は第3次調査の溝 S D 351として報告されているもので、今回の調査では北への延長部を検出した。検出長5.3m、幅0.4~1.0m、深さ0.05m前後である。埋土にはふい黄褐色土である。出土遺物としては丸瓦、平瓦があり、平瓦にはH-A類が含まれる。S B 2009と同時期の第Ⅱ-1期から第Ⅱ-2期に位置づけられる。

土坑 S K 415 (第39図上) 区画溝 S D 090-3の南端に接して検出した(Ⅷ-m17区)。両遺構の検出状況から S D 090-3よりも S K 415が新しい。平面形はやや歪な隅丸方形を呈し、長軸1.8m、短軸1.5~1.6m、深さ0.2mである。埋土は上層が灰黄褐色土、下層がふい黄色土である。遺物はおもに上層から出土しており、覆鉢形土製品1点(第88図399)、平瓦24点、丸瓦5点がある。いずれも破片である。このほか、大型の角礫が複数出土した。これらの出土遺物や切り合い関係から第Ⅱ-1期ないし第Ⅱ-2期に位置づけられる。

土坑 S K 433 (第39図下) 区画溝 S D 090-5の北側で検出した(Ⅷ-q17・18、r17・18区)。平面形は東西方向にやや長い隅丸長方形を呈し、長軸2.9m、短軸2.4m、深さ0.2m前後である。埋土は褐色粘質土である。遺物として丸瓦、平瓦、土師器杯、須臾器甕などが出土しており(第82図256~258)、平瓦にはH-A類やH-C2類などが認められる。出土遺物から第Ⅱ-1期ないし第Ⅱ-2期に位置づけられる。

焼土坑 S K 225 (第40図左上) 土坑 S K 433の北東約4mで検出した(Ⅷ-p16・17区)。平面形は東西方向にやや長い楕円形を呈すると思われるが、境界溝によって南西側が削平されている。残存する長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.2mである。埋土は上層がふい黄褐色土、下層が炭を多量に含む黒褐色土である。土坑の壁面の周囲が若干赤く変色していた。遺物として平瓦、土師器、須臾器鉢Dなどが出土した(第82図253~255)。

焼土坑 S K 227 (第40図右上) 土坑 S K 225の北西側には接して検出した(Ⅷ-p16区)。平面形は長方形を呈し、長辺1.6m、短辺0.75m、深さ0.2mである。埋土は大きく3層に分かれ、上層は炭が若干混じるオリブ褐色土、中層が明褐色土、下層が炭を多量に含む黒褐色土である。北西側の掘形壁面がやや赤く変色していた。遺物として瓦類、土師器などが出土したが、いずれも小破片で出土量も少ない。

焼土坑 S K 416 (第40図下) 土坑 S K 227の北側には接して検出した(Ⅷ-p16区)。平面形は長方形を呈し、長辺1.1m、短辺0.65m、深さ0.2mである。埋土は大きく3層に分かれ、上層が炭が若干混じる暗灰黄色土、中層が明黄褐色土、下層が炭を多量に含む黒褐色土である。土坑の

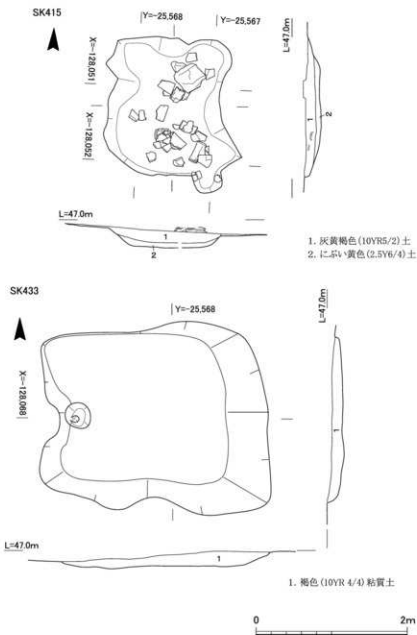
壁面の周囲が若干赤く変色していた。遺物としては、平瓦の破片がわずかに出土したのみである。以上の3基の焼土坑は、検出状況から炭窯の可能性が高いと考える。また、詳細な時期は不明であるが、第Ⅱ期ないし第Ⅲ期であろう。

土坑 S K 417 区画溝 S D090-4の南端から南東に1.3mで検出した(Ⅷ-o17・18区)。平面形は楕円形を呈し、長軸2.1m、短軸1.4m、深さ0.2mである。埋土は上層が褐色粘質土、下層が黄褐色粘質土である。遺物として平瓦、土師器などの破片が出土した。

(筒井崇史)

(6)南部

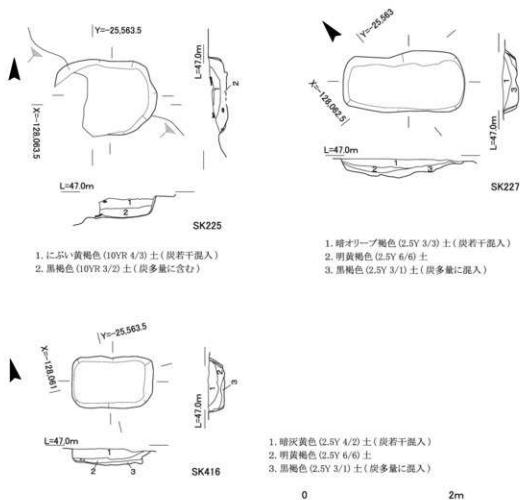
中央にある調査対象地外よりも南側の範囲である。ここでは礎石・掘立柱併用建物1棟、それ



第39図 土坑 S K 415・433実測図(1/50)

に伴う区画2か所、同じく雨落ち溝1条、掘立柱建物1棟、土坑2基、柱穴50基以上、瓦溜り2か所などを検出した(第41図)。南部では掘立柱建物が少ないものの、瓦溜りや瓦類が厚く堆積した遺構などを検出しており、この地点に瓦葺きの建物があったことを想像させる。

礎石・掘立柱併用建物 S B 2020 (第42～47図) 中央に残る調査対象地外のすぐ南側で検出した(Ⅷ-k12～14、l12～14、m12～14区)。建物の一部は調査対象地外に延びているため、その全容は明らかにできなかった。桁行6間以上(21.2m以上)、梁行は身舎2間(5.1m)に南北に廂が1間(2.6m)ずつ取り付く、二面廂の東西棟建物である。建物の方位は北に対して25°東に振る。遺物は各柱穴から多数出土したが、詳細は後述する。柱穴から出土した遺物のほか、S B 2020に伴う雨落ち溝 S D 293や区画 S X 097から出土した瓦類などから、S B 2020は第Ⅲ-1期に位置づけられる。建物の性格については明らかにし得ないが、他の遺構との配置状況から講堂の可能性がある。この建物の特徴は身舎・廂ともに柱の据え付け方法として、礎石立ち柱と掘立柱を交互に配列している点にある。礎石立ち柱は、深さが0.35～0.45mの礎石の据え付け穴を、遺構面が良好に遺存していた北西部において3基検出したのみである。礎石据え付け穴は礎石を固定するため



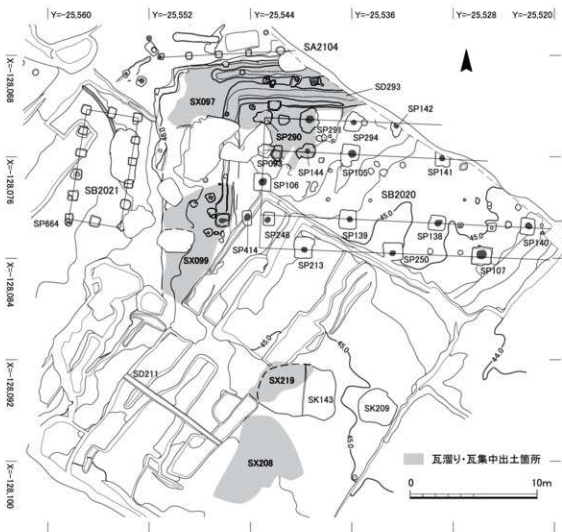
第40図 焼土坑 S K 225・227・416実測図(1/50)

の根石を確認したが、礎石そのものは遺存していなかった。なお、建物周辺ならびに第7次調査地あるいは第6次調査地のいずれにおいても、礎石や礎石の破片と思われる石材を確認することはできなかった。

これに対して掘立柱は、柱穴の深さが最大で1.3m前後に達するもので、遺構の遺存状態が良好であった北西部では、掘立柱の柱穴と礎石の掘え付け穴が交互に配置されている状況が確認できた。身舎・廂とも桁行の柱間寸法は3.5mである。一方、SB2020の中央部から南東側にかけては、遺構検出面そのものが礎石掘え付け穴の底(標高45.4m前後)よりも低くなるため、深く掘られた掘立柱の柱穴は検出できたものの、礎石掘え付け穴は削平されて検出することができなかった。このため、本来存在したはずの礎石の掘え付け穴が削平され、1つおきに掘られた掘立柱の柱穴のみを検出した。これが検出当初に柱間寸法7.0mの柱穴列として確認したものである。SB2020では個々の柱穴についてやや詳しく報告することにしたい。

まず、北面廂の柱穴について、西端の礎石掘え付け穴SP290から順に東へみていく。

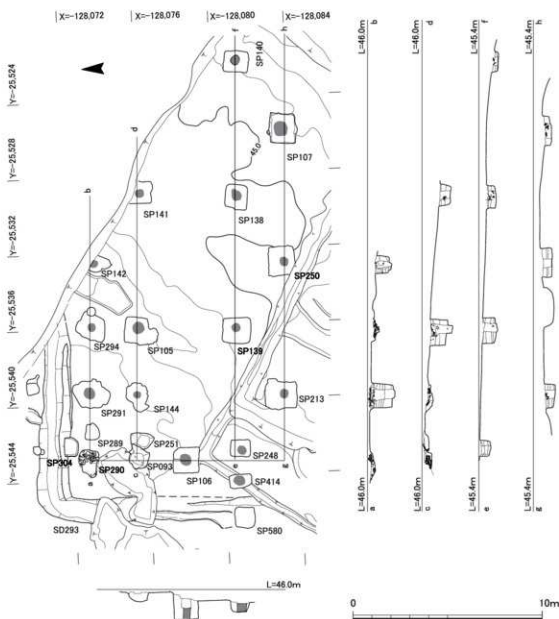
礎石掘え付け穴SP290(第43図左上) 北面廂の西端に当たる礎石掘え付け穴である。平面形



第41図 南部全体図(1/300)

はやや歪な隅丸方形を呈し、南西部がやや西に広がる。南北1.0m、東西1.2~1.4m、深さ0.3mである。断面形は浅い皿状を呈し、底面に10~20cmほどの角礫を多数検出した。これらの角礫の検出状況を見ると、中央部がさらに浅く凹んでいることから、これらの角礫が礎石を固定するための根石であると判断した。遺物は、掘形の埋土から丸瓦・平瓦、土師器・須恵器等が出土し、凝灰岩の破片も確認した。

柱穴SP291(第43図左下) 礎石据え付け穴SP290の東約2.2mで検出した。掘形の平面形は、南北にやや長い歪な隅丸長方形を呈するが、各辺は直線にならない。南北2.0m、東西1.45mで、掘形の深さは1.35mである。検出当初に柱穴掘形のほぼ中央付近で、瓦類が弧状にめぐっている状況であった。瓦類はいずれも内方に向かって傾斜していたことから、この瓦類は柱の回りに巻



第42図 礎石・掘立柱併用建物S B 2020実測図(1/200)

かれたもので、柱の腐蝕によって内側に崩れたものと考えている。この状況から直径0.5m程度の柱を推定していたが、掘形底面で直径0.45mの柱当たりを確認した。柱当たりの深さは掘形底面から0.13mである。また、柱穴を半截すると、柱痕と推定される箇所が空洞になっていることが判明した。これは柱の腐蝕に伴うものと考えられる。遺物は、柱穴の検出面を含む最上層(埋土1層)で、瓦類が多数出土したものの、柱埋埋土(2層)や掘形埋土(3~10層)からはほとんど出土しなかった。遺物として丸瓦・平瓦、土師器・須恵器などの破片が出土した(第68図75、第83図264)。

礎石掘え付け穴 S P 294(第43図右上) 柱穴 S P 290の東約2.2mで検出した。平面形は歪な隅丸方形を呈する。南北1.5m、東西1.5m、深さ0.4mである。断面形は、東西方向では2段掘りのように見えるが、南北方向では逆台形状を呈する。底面に10~20cmほどの角礫を多数検出したが、北東部では一部角礫の見られない箇所がある。これらの角礫は礎石を固定するための根石と考えられ、中央から北東部にかけて礫が見られず、浅く凹んでいることから、ここに礎石があったと推定される。検出当初は、直径0.4mほどの柱痕と考えていたが、掘削作業を進めていく段階で、礎石の抜き取られた後の堆積土であることが明らかになった。遺物は、礎石を抜き取られた後の堆積土や掘形埋土から、丸瓦・平瓦の破片が出土した。

柱穴 S P 142(第43図右下) 礎石掘え付け穴 S P 294の東約2.2mで検出した。掘形の北半部が調査対象地外となるため、正確な規模は不明である。平面形は、ほぼ方形を呈すると推定されるが、南辺は大きく南へ広がる。ただし、この痕跡は5cmほど掘削すると地山となり、規模がやや小さくなる。南北確認長0.8m、東西確認長0.85m、掘形の深さ0.9mである。検出時に直径0.65mほどの柱痕を確認していたが、掘形底面で直径0.4mの柱当たりを確認した。柱当たりの深さは掘形底面から0.15mである。遺物は柱埋埋土2層の最上部から平瓦の破片などがまとめて出土したものの、柱埋埋土1層や掘形埋土(3~7層)からはほとんど出土しなかった。遺物としては、平瓦のほか、丸瓦の破片や土師器の破片が少量ある。

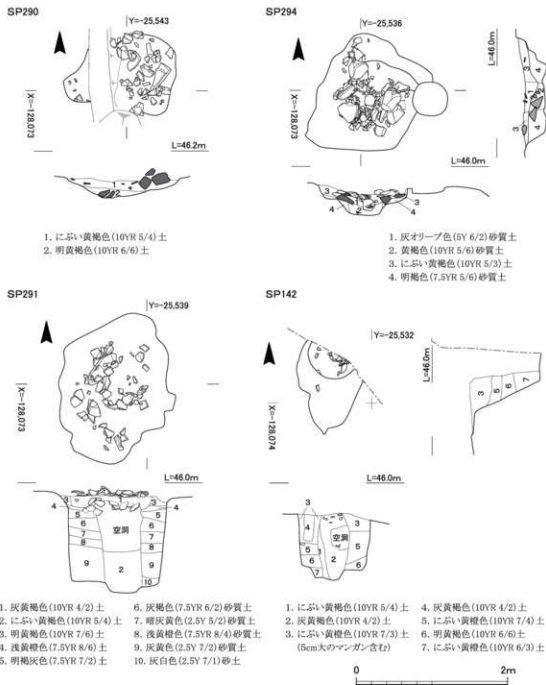
次に身舎北側柱列に伴う柱穴について、北西角の柱穴 S P 093から順次記述する。

柱穴 S P 093(第44図左上) 身舎の北西角の柱穴である。掘形の西半部に大きな攪乱を受けており、半截されたような状態であった。平面形は不整形な形状を呈し、南北長1.0m、東西残存長1.25m、深さ0.4mである。掘形内は多数の瓦類によって埋められているような状態であり、柱痕を確認することはできなかった。この瓦類が、当初から埋められていたのか、柱が抜き取られた後に埋められたものかは判断し難い。ただし、上述のように掘立柱と礎石を交互に配列しているとすると、S P 093は掘立柱に当たるが、柱穴の掘形底面の標高(標高45.5m前後)が、他の掘立柱柱穴の掘形底面の標高(標高44.5m前後)にくらべて高く、むしろ礎石掘え付け穴の掘形底面の標高に近い。掘形からは多数の瓦類が整然と積まれたような状態で出土した。軒丸瓦 I b 型式 1点・軒平瓦 I b 型式 2点のほか、多数の平瓦・丸瓦、土師器の破片、鉄釘などがある(第57図7、第68図73・74、第90図419)。

S P 093の東側には柱穴 S P 251が重複している。当初は S P 093の抜き取り穴かと思われたが、

土層観察の結果、S P 251の方が古いと判断した。周辺に見られるほかの柱穴とは組み合わせないようである。

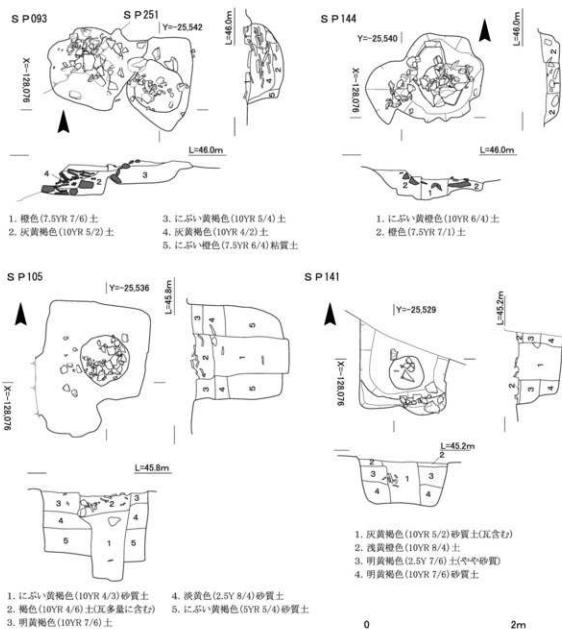
礎石据え付け穴 S P 144 (第44図右上) 柱穴 S P 093の東約1.9mで検出した。平面形はやや歪な隅丸方形形状を呈し、西辺の南半部が大きく西に広がる。南北1.1m、東西1.55m、深さ0.4mである。断面形は浅い逆台形状を呈するが、西辺の広がり部分は緩やかに傾斜する。底面からやや浮いた状態で10～30cmほどの角礫が多数検出された。これらの角礫の検出状況は中央部がやや深く凹んでいることから、これらの角礫が礎石を固定するための根石であると判断した。検出



第43図 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020柱穴実測図 1 (1/50)

当初は、直径0.3mほどの柱痕と考えていたが、調査の結果、これは礎石の抜き取られた後の堆積土と考えられる(1層)。遺物は、礎石が抜き取られた後の堆積土や掘形埋土から、平瓦の破片のほか、土師器の小破片などが出土した。

柱穴 S P 105 (第44図左下) 礎石据え付け穴 S P 141の東約2.0mで検出した。掘形の平面形はほぼ方形を呈し、南辺西半部が南へ0.5mほど広がる。この広がりが柱の抜き取り穴であるという確証は得られなかった。南北1.25m(南への広がりを除く)、東西1.35m、掘形の深さ1.3mである。検出時に直径0.65mの柱痕を確認していたが、掘形底面で直径0.45mの柱当たりを確認した。柱当たりの深さは掘形底面から0.08mである。遺物は柱痕埋土の2層から非常に多く出土したもの



第44図 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020柱穴実測図 2 (1/50)

の、柱痕埋土1層や掘形埋土からはほとんど出土しなかった。遺物としては、丸瓦・平瓦の破片が多数あるほか、土師器の小破片がある。輪の羽口と思われる破片も出土した。

柱穴 S P 141 (第44図右下) 柱穴 S P 105の東約6.0mで検出した。掘形の北辺が調査対象地外となるため、正確な規模は不明であるが、平面形はほぼ方形を呈すると推定される。掘形の南辺が南へわずかに広がる。南北確認長1.25m、東西1.22m、掘形の深さ0.65mである。検出時に直径0.47mの柱痕を確認していた。遺物は柱痕埋土(1層)から多く出土したほか、残存する掘形埋土の最上層からもまとまって出土した。遺物としては、丸瓦・平瓦の破片が多数あるほか、土師器の小破片が出土した(第67図70)。なお、平瓦の破片1点に朱線が残っている(第68図76)。

柱穴 S P 106 (第45図左) 身舎の西側妻柱である。平面形は方形を呈し、南北1.33m、東西1.35m、深さ1.25mである。検出時に直径0.6mほどの柱痕を確認していたが、完掘後に掘形底面で直径0.45mの柱当たりを確認した。柱当たりの深さは掘形底面から0.05mである。遺物は柱痕埋土1層から細片化した瓦類が多数出土したが、柱痕埋土2～5層、掘形埋土6～12層からはほとんど出土しなかった。遺物としては丸瓦・平瓦の破片が多数あるほか、土師器の小破片や鉄釘などがある(第83図260、第90図418)。また、柱痕内からひさご形土製品の最下段の破片が出土した(第89図409)。

次に身舎南側柱列に伴う柱穴について述べる。

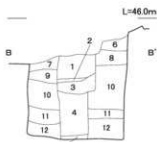
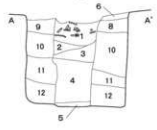
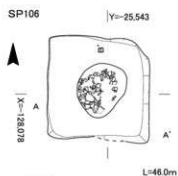
柱穴 S P 139 (第45図右上) 身舎の南側柱列の西から3つ目の柱穴である。平面形は方形を呈し、南北1.51m、東西1.34m、深さ0.8mである。検出時に直径0.5mほどの柱痕を確認していたが、完掘後に掘形底面で直径0.45mの柱当たりを確認した。柱当たりの深さは掘形底面から0.08mである。遺物は柱痕埋土(1層)からごく少量の瓦類が出土したのみで、掘形埋土(2～6層)からは出土しなかった。遺物としては細片化した瓦類が少量あるにすぎない。

柱穴 S P 138 (第45図右中) 柱穴 S P 139の東約5.8mで検出した。平面形はほぼ方形を呈するが、西辺の一部が10cmほど西へ突出する。南北1.16m、東西1.33m、深さ0.5mである。検出時に直径0.55mほどの柱痕を確認していたが、断面観察では掘形底面付近で直径0.45mである。遺物は検出面を中心に柱痕埋土(1層)から細片化した瓦類が出土したが、掘形埋土(2～4層)からはほとんど出土しなかった。遺物としては丸瓦や平瓦の破片がある。

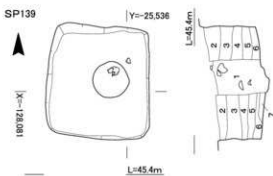
柱穴 S P 140 (第45図右下) 柱穴 S P 138の東約5.9mで検出した。平面形はやや南北に長い長方形を呈し、南北1.3m、東西1.1m、深さ0.3mである。検出時に直径0.45mの柱痕を確認していた。遺物は柱痕埋土1層から破片化した瓦類が出土したが、柱痕埋土2層や掘形埋土(3～6層)からはほとんど出土しなかった。遺物としては丸瓦・平瓦の破片のほか、土師器の小破片がある(第67図71)。

最後に南面廂の柱穴について、西端の柱穴 S P 213から順に東へみていく。なお、南面廂の柱穴列では、後世の削平のため、礎石据え付け穴を検出することはできなかった。

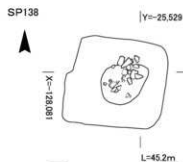
柱穴 S P 213 (第46図上) 南面廂の西から2番目の柱穴である。平面形はやや南北に長い方形を呈し、南北1.7m、東西1.5m、深さ0.6mである。柱穴掘形の規模は S B 2020の柱穴の中で最も



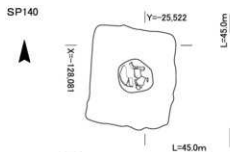
1. 暗褐色(10YR 3/3)砂質土(極細粒)
2. にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘質土
(φ 0.5~1cmの小石を含む)
3. 明黄褐色(10YR 6/6)粘土
(黒褐色(10YR 3/2)粘土が混じる)
4. 褐色(10YR 4/1)粘質土
(粒の細かい砂を多く含む)
5. 灰白色(7.5Y 8/1)粘質土
6. 明黄褐色(10YR 6/6)砂質土
(マンガン粒と明赤褐色(2.5YR 5/8)砂質土を粒状に含む)
7. 明赤褐色(5YR 5/8)砂質土
(明赤褐色(2.5YR 5/8)砂質土が混じる)
8. 黄褐色(10YR 7/8)砂質土
(マンガンが粒状に混じる)
9. 灰黄褐色(10YR 5/2)砂質土
10. 橙色(7.5YR 6/8)粘質土
(マンガンの粒と明赤褐色(2.5YR 5/8)砂質土が粒状に混じる)
11. 明黄褐色(10YR 6/8)粘質土
(粒の細かい砂を多く含む、明赤褐色(2.5YR 5/8)砂質土が粒状に混じる)
12. 褐色(10YR 4/6)粘質土
(粘り気が強く、粒の細かい砂を含む明赤褐色(2.5YR 5/8)砂質土が粒状に混じる)



1. 褐色(10YR 4/4)砂質土
2. 明黄褐色(2.5Y 7/6)砂質土
(粒状のマンガンが混入)
3. 橙色(5YR 7/6)砂質土
(粒状のマンガンが混入)
4. にぶい黄褐色(10YR 7/4)砂質土
5. 明黄褐色(2.5Y 7/6)砂質土
(粒状のマンガンが若干混入)
6. にぶい橙色(7.5YR 7/3)砂土
7. 褐色(10YR 4/4)砂質土

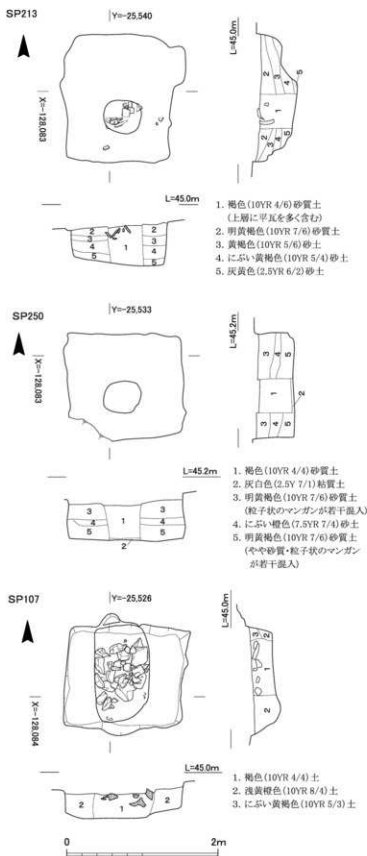


1. 灰黄褐色(10YR 5/2)砂質土
2. にぶい黄褐色(10YR 6/4)土
3. にぶい黄褐色(10YR 7/4)土
4. にぶい赤褐色(5YR 5/4)砂質土
5. 明黄褐色(10YR 7/6)砂質土



1. にぶい黄褐色(10YR 5/4)土
2. 灰白色(10Y 7/1)粘質土
3. 明褐色(7.5YR 5/6)土
4. 浅黄褐色(10YR 8/4)土
5. 明褐色(7.5YR 5/6)土

第45図 礎石・掘立柱併用建物S B 2020柱穴実測図3 (1/50)



第46図 礎石・掘立柱併用建物S B2020柱穴実測図4(1/50)

大きいのが、SP213では掘形北側の中段に段差が認められる。検出時に直径0.5mの柱痕を確認した。遺物は柱裏埋土(1層)から破片化した瓦類が出土したが、掘形埋土(2~5層)からはほとんど出土しなかった。遺物としては丸瓦・平瓦の破片が多数あるほか、土師器の小破片がある(第67図72)。

柱穴S P250(第46図中)

柱穴S P213の東約5.6mで検出した。平面形は、わずかに東西に長い方形を呈し、南北1.4m、東西1.55m、深さ0.6mである。検出時に直径0.48mの柱痕を確認した。遺物は掘形から土師器の小片が出土したのみである。

柱穴S P107(第46図下)

柱穴S P250の東約5.4mで検出した。平面形は、わずかに東西に長い方形を呈し、南北1.5m、東西1.55m、深さ0.45mである。検出時に柱痕は認められず、長軸1.3mほどの楕円形を呈する土色の変化が認められた。これを柱の抜き取り穴と推定して掘り下げたが、多数の角礫が充填されたような状態であった。用途は不明であるが、柱の抜き取り後に角礫が落ち込んだものと考えられる。柱の直径を推測す

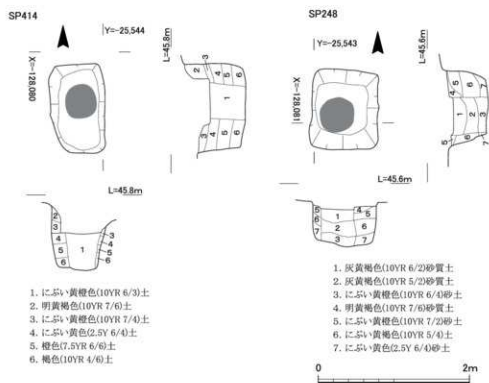
ような痕跡は認められなかった。遺物は柱抜き取り穴と推定される1層から破片化した瓦類や土師器・須恵器などが出土したが、掘形埋土(2・3層)からはほとんど出土しなかった。出土遺物としては細片化した丸瓦・平瓦の破片のほか、土師器の小破片、須恵器碗の破片などがある(第83図261・263)。

次に礎石・掘立柱併用建物S B2020の周辺で検出した単独の柱穴について取り上げる。

柱穴S P251(第44図左上) 柱穴S P093に重複して検出した。平面形は南辺中央がやや突出気味となる隅丸長方形形状を呈し、南北1.2m、東西0.85m、深さ0.25mである。遺物は埋土から丸瓦・平瓦の破片が多数あるほか、土師器の破片も少量出土した。

柱穴S P248(第47図右) 柱穴S P106の南約1.7mで検出した。S P248と次に述べる柱穴S P414の間の地点が、礎石・掘立柱併用建物S B2020の身舎の南西角の柱穴があるべき位置に当たる。S P248とS P414がS B2020に関わる柱穴なのかどうかは明らかにすることができなかった。S P248の平面形は隅丸方形を呈し、南北1.05m、東西0.87m、深さ0.6mである。検出時に直径0.5mほどの柱痕を確認していた。遺物は柱痕から土師器の小片が出土したのみである。柱穴の詳細な時期は不明である。

柱穴S P414(第47図左) 柱穴S P248の西約0.9mで検出した。S P248と同じく、S P414が礎石・掘立柱併用建物S B2020に関わる柱穴なのかどうかは明らかにすることができなかった。S P414の平面形はやや南北に長い隅丸方形を呈し、南北1.17m、東西0.73m、深さ0.8mである。検出時に直径0.45mほどの柱痕を確認していた。遺物は柱痕から土師器高杯脚部の破片が出土したのみである。柱穴の詳細な時期は不明である。



第47図 礎石・掘立柱併用建物S B2020関連柱穴実測図(1/50)

柱穴 S P 289 (第48図) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020の礎石据え付け穴 S P 290と柱穴 S P 291のほぼ中間で検出した。建物として復元することはできず、単独の柱穴である。S P 289の平面形は、東辺が部分的に突出する隅丸方形を呈する。南北0.76m、東西0.8m、深さ0.05mで、非常に浅い。検出時に柱痕を確認することはできず、掘形を検出した時点で、その上面から軒丸瓦Ⅲ型式1点(第55図6)をはじめ、多数の丸瓦・平瓦が出土した。ただし土器類は出土していない。柱穴の詳細な時期は不明であるが、軒丸瓦Ⅲ型式が出土していることや S B 2020と重複することから第Ⅲ-2期以降と考える。

柱穴 S P 304 (第48図) 柱穴 S P 289の北西約0.5mで検出し、雨落ち溝 S D 293の南辺と重複する。平面形は隅丸方形を呈し、南北0.75m、東西1.0m、深さ0.05mであるが、北辺は S D 293との重複により不明な点がある。切り合い関係から S P 304の方が新しいと考える。S P 289と同様、検出時に柱痕を確認することはできず、掘形を検出した時点で、多数の丸瓦片・平瓦片と土師器の小片が出土した。柱穴の詳細な時期は不明であるが、S D 293と重複することから第Ⅲ-2期以降と考える。

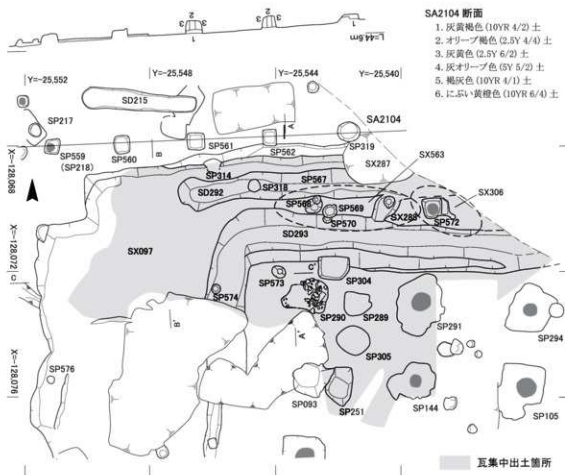
柱穴 S P 305 (第48図) 柱穴 S P 289のほぼ南に接して検出したが、建物として復元できない柱穴である。平面形は隅丸方形を呈し、南北0.9m、東西0.85mで、深さはわずかであった。掘形を検出した時点で、多数の丸瓦片・平瓦片が出土した。柱穴の詳細な時期は不明である。

(岡崎研一・筒井崇史)

雨落ち溝 S D 293 (第50図) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020の北西側、区画 S X 097の完掘後に検出した(Ⅷ-r10~12, s12・t12・u12区)。S B 2020の雨落ち溝と推定される。検出長20.6m、幅1.3~1.6m、深さ0.15~0.25mである。溝の方位は北に対して2~3°東に振る。遺物は S D 293の北辺から多量に出土した(第49図)。その大半は丸瓦・平瓦の破片で、そのほかに軒丸瓦Ⅲ型式、須恵器・土師器、鉄釘などの破片がある(第56図8、第69図77~第71図86、第83図265~275、第90図421)。また、東西方向の部分では、これらの遺物を取り上げた後、溝底の直上で瓦類が細片化した状態で検出した。部分的に断ち割りなどを行って、状況の確認に努めたが、これら細片化した瓦類が溝底に敷かれたものであるかどうか、判断はつかなかった。溝の埋土は褐色粘質土で、細片化した瓦類を含む。出土した遺物や S B 2020との関係から第Ⅲ-1期に掘削され、第Ⅳ期には埋没したものと考える。なお、S D 293を S B 2020の雨落ち溝とみると、軒の出がやや短くなってしまい(約2.0m)、建物の復元の上では検討の余地がある。

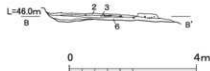
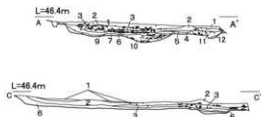
区画 S X 097 (第48図) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020の北西側で検出した(Ⅷ-r10~13, s12・13, t12・13区)。この区画は S B 2020を建てるために丘陵斜面を掘り込んで造成された平坦地と考えられる。S X 097の底面は、標高45.8m前後であることから、これが S B 2020の造成時の標高であると考えられる。S X 097の掘り込みは北西角とそこから伸びる北辺と西辺を確認しているが、北辺の東端は調査対象地外に延びるため、不明である。また、西辺は S X 097の南側に区画 S X 099とした浅い掘り込みが続くことから、断続的に伸びていたと考えられる。S X 097は北西角でクランク状を呈していることから、区画の掘削が少なくとも2時期あるのではな

いかと想定したが、土層断面の観察では明確な時期差を見出すことはできなかった。東西検出長14.9m、南北検出長9.5mを測る。S X097とS X099が一連の遺構とすると、西辺の検出長は18.8mに達する。北辺での深さは約0.4mである。北辺から北面側の柱列の心まで約5mである。西辺からS B2020の西側妻の柱列の心まで約8.5mである。北辺の方位は北に対して45°西に振る。S X097の埋土は上から黒褐色粘質土、褐色粘質土、黄褐色砂質土である。遺物は各層から出土しており、瓦類が厚く堆積しているような状況であった。なかでも2・3層が非常に多い。出土



SA2104 断面

1. 灰黄褐色(10YR 4/2)土
2. オリーブ褐色(2.5Y 4/4)土
3. 灰黄色(2.5Y 6/2)土
4. 灰オリーブ色(5Y 5/2)土
5. 褐色(10YR 4/1)土
6. にぶい黄褐色(10YR 6/4)土



1. 黄褐色砂質土(10YR 7/8) SX097 上層
2. 褐色粘質土(10YR 4/4) SX097 中層
3. 黄褐色粘質土(10YR 5/6) SX097 下層
4. 褐色砂質土(10YR 4/6)
5. 褐色粘質土(7.5YR 4/6) <2mm 前後の砂粒含む> SX260

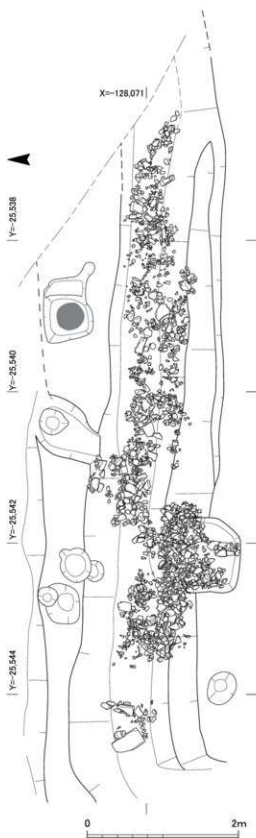
6. 黄褐色粘質土(10YR 5/6) SX097 最下層
7. 褐色砂質土(10YR 4/6) <4.5mmの小礫含む>
SX563 堆積層<瓦多量に含む>
8. 明黄褐色砂質土(10YR 6/8)
9. 明褐色粘質土(7.5YR 5/8) SD292 埋土
10. 褐色粘質土(7.5YR 4/6) SD293 埋土
11. 褐色粘質土(10YR 4/4) SP290 抜き取り埋土
12. 明褐色粘質土(7.5YR 5/8)

第48図 雨落ち溝S D293・区画S X097・掘立柱塼SA2104実測図(1/120)

した遺物には軒丸瓦Ⅱ・Ⅲ・Ⅷ型式、丸瓦・平瓦、土師器・須恵器・緑軸陶器、ひさご形土製品の結合部、鉄釘などがある(第56図9～20・第84図282～341、第90図422)。軒丸瓦Ⅲ型式は第6～9次調査で出土した総点数のうち、およそ7割がこのSX097もしくは雨落ち溝SD293から出土した。また、軒丸瓦Ⅷ型式もSX097での出土率が7割近くに達する。その一方で、軒平瓦の出土は確認していない。SX097は出土した遺物やSB2020の造営に伴って掘削された点から第Ⅲ-1期に掘削され、第Ⅳ期には埋没したものと考える。

なお、掘り込みの底面ではSB2020の雨落ち溝SD293のほか、溝SD292を検出した。SD292は検出長5.9m、幅約1.0m、深さ0.05～0.1mである。ただし、機能については不明である。遺物として丸瓦片や平瓦片、土師器小片などが出土した。平瓦片はH-B3類を1点のみが確認した。

区画SX099(第50図) 区画SX097の南側で検出した(Ⅷ-t12・13、u12・13、v13区)。SX097の南への延長部分に当たる。検出長9.3m、残存幅2.5～4.8m、深さ0.2m前後である。平坦面の標高は45.6～45.8mである。SX099の埋土は上層から瓦類を大量に含む灰黄褐色土、にぶい黄褐色土、黄褐色土である。出土した遺物には軒丸瓦Ⅰa・Ⅱ・Ⅲ・Ⅸ型式、丸瓦・平瓦、土師器・須恵器・三彩陶器片、ひさご形土製品の結合部、鉄釘、輪羽口などがある(第56図21・22、第85図342～354、第90図423)。SX099では、三彩陶器の小破片が5点ほど出土している(図版第55-2)。三彩陶器は第5次調査の際に土坑SK520から出土したのみで、今回の

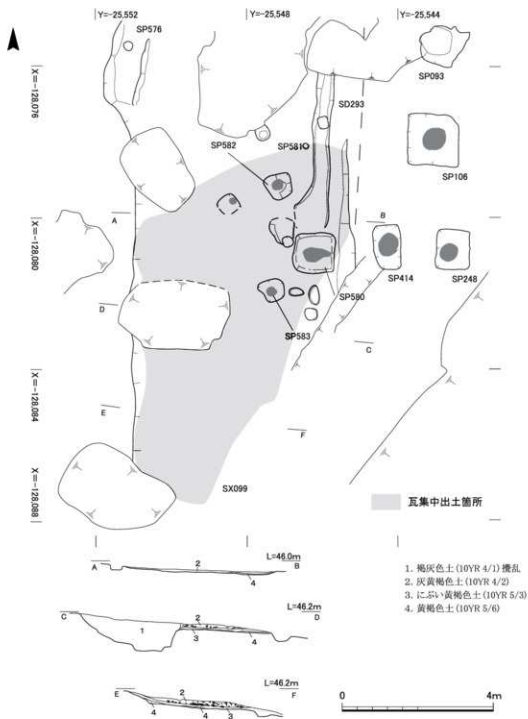


第49図 雨落ち溝SD293遺物出土状況(1/50)

調査でもS X099からしか出土していない。なお、S X099でも軒平瓦の出土は確認していない。S X099がS X097と一連の遺構であるとすれば、S X099はS X097と同様に第三 - 1 期に掘削され、第四期に埋没したものと考える。

(筒井崇史)

掘立柱建物S B2021(第51図) S B2020の西側に接して検出した(Ⅷ - s14・15、t14・15、u14・15区)。桁行5間(8.7m)、梁行2間(4.2m)の南北棟の建物である。桁行の柱間寸法は1.7m、



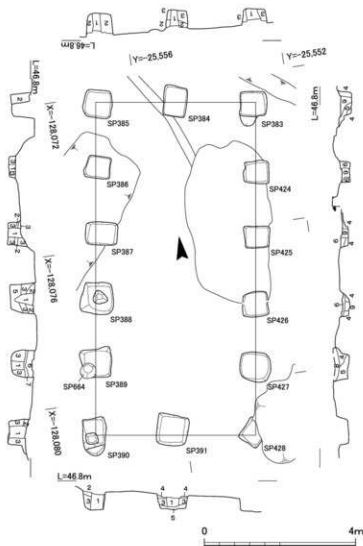
第50図 区画S X099実測図(1/100)

梁行の柱間寸法は2.1mである。柱穴掘形は一辺約0.7mの隅丸方形である。掘形の埋土は明黄褐色土、灰黄褐色土、暗灰黄色土、浅黄色土などである。柱穴S P383～391・424～425で直径約0.2mの柱痕を確認した。柱痕の埋土は、柱穴S P383～391が褐色土、柱穴S P424～426が褐灰色土である。建物の方位は北に対して9°東に振る。遺物として、各柱穴から土師器小片や須恵器片、平瓦小片などが出土した(第86図355)。出土遺物などから第Ⅱ-1期に位置づけられる可能性が高い。

(山崎美輪)

掘立柱塼S A2104(第48図) 区画S X097の北側で検出した(Ⅶ-q11～13区)。4間分(検出長9.6m)を検出し、東は調査対象地外へ延びる。S X097の北辺にはほぼ平行する。西は柱穴S P559までで、それ以上西へは延びず、また南北のいずれにも屈曲しない。各柱穴は一辺0.4～0.6mの方形、もしくは長軸0.7mの楕円形を呈する。埋土は灰黄褐色土、オリーブ褐色土、灰黄色土などである。塼の方位は北に対して2.5°西に振る。遺物として瓦類や土師器の小片が出土した。S X097の北辺とほぼ平行することなどから第Ⅲ-1期に位置づけられる。

土坑S K096(第52図) 礎石・掘立柱併用建物S B2020の西約9.7mで検出した(Ⅶ-s14・t14区)。掘立柱建物S B2021と重複し、切り合い関係からS K096の方が新しい。平面形はやや不整形な小判形を呈し、全長4.4m、幅2.2m、深さ0.2m前後である。埋土は、おおむね3層に分かれ、上層から灰黄褐色土層、炭を多く含む黒色土層、明黄褐色土層である。遺物は埋土から平瓦や埴、土師器、輪羽口などの破片のほか、鉄滓が出土した(第73図93～95、第86図357～365、第91図424・428・429・432～434)。出土した遺物

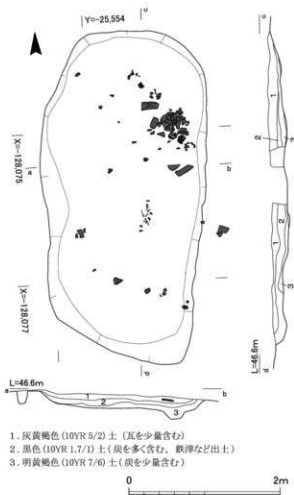


- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1. 褐色(10YR 4/0)土 | 6. 明黄褐色(2.5Y 7/6)土 |
| 2. 明黄褐色(10YR 6/6)土 | 7. 黄色(2.5Y 7/8)土 |
| 3. 灰黄褐色(10YR 4/2)土 | 8. にぶい黄褐色(10YR 4/3)土 |
| 4. 暗灰黄色(2.5YR 4/2)土 | 9. 褐灰色(10YR 6/1)土 |
| 5. 浅黄色(2.5Y 7/0)土 | |

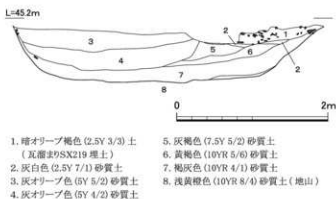
第51図 掘立柱建物S B2021実測図(1/100)

の内容から鍛冶作業に関連する遺物を廃棄した土坑ではないかと推定される。出土遺物や遺構の切り合い関係から第Ⅱ-2期以降に位置づけられる。

土坑 S K 143 (第53図) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020の南約8.8mで検出した(Ⅷ-x10・11区)。東西方向に主軸をもち、平面形が隅丸長方形を呈する。長辺6.2m、短辺4.1m、深さ0.7mである。埋土は大きく7層に分けられる。第1層は後述する瓦溜り S X 219の堆積層に相当する。第2～



第52図 土坑 S K 096実測図(1/50)



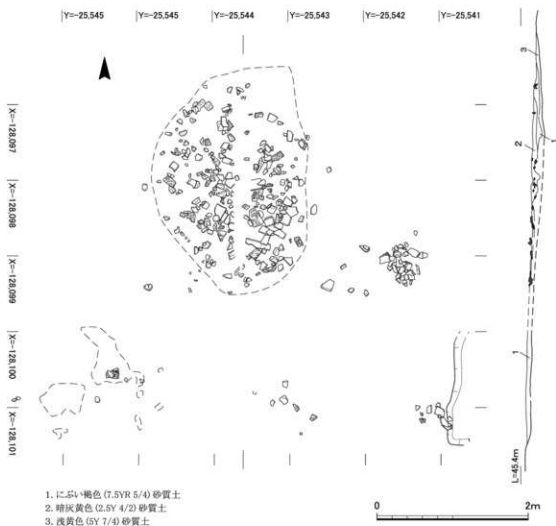
第53図 土坑 S K 143土層断面図(1/50)

7層が S K 143の埋土である。遺物として、第3～7層から土師器杯 A・甕、須恵器杯 A・杯 B 蓋などが出土した(第57図23、第86図366～370)。出土土器は第Ⅰ期のものに限られるが、瓦類には丸瓦 M・B 類や平瓦 H・D 類があり、第Ⅱ-2期以降に位置づけられる。

瓦溜り S X 219 上記土坑 S K 143の最上層で検出した(Ⅷ-x11区)。瓦類の堆積はやや歪な楕円形の広がりをもち、北東から南西にかけて主軸をもつ。長軸5.4m、短軸2.5mで、瓦類の堆積の厚さは約0.2mである。埋土は暗オリーブ褐色土で、軒丸瓦Ⅱ型式や軒平瓦Ⅱ型式、丸瓦・平瓦などの瓦類、土師器・須恵器の土器などが出土した。(第57図24・25、第86図373～376)。

瓦溜り S X 208 (第54図) 土坑 S K 143や瓦溜り S X 219の南西側で検出した(Ⅷ-y11・12区、Ⅸ-a11・a12区)。北東から南西にかけて主軸をもつが、瓦類の広がりはやや歪である。長軸7.2m、短軸6.2mである。

瓦類の検出時やその後の取り上げの過程で、これらの瓦類が廃棄されたであろう土坑の輪郭の検出や、断ち割りを行って瓦類の堆積状況と土坑の底面の確認に努めたが、いずれも確認できなかった。瓦類の堆積状況は場所によって異なり、最上面の瓦類を除去すると、さらに瓦類の集中する部分が北半部で確認できた。第



第54図 瓦溜り S X 208実測図(1/50)

54図はこの範囲を図示したものである。瓦溜りの覆土はにぶい褐色砂質土で、大量の瓦類が出土した。出土遺物としては、軒丸瓦Ⅱ・Ⅲ型式のほか、埴仏、土師器杯、須恵器杯B蓋などの土器の小破片が出土している(第57図26～31、第86図371・372、第89図417、第90図420)。

(筒井崇史)

2) 出土遺物

美濃山廃寺第7次調査では美濃山廃寺に伴う遺構から、大量の瓦類をはじめ、土師器・須恵器などの土器類、ひざご形や覆鉢形などの土製品、輪羽口や鉄滓などの冶金関連遺物、鉄製品などが出土した。また、弥生土器も出土した。これは美濃山廃寺下層遺跡に伴うものであるが、美濃山廃寺関連遺構から出土した場合は合わせて報告することとした。

以下では大量に出土した瓦類をはじめ、遺物の種別ごとに報告する。

(1) 瓦類

美濃山廃寺第7次調査で出土した瓦類は、出土した遺物のうち9割に達する。瓦類の型式分類

や分析方法については、第6次調査と同様の方法によることとし、数量の比較は原則として重量によって行った。第7次調査で出土した瓦類の総量は3,500kgに達する。その大半が丸瓦または平瓦である。また、埴はわずかに1点のみで、1.6kgである。

以下では、軒瓦、丸瓦・平瓦、埴の順で概要を述べることにする。

①軒瓦

第7次調査で出土した軒瓦は、軒丸瓦7型式113点と、軒平瓦2型式9点である。軒瓦の型式分類は、美濃山廃寺第6次調査における分類に準じる(第6次調査報告67～89頁参照)。報告は遺構ごとに軒丸瓦・軒平瓦の順で行う。なお、重機掘削中や遺構面精査中など、いわゆる遺物包含層出土のものについては掲載していない。

区画満SD100-3出土軒瓦(第55図1) 1は軒丸瓦Ⅱa型式である。瓦当の4/5程度が残存し、丸瓦部との接合部で剥離、欠損する。瓦当径は16.5cmである。胎土は密で、焼成は良好である。色調は浅黄色を呈する。

掘立柱建物・柱穴出土軒瓦(第55図2～7) 2は軒丸瓦Ⅱ型式である。掘立柱建物SB2001の柱穴SP042から出土した。中房と蓮弁の一部の破片で、Ⅱa型式なのかⅡb型式なのか判断がつかない。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。

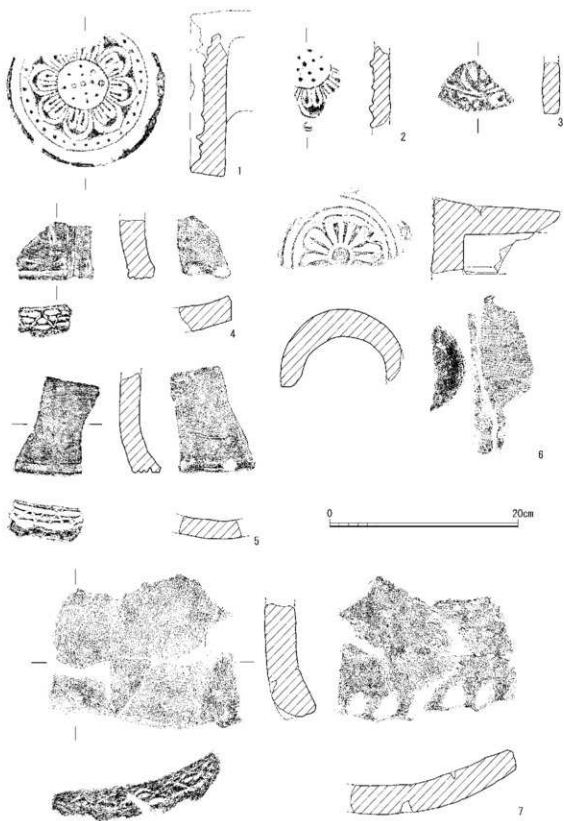
3は軒丸瓦Ⅰb型式である。掘立柱建物SB2003の柱穴SP080から出土した。外区と蓮弁の一部が残存する。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。

4は軒平瓦Ⅰa型式である。掘立柱建物SB2012の柱穴SP071から出土した。残存瓦当幅は5.2cmである。瓦当と右側縁の一部が残存する。凹面の瓦当縁に幅0.8cmほどの明瞭な段差がみられるが、次の5は同型式であるものの、段差は認められない。施工の一部であろうか。側縁に2段のケズリを施す。胎土は密で、焼成は良好である。色調はにぶい橙色を呈する。

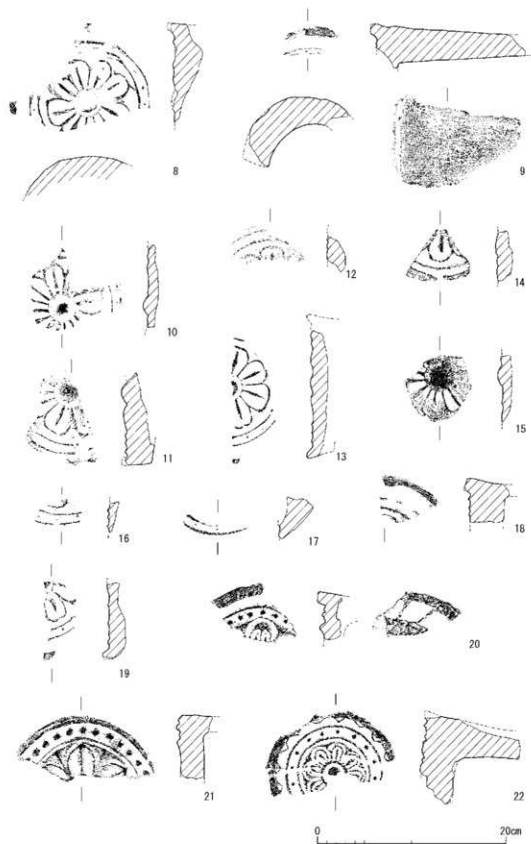
5も軒平瓦Ⅰa型式である。掘立柱建物SB2015の柱穴SP350から出土した。残存瓦当幅は7.8cmである。4にみられた凹面の瓦当縁の段差はみられない。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

6は軒丸瓦Ⅲ型式である。柱穴SP289から出土した。瓦当面と丸瓦部の1/2程度が残存する。瓦当径は14.5cm前後、残存長13.2cmである。中房の蓮子は大きめの1個を配置する。瓦当裏側から丸瓦部凹面にかけて布目が見られる。このことから製作技法として横置き一本作りの可能性が考えられる。後述する8や10～20では、瓦当面が薄く剥離することから、横置き一本作りに伴って粘土を詰めたことを示すと思われる。丸瓦部の凹面の側縁と端面にヘラケズリを施す。胎土は密で、焼成は良好である。色調は暗灰色を呈する。なお、SP289は掘立柱建物としては復元できなかったが、礎石・掘立柱併用建物SB2020と重複する柱穴である。

7は軒平瓦Ⅰb型式である。礎石・掘立柱併用建物SB2020の柱穴SP093から出土した。残存瓦当幅は17.4cmである。瓦当と右側縁の一部が残存する。側縁にケズリを施す。摩滅のため、凹面の瓦当縁の段差の有無は不明である。胎土は密で、焼成はやや軟質である。色調は淡黄色である。



第55図 軒瓦実測図1 遺構出土(1/4)



第56図 軒瓦実測図2 遺構出土(1/4)

溝S D293出土軒瓦(第56図8) 8は軒丸瓦Ⅲ型式である。瓦当の1/3余りが残存する。瓦当径は16.0cmである。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。

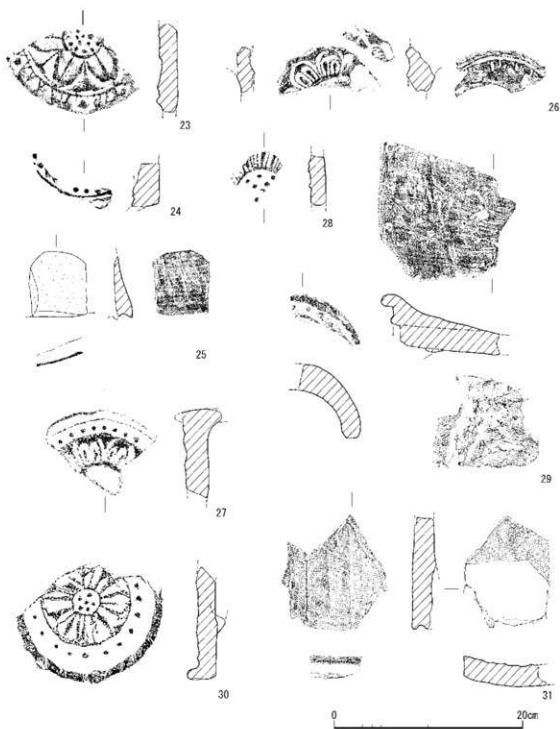
区画S X097出土軒瓦(第56図9～20) 9は軒丸瓦Ⅲ型式である。丸瓦部は1/2程度が残存するものの、瓦当は外区のごく一部が残存するのみである。残存長16.5cmを測る。凹面側に布目が残る。6と同様、横置き一本作りの可能性が高い。胎土は密で、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。10～19はいずれも軒丸瓦Ⅲ型式の破片資料である。19を除き、厚さが1.0～2.5cmほどに、薄く剥離しているものが多い。軒丸瓦Ⅲ型式については、第5次調査出土資料(報告書図23の1)や上記6の資料から、横置き一本作りと思われることから、瓦当の剥離も范への粘土のつめ方によるものと考えられる。19はやや厚手の資料である。これらはおおむね胎土は密で、焼成は良好である。色調は外面が灰色、断面がにぶい黄褐色を呈するものが多い。20は軒丸瓦Ⅱb型式である。外区と内区の一部が残存する。瓦当裏側には丸瓦部の接合に伴う刻み目の圧痕が転写されている。胎土は密で、焼成は良好である。色調は青灰色を呈する。

区画S X099出土軒瓦(第56図21・22) 21は軒丸瓦Ⅰa型式である。瓦当の2/5程度が残存する。瓦当の復元径は15.4cm、厚さ2.5cmである。瓦当表面はナデを施す。胎土は密で、焼成はやや軟である。色調は灰白色を呈する。22は軒丸瓦Ⅸ型式である。瓦当の1/2程度と丸瓦部の一部が残存する。残存長は10.4cm、瓦当の復元径は13.0cmである。平城宮6313D型式と同范もしくは同文と考えられる。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調はにぶい黄褐色を呈する。

土坑S K143出土軒瓦(第57図23) 23は軒丸瓦Ⅰb型式である。瓦当の1/3程度が残存する。瓦当の復元径は16.4cm、厚さは1.9cmである。瓦当裏面はナデを施す。全体に摩滅が著しい。胎土はやや粗く、焼成はやや軟である。色調は浅黄褐色を呈する。

瓦溜りS X219出土軒瓦(第57図24・25) 24は軒丸瓦Ⅱ型式である。外区外縁の形状が明らかでないため、Ⅱa型式かⅡb型式か断定できない。外区の珠文のみの破片である。瓦当の復元径は16.8cmである。胎土は密で、焼成はやや軟である。色調は灰色が強い灰白色を呈する。25は軒平瓦Ⅱ型式である。平瓦部に接合した頸部が剥離したものである。瓦当の残存幅5.0cm、残存長6.8cmを測る。凸面にはナデを施す。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。

瓦溜りS X208出土軒瓦(第57図26～31) 26は軒丸瓦Ⅱ型式である。内区の蓮弁のみの破片である。瓦当裏面には丸瓦部との接合のため刻み目が施される。裏面を観察すると、刻み目を持つ粘土塊の前後に布目の圧痕がみられる粘土塊がある。范に粘土をつめる際や丸瓦部を接合する際に布を使用したのであろうか。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。27は軒丸瓦Ⅱa型式である。外区と内区の蓮弁の一部が残るものの、中房は摩滅しており、蓮子等も確認できない。瓦当の復元径は17.0cm、厚さは2.5cmである。全体に摩滅が著しい。胎土はやや粗く、焼成もやや軟である。色調は浅黄色を呈する。28は軒丸瓦Ⅱ型式である。中房と蓮弁の一部の破片である。瓦当の厚さは1.6cmである。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰黄色を呈する。29は軒丸瓦Ⅴ型式かと推定される資料である。外区と丸瓦部の一部が残存する。瓦当の復元径は15.0cmほど、残存長は14.4cmである。瓦当は外区の外縁と珠文が確認できる。内区は丸瓦部の



第57図 軒瓦実測図3 遺構出土(1/4)

接合部で剥落しているが、丸瓦部と外縁部の粘土では色調が異なり、接合部の状況がわかりやすい。丸瓦部の先端には刻み目などの加工は認められず、丸瓦部製作時の布目の圧痕が凹面側に残る。また、広端面に施されたケズリの痕跡も明瞭に確認できる。瓦当と丸瓦の接合部には粘土を補充し、その上からナデを施す。凸面は全体に縦方向のナデである。胎土は密であるが、稀に径4mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。色調は灰色を呈する。なお、第6次調査で類例が

出土している(第6次調査報告第62図18)。30は軒丸瓦Ⅶ型式である。丸瓦部とその接合部分が欠損するものの、瓦当の2/3程度が残存する。瓦当径は16.0cm、厚さは2.0cmである。全体に摩滅が著しく、瓦当裏面の調整等は不明である。胎土はやや粗く、焼成も軟質である。色調は浅黄色を呈する。31は軒平瓦Ⅱ型式である。顎部が剥落し、平瓦の製作時の平行タキを確認できる。瓦当の残存幅は5.6cmである。胎土は密で、焼成は堅緻である。色調は灰色を呈する。

②丸瓦・平瓦

第7次調査で出土した丸瓦・平瓦については、第6次調査における分類に準じて、型式の分類、認定を行った(第6次調査報告67～69頁を参照)。報告は、代表的のものについて図示し、遺構ごと出土傾向を重量で示した。

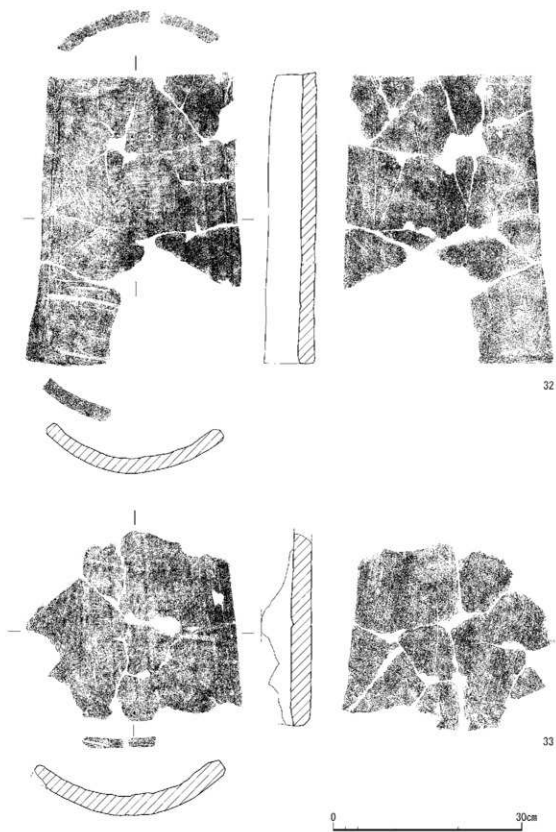
区画溝S D001・010・090・100出土瓦類(第58図32～第61図40) 4条検出した区画溝のうち、瓦類が大量に出土したのはS D090のみであり、残る3条のS D001・010・100については割平等もあるが、わずかしか出土しなかった。S D001の出土総量は2.7kgで、平瓦ばかりであった。H-D類の小片も含まれるが、大半はH-A類である。S D010の出土総量は1kgにも満たず、分類できないものばかりである。S D100の出土総量は1kg程度で分類できないものばかりである。

S D090では、Ⅷ-k17区付近で大量の瓦類が出土した(第133図)。この付近で出土した瓦類の総量は388.4kgである。このうち、平瓦は318.5kgと全体の8割以上を占め、明らかに丸瓦と断定できるものは1%程度しか確認できなかった。また5cm以下とした破片でも平瓦H-A類と思われるものが多いことから、平瓦の比率はさらに上がるとと思われる。平瓦はH-A1類が238.9kgと平瓦出土量の全体の75%を占める。H-A2類も42.6kg出土しており、凸面にナデを施すH-A類が出土平瓦の98%を占めることになる。このほかに、H-B1類を確認したもの、ごく少量である(2.1kg)。

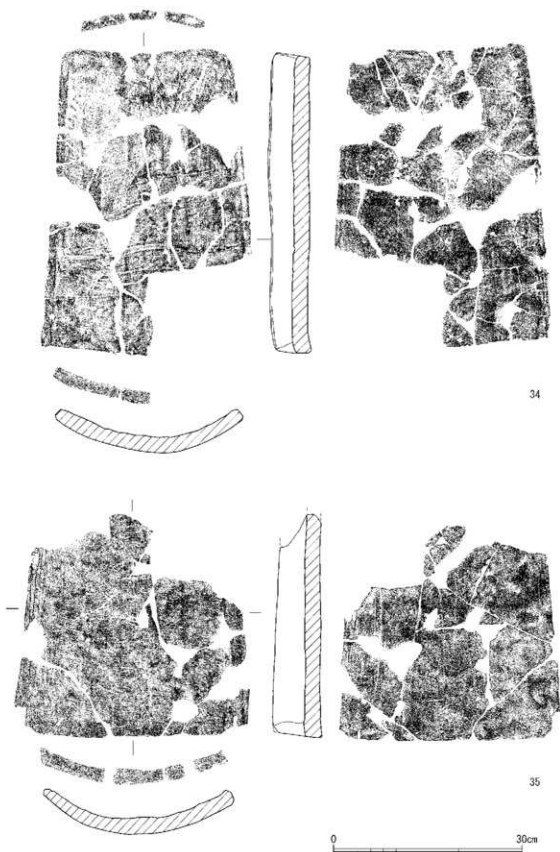
32～40はⅧ-k17区付近で出土したもので、いずれも平瓦H-A1類に分類できる。これらは、胎土や焼成、調整手法などの点で、ほぼ同じ特徴を有する。ただ色調のみは、橙色ないし赤褐色を呈するもの(32・33・35～37・40)と灰白色を呈するもの(34・38・39)に分かれ、前者が圧倒的に多い。出土資料から法量を復元すると、全長46～48cm、狭端幅25～27cm、広端幅31～32cm、厚さ2～4cm程度である。重量は32で6.2kg、36で4.2kgである。胎土は密で、0.5～2mm程度の砂粒を含むものが多い。焼成は良好なものが多い。凸面の調整はおおむね縦方向のナデで、丁寧に施されることが多いが、部分的に先行するタキ痕跡を確認できる場合がある。凹面には枅板痕が明瞭に残る。枅板の幅は3～4cmである。

このほか、S D090-2の北西角からS D090-1にかけて、第3次調査と第7次調査でそれぞれ平瓦が出土している。また、S D090-5でも平瓦の破片が出土している。

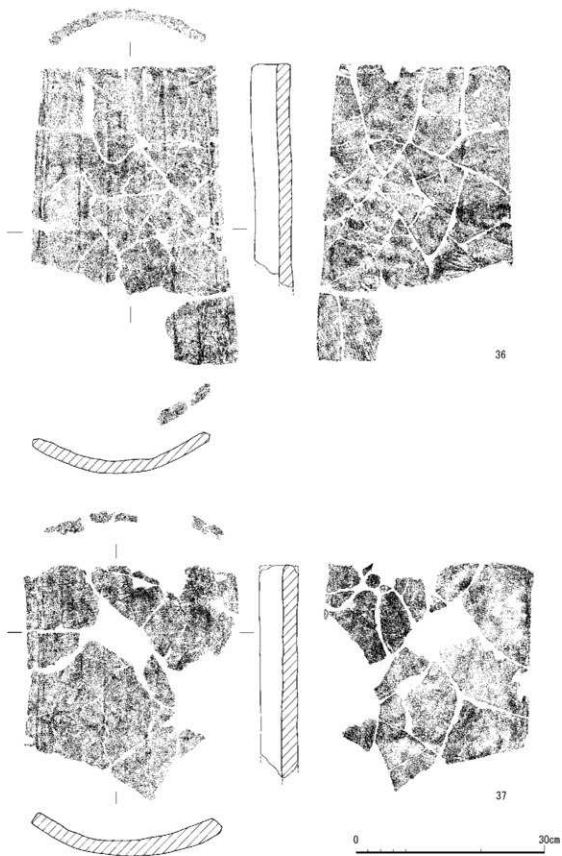
掘立柱建物S B2012出土瓦類(第62図41～44) 出土総量は6.4kgである(内訳は丸瓦1.5kg、平瓦4.9kg)。丸瓦は出土量が少なく、41も含めてM-A類かM-B類か判別つかないものがほとんどである。平瓦はH-A～H-C類が確認でき、H-A類またはH-B類が主体である。これに対してH-D類は確認できなかった。したがって、S B2012の造営段階では1枚作り平瓦がまだ導入されていなかったと考えることができる。図示したものうち、41が柱穴S P070、42が柱穴S P002、43・



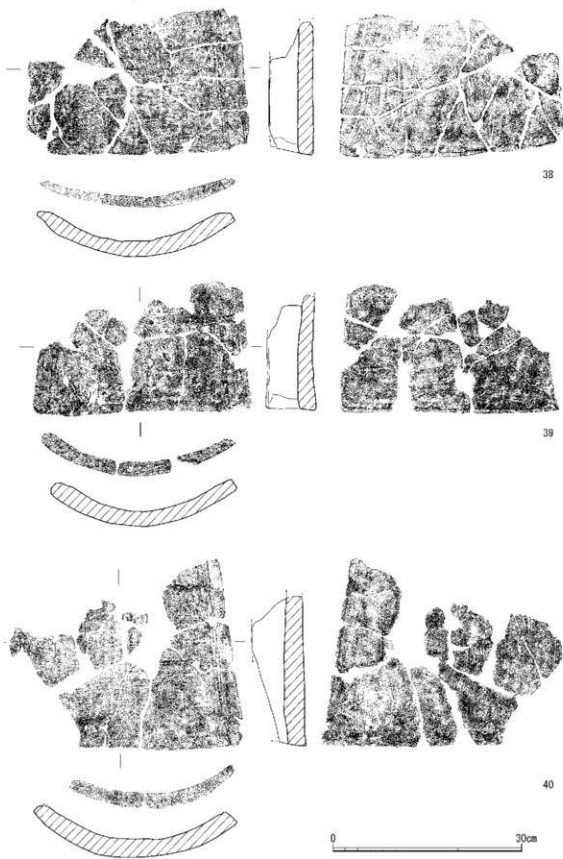
第58図 区画溝 S D090出土平瓦実測図1 (1/6)



第59図 区画溝 S D090出土平瓦実測図2 (1/6)



第60図 区画溝S D090出土平瓦実測図3 (1/6)



第61図 区画溝 S D090出土平瓦実測図4 (1/6)

44が柱穴S P 351からの出土である。

掘立柱建物S B 2014出土瓦類 (第62図45～48) 出土総量は少なく、3.6kgである(内訳は丸瓦0.5kg、平瓦3.1kg)。丸瓦は出土量が少なく、45を含めてM-A類かM-B類か判別がつかない。平瓦はH-A～H-D類のいずれも確認できる。H-A類は、色調が赤褐色を呈するものである。H-C類またはH-D類は、焼成がやや軟質で、摩滅しているものが多い。45・48は柱穴S P 122、46・47は柱穴S P 118の出土である。

土坑K K 352出土瓦類 出土総量は1.9kgで、すべて平瓦である。型式はH-A1類またはH-A2類である。

総柱建物S B 2015出土瓦類 (第63図49～54) 各柱穴から大量の瓦類が出土した。出土総量は16.8kgである(内訳は丸瓦0.5kg、平瓦15.7kg、不明0.6kg)。明らかに丸瓦と判断できるものは図示した1点しかなく(49)、M-A類かM-B類かも判断できない。平瓦はH-A～H-D類のいずれも確認できるが、H-A類やH-B類はやや少ない(50・52)。縄タタキを施したH-C類が多く、中には粘土紐成形のH-C2類が少数認められる(53)。大半は粘土板成形である。全体に摩滅気味のものが多く、確実にH-D類と言えるものは少ないが、凸面に縦位のタタキを施すものもあることから、一定量は存在するようである。出土している瓦類の色調はまちまちである。49・51～54は柱穴S P 350、50は柱穴S P 365からの出土である。

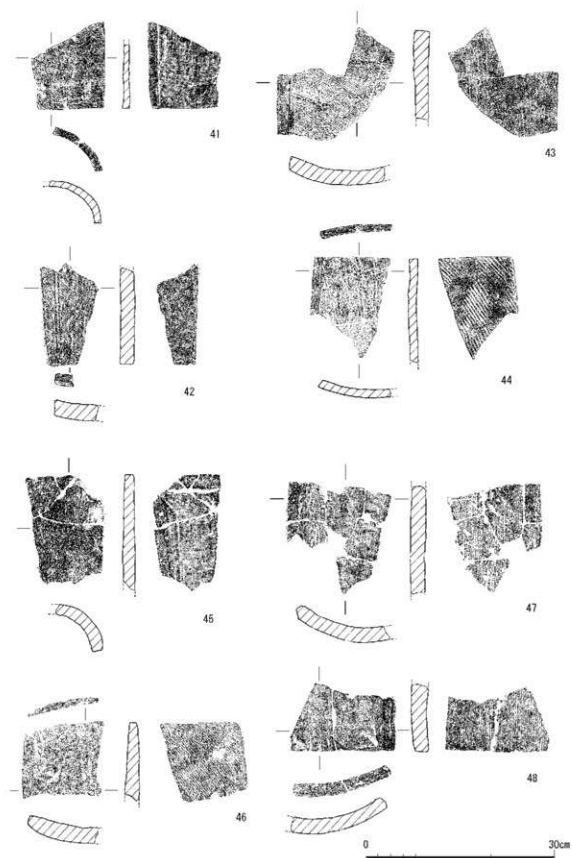
総柱建物S B 2010出土瓦類 出土総量は7.1kgである(内訳は丸瓦0.4kg、平瓦6.5kg、不明0.2kg)が、この建物については第4次調査の際に一部が調査されており、その際も多数の瓦類が出土しているため、今回提示した数量は本当の意味での総量ではない。丸瓦はM-A類かM-B類か判別のつかないものである。平瓦はH-A～H-D類までの各型式が出土している。H-C2類も1点のみだが、確認できる。H-D類が柱穴S P 188から出土している。

掘立柱建物S B 2005出土瓦類 出土はわずか1点のみで、平瓦の破片である(0.1kg)。凸面に縦位方向と思われる縄タタキを施すが、摩滅も著しく、H-C類なのかH-D類なのか断定できない。

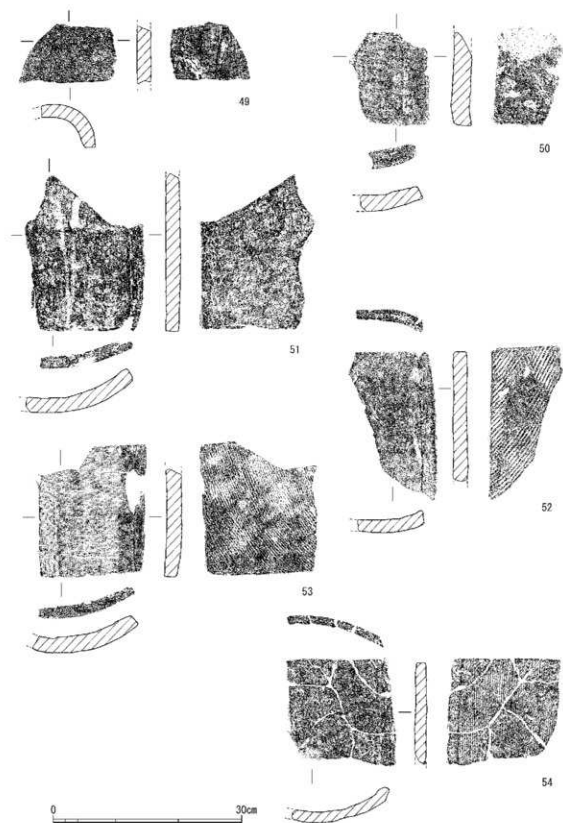
土坑K K 103出土瓦類 出土総量は0.6kgである(内訳は丸瓦0.2kg、平瓦0.4kg)。丸瓦や平瓦の破片が出土している。平瓦は細片が多いが、色調が明赤褐色を呈するH-A類の破片が確認できる。

土坑K K 126出土瓦類 出土総量は0.5kgである(内訳は丸瓦0.1kg、平瓦0.4kg)。丸瓦や平瓦の破片が出土している。平瓦はH-A2類の破片である。

掘立柱建物S B 2001出土瓦類 (第64図55～第65図62) 各柱穴から多数の瓦類が出土しており、出土総量は32.9kgである(内訳は丸瓦5.5kg、平瓦22.2kg、不明5.2kg)。掘立柱建物で出土した瓦類としては非常に多い。丸瓦はM-B類を確認しているが、判別のできないものも多い。平瓦はH-A～H-D類のいずれも確認できる。摩滅しているものも多いが、H-C類ないしH-D類と考える凸面に縄タタキを施すものが多い。明らかにH-D類と判断できるものもある(62)。H-B1類の1点は平瓦の幅が通常の半分ほどに打ち割られたものがあり、鬘斗瓦の可能性がある(59)。美濃山麩寺全体で、明らかに鬘斗瓦と思われる資料はなく、可能性があるものとして59のみを確認した。55は柱穴S P 040、56・59は柱穴S P 046、57は柱穴S P 042、58・62は柱穴S P 043、61は柱穴S



第62図 掘立柱建物S B 2012・2014出土瓦類実測図(1/6)



第63図 総柱建物S B 2015出土瓦類実測図(1/6)

P044からの出土である。また、60はS P042とS P046の出土資料が接合したものである

掘立柱建物 S B 2003出土瓦類 (第66図65・66) 出土総量は6.3kgである(内訳は丸瓦0.4kg、平瓦2.5kg、不明3.4kg)。大型の破片は少なく、長さ10cm未満のものが多く、丸瓦は出土量が少なく、M-A類かM-B類か判別のつかないものがほとんどである。平瓦はH-A～H-D類のいずれも確認できる。摩滅をしているものが多く詳細は明らかにできない。丸瓦・平瓦とも胎土に長石やチャートなどの砂粒を含むが、焼成は全体に甘いものが多い。出土している資料の色調はまちまちである。65はH-D類で柱穴S P087からの出土、66はH-B2類で柱穴S P080からの出土である。

掘立柱建物 S B 2004出土瓦類 (第66図67～69) 出土総量は少なく、3.8kgである(内訳は丸瓦0.1kg、平瓦1.5kg、不明1.7kg)。67を除くと、明らかに丸瓦と思われる破片はほとんどない。平瓦も破片が小さく、摩滅もしているが、H-D類の可能性のあるものが含まれる(68・69)。

掘立柱建物 S B 2016出土瓦類 (第65図63・64) 出土総量は5.8kgである。大半が平瓦(5.6kg)で、丸瓦と思われる破片は含まれていない。平瓦は摩滅が著しく、凸面の調整や凹面の布目などの判別できないものも多い。しかし、わずかにみてとれる特徴からH-D類である可能性が高い(63)。胎土に微細な砂粒を含むが、焼成が甘く摩滅の著しい一群と、胎土に径1mm程度の砂粒を含み、焼成がやや軟質の一群とが、全体に占める割合が高そうである。後者は一枚作りであることが確実であるが、前者は摩滅のため確かなことはわからない。柱穴S P345から摩滅気味の平瓦H-B1類の資料が出土した(64)。

掘立柱建物 S B 2017出土瓦類 出土総量は非常に少なく、わずか0.4kgである(内訳は平瓦0.2kg、不明0.2kg)。明らかに丸瓦と思われる破片は含まれていない。平瓦は摩滅が著しく、詳細は不明であるが、縦位に縄タキを施すものがある。

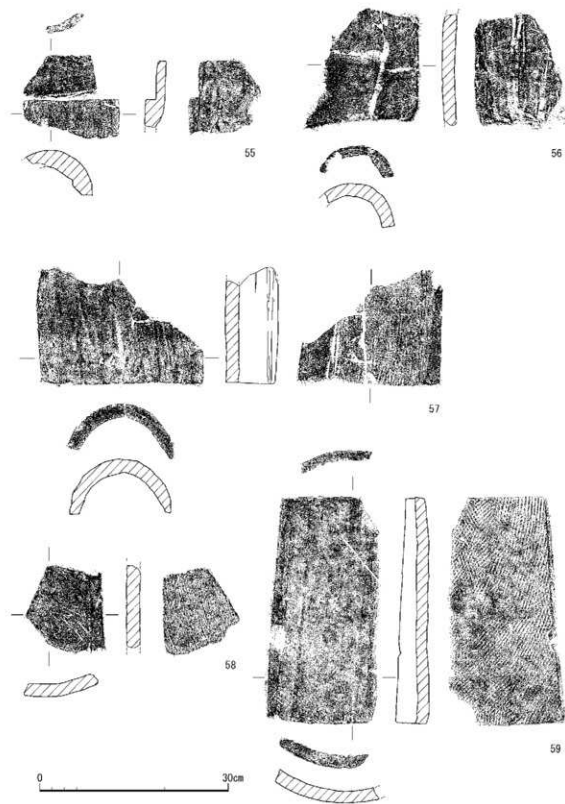
溝 S D 405出土瓦類 出土総量は1.8kgで、すべて平瓦と考えられる。平瓦も残りの良いH-A1類が2点ある(同一個体かもしれない)が、残りは小破片である。

土坑 S K 092出土瓦類 出土総量は少なく、1.0kgである(内訳は平瓦0.3kg、不明0.7kg)。全体に細片が多く、丸瓦と思われる破片はごくわずかである。平瓦も縦位に縄タキを施すものが1点あるほかは小破片のみである。

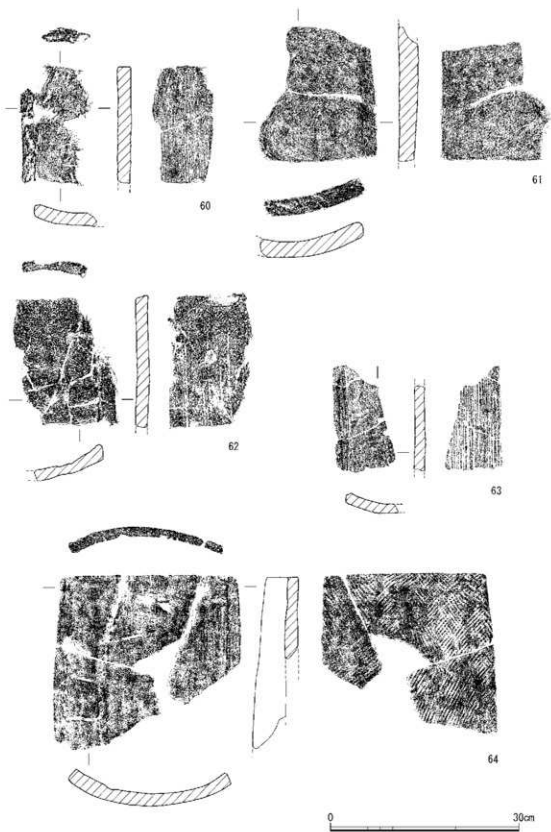
掘立柱建物 S B 2009出土瓦類 出土総量は4.0kgである(内訳は丸瓦0.1kg、平瓦3.8kg、不明0.1kg)が、この建物についても第3次調査の際に一部が調査されており、その際も多数の瓦類が出土しているため、今回提示した数量は本当の意味での総量ではない。丸瓦は量が少なく詳細は不明である。平瓦はH-A類が2.5kgと多く出土している。また、H-D類も1.3kg出土している。

雨落ち溝 S D 355出土瓦類 出土総量は1.1kgで、すべて平瓦である。摩滅が著しいが、胎土に径1～2mm程度の長石やチャートなどを含む、やや粗いもので、焼成が甘く、色調は灰オリーブ色ないし橙色を呈するものが多い。これは調整が不明瞭であるが、区画溝S D090で大量に出土しているH-A1類ないしH-A2類と同一型式に位置づけられると考えている。

土坑 S K 415出土瓦類 出土総量は16.2kgである(内訳は丸瓦2.0kg、平瓦14.2kg)。土坑の一括資料であるため、出土破片数は29点である。丸瓦には玉縁の破片があり、M-B類が含まれる



第64図 掘立柱建物 S B 2001出土瓦類実測図(1/6)



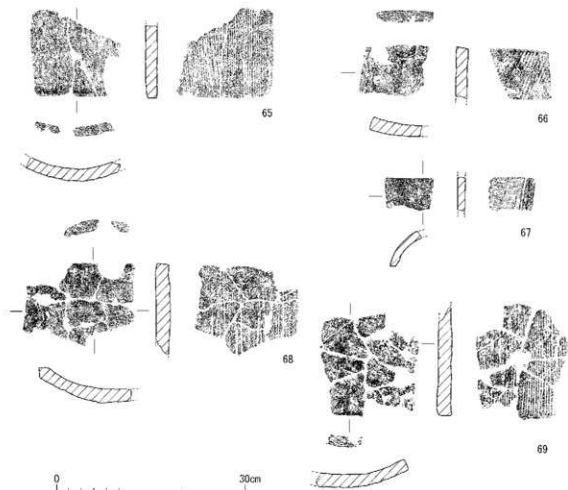
第65図 掘立柱建物 S B 2001・2016出土瓦類実測図(1/6)

(1.35kg)。平瓦はH-B1ないしH-B2類が多く、明らかに一枚作りの平瓦は確認していない。H-B1ないしH-B2類は焼成がやや甘く、摩滅の著しいものが多い。ただし、小さな破片資料であるが、硬質なものも含まれる。H-A類とH-C類と思われる破片もあるが、摩滅が著しく詳細は不明である。なお、S K 415からは覆鉢形土製品が1点出土している(第88図399)が、H-D類が認められないということは覆鉢形土製品の時期を考える上で参考になる。

土坑 S K 433出土瓦類 出土総量は3.6kgである(内訳は平瓦0.4kg、不明3.2kg)。破片資料が多く、長さが10cmに満たないものが大半である。平瓦は摩滅の著しいものもみられるが、調整や胎土・色調などの点から、区画溝 S D 090で大量に出土しているH-A1ないしH-A2類と同一型式に位置づけられるものが多い。

土坑 S K 225出土瓦類 出土総量は1.2kgである(内訳は平瓦0.8kg、不明0.4kg)。平瓦はH-A1類とH-C1類の大きめの破片が1点ずつあるほかは小片のみである。

礎石・掘立柱併用建物 S B 2020出土瓦類 個々の柱穴や礎石据え付け穴の遺存状況が異なるため出土量に違いがあるが、S B 2020全体での瓦類の出土総量は182.3kgで、内訳は丸瓦24.9kg、平瓦133.9kg、不明23.5kgである。丸瓦には破片資料が多いため、M-A類かM-B類か判断できるも



第66図 掘立柱建物 S B 2020出土瓦類実測図(1/6)

のが少ない。判断できるものの大半はM-B類である。平瓦は、個々の柱穴では量の多寡に違いがあるものの、全体として凸面に縦位の縄タキを施すH-D類が多い。なお、柱穴SP250から瓦類の出土はなかった。

礎石据え付け穴SP290 出土総量は6.6kgである(内訳は丸瓦0.4kg、平瓦3.2kg、不明3.0kg)。不明なものが多く、丸瓦の量が少ない。平瓦は凸面に縦位の縄タキを施すH-D類がみられる。

柱穴SP291(第68図75) 出土総量は35.3kgである(内訳は丸瓦5.4kg、平瓦26.3kg、不明3.6kg)。丸瓦はM-A類・M-B類の区別がつかないものが大半で(5.0kg)、M-B類と判断できるものが少量存在する(0.4kg)。丸瓦にくらべて平瓦が多く、その半数が凸面に縦位の縄タキを施すH-D類である(12.5kg)。また、平瓦は詳細に分類できないものが8.7kgほどある。このほかH-B1類が一定量存在する(1.8kg)。

礎石据え付け穴SP294 出土総量は4.5kgである(内訳は丸瓦0.6kg、平瓦2.5kg、不明1.4kg)。長さ10cmを超えるような破片はほとんどない。丸瓦・平瓦とも型式分類ができないものが8割を超える。

柱穴SP142 出土総量は3.7kgである(内訳は丸瓦0.6kg、平瓦2.1kg、不明1.3kg)。丸瓦はM-A類かM-B類か、判別のできない破片がほとんどであるが、M-B類と断定できるものが1点(0.1kg)ある。平瓦はH-B1類が最も多く(0.7kg)、次いでH-C類が多い(0.3kg)。H-D類と断定できるものではなく、可能性のあるものが少しある程度である(最大で0.4kg)。

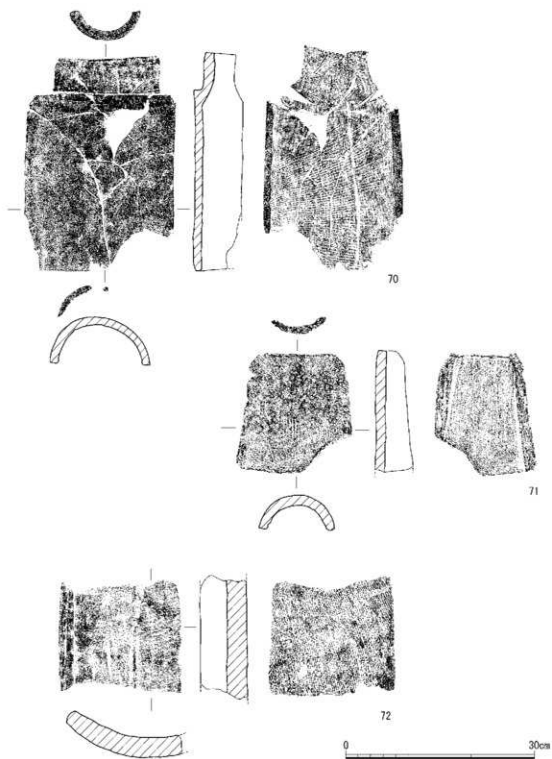
柱穴SP093(第68図73・74) 出土総量は58.5kgで、SB2020の柱穴の中では最も大量の瓦類が出土した(内訳は丸瓦6.8kg、平瓦45.9kg、不明5.8kg)。平瓦が圧倒的に多く、かつその2/3程度が凸面に縦位の縄タキを施すH-D類である(32.1kg)。ただし、1枚作りと断定できないものもある。詳細な分類できないものが7.3kgほどある。丸瓦はM-A類・M-B類の区別がつかないものが全体の9割を超え(6.4kg)、M-B類と判断できるものは1割に満たない(0.4kg)。

礎石据え付け穴SP144 出土総量は1.6kgである(内訳は丸瓦0.2kg、平瓦1.0kg、不明0.4kg)。長さ10cmを超えるものはほとんどなく、小さな破片が多い。

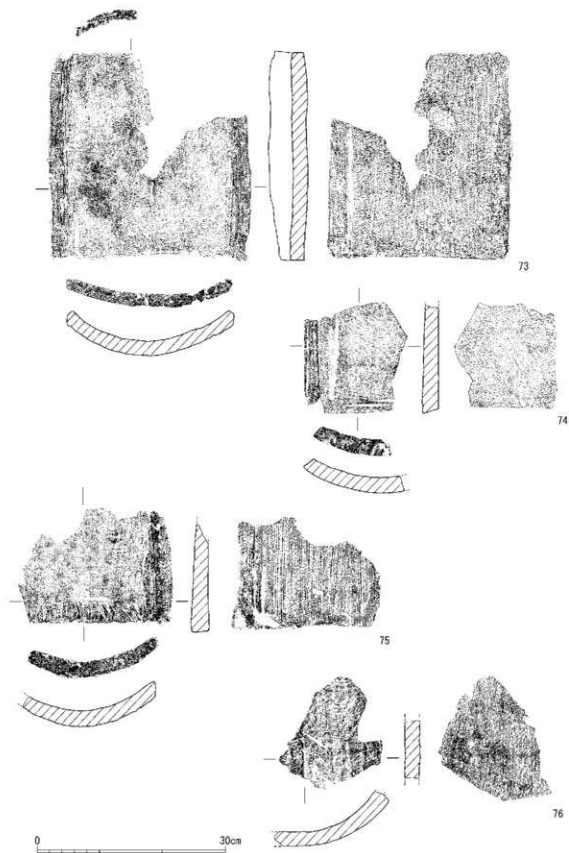
柱穴SP105 出土総量は16.4kgである(内訳は丸瓦0.8kg、平瓦12.8kg、不明2.8kg)。平瓦が圧倒的に多く、その半数が凸面に縦位の縄タキを施すH-D類である(6.7kg)。このほかH-B1類が一定量存在する(1.3kg)。丸瓦は全体の出土量が少ないものの、1/3程度がM-B類である(0.3kg)。

柱穴SP141(第67図70・第68図76) 出土総量は12.7kgである(内訳は丸瓦2.5kg、平瓦10.0kg、不明0.2kg)。平瓦が圧倒的に多く、その大半が凸面に縦位の縄タキを施すH-D類である(7.1kg)。このほかH-A2類が一定量存在する(1.7kg)。丸瓦はM-A類・M-B類の区別がつかないものは、70のみで、M-B類である(1.5kg)。なお、76は平瓦H-C類であるが、凸面に幅1.5cm程度の朱線が残る。建物の柱や組物を朱塗りする際に付着したものと考えられる。76は掘形出土であるため、SB2020ではなく、ほかの建物で使用されていたものが混入した可能性がある。

柱穴SP106 出土総量は10.9kgである(内訳は丸瓦1.5kg、平瓦6.6kg、不明2.8kg)。平瓦のうちその半数が凸面に縦位の縄タキを施すH-D類である(2.9kg)。このほかH-C類が一定量存在す



第67図 礎石・掘立柱併用建物S B 2020出土瓦類実測図1 (1/6)



第68図 礎石・掘立柱併用建物S B 2020出土瓦類実測図2 (1/6)

る(1.8kg)。丸瓦はM-A類・M-B類の区別がつかないものが多く、M-B類と断定できるものは1点のみである。

柱穴SP139 出土総量はわずか0.1kgで、最も少ない。しかも5cm以下の小破片のみである。

柱穴SP138 出土総量は13.8kgである(内訳は丸瓦2.5kg、平瓦10.0kg、不明1.3kg)。平瓦が多く、そのうちH-D類が7割近くに達する(6.8kg)。また、H-B1類もしくはH-B2類も1割ほどある(0.8kg)。丸瓦はM-A類かM-B類か、判別のできない破片ばかりである。

柱穴SP140 出土総量は4.3kgである(内訳は丸瓦1.7kg、平瓦2.4kg、不明0.2kg)。破片数は少ないが、大型の破片が多い。丸瓦ではM-A類とM-B類の割合が同じである(0.6kgずつ)。平瓦ではH-D類の割合が高い(1.8kg)。

柱穴SP213(第67図72) 出土総量は12.7kgである(内訳は丸瓦1.6kg、平瓦10.8kg、不明0.3kg)。丸瓦はM-A類かM-B類か、判別のできない破片が多いが、1点M-A類であることが確認できる(0.6kg)。平瓦は、凸面に縦位の縄タキを施すH-D類が1/3程度を占める(3.1kg)。ただし、72は粘土紐の痕跡がみられるH-C2類である。

柱穴SP107 出土総量は1.0kgで(内訳は丸瓦0.3kg、平瓦0.4kg、不明0.3kg)、非常に少ない。長さが10cmを超えるような破片はほとんどなく、丸瓦はM-A類・M-B類の区別がつかない。平瓦は凸面に縦位の縄タキを施すH-D類がみられる。

なお、各柱穴から出土した平瓦のうち、一枚作りと推定される平瓦H-D類が多く出土している。したがってS B 2020の造営時期は一枚作りが主体的になる段階と考えることができる。

さて、SP 093出土資料を代表例として、S B 2020出土瓦類の胎土・色調・焼成について述べる。丸瓦の胎土は長石やチャートなどの細砂を含むものが多い。色調はにぶい黄褐色ないし橙色、淡黄色、灰白色など暖色を呈するものが多い。焼成はやや軟質なものが多いが、須恵質に近い硬質なものもみられる。これらの色調は灰色や灰白色を呈するものがある。平瓦の胎土・色調・焼成も丸瓦とおおむね同じような特徴がみられる。胎土は長石やチャートなどの細砂を含むものが多い。粒径の大きな礫を含むことはないが、稀に0.5~1.0cm程度の小レキを含むことがある。色調はにぶい黄褐色や淡黄色、灰白色など暖色を呈するものが多い。また、灰色やオリーブ黒色を呈するものもある。これらは燻されたようで、断面が淡黄色などを呈するものがみられる。焼成はやや軟質なものが多い。また、SP 093で確認したH-B1類も上記のような色調や焼成を呈するものがあり、第6次調査の1号窯や瓦溜りから出土しているH-B1類の瓦類とは色調や焼成の上で、異なる特徴がみられる。

柱穴SP251 出土総量は7.1kgである(内訳は丸瓦0.8kg、平瓦2.8kg、不明3.5kg)が、およそ5割が判別のできない小破片が摩滅の著しい破片である。丸瓦はM-A類・M-B類の区別がつかない。平瓦は凸面に縦位の縄タキを施すH-D類が多い(1.1kg)。

雨落ち溝SD293出土瓦類(第69図77~第71図86) 出土総量は375.4kgで、内訳は丸瓦73.3kg、平瓦171.0kg、不明131.1kgである。丸瓦はM-A類かM-B類か判別のつかないものが多いが、分類を確認できたものはすべてM-B類である(12.4kg)。平瓦はH-A~H-D類までの各型式が出土して

いるが、H-A～H-C類は非常に少なく(120kg)、大半がH-D類である(118.9kg)。

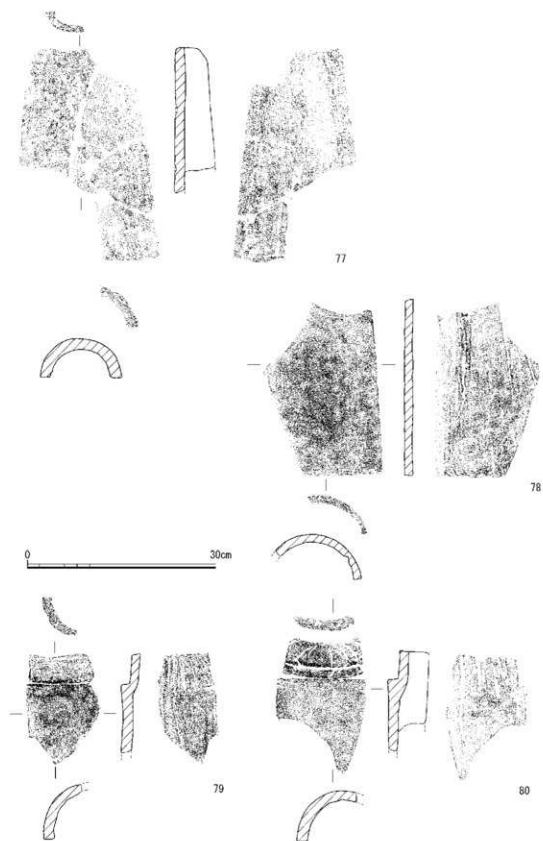
溝S D292出土瓦類 出土総量は22kgである(内訳は丸瓦0.2kg、平瓦0.9kg、不明1.1kg)。全体に大型の破片はみられない。丸瓦はM-A類・M-B類の区別のつかない小破片が多い。平瓦には縦位の縄タタキを施すものが多くみられ、H-D類と考えられる。1点のみだが、H-B3類がある。

区画S X097出土瓦類 出土総量は1261.2kgである(内訳は丸瓦223.9kg、平瓦422.7kg、不明614.6kg)。出土総量のおよそ半数が5cm以下、もしくは平瓦か丸瓦か判別のつかない破片である。丸瓦は8割ほどが破片資料(分類不可)で、M-A類かM-B類か判別がつかない。ただM-B類が一定量確認できる(25.5kg)。M-A類と断定できる資料は少なく(4.6kg)、判別のつかない資料の多くがM-B類である可能性はある。平瓦は4割ほどが分類不可である(166.9kg)が、H-A類からH-D類までの各型式を確認することができた。このうち最も多いのは、H-D類の191.1kgで、平瓦全体の1/2近くを占める。ほかの型式は出土量がおおむね少なく、H-B類で37.8kg、H-C類で18.7kg、H-A類で8.2kgの順となる。ほかの地点で出土例をあまりみないH-B3類が0.7kg確認できた。平瓦の出土傾向からは一枚作りの一群が主体的であることが確認できる。桶巻作りの一群は出土量も少なく2次的な利用か、他所から混入の可能性もあるだろう。

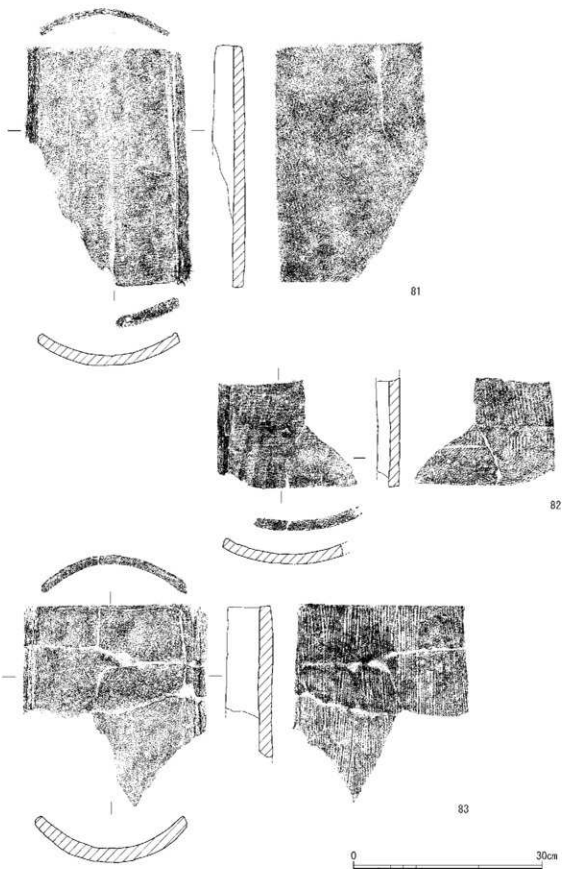
区画S X099出土瓦類 出土総量は274.3kgである(内訳は丸瓦41.6kg、平瓦110.2kg、不明122.8kg)。5cm以下の破片や丸瓦と平瓦の区別がつかないような破片が全体の1/2近くを占める。丸瓦は大半が破片資料(分類不可)で、M-A類かM-B類か判別のつかないものである。ただ、M-B類と確認できたものが2.8kgある。平瓦は1/3ほどが分類不可である(38.6kg)が、H-A類からH-D類までの各型式を確認することができた。このうち最も多いのはH-D類の59.9kgで、全体の1/2以上を占める。ほかの型式は出土量がおおむね少なく、H-C類5.8kg、H-B類4.1kg、H-A類1.8kgである。全体的な出土傾向は区画S X097と同じであり、平瓦は一枚作りの一群が主体的であることが確認できる。桶巻作りの一群も同じく2次的な利用か、他所から混入の可能性がある。

瓦溜りS X208出土瓦類(第73回96～98) 出土総量は226.3kgである(内訳は丸瓦46.1kg、平瓦89.1kg、不明91.1kg)。丸瓦の大半はM-A類かM-B類か判別のつかないものであるが、M-B類が5.7kg確認できる。平瓦は出土総量の1/3ほどが分類不可である(25.9kg)。各型式が出土しているが、量的に最も多いのはH-B類(31.3kg)あり、以下、H-C類(13.8kg)、H-D類(9.2kg)、H-A類(8.9kg)と続く。H-B類ではH-B1類が主体であるが、H-B2類も一定量確認できる(5.4kg)。ほかの出土例にくらべH-C類の比率がやや高い。平瓦は桶巻作りの一群を主体とし、一枚作りのものも一定量存在することがわかる。

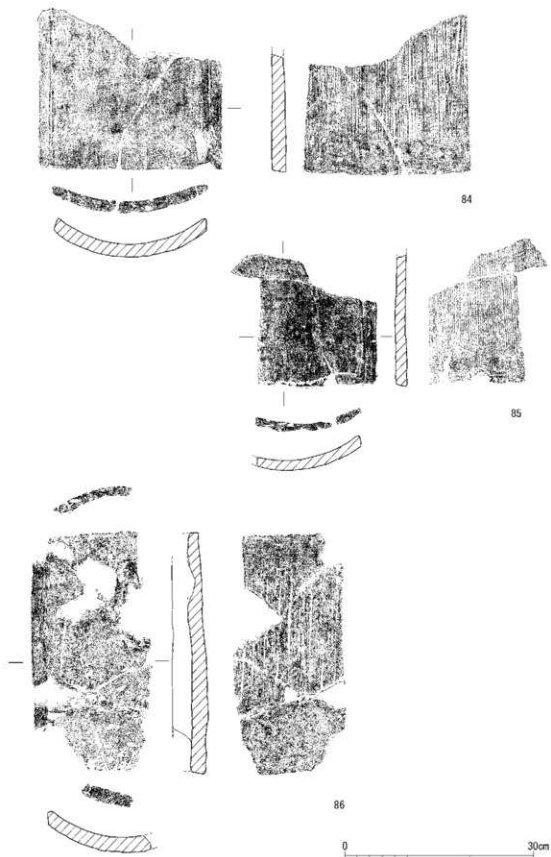
瓦溜りS X219出土瓦類 出土総量は85.1kgである(内訳は丸瓦21.3kg、平瓦30.0kg、不明33.8kg)。S X219の出土傾向として、5cm以下や丸瓦・平瓦の判別が不可能なものが多く、丸瓦と平瓦の出土比があまり変わらず、他の遺構における出土比とくらべてやや異なる。丸瓦はM-B類かM-A類か判別のつかないものが大半を占める。平瓦では出土量のほぼ半数をH-B1類が占める(13.5kg)。その他の平瓦は、いずれも少量であるが、H-A2類1.5kg、H-C類1.8kg、H-D類2.8kgを確認した。平瓦はH-B1類が主体で、その他の平瓦は補修に伴うものと考えられる。なお、



第69図 雨落ち溝 S D293出土瓦類実測図1 (L/6)



第70図 雨落ち溝SD293出土瓦類実測図2 (1/6)



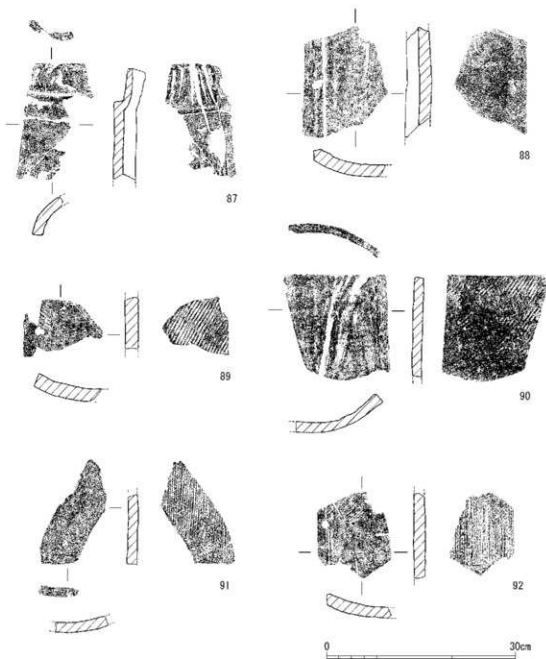
第71図 雨落ち溝SD293出土瓦類実測図3 (1/6)

H-D類がやや多い点はこれらの瓦が葺かれていた建物の使用期間を考える上で重要である。

土坑S K143出土瓦類(第72図87~92) 出土総量は19.5kgである(内訳は丸瓦0.3kg、平瓦12.1kg、不明7.1kg)。丸瓦は細片が多く、図示できたのはM-B類1点のみである(87)。平瓦も細片が多いが、H-A類からH-D類までの各型式が確認できる。H-A類1.4kg、H-B類7.9kg、H-C類2.3kg、H-D類0.5kgと、H-B類が2/3を占める。少量ながらH-D類が確認できる点(91・92)は注意が必要である。

③ 埴

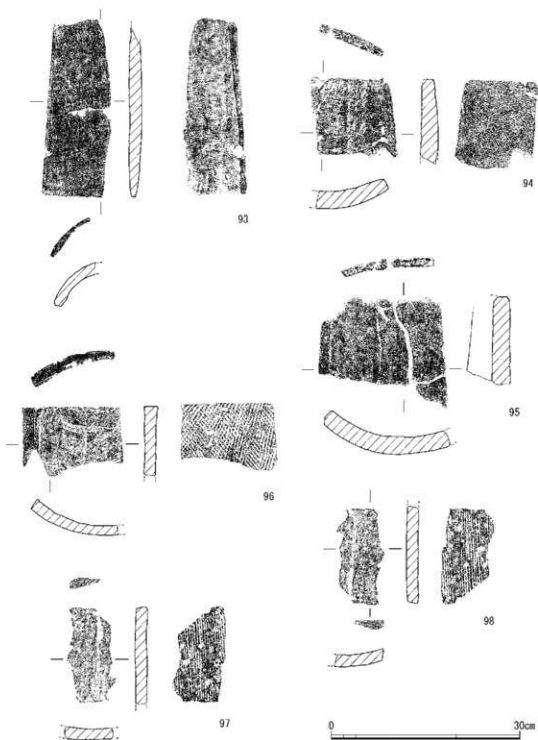
第7次調査で出土した埴は1点のみである(第74図99)。南部の土坑S K096から出土した。ほ



第72図 土坑S K143出土瓦類実測図(1/6)

は直方体を呈するが、欠損している部分で、埴表面が上方に向かって立ち上がることから、埴の上面に別の構造物が一体となって造形されていた可能性がある。長辺20.0cm、短辺14.5cm、高さ5.3cmである。胎土は3mm以下の長石や石英を含む。焼成は良好で、色調は浅黄色である。

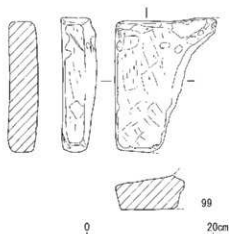
(筒井崇史)



第73図 土坑SK096・瓦溜りSX208出土瓦類実測図(1/6)

(2)土器

美濃山廃寺第7次調査で出土した土器は、瓦類に比べてそれほど多くない。全体の出土傾向としては、北東部で検出された土坑や柱穴からの出土が多く、掲載した土器のうちおよそ1/3を占める。また、残存状態の良好なものが多い。これに対して北東部を除く各地点ではごくわずかな量しか出土していない。ややまとまって出土した地点としては南部の兩落ち溝SD293や区画SX097があり、掲載した土器のうちおよそ1/6を占める。このほか、奈良三彩と思われる陶器片が区画SX099からのみ出土している。なお、第6次調査地と第7次調査地にまたがる



第74図 土坑SK096出土埴実測図(1/6)

遺構の遺物については、第7次調査に伴う出土遺物として報告することにした。

①区画溝出土土器

区画溝から出土した土器には、土師器・須恵器のほか、下層遺跡に伴う弥生土器がみられる。出土土器の総量は少なく、細片も多い。この中で、第6次調査地から第7次調査地にかけての区画溝SD001の東辺で残存率の高い須恵器鉢Aなどが出土している。また、区画溝SD090では、大量の瓦類が出土しているものの、土器はごくわずかである。

区画溝SD001出土土器 (第75図100～105) 100は弥生土器の鉢の底部と考えられる。101は土師器高杯の脚柱部で、上部は中実である。105は土師器甕である。残存率が1/12程度の小破片であるが、口縁端部がほぼ水平面をなす。102は須恵器壺Kの体部である。体部最大径は16.0cmである。肩部には灰が少し被る。103は須恵器杯Bの底部である。高台の外側の端部が接地する。底径11.2cm、残存高2.9cmである。104は須恵器鉢Aである。底部は尖底ではなく丸底である。口径22.3cm、器高12.2cmである。胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、灰白色を呈する。102を除く5点は第6次調査で出土したものである。

区画溝SD010出土土器 (第75図106～112) 106・107は弥生土器の甕ないし壺の底部である。108は須恵器杯である。平底気味の底部から緩やかに弧状に立ち上がる。区画溝SD100で出土した113と同一器形のものであろう。109は須恵器杯Bの底部である。高台の内側の端部が接地する。110・111は須恵器杯B蓋で、110はつまみ、111は口縁部の破片である。111の口縁部は笠形に近い。須恵器は109をのぞき、残存率1/12以下の小破片である。112は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部に面をもつ。

区画溝SD100出土土器 (第75図113) 113は須恵器杯で、杯H蓋を杯に転じたような器形を呈する。内面全体に灰が被る。口径11.7cm、器高3.4cmである。胎土は1mm以下の砂粒を含む。焼成は堅緻で、灰色を呈する。

区画溝SD090出土土器 (第75図114～120) 114～116は弥生土器である。114は甕の口縁部で、

受け口状を呈する。口径15.0cm、残存高2.2cmである。摩滅のため判別しにくいのが、列点文を施しているようである。外面に煤が付着する。115は壺の底部である。断面観察から粘土紐で輪台を作り、内部に粘土を充填した後、体部の粘土を積み上げているのが確認できる。116は壺の底部である。117は土師器杯Aである。内面には間隔の広い放射状暗文が認められる。小破片であるが、焼成は良好で、橙色を呈する。胎土は密である。118～120は須恵器である。118は杯Bの底部である。高台の内側の端部が接地する。119は水瓶もしくは浄瓶と推定される。平底に鶏卵形を呈する体部からなる。頸部より上を欠損する。肩部内面には頸部を接合した痕跡が確認できる。体部外面下部には灰オリーブ色を呈する自然釉が、また肩部には灰が付着する。底部外面には高台が剥離した痕跡が認められた。残存高は10.6cmである。美濃山廃寺における水瓶の出土例は、第4次調査の際に、今回、総柱建物S B 2009として報告した建物の柱穴S P 185の抜き取り穴から出土している例があるのみである。120は甕の体部上半である。外面は平行タタキを施した後カキメを施す。内面には同心円の当て具痕跡が残る。

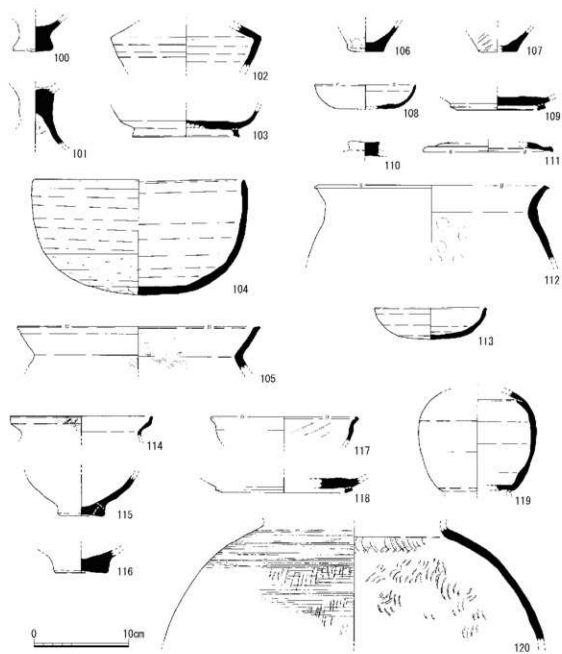
②北東部出土土器

北東部では掘立柱建物跡S B 2012の各柱穴や土坑S K 352から大量の土器が出土している。第6次調査地でもこの北東部に隣接する地点で多数の土器が出土しており、美濃山廃寺全体でも多数の土器が出土した区画と考えることができる。

掘立柱建物S B 2012出土土器 (第76図121～第77図180) S B 2012出土土器については、各柱穴ごとに報告する。121・122は柱穴S P 074から出土した。121は土師器杯Aである。口縁端部内面がわずかに肥厚する。口径19.8cmである。122は須恵器杯の口縁部である。口径14.6cmである。

123～138は柱穴S P 072から出土した。123～131は土師器である。123・124・126は杯Aである。123・126は放射状暗文がみられるが、小破片である。124は暗文を施していない。口径15.0cm、残存高3.5cmである。125は杯である。口縁端部は肥厚、あるいは巻き込まず、断面方形状におさめる。127は皿Aである。内面に放射状暗文を施す。128はやや厚手の皿である。摩滅のため調整は不明であるが、口径22.4cmである。129はやや小型の碗Cである。口縁部にヨコナデを施す。口径10.6cm、残存高2.8cmである。130は小型の杯である。器形は半球形状を呈し、ほぼ完形である。口縁部内面に煤が付着することから、灯火器として使用されたものであろう。口径8.2cm、器高3.1cmである。131は甕である。大きく外反し、口縁端部をつまみ上げる。132は蓋である。内外面ともナデを施し、口縁部にヨコナデを施す。外面のミガキや内面の暗文はみられない。133～138は須恵器である。133・134は杯である。134は口縁部がやや強い回転ナデで外反気味を呈する。134は杯Aかもしれない。135は杯Bの底部である。底径11.6cm、残存高3.1cmである。136は杯B蓋である。頂部はやや扁平であるが、口縁部は屈曲しない。137は皿B蓋である。口縁部はわずかに屈曲気味である。口径28.6cm、残存高1.9cmである。138は口縁部が直立気味の甕Cである。体部外面に平行タタキを施す。

139～148は柱穴S P 002から出土した。139～147は土師器である。139は口縁端部を欠損するものの、杯Cと推定される。内面に放射状暗文を施す。140・141は杯Aである。140は放射状暗文



第75図 区画溝出土土器実測図(1/4)

を施すが、141は摩滅のため暗文の有無は不明である。142・143は皿Aである。142は暗文を施さないが、143は摩滅のため暗文の有無は不明である。143は142にくらべて口縁部の外反度は弱い。143は口径24.0cm、器高2.2cmである。139～143はいずれも微細な砂粒を含み、焼成は良好である。橙色を呈する。144は鉢Bもしくは椀である。外面の下半部にはミガキもしくはヘラケズリを施す。145は皿で、口縁端部が肥厚しない。146は瓶の口縁部である。小さな把手が取り付け。小破片のため、口径の復元は困難である。147は高杯杯部である。内面は摩滅のため暗文の有無は不明である。口縁部にヨコナデ、外面はミガキもしくはハケを施す。148は須恵器杯Aである。焼け歪みがある。口径13.2cm、器高4.2～4.5cmである。

149・150は柱穴S P200から出土した。149は須恵器杯の口縁部、150は須恵器鉢の口縁部の小破片である。この2点は第6次調査で出土したものである。

151～153は柱穴S P201から出土した。151は土師器甕である。口縁端部を両側からやや強くヨコナデを施す。152は須恵器杯Aの底部破片である。153は須恵器杯B蓋である。この3点も第6次調査で出土したものである。

154は柱穴S P203から出土した須恵器杯B蓋の小破片である。これも第6次調査で出土したものである。

155は柱穴S P202から出土した土師器甕である。全体に摩滅気味であるが、体部外面にハケを施す。口径21.8cm、残存高6.0cmである。

156は柱穴S P204から出土した須恵器杯Bの底部である。高台端部を欠損する。これも第6次調査で出土したものである。

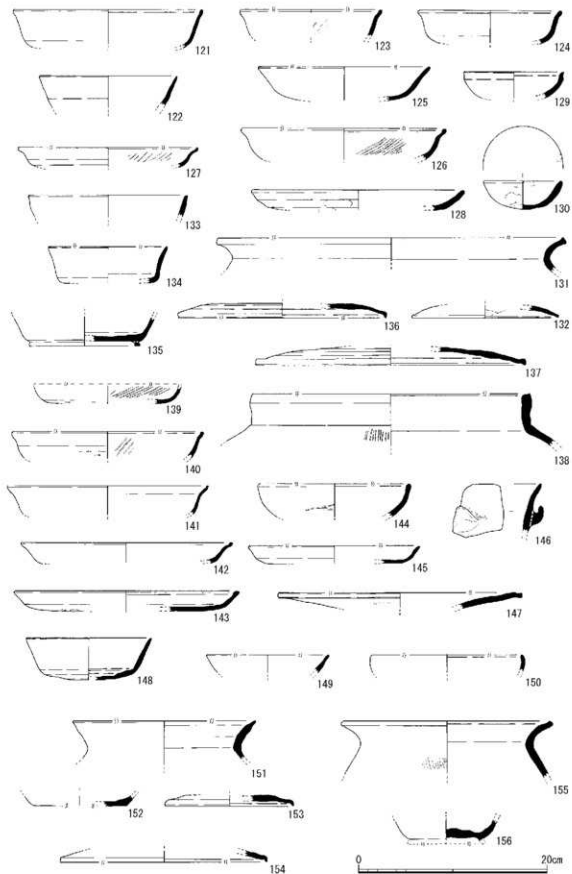
157～163は柱穴S P003から出土した。157～160は土師器である。157は皿である。摩滅が著しく調整は不明で、口縁端部を丸くおさめる。158は甕である。口縁端部を上方へつまみ上げる。口径17.8cm、残存高4.0cmである。159は甕または甕Bの把手である。160は平底気味の杯で、口縁部内面に煤が広く付着する。灯火器として使用されたものであろう。口径8.2cm、器高2.7cmである。161～163は須恵器である。161・162は杯B蓋である。ともにやや扁平な笠形を呈する。161は頂部に回転ヘラケズリを施す。焼成時の火ぶくれがある。口径15.6cm、残存高2.0cmである。162は頂部がヘラケリ後ナデを施す。口径19.4cm、残存高1.5cmである。163は須恵器甕である。口縁部外面に波状文を3条施す。口径36.0cm、残存高5.2cmである。

164・165は柱穴S P035から出土した。165は須恵器杯B、164は同蓋である。164は外面全体に灰を被るため、頂部の調整は不明である。口径15.0cm、残存高1.9cmである。165はやや外反気味に口縁部が広がる。口径15.8cm、器高6.0cm、底径8.5cmである。器高が高い点は注意される。

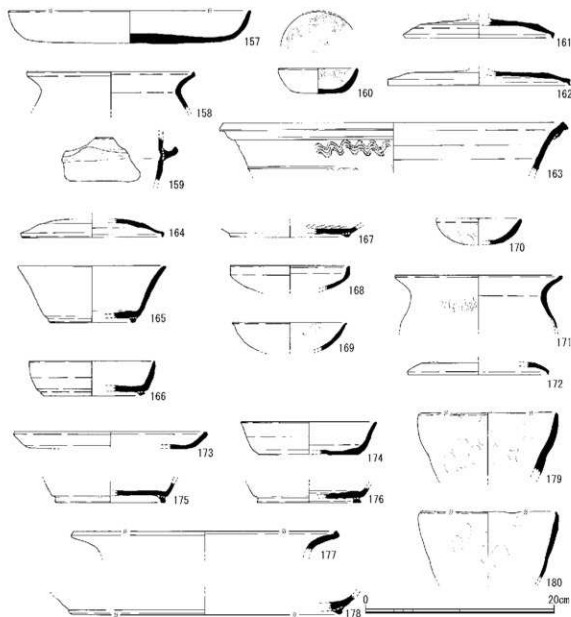
166は柱穴S P070から出土した須恵器杯Bである。やや厚手で、内湾気味の器形を呈する。口径13.2cm、器高3.7cm、底径10.2cmである。

167～172は柱穴S P071から出土した。167～171は土師器である。167は杯Bの底部の破片である。内面に放射状暗文を施すが、底部によくみられる螺旋状暗文は確認できない。底径12.6cm、残存高1.2cmである。168は椀Cである。口縁部にヨコナデを施す。口径12.6cm、残存高2.6cmである。169・170は杯で、どちらも内面に煤が付着する。169は口径12.0cm、残存高2.9cmである。170は口径9.0cm、残存高2.8cmである。灯火器として使用されたものであろう。171は甕である。外面に縦方向のハケを施す。口径17.8cm、残存高5.5cmである。172は須恵器杯B蓋の口縁部のみの破片である。頂部に回転ヘラケズリを施すようである。

173～177は柱穴S P351から出土した。173は土師器皿Aである。摩滅気味のため暗文の有無は確認できない。177は土師器甕である。口縁部のみ的小破片である。口縁端部は断面三角形に肥厚させる。174は須恵器杯Aである。口径14.4cm、器高3.5cmである。175・176は須恵器杯Bの底部である。175は底径11.6cm、残存高2.3cmである。176は底径10.9cm、残存高1.6cmである。



第76図 掘立柱建物SB2012出土土器実測図1(1/4)



第77図 掘立柱建物S B2012出土土器実測図2 (1/4)

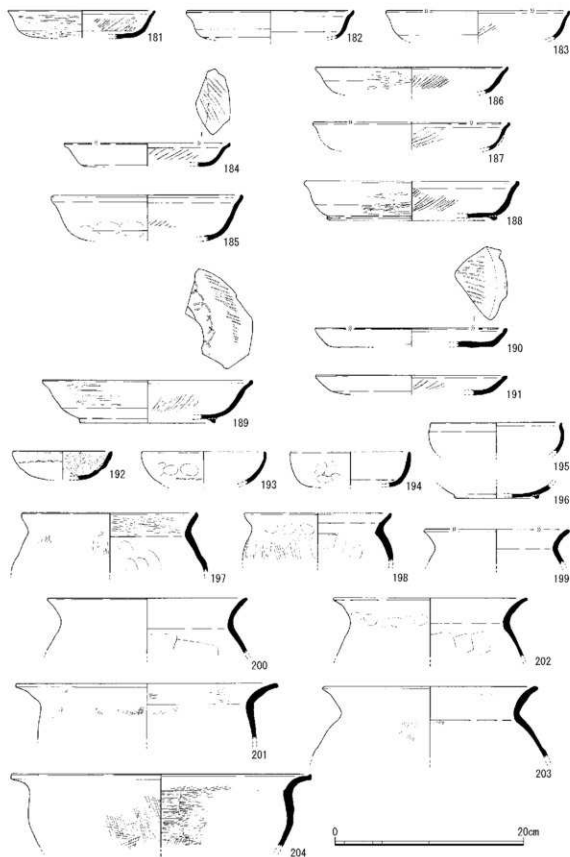
178は柱穴S P228から出土した土師器杯Bもしくは皿Bの高台付近の小破片である。

179・180は製塩土器である。179はS P071から、180はS P074から出土した。口径等の復元は困難であるが、逆円錐形を呈すると思われる。内外面ともユビオサエヤナデで成形、調整する。

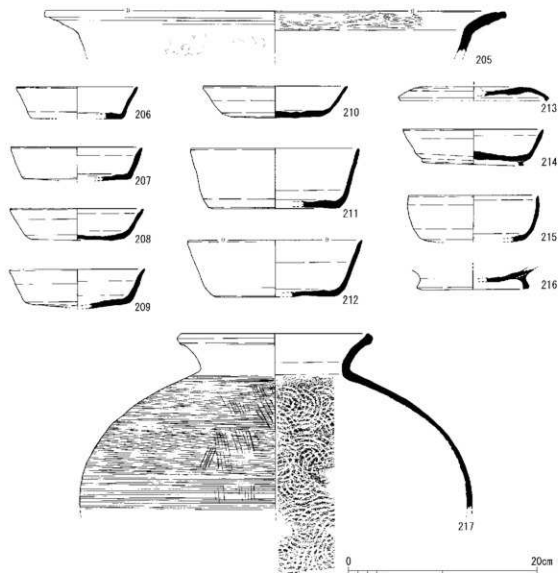
土坑S K352出土土器(第78図181～第79図217) 181～205は土師器である。181～187は杯Aである。181は口縁部内面に放射状暗文を施す。外面にミガキを施すが、ややまばらである。底部外面にケズリを施す。口径15.4cm、残存高2.9cmである。182は摩滅のため、調整や暗文の有無などは不明である。口径17.7cm、残存高3.0cmである。183は内面にかすかに放射状暗文を認めることができる。184は内面に放射状暗文を施すが、外面の調整は摩滅のため不明である。185はやや器高が高い杯Aである。内面に放射状暗文がかすかに確認できる。内外面ともヨコナデで

調整し、底部にはユビオサエ痕が確認できる。口径20.0cm、残存高4.3cmである。186・187も内面に放射状暗文を認めることができる。186は外面にミガキを施す。181～187の胎土はおおむね1mm前後の砂粒を含むが密なものが多く、焼成は良好である。色調は橙色から明赤褐色を呈するものが多い。188・189は杯Bである。ともに外面にミガキを施し、内面に放射状暗文を施す。188は口縁部下半から底部にかけてケズリを施す。調整手法は都城でみられるb1手法^(註7)に近いが、底部内面に螺旋状暗文はなさそうである。口径22.4cm、器高4.2cm、底径17.3cmである。189は底部内面に螺旋状暗文も施す。口径22.0cm、器高4.5cm、底径14.3cmである。ともに胎土は1mm以下の砂粒を少し含む程度で、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。190・191は皿Aである。190は底部内面に放射状暗文を施す。暗文の施文位置が都城のものとは異なることから、在地における変容形態と推定される。どちらも口縁部が底部から内湾気味に立ち上がる点が注意される。192は杯である。内面に煤が厚く付着しており、灯火器として使用されたものであろう。口径10.4cm、残存高3.0cmである。193・194は杯ないし椀である。内湾気味の口縁部に外面にユビオサエ痕が残る。ともに口径は13cm前後である。195と196は胎土や色調が類似することから同一個体と思われるが、接合しないため、別々に報告する。195は口縁部が内湾気味に立ち上がった後、口縁端部にヨコナデを施して外反させる。口径13.8cm、残存高3.3cmである。196は底部である。摩滅気味であるが、底部外面にケズリを施している可能性がある。残存高12cm、底径8.8cmである。両者の胎土は1mm以下の調整等を含む密なもので、焼成は良好である。色調は明赤褐色を呈する。197～203は甕である。口縁部が外反した後、端部を丸く納めるものが多い。調整は個体ごとにまちまちであるが、体部外面にクテハケを施すものがほとんどである。法量からみると、口径17cm前後の小型品(197～199)と口径22cm前後の中型品(200～203)の2種があるようである。204・205は鍋である。ともに口縁部内面と体部外面にハケを施し、203は体部内面にハケを、205は体部内面にナデを施す。204は口縁端部をわずかにつまみ上げる。口径31.5cm、残存高7.7cmである。

206～217は須恵器である。206～212は杯Aである。法量は大きく2種あり、口径18cm前後、器高6cm前後の大型品(211・212)と、口径13～15cm、器高3～3.5cmの小型品(206～210)である。いずれも回転ナデを施し、底部はヘラキリ後、不調整もしくはナデを施す。これらの胎土は1mm程度の砂粒を含むものが多く、焼成はやや軟質なものもあるが、堅緻なものが多い。色調は灰色ないし灰白色を呈するものが多い。213は杯B蓋である。焼成時の焼け歪みが著しいが、笠形を呈すると思われる。214は杯Bである。少し焼けひずむ。口径14.9cm、器高3.9cm、底径9.9cmである。215は杯Eと推定される。やや内湾気味に立ち上がる口縁部を有する。底部に高台はもたないと思われる。胎土は1mm以上の砂粒も含むが密で、焼成はやや生焼け気味である。色調は灰白色を呈する。口径13.8cm、残存高4.9cmである。216は杯Bもしくは壺の底部と思われる。やや高めの高台が特徴的である。残存高2.1cm、底径10.8cmである。217は甕である。体部外面にタタキを施した後、全体にカキメを施す。体部内面には同心円の当て具痕が残る。口径19.7cm、残存高18.6cmである。



第78図 土坑S K 352出土土器実測図1 (1/4)



第79図 土坑S K352出土土器実測図2 (1/4)

土坑S K353出土土器(第80図218) 土器器甕である。体部内外面にハケを施す。口径29.2cm、残存高5.5cmである。

③北部

北部で出土した土器は北東部くらべて著しく少ない。北東部では建物の柱穴にも多数の土器が認められたが、北部で検出した建物の多くは、土器が少なく、むしろ瓦類が多い。美濃山廃寺の中では土器の少ない区画ということができる。

掘立柱建物S B2014出土土器(第80図219～223) いずれも須恵器である。219は杯Aの底部であろう。220は杯Aで、内面に漆らしきものが付着する。回転ナデを施し、底部外面はヘラキリ後ナデを施す。焼け歪みが著しい。219・220は柱穴S P122掘形出土である。221は杯の口縁部で、柱穴S P120掘形出土である。222は杯B蓋である。やや扁平であるが、口縁端部は屈曲しない。外面全体に灰が被るが、頂部はヘラキリ後不調整である。口径16.3cm、器高2.3cmである。221・

222は柱穴S P 118出土である。223は甕の口縁部の小破片で、柱穴S P 119掘形出土である。

総柱建物S B 2015出土土器(第80図224・225) どちらも須恵器である。224は円面硯の脚部である。脚部に長方形と推定される透かし孔がみられるが、長さや幅等は不明である。脚部下部に沈線が2条めぐる。内面は軽くヘラケズリを施す。胎土は密で、稀に3mm大の砂粒を含む。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。底径19.5cm、残存高6.4cmである。ただし、もう少し底径が大きい可能性もある。柱穴S P 365柱痕出土である。225は鉢Aと推定される破片である。体部下半から底部にかけて残存する。底部の形状は平底状を呈する。底部付近に回転ヘラケズリもしくは手持ちのヘラケズリを施す。2mm以下の砂粒を少し含み、焼成は堅緻である。色調は灰白色を呈する。残存高は6.0cmである。S B 2015に関連した柱穴S P 495出土である。

柱穴S P 137出土土器(第80図226) 土師器杯である。平底気味の底部に内湾気味の口縁部を持つ。口縁部にヨコナデを施し、それ以下にハケを施す。口縁部に煤が付着するため、灯火器として使用されたのであろう。口径12.4cm、器高3.1cmである。

土坑S K 103出土土器(第80図227～234) 227～230は土師器である。227は杯Aであるが、摩滅が著しく調整や暗文の有無は不明である。口径17.8cm、残存高2.9cmである。228は皿Aであろう。口縁部にヨコナデを施すが、外面は摩滅する。暗文は施していないようである。口径17.5cm、残存高1.7cmである。229・230は杯である。230はやや厚手の器形を呈する。

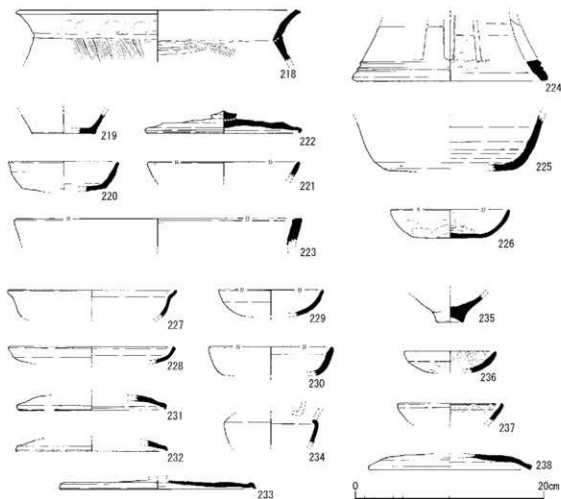
231～234は須恵器である。231・232は杯B蓋の口縁部の小破片で、口縁部の形状は屈曲しないと思われる。232は口径16.0cm、残存高1.2cmである。焼成がやや軟質である。同じく233は杯B蓋であるが、焼け歪みのためか、扁平な状態になっており、口縁部の形状は屈曲気味である。口径20.8cm、残存高0.9cmである。234は小型の平瓶の体部と推定される。肩部に口頭部の接合部分の痕跡が認められる。体部の復元最大径は10.0cmである。胎土には1mm以下の砂粒を含み、焼成はやや軟質である。色調は灰白色を呈する。

土坑S K 126出土土器(第80図235～238) 235は弥生土器の壺または鉢の底部と考えられる。236・237は土師器の杯または皿である。内面に煤が付着しているため、灯火器として使用されたのであろう。236は口径9.6cm、残存高2.3cm、237は口径11.0cm、残存高1.9cmである。238は須恵器杯B蓋である。口縁端部の断面形は方形状を呈するが、全体の形状は笠形を呈する。胎土は1～3mm程度の砂粒を含み、焼成はやや軟質である。色調は灰白色を呈する。口径17.2cm、残存高1.6cmである。

④中央部

北部同様、出土した土器は少なく、むしろ瓦類が多い。土器の少ない区画である。

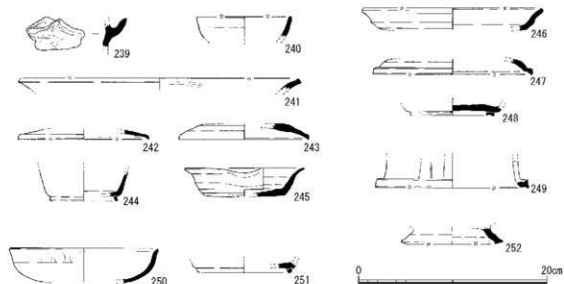
掘立柱建物S B 2001出土土器(第81図239～245) 239は土師器甕の把手で、柱穴S P 042掘形出土である。240は土師器杯の小破片で、柱穴S P 042出土である。241は土師器甕の口縁端部の小破片である。内面に粗いハケを施す。柱穴S P 041掘形出土である。242・243は須恵器杯B蓋で、全体の形状は笠形を呈する。242は摩滅のため調整不明であるが、243は頂部に回転ヘラケズリを施すようである。243は内面が研磨されたような状態であることから転用硯であろう。口径



第80図 北東部・北部検出遺構出土土器実測図(1/4)

13.6cm、残存高1.7cmである。242は柱穴S P 044柱痕、243は柱穴S P 044の一段下げの際の出土である。244は須恵器杯Bで、口縁端部を欠損する。小型の杯Bである。244も底部内面が研磨されたような状態であり、転用硯であろう。残存高3.3cm、底径7.1cmである。柱穴S P 045掘形出土である。245は口縁端部が外方に大きく折り曲げられることから、須恵器皿Eと推定する。口縁部の一部を片口状をしており、内面には朱の痕跡が遺存していた。また、内面は研磨されたような状態であり、朱墨用の硯として使用されていたのであろう。柱穴S P 048掘形出土である。いずれの須恵器も胎土は1mm以下の砂粒を少し含むものが多いが、焼成は堅微なものの、軟質なものがそれぞれある。また、転用硯が多く確認できる点は、SB2001をはじめ、中央部で検出した大型の側柱建物の性格を考える上で重要である。

掘立柱建物SB2003出土土器(第81図246~248) 246は土師器皿Aもしくは杯Aである。口縁部外面に強いヨコナデを施して、口縁部が大きく外反する。内面に暗文は施さない。247は須恵器杯B蓋である。口縁端部の破片であるが、端部が屈曲する。246・247はともに柱穴S P 086出土である。248は須恵器杯Bの底部である。やや扁平な高台を呈する。残存高1.2cm、底径8.8cmである。柱穴S P 089掘形出土である。



第81図 中央部検出遺構出土土器実測図(1/4)

掘立柱建物S B 2017出土土器(第81図249) 須恵器円面視の脚部の破片である。長方形の透かし孔が穿たれるが、長さや幅などは不明である。外面全体に灰を被る。外面に縦方向の沈線が1条確認できる。柱穴S P 276掘形出土である。類似した破片資料が礎石・掘立柱併用建物S B 2020の柱穴S P 107から出土している(第83図263)。

土坑S K 092出土土器(第80図250・251) 250は土師器杯Cである。口縁部にヨコナデを施し、それ以下の内外面にナデを施す。全体に摩滅気味である。胎土は3mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。口径15.7cm、残存高3.6cmである。251は須恵器杯Bの底部の小破片で、高台付近のみが遺存する。1mm以下の砂粒を含み、焼成は軟質である。色調は灰白色を呈する。残存高1.1cm、底径10.0cmである。

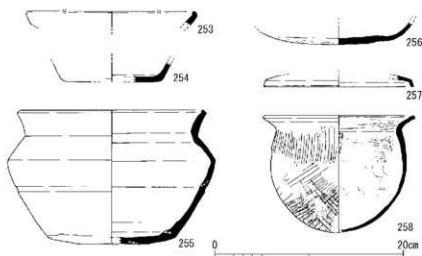
溝S D 405出土土器(第81図252) 須恵器壺の高台と思われる。高台高は1.8cmであるが、残存率が1/12以下なので、図示した底径は不確かである。1mm以下の砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は灰色を呈する。

⑤西部

北部や中央部と同様、出土した土器は少ない。図示できたのもわずかに6点である。

土坑S K 225出土土器(第82図253~255) 253は土師器甕の口縁端部で、斜め上方につまみ上げ気味に肥厚する。254は須恵器杯Aである。底部から口縁部への立ち上がりの部分に当たる。255は須恵器鉢Dである。口縁部から体部にかけては回転ナデで仕上げ、体部下半にヘラケズリを施す。回転台等を使用しているのではなく、手持ちの可能性もある。底部外面はヘラキリ後ナデを施す。胎土は2mm以下の砂粒を含み、稀に8mm大の小礫を含む。焼成はやや甘く、全体に生焼け気味である。色調は浅黄色を呈する。口径19.2cm、器高14.1cmである。

土坑S K 433出土土器(第82図256~258) 256は土師器杯または皿の底部である。口縁部を欠損するが、底部からの立ち上がり付近より上方にヨコナデを施し、底部は内外面ともユビオサエ



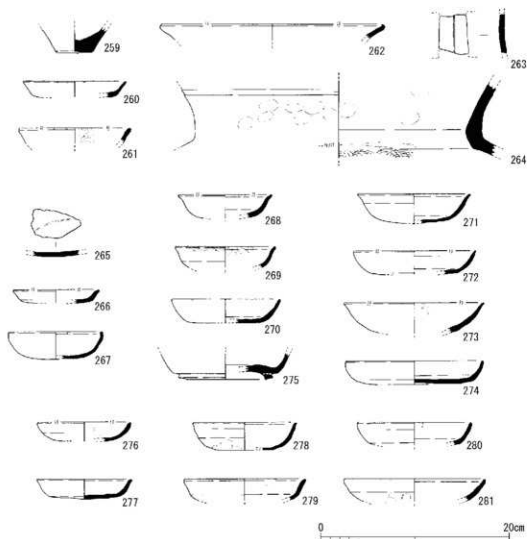
第82図 西部検出遺構出土土器実測図(1/4)

やナデを施す。摩滅気味のため明確ではないが、底部外面にヘラケズリを施している可能性もある。残存高2.5cmである。257は須恵器杯B蓋の口縁端部である。口径15.8cm、残存高1.2cmである。258は須恵器甕である。焼成は須恵質であるが、調整に土師器の特徴をみることができる。体部外面は粗いハケを施す。体部内面の上半には細かいハケの痕跡を確認できる。下半はユビオサエとナデを施す。また、口縁部内面に凸線状の稜を1条めぐらす。土師器ではみられない特徴である。なお、底部外面に煤が付着する。口径15.5cm、器高12.4cmである。胎土は1mm以下の砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は灰色である。

⑥南部

南部では礎石・掘立柱併用建物S B 2020の周囲に当たる雨落ち溝S D 293や区画S X 097・099の埋土から多数の土器が出土した。これらの大半は小型の土師器杯・皿類で、口縁部に煤の付着しているものが多い。また、S B 2020よりも南側では、瓦溜りを検出しており、瓦類とともに少量の土器類が出土した。

礎石・掘立柱併用建物S B 2020出土土器(第83図259～264) 各柱穴から出土した遺物は、瓦類が圧倒的に多く、土器類は非常に少ない。259は弥生土器壺の底部である。柱穴S P 248柱痕から出土した。260・261は土師器杯もしくは皿である。260はわずかに、261は厚くそれぞれ煤が付着する。どちらも灯火器として使用されたものであろう。260は柱穴S P 106柱痕から、261は柱穴S P 107から出土した。262は土師器甕の口縁部である。端部を内方に折り曲げたような形態である。柱穴S P 106の最上層から出土した。263は須恵器碗の脚部の破片である。破片の両側に透かしがある。穿孔の状況から方形の透かしと想定される。柱穴S P 107抜き取り穴から出土した。類似した破片資料が北部の掘立柱建物S B 2017の柱穴S P 276掘形から出土している(第81図249)。264は須恵器甕の頸部である。口縁端部の形状は不明であるが、頸部の径などから大型の甕であると予想される。外面に沈線が2条めぐる。体部外面に平行タキ痕、体部内面に同心円の当て具痕を確認できる。柱穴S P 291柱痕から出土した。



第83図 礎石・掘立柱併用建物S B2020・雨落ち溝S D293・攪乱S X287出土土器実測図(1/4)

雨落ち溝S D293出土土器(第83図265～275) 265～274は土師器である。265は杯もしくは皿の底部の破片で、内面に螺旋状暗文が残る。底部外面はケズリの後ミガキである。266は皿Cである。平底気味の底部に外反気味に立ち上がる口縁部からなる。267～270は口径10～11cm前後の杯である。267・270は内湾気味の口縁部を、268・269は外反気味の口縁部を呈する。268・269は口縁部に煤が付着しており、灯火器として使用されたと思われる。271～273は口径13～15cm前後で、中型の杯である。271は口縁部が大きく外反する。272・273は内湾気味に立ち上がった口縁部の上半がわずかに外反するものである。273は口縁部に煤が付着しており、灯火器として使用されたと思われる。274は緩やかに内湾気味に立ち上がる皿である。口径14.6cm、器高2.3cmである。275は須恵器杯Bの底部である。底径8.4cm、残存高2.8cmである。

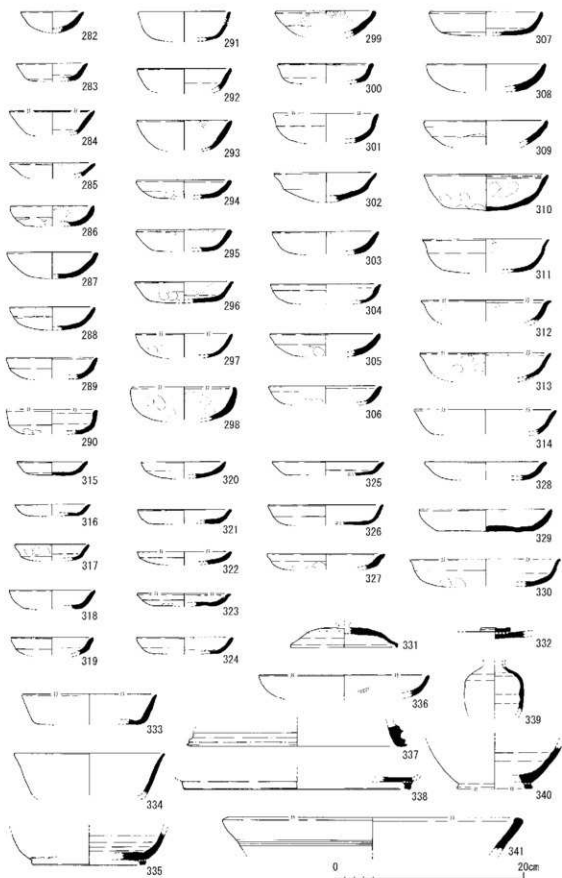
攪乱S X287出土土器(第83図276～281) 図示したのはいずれも土師器である。276・277は小型の皿である。276は緩やかに立ち上がり、277は口縁端部がわずかに外反する。278は杯である。ヨコナデを2段に施す。口径11.0cm、残存高3.0cmである。279～281は中型の皿で、279・280は

口径12cm前後、281は口径15.0cmである。276・279・280には煤が付着しており、灯火器として使用されたと思われる。S X 287は区画S X 097の上層で検出した攪乱であり、これらの出土遺物は本来S X 097に伴うものとする。

区画S X 097出土土器 (第84図282～341) 282～330は土師器である。282～314は杯である。口径に対して器高が高いことから杯と判断した。口縁部の形状は多様であり、特定の器形を呈しない。口径から大きく大・中・小の3つに区分できる。282～297・299・300は口径7～10cmで、小型品である。298・301～306は口径11～12cmで、中型品である。307～314は口径が12～15cmで、大型品である。315～330は皿である。杯にくらべて器高が低いことから皿と判断した。杯と同様に口縁部の形態は多様であり、やはり法量から大・中・小の3つに区分できる。315～320は口径7.5～9cmで、小型品である。321～324は口径10cm前後で、中型品である。325～329は口径が12～14cmで、大型品である。330は復元口径16cmほどでさらに大型品である。以上の杯・皿の一部には、大小を問わず、口縁部に煤が付着しているものがみられる(285・286・293・295・296・299・300・303・311～313・324・329など)。煤の付着しないものも多くみられるが、接合できないような小片が多いことから、出土した杯・皿類の多くが灯火器として使用されたものと思われる。また、S X 097の下層に当たる雨落ち溝S D 293やS X 097の攪乱であるS X 287などからも灯火器として使用された多数の土師器杯・皿類が出土している。これら同一地点において一定の出土量があることから、礎石・掘立柱併用建物S B 2020における儀式等において供えられた灯火器を廃棄したものとする。あるいはS B 2020に仏像が安置されていたとするならば、仏前に供えられた灯火器を廃棄したものとすることもできる。これらの土師器杯・皿類の胎土は2mm以下の砂粒を含み、密なものが多い。焼成は良好なものが多い。色調は明黄褐色や橙色を呈するものが多い。

331～341は須恵器である。331は小型の杯B蓋である。笠形を呈し、頂部に回転ヘラケズリを施す。口径11.3cm、残存高2.1cmである。332は杯B蓋のつまみである。333は杯A、334は杯、335は杯Bである。いずれも小破片である。336は皿である。内湾気味に立ち上がる口縁部を呈する。337は碗の脚部である。底径23.4cm、残存高2.3cmである。透かしの下端部分と思われるところを確認できる。同一個体と思われるものが、北に約20mのところ遺物包含層から出土している。出土地点が異なるため、別に図示した(第87図393)。338は皿Bの高台部分である。底部内面が研磨されたような状態であり、転用碗であろう。底径は24.0cmである。339は壺Mの体部上半の破片である。外面に灰を被る。遺構の埋没時期を示す遺物と考える。340は壺の底部である。上部の形態等は不明である。341は甕の口縁部の小破片である。外面に沈線が2条めぐる。

区画S X 099出土土器 (第85図342～354) 342～347は土師器である。342・343は区画S X 097で出土した小型の皿と同法量のものである。どちらも口縁部に煤が付着している。341は口径7.0cm、残存高1.4cmである。344・345は同じく中型の皿と同法量のものである。やはりどちらも口縁部に煤が付着している。345は胎土は異なるが、京都府木津川市所在の馬場南遺跡出土の灯芯痕をもつ皿Cに近い形態をとる。口径12.0cm、残存高1.6cmである。以上の342～345はい



第84図 区画S X 097出土土器実測図(1/4)

ずれも灯火器として使用されたものであろう。346・347は甕である。346は口縁部内面と体外面にハケを施す。口径20.6cm、残存高4.3cmである。347は口縁端部をややつまみ上げる。

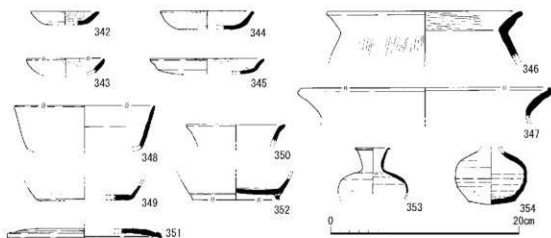
348～354は須恵器である。348は杯の口縁部、349は杯Aの底部の破片である。348は残存高4.6cmで、深手の杯である。350は壺の口縁端部の可能性があり、大きく外反する。351は杯B蓋で、全体の形状は扁平で、口縁端部がわずかに屈曲する。口径16.2cm、残存高1.0cmである。352は杯Bの底部である。353・354は壺Mで、353は体部最大径付近よりも上の、354は頸部から下の破片資料である。353は口縁端部をわずかに折り曲げたような形態を呈する。口縁部の内面と外面全体に灰を被る。口径3.3cm、残存高4.9cmである。354は体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリを施し、底部はさらにナデを施す。高台は有さない。体部最大径7.6cm、残存高5.6cmである。胎土は353が砂粒をあまり含まない精良であり、354は1mm程度の砂粒を含むものである。焼成はともに堅緻で、色調ともに青灰色を呈する。

図版第55-(2)は三彩陶器である。3～10cm角の破片が10点ほど出土したが、全体の形状を復元できるものはなく、そのうち5点を掲載した。釉薬は淡緑灰ないし黄褐色を呈する。胎土は砂粒をほとんど含まず、精良であるが、焼成は軟である。胎土の色調は浅黄橙色ないし灰白色である。

掘立柱建物S B 2021出土土器(第86図355) 須恵器杯B蓋の口縁部の破片である。口縁部は笠形を呈すると思われる。口径19.0cm、残存高1.3cmである。柱穴S P 388掘形から出土した。

柱穴S P 664出土土器(第86図356) 掘立柱建物S B 2021を構成する柱穴S P 389と重複し、より新しい柱穴S P 664から出土した須恵器皿である。口縁部内面に沈線様の凹線がみられるので皿Cの可能性もあるが、底部が非常に厚く(約1cm)、類例を知らない器形である。体部下半に回転ヘラケズリを施す。胎土は1mm以下の砂粒を少し含み、焼成が軟で、焼け歪みと摩滅が著しい。色調は灰白色を呈する。口径20.1cm、器高3.4cmである。

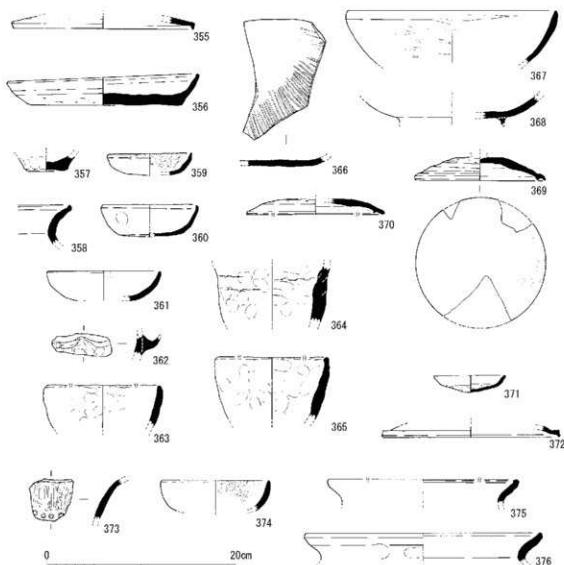
土坑S K 096出土土器(第86図357～365) 357は弥生土器の甕の底部である。358～362は土師器である。358は甕の口縁部で、小破片のため復元実測はしていない。口縁端部をわずかにつま



第85図 区画S X 099出土土器実測図(1/4)

み上げる。359は内面に煤が厚く付着している小型の杯である。口径8.8cm、器高2.4cmである。灯火器として使用されたものと思われる。360は359より一回り大きい杯である。口縁端部がやや内方に傾く。口径10.0cm、器高3.4cmである。361も杯であるが、摩滅が著しく、調整は不明である。口縁部に煤が付着することから灯火器として使用されたと思われる。362は甕か鍋の把手と思われる。363～365は製塩土器である。いずれも口縁部や体部のみの小破片であるが、逆円錐形を呈すると思われる。内外面ともユビオサエとナデで調整する。364は粘土紐接合痕が残り、363・365にくらべてやや厚手である。

土坑SK143出土土器(第86図366～370) 366～368は土師器である。366は皿の底部である。底部内面に放射状暗文が確認できるが、螺旋状暗文はみられない。破片の一端に口縁部への立ち上がりを確認できることから、本来であれば螺旋状暗文も施されるべきであるが、施されていないのは在地色であろう。底部外面の一部にヘラミガキを施す。367は大型の鉢で、底部を欠損す



第86図 南部検出遺構出土土器実測図(1/4)

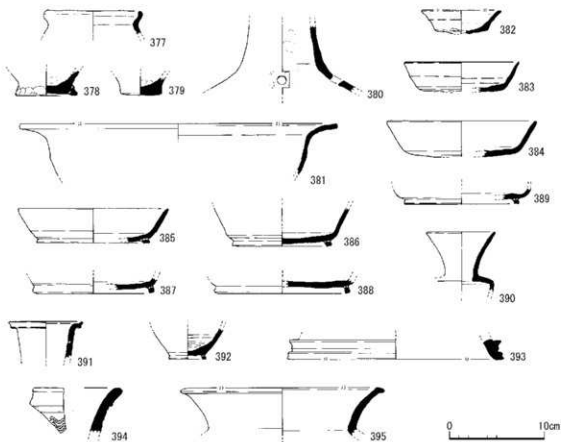
るが、尖底状を呈する可能性もある。口縁部にヨコナデを施し、内面にナデ、外面にハケを施す。胎土に1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰黄褐色を呈する。口径22.0cm、残存高5.6cmである。368は杯Bである。高台端部を欠損するため、正確な底径は不明であるが、約11cmである。内面は摩滅するため暗文の有無は不明であるが、外面はヨコナデの痕跡を確認できる。残存高は3.0cmである。369・370は須恵器杯B蓋で、内面にかえりを有する。どちらも頂部外面に回転ヘラケズリを施す。369は内面に煤らしきものが付着しており、灯火器として使用された可能性がある。3mm以下の砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は灰色を呈する。口径13.8cm、残存高2.4cmである。370は369よりも扁平な器形を呈するが、残存率が1/12以下なので法量は不明である。2mm以下の砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は灰色である。

瓦瀕りS X 208出土土器 (第86図371・372) 371は土師器の小型の杯である。口縁部の煤が付着することから灯火器として使用されていたのであろう。口径7.6cm、器高1.8cmである。1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。にぶい黄橙色を呈する。372は須恵器杯B蓋の口縁の破片である。端部がわずかに屈曲する。1～2mmの砂粒を含み、焼成は堅緻である。灰色を呈する。口径18.8cm、残存高1.2cmである。

瓦瀕りS X 219出土土器 (第86図373～376) 373は弥生土器広口壺の口縁部の破片である。外面に縦方向のヘラミガキを施し、破片の最下部には直径0.6cmほどの竹管文が配置されている。374は土師器杯である。内面に煤が厚く付着しており、灯火器として使用されたと思われる。口径11.4cm、残存高3.2cmである。375・376は土師器甕である。375は口縁端部を内方に折り曲げ、丸くおさめる。376は端部をわずかに肥厚させ、断面方形状を呈する。口径24.8cm、残存高2.9cmである。374・375はともに1～2mm程度の砂粒を少し含み、焼成は良好である。色調はともににぶい黄橙色を呈する。

遺物包含層出土土器 (第87図377～395) 377～380は弥生土器である。377は受け口状口縁を呈する小型の甕である。口径10.0cm、残存高2.4cmである。378は鉢の底部と推定される。外面をユビオサエで整形している。底部の平面形は円形ではなく卵形であるため、底径は6.0～6.8cmである。残存高は2.0cmである。379は壺の底部である。残存高2.0cmである。380は器台の筒部から脚部にかけての破片である。円形の透かし孔が穿たれる。残存高は7.1cmである。

381は土師器鍋である。全体に摩滅・剥離が著しく調整は不明である。残存率も1/12以下である。382～395は須恵器である。382は皿Eであろうか。内面の底部から口縁部への立ち上がりの屈曲が不明瞭である。383・384は杯Aである。383は口径12.1cm、器高3.1cmである。384は口径15.6cm、器高3.8cmである。385～389は杯Bである。385は口径15.9cm、器高3.7cm、底径12.0cmである。386は残存高4.1cm、底径9.5cmである。387・388はいずれも底部のみで、底径は11.9～13.5cmである。390は平瓶の口頸部である。口径7.2cm、残存高6.3cmである。391は壺KもしくはLの口縁部である。口径7.8cm、残存高3.9cmである。392は壺Mの体部下半である。高台を有する。底径3.9cm、残存高3.2cmである。393は硯の脚部の破片である。同形態のものが区画S X 097から出土しており、胎土や焼成などから同一個体の可能性が高いが、出土地点が異なるため、



第87図 遺物包含層出土土器実測図(1/4)

別々に報告する(第84図337)。394は甕の口縁部の小破片である。口縁部外面に波状文を施すが、小破片のため口径の復元等は困難である。395は甕の口縁部である。口縁端部に面を作り、外下方に折り曲げたような形状を呈する。

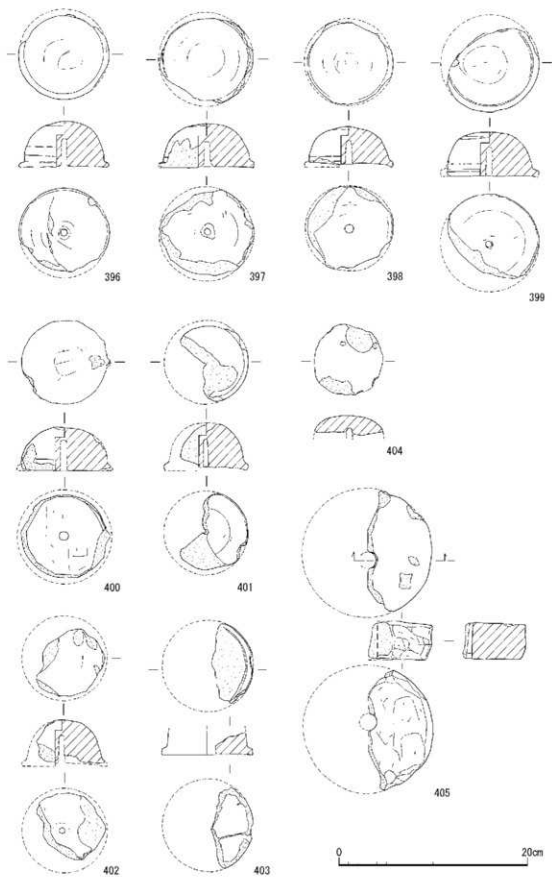
(筒井崇史)

(3) 土製品

美濃山廃寺を特徴づける遺物として、覆鉢形土製品⁽⁸⁸⁹⁾・ひさご形土製品がある。第7次調査では、上記2種のほか、宝輪形土製品の出土を確認している(第88・89図)。

396~404は覆鉢形土製品である。出土した覆鉢形土製品は法量・胎土・色調・焼成などに若干の差が認められるが、形態はほぼ同一である。ただし、完形品はなく、円盤状部や半球状部の一部を欠損するものが多い。また、底面の中央に穿孔を施す。法量は底径9.4~10.0cm、高さ4.3~4.9cmで、底面の穿孔は直径0.6~1.0cm、深さ2.8~3.2cmである。胎土はおおむね密で、0.5~1.5mm程度の白色粒や黒色粒を含む。焼成も良好なものが多く、全体に須恵質に焼き上がっている。色調は灰色ないし灰白色である。

396はⅧ-q18区、397はⅧ-p14・q14区ほか、398・404はⅧ-n15区、400はⅧ-j17区の精査中等の際に出土したものである。399は土坑S K 415、401は区画S X 097、403は時期不明の溝S D 211の出土である。402は調査地南端で表採したものである。403は下部の周縁1/3程度、404は上部の破片



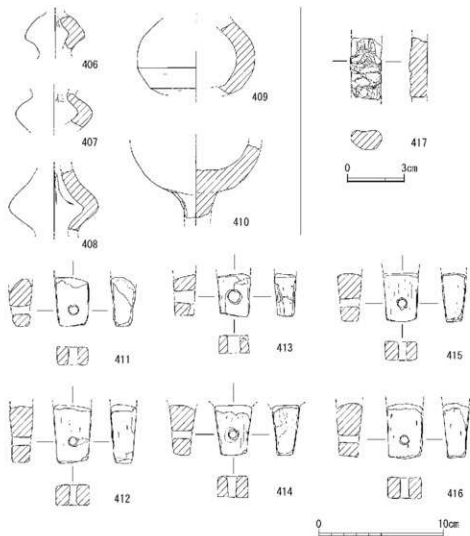
第88図 覆鉢形土製品・宝輪形土製品実測図(1/4)

である。404は底部から穿たれた穿孔の先端がかろうじて認められる。

405は、宝輪形土製品である。土坑S K143の断ち割り時に出土した。このため出土層位は明らかでないが、6層ないし7層と考えている。残存する外周から直径は13.6cmに復元でき、厚さは3.8cmである。推定される本来の大きさの1/2程度しか残存しない。外周の円弧の中心ではないが、ほぼ中央に直径1.8cmに復元できる穿孔が認められる。図の上面側は摩滅が著しいが、下面側は不定方向のケズリを施す。側面にもケズリを施す。中央に穿孔が認められることや、円盤状を呈することなどから、相輪の一部である宝輪を土製品で模したものではないかと推定される。土製の宝輪については、馬場南遺跡などで類例が知られるが、美濃山廃寺出土例は法量が小さく、仕上げも粗雑である。

406～416は、ひさご形土製品である。ひさご形土製品の概要や各部の名称等は第6次調査報告121頁を参照されたい。

406・407はともに一段目で、406はⅧ-y14区、407はⅧ-v12区の出土である。最大径4.6～6.1cm



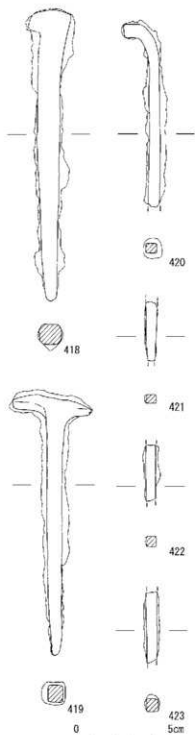
第89図 ひさご形土製品・埴実実測図(1/3・1/2)

である。408は二段目と推定され、最大径7.0cm、残存高5.0cmである。掘立柱建物跡S B 2012の柱穴S P 072から出土した。S P 072は多数の土器類が出土しており(第76図123~137)、ひさご形土製品の年代を考える上で重要な資料である。出土土器から美濃山廃寺の第Ⅱ-1期に位置づけられる。409・410は最下段である。どちらも厚さは1.5cm前後あり、409の最大径は9.2cmである。409は礎石・掘立柱併用建物S B 2020の柱穴S P 106の柱痕から出土した。410は区画溝S D 090-5から出土した。

410~416は下部の結合部が剥落したものである。形状は、やや扁平な方柱状を呈し、長軸幅2.7~3.0cm、短軸幅1.7~2.0cm、高さ3.4~4.3cmである。中央には直径0.7~0.9cmほどの円形の穴が穿たれている。突起の表面はケズリで仕上げているものが多い。

417は埴仏である。蓮台の上に座禪を組んだ仏像が少なくとも2体以上押し出されたものである。また側縁は残存しており、左右に仏像が並ぶ型式ではなく、縦に並ぶ一列二段以上のものと考えられる。上の仏像は首から上が、下の仏像は首から上が欠損する。下の仏像の頂部には天蓋が認められる。仏像の脇の付近の衣の上に金箔が遺存している。また、図像面から仏像への立ち上がりの辺りには金箔の接着に使用したと思われる漆も遺存していた。仏像の背面は縦方向に面取りをしている。残存長3.3cm、幅1.7cm、厚さ1.0cmである。胎土は密で、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。なお、第6次調査報告143~146頁に、本例を含めた美濃山廃寺出土埴仏の製作方法の検討が行われている。併せて参照されたい。

(筒井崇史)



第90図 鉄製品実測図(1/2)

33.3gである。428は土坑S K096から出土した端部のない破片である。残存長7.9cm、重さ46.8gである。429はS K096から出土した端部のない破片である。残存長5.2cm、重さ167.4gである。

430～435は鉄滓である。430は掘立柱建物S B2012の柱穴S P002から出土した。約4.3×5.5cmで、57.7gである。431もS B2012のS P002から出土した楕円形鉄滓である。約8.0×9.3cmで、182.5gである。432はS K096から出土した鉄滓である。約3.1×4.5cmで、21.9gである。433も

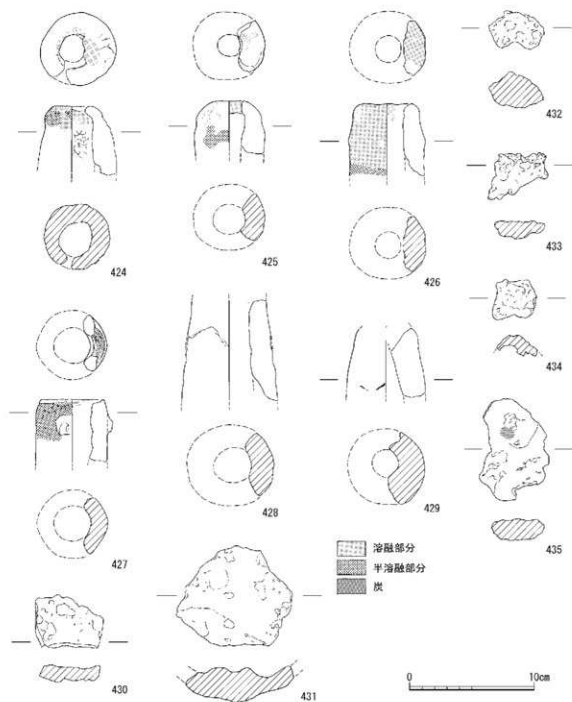
(4) 鍛冶関連遺物

第7次調査では鉄製品、羽口、鉄滓が出土した(第90・91図)。出土した冶金関連遺物の総重量は3,528.7gで、最も多く出土した鉄滓は2,005.1gである。炉壁613g、羽口402.7g、鉄製品507.9gである。鉄塊系遺物は認められなかった。

418～423は釘である。418は礎石・掘立柱併用建物S B2020の柱穴S P106から出土した。頭部は折曲頭形で、残存長15.4cm、最大幅2.6cm、重さ76gである。419はS B2020の柱穴S P093から出土した。頭部は鉞頭形で、残存長14.0cm、最大幅4.4cm、重さ78.8gである。420は瓦溜りS X208から出土した。頭部は折曲頭形で、残存長9.9cm、最大幅1.7cm、重さ21.7gである。421は雨落ち溝S D293から出土した。頭部のない破片で、残存長3.1cm、最大幅0.7cm、重さ2.2gである。422は区画S X097から出土した。頭部のない破片で、残存長3.0cm、幅0.5cm、重さ3.1gである。423は区画S X099から出土した。頭部のない破片で、残存長3.75cm、幅0.8cm、重さ4.5gである。

424～429は羽口である。このうち炉内側の端部が残存しているのは424～427である。第91図では胎土が溶融している溶融部、熱により胎土がやや溶けかけた半溶融部、炉と接合していることにより還元環境にあった還元部をそれぞれ3種類のスクリーントーンで示した。

424は土坑S K096から出土した。残存長5.5cm、先端部外径4.5cm、内径2.4cm、重さ92.3gである。425はV-d18区周辺の遺物包含層から出土した。残存長4.0cm、先端部外径5.0cm、内径2.4cm、重さ25.9gである。426は区画S X099から出土した。残存長5.7cm、先端部外径4.0cm、内径2.6cm、重さ37.0gである。427は土坑S K103から出土した。残存長5.0cm、先端部外径5.5cm、内径3.2cm、重さ



第91図 輪羽口・鉄滓実測図(1/3)

S K096から出土した鉄滓である。約3.8×4.8cmで、23.2gである。炭の小片が噛んでいる。434もS K096から出土した鉄滓である。3.2×3.7cmで、17.5gである。435はS B2012の柱穴S P351から出土した。約8.1×5.6cmで、100.5gである。

(関広尚世)

5. 美濃山廃寺下層遺跡第10次調査

1) 検出遺構

(1) 竪穴建物

竪穴建物 S H3002 (第92図上) 調査地北東部で検出した。周壁溝の一部は区画溝 S D001・010と重複しており、途切れる部分がある。また、南西隅は攪乱により検出できなかった。平面形は六角形を呈し、一辺4.2m前後、長軸9.5m、短軸8.5m、深さ0.2mである。周壁溝は、幅0.3m、深さ0.15mである。主柱穴は検出できなかった。遺物として周壁溝から壺の頸部や甕の口縁部が出土した(第99図436・437)。

竪穴建物 S H3003 (第92図下) 竪穴建物 S H3002の東約5mで検出した。周壁溝のみが遺存し、床面の大半は削平されてしまったようである。南半部は境界溝による削平のため検出できなかった。平面形は隅丸の六角形を呈し、一辺3.5～4.1m、長軸7.0m、短軸6.5mである。周壁溝は幅0.3m、深さ0.08m前後である。南西に柱穴を2基検出しており、主柱穴は4基で構成されていたとみられる。柱間の距離は4.3mである。遺物として甕の口縁部が出土した(第99図438)。

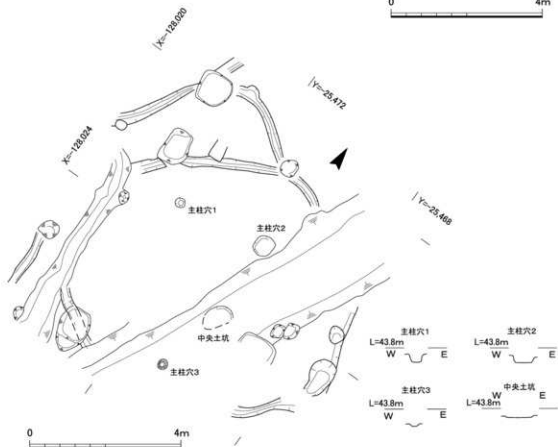
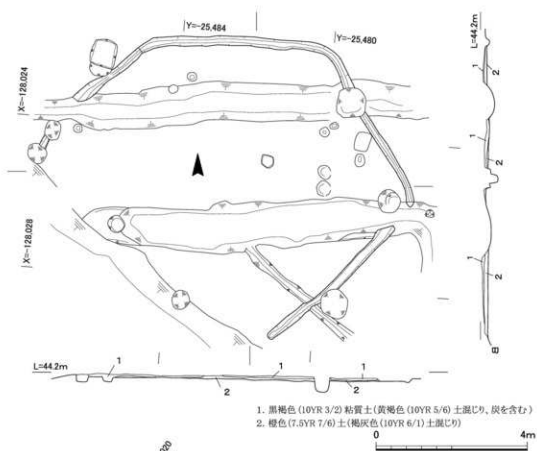
竪穴建物 S H3010 (第93図) 竪穴建物 S H3002の北西約8.0mで検出した住居跡である。平面形は五角形を呈し、一辺4.5～6.0m、南北8.0m、東西8.0m、深さ0.1mである。周壁溝は幅0.2m、深さ0.35mである。主柱穴は5基検出しており、住居の形態に合わせて主柱穴も五角形に配されている。柱間距離は3.0～3.5mである。長軸0.8m、短軸0.5mを測る楕円形の中央土坑も検出した。遺物は、甕もしくは壺の底部が出土した(第99図440・441)。

竪穴建物 S H3008 (第94図上) 調査地中央部で検出した。周壁溝と思われる小規模な溝を検出したに留まる。ゆるく「く」字状に屈曲することから竪穴建物の周壁溝と判断した。幅0.2～0.5mで、深さは0.05m未満である。遺物は出土しなかった。

竪穴建物 S H3011 (第94図下) 竪穴建物 S H3008の東約20.0mに位置する。周壁溝の一部のみが遺存していた。周壁溝は直線的に掘削されており、検出長6.2mである。深さは0.2mである。遺物は出土しなかった。

竪穴建物 S H3009 (第95図) 竪穴建物 S H3008の北東約8.0mで検出した。南半分は削平を受けており検出できなかった。深さは0.3mを測る。周壁溝を3条検出しており、複数回の建て替えが行われたと考える。主柱穴と思われる柱穴を4基確認できたが、検出位置から本来もう少しあったと思われる。また、直径0.7mの中央土坑も検出した。遺物として甕の底部、鉢、器台の筒部などが出土した(第99図445～448)。

竪穴建物 S H3006 (第96図上) 調査地西端で検出した。平面形は正方形を呈し、一辺4.5mである。周壁溝は幅0.3m、深さ0.2mである。南西隅から溝が1条掘られており、丘陵の裾に向かっていることから排水溝と判断した。検出長は約3.0mで、それ以降は調査地外となり、検出できなかった。柱穴は、南壁に平行に2基検出しており、4本の主柱穴で構成されたと推定される。柱間の距離は約2.8mである。遺物として壺の底部や高杯の杯部などが出土した(第99図449・450)。

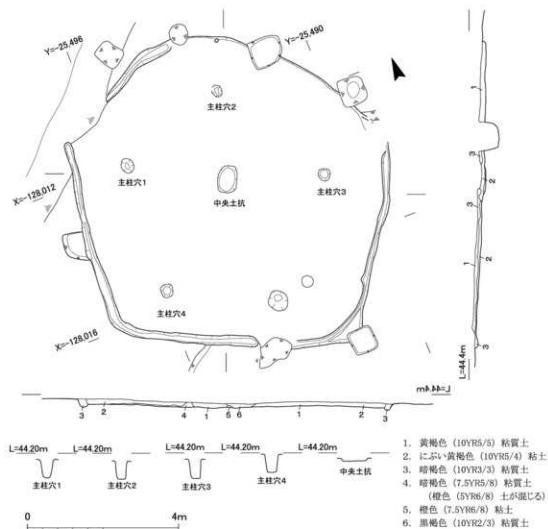


第92図 聚穴建物 S H3002・3003実測図(1/100)

竪穴建物 S H3015 (第97図) 調査地の西端で検出した。周壁溝の一部と、排水溝と推測される溝を検出した。周壁溝は境界溝の削平や攪乱によって部分的な検出に留まっている。検出長は、北東部が4.5m、南東部が6.0mである。ゆるく弧を描くように掘削されている。排水溝は検出長3.0m、深さ0.4mである。遺物は、床面から壺や甕、鉢などが、排水溝から鉢がそれぞれ出土した(第44図451~460)。

竪穴建物 S H3014 (第98図上) 竪穴建物 S H3015の南西15.5mで検出した。周壁溝の一部のみが遺存していた。周壁溝はゆるく弧を描くように掘削されており、検出長5.8m、深さ0.2mである。遺物として高杯の脚部が出土した(第99図472)。

竪穴建物 S H3016 (第98図下) 調査地南部で検出した。、竪穴建物 S H3017と重複していた。平面形は円形を呈する。遺構の南半部は礎石・掘立柱併用建物 S B2020の造営に伴って削平されており、検出できなかった。周壁溝は幅0.4m、深さ0.15m前後である。支柱穴は、住居北西側に柱穴3基確認しており、4基の柱穴で構成されていたとみられる。また、周壁溝の東側から排水溝を検出した。検出長3.0m、深さ0.2mである。遺物として甕の口縁部が出土した(第100図471)。



第93図 竪穴建物 S H3016実測図(1/100)

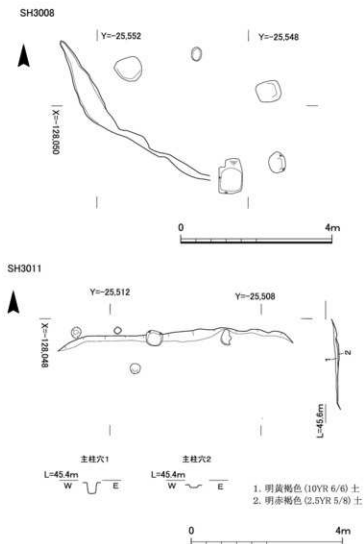
竪穴建物 S H3017 (第98図下) 竪穴建物 S H3016と重複して検出した。平面形は円形を呈する。S H3016と同様に、遺構の南半部は礎石・掘立柱併用建物 S B2020に伴う区画 S X097の造営によって削平されていた。主柱穴は、いくつか検出しており、4基で構成されていたとみられる。周壁溝は2条検出しており、建て替えと思われる。幅0.3m、深さ0.1m前後である。遺物として甕の口縁部や高杯の脚柱部、鉢、甕、壺の底部などが出土した(第100図473~482)。

(山崎美輪)

(2) その他の遺構

溝 S D3018 竪穴建物 S H3003の北西側で検出した(V-d18・19, e19, f19区)。全長8.7m、幅0.25~0.35m、深さ0.1~0.15mである。竪穴建物に伴う排水溝の可能性を考えたが、対応する竪穴建物を確認することができなかった。弥生土器の底部などが出土した(第99図439)。

土坑 S K432 区画溝 S D090-4の東側で検出した(VII-n17区)。平面形は、やや不整形な楕円形状を呈する。長軸2.2m、短軸1.3m、深さ0.17mである。埋土は明褐色粘質土である。最上層に



第94図 竪穴建物 S H3008・3011実測図

は瓦片もみられたが、埋土からは弥生土器のみが出土したので、弥生時代の遺構と判断した。弥生土器広口壺や器台、有孔鉢、底部などが出土した(第99図461~466)。

土坑 S K 209 土坑 S K 143の東側で検出した(VII-x9・y9区)。平面形はやや不整形な円形を呈する。南北2.7m、東西3.0m、深さ0.18mである。埋土は上層がにぶい黄褐色粘質土、下層が明黄褐色粘質土である。弥生土器片が出土した。

(筒井崇史)

2) 出土遺物

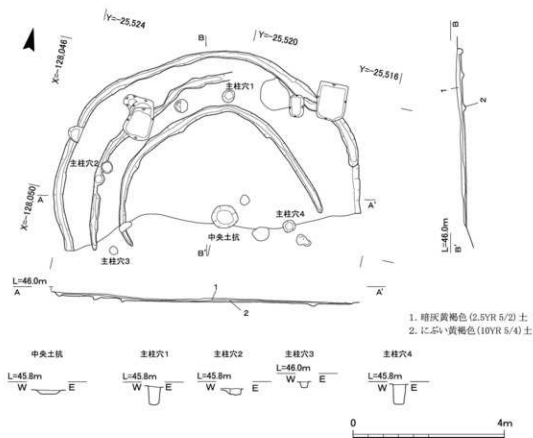
竪穴建物 S H 3002出土土器(第99図436・437) 436は甕の口縁部である。口縁部外面にヘラ状工具による刺突文を施す。口径15.6cm、残存高2.3cmである。437は広口壺などの頸部で、肩部から頸部への立ち上がりには突帯を1条めぐらす。外面には縦方向のミガキを施す。

竪穴建物 S H 3003出土土器(第99図438) 438は甕の口縁部である。端部を欠損するが、つまみ上げるようである。

溝 S D 3018出土土器(第99図439) 439は鉢の脚台部と思われる。残存高2.6cmである。

竪穴建物 S H 3010出土土器(第99図440・441) 440・441は甕もしくは壺の底部である。

柱穴 S P 441出土土器(第99図442~444) 442は小型の甕と思われる。口径11.4cm、残存高5.0cmである。443は碗形を呈する鉢である。444は甕の底部である。

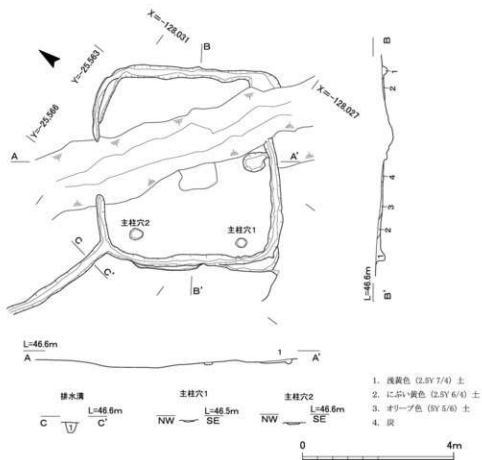


第95図 竪穴建物 S H 3009実測図(1/100)

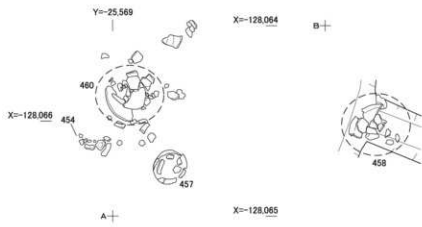
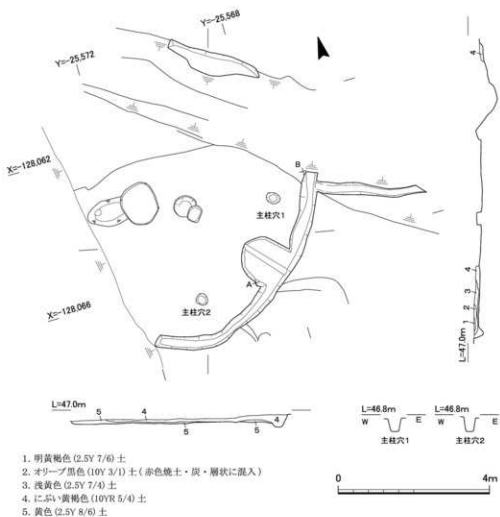
竪穴建物 S H3009出土土器(第99図444~447) 444・445は甕もしくは壺の底部である。447は鉢である。内湾気味に立ち上がる体部に、頸部に強く屈曲して外反する口縁部を有する。推定口径23cm以上の大型の鉢と推測する。口縁部はヨコナデ、体部は内外面ともミガキを施す。448は器台の筒部から脚部にかけての破片である。外面にミガキを施す。

竪穴建物 S H3015出土土器(第99図452~460) 452は柳描き沈線4条、列点文を施す近江系壺である。453~456は壺もしくは甕の底部である壺もしくは甕の底部である。456の外面にはタタキを施す。457はいわゆる近江系の鉢である。口縁部外面に列点文、肩部から体部の外面にかけては柳描直線文4条、列点文、柳描直線文5条、柳描波状文4条を施す。体部下半にはハケを施す。458は大型の鉢である。口径28.2cm、残存高12.0cmである。内外面とも磨減が著しく、調整は不明である。459は近江系の鉢、もしくは手埴り形土器の体部最大径付近の破片と思われる。最大径付近には突帯が1条めぐる。460は甕である。口縁部は「く」字状呈し、体部中位付近に最大径がある。底部は突出底である。口縁部内外面にヨコナデを施し、体部外面にはタタキの後、ハケを施す。体部内面にハケを施す。口径16.2cm、器高27.4cmである。

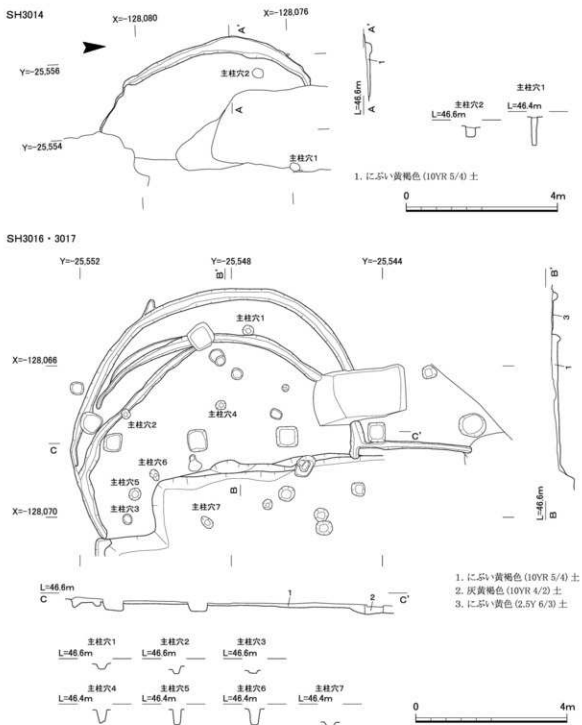
土坑 S K432出土土器(第99図461~466) 461は広口壺の口縁部である口縁部外面に擬凹線文を施す。462・463は甕もしくは鉢の底部である。463の外面に木の葉状の圧痕が残る。464・465



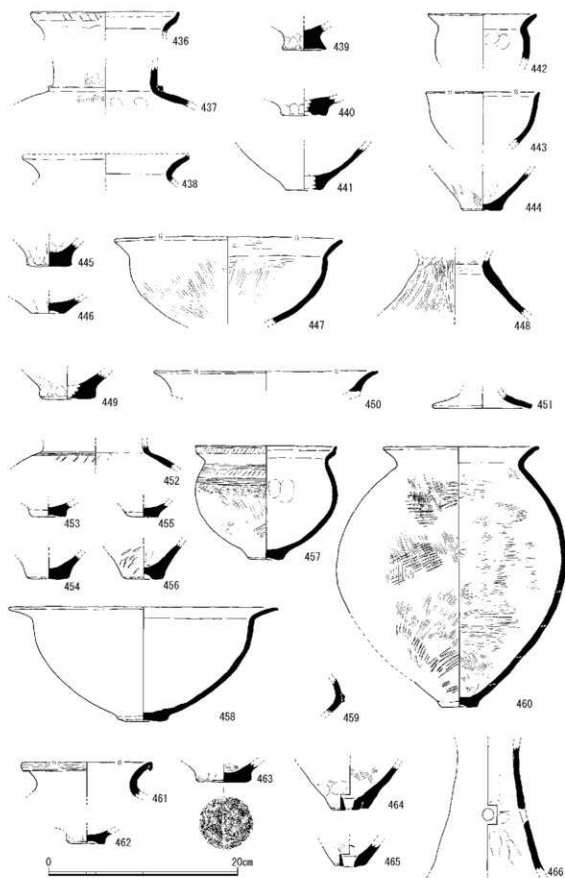
第96図 竪穴建物 S H3006実測図(1/100)



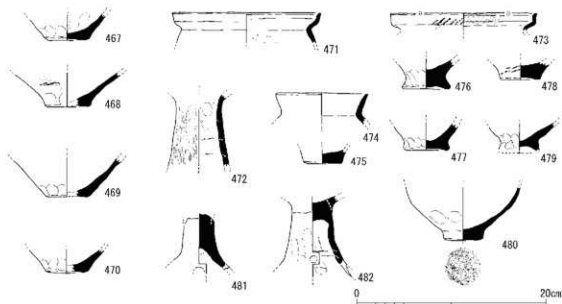
第97図 竪穴建物 S H3015実測図 (1/100)



第98図 竪穴建物 S H3014・3016・3017実測図(1/100)



第99図 弥生土器実測図1(1/4)



第100図 弥生土器実測図2 (1/4)

は有孔鉢の底部である。466は器台の筒部である。内外面ともナデを施し、筒部中位に円形の透かし孔がある。

柱穴 S P 445出土土器(第100図467・468) 467・468は甕の底部である。468の外面には煤が付着する。

柱穴 S P 3020出土土器(第100図469) 469は甕の底部である。

柱穴 S P 3021出土土器(第100図470) 470も甕の底部である。

竪穴建物 S H 3014出土土器(第100図472) 472は高杯の脚部である。外面に細かなミガキを施す。

竪穴建物 S H 3016出土土器(第100図471) 471は受け口状口縁を呈する甕である。

竪穴建物 S H 3017出土土器(第100図473～482) 473は受け口状口縁を呈する甕である。外面に刺突文を施す、いわゆる近江系の甕である。474は小型の甕であろうか。475は壺であろうか。476・477・479・480は鉢の底部であろう。480は平底で、底部外面に木の葉状の圧痕がみられ、その他の底部は脚台状を呈する。478は甕の底部で、外面にタタキを施す。481・482は高杯脚柱部である。ともに円形の透かし穴がある。481は脚柱上部が中実である。482は脚柱部内面に粘土紐接合痕とシボリ痕跡が認められる。

(山崎美輪・筒井崇史)

6. 遺構と遺物の検討

1) 礎石・掘立柱併用建物S B2020について

礎石・掘立柱併用建物S B2020は、当初、柱間寸法7mの柱穴列を複数検出し、前後の柱穴列は3.5mずれて、千鳥に配置されるような状況を確認した。この段階では柱穴が規則正しく配置されているため、宝輪遺構の可能性も考えたが、寺院内での位置や規則性、規模などが必ずしも宝輪遺構とは言えないという意見を得た。⁽⁹¹¹⁾一方、これらの柱穴群を建物として復元する場合、7mを測る柱間の中間の地点に、礎石を配する以外に柱を建てる方法がないという意見が提示された。⁽⁹¹²⁾この意見を受けて、さらに調査を進めると、遺構検出面が良好に残存する北西部で、礎石を据えるための穴を確認した(礎石据え付け穴S P290・294・144)。このため、7mの柱間寸法の中間には礎石据え付け穴が存在していたが、その後の地形の改変により、削平されたものと判断した。

S B2020の復元 S B2020は南北に1間ずつの廂を持つ東西棟の建物であるが、東端部が調査対象地外に位置するため、正確な規模は不明である。S B2020の東側に当たる第6次調査地では建物として復元できなかったが、複数の柱穴が検出されている。これらの検出面は標高43.3～43.5mで、最も高い位置で検出されたS B2020の礎石据え付け穴S P290の検出面(標高45.9m、柱穴底面の標高44.6m)よりもさらに2.5mも低い。したがって、S B2020と第6次調査検出の柱穴群との間には2m以上の段差があり、寺院内が雑壇状に造成されていた可能性を示す。

もし、美濃山廃寺の内部が雑壇状に造成されていたすれば、S B2020の桁行の規模もある程度予想できる。まず、東側の余地から7間、もしくは8間の可能性があるが、9間以上は上記の雑壇の想定から困難と考えられる。また、柱穴と礎石が交互に配列され、柱穴と礎石の配置が左右対称であるとなると、8間が妥当である。そして桁行8間であるとなると、調査対象地外には北東角の柱穴や東側の妻柱などが残存している可能性が高い。いずれにしても将来の調査の機会に委ねることにしたい。

礎石・掘立柱併用建物S B2020の性格 S B2020については、礎石・掘立柱併用建物と推定される。掘立柱と礎石を併用する建物の例はいくつか知られているが、今回のように千鳥に配列されている例は確認されていない。⁽⁹¹³⁾また、建物の構造については、上記で桁行8間の可能性を指摘した。このS B2020の性格について述べてみたい。

S B2020を桁行8間で復元した場合、その中軸線を南へのばすと、第6次調査B地区に想定される金堂相当施設推定地を通ることになる。さらに建物の構造や規模、位置を考慮すると、講堂である可能性が高いと考えられる。古代寺院で、桁行8間の平面形式となると、奈良県飛鳥寺や山田寺、大阪市四天王寺、宮城県多賀城廃寺などに類例がある。また、朝鮮半島では統一新羅時代の感恩寺や仏国寺の講堂も桁行8間であり、第6次調査報告140～142頁で指摘しているように、ひさご形土製品等と同様に新羅からの影響の可能性もある。

(筒井崇史)

2) 美濃山廃寺の遺構の変遷について

(1) 分析の視点

美濃山廃寺で検出した遺構の変遷については、瓦類や土器類の出土状況に、掘立柱建物群の方位などを加味して検討した。瓦類の検討と分析については、第6次調査報告132～138頁を参照されたい。土器類については、奈良文化財研究所による飛鳥・藤原地域と平城宮における土器編年を参照して年代を推定している⁽¹⁰¹⁾。ただし、両地域とも政治的中心地であり、在地の土器編年には各地域の様相が反映されるという点にも留意しておきたい。

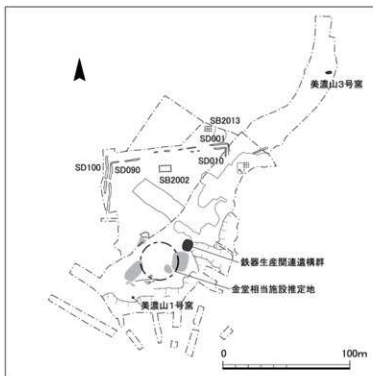
美濃山廃寺では、区画溝が大きく西に振っているほか、建物の方位も一致しないものが多く、大きなまとまりを捉えにくい。その上、各柱穴から出土している土器を検討すると、かならずしも同一方位のものが同時期とは言えないような状況である。そこで、柱穴から土器が出土し、建物の時期が決定できる場合には、そちらを時期の根拠とした。なお、建物群については、建物の方位と出土土器から大きく6グループ(A群～F群)に分けた。

また、遺構の構造的特徴としては、側柱建物において、梁行3間のものと梁行2間のものがあり、構造的には前者が古い様相を示しているという⁽¹⁰⁷⁾。美濃山廃寺においても個別に側柱建物の出土物を検討すると、おおむね前者から後者への移行が読み取れる。この点から梁行3間の建物は相対的に古い時期のものと考えられることができると判断した。

(2) 時期区分について

以上のような諸点をふまえて遺構の変遷について検討を加えた結果、大きく4時期に分けることができる(第Ⅰ～Ⅳ期)。第Ⅱ・Ⅲ期についてはさらにそれぞれ2小期に分けることが可能である。以下、各時期の概要について、遺構を中心に見ていくことにする。

①第Ⅰ期(7世紀後半～8世紀初頭、第101図) 第3～5次調査や今回の第6・7次調査で検出した区画溝SD001・010・090・100は、この段階には掘削されていた可能性が高い。美濃山廃寺に関連する建物のうち、掘立柱建物SB2002と総柱建物SB2013の柱穴からは瓦類がまったく出土しない。両建物は第Ⅱ期に下がる可能性もあるが、他の建物の柱穴から多数の瓦類が出



第101図 美濃山廃寺第1期主要遺構配置図

土する点をふまえると、美濃山廃寺の創建初期に造営されたために、瓦類が混入しなかったと考えられる。ただし、建物方位は座標北に対してそれぞれ西と東へ3°程度の振れがあって一致しない。このため当初は、方位に対する制約が弱かったと考えられる。

また、第6次調査の美濃山1号窯と鉄器生産関連遺構群、第9次調査の美濃山3号窯がある。これらは美濃山廃寺の創建に伴い、釘等の鉄製品や瓦類の生産を行っていたものと考えられる。

第6次調査地B地区では、第6次調査報告132～138頁で指摘したように、特定型式の軒瓦(軒丸Ⅰ・Ⅱ型式、軒平瓦Ⅰ・Ⅱ型式)と平瓦H-B類が集中して出土することから、この付近に美濃山廃寺の中心的な建物が造営されたと推定される(金堂相当施設推定地)。ただし、第6次調査B地区では建物や基壇等の痕跡を確認することはできなかった。

最後に、この時期の年代についてみることにする。まず、鉄器生産関連遺構群周辺で出土している土器群がある(第6次調査報告第98図339～353)。美濃山廃寺の中では最も古く、上限を示すものである。出土土器の様相から7世紀後半に位置づけられる。これより後出する資料が鉄器生産関連遺構群の上層や遺物包含層等から出土している(第6次調査報告第96図290～第97図322)。出土土器の様相から7世紀末から8世紀初頭に位置づけられる。これに対応する瓦類として、軒丸瓦Ⅰa・Ⅰb、Ⅱa・Ⅱbの各型式、軒平瓦Ⅰa・Ⅰb、Ⅱの各型式、丸瓦M-A類、平瓦H-B類がある。また、平瓦H-A類は断定できないが、第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけて用いられた可能性がある。

なお、第Ⅰ期については、出土している土器資料を見るとやや時間幅があり、軒丸瓦もⅠ型式とⅡ型式とでは若干の時間差が存在する可能性があるため、今後、2小期に細分することができるかもしれない。しかし、遺構の分布状況から第Ⅰ期は、7世紀後半から8世紀初頭に属し、美濃山廃寺の「創建期」と考えたい。

②第Ⅱ期 調査地の北半部を中心に掘立柱建物の増える段階である。遺構から1枚作りの瓦が出土するか否かで、2小期に分けた。

第Ⅱ-1期(8世紀前半、第102図上) 建物の方位の点では大きく2グループに分けられるが、出土している遺物から時期差は認められない。まずA群として、北に対して大きく東に振る(17～22°)一群があり、第6次調査の掘立柱建物S B055・475がそれに当たる。これは丘陵の地形に制約されたためであろう。S B475に近接する溝S D039もおおむね同方位で、同時期の可能性が高い。S D039では大量の遺物が出土しており、なかでも土師器杯B(第6次調査報告第88図142)は1点のみの確認であるが、内面に二段放射暗文を伴い、奈良時代前半ごろの特徴をもつものである。第Ⅱ期の年代を考える上で重要な資料である。

次にB群として、北に対して西に少し振る(7°)建物群がある。この段階に位置づけられるのは第7次調査の掘立柱建物S B2012のみである。また、近接して検出した土坑S K352もこの段階に位置づけられる。S B2012の各柱穴やS K352からは大量の土器が出土している。なお、S B2012は西側に廂を持つ建物として復元したが、廂と区画溝S D001が重複するため、この段階で、人為的にS D001は埋められていた可能性が高い。区画溝S D010の埋没時期は特定できないが、

SD001と同時か、掘立柱建物SB2011が造営される第Ⅱ-1期までであったと考える。

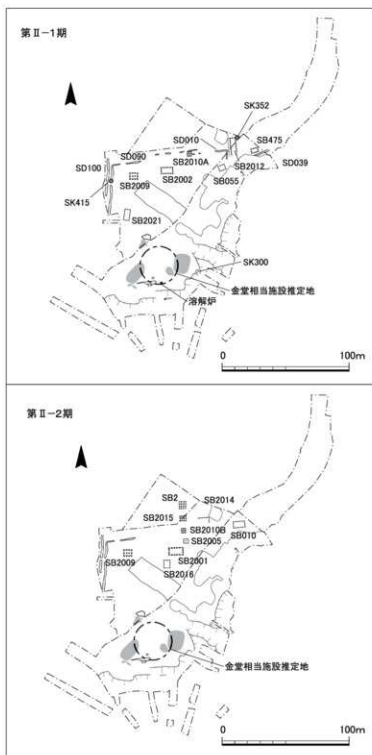
また、第8次調査では、弥生時代後期の竪穴建物の埋没過程で生じた凹地の最上層から美濃山廃寺の第Ⅰ～Ⅱ期の土器が出土している⁽³³⁾。これらは掘立柱建物の整備に伴い、区画溝よりも北側に存在した凹地を整地した時期を示す遺物と理解している。

さらに、この時期に位置づけられる遺構として、第6次調査の溶解炉SL1と落ち込みSX20

がある。SL1は大きく破壊されていることから時期は判断しにくい、青銅素材の溶解炉ということで、寺院の造営や整備に伴う鋳造品の製作を行っていたと推定される。溶解炉内に廃棄された瓦類は、軒丸瓦Ⅰ型式や平瓦H-A類が多く、平瓦H-D類はまったくみられない。土器類もSD039などで出土しているものと同型式の須恵器杯B蓋(第6次調査報告第101図438)が出土していることから、おおむねこの時期と判断される。これらの遺構の検出状況から、美濃山廃寺の北半部を中心に掘立柱建物群が整備された時期と考えられる。

このほか、注目される遺構として、第6次調査の土坑SK300、第7次調査の土坑SK415がある。両遺構からは覆鉢形土製品と平瓦H-A類やH-B類が共伴して出土しており、覆鉢形土製品が第Ⅱ-1期に位置づけられることを示している。

さて、第Ⅱ-1期の年代を示す資料としては、第6次調



第102図 美濃山廃寺第Ⅱ期主要遺構配置図

査地北部や第7調査地北東部で出土した土器群がある。同地点で出土した土器には都城で出土する杯Aや杯Bと同形態のものがあり、内面に暗文を施すものが多い(第6次調査報告第88図141・142、第7次調査報告第76図123・126・127・139・140、第78図181～191など)。都城での暗文の変遷をふまえると、一段斜放射暗文のものが多いことから、8世紀前半の年代を与えることができる。

第Ⅱ-2期(8世紀中頃、第102図下) 1枚作りである平瓦H-D類が含まれる点で第Ⅱ-1期よりも新しく位置づけられる。また、遺物の出土傾向としては瓦類を柱穴内に大量に含む点が挙げられる。

建物の方位の点では大きく、北に対して西に2°程度振るグループ(C群)と同じく5°程度振るグループ(D群)に分けられる。C群は、第1期のS B2002のあり方を踏襲する一群である。C群の建物としては第7次調査の掘立柱建物S B2001・S B2005・S B2016、総柱建物S B2009・S B2010B・S B2015、第8次調査の掘立柱建物S B2などが該当する。

S B2001は、S B2002と同様の構造(桁行5間、梁行3間)を呈するが、規模が一回り大きくなっており、両者の間に切り合い関係がないものの、近接して検出したことから、S B2002からS B2001への建て替えを想定したい。また、遺構の性格あるいは機能面については、構造や位置がほぼ同じであることから、大きく変化したとは考えにくい。S B2016は桁行3間に復元されており、その点でS B2001と同じである。S B2016はS B2001の前面にある建物で、何らかの関連性があると思われる。S B2005は小規模な2間四方の建物で、その性格は不明である。

総柱建物のうち、S B2009は規模の点からも美濃山廃寺における立地の点からも、その特殊性は明らかであり、北部で検出したS B2010・S B2015などとは大きく異なった性格が考えられる。一方、区画溝S D090では大量の平瓦H-A1類が投棄されているが、近くに建物等が存在しないため、いずれの建物に伴うものか不明である。ただし、S B2009の東西の雨落ち溝と推定されるS D355・656や、南側に広がる攪乱S X5015では、多数のH-A1類が集中して出土しているため、S B2009にH-A1類が用いられていた可能性が高い。この想定が正しければ、S D090の埋没とS B2009の廃絶は同時期である可能性が高い。S D090やS D100では、埋土に平瓦H-D類と断定できるものがごくわずかしみられないことから、区画溝の廃絶は第Ⅲ期まで下らない可能性が高く、第Ⅱ-2期末までに埋没していたと考える。

残る3棟はS B2001の北方におおむね東辺を揃えて建てられている。ただしS B2010Bが2間四方、S B2015・S B2が3間四方であることから、造営に時期差があるのかもしれない。

次にD群の建物としては、第7次調査の掘立柱建物S B2014と第6次調査の掘立柱建物S B010がある。両建物は第Ⅱ-2期の遺構と考えているが、S B2014は梁行が2間であることから第Ⅲ期まで下がる可能性がある。また、S B010は梁行3間でS B2002やS B2001などと同じ特徴を持つが、出土遺物の点から第Ⅲ期に下がる可能性がある。したがって、両建物は第Ⅱ-2期から第Ⅲ期にかけての建物である可能性がある。

このほか、第1期における寺域の区画施設として区画溝が認められたが、第Ⅱ期に区画溝よりも

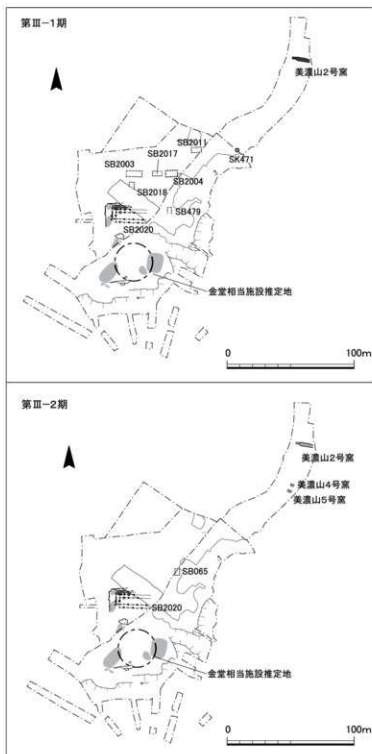
北側の範囲に掘立柱建物群が整備される過程で、これらの区画溝は順次埋め立てられていったと考えられる。区画溝が埋められたことによって、新たな遮蔽施設として第8次調査の北半部で検出された柵が整備されたものと思われる。

第Ⅱ-2期の出土土器は、第Ⅱ-1期よりもやや新しい年代を示しており、平瓦H-Ⅱ類も新たに出現する。これらの遺構の検出状況などから、美濃山廃寺の北半部を中心に掘立柱建物群が引き続き整備された時期と考え、第Ⅱ期全体を「整備期」と考えたい。

③第Ⅲ期 調査地南部に大型の礎石・掘立柱併用建物であるSB2020が造営される段階である。SB2020に補修瓦が認められることから前後2小期に分けることができる。

第Ⅲ-1期(8世紀後半、第103図上) 礎石・掘立柱併用建物SB2020が造営されることをもって画期とすることができる。

これらと同時期に位置づけられる建物は、方位の点から大きく、北に対して東に2°程度振るグループ(E群)と、北に対して西に2°程度振るグループ(F群)に分けられる。E群は、SB2020のほか、第7次調査の掘立柱建物SB2003・SB2018などが該当する。SB2020とSB2003はともに、桁行の長さが確定しないが、前者を8間、後者を5間で復元すると、両者の推定中軸線はおおむね一致することから同時期の遺構と考える。F群は、第7次調査の掘立柱建物



第103図 美濃山廃寺第Ⅲ期主要遺構配置図

S B2004・S B2017などが該当する。S B2004は規模と立地の点で、掘立柱建物S B2001・2002を建て替えた建物である可能性が高い。それに伴う小規模な建物群としてS B2003・S B2017・S B2018が造営される。これらの建物群は、前段階の建物群に比べると、梁行が3間から2間に変化している点に注意される。また、第7次調査の掘立柱建物S B2011は第6次調査の掘立柱建物S B010の機能を引き継ぐ建物と考える。この他に北東部には多数の土器群が出土した土坑S K471がある。

以上のように、北東部と中央部の建物群は第Ⅱ期に整備された後、第Ⅲ期も引き続き、建て替え等によって建物の更新が行われていたと考える。しかし、西部の大型総柱建物S B2009は、この段階にはすでに廃絶していた可能性が高く、北部の総柱建物群もこの段階まで存続していたかどうか不明である。仮にこうした倉庫群が廃絶したとするならば、寺院そのものが継続しているにも関わらず、倉庫群が欠落してしまうことになる。どこかに代替地が成立した可能性もあろう。

軒瓦では、S B2020の周辺から出土する軒丸瓦はⅢ型式とⅧ型式に限られるが、前者が圧倒的に多く、S B2020造営当初の軒丸瓦、後者は修理時の補修瓦と推定される。

第6次調査地南部の金堂相当施設推定地周辺では、軒丸瓦Ⅳ・Ⅴ～Ⅷ型式が少量出土している。これらは第6次調査報告132～135頁で検討したように、金堂相当施設の補修瓦と考えている。このうち、第Ⅲ-1期に位置づけられるのは軒丸瓦Ⅳ・Ⅴ型式と推定している。

この時期の年代を示す資料として、第6次調査土坑S K470(第6次調査報告第93図215～240)、第7次調査区画S X097・099などで出土している土器群(第7次調査報告第84図282～第85図354)がある。第7次調査S X097・099では、灯火器として使用された土師器杯・皿類が多数出土しているが、時期を決定できるものは少ない。この時期を特徴づけるものとして須恵器の小型壺(平城宮土器の分類では壺M)の存在がある。S X097・099では掘削から埋没までにかなりの時間が経過していると思われるが、出土している土器は、8世紀後半の年代を与えることができる。これに対応する瓦類として、軒丸瓦Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ型式、軒平瓦Ⅴ型式、丸瓦M-B類、平瓦H-D類がある。軒瓦は、軒丸瓦Ⅲ型式がS X097・099などで多数出土していることから、礎石・掘立柱併用建物S B2020がこの時期に造営されたものとする。遺構の分布状況や瓦の出土状況から美濃山廃寺に新たな大型建物が造営された「拡充期」と考えたい。

第Ⅲ-2期(8世紀末～9世紀初頭、第103図下) 補修用と推定される軒丸瓦の存在から設定したものの、第Ⅲ-2期に位置づけられる建物は、礎石・掘立柱併用建物S B2020のほかには、第6次調査掘立柱建物S B065のみである。このことが美濃山廃寺がすでに衰退しつつあることを示しているのか、それとも第Ⅲ-1期に造営された建物群が存続しているのか、出土遺物からは明らかにできなかった。

S B2020に伴う補修瓦として、軒丸瓦Ⅷ型式をあげることができ、この段階にも引き続き、S B2020は存在したと考えられる。また、第6次調査地南部の金堂相当施設推定地周辺で出土した軒丸瓦のうち、第Ⅲ-2期に位置づけられるのは、軒丸瓦Ⅶ・Ⅷ型式と推定している。また、軒平瓦Ⅴ型式は、軒丸瓦Ⅷ型式と胎土や焼成、色調などが類似しており、組み合わせる可能性のあるこ

とからこの段階のものと推定したい。その他の軒瓦は出土量が少なく、金堂相当施設やS B2020の補修に伴う軒瓦であろう。補修瓦の1つである軒丸瓦Ⅶ型式は、検討したように8世紀末ごろの年代を与えることができ、これが第Ⅲ-2期の年代と考えることができる。

第Ⅲ-2期は、金堂相当施設やS B2020が存在するものの、その他の建物群の数が著しく減少することから美濃山廃寺の「衰退期」と考えたい。

④第Ⅳ期 第7次調査区画S X097・099や第6次調査瓦溜りS X21では美濃山廃寺の廃絶時期を示す可能性のある遺物として、土師器の杯・皿類(多くは灯火器として使用)や瓦が出土している。これらは在地の土師器杯・皿類と考えられ、平安時代前期ごろと推定される。したがって、このころをもって美濃山廃寺は廃絶したものと考える。これ以降の土器資料はほとんど出土しておらず、近世になって大規模な開発が始まるまで、土地利用の実態は不明である。

以上の点から、第Ⅳ期は美濃山廃寺の「廃絶期」と考えたい。

(3)まとめ

以上、美濃山廃寺における検出遺構の変遷について、出土遺物や掘立柱建物の方位などから検討を加え、4期6区分の変遷を考えた。第6次調査報告46～51頁で報告したように、削平が著しく、実態を明らかにすることはできなかったが、第6次調査B地区に金堂相当施設を推定し、出土遺物からその造営が美濃山廃寺の創建期に位置づけられることを明らかにした。これを第Ⅰ期とした。第Ⅱ期は、2小期に分けたが、金堂相当施設推定地の北方で、多数の掘立柱建物の展開が確認できた。これらの性格については次項で検討するが、美濃山廃寺における諸施設の造営と整備と位置づけることができる。第Ⅲ期は、掘立柱建物群と金堂相当施設推定地の間に礎石・掘立柱建物S B2020が造営された段階で、出土した2種類の軒丸瓦から2小期に分けることができた。この段階は金堂相当施設推定地とS B2020の位置関係から、「仏地」の拡充期と位置づけることができる。第Ⅳ期は、美濃山廃寺の廃絶期に当たる。

(筒井崇史)

3)美濃山廃寺の景観について

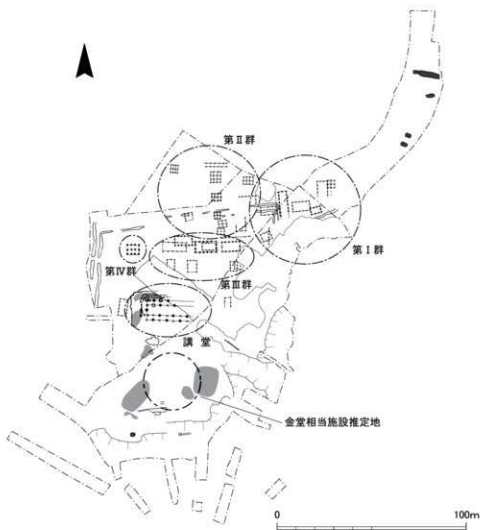
(1)はじめに

前項では美濃山廃寺第6・7次調査で検出した遺構が、建物の方位や切り合い、遺物の出土状況などから4期6区分に分かれることを示した。これにより、美濃山廃寺で寺院の中心施設が整うのは第Ⅱ-Ⅲ期ということができる。第6次調査地B地区には瓦類の出土状況から金堂相当施設が存在が想定でき、また、第7次調査地南部には講堂の可能性も考えられる礎石・掘立柱併用建物S B2020が造営されていたと考えられる。これらをふまえて寺院景観を検討し、そこから復元できる美濃山廃寺の歴史的意義についてまとめてみたい。

さて、寺院の景観についてはこれまで数多くの先行研究がある。たとえば、三輪嘉六氏や坂詰秀一氏は主要伽藍以外の施設も視野に入れた研究の重要性を説いた^(註19)。特に坂詰氏は、古代インドの例を参照して、仏地と僧地が分化したことを述べている。また、日本の平地伽藍を類型化す

るとともに、仏地・僧地・俗地にわけ、僧地については川原寺や飛鳥寺などの僧坊と食堂の配置にも言及した。これに対し、上原真人氏は僧地や俗地は分けにくいものであるため、仏地と僧地に大別するのが適当だとしている⁽⁸²⁰⁾。その後、奈良時代以降が中心ではあるが、墨書土器等の文字資料の出土により、寺院の維持管理施設とその配置が明らかになる事例が増えた。景観研究においても、より踏み込んだ記述がなされるようになり、これにより寺院全体の敷地を「寺院地」と呼び、主要堂塔から構成される区画を「伽藍地」、寺院の維持管理施設からなる区画を「附属院地」と呼び、さらに大衆院・政所院・修理院・倉垣院など諸施設が特定される場合も多い。

美濃山廃寺の景観を検討する上で、これらの先行研究の対象となった寺院と大きく異なるのは、国分寺以前の創建であること、寺院の諸施設を示すような文字資料の出土がないこと、出土遺物から創建段階において官からの援助があった可能性が低いという点である。このため附属院地を構成する諸施設を特定できる可能性は低く、また、検出された建物群の配置などから、上原氏の示した「仏地」と「僧地」という区分のほうが、より検出遺構を評価できる可能性が高いことから、この2大区分を用いて美濃山廃寺を評価してみたい。



第104図 美濃山廃寺寺院内建物群想定復元図

なお、検出した建物の多くが第7次調査地の第Ⅱ～Ⅲ期に属する遺構群であるため、これらの時期を中心に景観復元を行う。

(2) 第6次調査B地区・第7次調査南部(仏地推定地)

第6次調査B地区では竹林造成による強い削平を受けているため、遺構はほとんど検出できなかった。しかし、近世以降の堆積層から寺院創建期の軒瓦と推定している軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式、軒平瓦Ⅰ・Ⅱ型式が多数出土すること、覆鉢形土製品やひさご形土製品などもこの一帯から出土していることから、仏教関連施設があった可能性が高い。第6次調査報告140～142頁にあるように覆鉢形土製品やひさご形土製品から、塔信仰が行われていたことが考えられるが、塔の中に小塔を納めたとは考えにくいことから、堂が営まれ、その中に小塔を納めたのではないかと推定される。金堂は金人(仏像)を納めるための堂宇であるから厳密に金堂と呼ぶことは適切でないかもしれないが、この空間に想定される建物をあえて金堂相当施設と呼んでおきたい。

これに対して第7次調査で検出した礎石・掘立柱併用建物S B2020は、建物規模や、建物の周囲から軒丸瓦Ⅲ型式のほか多数の瓦類が出土していることなどから、講堂としての役割を担っていた可能性がある。講堂は僧地の一部とも理解されているが、一方で金堂・塔などとともに七堂伽藍の1つに数えられていることや、他の掘立柱建物群の検出状況を考慮して、今回の調査では「仏地」の領域に含めておきたい。

(3) 第6次調査A地区北部、第7次調査地北東部・北部・中央部、第8次調査(僧地推定地)

第7次調査を中心に多数の掘立柱建物を検出した。これらには側柱建物と総柱建物が認められ、いくつかのグループに分けることができる(第Ⅰ～Ⅳ群)。以下、各遺構の報告順で群ごとに概要を述べる。

第Ⅰ群は、側柱建物を主体とする一群で、とくに第7次調査北東部から第6次調査A地区北部にかけて認められる。これらは第6次調査掘立柱建物S B475(第Ⅱ-1期)→第7次調査掘立柱建物S B2012(第Ⅱ-1期)→第6次調査掘立柱建物S B010(第Ⅱ-2期)→第7次調査掘立柱建物S B2011(第Ⅲ-1期)という変遷が考えられる。周辺では、大量の土器が廃棄された土坑や溝が確認されている。これらの出土土器の内容から第6次調査溝S D039(第Ⅱ-1期)→第7次調査土坑S K352(第Ⅱ-1期)→第6次調査土坑S K470(第Ⅲ-1期)という変遷が考えられる。他の区画では土器がほとんど出土しないことから、この区画が生活空間であり、文献等にみえるいわゆる大衆院としての性格を担っていた可能性がある。

第Ⅱ群は、主に総柱建物からなる一群で、第7次調査北部や第8次調査地で検出した。6棟検出したうち、総柱建物S B2010・2015や第8次調査で検出した総柱建物S B2の3棟は、個々の建物規模は異なるが、東辺をほぼ揃えて、南北に並んで建てられている。こうした配置などから寺院の倉庫群であった可能性がある。S B2010やS B2015は建て替えも認められるが、第三期以降も引き続き存続したかどうかは明らかでない。

第Ⅲ群は、第Ⅰ群の側柱建物群よりもやや大型の側柱建物群であり、第7次調査地の中央部、S B2020の北側に認められる。桁行5間(9.1～10.9m)、梁行3間ないし2間(4.5～5.5m)の大型

掘立柱建物を東西に3棟検出しており、第7次調査掘立柱建物S B2002(Ⅰ期・第Ⅱ-1期)→第7次調査掘立柱建物S B2001(第Ⅱ-2期)→第7次調査掘立柱建物S B2004(第Ⅲ-1期)と建て替えられた可能性がある。中央部で検出した第7次調査掘立柱建物S B2003・2016～2018、第6次調査掘立柱建物S B065は、上記3棟に付属する建物群と考えられる。またS B2001やS B2017の柱穴から硯や朱硯(第81図245・249)を含む転用硯などが出土していることから、これらの建物周辺で寺務作業を行っていた可能性があると考えられる。断定は難しいが、政所院としての性格を担っていた可能性がある。

第Ⅳ群は、総柱建物S B2009のみからなる。S B2009は第7次調査地西部で検出し、礎石・掘立柱併用建物S B2020の柱穴に次ぐ、一辺1.0～1.4m程度的大型柱穴で構成される。また、S B2009の周辺にはほかの建物がみられず、区画溝S D090・100の内側に位置し、1棟のみ独立した状態で存在している点の特異である。桁行3間(6.0m)、梁行2間(4.6m)、総面積27.6㎡であり、山田寺の宝蔵とされるS B660(桁行3間(6.0m)、梁行3間(5.0m)、総面積30㎡)と規模が類似する。以上の点をふまえ、寺院に関連する建物と考え、山田寺の例と同様に宝蔵もしくは経蔵である可能性もあると考えられる。

以上のように、調査地の北半部で検出された建物群は、僧侶が生活し寺院を運営するための空間であったと考えられる。

(4)まとめ

これまで景観や伽藍配置研究の対象となってきた寺院は、官からの影響を多く受け、国分寺などの鎮護国家思想のもとに造営された寺院が中心である。第6次調査報告149・150頁でも述べたようにこうした朝廷の仏教施策は聖武朝に最高潮に達する。たとえ地方豪族の氏寺であっても、造営ないし修繕の技術や寺院形態などが強い影響を受けたことは想像に難くない。美濃山廃寺では検出された遺構を仏地と僧地に大別でき、特に僧地内の建物群については掘立柱建物や総柱建物のままとりからさらに小区画が想定できた。いわゆる政所院や倉庫の集まる倉垣院と考えられる一群も存在したが、断定できる要素に乏しい。

仏地においては、いわゆる塔・金堂・講堂という伽藍配置が整っていたとは考えられず、独自の発展をしたのではないかということが読み取れる。また、土製品も特殊なものが出土し、信仰形態も独自のものであった可能性が高い。このことは官の影響をほとんど受けず、新羅系渡来人の影響を受けて創建されたことによるのかもしれない。

奈良時代後半になって、平城宮と同文の軒瓦が出土することから、朝廷の仏教施策の影響を多少受けるようになると考えられる。しかし、検出遺構から、いわゆる七堂伽藍が整い、附属院地を構成する諸施設が全て整っていたとは考えにくい。このことから寺院の形態まで官の統制を受けることはなかったと考えられる。第Ⅳ期には建物の建て替え等もされなくなり、寺院が維持できなくなって廃絶したと考えられる。

(筒井崇史・関広高世)

7. 総括

美濃山廃寺第7次調査の成果について、第6次調査の成果と合わせて、美濃山廃寺の総括としたい。この総括には、八幡市教育委員会が実施した第8次調査、ならびに当調査研究センターが実施した第9次調査および美濃山瓦窯跡の発掘調査の成果も合わせて参照した。

1) 美濃山廃寺の景観

古代寺院の構造については、いくつかの分類が可能である。美濃山廃寺の調査では、具体的な金堂や塔などの伽藍に相当する遺構を確認することはできず、第6次調査地B地区に、出土した軒瓦や丸・平瓦の分布から金堂相当施設を推定できたととまる。これに対して、第7次調査地を中心に第6・8・9次調査地に広がって多数の側柱建物群・総柱建物群を検出した。これらの遺構群は検出された掘立柱建物の構造や分布などから、生活空間や寺務作業空間、倉庫群などを想定した。そして前者を「仏地」、後者を「僧地」と位置づけることができると考えた。

2) 遺構の変遷

出土遺物や掘立柱建物の造営方位・構造などから検討を加え、第Ⅰ～Ⅳ期の4期に大別し、第Ⅱ・Ⅲ期をそれぞれ2小期に細分した。

第Ⅰ期は、第6次調査地B地区に金堂相当施設を造営した段階で、美濃山廃寺の創建期と考えている。具体的な建物については明らかにできなかったが、出土遺物等から信仰の中心的な施設が営まれていたと考えられる。

第Ⅱ期は、金堂相当施設をはじめとする「仏地」と考えた範囲の北側に、多数の掘立柱建物群の整備が進む段階である。一部の建物は第Ⅰ期に造営された可能性があるものの、本格的な整備は第Ⅱ期に行われたと考えている。この段階から次の第Ⅲ期にかけては遺構数も多い。建物の建て替えなどもほぼ同じ地点で確認できる。これは「僧地」に当たる空間の整備と考えられよう。

第Ⅲ期は、第7次調査地南部に礎石・掘立柱併用建物S B2020が造営される段階である。美濃山廃寺存続期間のほぼ中間期で、大規模な建物の造営を行っていることが注意される。S B2020の造営は、「仏地」の拡充の段階と捉えることができよう。

第Ⅳ期については、具体的に遺構を確認することはできなかった。このため、美濃山廃寺の廃絶に至る段階と理解している。

以上、各期の評価としては、第Ⅰ期は創建期、第Ⅱ期は「僧地」の整備期、第Ⅲ期は「仏地」等の拡充期、第Ⅳ期は廃絶期と考えている。

さて、美濃山廃寺の存続期間の実年代については、南山城地域における土器編年に課題があるものの、飛鳥・藤原地域や平城宮での編年をもとに実年代を推定した。美濃山廃寺の変遷は先述の通り4期区分とし、第Ⅰ期：7世紀後半～8世紀初頭、第Ⅱ期：8世紀前半～中頃、第Ⅲ期：8世紀後半～末、第Ⅳ期：9世紀前半代と想定できる。

3) 生産関連遺構群について

第7次調査では、羽口や鉄釘等が、土坑や掘立柱建物の柱穴掘形などから出土した。これらの出土地点は調査地の広範囲に及ぶが、鍛冶炉等の遺構を確認することはできなかった。これは後

世の竹林造成等で大きく削平されたためと考えられ、丘陵の東側斜面や頂部の平坦地のいずれかの場所に鍛冶関連の遺構が存在していた可能性を示すものである。第7次調査で出土した鍛冶関連遺物は、建物の補修用として作られた製品やその関連遺物であった可能性がある。これに対して第6次調査A地区南部で検出した鍛冶遺構は、出土遺物などから美濃山廃寺創建期の寺院造営に伴うものと評価できる。

また、第7次調査地では、礎石・掘立柱併用建物SB2020の周辺を中心に大量の瓦が出土した。これらの大半は平瓦H-D類と分類した1枚作りの平瓦である。これを生産していた瓦窯としては第9次調査で検出した美濃山2・4・5号窯が候補になる。2～5号窯については、調査期間等の関係から平成24年度に本格的な調査を実施したため、その調査成果については、今後の整理作業を待たねばならないが、美濃山廃寺と不可分の関係にあると考えられる。これらの瓦窯と美濃山廃寺の関係については、別の機会に検討することにしたい。

4) 美濃山廃寺出土軒瓦

型式ごとの出土点数や出土傾向、年代等については、第6次調査報告132～135頁で述べた通りである。以下、美濃山廃寺出土軒瓦の意義について簡単にまとめることにしたい。^(B20)

①美濃山廃寺の軒瓦の変遷 美濃山廃寺の創建時の軒丸瓦としては、I a・I b・II a・II b型式がある。同じく軒平瓦としてはI a・I b・II型式がある。各型式の系統は異なるものであることから、美濃山廃寺の造営に当たり、各地から集められた可能性がある。このため、いずれか1種類の型式をもって創建軒瓦とするのではなく、複数の瓦が使用されていた可能性を考える必要もある。これらの軒瓦はすでに述べている通り、仏地の周辺で集中的に出土しており、金堂相当施設の位置を推定するための根拠となっている。

次に、奈良時代中頃以降の特徴でもある一本作りの軒丸瓦Ⅲ型式は、その出土位置から礎石・掘立柱併用建物SB2020の造営に伴う当初の軒丸瓦であったことが確実である。ただし、軒平瓦がまったく確認されおらず、平瓦を軒平瓦の代わりに利用していた可能性が高い。

軒丸瓦Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ型式は、出土状況等から第6次調査地B地区に想定された金堂相当施設の補修瓦と想定される。軒丸瓦Ⅳ・Ⅴ型式は、8世紀後半の第3四半期ごろ、軒丸瓦Ⅶ型式は8世紀末ごろのものと想定され、少なくとも2回にわたって補修された可能性がある。

軒丸瓦Ⅵ・Ⅷ型式のうち、Ⅷ型式は8世紀第3四半期ごろのものと推定され、軒丸瓦Ⅲ型式のものと同時期のものであろう。一方、Ⅵ型式は時期不明であるが、出土状況からSB2020の補修瓦である可能性が高く、その時期は第Ⅲ-2期、8世紀末と推定される。

②古代交通路と軒瓦 美濃山廃寺出土の軒丸瓦の同文・同范関係は、第Ⅰ・Ⅱ期と第Ⅲ期で異なる。まず、第Ⅰ期の軒丸瓦Ⅰ型式における同文様例として、九頭神廃寺出土例をあげることができる。九頭神廃寺出土例は、新羅系の特徴を有する軒丸瓦と考えられており、美濃山廃寺における渡来系の要素の1つとみることができる。次に軒丸瓦Ⅱ型式は、八幡市志水廃寺や西山廃寺と同文様の軒丸瓦で、ほかの寺院で同范例や同文例が確認されていないことから、山背国綴喜郡内でも現在の八幡市域に限定されて生産された可能性のある軒丸瓦であろう。このように第Ⅰ・

Ⅱ期の同文・同范瓦の分布範囲から、瓦の技術が綴喜郡の西部や交野郡との関わりで伝わったと考えられる。

一方、さらに時期的に新しく位置づけられる軒丸瓦Ⅲ・Ⅵ・Ⅸ型式は平城宮出土軒丸瓦と同范ないし同文様、もしくはその影響を受けていると考えられるものである。いずれにしても8世紀中頃から後半にかけての年代を与えることができ、官との関わりを指摘できる軒丸瓦である。

またⅣ・Ⅶ型式は、近隣の古代寺院において確認されており、前者は大阪府枚方市百済寺や八幡市西山廃寺で出土している。また、Ⅶ型式は志水廃寺や木津川市山背国分寺塔跡、京田辺市興戸廃寺・普賢寺などで出土している。このように新しい時期になると、同文・同范瓦の分布範囲がさらに広がることがわかる。

軒丸瓦の分布は、森都夫氏の研究にもあるように寺院の立地が影響したと考えられる。古北陸道沿いにある木津川の右岸と左岸域でも相楽郡内では川原寺式の影響を受けた寺院が集まるのに対し、綴喜郡のとくに西部ではその影響を全く受けず、独自の発展をしたと考えられてきた。美濃山廃寺における九頭神廃寺との同文瓦の存在はこれを如実に語り、当時の交野郡(枚方市側)との交流が密であったことを示している。このことは、軒丸瓦のみならず、埴伝においても類似性が見られた百済寺についても同様に、交流のあったことを示している。

補修瓦については軒丸瓦Ⅳ型式が西山廃寺と百済寺と同文であり、さらに新しい時期の軒丸瓦Ⅶ型式については志水廃寺のほか、木津川市山背国分寺、京田辺市興戸廃寺・普賢寺などで出土している。このように美濃山廃寺の創建時と補修時の軒丸瓦のあり方は、若干異なる。前者にくらべると、後者の方が同文様を共有する寺院の分布範囲に広がり認められる。他方、軒丸瓦Ⅱ型式に見られるように綴喜郡内、特に八幡市域の寺院で軒丸瓦の文様に一定のまとまりがあることも忘れてはならない。これは、古北陸道沿いに分布した久世郡や相楽郡の寺院に対し、綴喜郡では古山陰道や古山陽道といった古代の交通路があり、これらの交通路を背景に寺院が造営された可能性を示している。

③**仏教施策と軒瓦** 前項では古代交通路と軒瓦の分布について述べたが、朝廷の仏教施策もこれに影響を与えたと考えられている。美濃山廃寺は、第6次調査報告でも述べたように渡来系氏族の影響を受けながら建立されたと考えられる。綴喜郡で軒瓦の型式がまとまっているのは、そこが交通の要所であっただけでなく、渡来系氏族の影響を受けた独自の信仰を目的とした寺院を建立しようとしたこととも関係する。第6次調査報告149・150頁でも述べているように仏教施策にはいくつかの画期があり、特に天武・持統期、そして聖武期において鎮護国家思想の高まりがみられる。この思想の高まりが最高潮に達したのは聖武期以降であり、これらは美濃山廃寺や周辺の古代寺院で補修が行われた時期とあまり変わらない。それゆえに平城宮出土軒丸瓦と同范ないし同文様、もしくはその影響を受けている瓦が出土するものと考えられる。また、補修瓦の分布範囲が広がるのも情報や技術の広範囲にわたる共有がなされていることの結果と言える。

5) 美濃山廃寺の造営氏族について

南山城地域における古代寺院の多くは渡来系氏族によって造営されたと推測されるものが多い。綴喜郡内の古代氏族の復元的研究は余り進んでいないが、『正倉院文書』「華人計帳」綴喜郡大隅郷の項に華人系氏族の居住を示す記述がある。他にも内氏、高句麗系高井氏、任那系多々良氏、また、継体天皇の筒城宮の推定地でもあることから息長氏が居住していた可能性がある。このうち、美濃山廃寺の造営に関わった氏族については内氏である可能性も指摘されていた。^(註1)

今回の一連の発掘調査では、美濃山廃寺の造営氏族に関する手掛かりを得ることはできなかった。しかし、今回の調査の結果、創建の段階で軒丸瓦Ⅰa式、ひさご形土製品、覆鉢形土製品など、新羅の影響を受けた遺物が少なからず散見されるという点を明らかにすることができた。また、出土軒瓦などをみていくと、南山城地域の他の郡、相楽郡・綴喜郡東部・久世郡との関連よりも河内国交野郡との関わりが深く、国や郡をこえて一つの文化圏を形成していた可能性が高い。さらに綴喜郡ではいわゆる川原寺式、紀寺式の軒丸瓦が認められず、独自の様相を展開することは先に述べた通りである。

ところで、軒丸瓦Ⅰa型式と同文様の軒丸瓦が出土する枚方市九頭神廃寺は、小笠原好彦氏によって、渡来系の氏族である河内馬創造によって造営されたと想定されている。^(註2) また、8世紀後半の建立になるが、枚方市百済寺も渡来系氏族の百済王氏によって建立されたと言われ、軒丸瓦Ⅳ型式と同文様の軒丸瓦が出土している。このように美濃山廃寺と深い関わりを持つと思われる枚方市の九頭神廃寺や百済寺でも、渡来系氏族によって寺院が創建されたと考えられている。また、何度も述べてきたように、美濃山廃寺のものにも、新羅をはじめとする渡来系の文物の影響を見て取ることができる。このことをもって、ただちに美濃山廃寺の造営氏族が渡来系氏族であると判断することはできないが、美濃山廃寺の造営に何らかの影響を与えている可能性は否定できないと思われる。

これらを総合すると、純粋に従来想定されてきた内氏の氏寺ではなく、渡来系氏族の影響を色濃く受けた寺院の可能性が高い。この点をふまえると限定的に分布する軒丸瓦や造塔供養を中心とする当時の仏教施策とはやや異なった信仰形態をもった寺院であった可能性がみえてくる。美濃山廃寺がこれまでの寺院のイメージとは異なる特色を持つ寺院であり、それが仏教の受容や浸透の一過程を示していることを指摘して、本調査報告のまとめとしたい。

(筒井崇史・関広尚世)

注1 美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次調査として、当調査研究センターが実施した。その調査成果については本報告集1を参照されたい。

注2 大洞真白『美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡範囲確認調査(1～5次)報告書』(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第39集 八幡市教育委員会) 2006
本報告の記述に当たり、美濃山廃寺第1～5次調査の成果については上記文献を参照した。

注3 美濃山廃寺として第1～5次調査を、美濃山廃寺下層遺跡として第1～8次調査を実施している。これらの調査成果については、第6次調査報告5～8頁を参照されたい。

- 注4 この遺構については、特に森郁夫(帝塚山大学)、大脇謙(近畿大学)、山岸常人(京都大学)、高正龍(立命館大学)、箱崎和久(奈良文化財研究所)の各氏からさまざまなご教示を得た。
- 注5 当調査研究センターで実施した「美濃山廃寺検討会」の参加者は次の通りである。
上原真人(京都大学、当調査研究センター理事)、石崎善久・福島孝行(以上京都府教育委員会)、小森俊寛・大洞真白・備前知世(以上八幡市教育委員会)、森島康雄(京都府立山城郷土資料館)、調査担当者、当調査研究センター職員
- 注6 注2文献12～15頁、図版1～3を参照のこと。
- 注7 都城における土器供膳具の調整手法は、奈良文化財研究所の報告を参照した。b1手法は、口縁部外面をヨコナデし、底部はヘラケズリで調整するもので、口縁部のみミガキを加えるもの。
- 注8 伊野近富・筒井崇史・松尾史子ほか「馬場南遺跡第2次発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第138冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- 注9 覆鉢形土製品については既存の資料にもとづいて、大洞真白氏が検討を加えている。
大洞真白「美濃山廃寺出土の覆鉢形土製品について」(「古代摂河泉寺院論叢集」第2集 摂河泉古代寺院研究会) 2005
- 注10 注8文献107～109頁、第63図831・832、注23参照。
- 注11 宝幢遺構に関しては高正龍氏(立命館大学)からさまざまなご教示を得た。
- 注12 大型柱穴群を建物として復元するにあたっては、箱崎和久氏からさまざまなご教示を得た。
- 注13 箱崎氏のご教示や管見による類例としては以下のようなものがある。
平城宮第1次大極殿院S B7802(奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告」XI(奈良国立文化財研究所学報第40冊) 1982
平城宮第1次大極殿院S B7700(奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告」XIV(奈良国立文化財研究所学報第51冊) 1993
平城宮東院庭園S B17700(奈良文化財研究所編「平城宮発掘調査報告」XV(奈良文化財研究所学報第69冊) 2003
平城京三条に坊二坪S B4601(奈良国立文化財研究所編「平城京左京二条二坊・三条二坊」(奈良国立文化財研究所学報第54冊) 1995など。
- 注14 奈良文化財研究所編「山田寺発掘調査報告書」(「奈良文化財研究所学報」第63冊 奈良文化財研究所) 2002、箱崎和久「奇偉荘殿の白鳳寺院・山田寺」(「シリーズ「遺跡を学ぶ」」085 新泉社) 2012など。
- 注15 朝鮮半島の事例も、注14の各文献を参照した。
- 注16 飛鳥時代の土器編年については下記の文献を参照した。
奈良国立文化財研究所編「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」(「奈良国立文化財研究所学報」第31冊 1978)、「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ」(「奈良国立文化財研究所学報」第55冊) 1996
また、平城宮における土器編年については下記の文献を参照した。
奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告Ⅶ」(「奈良国立文化財研究所学報」第26冊 1977)、同「平城宮発掘調査報告ⅩⅣ」(「奈良国立文化財研究所学報」第51冊) 1993、同「平城宮発掘調査報告ⅩⅥ」(「奈良文化財研究所学報」第70冊) 2005など
- 注17 古代の建築において、宮殿や官衙・寺院などでは、唐からもたらされた新しい建築様式として、梁行2間を主体とするが、古墳時代以来の建築様式では梁行を3間のものも多くみられるという。下記文献では、前者を「律令型」、後者を「在来型」と呼んでおられる。美濃山廃寺における主要な掘立柱建物についても、出土遺物等から後者が古く、前者が新しく位置づけられる傾向が確認できる。

- 松本修自「軸部と屋根」（『古代の官衙遺跡 I 遺構編』奈良文化財研究所）2003
- 注18 八幡市教育委員会小森俊寛・大洞真白氏のご教示による。
- 注19 三輪嘉六「古代寺院における寺域の問題」（『考古学ジャーナル』61 ニューサイエンス社 1971）、
坂詰秀一「初期伽藍の類型認識と伽藍構成における僧地の問題」（『文学部論叢』第63号 立正大学）
1979、岡廣尚世「寺院景観への一試論」（『考古論集 -川越哲志先生開館記念論文集-』）2005
- 注20 上原真人「仏教」（『岩波講座日本考古学』4 岩波書店）1986
- 注21 網伸也「畿内における在地寺院の様相」（『古代』110号 早稲田大学考古学会）2001
山路直充「国分寺における寺院地と伽藍地」（『古代』110号 早稲田大学考古学会）2001
- 注22 大脇潔「古代寺院と事変の景観を復原する」（『摂河泉の古代寺院とその周辺』第1回摂河泉古代寺院フォーラム資料 摂河泉文庫 1997）、注21網論文など。
- 注23 奈良文化財研究所編「山田寺発掘調査報告書」（『奈良文化財研究所学報』第63冊 奈良文化財研究所）
2002 154～157・470～473頁。
- 注24 なお、以下で取り上げる軒瓦は、いずれも同范であるという判断に至っていない。したがって、同文様の軒瓦として扱う。
- 注25 森郁夫「古代山背の寺院経営」（『学叢』第8号 京都国立博物館）1986
- 注26 中島正「山背の古墳と寺院」（『季刊考古学』60号 雄山閣）1997
- 注27 小笠原好彦「九頭神庵寺の性格と造営氏族」（『日本古代寺院造営氏族の研究』東京堂出版）2005

圖 版

(1) 調査前状況(南から)



(2) A地区伐採後遠景(南から)



(3) B地区伐採後遠景(東から)





(1) A1トレンチ全景(東から)



(2) 北部北壁土層断面(南から)



(3) 中央部西壁土層断面(東から)



(1) 北部遺構検出状況(西から)



(2) 掘立柱建物 S B055・掘立柱塀 S A050検出状況(北東から)



(1) 区画溝 S D106土層断面
(南東から)



(2) 区画溝 S D167遺物出土状況
(西から)



(3) 掘立柱建物 S B475全景
(北東から)

(1) 溝S D039全景(南西から)



(2) 溝S D039遺物出土状況
(南東から)



(3) 溝S D039・土坑S K470
遺物出土状況(北東から)





(1) 掘立柱建物 S B 010 全景 (西から)



(2) 掘立柱建物 S B 475・溝 S D 039 全景 (南から)



(1) 掘立柱建物 S B010-1 土層断面(南から)



(2) 掘立柱建物 S B010-2 土層断面(南から)



(3) 掘立柱建物 S B010-3 土層断面(南から)



(4) 掘立柱建物 S B010-4 土層断面(南から)



(5) 掘立柱建物 S B010-7 土層断面(南から)



(6) 掘立柱建物 S B010-8 土層断面(南から)



(7) 掘立柱建物 S B010-9 土層断面(南から)



(8) 掘立柱建物 S B010-10 土層断面(南から)



(1) 掘立柱建物 S B055-1 土層断面(北から)



(2) 掘立柱建物 S B055-4 土層断面(南から)



(3) 掘立柱建物 S B055-5 土層断面(北から)



(4) 掘立柱建物 S B055-6 土層断面(北から)



(5) 掘立柱建物 S B055-8 土層断面(北から)



(6) 掘立柱建物 S B055-9 土層断面(南西から)



(7) 掘立柱建物 S B055-10 土層断面(南から)



(8) 掘立柱建物 S B055-9 遺物出土状況(南西から)



(1) 中央部北西側遺構検出状況(東から)



(2) 中央部南西側遺構検出状況(南東から)



(1)掘立柱建物S B065-1土層断面(西から)



(2)掘立柱建物S B065-2土層断面(西から)



(3)掘立柱建物S B065-3土層断面(西から)



(4)掘立柱建物S B065-6土層断面(南から)



(5)掘立柱建物S B345-1土層断面(東から)



(6)掘立柱建物S B345-2土層断面(東から)



(7)掘立柱建物S B345-4土層断面(東から)



(8)掘立柱建物S B345-5土層断面(西から)



(1) 掘立柱建物 S B 065 完掘状況 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B 345 完掘状況 (南から)



(1) 掘立柱建物 S B 479 S P 262
遺物出土状況(南から)



(2) 掘立柱建物 S B 479 S P 283
遺物出土状況(南から)



(3) 掘立柱建物 S B 479 S P 264
遺物出土状況(南から)



(1)土坑 S K 091被熱土塊分布状況
(南から)



(2)柱穴 S P 418遺物出土状況
(南から)



(3)柱穴 S P 446遺物出土状況
(西から)



(1) 鍛冶炉 S L485 出土状況
(西から)



(2) 堆積層 S X310 遺物出土状況
(北東から)



(3) 堆積層 S X310 遺物出土状況
(南東から)



(1) 掘立柱塼 S A 250-1 土層断面(北東から)



(2) 掘立柱塼 S A 250-2 土層断面(北東から)



(3) 掘立柱塼 S A 250-3 土層断面(北東から)



(4) 掘立柱塼 S A 250-4 土層断面(北東から)



(5) 掘立柱塼 S A 251-1 土層断面(北東から)



(6) 掘立柱塼 S A 251-2 土層断面(北東から)



(7) 掘立柱塼 S A 251-3 土層断面(北東から)



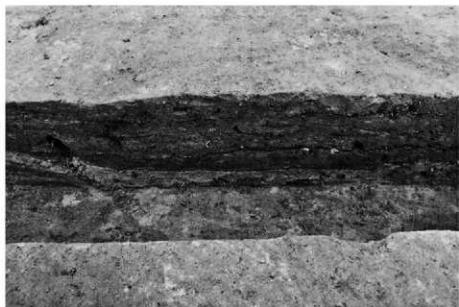
(8) 掘立柱塼 S A 251-4 土層断面(北東から)



(1) 土坑 S K267 遺物出土状況
(南西から)



(2) 土坑 S K300 遺物出土状況
(東から)



(3) 堆積層 S X486 南北土層断面
(西から)



(1) 鉄器生産関連遺構群全景(東から)



(2) 鍛冶炉S L501完掘状況(東から)



(1) 鉄器生産関連遺構群検出状況
(東から)

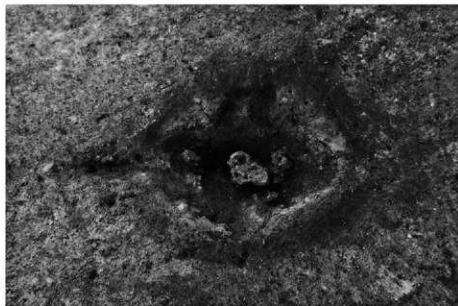


(2) 鍛冶炉 S L 501 検出状況
(南西から)

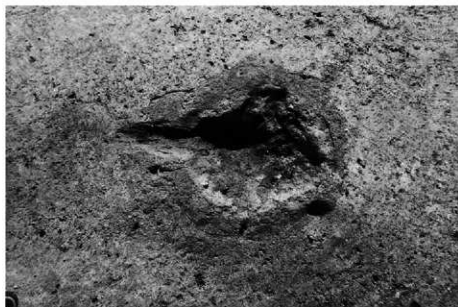


(3) 鍛冶炉 S L 501 半截状況
(西から)

(1) 鍛冶炉 S L501 炉底滓出土状況
(西から)



(2) 鍛冶炉 S L501 完掘状況
(西から)



(3) 炭窯 S Y503 炭層検出状況
(北から)





(1) 土坑 S K502 検出状況 (西から)

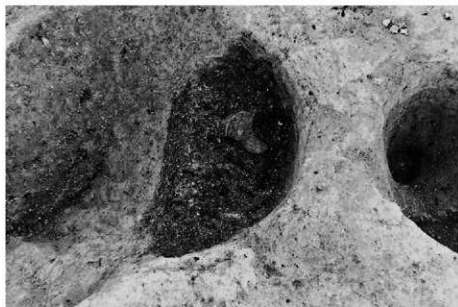


(2) 土坑 S K502 土層断面 (東から)



(3) 土坑 S K502・溶解炉 S L511
切り合い状況 (東から)

(1) 土坑 S K 504 遺物出土状況
(南から)



(2) 土坑 S K 505 炭層検出状況
(南東から)



(3) 土坑 S X 602 遺物出土状況
(北西から)





(1) 土坑 S X603 遺物出土状況
(西から)



(2) 溝 S D702 完掘状況 (南西から)



(3) 溶解炉 S L511 滲出土状況
(東から)



(1)美濃山1号窯(瓦窯SY17)検出状況(南から)



(2)美濃山1号窯(瓦窯SY17)焚口崩落状況(南から)



(1)瓦溜り S X 21検出状況(西から)



(2)溝 S D 6・8完掘状況(西から)



(1) 落ち込みS X 20遺物出土状況(東から)



(2) 溶解炉S L 1と鶴尾・ひさご彩土製品出土状況(北から)



(1) 溶解炉SL1検出状況
(南西から)



(2) 溶解炉SL1第1層遺物出土
状況(北から)



(3) 溶解炉SL1完掘状況
(南東から)

(1) 土坑 S K 18 全景(南から)



(2) 堅穴建物 S H 290 完掘状況
(南から)



(3) 堅穴建物 S H 290 遺物出土状況
(南西から)





(1) 竪穴建物 S H229焼土検出状況
(東から)



(2) 竪穴建物 S H229完掘状況
(南から)



(3) 現地説明会実施状況(南から)



1 (瓦当)



1 (凹面)



1 (凸面)



2



10



4



11



12



33



20



43



28



47



41



71



81 (凹面)



81 (凸面)



81 (瓦当)



27 (凹面)



75 (凹面)



27 (瓦当)



75 (瓦当)



接合部



接合部



80 (凹面)



80 (凸面)



80 (瓦当)



15 (凹面)



15 (凸面)



15 (瓦当)



19



130 (凸面)



82 (凸面)



82 (凹面)



88 (凹面)



88 (凸面)



91 (凹面)



91 (凸面)



109(凹面)



109(凸面)



112(凹面)



112(凸面)



124(凹面)



124(凸面)



119 (凹面)



119 (凸面)



127 (凹面)



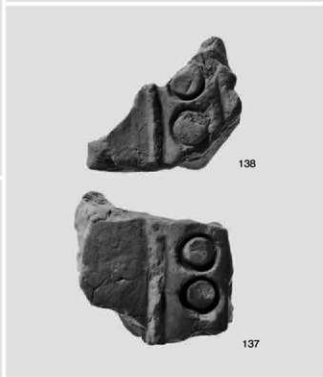
127 (凸面)

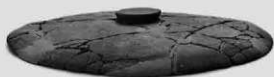


126 (凸面)



126 (凹面)

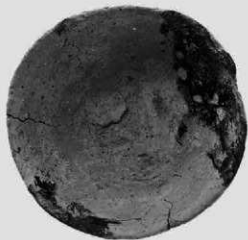




144



174(底面)



153(内面)



174



153



191



194



170



196



178



199



200



227



206



233



207



234



208



737



249



212



257



316



307(外面)



318



307(内面)



306



320



290



738



341 (上面)



507



514



341



566



345



498



209



(1)出土遺物 土製品 1 覆鉢形土製品



(2)出土遺物 土製品 1 覆鉢形土製品



645(上面)



645



645(底面)



646(上面)



646



646(底面)



647(上面)



648(上面)



647



648



647(底面)



648(底面)



649



655



651



663



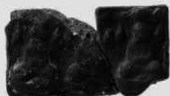
739



650



650



664



664



665



665



666



666



666



666



668



667



668



667



706

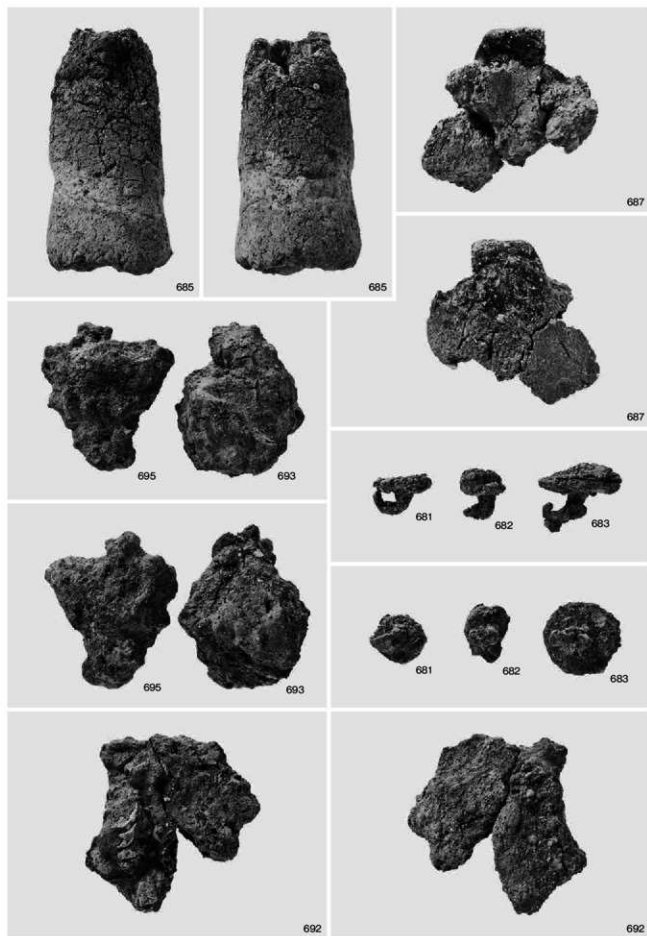


668

667



735





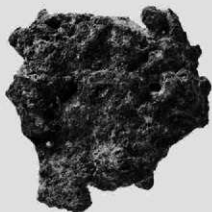
689



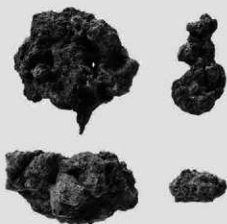
689



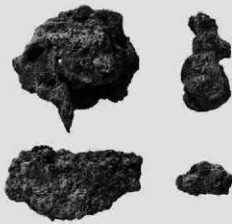
690



690



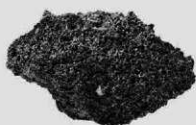
688



688



693



693



696



696



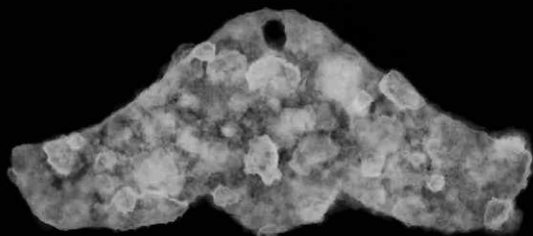
付屬MNY-1



付屬MNY-2



付屬MNY-3



697



701



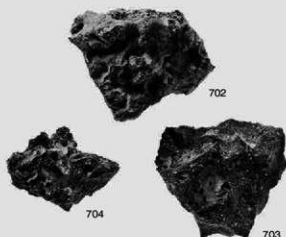
701



705



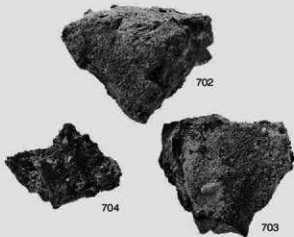
705



702

704

703



702

704

703



698



698



700



700



調査地全景(上が北)



(1) 調査地全景(南西から)



(2) 調査地全景(北西から)



(1) 調査地全景(東から)



(2) 調査地全景(南から)



(1) 調査前全景(北半部、北東から)



(2) 調査前全景(西半部、北東から)



(3) 調査前全景(南半部、北西から)



(1)区画溝 S D001-1・010-1全景(南から)



(2)区画溝 S D001-1・010-1全景(西から)



(1) 区画溝 S D001-1土層断面
(南東から)



(2) 区画溝 S D001-1土層断面
(東から)



(3) 区画溝 S D010-1土層断面
(東から)



(1) 区画溝 S D090・S D100 全景(南から)



(2) 区画溝 S D090-2 遺物出土状況(南から)



(1) 区画溝 S D 090-2 出土遺物
実測作業(北東から)



(2) 区画溝 S D 090-1 遺物出土状況
(西から)



(3) 区画溝 S D 100-3 軒丸瓦出土
状況(北から)



(1) 掘立柱建物 S B 2012 全景(南から)



(2) 掘立柱建物 S B 2012 完掘後全景(南から)



(1) 掘立柱建物SB2012柱穴SP
072ひさご形土製品出土状況
(東から)



(2) 土坑SK352全景(南東から)



(3) 第6・7・9次
調査地隣接地付近遺構掘削作業
(南西から)



(1)掘立柱建物S B2012柱穴S P074土層断面(東から)



(2)掘立柱建物S B2012柱穴S P002土層断面(東から)



(3)掘立柱建物S B2012柱穴S P003土層断面(東から)



(4)掘立柱建物S B2012柱穴S P070土層断面(北西から)



(5)掘立柱建物S B2012柱穴S P071土層断面(東から)



(6)掘立柱建物S B2012柱穴S P351土層断面(北西から)



(7)掘立柱建物S B2014柱穴S P121土層断面(南から)



(8)掘立柱建物S B2014柱穴S P122遺物出土状況(南から)



(1) 総柱建物 S B 2013 全景 (南東から)



(2) 総柱建物 S B 2013 完掘後全景 (南から)



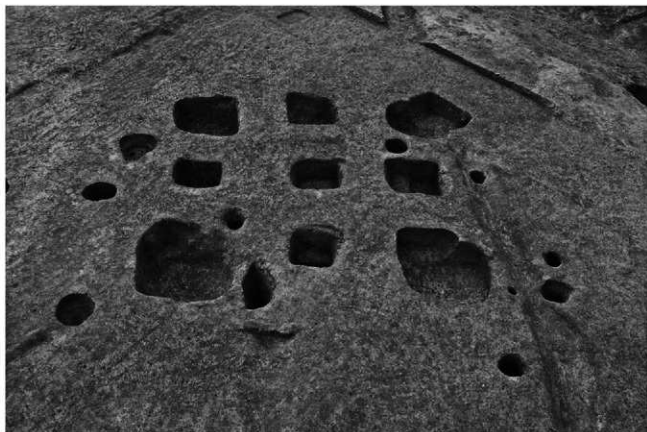
(1) 掘立柱建物 S B 2014・掘立柱罫 S A 2103 全景(北東から)



(2) 掘立柱建物 S B 2014・掘立柱罫 S A 2103 完掘後全景(南から)



(1) 総柱建物 S B 2010 A · B 全景(南から)



(2) 総柱建物 S B 2010 A · B 完掘後全景(東から)



(1) 総柱建物 S B 2015完掘後全景(南から)



(2) 総柱建物 S B 2008全景(南から)



(1) 掘立柱建物 S B 2010 柱穴 S P 186 土層断面 (北から)



(2) 掘立柱建物 S B 2010 柱穴 S P 188 土層断面 (北から)



(3) 掘立柱建物 S B 2010 柱穴 S P 190 土層断面 (北から)



(4) 掘立柱建物 S B 2010 柱穴 S P 193 土層断面 (東から)



(5) 掘立柱建物 S B 2015 柱穴 S P 367 土層断面 (北東から)



(6) 掘立柱建物 S B 2015 柱穴 S P 234 土層断面 (西から)



(7) 掘立柱建物 S B 2015 柱穴 S P 350 土層断面 (北東から)



(8) 掘立柱建物 S B 2015 柱穴 S P 365 土層断面 (南東から)



(1) 掘立柱建物 S B 2005、総柱建物 S B 2006、掘立柱塀 S A 2108 全景(南から)



(2) 掘立柱建物 S B 2005、総柱建物 S B 2006、掘立柱塀 S A 2108 完掘後全景(北から)



(1) 掘立柱建物 S B 2007、掘立柱塼
S A 2102 全景(南から)



(2) 掘立柱建物 S B 2011 完掘後全景
(南東から)



(3) 掘立柱建物 S B 2013・2014 柱穴
掘削作業(南から)



(1) 掘立柱建物 S B 2001 全景(南から)



(2) 掘立柱建物 S B 2001 全景(東から)



(1) 掘立柱建物S B 2001完掘後全景(南から)



(2) 掘立柱建物S B 2004・2001・2002完掘後全景(東から)



(1) 掘立柱建物 S B2001 柱穴 S P091 土層断面 (東から)



(2) 掘立柱建物 S B2001 柱穴 S P047 土層断面 (南から)



(3) 掘立柱建物 S B2001 柱穴 S P046 瓦出土状況 (北から)



(4) 掘立柱建物 S B2001 柱穴 S P045 土層断面 (北東から)



(5) 掘立柱建物 S B2001 柱穴 S P043 瓦出土状況 (西から)



(6) 掘立柱建物 S B2001 柱穴 S P042 土層断面 (東から)



(7) 掘立柱建物 S B2001 柱穴 S P040 土層断面 (北から)



(8) 掘立柱建物 S B2001 柱穴 S P038 土層断面 (北から)



(1) 掘立柱建物 S B 2002 全景(北から)



(2) 掘立柱建物 S B 2002 全景(西から)



(1) 掘立柱建物 S B 2002完掘後全景(南から)



(2) 掘立柱建物 S B 2003完掘後全景(南から)



(1) 掘立柱建物 S B 2004 全景(西から)



(2) 掘立柱建物 S B 2004 完掘後全景(東から)



(1) 掘立柱建物 S B 2016 全景 (東から)



(2) 掘立柱建物 S B 2018 全景 (東から)



(1)掘立柱建物S B2002柱穴S P064土層断面(北東から)



(2)掘立柱建物S B2002柱穴S P059土層断面(南東から)



(3)掘立柱建物S B2002柱穴S P055土層断面(北から)



(4)掘立柱建物S B2002柱穴S P61土層断面(南から)



(5)掘立柱建物S B2004柱穴S P272土層断面(北東から)



(6)掘立柱建物S B2004柱穴S P151土層断面(南から)



(7)掘立柱建物S B2016柱穴S P230土層断面(西から)



(8)掘立柱建物S B2016柱穴S P345土層断面(西から)

(1) 溝SD405検出状況(南から)



(2) 土坑SK092掘削作業
(西から)



(3) 掘立柱建物S B 2001・2002ほか
遺構掘削作業(北東から)





(1) 総柱建物 S B 2009完掘後全景(北から)



(2) 土坑 S K 415 全景(東から)



(1) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 411 土層断面 (南東から)



(2) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 179 土層断面 (西から)



(3) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 359 土層断面 (北西から)



(4) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 180 土層断面 (北から)



(5) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 496 土層断面 (北から)



(6) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 182 土層断面 (東から)



(7) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 183 土層断面 (北から)



(8) 掘立柱建物 S B 2009 柱穴 S P 185 土層断面 (北から)



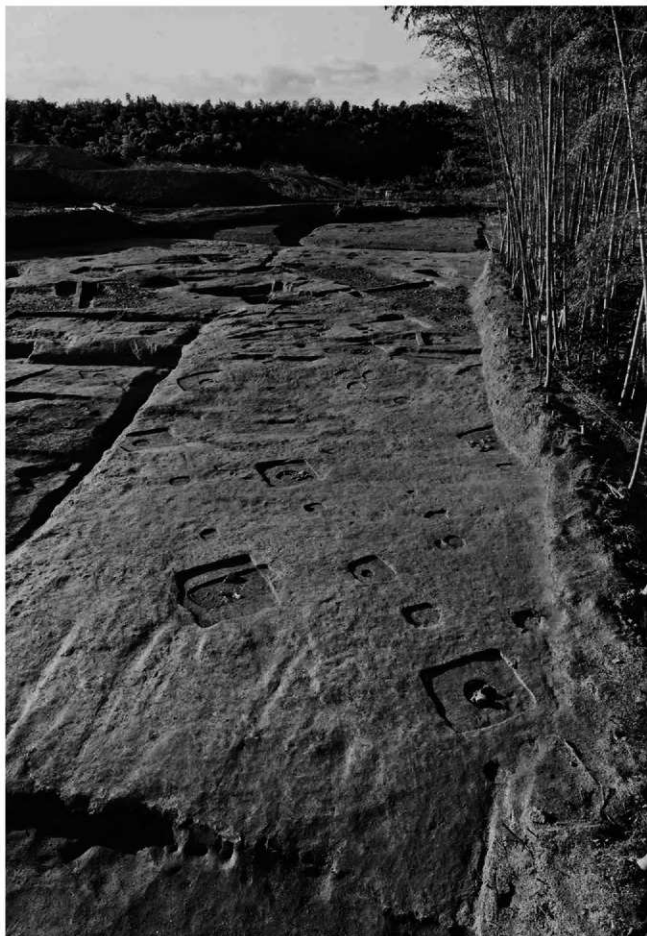
(1) 土坑 S K 225・227・416 全景
(南から)



(2) 土坑 S K 225 全景 (西から)



(3) 総柱建物 S B 2009 柱穴掘削作業
(東から)



礎石・掘立柱併用建物S B2020検出状況(南東から)



(1) 礎石・掘立柱併用建物S B2020、区画S X097・099検出状況(西から)



(2) 礎石・掘立柱併用建物S B2020、区画S X097検出状況(南東から)



(1) 礎石・掘立柱併用建物S B 2020完掘後全景(南から)



(2) 礎石・掘立柱併用建物S B 2020完掘後全景(西から)



(1) S B 2020柱穴 S P 290半載状況(南から)



(2) S B 2020柱穴 S P 291半載状況(北東から)



(3) S B 2020柱穴 S P 294根石検出状況(南から)



(4) S B 2020柱穴 S P 142半載状況(南西から)



(5) S B 2020柱穴 S P 093土層断面(西から)



(6) S B 2020柱穴 S P 144根石検出状況(南から)



(7) S B 2020柱穴 S P 105検出状況(南から)



(8) S B 2020柱穴 S P 141半載状況(南から)



(1) S B 2020柱穴 S P 106半載状況(南東から)



(2) S B 2020柱穴 S P 139検出状況(南から)



(3) S B 2020柱穴 S P 139半載状況(南から)



(4) S B 2020柱穴 S P 213検出状況(南から)



(5) S B 2020柱穴 S P 250検出状況(東から)



(6) S B 2020柱穴 S P 138・140・107検出状況(南西から)



(7) 柱穴 S P 290・289・304検出状況(南東から)



(8) 柱穴 S P 251検出状況(南から)



(1) 掘立柱建物 S B 2021 完掘後全景 (西から)



(2) 雨落ち溝 S D 293 完掘後全景 (南西から)

(1) 雨落ち溝 S D 293 検出状況
(西から)



(2) 雨落ち溝 S D 293 全景 (西から)



(3) 雨落ち溝 S D 293 検出作業
(西から)





(1) 区画 S X097・099完掘後全景
(南東から)



(2) 区画 S X097検出状況(西から)



(3) 区画 S X097土層断面(西から)

(1) 区画S X 099検出状況(東から)



(2) 区画S X 099全景(北から)



(3) 区画S X 099土層断面(北から)





(1) 土坑 S K096 全景 (南西から)



(2) 土坑 S K096 遺物出土状況
(東から)

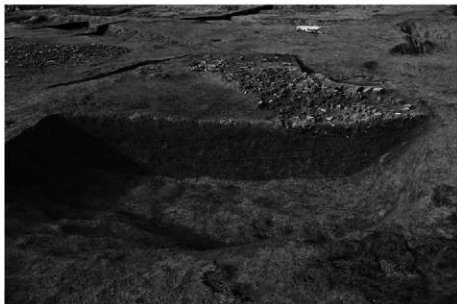


(3) 南部全景 (南から)

(1)土坑S K143、瓦溜まりS X
208・219全景(北東から)



(2)土坑S K143土層断面(東から)



(3)瓦溜まりS X208全景
(南西から)





(1) 堅穴建物 S H3002 全景(西から)



(2) 堅穴建物 S H3010 全景(南から)



(3) 堅穴建物 S H3002・3003 作業風景(南西から)



(1) 竪穴建物 S H3009 全景 (南から)



(2) 土坑 S K209 全景 (北東から)



(3) 土坑 S K432 全景 (北から)



(1) 竪穴建物 S H3015 全景(北から)



(2) 竪穴建物 S H3015 遺物出土状況
(東から)



(3) 竪穴建物 S H3015 遺物出土状況
(北西から)

(1) 竪穴建物SH3006全景
(北東から)



(2) 竪穴建物SH3014全景(西から)



(3) 竪穴建物SH3016・3017全景
(西から)





1



22



23



24



6



30



6(凸面)



21



21(裏面)



4 (凹面)



4 (凸面)



4 (凸面)



5 (凹面)



5 (凸面)



5 (凸面)



7 (凹面)



7 (凸面)



7 (凸面)



32(凹面)



32(凸面)



34(凹面)



34(凸面)



53(凹面)



53(凸面)



59(凹面)



59(凸面)



76(凹面)



76(凸面)



70 (凸面)



70 (凹面)



77 (凸面)



77 (凹面)



83(凹面)



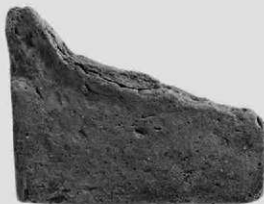
83(凸面)



73(凹面)



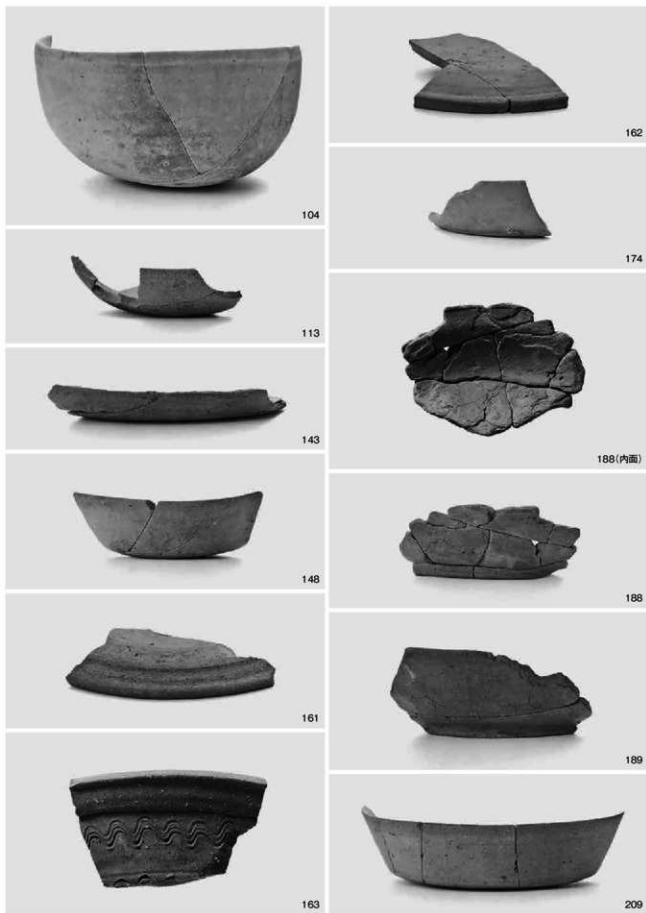
73(凸面)



99



99





210



211



214



220 (内面)



220



245



258



369



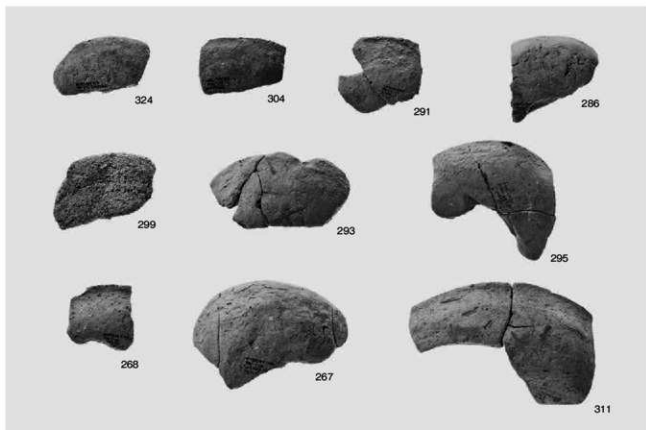
310



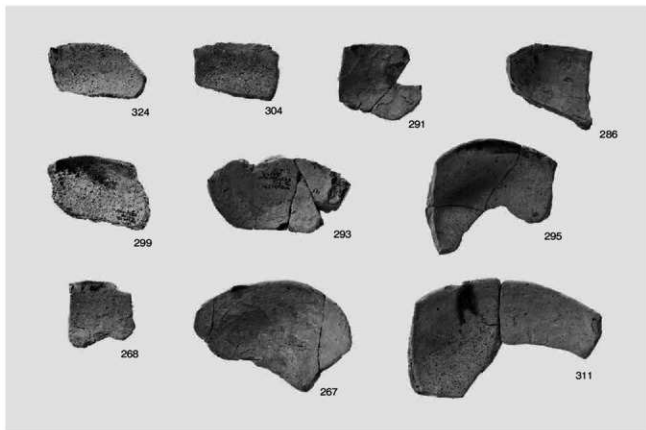
359 (内面)



359



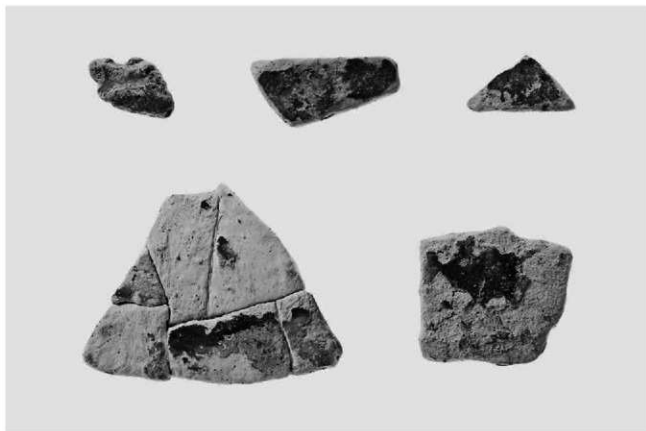
(1)出土遺物 土器3(外面)



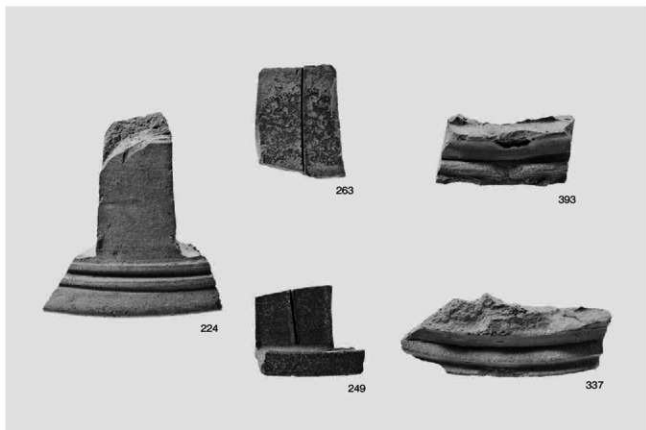
(2)出土遺物 土器3(内面)



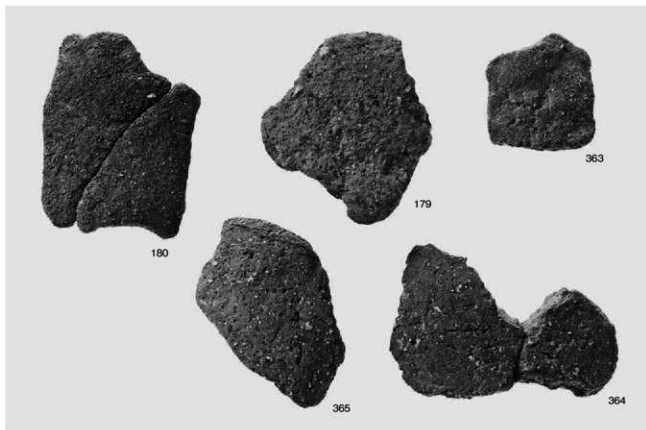
(1) 出土遺物 土器 4



(2) 出土遺物 三彩陶器



(1)出土遺物 須恵器硯



(2)出土遺物 製塩土器



396(上面)



400(上面)



396



400



396(底面)

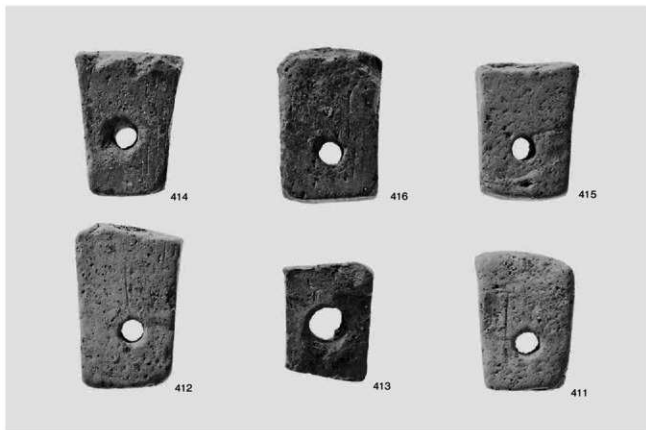


400(底面)

出土遺物 覆鉢形土製品



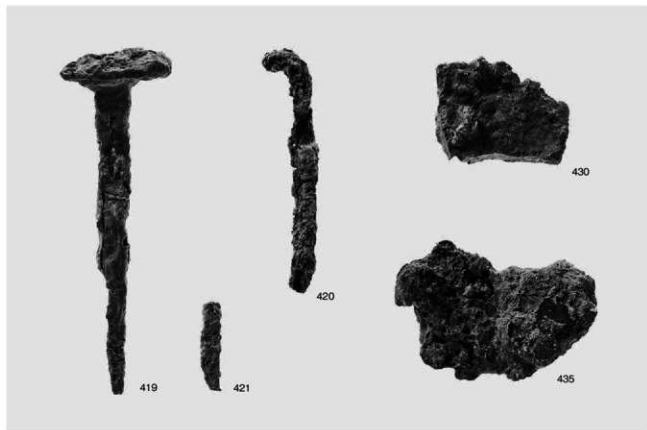
(1)出土遺物 覆鉢形土製品・ひさご形土製品



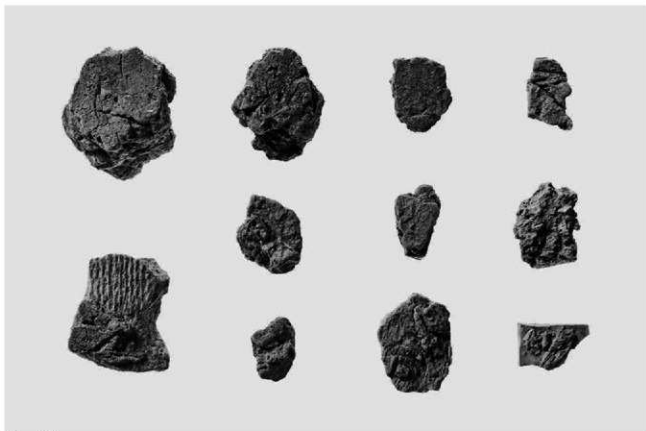
(2)出土遺物 ひさご形土製品



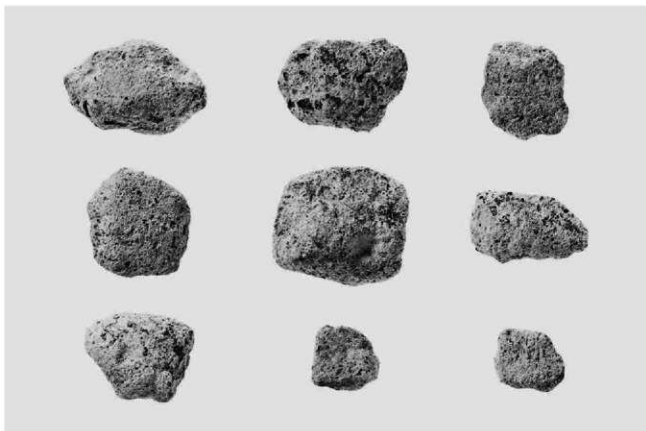
(1)出土遺物 埴仏・宝輪形土製品



(2)出土遺物 鉄製品・冶金関連遺物



(1) 土壁



(2) 凝灰岩